Terran Williams

神は女性をどう見ておられるか

家父長制の終わり

神は女性をどう見ておられるか

家父長制の終わり

Terran Williams



The Spiritual Bakery Publications

南アフリカ、ケープタウン

Copyright © Terran Williams, 2022

英語からの翻訳、2026年、著者の許可による――www.hans-joerg-ronsdorf.de から無料でダウンロードできます

無断転載を禁じます。本書のいかなる部分も、著作権者の書面による事前の許可なく、電子的、機械的、複写、録音その他いかなる形式または手段によっても、複製し、検索システムに保存し、または送信することはできません。

聖書の引用は、特に明記しないかぎり、The Holy Bible, New International Version® NIV® からのものです。

著作権 © 1973, 1978, 1984, 2011 Biblica, Inc. TM

許可を得て使用しています。全世界において無断転載を禁じます。

脚注に記載したウェブサイトのアドレス（多くはwww.bit.ly形式に短縮しています）は、すべて2021年11月にアクセスできることを確認しました。

Amazonペーパーバック版ISBN：9798401047878

『神は女性をどう見ておられるか』への推薦の言葉

テラン・ウィリアムズ（Terran Williams）は、神が聖書の中で女性について、また男女の関係について本当は何と言っておられるのかを、誠実かつ力強く考察しています。この本は一部の人々を居心地悪くさせるでしょう。しかし、おそらくそれでよいのです。ウィリアムズは、神の道徳の羅針盤が常に男女の一致――創造における、教会における、そしてキリストにおける一致――を指し示していることを、緻密に論証しているからです。このテーマと格闘しているすべての人にとって、すばらしい資料です。

――マイケル・バード（Michael Bird）博士、オーストラリア、メルボルンのリドリー・カレッジ（Ridley College）教務部長、新約聖書講師。著書にEvangelical Theology

テラン・ウィリアムズは、女性と奉仕に関する自分の立場をただ述べて論じるのではなく、神学的、釈義的、共同体的、そして個人的な変化の物語によって、私たちを旅へと連れ出してくれます。そこには鋭い観察と洞察、そして注意深さがあります。彼の物語が特に役立つのは、膨大な研究を批判的に吟味し統合していく過程を、聖書の権威への妥協のない献身とともに示しているからです。それでいて、語りかけるような親しみやすいアプローチによって、複雑な研究や解釈がわかりやすいものになっています。

――シンシア・ウェストフォール（Cynthia Westfall）博士、カナダ、オンタリオ州のマクマスター神学校（McMaster Divinity College）研究教授。著書にPaul and Gender: Reclaiming the Apostle's Vision for Men and Women in Christ

テラン・ウィリアムズは、容赦なく誠実な論理と、両方の立場を内側から知る者ならではの理解をもって、男女相互主義を支持する、引き込まれるように書かれ、よく整理された議論を提示しています。彼自身に見解を変えさせた証拠を、彼が示すとおりに読み進めるうちに、私は新たな洞察を得ました。

――クレイグ・キーナー（Craig Keener）博士、アメリカ、ケンタッキー州のアズベリー神学校（Asbury Theological Seminary）聖書学教授。編著にThe NIV Cultural Background Study Bible。2018–2020年、福音主義神学会（The Evangelical Theological Society）会長

私たちの世代の画期的な一冊において、テラン・ウィリアムズは聖書の深みを探り、女性（そして男性）が召されている高みを取り戻しています。

――スターラ・ウェブスターとダニエル・ウェブスター（Starla and Daniel Webster）、ドバイのシティ・ライツ教会（City Lights Church）牧師

これは時宜にかなった本であり、広く読まれるに値します。社会は、特にジェンダー、包摂、平等、民族といった試金石となる問題に関して、活発に議論し、礼節をもって討論する力をほとんど失ってしまいました。だからこそ、恵みと品位をもって書かれた本を読むのは新鮮です。各章を読むと、これを書いたのは本当に感じのよい人であるだけでなく、聖書本文を正しく伝えようと決意した明晰な思索家でもある、というはっきりとした印象が残ります。テラン・ウィリアムズはまさにそのような人で

す――博識で、表現力に富み、概念を注意深く組み立て、恵みに満ちています。私は特に、兄弟たちがこの本のメッセージを吸収し、神が彼らのために常に意図してこられた、恵みに満ちた生き方を信仰共同体の中で生きるようになることを願っています。

――ポール・アレクサンダー（Paul Alexander）博士、アメリカ、ノースダコタ州のトリニティ聖書大学・大学院（Trinity Bible College and Graduate School）学長。ペンテコステ派神学教育世界同盟（World Alliance for Pentecostal Theological Education）議長

この本は誠実で、謙虚で、学術的で、挑戦的です。読みながら、私は思わずにはいられませんでした。リー・ストロベル（Lee Strobel）がThe Case for Christを書いて無神論に対してしようとしたことを、テラン・ウィリアムズはここで補完主義の神学に対して行っているのだ、と。すなわち、証拠によって形づくられたいと願うすべての人にとって、補完主義をますます擁護しがたい立場にしているのです。私はこの本に深く感謝しています――この本は、私たちの教会の風景をすばらしいかたちで形づくっていくことでしょう。読んでください。体験してください。生きてください。そして、この本をとおして御国が来るのを見てください。

――カティア・アダムズ（Katia Adams）博士、アメリカ、ボストンのザ・テーブル（The Table）牧師。著書にEqual

このテーマについてのこの包括的な著作は、著名な学者たちの分析と批判とをバランスよく備えており、イエスに献身して従う一人の人が、キリスト者にも、教会にも、地域社会にもこれほど多くの分裂と心痛をもたらしてきた問題について、誠実な評価に到達しようと努めた勤勉な取り組みを表しています。私たちはこれに耳を傾けるべきです！

――クイントン・ハウイット（Quinton Howitt）博士、 南アフリカ神学校（South African Theological Seminary） および ザ・スクール・オブ・リーダーシップ（The School of Leadership）共同創設者

牧会的な細やかさと神学的な鋭さをもって書かれたこの本は、私が一つの組織を率いるにあたって、男性のまねをするのではなく、福音における完全なパートナーとして率いるよう励ましてくれます。私はもともと、女性が説教することも指導することも認めない教派の出身です。ですから、この本は、新たに教会を開拓する夫と私に、新しい出発を与えてくれました。

――ミナ・コエラ（Minah Koela）、南アフリカ、ケープタウンのビューティフル・ゲイツ（Beautiful Gates）CEO

この本は、神が男性と女性をどのように造り、ご自分の御国で共に仕えるようにされたのかについての理解を広げたいと願う、すべての信仰者にとって必読の書です。テラン・ウィリアムズは、すべてのキリスト者（そして確実にすべての牧師）にしてほしいと私が願っていることを実行しました。すなわち、ジェンダーと女性のリーダーシップについて聖書が何と言っているのかを、あらゆる立場の見解を理解することも含めて、自分自身で学ぶことです。『神は女性をどう見ておられるか』は、一人の献身的な

神学者が謙虚に真理を探求した、心を捉える物語であると同時に、補完主義と平等主義の神学と実践についての本格的な研究でもあります。

――カディ・コール（Kadi Cole）、アメリカ、フロリダ州のKadi Cole and Company CEO、リーダーシップ・コンサルタント、エグゼクティブ・コーチ。著書にDeveloping Female Leaders

人が聖書を愛しているかどうかは、見ればわかります。私が初めてテランの話を聞いたのは20年前、若いサーファーたちのグループに向けて彼が語っていたときでした。神の国がどのように私たちの世界に突入しつつあり、彼らにも開かれているのかをとても明快に説明しながら、彼の目は輝き、ますます熱を帯びていきました。この本を読んで、変わったのはただ一つ、テランがますます神のことばを愛するようになったらしいということだけでした。私はすべてのページを愛し、気がつけば「そうだ！　そうだ！　そうだ！」と口にしていました。真理と自由、そして神が教会に召しておられるすべてのことに情熱を持っておられるなら、皆さんも同じように反応するかもしれません。今、垣根のどちら側におられるとしても、私はこの本をすべての人に勧めます。

――ポール・ヴァン・コラー（Paul Van Coller）、ジョージ（南アフリカ）のホープ教会（Hope Church）、南部アフリカ関連教会協会（Association of Related Churches in Southern Africa）、ザンビア・プロジェクト（Zambia Project）のリーダー

この本には宣教的な緊急性があります――私たちは時に、教会の最大の部分を黙らせ、世界が変えられるのを見るという彼女たちの完全な召しを生きることを妨げてきました。アパルトヘイト（Apartheid）時代の南アフリカで育った私は、誤った神学に裏づけられたイデオロギーが、口先では平等をうたいながら、私のような有色人種を抑圧し続ける社会を生み出したことを、身をもって知っています。同じように私は、「人格は平等、役割は異なる」という神学が、傷ついた女性と男性を生み出すのを見てきました。テランの本は神学的にも学術的にも説得力のある論証を示しており、私が妻やほかの女性たちをどのように見、どのように愛すべきかについて、さらに深く考える助けとなりました。

――ジュリアン・アダムズ（Julian Adams）、アメリカ、ボストンのザ・テーブル（The Table）牧師、Frequentseeディレクター。著書にTerra Nova

これは、はっきりと鳴り響く警鐘です。聖書を高く重んじ、厳密な思考を持ち、深く取り組む覚悟のある方なら、この本は心に響くでしょう。真理を追い求めるテランの姿勢は多くの人になじみのあるものですが、これらの聖書の真理が私たちを導いていく先は、なじみのない領域かもしれません。かたくなに踏みとどまりたいという誘惑は強いものですが、私たちが考えを改めるために必要なのは、まさにこの本なのかもしれません。

――ジェス・バッソンとトム・バッソン（Jess and Tom Basson）、南アフリカ、ダーバンのグレース・ファミリー教会（Grace Family Church）牧師

前著と同様に、テランは読みやすく親しみやすい文章で、専門的な細部に逃げ込むことなく、決定的な論点を扱っています。彼は十分に調査を重ね、補完主義と平等主義

の議論の全範囲を探究しています。妻ジュリー（Julie）と共に、対等な結婚と奉仕へと歩んだ旅路について彼が分かち合う物語は、彼の論証を現実に根ざしたものにしています。補完主義者がこの問題を考え直す助けとなる、私がこれまでに読んだ著作の中で、これは特に説得力のあるものの一つです。

――デレク・モーフュー（Derek Morphew）博士、国際ヴィンヤード聖書学院（Vineyard Bible Institute）創設者。著書にThe Kingdom Reformation

『神は女性をどう見ておられるか』は力強く、すばらしい本です！　聖書の権威を尊重し、男性が指導すべきだという信念に対して、決定的に重要な批判を提示しています。テラン・ウィリアムズは、たとえば神学、開発学、社会科学といったさまざまな学問分野を用いて、補完主義の神学が人間の繁栄を妨げていることに異議を唱えています。彼の著作は論理的であると同時に全人的です。驚くほど読みやすく、複雑な問題を恵みと技量をもって扱っています。

――ミミ・ハダッド（Mimi Haddad）博士、CBE International会長兼CEO。ワールド・リリーフ（World Relief）およびワールド・ビジョン・インターナショナル（World Vision International）の神学とジェンダーに関するコンサルタント

これは、私の考えでは、補完主義と福音派平等主義の論争に関する最良の本です。福音派の人々に広く読まれるべき、卓越した第一級の本です。友人のために何冊も買い、多くの人に貸してください。この本は、福音が抑圧されている人々を自由にするという真理を際立たせています。聖書は表紙から裏表紙まで、男性にとっても女性にとっても良い知らせなのです。

――ケビン・ジャイルズ（Kevin Giles）博士。著書にWhat the Bible Actually Teaches on Women

献辞

この本をまず、ジュリーにささげます。私の魂の伴侶であり、人生においても、子育てにおいても、世界を変えることにおいても、試練をくぐり抜けてきた戦友です。

そして、私たちの娘アイヴィー（Ivy）にも。女性らしく、そして勇ましい彼女は、まだ若いのに、すでに神からの召しの自覚に満たされています。あなたが召された競走を、喜びと確信をもって走り抜けますように。あなたより前の多くの女性たちが耐えなければならなかった、自分を疑うためらいを少しも抱くことなく。

私たちの大陸のサバンナでは、雄ライオンと雌ライオンが共に吠えて、群れの強さを示します。野生においてそうであるように、私たちの家族においても、私たちの教会においても――そして私たちの世界においても。

最後に、ルカの福音書7章44節にある、心を探るイエスの問いに新たに答えたいと願うすべての人に、この本をささげます。

「この女を見ましたか。」

目次

序文 11

プロローグ：神は女性をどう見ておられるか 14

1 考えを変える 18

第一部 – 女性の転落と復権 26

2 劣った性 27

3 補完主義の台頭（とその落とし穴） 47

4 楽園で結ばれたパートナーシップ 72

5 贖われた男女の関係 99

第二部 – 制限され（ない）女性たち 118

6 コリントの女性たち 119

7 テモテへの手紙第一2章11–15節 149

8 妻たちよ、従いなさい 192

9 人に歩み寄られる神 228

第三部 – 女性の奉仕 248

10 旧約聖書の力ある女性たち 249

11 福音書の力ある女性たち 266

12 初代教会の力ある女性たち 285

13 賜物（ローマ12章）対性別（Ⅰテモテ3章） 317

第四部 – 女性たちを解き放つ 336

14 聖書的な女性らしさと男性らしさ 337

15 エバを家庭から解き放つ 354

16 教会にとっての実際的な意味 365

17 民衆対家父長制 378

エピローグ：イエスは女性をどう見ておられるか 398
付録1：神は男性なのか？ 401
付録2：堕落前のアダムとエバ（続き） 410
付録3：kephalēの意味 416
付録4：女性は教えてもよいか？ 423
付録5：テモテへの手紙第一3章からのさらに二つの論拠 428
付録6：事実が私たちの考えを変えないかもしれない理由 436
心からの感謝 447
主要参考文献 449
テラン・ウィリアムズのその他の著書 452



序文

人生の大半を、私はキリストに従う者として生きてきました。

人生のすべてを、私は女性として生きてきました。

この二つの肩書きが交わる場所は、手放しては拾い上げる旅でした……家族や自分自身、社会、そして教会からさえ寄せられる、私が何者であるかについての期待を手放すこと。そして、（時に忘れていた）自分の主体性、目的、権威を取り戻し、神がどのような方であるのか、そしてその神が私を何者だと言っておられるのかという感覚を、取り戻すことです。

この本、より正確に言えば、この本を書いた男性は、その旅において極めて重要な役割を果たしてきました。私たちが初めて出会ったのは、私がまだ17歳のときでした――私は目を丸くした新参者、そして彼は、その後の20年間、私たち二人がホームと呼ぶことになる教会の、ぼさぼさ頭のリーダーでした。

5人の子ども、4つの家、18年の結婚生活、そして1度の燃え尽きを経た今、私はあのころと同じように目を丸くしていますし、今では二人ともぼさぼさ頭です！　けれども、そうした外見の特徴の下には、戦いの傷を負った二つの心があります。その二つの心は、学んでは古い見方を捨てることを繰り返しながら、神が相手をご覧になるように互いを見るすべを身につけてきたのです。

興味深いことに、夫が女性に関する自分の神学を変える旅に初めて乗り出したとき、私は彼の最も激しい批判者でした。私たちは二人とも以前に神学を学んでいましたし、私自身、何年も前にこの特定のテーマと格闘したことがありました――私は、信仰が揺れ動いていたあの時期に神がどのように私に語りかけ、疲れ果てた私の心に優しくささやいてくださったかを、証ししたことさえありました。「あなたはもうわたしのひざの上に座っているのに、なぜ地位を求めて争うのか。」

その瞬間、私はありのままの自分を見ました。

私は、自分の権利を要求しなければならない、軽んじられた僕などではありませんでした。私はいと高き方の愛された娘でした。兄弟たちの隣に行くために、押しのけたり突き飛ばしたりする必要はありませんでした。私はすでに神と共に座り、神の心のすぐ近くに、まさに私がいちばんいたいと願っていた場所にいたのです――役割や制限に関係なく。

その出会いの後、私は、神から与えられたとされる助け手としての役割に、喜んで身をゆだねました。正直に言えば、教会での自分の居場所をめぐって何年も苦しんだ後だったので、それは安堵でした。

そして、抑圧されていると感じるどころか、奉仕の機会は次々と訪れました。私は説教し、集会を導き、重要な指導上の決定に加わり、夫と共に教会を開拓し、何千人もの人々に届いた女性向けのイベントを共同で主催しました。

それなのに、何年もたった今になって、夫は私に、私たちは間違っていたと思う、と言うのです！　どういうわけか、私たちは自分たちの神学によって、女性たちと教会の証しを損なってきた、と。

私は抵抗しました。長い間です。

一つには、私自身は特に不当に扱われているとは感じていませんでした。それに、もし私が立場を変えたなら、皮肉にも、夫が依然として私たちの家のかしらであり、妻はただ夫の確信の後をついて行くだけだ、ということを示すことにならないでしょうか？　テランは強く押しつけはしませんでしたが、時がたち、さらに考えを深めるにつれて、私は少しずつ、私たちの関係（あるいは私たちの教会）が、そもそも最初から典型的な補完主義のものではなかったことに気づき始めました。

私は、父と同じくらい有能で勤勉な母のいる家庭で育ちました。すばらしい女子校に通いました――そこでは、自分の人生と可能性で何でもできるのだと言われる必要さえありませんでした。私たちはすでに当然のようにそう思っていたのです！　その後、高等教育でも、仕事でも、奉仕でも早くから成功を収めました――共に働き、共に奉仕し、共に暮らす男性たちに対して、自分が劣っていると感じたことは一度もありませんでした。

皮肉なことに、補完主義の神学にしがみつこうとする私のこだわり（自分の考えは自分で決めるべきだという私の信念から来ていたものですが）と、それに対するテランの動じない反応こそが、私たちが実はパートナーシップにおいて、私が最初に認めたかったよりもはるかに平等主義的だったことを証明していました。

私の隣にいるこの男性だけでなく、この本もまた、神が私に与えてくださった最大の贈り物の一つです。神はこの本を用いて、私が女性としての自分をどう見るかを形づくり直し、そうすることで、私が神をどう見るかをも形づくり直してくださいました。

以前の補完主義の教会で、ほかの人たちから隅に追いやられていると感じたことは一度もありませんでしたが、今では、私は目立たないかたちで自分自身を隅に追いやっていたのだと認めています。ほかの人に過度に譲り――より大きな夢を見ることをやめ、自分の声と可能性を小さくしていたのです。けれども、おそらくもっと痛ましいのは、私自身はテーブルの席を拒まれたことは一度もなかったのに、同じように賜物を与えられた多くの姉妹たちが、ただ独身であるという理由で、あるいはリーダーではない男性と結婚しているという理由で、席を拒まれていたことに、今になって気づいていることです。私たちの神学が私には益をもたらす一方で、ほかの多くの人々を傷つけていたからこそ、私は長い間その神学に満足していた――そう思うと、今、心が痛みます。それでも、感謝すべきこと、希望を抱くべきことはたくさんあります。神は、私たちのだれに対しても、まだ働きを終えてはおられないのです！

私の思いと心には、なお新たにされる必要のあるところがたくさんありますが、何十年も前の神のあのささやきは、当時と同じように今日も真実です。私は本当に神のひざの上に座っていて、地位をつかみ取ろうとする必要など決してありません。御国において、私はあらゆる意味で兄弟たちと対等です。ただ、今では私の神学が、私の実践と生きてきた経験と一致しているのです。

親愛なる読者の皆さん、この本が皆さんにとっても同じような恵みとなりますように、と祈ります。私たちみなが愛するみことばのように、この本のことばが皆さんの思いを照らし、皆さんが自分自身だけでなく、神をもよりはっきりと見ることができますように。その神の目に映る皆さんの姿は、激しく、人を自由にする愛に燃えているのです。

――ジュリー・ウィリアムズ



プロローグ：神は女性をどう見ておられるか

教会の歴史の大半を通じて、人々は、女性がほかに何であるにせよ、男性より劣っていると信じてきました。聖書に登場する女性が男性よりはるかに少ないこと（名前の挙がる3,000人の登場人物のうち、女性はわずか200人）は、女性は男性ほど重要ではないという、何世紀にもわたって疑われることのなかった前提の一因となっています。しかし、ご自分の世界を訪れるために一人の女性の胎を選ばれる神は、統計や大きさにこだわったことなど一度もありません。聖書の中で男性が主役を演じている部分においてさえ、役割は小さくとも、男女のパートナーシップについての神のビジョンを、私たちが一見して気づくよりもはるかに多く伝えている女性たちがいるのです。

たとえばアブラハムを取り上げてみましょう。彼はまさに最初のユダヤ人です――男性であり、自由人であり、社会的にも経済的にも余裕のある人物でした。神は彼に、子孫の子孫が大きな影響を及ぼすようになると約束されます。それでも彼は、やはりその時代の人でした。選ばれたからといって、エジプト人の奴隷ハガルに対する彼のひどい扱いが帳消しになるわけではありません。不妊の妻の求めに応じて、彼はハガルを使って子どもをもうけます。そして彼女が身ごもると、嫉妬した妻が彼女を虐げるのを許し、ついにハガルは荒野へと逃げ出します。

彼女の物語は痛ましいものです。だれかが彼女とおなかの子を救い出さなければ、二人とも死んでしまうでしょう。そこへ登場されるのが神です。神は介入して彼女を救い、彼女とその息子の両方を守るという保証を与えて、彼女を送り返されます。それは、神が以前アブラハムにされた約束を思い起こさせる約束です。「わたしは、あなたの子孫を大いに増やす。それは、数えきれないほど多くなる。」[1]

このことの意義をよく考えてみましょう。男性が支配する世界の中で、神はご自分の偉大な贖いの計画を、聖書の族長たちの最初の人であるアブラハムに明らかにし始められます。けれども、そうしながらも、神は一人の女性のそばにも寄り添われ

1. 創世記16章10節

るのです。それも、どんな女性でもよいのではなく、社会のはしごの一番下にいる女性――奴隷です。心は打ち砕かれ、霊は望みを失い、体は踏みにじられて、荒野の砂漠で途方に暮れていたハガルを、神はご覧になり、当時の社会状況からすればほとんど不可能であったはずの将来の偉大さを、彼女をとおして呼び出されるのです。

彼女は神のこの肯定に応えて、聖書全体の中でただ一人、自分の造り主を「私を見てくださる神」と名づけた人となります。[2]彼女の突破口は、より良い神学から生まれます。初めて彼女は、自分自身を、アブラハムやサラや当時の社会が見るようにではなく、神がご覧になるように見るのです。彼女は、聖書の長い物語の早い段階に植えられた一粒の種であり、その種はやがてキリストにおいて実を結びます。キリストは、ユダヤ人だけでなく異邦人をも、自由人だけでなく奴隷をも、富む者だけでなく貧しい者をも、そして男性だけでなく女性をも、ご自分の御国において偉大な者へと引き上げられるのです。

なぜ（そして誰のために）書くのか

私は女性のために書きます。聖書を重んじ、神と神の教会のためにすべてをささげたいと願っていますか？　それなら、制限を課す不健全な教理の扉を打ち破り、ガラスの天井を打ち砕き、あまりにも多くの人があまりにも長く閉じ込められてきた自己不信の檻の鍵を開けようではありませんか。聖書に目を向け、神が本当は皆さんをどのように見ておられるのかを再発見することによって、そうしましょう。

私は男性のために書きます。自覚しているかどうかにかかわらず、皆さんはすでに女性についての神学を持っています。それは、皆さんが人類の半分を、そしてキリストの花嫁の半分以上を、どのように見るかを形づくっています。ですから、それは皆さん自身の人間性や弟子としての歩みと切り離すことができません。神がご覧になるように女性を見ることは、皆さんが共に働き、共に奉仕し、共に暮らす女性たちへの贈り物となるだけでなく、皆さん自身が自由と聖化を経験することの本質的な一部ともなるでしょう。少なくとも、私の経験ではそうでした。

私は誠実な懐疑論者のために書きます。女性が、特に教会の指導に関して、男性と完全に対等でありうるのか、またそうであってよいのかについて、本当の疑いを抱いておられますか？　私は、皆さんが自分の偏見や受け継いできた信念に注意を向

2. 創世記16章13節

ける助けとなるようなかたちで、謙虚に聖書を開きたいと願っています。そのためには、果てしなく続くかに見える数々のウェブサイト、団体、書籍、さらには一冊のスタディ・バイブルによってまで広められてきた、聖書の多くの解釈を、一つひとつ詳細に分析する必要があります。

私は教会のリーダーのために書きます。もし皆さんが補完主義の教会のリーダーであるなら――私が成人してからの人生の大半においてそうであったように――教会の女性に関して信じ、実践し、禁じていることが、注意深く考え抜かれた、聖書全体に基づく神学に根ざしているかどうかを、必ず確かめなければなりません。結局のところ、皆さんの神学的立場は皆さん自身にだけ影響を及ぼすのではありません――それは数え切れないほど多くの人々に影響を与え、場合によっては、人生全体の軌道を変えてしまうのです。

私は長く抱かれてきた多くの前提に異議を唱えなければなりませんが、教会を分裂させたいという願いはまったくありません。コリント人に書き送ったパウロのように、この本は「大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに――あなたがたを悲しませるためではなく、教会に対して抱いている深い愛のゆえに」生まれました。[3]私の願いは、皆さんがこれを読みながら、私が経験したことの何かを経験してくださることです――疲れた目からうろこが落ちる、あの胸の高鳴りと、受けるに値しない恵みです。

私は、女性の擁護に立ち上がる革命家などではとてもありません。正直に言えば、残念ながら遅れてやって来たように感じています――姉妹たちの自由がすでに視界に入っている戦いの終わり近くになって、自分の分を加える鼓手の少年のようなものです。それでも私は、この遅い時になってさえ、声を上げ、太鼓を打ち鳴らさずにはいられない、ほとんど聖なる衝動を感じてきました。というのも、近年、多くの教会が大きな前進を遂げてきた一方で、家父長制の神学を保持する善意の教会がもたらしてきた、深く憂慮すべき影響と、増え続ける（それでいて口にされることのない）「犠牲者の数」を、私は目の当たりにしてきたからです。その跡に残されているのは、ハガルたちです。彼女たちは、打ちひしがれた霊と、生まれることのなかった可能性と、流産した夢を抱えて、荒野へと追いやられてきた数え切れない女性たちです。ある意味で、この本は、私自身がその同じ荒野へと入っていく旅です――犠牲者としてではなく、かつての加害者として。それは、ぶっきらぼうで向こう見ずな自信から、方向を見失わせるような複雑さを通り抜け、謙虚な畏敬へと

3. コリント人への手紙第二2章4節

至る巡礼でした。そして私は、ずっと聖書の中にあったものを見るのです。すなわち、神が一人の女性をご覧になるときに、何をご覧になっているのかを。

私は主に、より実り豊かで、キリストの栄誉を現す未来の教会への希望に満ちた展望をもって書いていますが、同時に、自分が導く手助けをしてきたまさにその教会を、知らず知らずのうちに損なってきたことを認めつつ、重い心で過去を振り返りながら書いてもいます。ですから、この本は、私が意図せずしてその世界を狭めてしまったかもしれないすべての女性たちへの私の謝罪であり、私が加担してきた過ちを正そうとする試みなのです。



1
考えを変える

「考えを変えることは、自分の原則を捨てたことを意味するわけではない。何かを学んだということなのかもしれない。」アダム・グラント（Adam Grant）

Oxford Dictionaryは、家父長制を「男性が支配的な権力を持つあらゆる形態の社会組織」と定義しています。この定義によれば、私はかつて、自分の教会で家父長制の教理を語る第一人者でした。[4]教えを担う主任牧師として、年に何度か、私は何百人もの新メンバーの前に立ち、神のみこころによって男性が教会と結婚においてより多くの責任を担うことがなぜ聖書的なのかを説明していました。私はこう説明したものです。

聖書によれば、神はアダムとエバを、対等でありながら異なる役割において互いに補い合うように造られました。それだけではありません。神はその相補性を教会にももたらされました。ですから、ほとんどの役割は女性にも開かれていますが、長老と牧師になるのは男性だけであると、神は定めておられるのです。これを見直すようにという文化的な圧力は非常に大きいのですが、私たちは文化ではなく聖書から指針を得ることを固く守っています。

そして、ただそれだけで、ほとんどの人は私たちの立場を受け入れました。受け入れずに去ることを選んだ人がいたときも、イエスに忠実であることが何より大切なのだと、私は自分を慰めていました。

ところが数年前、この問題が再び持ち上がり、私たちのこれまでの根拠づけが少々薄弱であることに気づいたあとで、私たちの中核の指導チームは、この教理を見直し、それについて徹底的に説明し弁護する文書をまとめることを決めました。私たちはこの問題について開かれた心で話し合いましたが、聖書についての以前の解釈

4. 私は以前の自分の立場を表すのに「家父長制」（patriarchy）という言葉を使ったことは一度もありませんでしたが、私が教えていた内容にこれ以上近い言葉は、英語の中に見当たりません。

が間違っているかもしれないなどと本気で疑っている者は一人もいませんでした。何しろ、私たちには、ジョン・パイパー（John Piper）やティモシー・ケラー（Timothy Keller）のような尊敬されるキリスト教指導者たちがいて、彼らはジェンダーとリーダーシップを含むあらゆる事柄について、私たちの聖書の読み方を擁護してくれていたのです。そして、この教理が保たれている間、神は私たちの教会を数の上で祝福してくださっていました。

最も神学的な資格を持つリーダーの一人として、私はほかの人たちと共に、このテーマについての論文を書くよう任されました。私は熱意をもって、思い切りこのテーマに飛び込み、私たちの立場について明快でよく考え抜かれた弁護を提示するつもりでいました。神学教育を受けていたにもかかわらず、教会で女性が指導することに反対する議論、そして賛成する議論を深く探究したのは、これが初めてでした。事実を恐れたことのない私は、このテーマについて読めるものはすべて読みました。

そうしているうちに――そんなことが起こるとは夢にも思っていませんでしたが――私の自信はちりと化しました。自分が何を信じているのか、そしてこの信念の最も有名で声の大きい提唱者の多くが、どのように自分たちの立場を擁護してきたのかを理解すればするほど、自分の確信は盤石な聖書釈義の上に築かれていると思い込んでいたことが、どれほど間違っていたかに気づかされていきました。[5]どうしてこんなことがありうるのでしょうか？　私が尊敬し、文化のわなには陥らないと思っていた多くの著者や学者たちが、どうして、古めかしく、しかも同じように非聖書的な文化に、自ら捕らわれてしまったのでしょうか？　この問いの答えを明らかにしようとする私の旅が、この本の中で解き明かされていきます。

私は軽々しく考えを変えたのではありません。特に、箴言の助言を当てはめました。「最初に訴える者は正しく見える。だれかが進み出て問いただすまでは。」[6]二重三重に確かめるために、私はすべての石を――すべての本文とすべての議論を――ひっくり返し、あらゆる角度から、何度も何度も繰り返し調べました。振り返ってみると、それは最も解放的な旅の一つとなりました。

5. このような経験はよくあることです。たとえば、アンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett）は“Men and Women in Christ”の中でこう述べています。「書き始めたとき、私は自分がどこに行き着くのかわからなかった。……女性の奉仕に関しては、双方にかなり強力で、拮抗した議論が見つかるだろうと思っていた。つまり、この問題についてはどんな結論も暫定的なものにしかならない、と。私は間違っていた……」（p. 15）
6. 箴言18章17節

用語の定義と決定的な瞬間

この本で用いるいくつかの用語を定義させてください。家父長制あるいは性別による階層という言葉で私が意味しているのは、話題になっている領域——家庭であれ、教会であれ、社会であれ——がどこであっても、男性が最高の権威を持つよう定められている、という前提です。男性を、いじめる者、捕食者、責任を放棄する者、権力を振りかざす者として描く世俗文化の含みとは違い、私がこれらの用語を使うとき、男性が常に抑圧者であるとか、その男らしさが必然的に有害であるという意味ではありません。励まされることに、ますます多くの家父長制の教会が、女性の声に耳を傾けることの知恵を見いだしつつあります。けれども、こうした教会は女性に発言権を与えてはいても、最終決定権は依然として男性にあると理解されているのです。

この本で私が主に取り上げるのは、補完主義と呼ばれる特定の形態の家父長制です。これは、前世紀の最後の四半世紀にアメリカの教会で考案された、修正版家父長制の、新しく、そして非常に影響力のある一派です。男女を対等にすると主張しながら、教会における説教と牧会の指導から女性を排除し、結婚においては妻が夫に従うことを堅持し、そして程度は小さいながら、社会における女性の指導にも疑いを投げかけます。また、女性の役割としては、夫を支える者、家庭を守る者、子どもを育てる者という家庭内の役割を、何よりも高く評価する傾向があります。

補完主義の短い歴史をもう少し複雑にしているのは、ごく一部の教会が最近になって、その厳しい含意を和らげようとしてきたことです——女性が説教することを認める（ただし権威をもってではない）のです。女性は教会で男性を導くこともできます（ただし下位のリーダーシップにおいてのみ）。社会では最上位のリーダーになることもできます（ただし教会では上級リーダーにはなれません）。夫と共に決定を下すこともできます（ただし意見が分かれた場合には、夫が決定票を持ちます）。これは穏健な補完主義と呼ばれています。

20年間、私は自分を穏健な補完主義者だと言っていたことでしょう。同じような教会の輪の中にいる多くのリーダーたちと同様に、私は多くの賜物豊かな女性たちを高く評価し、彼女たちと並んで働いてきました——彼女たちの召しや貢献を制限したり、黙らせたり、抑えつけたりしているようには見えない健全な教会の一員であることを、感謝していました。

けれども、聖書を新たに学ぶうちに、私は認めざるをえなくなりました。もし本来の補完主義の聖書解釈の方法が正しいのなら、穏健な補完主義は、私が期待していたよりもはるかに擁護しにくいということです。より包括的なその実践を支える健全な聖書的論拠が、もはやまったくないのです。私の結論はこうでした。私たちは自分の信じていることを実践する――つまり女性に説教させず、指導させず、男性と共同で指導することさえさせない――か、あるいは、自分が何をなぜ信じているのかを、もっと詳しく見直すべきだ、と。（結局のところ、もし補完主義が間違っているなら、たとえ穏健な形であっても、それは穏健な形の人種差別と同じく、受け入れられるものではありません。）

まさにそれを行い、一次資料と二次資料の一つひとつにさらに近づいて調べたとき、私が発見したことは私を深く動揺させました。詳しく調べてみて、私は驚愕しました。尊敬されている神学者たち（ウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）、トム・シュライナー（Tom Schreiner）、アンドレアス・ケステンバーガー（Andreas Köstenberger）など）も、敬愛されている牧師たち（ジョン・パイパーやティモシー・ケラーなど）も、影響力の大きい多くの役割から女性を排除するという結論に達するために、聖書の分析としては決定的に不健全なものと、偏った議論とを提示していたのです。実際、女性を上級リーダーシップから排除するための、水も漏らさぬ聖書的論拠を、私は一つも見つけることができませんでした。どれほど多くの議論を立てることができても、そのどれもが重大な欠陥を抱えています。そして、それらをただ寄せ集めても、薄っぺらなカードをたくさん積み重ねてトランプの家を作るのと同じで、少しも堅固にはならないのです。

反対に、女性がなぜ含められるべきなのかについては、実質的な、いや説得力のある聖書的論拠が見つかり、私は同じように驚かされました。このテーマに対して聖書全体から取り組むという私の姿勢こそが、私が最終的に男女相互主義の神学に落ち着いた理由です。[7]私は同義語である平等主義という用語も評価していますし、この立場を旗幟鮮明に掲げてきた聖書学者たちのほとんどと腕を組みます――男性と女性は対等であり、等しい権利と機会に値するという考えを聖書が支持している、と彼らが言うのは正しいのです。しかし、この本ではこの用語を使わないほうがよいと考えています。理由は三つあります。第一に、補完主義者たちも男女の平等を信じていると主張していること。第二に、この用語がジェンダーに当てはめら

7. 当初、私は「gender mutualism」（ジェンダー相互主義）を選びましたが、その後、西洋の文化では「gender」（ジェンダー）が形容詞として使われるとき、もはや男性と女性だけを指すのではないことに気づきました。「sex mutualism」（性別相互主義）も論外に思えたので、結局、ちっともセクシーではない「male–female mutualism」（男女相互主義）に落ち着きました。

れると、時に男女のあらゆる区別の否定と結びつけられること。そして第三に、平等だけが決定的に重要な考えではないこと――互恵的なパートナーシップと協働的な一致も、同じように重要なのです。これを念頭に置いて、私の作業上の定義と、この本でさらに詳しく説明していく立場をここに示します。

男女相互主義とは、聖書に基づく神学的立場であり、男性と女性は異なっていながら対等であり、人生のあらゆる領域で互いに並んで仕え、協力し合うように造られている、とするものです。各人に神から与えられた権威、賜物、専門性は、その人の性別にかかわらず、認められ、たたえられることができ、またそうされるべきです。

最後に、神学という言葉について一言。最も単純で純粋な状態において、私たちの神学は、あらゆる事柄について神の見方にできるかぎり近づこうとする、たゆみない努力によって形づくられるべきものです。ですから、『神は女性をどう見ておられるか』は、女性についての神学――全体として受け止め、正しくつなぎ合わせた聖書が、女性について教えていることなのです。

常に改革され続ける

1500年代のプロテスタント宗教改革は、教会の教えの、どうしても必要だった見直しをもたらしました。けれども、この宗教改革そのものが、「常に改革され続ける教会」（ラテン語の句ecclesia semper reformandaから）という原則を唱えていました。たとえばカルヴァン（Calvin）とルター（Luther）は、聖書にかかわるどんな事柄についても自分たちが最終的な言葉を語ったなどとは考えず、むしろ、私たちの教理と、それが聖書とどれほど一致しているかを、勤勉に省察し続けるという課題を、後に続く世代に手渡しました。何世紀もの歴史を持つ教会では、奇妙な品々――過ぎ去った時代の、古く、もはや意味のない遺物――を拾い上げてしまいやすいことを、彼らはよく知っていました。教会が栄光から栄光へと自由に進んでいくためには、そうしたものは抱きしめるのではなく、捨て去らなければならないのです。

これは私たちの世代の決定的に重要な改革の一つだ、と私は信じています。教会史を読みながら、私は、御霊が実にさまざまな事柄について、教会をその教えと実践に関するますます大きな明晰さへと導き続けておられることに、驚嘆してきました。最初の宗教改革が、人生を変えるその力を長いあいだ奪われていた普通の人々

に神のことばを取り戻そうとしたのだとすれば、その後の改革は、ゆっくりと、しかし着実に、神の働きを、年齢、人種、階級、性別にかかわらず、神の民すべてに取り戻してきたのです。

改革には努力が必要です。教会史の大半において、キリスト者たちは、私たち皆が何を信じるのかを見きわめることを、選ばれた少数の学識ある人々に任せてきました。実際、プロテスタント宗教改革と1436年の印刷機の登場以前には、ほとんどの人が、神学も、そして聖書の多くの部分も、高尚なちんぷんかんぷんだと考えていました――ラテン語を読んで話し、まれにしかない聖書の写本を手にすることのできた司祭たちだけが理解できるものだ、と。それ以来、多くのことが変わりましたが、多くの信仰者（そして実に多くの教会リーダー）は、今なおこの決定的に重要なテーマの評価を外部に委ね、釈義という骨の折れる作業をほかの人にしてもらうことに頼っています。私が立場を変えたことを仲間の牧師に話したとき、彼はこう嘆きました。「忙しい牧師として、自分の神学を省みる時間をいつ見つければいいのかわかりません。」彼の言うとおりです。時間と努力が必要なのです！　けれども、それはそれだけの投資に値する取り組みです。

改革は相手をおとしめる必要はありません。分裂した陣営や、互いを見下す戯画化を超えて――もっと良い道があります。私が言っているのは、この論争における明らかな二つの「側」のことだけではなく、私たちの性別のことでもあります。男女はあまりにもしばしば、まるで男性はみなくずか、女性はみなイゼベルであるかのように、互いに対立させられています。この点で、私は、自分の知っている多くの男性と女性（この対話の両方の側の）が、キリストのからだを建て上げ、互いを尊重するために、できるかぎりのことをしているのを、とても誇りに思っています。ある女性牧師は私にこう言いました。「私は、男性をおとしめることなく女性を引き上げられたイエスの道を歩んでいます。」これと同じ精神で、私はまた、真理と正義を誠実に追い求めることに生涯をささげてきたリーダーや神学者たち（ここでも、両方の陣営の）に敬意を表したいと願っています。この特定の問題についてはティム・ケラーやジョン・パイパーのような人々に同意できないかもしれませんが、私は彼らを、家父長制の平板な看板役者だとは見ていません。今日の私の多くは彼らによって形づくられてきましたし、私は今も多くの点で彼らから学び続けています。

自らの神学を吟味しようとする教会は、ここ数十年の「文化戦争」に対しても、また価値観の変化を促すために個人に恥をかかせるという手法に対しても、否と言う

必要があります。社会の声や、女性たちが経験してきた痛みに共感をもって耳を傾けながらも、この対話における私たちの第一の原動力は、聖書の神学を正しく理解し、それを贖いをもたらすかたちで適用することでなければなりません。

改革には謙遜が必要です。正しいことをしながら、益よりも害をもたらすようなやり方でそれをしてしまうこともありえます。皆さんがどこに着地するにせよ、自分の確信に、親切と柔和と忍耐を必ず加えてください。

私は論争を楽しんではいませんし、皆さんも論争を楽しむべきではありません。今では違う考えを持っていますが、私は今なお、多くの補完主義のリーダーたちとその教会を、キリストにある兄弟姉妹として最大の敬意をもって見ています――私たちの理解の違いが何であれ、私たちが共有しているもののほうがはるかに大きいのです。キリスト教のリーダーを務めてきた期間の大半を補完主義者として過ごしてきた私が、今なおその立場を保っている人々は霊的あるいは知的に何か欠けている、などとほのめかすとしたら、それは不当というものでしょう。

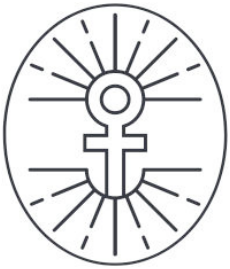
後でより詳しく明らかにするように、比較的新しい文化現象である女性の平等に教会がどう向き合ってきたかは、歴史上の教会が自らの聖典を読む際に、どのように文化的前提を吸収してきたのかを適切に問いただすうえで、私たちが手にした最大の事例研究なのかもしれません。ティム・ケラーはこのことを見事にこう述べています。

〔私たちの〕聖書理解は間違っている可能性が十分にある――実際、常に部分的には間違っている――のであり、だからこそ常に訂正に対して開かれていなければならない。……私たちには文化的な目隠しがあるので、〔新しい文化〕に対して語るだけでなく、〔その人々〕にも耳を傾けなければならない。彼らが言っていることに耳を傾け、彼らの問いや、私たちの言うことへの彼らの異議、そして彼らの希望や願いを真剣に受け止める必要がある。多くの場合、新しい文化とのこうした交わりは、聖書が教えている多くのことを私たちに示してくれる――それは、私たちがまったく見落としていたか、重要ではないと考えていたことであり、ひょっとすると、自分自身の文化的前提というレンズを通して聖書を読み誤っていたあり方でさえある。[8]

使徒パウロによれば、エペソ人への手紙5章で、イエスは「みことばによる水の洗い」をとおして、ご自分の教会を絶えず美しくし、ますます輝かしく、しみのないものにしようと働いておられます。私がこの本をささげるのは、この方の恵みに照

8. Timothy Keller, Center Church, ch. 8.

らしてのことです。今の私が気づいていないあらゆる箇所に間違いなく欠陥はあるでしょうが、それでもこの本が、イエスの教会を美しくする御霊の新たにする働きにおいて、小さな役割を果たすことができるよう祈っています。



第一部

女性の転落と復権



2
劣った性

「女は人間の堕落の張本人である……指先でさえ、どうしてこのような糞袋を抱きたいと望めようか。」クリュニーのオド（Odo of Cluny）、936年[9]

私たちは素朴に、教会が今日女性について信じていることは、教会がずっと信じてきたことだと思い込んでいます。これから見ていくように、そうではないのです！この章では、「神は女性をどう見ておられるか」という問いに対する現代の私たちの答えが、歴史上のほとんどのキリスト者が出したであろう答えよりも、なぜはるかに優れているのかを探っていきましょう。

この本全体を通して主に聖書を学んでいきますが、この章と次の章では、私たちが置かれている状況を探りたいと思います。家父長制を「神の良き設計」として浅はかにも受け入れたことによって、教会の歴史の中で――遠い昔にも、また最近にも――私たちがどこで道を誤ったのかを知ることは、興味深くもあり、恐ろしくもあります。

歴史上ごく最近まで、男性が女性を「彼女たち自身のために」支配すべきだということは、普遍的に受け入れられ、疑われることのない信条でした。最大の宗教はどれもそれを教え、そのほとんどは今も教えています。その宗教の解釈が保守的であればあるほど、男性は女性を特定の領域だけに閉じ込めようとする傾向を強めてきました。悲しいことに、キリスト教世界は、そのような抑圧を覆すための本来の資源と眠れる可能性を内に持ちながら、おおむね男性優位の考えを保持し、「キリスト教的」家父長制の考えを擁護するようなかたちで、自らの聖典を解釈してきました。

9. Patralogia Latinaからの引用で、Christine Klapish-Zuber (ed), A History of Women, ch. 1に引用されています。

それは、教会がその歴史の大半において、女性の生来の劣等性を信じてきたからです。聖書ほど大きく複雑な書物は、大ざっぱに言えば、現実について人が前もって下したどんな結論をも支持するように使うことができます。南アフリカの白人キリスト者として、私はそれを身をもって知っています。私の国では、ほんの数十年前、最も学識ある「聖書的」神学者たちの何人かが、聖書に自分たちの人種差別を指摘させる代わりに、自分たちの人種差別を聖書に読み込みました。彼らは聖句の意味をねじ曲げるようなかたちで聖句を振りかざし、人種についての「分離すれども平等」という見方を作り出しました。それがアパルトヘイト（Apartheid）と呼ばれたものです。アメリカのキリスト者たちも、20世紀初頭の人種隔離政策において、似たようなものを支持しました。ジョン・マーシャル・ハーラン（John Marshall Harlan）のような反対者たちが、明快で説得力のある議論を展開していたにもかかわらず、です。ハーランは、かつて奴隷所有者でしたが、自分のやり方の誤りに気づいた人でした。当時、彼の神学的な仲間内でただ一人の声として、彼はこう主張しました。「人種に基づいて市民を恣意的に分離することは、平等と相容れない隷属の印である。」[10]当時のキリスト者たちは、黒人と白人の平等という考えに表向きは敬意を払っていたかもしれませんが、黒人を指定地域に隔離し、選挙権を拒むことによって、その平等を損ない、彼らの人間性を奪っていたのです。

今日のキリスト者として、私は教会における性差別についても似たようなことが言えます。それはおそらく、さらに根深いものでした。ほぼすべての大陸、すべての世紀にわたって、教会のほぼ全体が、女性は「異なり、劣っている」という指導者たちの教えを受け入れてきました。補完主義の教会がこれを「人格は平等、役割は異なる」へと改めようとしてきた最近の試みは高潔なものかもしれませんが、私はハーランの思いに呼応し、それをジェンダーに当てはめたいと思います。性別に基づいて教会員を分離することは、平等と相容れない隷属の印なのです。

この点については次の章でより十分に論じますが、自分たちの立場こそが教会の歴史的な立場だという補完主義者の主張は、深刻な歴史の健忘症を示しています。今日、すべてのキリスト者と教会が、女性は男性と対等であると断言するでしょうが、男女の平等という考えが教会で受け入れられた教理となったのはごく最近になってからだということを覚えている人は、ほとんどいないようです。[11]

10. https://bit.ly/3mzfAEq
11. ウィリアム・ウィット（William Witt）に謝意を表します。彼は“Icons of Christ”（第3章）で、私がこのことを初めて正しく理解する助けとなってくれました――教会の歴史の大半を通じて教会の教理であった女性劣等性の神学についての彼の研究が、この章を書く私の出発点となりました。

おそらくこれこそが、歴史上の教会の最も広く行き渡った、そして最も長く続いた罪でしょう。すなわち、1960年代に至るまで、女性は本質的に男性より劣っているという信念が、ほとんど異議を唱えられることがなかったということです。ようやくその時になって、女性解放運動の成功に続いて、社会は、女性が本当に男性と等しい知性を持ち、同じように重要なリーダーシップを発揮できることを「発見」したのです。世界中の教会が女性についての自らの教理を急速に見直し始めたのは、ようやくこの時点になってからでした。約2千年にわたって、教会の主要な教師たちのほとんどすべてが、女性について低く制限的な見方をしていました。これから示すように、彼らはこの見方を周囲の文化から受け継ぎ、聖書によってこの見方を問い直す代わりに、自分たちの文化の女性蔑視に聖書の読み方を支配させてしまったのです。

私がこの点をくどくどと強調しなければならないのは、「人格は平等、役割は異なる」という教えを持つ補完主義は、男女相互主義とまったく同じように、教会の歴史的立場からの逸脱であることを明らかにするためです。[12]どちらの立場も、わずか60年前には存在していませんでした！　どちらも聖書解釈の歴史においてはほんの幼子にすぎません。ですから、補完主義には、男女相互主義以上に先に存在していたと主張する資格はないのです。実際、私のかつての立場である穏健な補完主義は、そのどちらよりもはるかに若く、これらすべての立場の中で最も歴史的先例に乏しいのです。

教会の標準的な教えとしての女性劣等論

確かに、キリスト教はその存在の最初の数世紀に、大勢の女性たちを教会に引き寄せました。イエスによる女性への画期的な接し方、最初期の教会で指導的な役割を果たした女性たち、パウロの手紙によるキリストにある男女の対等な立場――これらすべてが、女性たちに、ほかのどこでも、またそれ以前の文明のどの時代にも知られていなかった新たな地位を与える方向へと、教会を踏み出させました。しかし、初代教会が女性を高く見て、そのように扱っていたにもかかわらず、使徒後の教会ではすべてがうまくいっていたわけではありませんでした。ギリシア・ローマの隣人たちよりは（わずかに）肯定的に女性を見ていたものの、女性の劣等性という考えはたちまち根を下ろしたのです。

12. アンドリュー・バートレットも“Men and Women in Christ”（p. 6–10）で同じ結論に達しています。「補完主義者が自分たちの立場は『歴史的』だと主張するとき、それは誤解である。」

以下に示すのは、歴史上の「偉大な」教会指導者や思想家たちの書いたものからの抜粋です。広く抱かれていたこの見方を垣間見せてくれます。

教父オリゲネス（Origen、184–253年）は、「教会で語ることは、女の人にとって恥ずべきことです」[13]というパウロの教えを適用して、たとえ女性がすばらしいことや聖なることを言いたいと思っても、その言葉が「女の口から出る」というだけの理由で、女性に完全な沈黙を求めました。[14]同様に、教父ヨハネス・クリュソストモス（John Chrysostom、347–407年）は、女性が何かを教えることを拒みました。その理由はこうです。「女はかつて一度アダムに教え、しかも悪く教えた。……それゆえ、女は教授の座から降りよ！　女は今や罪のゆえに男に服従させられているのだ。」[15]彼は特に男性の牧師たちに、女性には彼らを誘惑する力があると警告し、こうした男性たちに「特別な用心」を払うよう勧めました。「女は罪に傾きやすいからである……慎みのない女の目だけでなく、慎み深い女の目でさえ、心を刺し貫き、かき乱すのである。」[16]

ラテン・キリスト教の父テルトゥリアヌス（Tertullian、160–225年）は、さらに辛辣でした。「女は下水溝の上に建てられた神殿である。」彼は女性たちに直接こう語りかけました。

あなたがたは知らないのか。あなたがたが（一人ひとり）エバであることを。あなたがたのこの性に対する神の宣告は、この時代にも生きている。それならば、その罪責もまた必ず生きていなければならない。あなたは悪魔の門である。あなたは神の律法を最初に捨てた者である。あなたは、悪魔でさえ攻撃するだけの勇気を持たなかった者を、説き伏せた女である。あなたは神のかたちである男を、いともたやすく破壊した。あなたが受けるべき報いのゆえに、神の御子でさえ死ななければならなかったのである。[17]

その毒々しい糾弾の背後には、彼の知る会衆の中で、ほかの人々に教え、洗礼を授けていた女性たちがいました。彼はそのことをまったく快く思っていませんでした。「女が教会で語ることは許されていない。しかし、教えることも、洗礼を授けることも、ささげ物をすることも、何らかの男の務め〔あるいは〕祭司の職におけ

13. コリント人への手紙第一14章35節
14. Patricia Cox Miller (ed), Women in Early Christianityに引用されています。
15. Elizabeth A. Clark, Women in the Early Churchに引用されています。
16. Philip Schaff (ed), St. Chrysostomに引用されています。
17. Alexander Roberts (ed), Tertullian, Minicius Felix, Commodian, Origenに引用されています。

る分け前を自分のものだと主張することも、女には許されていない。」[18]テルトゥリアヌスは、ローマの政治的手法を教会の構造に持ち込み、彼の時代の教会を、有機的な共同体から、男性だけがどんな種類のリーダーシップにも十分に参与できる政治的な団体へと移行させました。彼はまた女性の貞潔を強く求めました。彼によれば、女性は自分自身の性的純潔だけでなく、男性の性的純潔にも責任があるのでした。彼は女性が魅力的になるのを避けることについて長い論文を書きました――女性は汚れた体を洗うのではなく、暗い色の形のない衣服で頭から足先まで覆い、男性を誘惑しないように公の広場に出てはならない、と。女性たちはキリストによって贖われうるとしても、それでもなお特に罪と深く結びついているので、隔離し、従属させておくのが最善だ、というのでした。

同じように、教父アウグスティヌス（Augustine、354–430年）は、女性には男性から離れた固有の尊厳はないと信じていました。「助け手として――それは女だけに属する働きであるが――女は神のかたちではない。しかし〔男は〕、ただ一人であっても、女と結び合わされて一つとなっているときと同じく、まったく完全に神のかたちなのである。」[19]世紀が進んでも、女性に対するこの低い見方は改善されませんでした。アウグスティヌスに次ぐ教会の偉大な知性として名高いにもかかわらず、トマス・アクィナス（Thomas Aquinas、1225–1274年）は、自分の知る女性たちのうちに、それに匹敵する知性を見いだすことができませんでした。彼は、女性は欠陥のある人間であり、男性の精子に起きた偶発事の結果である――通常の状況であれば、もう一人の男性が生まれていたはずだ――というアリストテレスのばかげた考えを復活させることによって、教会のジェンダー神学に貢献しました。その含意は、「理性は男において優勢であるから、女は本性的に男に服従する」ということです。[20]

アクィナスは、女性が男性と人間の本性を共有しており（これは思想上歓迎すべき革新でした）、男性の「助け手」であると認めましたが、すぐに条件をつけて、生殖以外においては「別の男のほうが常により助けになる」と述べました。男性は、女性から受けるわずかな助けへのお返しとして、彼女を導くのです。「上に立つ者は、従う者たちを、彼ら自身の益と善のために用いる。……もしある者たちが、自

18. Karen Jo Torjesen, When Women Were Priestsに引用されています。
19. Augustine, De Genesis ad litteram, vol. 9.
20. Aquinas, Summa Theologica, 1.92.1. www.bit.ly/3CD8B2V

分より賢い者たちによって治められていなかったなら、人間の家族には良い秩序が欠けていたであろう。」[21]

アクィナスは神について偉大な知性を持っていたかもしれませんが、残念ながらその知性は、師であるドミニコ会の神学者アルベルトゥス・マグヌス（Albert the Great）によって、女性についての恐ろしい考えで満たされていました。アルベルトゥスはこう書いています。

女は出来損ないの男であり、男の本性に比べて欠陥のある不完全な本性を持っている。それゆえ、女は自分自身に確信が持てない。手に入れられないものを、女は嘘と悪魔的な欺きによって得ようとする。だから、すべての女に対して、毒蛇や角のある悪魔に対するように警戒しなければならない……悪しき、ねじけた行いにおいては、女は男よりも賢い、すなわちずる賢いかもしれない。理性が男をあらゆる善へと駆り立てるのと同じように、女の感情は女をあらゆる悪へと駆り立てる。[22]

プロテスタントの宗教改革者マルティン・ルター（1483–1546年）は、根っからの論争家でしたが、女性を人間として扱うことにおいていくつかの前進を遂げました。それでも、古い考えは根強く残りました。「神のことばと御業は明らかである。女は妻となるか、娼婦となるかのどちらかのために造られたのだ。」「賢くなりたいという欲望ほど、女に似合わない衣はない。」「男は広く大きな胸と、小さく狭い腰を持ち、女よりも多くの理解力を持っている。女は小さく狭い胸と広い腰しか持っていない。それは、女が家にとどまり、じっと座り、家を守り、子どもを産み育てるためである。」姦淫の女について警告する聖句を注解する中で、ルターはそれを、男と女についての自分の考えをぶちまける機会としました。

女は男のそばにいて、子どもの世話をし、子どもを育て……そして男に服従するために造られた。一方、男は女と家のほかの者たちを治め、支配するよう命じられている。しかし、もし女が自分の職分を捨てて夫の上に権威をふるうなら、それは女自身の過ちと悪から出た業を（行っている）のである。神はこの性を支配するために造られなかったのであり、それゆえ彼女たちが支配して成功することは決してない。[23]

21. アクィナスは別の箇所で、女性が教会で叙階を受けない理由、あるいは重要な役割を担わない理由として、このことを挙げています。「女は従属の状態にある。それゆえ、女は叙階の秘跡を受けることができない。」
22. Filthaut Ephrem (ed), Albertus Magnus: Quaestiones Super De Animalibus, vol. 15, q. 11.
23. Luther's Works, vol. 15、伝道者の書7章26節の注解、p. 130.

歴史上の主要な教会指導者たちのこうした考えは破壊的なものでしたが、スコットランドの宗教改革者で長老派の創始者であるジョン・ノックス（John Knox）こそが、教会随一の女性蔑視者の栄冠を手にします。カトリックの女王たち、スコットランドのメアリー・オブ・ギーズ（Mary of Guise）とイングランドのメアリー・テューダー（Mary Tudor）に対する激しい非難の中で、彼は、自分の議論は聖書に基づいていると言いました。「女が男たちの上に君臨し、支配権を持つことは、自然における奇怪事以上のものであると、神は啓示しておられる。」[24]ノックスによれば、女性は本性的に弱く、もろく、短気で、ひ弱で、移り気で、残酷で、思慮に欠けています。だからこそ女性は指導してはならず、実際、女性の助言や指導に従う男性は、そのことによって自ら公職に就く資格を失うべきだ、というのです。パウロを引き合いに出して、彼は、女性はたとえ最も完全な状態にあっても、男性に服従するように造られたのだと言いました。出産において、また男性へのこの服従において苦しむかもしれない女性に対して、何の同情も示されません――それはエバにおける当然の報いだというのです。それゆえ、女性は自分のすべての欲求と意志を、夫と夫の意志に明け渡さなければなりません。ノックスによれば、これらすべては、家庭や教会だけでなく社会における女性の役割にも影響を及ぼします。「教えるため、裁くため、あるいは男の上に君臨するために登用された女は、神の御心と定めに最も反するものである。」

同じ宗教改革者であるカルヴァンは、こう書いています。「人が他の人々とのさまざまな関係において、同時に命令し、また聞き従うことには、何の不合理もない。しかし、このことは女には当てはまらない。女は本性によって（すなわち神の通常の法によって）ただ聞き従うためにのみ生まれてきたのである。なぜなら、すべての賢明な人々は常に、gynaikokratian、すなわち女の統治を、不自然な奇怪事として退けてきたからである。」[25]

ピューリタンのジョン・ドッド（John Dod）は、1603年の十戒の解説書の中でこう書いています。「教会がキリスト・イエスを恐れなければならないように、妻たちも夫を恐れなければならない。そして、この内なる恐れは、外に現れる柔和と謙遜によって示されなければならない。もし下にある者に恐れと畏敬がないなら、上にある者に健全で変わらぬ敬意が払われることはありえないからである。」[26]

24. John Knox, First Blast of the Trumpet Against the Monstrous Regiment of Women. www.bit.ly/3EG88xc
25. John Calvin, The Second Epistle of Paul the Apostle to the Corinthians and the Epistles to Timothy, Titus and Philemon.（テモテへの手紙第一2章12節についての注解より。）
26. John Dod, A Plaine and Familiar Exposition of the Ten Commandements

英国国教会の最も優れた神学者の一人であるリチャード・フッカー（Richard Hooker、1554–1600年）は、女性を見下すこのみじめで執拗な伝統を引き継ぎました。著書The Laws of Ecclesiastical Polityの中で、彼は、女性の「判断は、その性のゆえに、たいてい最も弱い」と述べました。[27]彼は、結婚式でなぜ父親が花嫁を夫に引き渡すのかを説明しました。「彼女の本性と性のまさにその虚弱さ（imbecility）ゆえに、彼女は常に他の者によって指示され、導かれ、統制されなければならないのである。」[28]

メソジスト運動の創始者ジョン・ウェスレー（John Wesley、1703–1791年）は、自分の教会で女性が奉仕するための重要な機会をいくつか提供しましたが、それでも女性の第一の務めは家庭にあると考えていました。慌ただしい伝道旅行の途中で妻に手紙を書き、彼は、家に縛られた女性としての境遇を受け入れるよう彼女に勧めました。「もうこれ以上、主導権や、権力や、金や、称賛を求めて争ってはならない。神と私とに知られ、愛される、私的で取るに足りない者であることに満足しなさい。……もしあなたが今すぐ葬られたとしたら、あなたの人柄が人類にとって何の重要性があるだろうか。あるいは、もしあなたがまったく生きていなかったとしたら、それが神の大義にとってどんな損失となるだろうか。」[29]

私がこれらの引用をすべて示すのは、一つの点を明らかにするためです。教会の歴史的な立場は――教父であれ、中世であれ、カトリックであれ、プロテスタントであれ、ピューリタンであれ、英国国教会であれ、メソジストであれ――常に、女性は「異なり、劣っている」ものであり、それゆえ生殖と家事以外で重要な貢献をすることにはほとんど向いていない、というものでした。

女性の劣等性と従属を支持するために、もっともらしくねじ曲げることのできた聖書箇所は、どれもそのために用いられました。教会史の大半において、もし女性が教会の指導者たちに、神は自分をどう見ておられるのかと尋ねたなら、彼女は品位を落とされ、屈辱を与えられるような答えを受け取ったことでしょう。女性が男性に従属することには異論がありませんでした。それは、疑われることのない一つの前提に基づいていたからです。すなわち、女性は本質的に男性より劣っている、という前提です。女性は生まれつき本質的に知性が劣り、より罪深く、より誘惑に陥りやすく、感情的により不安定であるという考えは、女性は家庭でも教会でも社会

27. Richard Hooker, The Laws of Ecclesiastical Polity, Preface 3.13.
28. Richard Hooker, The Laws of Ecclesiastical Polity, Book 5, 43.5. 古英語では、imbecilityは人が弱いこと、あるいは未発達であることを指していました。
29. www.bit.ly/3nQszRt

でもリーダーシップを発揮することができない、という揺るぎない結論へと至りました。

いったい、こうした恐ろしい考えはどこから来たのでしょうか？

文化が聖書に勝る

教会が犯し続けている最もよくある誤りの一つは、聖書というレンズを通して文化を読むのではなく、文化というレンズを通して聖書を読むことです。これが、教会の歴史における性差別と女性蔑視を説明しています。とりわけ、アリストテレス（Aristotle、紀元前384–322年）の著作は、ギリシア・ローマ世界の根底にある文化的前提を形づくり、それが今度は、性差についての初期キリスト教の理解に吸収されていきました。アリストテレスは、女性は奇形の男性であり、それによって社会における役割が決まると明言しました。アリストテレスは女性を「暗く、秘密めいて、絶えず動き、自己完結せず、境界を欠いている」と描写し、それと対照的に男性は「明るく、正直で、善く、安定し、自己完結し、しっかりと境界づけられている」としました。[30]

こうした考えは、ギリシア・ローマ文明全体を通じて、文化的な態度と行動を支配していました。家父長制はローマ帝国のDNAに組み込まれていたのです。初期の教父たちは、女性について肯定的な見方もいくらか示しながらも、それを醜く古い考えと混ぜ合わせてしまいました。教会史の教科書は、教会史のこの初期の段階を、とりわけイエスがどなたであるか、またその本性に関する「真理の探求」として描きますが、それと同時に、女性の本性について、ひそかに教会の教理に吸収されつつあった偽りについては、めったに触れられません。

さらに、二元論と呼ばれるプラトン哲学の一側面が、初期の教会にとっての難題となり、女性の蔑視を強めました。この異端では、現実は、肉体あるいは物質（本質的に悪であると信じられている）と、霊あるいは精神（本質的に善である）とに分けられます。世界をこのように見る誤ったやり方には、性別の区分も重ね合わされていました。より理性的だと見なされた男性は本質的に善であり、神のかたちに造られているのに対して、頭脳ではなく体によって規定された女性は、それゆえ肉的であり、単に男のかたちに造られたにすぎないと見なされたのです。この非聖書的

30. Kayla Huber, “Everybody’s a Little Bit Sexist.” Mathews, “Gender Roles and the People of God,” ch. 10に引用されています。

な二分法がキリスト教思想に入り込むにつれて、女性は非理性や肉、そしてその罪深い欲望と同一視されるようになりました。女性の性は本質的に罪深いというこの異端的な考えが、教会をひどい道へと進ませました。性そのものが、今や堕落の結果と見なされるようになったのです。ヨハネス・クリュソストモスは、堕落前のエデンの園を、「性的な交わりへの欲望が……彼らの魂から取り除かれていた」場所として思い描くよう読者を導きました。[31]しかし堕落の後、性は必要悪となりました。子どもを産むために必要である一方で、それは「原罪」をその子どもたちに伝える方法ともなったのです。罪は一種の性感染症でした。性についてのこの悲しい理解は、とりわけ、そのアイデンティティ全体が生殖を中心に回っていた女性たちにおいて、処女性の過度の尊重、結婚における禁欲的な性の回避、母マリアの処女性への執着、そして後には司祭の独身制へとつながっていきました。

男性は女性を避け、女性は自分自身を避けるべきだとされました。古代の歴史家パラディオス（Palladius、386–430年）は、エジプト周辺の砂漠で、清貧と貞潔と孤独のうちに隠修士として暮らし、どうやら責められた自分の性の重荷にあえいでいたらしい2万人の女性について語っています。男性にも女性にも取り入れられたこの隠修士の生活は、のちに、独身・清貧・奉仕の誓願を中心に修道院で組織された、男女別の修道共同体へと発展していきました。この文化の中では、「最も敬虔な」女性たちは結婚を避け、結婚しても可能であれば性を避け、自分をできるかぎり魅力のない者にしました。歴史家エリザベス・クラーク（Elizabeth Clark）はこう述べています。

教父たちの女性に対する態度を表すのに最もふさわしい言葉は、両価性（アンビバレンス）である。女性は神の被造物であり、男性への神の良き贈り物であった――そして世界の呪いであった。女性は知性においても性格においても弱かった――そして不屈の勇気を示し、驚くべき学問的偉業を成し遂げた。虚栄心が強く、欺きに満ち、情欲にあふれていた――そして男性をキリストへと導き、性的な交わりから逃れ、処刑人の脅しにもひるまず、粗布と灰で身を飾った。[32]

ローマ帝国がゆっくりと崩壊していくにつれて、今や教会の神学に融合したこれらのギリシア・ローマ的な考えは、中世の教会へと受け継がれていきました。以前と同じように、女性についての両価性は残りました。一方では女性は邪悪で劣った者として描かれ、他方では（もし何とかして自分の性を消し去ることができるなら）美徳と聖性の模範としてたたえられたのです。

31. Elizabeth A. Clark, Women in the Early Church, p. 122–23.
32. Elizabeth A. Clark, Women in the Early Church, p. 15.

そこへ魔女狩りが登場します。女性についてのこの両価性がこれほど根深く定着していたのですから、社会と教会がもみ殻と麦をふるい分けようとしたのも驚くにはあたりません。魔女を特定して断罪するのに必要だったのは、自分の従属的な地位を謙遜に認めない女性を見つけ、異端審問官に彼女を拷問させて、告発されたことは何であれ「自白」するまで責め、そして即座に火あぶりにすることだけでした。男子修道院のある修道院長は、いとも簡単に悪魔化された女性たちに、ほとんど同情を示しませんでした。「女の邪悪さは、世のほかのどんな邪悪さよりも大きい。竜の毒のほうが、女と親しくすることよりも治しやすく、男にとって危険が少ない。私たちの魂の安全のために、私たちは毒のある動物のように女を避けよう。」[33]

宗教改革までは、女性が敬虔な者と見なされるための最大の望みは、性生活と家庭での役割を一切避けることでした。修道女になれば、教育を受け、ある程度の自立を味わうことができました。そして少数の女性は、女子修道院の院長にまで昇進しました。中世の歴史には、こうした女性たちの一部に男性が霊的に耳を傾けたことが記されています。たとえば、ビンゲンのヒルデガルト（Hildegard of Bingen）やシエナのカタリナ（Catherine of Siena）は、キリストのために家庭での役割を捨て、それまで男性だけが持っていた霊的権威の響きをもつ声で、キリストのために語りました。

こうした性を捨てた霊的な役割を除けば、女性に残されていたのは隷属と恥だけでした。2世紀のクレメンス（Clement）はこう言っています。「女性にとっては、自らの本性を意識することそのものが、恥の感情を呼び起こすべきである」[34]――それはすべて、教父たちが「神は女性をどう見ておられるか」という問いに誤って答え、自分たちの文化の性差別的な前提を聖書本文に読み込んだからでした。しかし15世紀には、一筋の希望の光が差しました。

宗教改革と啓蒙主義

宗教改革は、聖書が日常の言葉に翻訳され、印刷されたことによって可能になり、教会に、その教理上の女性蔑視を悔い改めて一から出直す機会を与えました。その創始者マルティン・ルターは、聖書の福音だけでなく、結婚と性の良さにも目を開かれました。ルターとカルヴァンは、独身制のいわゆる霊的価値を切り崩し、結婚

33. Karen Jo Torjesen, When Women Were Priests, p. 223に引用されています。
34. St. Clement, Pedagogues II, 33, 2.

と性を喜び祝うことによって、1400年にわたる教会の教えをひっくり返しました。その結果、元司祭や牧師たちが結婚し、「牧師の妻」は霊的な尊厳をもつ新しい召命となりました。キリスト者の女性は、妻として、母として、そして家庭を切り盛りする者として、新しい栄誉を与えられました。ルターの妻カタリーナ・フォン・ボラ（Katherine von Bora）は、彼の6人の子どもを育て、「1階だけで40の部屋がある巨大なアウグスティヌス会の修道院で、家畜小屋、養魚池、果樹園、大勢の使用人、子どもたち、病気の訪問客、下宿する学生たち、そして教会指導者たちを取り仕切った」のです。[35]

しかし、こうした前進にもかかわらず、ルター、カルヴァン、ノックスの根強い性差別的な教えのために、家父長制は揺るがないままでした。ルターの考えでは、エバの罪のゆえに、女性の役割は依然として従属的なものでした。プロテスタントのどの領邦も、妻の従順を強調する婚姻条例を定めました。[36]さらにルターは、女性の召命を、教会でも広い社会でもなく、家庭に固く結びつけました。「カタツムリが自分の家を背負って運ぶように、妻は家にとどまり、家庭の事柄を世話すべきである。外にあって国家にかかわる事柄を管理する能力を奪われた者として。」[37]

「女性にとってプロテスタンティズムの遺産は、きわめてあいまいなものであった」とリンダル・ローパー（Lyndal Roper）は書いています。「女であることに本来つきまとっていた恥はいくらか和らいだが、従属は残り、家庭への囲い込みは強まった。宗教改革は、女性が男性と霊的に平等であることを確認することもできたはずなのに、実際には『新たな家父長主義』を招き入れ、既婚女性を夫のかしら性のもとにしっかりと置いたのである。」[38]カトリックの女性たちが、イエスの足もとに座ったゆえに尊んだマリアの代わりに、ルターは台所で働いたマルタをたたえたようでした。ルターとカルヴァンによって修道院が閉鎖されると、かつてこうした場所が一部の女性に与えていた自立や奉仕の機会は、もはや得られなくなりました。

宗教改革の後でさえ、女性が劣っているという考えはそのまま残りました。15世紀から17世紀にかけてヨーロッパとアメリカを席巻した残酷な魔女狩りは、教会が女性に対する低い見方を改めなかったことの証拠です。1484年、教皇インノケンティウス8世（Innocent VIII）が魔女を訴追せよという教書を出し、その後の数十年間に、いわれなく告発されたおよそ20万人の女性が処刑されることになりまし

35. Barbara MacHaffie, Her Story, p. 63.
36. Beth Allison Barr, The Making of Biblical Womanhood, ch. 4.
37. Susan C. Karant-Nunn and Merry E. Wiesner-Hanks, Luther on Women
38. Lyndal Roper, The Holy Household, p. 1–2. Barr, ch. 4に引用されています。

た。この命令を支持した神学者たちは、『魔女に与える鉄槌』（Hammer of Witches）という文書を書き、女性がなぜそれほど悪魔に身を委ねやすいのかを説明しました。女性は影響を受けやすく、口が軽く、しかも結局のところ「曲がった肋骨」から造られた、というのです。エバは最初にサタンに誘惑されました。そして性は原罪を運ぶものとされていたので、魔女はみな、罪のない人々を罪へと誘い込むために悪魔と契りを結んだのだと考えられました。「この欠陥（曲がった肋骨）のゆえに、女は不完全な動物であり、常に欺く……女は、魔術によって、あるいは何か別の手段によって、さまざまな復讐を探し求め、思いめぐらし、加える。この性にこれほど多くの魔女がいるのも不思議ではない……あらゆる魔術は肉欲から来るものであり、それは女においては飽くことを知らない。」[39]こうした死のうち、スペイン、イタリア、ポルトガル、アイルランドといったカトリック諸国で起きたのは、わずか6%にすぎませんでした。依然として女性蔑視に固く染まっていた宗教改革の子どもたちは、魔女の火あぶりにおいてカトリックを上回ったのです。ルターのドイツだけで、処刑の40%を占めました。スイス、イングランド、オランダなど、ほかの主にプロテスタントの国々が35%を占めました。

宗教改革の指導者たちが教会における女性の地位を高めることに失敗したところで、せめて啓蒙思想家たちが広い社会において勝利を収めてくれていたら、と望みたくなります。しかし啓蒙主義の知識人たちは、すべての人の普遍的な平等という新しい考えを掲げながらも、自らの性差別には固執しました。[40]ジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau、1712–1778年）の平等についての考えは、のちに奴隷解放に寄与することになりますが、彼は女性の苦境を少しも助けませんでした。「女性の教育はすべて、男性との関係において計画されるべきである。男性を喜ばせ、男性の役に立ち、男性の愛と尊敬を勝ち取ること……これらはあらゆる時代における女性の義務であり、幼いころから女性に教えるべきことである。」同様に、イマヌエル・カント（Immanuel Kant、1724–1804年）の普遍的権利と社会的階層の撤廃についての見解にも、女性は含まれていませんでした。彼は、夫には「〔妻を〕所有する権利があり、妻が夫に聞き従う義務は、道徳的責務であると同時に自然法の要求である」とはっきり述べました。当時その進歩的な見解で知られていたドゥニ・ディドロ（Denis Diderot、1713–1778年）の『百科全書』（Encyclopédie）でさえ、女性を「弱く、臆病で、ずる賢く、邪悪で、執念深く、浅薄で、偽りに満ちている」と描写しました。つまり、基本的に劣っており、

39. H. Kramer and J. Sprenger, Malleus Maleficarum
40. 啓蒙思想家についてのこの節は、Alice Mathews, Gender Roles and the People of God, ch. 11に負っています。

対になる男性に仕えるために存在している、というのです。[41]

この章を書きながら、私は悲しみを覚えます。この本で示していくとおり、その間ずっと、教会は自らの聖書の中に、人を平等にする力の金鉱を抱えたまま、その上に座っていたのです。何世紀にもわたる女性の隷属の末に、ようやく聖書の男女を平等にする考えのいくつかが、広い文化の意識の中に入り込みました。ところが、広い文化がこうした神の息吹による考えの意味するところを適用し始めたとき、教会の大多数は、まるで自分たちの救いがそれにかかっているかのように家父長主義にしがみつくことを選びました。皮肉なことに、教会は時代遅れで聖書的でない教えの最後の砦となってしまったのです。

女性の台頭

現代の歴史家なら誰でも証言するとおり、この2世紀の間に、世界中の女性たちは、太古の昔から自分たちの運命であった劣等視、従属、そして家庭に限られた役割を押し返してきました。この抵抗はゆっくりとではあっても着実に進み、挫折がなかったわけではありません。その成功は、性的虐待、レイプ、女性に対する暴力、教育や仕事における機会の不平等、賃金の不平等、性差別的な法律が間違っていると、今では社会の大部分が認めているという事実に表れています。

歴史的に教会は、聖書の「自由」という考えを個人の救いに限定してきましたが、ここ数世紀の神学の発展によって、それをもっと広く、社会的・政治的・経済的な自由にも当てはめるようになりました。解放に対する神の関心について新たに得た理解を武器に、多くのキリスト者が、民主主義、奴隷制度廃止、労働者の権利、社会福祉、人種の平等、普通選挙、職場における女性の平等といった偉大な社会運動の最前線に立ちました。女性の尊厳を高めることにおいてなされた進歩の一例として、女性の選挙権を取り上げてみましょう。最初期の女性参政権運動家たちは、そのほとんどがキリスト者でした。1838年にピトケアン諸島が認めるまで、女性に投票を許した民主国家は一つもありませんでしたが、2015年にサウジアラビアが

41. 幸いなことに、多数派の声に覆い隠されてはいましたが、のちの女性解放の種はまかれていました。コンドルセ侯爵（Marquis de Condorcet、1743–1794年）は、選挙権や公職に就く権利を含め、女性が公的領域に完全に参入することを提唱する小論を書きました。またオランプ・ド・グージュ（Olympe de Gouges、1748–1793年）は、普遍的に平等主義的であるとされる体制の中に性別による階層が存在するという矛盾を指摘しました。「自由と正義とは、他人に属するものをすべて返すことにある。したがって、女性の自然権の行使を制限するものは、男性の絶え間ない専制だけである。これらの制限は、自然と理性の法によって改められなければならない。」

ついに地方選挙での女性の投票を認めて以来、民主的な選挙を行う世界のすべての国が、今では女性に投票を許しています。

もちろん、この革命のもともとの種は、イエスの女性への接し方と、ガラテヤ人への手紙3章28節におけるパウロの人類のマグナ・カルタにまでさかのぼりますが、女性の段階的な解放には、ほかにも多くの要因が関わっていました。1800年代、主にキリスト者の女性たちが、あらゆる社会悪に取り組むために、さまざまな社会活動団体を作り、率い始めました。その醍醐味は、それまでは女子修道院や修道会でしか味わえなかったものでした。女性たちは、子どもたちに神について教え、読み方を教えるために、日曜学校を始めました。孤児ややもめの世話をしました。ほかの女性たちに読み書きや算数、宗教について教えました。平和、禁酒、刑務所改革、売春宿の閉鎖を求めて働きかけました。こうしたすべてのことの中で、もっと深い何かが進行していました。女性たちは、世界を変える自分たちの力を発見しつつあったのです。

そこで彼女たちは、女性の権利を求める働きかけも始めました。それは、あらゆる信条、文化、人種の女性たちが手を結び、女性がそれぞれの社会の二級市民から抜け出して前進するためには、経済的、心理的、社会的な自由が必要だと訴えた運動でした。彼女たちは、それぞれの文化における女性の見られ方を変え、そうすることによって、社会における女性の社会経済的・政治的役割を定義し直そうとしました。この運動の初期には、多くのキリスト教指導者や学者がその最前線に立っていました。そのため、「1960年代に花開いた女性解放運動には、福音主義的かつ聖書的な深い根があった」と言うことができるのです。[42]

とりわけ1960年代と1970年代には、史上最大級の社会革命の一つの中で、ついに女性たちが最大の自由を勝ち取る番が来ました。その大義を後押しした要因がほかにもありました。

近代的な工業化の進展によって、女性は家庭の外で仕事を見つけるようになりました。最良の仕事と給料は男性のために取っておかれていましたが、女性たちは家事以外の仕事を味わい始めました。第二次世界大戦では、大勢の女性が、やむをえ

42. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, p. 39：「これは、キリストにある男女の平等が聖書の中で明確に教えられていると信じた福音派の人々が率いた運動であった。彼らは奴隷制にも女性の隷属にも反対した。『第一波フェミニスト』の指導者の中には、救世軍の創設者である福音派のウィリアム・ブース（William Booth）とキャサリン・ブース（Catherine Booth）、ソジャーナ・トゥルース（Sojourner Truth）、アマンダ・ベリー・スミス（Amanda Berry Smith）、キャサリン・ブッシュネル（Katherine Bushnell）、A・J・ゴードン（A. J. Gordon）、フレドリック・フランソン（Fredrik Franson）がいた。」

ず、戦地に出て不在となった男性たちの仕事に押し出されました。彼女たちは会社を経営し、職業技術を身につけ、工場を運営し、トラックを運転し、武器を造りました。戦後には、仕事の性質も変わり始めました。腕力よりも頭脳が重要になるにつれ、ホワイトカラーの職域が拡大しました。平均すれば、女性は肉体的にきつい仕事では苦労したかもしれませんが、知的な仕事なら間違いなくこなすことができました。今日、大学を卒業する女性の数が男性より多いことが、その証拠です。

また、1950年代に経口避妊薬が発明されたことで、女性は、いつ、何人の子どもをもつかを自分で決められるようになりました。子どもが少なくなれば、それだけ時間が増えました。1960年代までに、解放運動と大衆の抗議行動が地球を席巻していました。公民権運動は大きな勝利を収め、それに続いて、女性運動もまた花開くのに理想的な時が訪れました。1860年代、奴隷制が廃止されつつあったころ、主に福音派の女性たちが、自分たちの従属的な地位に異議を唱え始めました。初めのうち、彼女たちは真剣に受け止められませんでした。社会を変えるような考えは、浸透するまでに時間がかかるものです。しかし、ついに1世紀後、白人が支配する国々で非白人の人々のために公民権が勝ち取られていく中で、女性たちはその社会の勢いを用いて、自分たちの劣った地位を覆すことに成功しました。私たちに先立って歩んだこの勇敢な女性たちに、私たちは多くを負っています。今日、女性が平等な地位を享受しているのは、大部分が彼女たちのおかげなのです。

どれほど深い転換が起こったか、いくら強調してもしすぎることはありません。わずか数十年のうちに、何千年も続いてきた、女性が劣っているという疑われることのない前提は退き、女性の裁判官、ソフトウェア開発者、外科医、政治家、大統領、教授、将軍、CEOが、どれもまったく普通に見える世界に道を譲ったのです。

女性の隷属にも、その解放にも歴史的に加担してきた教会は、こうした地殻変動のような社会の変化に、今度はどう応じるのでしょうか？

キリスト教世界と女性解放運動の衝突

教会の立場は歴史的に、女性は劣っているがゆえに、教会でも家庭でも職場でも指導することはできない、というものでした。20世紀と21世紀に先立つどの世紀においても、家父長的な文化はこの点で教会と一致していました。ところが今や、こうした前提に挑む新しい文化が到来したのです。教会が最初にどう応じたかは、すでに歴史です——ごく最近の歴史ではありますが。その主要な思想的指導者や影響

力のある人々の多くは今も存命で、今日に至るまで相変わらず声高に語っています。

悲しいことに、女性解放運動の成功に対する教会の最初の反応は、ほとんどが反発的なものでした。女性が劣っているという考えにしがみつき、最大の教会グループであるローマ・カトリック教会、そして保守的な福音派や改革派の諸教会が、変化に対して最も敵対的でした。女性を隷属させないこと、女性を平等に扱うことを求める最初期の叫びに対して、キリスト者たちは、ジョン・ライス（John Rice）のような著者が示した答えを読み、受け入れました。彼はBobbed Hair, Bossy Wives, and Women Preachers（1942年）の中で、「神のことばによって彼女たちの疑問に決着をつける」と称して、女性たちをなだめようとしました。

男は神のかたちに造られている。神は男性的な神である。聖書の至るところで、神には男性代名詞が使われている……神は女々しくはない。そして男は神のかたちに造られている。他方、女は〔男の〕かたちであり、男の伴侶である……このことを覚えている女は幸いである。女の栄光は、男の助けとなること、そして夫あるいは父に従うことにあるのである。[43]

これほど一般向けではないものの、より学問的なものとして、1957年になってもなお、福音派のドナルド・ガスリー（Donald Guthrie）は、テモテへの手紙第一についてのティンデール注解の中で、「男性が先に創造されたことは、男性を女性に対して優位な立場に置く」との見解を述べました。[44]著名な聖書学者チャールズ・ライリー（Charles Ryrie）も、1958年に同様の結論に達しています。「女性に関する神のみこころは……家庭においては従属と名誉を、教会においては沈黙と手助けを意味する。」[45]

キリスト者たちはこうした初期の「神学的」な防御で武装していましたが、彼らが社会で起きている変化に対して示した抵抗の多くは、「キリスト教的家族」が攻撃

43. John Rice, Bobbed Hair, Bossy Wives, and Women Preachers, p. 68.
44. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, p. 175.
45. Charles Ryrie, The Place of Women in the Church, p. 146. 重要な聖書箇所を検討する中で、彼はことごとく最も保守的な解釈を選びました。たとえば、女性が11章では預言し祈っている姿で描かれながら、14章では黙っているよう命じられているコリント人への手紙第一の研究において、彼は、沈黙が通常のあり方であり、ただ例外的な状況においては、女性が男性の前で何かを語ったり祈ったりしてもよい、と論じました。しかし彼の功績として、彼はやがて教会に受け入れられることになる新しい教えを言葉にし始めました。イエスの女性に対する態度を扱った章の中で、彼は、イエスの目には女性が霊的にも知的にも有能であり、仕えることもできる存在だったと指摘しました。男女が霊的特権においても結婚においても「平等」であることを認めた最初の神学者の一人でしたが、彼はすぐに、男女はそれぞれ異なる領域に関わるべきだという但し書きを付けました。

にさらされているという誤った認識によって勢いづいていました。後のフェミニズムの教えは、キリスト教の家族に対する真の脅威だったかもしれません。しかし実際には、初期の形の女性解放運動は、ある社会宗教的な現象への脅威にすぎませんでした。それは、産業革命のために、男性は一日中家の外で働き、妻は家にいて家事と子どもの世話をすることが当然とされる、という現象です。当時のキリスト者たちが忘れていたらしいのは、それ以前のキリスト教文化では、たいてい父親も家にいたということです。家庭そのものが一つの経済単位であり、家族全体が労働力となって、家畜や畑の世話をし、糸紡ぎ、機織り、木工といった小規模な手工業を営んでいたのです。

また、社会が支持していた新しい「平等主義的」な結婚——今では西洋において、補完主義を公言するキリスト者たちでさえ普通に実践しているもの——は、当時、「キリスト教的」結婚の転覆のように見えました。人々は、結婚に関する聖書の主要な教えは権威と服従だと信じていたからです。

一つの合意、そして分かれ道

補完主義の学者ダニエル・ドリアーニ（Daniel Doriani）によれば、1960年代まで、神学者たちは女性の「存在論的な劣等性」を前提としていました。[46]この時代まで、神学者も聖職者もほかの誰もが、一般に女性を「劣った者」、男性を「優れた者」と見ていました。そして、聖書もそう言っていると主張したのです。

ところがそこへ、新しい問いが教会に突きつけられました。「女性と男性の完全な平等を主張してきた社会運動、すなわち社会におけるこの前例のない女性の台頭について、神は何と言っておられるのか？」しばらくの間、教会は歴史的な教理の周りに円陣を組んで守りを固めました。しかし、男女平等の問題で当初は文化と衝突したにもかかわらず、1960年代から1990年代にかけて、教会の多くに、ある素晴らしい気づきが訪れました。「待てよ、私たちは間違っていた……女性は男性と平等なのだ。」

これは今なお、キリスト教神学の歴史において最も劇的な転換の一つです。教会は何世紀もの間、家父長的で女性蔑視的な文化をなぞり、そうした態度や考えを聖書本文に読み込んできました。しかし今や、大きな文化的転換と、その中にいた先駆的で粘り強いキリスト者たちのおかげで、教会は聖書本文に立ち返り、実は聖書の中に、女性の本質的な平等を肯定するものがこれほど多くあることを見いだしたのです。

46. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, p. 176.

先に引用したように、ティム・ケラーはこう言います。「多くの場合……新しい文化との相互作用は、聖書が教えている多くのことを私たちに示してくれる。それは、私たちがまったく見落としていたり、重要でないと思っていたりしたことであり、時には、自分たちの文化的前提というレンズを通して聖書を読み誤っていた点でさえある。」[47]こうして、もっと注意深く読んでみると、結局のところ聖書は、女性のほうが理性に乏しいとも、罪に陥りやすいとも、指導する能力がないとも、家庭の外で働くことができないとも教えていなかったのです。女性の平等の種は聖書の中にあり、教会の歴史の中ではほんの一時的に顔を出しただけでしたが、教会がついに、公式に、そして広く誇りをもってこの平等を教会の教理として受け入れ始めたのは、ごく最近のことにすぎないのです。これを出発点とした人は誰でも、女性に関するキリスト教神学のまったく新しい日の一部となりました。それは、何千年にもわたる教会の神学からの決別でした。

教会が始まってから何千年もたってから、聖書が教えていることについて新たな明確さに達したと読んで驚いておられるなら、安心してください。これは昔からずっとそうだったのです。文化が世界は平らだと信じていたとき、神学者たちは聖書からそう教えました。太陽が地球の周りを回っていると人々が考えていたとき、聖書の本文はまさにそれを証明していました。科学者たちが地球の年代を測定できるようになるまで、人々は、神がほんの数千年前に文字どおり7日間で地球を創造したと信じていました。同様に、社会が奴隷制を廃止し、反ユダヤ主義を克服したことにも、教会が聖書本文を新しい（そしてより良い）仕方で読むことが伴っていました。文化における新しい発見は、聖書に実際に何が書かれているか（そして何が書かれていないか）に新しい光を当てることがあります。女性が本質的に男性と平等であるという、広い社会における発見についても同じことが言えます。なんと、聖書は創造においてもキリストにおいても、両性の実質的な平等について確かに語っていたのです！　それは最初からずっとそこにあったのです。

カトリック教会も、当初は女性の平等に反対して結束していましたが、その神学を改めました。1987年、教皇ヨハネ・パウロ二世（John Paul II）は、当時の主要なカトリック神学者たちの考えを代弁して、教会に対して拘束力のある教えを発布し[48]、何世紀にもわたって保持されてきた見解――神は創造において女性を男性に従属させたという見解――を退け、代わりに女性の「本質的な平等」を主張しました。

47. Timothy Keller, Center Church, ch. 8.
48. John Paul II, Mulieris Dignitatem: On the Dignity and Vocation of Women.

では、福音派の諸教会はどうだったでしょうか？　カトリックの例と並行するように、少数の勇気ある人々が大胆に女性解放を支持し、教会、家庭、社会における男女の完全な平等と相互性こそ、聖書が常に思い描いてきたものだと主張しました。しかし――そしてこれこそ、この本が書かれなければならない理由なのですが――彼らは、ほかの福音派の人々から反対されました。その人々は、女性の劣等性に関する教会の歴史的な教えを同じく退けながらも、それでもなお何らかの形で女性の従属を保持しようとしたのです。

その後に続いたのは、この二つのグループ、すなわち階層主義者と男女相互主義者の間の、数十年にわたる論争でした。両者はどちらも同じように聖書に献身しており、そのことは、双方の男性著者と女性著者が互いに応答して書いた、おびただしい数の本に表れています。女性の劣等性という考えを教理から捨てることでは一致したものの、この二つのグループは二つの異なる道を歩みました。そのため今日では、ある教派は一方の見解を支持し、別の教派はもう一方の見解を採用しています。ここが肝心な点です。どちらの見解も、教会の歴史においてまったく新しいものだったのです。家父長主義者たちは、「女性は劣っており、それゆえ男性に従属する」という以前の教理を、「女性は平等だが、それでもなお男性に従属する」に取り替えました。一方、相互主義者たちは、「女性は平等であり、それゆえ男性に従属しない」を選んだのです。

議論は、時に白熱し、時に和やかに、1987年まで続きました。ところがその年、アメリカで、私が思うに不当にも議論を早々に終わらせてしまう出来事が起こりました。「補完主義」と呼ばれる新しい教えを掲げたダンバーズ声明（Danvers Statement）がまとめられたのです。この教えはあまりにも広く受け入れられたため、多くの福音派の人々から、論争の勝者だと主張されるようになりました。もちろん、この見解が勝利したのは、それが正しいからなのかもしれません。しかし、教会の歴史について何か知っているとすれば、ほかの理由で勝つこともありうるということです。補完主義の「勝利」について、私の理解をお話しさせてください。



3

補完主義の台頭（とその落とし穴）

「私たちは、〔男性の権威と女性の服従〕を否定したり軽視したりすることが、私たちの家庭、教会、そして文化全体において、ますます破壊的な結果をもたらすと確信している。」ジョン・パイパー[49]

パン生地をこね、形を整えてから、端の部分を切り落として捨て、残った生地をオーブンに入れていた母親の話を聞いたことがあるでしょうか？　子どもたちがわけを尋ねると、彼女は、自分の母親がそうしていたし、その母親の母親もそうしていたのだと説明しました。「パンはそうやって焼くものなの。うちの伝統よ。」母親の答えに納得しきれなかった子どもたちは、今度は祖母に理由を問いただしました。祖母は記憶をたどり、自分の祖母が小さなパン型を使ってパンを焼いていたことを思い出しました。あまりに小さいので、生地を中に収めるには端を切り落とさなければならなかったのです。子どもたちは母親のところへ走って戻りました。「ママ、もうあの小さなパン型は使っていないんだから、端を切り落とさなくていいんだよ！」[50]

この小さな話は、補完主義と男女相互主義の違いを思い起こさせます。前者は「教会史からの議論」を固守し、女性の従属は神の良い設計だと主張します。何と言っても「教会は常にそう教え、そうしてきた」からです。後者は、女性を従属させることには、本質的に理にかなったことも良いことも何もないと答えます。教会がこの教理を受け入れた歴史的理由は、もはや当てはまらないからです。女性の劣等性が社会でも教会でも前提とされ、疑われなかった何千年もの間なら、女性の従属は理にかなっていたかもしれません。しかし、私たちが今生きている世界において、

49. The Danvers Statement, www.bit.ly/2Y6Xhgg
50. この魅力的なたとえ話は、William Witt, “Icons of Christ,” ch. 3に負っています。

そしてもはや女性の劣等性という考えを持たない教会において、それはまったく理にかないません。

それでも、補完主義を擁護する教会を見てきて、私は、どれほど多くの教会がこの「教会史」という考えに訴えるかに気づきました。これは教会の歴史的な教えなのだから、そこから離れるのは危険であり、分裂を招くに違いない、と彼らは主張します。しかし、ほとんどの人が理解していないのは、1960年代まで、教会の歴史的な教えは、女性は男性より劣っているがゆえに男性に従属する、というものだったということです。

その後の女性解放運動の成功は、教会がその歴史上初めて自らの聖書に立ち返り、女性の劣等性という考えを問い直す助けとなった、大きな触媒でした。そうする中で、教会は正しくも考えを改めました。その時点で、教会はパン型を捨てたのです！　それ以来、ほとんどの教会は今や、ジェンダーと指導についての教理を、同じ出発点となる前提で焼き上げています。それは、女性は男性と平等であって劣ってはいない、という前提です。そうすることで、これらの教会はこの問題について、まったく新しい教え――せいぜい50年か60年の歴史しかない教え――を受け入れたのです。

その後、今日もなお存命の者が多い神学者たちが、二つの競合する修正主義的な教理を生み出しました。どちらも今では、男女の本来的な平等を前提としています。第一のものは、後に補完主義と呼ばれることになるもので、家父長制の修正版です。それは女性の従属を保持することを選びながら、そうする本当の歴史的理由のほうは退けています。その代わりに、その創始者たちは自らの見解を支持する新しい論拠を聖書から見いだしました。第二の立場は、一般に平等主義として知られていますが、私は相互主義と呼ぶほうを好みます。こちらは性別による階層をすっかり捨て去りました。女性の劣等性という考えが今や広く退けられている以上、女性の従属という考えにも、もはや信頼できる根拠はないと彼らは論じたのです。

さまざまな見解を図で示すと、次のようになります。

	女性の劣等性？	女性の従属？
歴史的な階層主義 （100年–1960年代）	はい	はい、女性は劣っているから
補完主義 （1960年代以降）	いいえ	はい、新しい理由で
相互主義 （1960年代以降）	いいえ	いいえ

この章では、1970年代に作り出され、1980年代のアメリカで補完主義としてパッケージ化され、世界中の非常に多くの教会や教派を支配するようになった、この修正版の性別による階層の台頭（とその落とし穴）を探っていきます。

アフリカの南端に住む者として証言できますが、アメリカがくしゃみをすると、私たちほかの者が風邪をひきます。これはアメリカの政治や経済について言えることですが、その教理についても言えることです。そこにいるキリスト者の数の多さ、彼らが自由に使える資源、そしてメディアやオンラインでの優位性のために、アメリカ生まれの神学は、たちまち世界のほかの地域に浸透します。聖書の権威への献身があるので、たいていはこれは良いことですが、時折、もっと危うい何かが輸出されることがあります。その繁栄の神学を考えてみてください。私の住む大陸では、多くの教会が、富と健康は信仰によって、そして「神の人」に「金銭の種」をまくことによって要求できると信じています。その結果、アフリカで最も貧しい地域社会のいくつかで、非常に裕福な牧師たちが教会を率いています。同じように、アメリカは補完主義の神学も実質的に輸出してきました。繁栄の神学は、「教会成長」を追い求める聖書教師たちが、キリスト教と物質主義を結びつけようとしたところから生まれました。補完主義者もまた、「教会の純潔」を追い求める聖書教師たちが、キリスト教と温情的な家父長制を結びつけようとしたところから生まれました。前者は聖書によって反駁するのが比較的たやすいのですが、後者は聖書的論拠の精巧な網によって支えられています。この本がこれほど長いのはそのためです。

二つの神学に共通しているのは、どちらも比較的新しい教理だということです。補完主義は、前世紀の終わりに、ジョン・パイパー、ウェイン・グルーデムらによってアメリカで始められた社会宗教的な運動で、選び出した聖句をある特定の仕方でつなぎ合わせることを支持しています。それは女性の劣等性という歴史的な教えを退けながらも、とりわけ家庭と教会において、男性のかしら性と女性の服従を保持する新しい理由を見いだしています。その言葉の職人たちは、性別による階層を本質的に作り直しましたが、そのやり方があまりにも巧みなので、自分たちの信じていることが事実上それに等しいのだと気づいている補完主義者はほとんどいません。とはいえ公平を期して言えば、補完主義を現代人の耳に受け入れやすく響かせることに、その支持者全員が同じように熱心なわけではありません。たとえば、南部バプテスト連盟（Southern Baptist Convention）の倫理・信教の自由委員会の元委員長ラッセル・ムーア（Russell Moore）は、補完主義よりも家父長制という言葉のほうを好んでいます。[51]

補完主義の生みの親たち

どの教理もそうであるように、この家父長制の修正版にも、特定の創始者たちがいます。もともと、ある聖句をつなぎ合わせる補完主義独特の方法を考え出したのは、ジョージ・ナイト三世（George Knight III）で、1977年の小著The New Testament Teaching on the Role Relationship of Men and Womenにおいてでした。その中で彼は、女性の劣等性という教会の歴史的な見解を捨て、「人格は平等、役割は異なる」という言い回しを選びました。

ナイトによれば、神は創造において、それぞれの性に、異なった、永久に拘束力をもつ「役割」を割り当てました。彼は、ガラテヤ人への手紙3章28節がキリストにある両性の平等について語っていることを認めましたが、それは社会や教会における性別による階層に対して、社会的な意味を何ももたないと主張しました。この問題についての、イエスに関する教えにもイエスご自身の教えにも、一切触れませんでした。従属は堕落以前から存在していたと論じた上で、彼は、三つの箇所（テモテへの手紙第一2章11–14節、コリント人への手紙第一11章3節、コリント人への手紙第一14章33–35節）が、彼の言う「創造の秩序」を教会においてパウロが是認していることを示していると論じました。

彼は、コリント人への手紙第一11章3節でパウロが「女のかしらは男」と述べていることは男性の「上位の階級」を指しており、テモテへの手紙第一2章12節のauthenteinという語（彼によれば「権威を行使する」と訳すべき語）は、男性牧師が行使する権威を指す肯定的な語だと論じました。彼はまた、何世紀にもわたって女性の道徳的・知的劣等性の証拠として読まれてきた「アダムはだまされなかったが、女はだまされて」（14節）という節について、独創的な再解釈を示しました。彼によれば、エバは「役割の逆転」という行為によって、アダムの権威を無視して素通りし、悲惨な結果を招いたのです。彼はこれらすべてを「聖書の明確な教え」と呼びました。

ナイトの見解はほかの神学者たちから異論を唱えられ、少数の教派が女性指導者の按手を始める一方で、大半の教派はこの問題について議論を続け、論争は激しく続きました。

1980年代後半、ナイトは、教会界と神学界の二人の新星、ジョン・パイパーとウェイン・グルーデムに、論争に加わって、教会に広がりつつあったこのいわゆる「偽りの教え」に対処するよう強く促しました。1987年、二度の会合にわたって、彼らはほかの牧師たちから成る小さなグループを招集しました。グループはまずダラスで、次にダンバーズで集まり、この問題を話し合い、性別役割についての教理声明を承認しました。彼らはそれをダンバーズ声明と呼びました。彼らはまた、聖書的男性性・女性性評議会（Council of Biblical Manhood and Womanhood）という組織を結成しました。1年後、朝食の席で、評議会はダンバーズ声明で表明された見解の名称を決め、家父長制や階層という用語は使わず、代わりに補完主義という用語を選びました。それが「平等と、互いに益となる違い」を強調するものだったからです。[52]

1989年、彼らは記者会見を開き、パンフレットを配布し、Christianity Today誌にダンバーズ声明を掲載することによって、その取り組みを始めました。すべては、それが「広く賛同を得る」ことを願ってのことでした。その見解をさらに広めるために、評議会は「書籍、論文、小冊子を出版し、学者向けのセミナーや一般信徒向けの大規模なカンファレンスを開く」ことを決めました。[53]その努力から生まれた最初の主要な著作は、ジョン・パイパーとウェイン・グルーデムが編集した1991年の論文集Recovering Biblical Manhood and Womanhoodでした。[54]

彼らの見解は広く受け入れられ、多くの教派指導者たちが、あらゆる議論を終わらせるためにそれを用いました。千年紀の終わりに、アメリカ長老教会（Presbyterian Church of America）や、最大の教派である南部バプテスト連盟などの教派がダンバーズ声明を承認し、平等主義の結婚、女性牧師の按手、説教壇に立つ女性といった考えを二度ともてあそぶまいと決意しました。

補完主義にとって最も重要な箇所はテモテへの手紙第一2章12–15節であったため、南部バプテスト派の神学校で尊敬を集める聖書学者アンドレアス・ケステンバーガーとトマス・シュライナーは、この箇所を補完主義的でない仕方で読もうとするあらゆる試みに反論するために、学術書Women in the Churchを出版しました。補完主義を支持するほかの主要な著作には、ウェイン・グルーデムの人気のある本Evangelical Feminismがあります。その中で彼は、補完主義者でない人々が示す百

52. John Piper and Grudem, Wayne (eds), Recovering Biblical Manhood and Womanhood, p. 11.
53. パイパーとグルーデムが、1989年1月13日のChristianity Todayに掲載した広告の中で述べたとおりです。
54. Christianity Todayは、これを1992年の年間最優秀書に選びました。

を超える反論に反駁したと主張しました。アンドレアス・ケステンバーガーはまた、2014年に著書God's Design for Man and Womanを出版しました。

しかし、補完主義陣営が生み出した最も影響力のあるものは、2001年の英語標準訳（ESV）聖書、ESV Study Bible（その注はウェイン・グルーデムが編集しました）、そして、ジョン・パイパー、D・A・カーソン（D.A. Carson）、ティム・ケラーによって設立されたオンライン・コンテンツのポータルゴスペル・コアリション（The Gospel Coalition）です。超教派的なプラットフォームであるどころか、補完主義はこの団体の信仰告白に組み込まれています。この団体は、その学術誌Themeliosとともに、補完主義に異議を唱える主要な著作のほとんどすべてを、決まって批判しています。巨大出版社Crosswayもまた、これに一役買ってきました。補完主義の主要な著作は、ほとんどすべてこの出版社から出ているのです。[55]

実際、補完主義は非常に強力で効果的な運動だったので、その影響を受けたほとんどの教会にとって、この問題についてほかの見解を考慮することさえ、明らかな愚かさか異端のように思えるほどです。私自身がよく知っています。神学には通じているつもりでいた私でしたが、20年近くもの間、この立場を問いただしてみようとさえ思いませんでした。それでも、もしこれが欠陥のある立場だとしたら、なぜこれほどの隆盛を経験してきたのでしょうか？

人格は平等、「役割」は異なる

ジョージ・ナイトの巧妙な用語「人格は平等、役割は異なる」は、現代人の耳にたちまち受け入れられました。それは、「劣っているから従属する」という昔ながらの考え方よりはるかにましです。「劣っている」という言葉が「平等」に置き換えられたのは大きな改善であり、従属という考えは「異なる役割」に置き換えられています。しかし、よく調べてみると、この言い回しは一種の手品のようなものであることがわかります。というのも、たいていの場合、それを広める人々は、その異なる役割が何であるかを説明する必要さえないからです。「人格は平等、役割は異なる」という言葉を口にするだけで、この考えを初めて聞く人のほとんどは満足してしまいます。とりわけ、結局のところ男性と女性は神によって異なって造られているのだから、という但し書きを付け加えればなおさらです。

55. 神学的著作の詳細な年代順の歴史と概観については、ジェイミン・ヒューブナー（Jamin Hübner）の優れた博士論文の第2章を参照してください：www.bit.ly/3BNaSY8

しかし問題は、補完主義の缶の表に書いてあるものが、缶の中に入っていないということです！ 「役割」という考えは、1960年代に、女性に期待される活動領域が急速に変わり始めたころにようやく広まった、近代の社会学的な構成概念です。この用語は分業を指しています。ある人はある事柄を受け持ち、別の人は別の事柄を受け持つ、ということです。たとえば、家事の日に私が子どもたちに、それぞれに異なる役割を割り当てると言えば、子どもたちは皆、私がそれぞれに異なる責任を与えるのだと思うでしょう。

ところが補完主義において、（あまり多くの人が尋ねないようですが）「異なる役割とは具体的に何なのですか？」と尋ねるなら、その答えは（本質まで切り詰めれば）、家庭でも教会でも男性が指導し、そのどちらでも女性は従って手助けをする、というものになるでしょう。しかし、いいですか、これは役割の割り当てではありません。単なる指揮命令系統です。助手を連れて歩き回る部族の長は、「美しい相互依存」の中にいるのではありません。二人から成る階層の中にいるのです。

「役割」という考えには、入れ替え可能性という考えが伴います。ある子がプールを掃除し、別の子が居間を掃除しても、翌週にはその役割が入れ替わるかもしれません。それに対して、補完主義の「役割」は、性別に基づく、永続的で変えることのできない力関係です。補完主義では、女性は単に女性であるという理由で教会のある役割から締め出されますが、男性は単に男性であるという理由でどの役割からも締め出されることはありません。この取り決めには、補い合うものなど何もありません。

役割という考えは平等と両立しますが、生まれた時に割り当てられる永続的な力関係という考えは、不平等の表明です。補完主義者にとっての課題は常に、二人の人が、染色体だけに基づいて、指導するか従うかのどちらかに変えようもなく定められていながら、どうして真に平等でありうるのかを示すことでした。補完主義の擁護者たちは、三位一体における関係との類比を引き合いに出して答えます（これについては後で詳しく取り上げます）。彼らはまた、軍隊の将校と兵卒、経営者と労働者、大統領と市民、牧師と会衆の一員といった類比を慎重に選びます。これらはどれも本来的な優越を意味するものではない、と彼らは主張し、それは正しいのです。しかし、これらは公正な、あるいはふさわしい類比ではありません[56]——どの場合にも役割は変わりうるものであり、権威をもつ側は、特別な能力や経験に基づいてその権威を持っているのです。彼らの指導的立場は、生まれた時にその体に基

56. 以下の反論は、Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, ch. 3に負っています。

づいて割り当てられるものではありません。たとえば牧師は、その特別な品性、召命、訓練、賜物のゆえに指導するのかもしれません。しかし、その牧師がいつか退任し、会衆の一員が牧師になることもありうるのです。

権威や従属が人の染色体や体の中に組み込まれていることを示す、望ましい類比を、私は一つも見つけたことがありません。最も近い類比は、生まれた階級や家系によって人の力の地位が決まるヒンドゥー教のカースト制度か、肌の色によって政治的権利が決まったアパルトヘイトです。生まれた時に役割と地位を割り当てるこの二つの制度はどちらも――補完主義者なら誰でもきっと同意するでしょうが――不平等の実例です。では、補完主義はカースト制度やアパルトヘイトと、いったいどう違うのでしょうか？

妥協と屈服

補完主義者たちはしばしば、相互主義者は聖書について妥協していると論じてきました。彼らが気づいていない、あるいは認めていないのは、彼らは聖書の神的権威を正しく支持してはいるものの、自分たちの聖書解釈を聖書そのものと一緒くたにしているということです。神のことばは確かに真理です。しかし私たちには、それについての自分の解釈が常に正しいとは限らないと認める謙遜が必要です。神のことばはまことに誤りがありません。しかし私たちはそうではないのです。

ある動画[57]の中で、パイパー、グルーデム、ケラーは、なぜ補完主義が自分たちの組織の教理声明の一部になっているのかを説明していますが、そこでパイパーは、聖書を扱う際に「かしら性と服従を回避すること……は、福音にとって不吉である」と警告しています。カーソンも口をはさみます。「聖書が曖昧さなく、繰り返し、明確に言っていることを避けて通ることは……神が言われることに耳を傾けることではない。それは神のことばにおののかない一つのあり方である。」ケラーは、言葉遣いはより穏やかですが、それでも同じことを繰り返しています。平等主義は「私たちの聖書の読み方に影響を与える。私たちの聖書理解を緩めてしまう」というのです。

福音派の相互主義者にとって、この主張はばかげています。神のことばを正しく釈義することを召命とし、来る年も来る年もそれに生涯をささげてきた何百人もの聖書学者たちが聖書を軽んじていると言うのは、まったく不当です。世界で最も優れ

57. www.vimeo.com/44525286

た保守的な聖書学者の多く――かつては補完主義者で、今はもうそうではない人々――が新しい結論に至ったのは、神のことばをないがしろにしたからではなく、むしろもっと注意深く研究したからなのです。F・F・ブルース（F.F. Bruce）、レオン・モリス（Leon Morris）、N・T・ライト（N.T. Wright）、ゴードン・フィー（Gordon Fee）、リチャード・ボウカム（Richard Bauckham）、フィリップ・ペイン（Philip Payne）、ウォルター・カイザー（Walter Kaiser）、ベン・ウィザリントン（Ben Witherington）、スタンリー・ガンドリー（Stanley Gundry）、ケネス・ベイリー（Kenneth Bailey）、アイダ・スペンサー（Aida Spencer）、ウォルター・リーフェルド（Walter Liefeld）、ジョエル・グリーン（Joel Green）、シンシア・ウェストフォール、ミリアム・アドニー（Miriam Adney）、コーネリアス・プランティンガ（Cornelius Plantinga）、ジョン・スタックハウス（John Stackhouse）、マイケル・バード、そしてもっと多くの人々がいます。[58]実際、近年、少なくとも7人もの相互主義者が福音主義神学会（Evangelical Theological Society）の会長に選ばれています。この学会は、聖書の無誤性を信じるという宣言に毎年署名しなければ入会できない学会です。[59]私が言いたいのは単に、補完主義者の多くの主張に反して、この論争は聖書の解釈をめぐるものであって、聖書の権威をめぐるものではない、ということです。[60]

補完主義者たちは、相互主義者を文化に屈服する者として描きがちでした。フェミニズムの社会運動をキリスト教的家族への脅威として非難してきた補完主義の神学者たちは、ほかの神学者たちをフェミニズムと結託しているとして、決まって非難します。教会における女性従属の体制の終わりを提唱した人々に対する、J・I・パッカー（J.I. Packer）の反応はこうです。「女性を〔牧師〕にしようとする今日の圧力は、聖書の権威への何らかの配慮よりも、世俗的、実利的、社会的な要因に負うところが大きい。将来の世代はおそらく、彼らの扇動を、自由主義的な教会がこれまで常にしようとしてきたように、世俗文化にキリストへの洗礼を施そうとするもう一つの試みと見なすだろう。」[61]

58. この一覧は、Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, ch. 2に負っています。
59. 福音主義神学会の少なくとも7人もの会長――ロジャー・ニコル（Roger Nicole）、ケネス・カンツァー（Kenneth Kantzer）、ウォルター・カイザー、スタンリー・ガンドリー、アラン・F・ジョンソン（Alan F. Johnson）、ミラード・エリクソン（Millard Erickson）、クレイグ・キーナー――が、皆、相互主義者です。
60. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, ch. 9.
61. J. I. Packer, "Let's Stop Making Women Presbyters," Christianity Today, 11 February 1991

これらは強烈で誤解を招く言葉ですが、「妥協者たち」にうんざりしている人々の心には響きます。アンドレアス・ケステンバーガーは、非聖書的な教えに直面する今日の英雄として補完主義者たちをたたえ、その教えは「必然的に教会の有効性を損ない、この世界における神の宣教の前進を徐々にむしばむ。補完主義、すなわち真の聖書的教えは、文化的に受け入れられないとまでは言わないにしても、深く反文化的である。もし私たちがこの創造の現実を否定するなら、必然的に、神のことばと、それを私たちに与えてくださった方の権威を損なうことに加担することになる」と警告しています。[62]

文化への屈服についての彼の懸念には、私たち皆が耳を傾けるべきですが、ケステンバーガーは自分の言葉を自分の見解に当てはめてみるとよいでしょう。ところが彼は、補完主義が比較的新しい神学的見解であり、女性の劣等性を退ける文化に同意したことから直接生まれたものだという事実に、まったく気づいていないようです。さらに彼は、補完主義それ自体が、真に非聖書的な文化への屈服であるかもしれないという可能性にも無頓着なようです。その文化とは、1950年代の戦後アメリカの性別の固定観念を賛美する、極端に保守的で家父長的な文化であり、そこでは女性は最良の場合でも、服従的な家庭の女王として、働く夫を支えながら子どもを育てる存在でした。要するに、補完主義者たちは、自分たちに神学的に異議を唱える人々を、聖書について妥協し、文化に屈服していると不当に非難しているのです。残念ながら、彼らの誤った描き方はそれだけでは終わりません。

「美しい」区別

約10年の間、年に何回か、私は教会の会員講座に集まった何百人もの人々に、なぜ私たちが神学的に補完主義なのかを説明していました。私はこう説明しました。

結婚には四つのあり方があります。男性優越主義の結婚では、男性が支配し、妻は卑屈に従います。極端なフェミニズムの結婚では、妻が支配し、受け身の夫は妻のあらゆる命令に聞き従います。どちらの選択肢も本当の平等を表してはいません。平等主義の結婚では、二人は平等ですが、男性と女性の間に違いはありません。しかし補完主義の結婚では、二人は平等であり、しかも神が定められた違いが喜び祝われ、尊ばれます。

62. www.bit.ly/3bAU0ZG

聴衆のほとんど誰もが、私と同じように、この立場を受け入れたものです。しかし、自分の信念と立場についてもっと注意深く考え始めると、私は、平等主義の立場を誤って描くことによって人々を説得していたことに気づきました。それは公正な戦いではありませんでした。実際には、平等主義（あるいは相互主義）は、男性と女性がそれぞれ異なって、そして互いに補い合うように造られているという点で、補完主義に心から同意しているのです。男性と女性が、神の設計によって、あるいは平均として、体や心理的特徴において同じだと示唆する相互主義の神学者に、私はまだ会ったことがありません。それなのに、多くの主要な補完主義者たちは、神学上の論敵をこのように誤って描き続けています。補完主義についての著書の中で、ケステンバーガー夫妻は、相互主義者が「区別のない平等」という考えを持っていると論じています。[63]実際には、相互主義者は、男性と女性のセクシュアリティを流動的なものとも、入れ替え可能なものとも見なしていません。たとえば、男性だけが父、息子、兄弟になることができ、女性だけが母、娘、姉妹になることができる、という理解に異議を唱えたりはしないのです。

ブランディングの観点から言えば、ナイトの天才が「人格は平等、役割は異なる」という用語を作り出したことにあったとすれば、パイパーの天才は、この見解に「補完主義」という名前を思いついたことにありました。その名は、彼自身の言葉によれば、「神がアダムにふさわしい助け手としてエバを与えられた創世記2章18節における相補性」に由来しています。しかし、補完主義と男女相互主義の本当の違いを研究してきた今、私は、前者のより公正な定義は「階層を伴う相補性」であり、後者は「階層を伴わない相補性」だと考えます。[64]もし新会員講座で人々にそのように説明していたなら、私たちの教会に加わる前に立ち止まって考えた人はもっと多かっただろうと思います。

相互主義者と補完主義者の対話において、私たちの違いについて話すより良い方法は、まず、神が男性と女性を目的をもって、平等に、そして互いに補い合うように造られたことに同意することだと提案します。これによって、驚くほど多くの共通の土台が得られます。本当の不一致は、男性と女性の間にある、神が意図されたこの違いとは厳密に何なのか、そしてそれがどのような帰結をもたらすのかを定義す

63. アンドレアス・ケステンバーガーとマーガレット・ケステンバーガー（Andreas and Margaret Köstenberger）が、“God's Design for Man and Woman”の中でこう述べています。
64. Groothuis、Pierce、Feeが編集した2005年版の“Discovering Biblical Equality”は、「complementarity without hierarchy」（階層を伴わない相補性）をその副題として用いていました。2021年版がこの言い回しを手放してしまったのを見るのは残念です。どうやら、補完主義が、誤解を招く仕方ではありながら非常に効果的に、相補性を平等主義とは相いれないものとして描き出してきたためのようです。

るところにあります。私たちの違いは、男性が常に権威をもつという、まったく別々の領域を必要とするほど本当に大きいのでしょうか？　それとも、相補性を、家庭でも社会でも教会でも、肩を並べて共に働くようにとの召しとして見ることができるのでしょうか？

教会の働きにおいて、補完主義の相補性についての教えは、異なる役割が異なる性別に割り当てられていることを示唆します。しかし、補完主義の教会で実際に起きているのはそういうことではありません。そこでは女性はある種の奉仕から締め出されているのに、男性はどの奉仕からも締め出されていないのです！どの男性も潜在的にはどの女性の奉仕でもすることができますが、その逆はありません。それは相補性ではありません――排除です。

社会の衰退

補完主義者たちは、相互主義者を妥協者、屈服者、性別の違いを消し去る者として誤って描くだけでなく、文化そのものの衰退についても、その責任の一端を彼らに負わせています。

競合する見解を社会の衰退のせいにするのが標準的な政治戦略だとすれば、パイパーとグルーデムはこの手法を非常に効果的に用いています。たとえば、ケラーとカーソンが隣でうなずく中、パイパーは、ゴスペル・コアリション（The Gospel Coalition）がなぜ平等主義を退けるのかを説明し、男性を家庭と社会における仕えるリーダーにしないことを、「残忍な男性的社会」、「受動性」、「男らしさについての混乱」、「怒りの瞬間に激高する男たち」、「同性愛のことすべて」、「女性への虐待」、「子どもの放置」と結びつけています。[65]もちろん、これらのほとんどは決して神の理想ではありません。しかし、男性には仕えるリーダーになるように、女性には男性の指導を受け入れるように言うことが、社会のあらゆる苦悩の解決策だと、パイパーは本当に証明できるのでしょうか？

同様にグルーデムは、教会が家庭、教会、社会において男女の真の平等と、彼の言う「違いの廃止」を許すなら、どんな大惨事が起こるかを嘆いています。[66]結婚においては、それは「夫を弱虫に、妻を簒奪者に」変えてしまう、と彼は言います。子育てにおいては、「子どもたちはしつけがあまりにも少なく、権威への敬意があ

65. https://vimeo.com/44525286
66. この引用と、この段落でそれに続く引用は、Wayne Grudem, Evangelical Feminism, ch. 1からのものです。

まりにも乏しいまま育てられる」ことになるといいます。家族においては、「すべての責任が、聖書が定めた役割ではなく、賜物と関心に従って分けられる」ようになります。人間のセクシュアリティの領域では、男性は「男らしくなくなり、女性にとって魅力がなくなり」、女性は「女らしくなくなり、男性にとって魅力がなくなり」、両者とも「性に対して煮え切らなくなる」というのです。スポーツにおいては、人々は「競争に反対し、それを善ではなく悪と考える」ようになります。経済においては、「誰も非常に裕福になることは許されず、福祉国家と政府への大規模な依存が生じる」とされます。教育においては、彼らは「男の子がある種の活動を好み、女の子が別の種の活動を好むという、生来の好みや適性のパターンをことごとく強制的に根絶する」ことになるというのです。

私はこれをでっち上げているのではありません。これらは、補完主義を擁護する彼の最も人気のある著作の中の、グルーデム自身の言葉です。現代社会が非常に現実的な課題に直面していることは確かですが、それらをすべて相手の見解のせいにするのは、不誠実で不正直なことです。ダンバーズ声明が政治的な文書であることを示す最も強力な証拠は、おそらくその最後の一文でしょう。「私たちは、これらの原則を否定したり軽視したりすることが、私たちの家庭、教会、そして文化全体において、ますます破壊的な結果をもたらすと確信している。」[67]

社会宗教の分析者クリスティン・デュ・メズ（Kristin Du Mez）は、Jesus and John Wayneの中で、フェミニズム、世俗主義、ポストモダニズムの台頭、意味とアイデンティティの喪失、そして性革命の成功によって特徴づけられた世紀の終わりに、こうした主張がなぜ福音派のアメリカでそれほど浸透したのかを語っています。「こうした恐れは、自分たち自身の権力を固めるために恐れをあおることに直接の利害をもっていた福音派の指導者たちによって、積極的にあおられたのです。私たちはそのことを、保守的福音主義の歴史の中に見ます。」[68]

思慮深く献身的な多くのキリスト者が、疑問をもたずに補完主義を支持している理由が、もう一つあります。それはすべて、見事ではあるけれども、結局は誤解を招く一つの類比のおかげなのです。

67. www.bit.ly/3CFM0CC
68. “The Rise and Fall of Mars Hill”ポッドキャストの第5回（13分の所）からです。こちらで聞くことができます：www.bit.ly/3CEBjAm

三位一体における従属

何年も前、私の妻は、家庭と教会における男性の指導を受け入れることに苦しんでいるかもしれない仲間の牧師の妻たちのために、何かを書くよう依頼されました。すでに述べたように、補完主義の基本的な考えは理解しにくいものです。人がどうして平等であり、同時に従属していられるのか、ということです。妻は、私たちのいわゆる異なる役割の背後にある理由を理解しようと苦しんでいましたが、キャシー・ケラー（Kathy Keller）の見事な類比を読んで、それを自分の文書の頂点として取り入れました。ケラーによれば、家庭と教会の両方で夫に従うことを選ぶ牧師の妻は、イエスが御父に従属したことに照らして描き出されます。

自ら従う僕として、私たちの救いを確保するために僕の役割を引き受けたイエス（ピリピ2:5–11）は、御父に従うことが賜物であって、強いられたものではなかったことを示している。御父との平等が問題にされることは、一度もない……御子が御父と〔本質的に〕平等でありながら、救いのために僕の役割を引き受けて〔機能的に〕従っておられることは、私たちを三位一体の奥義の核心へと導く。同じ真理、同じ役割を演じる人間の演じ手なしに、ほかにどうやってこれを伝え始めることができるだろうか？[69]

ケラーは、イエスは御父と平等でありながら、御父に従属していると論じます。これを読んで、私の妻と多くの仲間の牧師の妻たちは、心の中でこの問題に決着がついたことを喜びました。自分と「平等」な人に従うという神から与えられた役割を引き受けることによって、自分たちは三位一体の美しく神秘的ないのちを世に示しているのだ、と彼女たちは心に決めたのです。

しかし、この類比には致命的な欠陥があります。聖書はどこにおいても、人間（牧師であれ、王であれ、配偶者であれ、親であれ）に対する私たちの服従を、イエスの御父に対する服従に倣って形づくるようにとは教えていません。ケラーが言及するピリピ人への手紙2章の箇所では、キリストは神と等しい方でありながら、十字架で死ぬ僕となられます。その箇所が主に描いているのは、イエスの謙遜と他者へ

69. Kathy Keller, Jesus, Justice, and Gender Roles, ch. 2.

の奉仕であり、それはすべての人がすべての人と関わる中で倣うことのできるものです。[70]

三位一体は「人間の演じ手が同じ役割を演じる」のでなければ理解できない、というケラーの言葉は危険です。近年、人々が自分の理想とする社会関係を三位一体に読み込もうとする試みは数多くありますが、三位一体における関係をきちんと描き出すことのできる地上の関係は一つもありません。マイケル・バードは、あまり冗談とも言えない調子で、もしどうしても一つ見つけなければならないとすれば、それは年長の男性、年下の男性、そして宦官の三人による結婚になるだろう、と言っています。バードの要点は、夫と妻の役割を御父と御子の役割と結びつけるのは重大な誤りだということです。[71]

ナイトの傑作が平等だが異なるという用語で、パイパーのそれが補完主義者という用語だったとすれば、グルーデムの寄与は、三位一体と結婚の類比についてのこの教えでした。1994年のSystematic Theologyにおいて、三位一体は永遠にわたって、人格の真の平等と役割の違いの聖書的な実例を表しているという、ナイトの1977年の考えを初めて主流に押し上げたのは彼でした。[72]三位一体は、自分たちが男女の間に思い描いているような互いに従うことの優れた実例だと論じた人々に対抗して、グルーデムは正反対の方向に全力で進み、三位一体の中の永遠の関係の核心には、まさに異なる役割があるのだと論じました。彼は永遠の機能的従属（Eternal Functional Subordination）という用語を導入し、御子が地上への使命に乗り出すよりも永劫の昔から、すでに御父に従属していたと論じました。グルーデムにとっては、御子の御父への従属が一時的なものでないことを示すことが重要でした。彼はこう論じました。「御子は御父に『あなたが父であるというだけで主導権を握っているのは不公平です』と言うだろうか？　御子は御父に『あなたは150億年の間主導権を握ってきました。次の150億年は私の番です』と言うだろうか？　いいや！　断じてそうではない！」[73]

70. このことは、その冒頭の言葉にはっきり表れています。そこにはこうあります。「へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい……」（ピリピ2:3–5）
71. 詳しくは、この短い動画を参照してください：www.bit.ly/3waFKAs
72. 実は、ジョージ・ナイト三世が1977年の小著“The New Testament Teaching on the Role of Women”の中で、この類比を最初に考え出しました。しかし、それを発展させ、形式化された神学として広めたのはグルーデムで、彼の“Systematic Theology”においてでした。これは、聖書の教えを要約するために世界中の聖書学校で最も広く使われている教科書です。
73. Wayne Grudem, Evangelical Feminism and Biblical Truth, ch. 1.

ティム・ケラーとキャシー・ケラーは、御子の永遠の従属を信じるところまでは行かないようですが、それでも、三位一体は補完主義の結婚の模範だという考えの最も人気のある推進者となり、ベストセラーの中で次のようにまで論じました。「私たちに割り当てられた〔結婚の〕役割は三位一体の内の関係の本質に根ざしているのだから、神が結婚の中に意図しておられる〔権威と服従〕に手を加えることは、確かに私たちの特権ではない。」[74]しかし、御子の従属は永遠であるというグルーデムの上乗せの議論がなければ、ケラー夫妻の三位一体と結婚の類比は成り立ちません。御子の受肉において、三位一体の一つの位格は33年間人間となり、その期間、自発的に御父と御霊から指示を受けられます。これを彼らの永遠の平等と相互性を背景にして見るとき、私たちは受肉をそのありのままの姿で、すなわち全実在の歴史における繰り返されることのない出来事として見ます。神の永遠の存在におけるこの瞬間を、人間の結婚における性別役割の永続的で変えることのできない規範とするのは、責任ある態度でもなければ、ふさわしいことでもありません。御父が天におられる間に御子が地上におられた期間とは違って、妻と夫はどちらも同じ地面に足をつけているのです。

そのためにグルーデムは議論を補強しました。彼に続いて、補完主義の神学者のほとんどが、三位一体の中の永遠の関係を、平等および「役割」の関係として語るようになりました。ジョン・スターク（John Starke）、ブルース・ウェア（Bruce Ware）、ロドリック・ダースト（Rodrick Durst）、マルコム・ヤーネル（Malcolm Yarnell）、マイケル・オーヴィー（Michael Ovey）といったほかの補完主義の神学者たちは、平等よりも階層をその決定的な特徴として強調する三位一体のモデルを提示しました。「御父はキリストの権威であり、常にそうであった……権威と服従の秩序なしに三位一体はない」[75]と、オーウェン・ストラッカン（Owen Strachan）は2016年の著書The Grand Design: Male and Female He Made Themの中で述べています。彼はこの本を、「ウェイン・グルーデムに……神がキリストにあって描かれた壮大な設計を、私たちと非常に多くの人々に示してくれた人に」献げています。

女性の従属を支持する自分の新しい論拠に自信をもったグルーデムは、それにすべてを賭け、女性の地位と役割について「最終的に決定する上で、三位一体の正しい理解が最も決定的な要因となるかもしれない」とまで述べました。[76]しかし2016年、ほかの信頼される補完主義の神学者たちが力を合わせ、グルーデム版の三位一

74. Timothy and Kathy Keller, The Meaning of Marriage, ch. 6.
75. Owen Strachan and Gavin Peacock, The Grand Design: Male and Female He Made Them
76. Wayne Grudem, Evangelical Feminism and Biblical Truth, p. 411 fn.12.

体の深刻な落とし穴に立ち向かいました。公平を期して言えば、それを最初に批判した神学者は、2002年の著作The Trinity and Subordinationismにおける相互主義者ケビン・ジャイルズでした。[77]しかし、この教理が最終的かつ決定的に崩れたのは、2016年に一連のブログとそれに続くオンライン上の論争を通して、十分な数の補完主義の神学者たちがこの異端に異議を唱えたときになってからでした。これは、補完主義者たちが性別による階層についての自らの立場を守るために、これまで長年不当に利用してきたこの非正統的な考えからの、広範な悔い改めにつながりました。そしてそれは確かに悔い改めを必要とするものでした。グルーデムの永遠の機能的従属は、御子が永遠の本質において御父より劣るとする古代の異端アリウス主義ほど行き過ぎてはいないものの、それと似た方向に傾いているからです。[78]この異端は、三位一体の永遠の関係における本質的な一致と平等を確認した公会議において、初代教会によって初めて退けられました。リアム・ゴリガー（Liam Goligher）は論争の最中の投稿でこう述べています。「永遠の三位一体の内に、御

77. Kevin Giles, The Trinity and Subordinationism: The Doctrine of God and the Contemporary Gender Debate

78. 「永遠の機能的従属」は、三つの点で、「homoianism」（相似派）と呼ばれる半アリウス主義の一種に似ている。1）内在的三位一体の関係を定式化するにあたって、聖書における経綸的三位一体に過度に依拠していること、2）それが神性の内の階層によって特徴づけられる強固な従属論につながっていること、3）その結果として、御子が御父より劣った栄光と威厳をもつとしていることである。」（Michael F. Bird and Scott Harrower, ed, 2009: “Trinity without Hierarchy: Reclaiming Nicene Orthodoxy in Evangelical Theology,” ch 1.）マシュー・ティンカム（Matthew Tinkham）は、この異端を「新従属論」と呼んでいます――参照：www.bit.ly/3PXG1jT

父の実際の首位性や御子の従属があると言うことは、キリスト教の正統信仰の外に出てしまうことである。」[79]ゴスペル・コアリションでさえ、その後、三位一体についてのアウグスティヌスの教えを見直し、彼が権威と服従を三位一体の中の永遠の関係の特徴として否定していたことを示す記事を掲載しました。[80]神学界における意見の振れはあまりに急激で劇的だったので、今では保守的な補完主義の人々の間でも、結婚を含む特定の社会関係を三位一体の内的ないのちに読み込むべきではないということが、広く受け入れられています。[81]ナイトとグルーデムによって進路をそらされていた多くの福音派の学者たちは、「性別役割についての主張を補強するために、少数の神学者の一団が接ぎ木した〔三位一体についての〕補完主義の物語」を退けることを明確にし、「一つの神と三つの平等な位格を告白し、〔それら

79. 出典：www.bit.ly/3wdix0l ほかの学者たちは、グルーデムが「異なる役割」という言葉を権威と服従と混同していたことを指摘しました。しかし今回は、彼は「人格は平等、（性別）役割は異なる」という自らの教理を、三位一体に読み込んでいたのです。とはいえ、新約聖書を研究すると、イエス、聖霊、御父が「異なることをしておられる」ことがわかりますが、このことを単純に権威と服従の考えと混同すべきではありません。永遠の階層がなければ、御父、御子、御霊を区別する方法がないというグルーデムの議論は、非常に薄弱に感じられるようになりました。確かに、御父は贖いの計画において前面に立ち、イエスは救いの達成において、御霊は救いの適用において前面に立っておられます。しかし、こうした異なる「役割」は、秩序については語っても、階層については語っていません。イエスが地上におられた間、イエスは御父と御霊から指示を受けられました。イエスが天に戻られると、御霊が御父と御子によって遣わされました。しかし、この一方の他方への「服従」は、彼らのまったく比類のない宣教の協働によって必要とされたものであり、御父、御子、御霊の関係における永遠の階層のしるしではありません。御父は働きを指揮しておられますが、同時に御父は――神は一つの意志を共有する御父、御子、御霊として同時に存在しておられるので――御子と御霊のうちでご自身の働きを行っておられるのです。一つの本質をもつ神性は、一つの意志を共有しています。この事実は、永遠の意味における権威と服従についての意味ある議論を一切支えません。イエスが現在御父に従属していることを最もはっきりと否定しているのは、おそらくパウロでしょう。彼はコリント人への手紙第一15章28節でこう言っています。「御子自身も、万物をご自分に従わせた方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。」この節によれば、イエス・キリストは現在の時代においては御父に従ってはおられません。ですから、イエスが永遠に従属しているということは真実ではありえません。この将来の「従うこと」が、世の終わりに具体的にどのようなものになるのかについては、学者の間で意見が分かれています。詩篇8篇が引用されている24–27節の文脈を考えると、それは永遠の神の御子としての性質ではなく、真のアダムとしての比類のない役割におけるイエスを指していると私は考えます。神であり人である方として、すなわちご自身のうちに人間性を取り込まれた神性として、イエスはついに万物の終末論的な一致を成し遂げられます。そのとき、イエスが代表する贖われた人類は、刷新された被造世界の王と女王としての自分たちの位置に完全につき、自分たちの神にもはや反逆することなく、従うようになります。その神は三位一体の神であり、その時点で、罪にもサタンにも死にも妨げられることなく、人間のあらゆる営みにおいても、また宇宙全体においても、ご自身を素晴らしく知らせてくださるのです。

80. 参照：www.bit.ly/3x2GWX6

81. この時、御子の永遠の従属（Eternal Subordination of the Son）の教理が退けられた五つの理由についての、ワイアット・グレアム（Wyatt Graham）の要約を参照してください：www.bit.ly/3mCmusv

が〕権威の度合いによって……区別〔されることはない〕とする、使徒的かつ福音的な信仰」への誓いを新たにしました。[82]

なんと素晴らしい突破口でしょう！　実際、三位一体の関係を人間の共同体に当てはめる唯一の正当な適用は、ご自分と御父が一つであるのと同じように、ご自分に従う者たちが互いに一つになるように、とイエスが祈りの中で言及されたものです。[83]御父と御子が互いに抱く限りない喜び、互いへの尊敬、互いへの愛があふれ出るのを経験するとき、[84]私たちは、地上の共同体（そして結婚）において御父と御子の関係を表す最良の方法は、指揮命令系統によってではなく、互いの喜びと尊敬と愛の絆によってであることに気づきます。[85]

それでも、自らの誤りを公に認めた指導者たちには拍手を送りますが、すでに非常に大きな損害が生じてしまいました。多くの普通の人々が、私の知る多くの指導者を含めて、怪しげな三位一体と結婚の類比を説いた、グルーデムやケラー夫妻の2016年以前の本を通して、不当に補完主義へと説得されてしまったのです。[86]

穏健な補完主義の誘惑

ある教会は、パイパー、グルーデムらが打ち出した本来の公式の補完主義を十分に理解し、それに同意しているので、確信をもった補完主義の教会です。補完主義の立場表明文書や神学校、教派への忠誠が、彼らの確信を固めたのかもしれません。しかし、私が指導に携わっていた教会のように、ほかの教会が最初に補完主義を名乗ったのは――まあ、正直に言えば――私たちがそれを本当には十分に理解していなかったからだと思います！

私がこの本で反論しているような、グルーデムがまとめ上げた補完主義の全体を、自分なら決して受け入れはしなかっただろう、と私は思いたいのです。この問題をきちんと調べる前は、自分の教会の穏健な補完主義が、本来のものとおおむね同じだと信じていた間は、喜んで自分を補完主義者と呼んでいました。

82. Michael F. Bird and Scott Harrower, ed, 2009: “Trinity without Hierarchy: Reclaiming Nicene Orthodoxy in Evangelical Theology,” ch 1, 2.
83. ヨハネの福音書17章21–23節
84. マタイの福音書3章16–17節、ヨハネの福音書14章31節、ルカの福音書10章21節、ローマ人への手紙5章5節
85. ヨハネの福音書13章34節
86. グルーデムの“Systematic Theology”や、ケラー夫妻の本“The Meaning of Marriage”と“Jesus, Gender and Justice”などです。

しかし、いいですか、これは穏健な補完主義者を危うい立場に置きます。彼らは相互主義的な実践をしながら、神学的には補完主義だと主張しているのです。補完主義の生みの親たち――パイパー、グルーデム、シュライナー、ケステンバーガーなど――が、こうしたより穏健な表現を拒絶し続けているのも不思議ではありません。たとえばラッセル・ムーアはある記事の中で、補完主義の教会共同体における傾向を嘆いています。そうした共同体はフェミニズム的な文化のわなにかかったとされ、その結果、「ほとんどの福音派の家庭では、実際的な決定が、交渉、互いに従うこと、合意の過程を通してなされている」というのです。彼は、知り合いのある女性が「自分の牧師が男性のかしら性について教えたのを思い出せない」という教会のことを語っています。そして、「この女性化した草の根の神学が、学界や教派の指導部にまで沸き上がってきているかもしれない」と恐れています。[87]同様にケステンバーガーも、教会の指導において同じことが起こることに警告を発しています。

補完主義が文化的に不快なものではなく、むしろ時代に即したものでさえあることを示そうと熱心になるあまり、彼らは、平等主義とほとんど区別がつかなくなるほどにまで、自分たちの教えと実践を文化に譲歩させて合わせようとするかもしれない。補完主義者たちは、声高で攻撃的な、あるいはもっと不快なフェミニスト的女性型の指導という印象を避けるために、それほど戦闘的でない女性を指導的立場に置くかもしれない。[88]

こうした発言を読んで、私は今、自分がどれほどだめな補完主義者だったかに気づきます！　実際、自分が指導に携わっていた教会で、なぜあれほど長く補完主義を受け入れていたのかと自問すると、それは主に、私たちが本当に一貫性のない補完主義者だったからだと気づきます。私たちは、信じていると言っていることを実践していませんでした。女性が説教することを認めていました。単に長老を任命するだけでなく、長老夫妻について語り、厳密には夫だけが長老であるけれども、夫と妻は一体なので、神が夫を召されるとき、妻にもそれにふさわしい恵みを与えてくださるのだと説明していました。妻たちは私たちの長老会に出席し、その声は私たちの意思決定の一部において歓迎されていました。

ほかの夫婦について語ることはできませんが、私自身の結婚も、グルーデムやパイパーが望んだよりもはるかに平等主義的でした。女性執事についての私たちの神学は、さまざまな奉仕や小グループで女性が男性を指導することを、私たちが抵抗な

87. 出典：www.bit.ly/3GL5lom
88. 出典：www.bit.ly/3CIkVyG

く受け入れていたことを意味していました。女性指導者たちは、とりわけ社会正義の奉仕において大いに活躍しました。（もしあなたがたの教会が補完主義の教会で、補完主義を捨てる準備はできていないけれども、どこかおかしいかもしれないと骨身にしみて感じているなら、こうした点のいくつかで「妥協する」ことを考えてみるよう、心からお勧めします！）

それでも、自分自身の歩みを振り返ってみると、自分の建前の立場と実際の実践との間にこのような分裂を抱えて生きることは、決して理想的ではありません。もし私たちが「骨身にしみて知っている」ことが、信じていると言っていることと異なり、それがさらに私たちの実践とも異なるなら、私たちは問題を抱えています。一貫した神学と実践をもつことは、私たち自身に対する責任なのです。

次の三つのことが起こらなかったなら、私は自分の立場を見直さずにはいられないとは感じなかったでしょう。第一に、私たちの教会の牧師や説教者の多くが、ESVとESV Study Bibleを使い始めたことです。私はその翻訳の大部分が大好きですが、使徒が「brothers」（兄弟たち）にだけ語りかけていて、NIVのように「brothers and sisters」（兄弟姉妹たち）には語りかけていない新約聖書の多くの箇所のどれかを彼らが読むたびに、顔をしかめずにはいられませんでした。ESVが最初に出たとき、私はそのスタディバイブルを推薦しました。すると、その読者の多くが、スタディバイブルの注が女性の説教に猛烈に異議を唱えているのに、なぜ私たちは女性が説教することを認めているのか、と私に尋ね始めたのです！

第二に、若い長老たちとその妻たちの何人かが、神学教育の多くをパイパーの個人ウェブサイトやゴスペル・コアリションから得ていたことです。その多くは、より年長の長老たちに敬意を払おうとしつつも、今では女性が説教すべきだとは信じていないと認める勇気をもっていました。実際、私たちの10の会衆のうちの一つは、その教会で女性に説教させないことを許可されました。

第三に、そして最後に、長年の間に、私たちはある成長しつつある教会の運動に加わり、その中でますます深く関わるようになったことです。この運動は、その初期から補完主義を全面的に受け入れていました。しかし、私たちの教会とは違って、この運動のほとんどの教会は、説いていることを実際に実践していました。女性の説教者はいませんでした。長老として按手を受けたのは男性だけでした。「長老夫妻」という話はありませんでした。この運動の指導者の多くは、私たちの教会の一見平等主義的な実践について懸念を表明しました。それは無理もないことでした。私たちは補完主義を標榜していたのですから。

ある時、この運動全体の中でも最古参の牧師の妻の一人が私たちの教会を訪れ、私たちの牧師の妻たちに、自分の持ち場にとどまるよう励ましました。彼女は自分のやり方をこう説明しました。「夫は教会を導くように召されていて、私は夫に仕えるように召されているのです。」その集まりにいた妻たちの何人かは、これによって大いに励まされたに違いありませんが、多くの妻たちが動揺したままだったことも私は知っています。何十年もの間、私たちと肩を並べて立ってきた私たちの妻たちは、それまで一度も、単なる配偶者としての支えと見なされたことはありませんでした。妻たちはそれぞれ自分なりの仕方で、奉仕の生活の最前線で私たちの教会を建て上げ、強めることに、人生の最良の年月の一部をささげてきたのです。同時に私は、この運動に属する教会を去った、あるいは去ろうとしている傷ついた女性たちに出会い続けました。女性が奉仕において制限されている、あるいは男性指導者たちに声を聞いてもらえないと感じたからです。

そうしたことすべての最中に、私たちの教会は、ジェンダーと長老職についての私たちの理解の教理的基盤を見直すことを決め、私はパイパー、グルーデム、シュライナーの神学的・聖書的論拠を新たに読み始めました。

秘密の封筒を開けるよう招かれ、自分が実はこの宇宙に閉じ込められたセイタン（Thetan）であることを知るその日まで、自分の宗教を楽しんでいるサイエントロジー（Scientology）の信奉者のように、私も補完主義の内部の教えのいくつかを実際に理解するまでは、補完主義が好きでした。補完主義が世界中の教会に広まることにどれほど成功してきたとしても、よく調べてみると、それは神の啓示というよりも、もう一つの形の抑圧を覆い隠す精巧な神学的構築物のように見えるのです。

排除への恐れ

補完主義が、私自身の教会のような多くの教派や教会で勝利を収めたのには、もう一つの理由があります。行動科学におけるバイアス（偏り）についての最近の研究で、ほとんどの場合、私たちは真実であることを信じるのではなく、自分の同盟関係を失わずに済むことを信じるのだということが示されました。[89]これは不吉に聞こえるかもしれませんが、実際には無意識のバイアスです。キリスト者であれ、そうでない人であれ、人間である私たちは、あらゆる新しい考えに対して同じ本能的

89. 認知バイアスというテーマについては、付録6全体を充てて扱っています。

な問いで反応します。「もしこれを受け入れたら、この世界での私の社会的な立場や居場所はどうなるだろうか？」。「これは真実か？」ではなく、「これは私の人生に何をもたらすか？」なのです。（このことについては、付録6：事実が私たちの考えを変えないかもしれない理由で、はるかに詳しく扱っています。）

女性の従属という教理を見直すかどうかを決めようとしている教会で、これがどのように展開しうるかを考えてみてください。1960年代以前の教会や教派は、たいてい給与を受ける男性たちによって導かれていました。女性にはその務めを担う力がない、と彼らは信じていたのです。ほとんどすべての教会がこの見方をしていました。その後、大半の教会や教派はかなり突然に考えを変え、女性と男性は能力において等しいと主張するようになりました。今や議論の焦点は、それぞれの教会や教派が、女性を指導的な立場と説教壇に含めるのか、それとも排除するのか、どちらに落ち着くかということに移りました。

もちろん、その中には真理を求める真摯な探求もありました。しかし、人間の本性について甘く考えるのはやめましょう。この問題を決めなければならなかったのは、主に給与を受ける聖職者たちであって、会衆席に座る人々ではありませんでした。当時、決断を迫られていた教会指導者の立場に身を置いてみてください。あなたのあらゆる考えの底に流れているものは何でしょうか？　私にはわかるはずです。私は生涯ずっと給与を受ける聖職者だったのですから。「この教会での自分の地位を、あるいは仕事を失いたくない」。繰り返しますが、非難しているのではありません。私たちが集団として下す決定が自分個人にもたらす影響や意味をまったく考えないなど、とうてい不可能なのです。

行動科学の専門家たちによれば、次に起こるのは、アーリーアダプター（早期採用者）が現れることです。この場合、それは、女性も指導できると聖書から確信するようになったと主張し始める人たちでしょう。残りの指導者たちは、そのとき何を考えているでしょうか？　「まあ、あなたの勇気には感心するが、多数派がどちらに落ち着くのかを見届けるまで、私は様子を見ていよう」。もちろん、彼らはそう口にはしません。しかし、少数派は自分の居場所を、そしておそらくは仕事を失うことになると、直感的に理解しているのです。

多数派が考えを変えるとわかるまでは、ほとんどの人が自分の考えを変えられないというこの不確かさの中に、福音派の世界で頭角を現しつつあった二人のスターから、明快で澄みきった声が響いてきました。「福音派フェミニストたちに耳を貸してはいけない。彼らは聖書について妥協する者、文化に屈服する者、文化の破壊

者、性別を区別しない者だ。それに、私たちは平等だが異なる。私たちは男女の相補性を肯定する。男女間の権威と服従は三位一体に反映されている。私たちの立場こそが歴史的な立場だ。そして、まだ疑いがあるなら、ここにウェブサイトがあり、聖書翻訳があり、評議会があり、大会があり、力強く魅力的な説教者たちがいて、画期的な著作がある」。

驚くべきことに、1960年代半ばから1980年代後半にかけては、健全で開かれた議論があり、双方が、論争となっている少数の聖書箇所の最も妥当な解釈について議論を戦わせていました。ところがその後、ダンバーズ声明を通して、相互主義者は聖書の権威を否定し、代わりに自分たちのフェミニズムの目的に合うよう聖書をねじ曲げる道を選んでいる、と主張する人々が登場します。補完主義の立場に異を唱えた人々は、「これで、聖書が実際に何を語っているのかについての議論と対話は、すべて終わってしまった」と言います。[90]

補完主義者たちの取り組みとメッセージの発信は、政治的にきわめて巧みで手際がよかったので、どちらにつくか決めかねていた人々を容易に取り込みました。この論争の中で、女性の参加に頑強に抵抗していた人々は、今や完全に確信を固めました。世の中での自分の居場所を守りたいと願っていた中間の人々は、自分で決めるまでもなく、代わりに決定を下してもらったのです。そして補完主義者ではない聖職者たちは、運よく平等主義の教会や教派に属していない限り、地下に潜るか、あるいはそこを去って別の場所で一からやり直すしかありませんでした。どちらにしても、つらい試練でした。

排除へのこの恐れはあまりにも強く、人の耳をふさぎ、目をくらませる力を持っています。自分たちの陣営の外にいる人々の著作を批評する役目を負った、ごく少数の補完主義の学者たちの文章を読むと、その口調がいかに見下したものであるか、語られていることにいかに耳を閉ざしているか、その議論がいかに欠陥だらけに見えるかに、私は何度も驚かされます。それなのに、自分たちの見解に挑戦する著作を批評する任務を負っているまさにその人々が、たいてい補完主義の教派や神学校や団体の学術的な指導層の最上位にいるのです。米国にある南部バプテスト連盟の六つの神学校すべてを例に取ってみましょう。毎年、教員は職を維持するためにダンバーズ声明に署名しなければなりません。毎年です。毎年。この問題について疑いを差し挟む余地はありません。こうして、起草者たちがまだ存命のうちに、補完主義はこれほどの「福音の真理」にまで昇りつめたのです。

90. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, ch. 2を参照してください。1970年代半ばからこの論争の最前線にいたジャイルズが、そのいきさつを語っています。

それでも、指導者や神学者たちは補完主義の囲いを離れ続けています。席を与えられる代償が沈黙だとすれば、その代償は高すぎるのかもしれません。長年にわたって南部バプテスト連盟を代表する女性であったベス・ムーア（Beth Moore）自身も、最近、自分の教派の中で補完主義が聖書の権威と不幸にも同一視されていることに気づき、公に教派を離れました。彼女は最近、この仕組みを作った人々にこう迫りました。「私たちは、あるシステムの構築に加わっておきながら、大勢の人がその名のもとで何をしているかに気づかないまま、机に座っているわけにはいきません。もしあなたが、フランケンシュタインに変わってしまった何かを作る手助けをしたのなら、ヴィクター、投げ縄を取りに行って、あの怪物を引き戻しなさい」。[91]自分の学問分野の専門家であり、かつて補完主義者だった人々によって、同じ点を指摘するベストセラーが次々と出版されています。[92]この堕落し、崩れつつある神学から退避すべき時があるとすれば、それは今です。

補完主義の歴史はひとまず置いて、いよいよ聖書の鍵となる箇所に飛び込む時です。次の章でそうしていくと、補完主義がどこで道を誤っているのかがすぐにわかるでしょう。それはまさに初めから始まっているのです……

91. 2020年4月8日のベス・ムーアのTwitter投稿を参照してください。
92. 最近では、ベス・アリソン・バー（Beth Allison Barr）の“The Making of Biblical Womanhood”と、クリスティン・デュ・メズの“Jesus and John Wayne: How White Evangelicals Corrupted a Faith and Fractured a Nation”がそうです。



4

楽園で結ばれたパートナーシップ

「エバはアダムより優れているのでも劣っているのでもなく、アダムと対等な存在です。彼女は一対の極の片方であり、北極に対する南極です。神の目的を追い求めるとき、彼女は彼の最も強い味方であり、彼が道を外れるとき、最初に立ちはだかる障害物です。」ビクター・ハミルトン（Victor Hamilton）[93]

映画Happy Feet（邦題『ハッピー フィート』）で、ペンギンのマンブルが預言者ラブレイスに出会うと、ラブレイスの首にプラスチックの包装が巻きついていることに気づきます。ラブレイスは、それは「神秘なる存在」[94]から授けられた「聖なるお守り」であり、だからこそ自分の力の源なのだと言い張ります。もちろん、マンブルがうすうす感づいているだけのことを、私たちは知っています。首にあるのはただのごみで、ラブレイスが若いころに泳いでいて引っかかったに違いないのです。マンブルとその風変わりな仲間たちが再び彼を見つけたとき、ラブレイスは息をするのも話すのもやっとの状態でした。[95]マンブルは結論します。「首のあれがきつすぎるんだ。首を絞めてるんだ！」ラブレイスは最初、そのプラスチック片から何らかの力を得ていました。しかし、それがどれほど破壊的で、自分を縛るものであるかを受け入れて初めて、ついにそこから自由になることができたのです。それは祝福ではなく、のろいなのです。

同じように、「キリスト教的」家父長制――補完主義によれば、創世記2–3章にある「神の良い設計」の結果だとされるもの――は、真理のお守りであると称しています。すなわち、家庭と教会に適用されれば神の祝福をもたらす、男女間の権威と服従という神的な原理だというのです。この章でお示しするように、それは男女の関係についての神の最高の意図の一部ではまったくありません。家庭においても、

93. Victor Hamilton, The Book of Genesis: Chapters 1–17, p. 181.
94. この場面の動画クリップはこちらです：www.bit.ly/3BzJGvK
95. この場面の動画クリップはこちらです：www.bit.ly/3mCpcyb

教会においても、ほかのどこにおいてもです。むしろそれは、堕落した世界で男女の関係が損なわれ、首を絞められた結果なのです。

聖書の物語は園から始まります。そこでは、人類と被造世界に対する神の目的が栄光に満ちて示されています。そこで混乱が起こります。サタンがエバとアダムを誘惑し、神のかたちを担う者としての高い尊厳を手放させるのです。ありがたいことに、のちに贖いがイエスのうちに到来します。神のまことのかたちであるイエスは、やはり園でサタンの誘惑に直面しますが、今度はその偽りに屈しません。物語は、イエスが最初の来臨で始めたことを再臨で完成させるときに終わります。人類と被造世界に対するご自分の元来の目的が勝利を収める、えも言われぬ美しい園の都をもたらすのです。キリスト教神学は、世界の偉大な物語から切り離すことはできません。最終的な贖いが元来の創造の回復であるなら、私たちは物事の始まりを正しく理解しなければなりません。だからこそ神学的な探究は、聖書の冒頭の（そして結びの）章をこれほど重視するのです。補完主義の宣言書であるダンバーズ声明が、聖書が始まるところから始め、次のような言明を掲げているのもそのためです。

アダムとエバはともに神のかたちに創造され、人格として神の前に平等であり、男性らしさと女性らしさにおいて区別されている。……男性と女性の役割の区別は、創造の秩序の一部として神によって定められており、すべての人の心に響くはずのものである。……結婚におけるアダムのかしら性は堕落の前に神によって確立されたものであり、罪の結果ではなかった。

これらの文のそれぞれの後に、声明は証拠聖句を挙げていますが、最も繰り返し、また目立って用いられているのが創世記1–3章の節です。実際、ある一つの節が三つの言明すべてを支えるのに用いられています。教理の重みを支える節というものがあるとすれば、まさにこれでしょう。「神である主は言われた。『人がひとりでいるのは良くない。わたしは彼にふさわしい助け手を造ろう。』」（創世2:18）

創世記1–3章、とりわけ2章18節のこの読み方に基づいて、補完主義者たちはさらに、家庭においても教会においても、また広く社会においても「男性のかしら性」を主張するようになりました。[96]そこでは女性は、「尊厳と価値において等しい」

96. すべての補完主義者が、男性の権威が広く社会にまで及ぶと言っているわけではありませんが、ジョン・パイパーやアンドレアス・ケステンバーガーのような主要な人物は確かにそう言っています。後者はこう述べています。「女性は、それぞれの性に対する神の特定の創造の目的にほとんど、あるいはまったく配慮することなく、家庭の外でどんな活動にも従事してよいと主張すること。これは聖書の教えに反し、深刻な問題をはらんでいる」。（出典：www.bit.ly/3by3zsy）

とはいえ、それでもなお権威ある立場の男性に従う必要があるとされます。[97]実際、Recovering Biblical Manhood and Womanhoodの22人の著者のうち19人が、女性の従属についての議論を、創造あるいは創造の秩序に基づかせているのです。

今日、聖書が男女の等しい尊厳を教えていることに異を唱える人はほとんどいないでしょう。しかし問題は、男女間の権威と服従が堕落前の創造の一部であるという考えに異議を唱えるべきかどうかです。この章全体をかけて、それを確かめていきましょう。

創世記1章——被造世界の王と女王

創世記には二つの創造の記述があります。一つは創世記1章に、もう一つは創世記2章にあります。それぞれ出来事の順序も主題の強調点も異なりますが、いくつかの共通する考えによって結び合わされています。第1章では、人間は神の六日目の創造です。「神は言われた。『さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。……』神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」

創造の最初の五日間、神は「……あれ」と命じられますが、ここでは「さあ、われわれのかたちとして……造ろう」と言われます。この最後の創造の行為において、人間は疑いなく神の創造の頂点です。御使いも銀河も、私たちの惑星を動き回る、感覚を持ついかなる生き物も、神のかたちを帯びてはいません。では、それを帯びるとはどういうことでしょうか？

それは、私たちが神を指し示すように造られているということです。私たちは神と独特な関係にあり、また私たちが置かれているこの驚異の世界とも独特な関係にあるので、神と神の被造世界の間に立ち、その両方を代表しています。私たちは被造世界の祭司として被造世界を代表し、言葉にならない仕方で造り主を礼拝している残りの被造世界に代わって、声を上げます。また私たちは被造世界における神の代理統治者として神を代表し、神の良いご性質を全被造世界に映し出します。神はご自分だけでではなく、人類とともに、人類を通して、被造世界を世話し導くことを計画しておられます。だからこそ、私たちの「支配」は神のご性質を映し出すものでなければならないのです。私たちが帯びているかたちは、魂の奥深くに隠された

97. ケラー夫妻もそのように主張しています。「夫のかしら性の、優しく仕える権威と、妻の服従という力強く恵み深い賜物は、私たちを、創造の時に本来あるべきだった姿へと回復させる」。（Tim and Kathy Keller, The Meaning of Marriage, ch. 6.）

何らかの生来の刻印として考えるよりも、私たちに独自に与えられた務めとして考えるほうが有益です。N・T・ライトは、この考えをうまくとらえて、私たちは「角度のついた鏡」であるべきだと言います。「角度を正しく合わせれば、そうでなければ見えないものが見えるようになります。神のかたちを担う者としての私たちの召命は、自分の生き方と行動によって、神についての情報を周りの人々に映し出すことです」。[98]

特に、男性と女性、男と女の間にある根本的な平等に注目してください。男性が女性を軽んじてきた世界にあって、この箇所は正しい方向へと引き戻す言葉をもたらします。女性がそのかたちに似せて造られた神の価値を、女性自身の価値と結びつけているからです。男性だけではありません。私たちは二人とも神のかたちに創造され、二人とも、神の御手が造られたすべてのものに対して、神の愛と知恵と力を表すのです。

神は言われた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、そして地のすべての獣を支配するようにしよう。……」神は彼らを祝福された。神は彼らに言われた。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」（創世1:26–28）

私たちが世界を祝福する二つの方法は、子どもを生み出すことと、地を管理することです。男性も女性もともに、神の似姿を映し出すように造られ、動物の領域に対する権威を与えられ、神の良い被造世界をますますエデン化していく私たちの働きに加わる、さらに多くの人々で地球を満たすことを託されているのです。

特に注目してください。男性と女性は見た目が異なるかもしれず、一方は赤ちゃんを産み、母乳を与えることができ、もう一方はできませんが、この箇所は男性と女性のために二つの異なる指示を作ってはいません。男性だけでなく女性もまた、神の代理統治者として権威を与えられています。それは私たちの完全な人間性の一側面です。神のかたちを完全に映し出すには、男性と女性の両方がともにいる必要があります。これこそ同盟の祝福です。それぞれの性に生物学的、心理学的にどんな独自性があるにせよ、要点は、人類としての私たちに神が与えておられる召命のすべてに、私たち一人ひとりが自分自身のすべてをもって臨むということです。神は「男性的な」支配を人類のための基準や計画として定めてはおられません。そうではなく、男と女がともに神のかたちを帯びているのです。「神の統治を世界に表す

98. Alice Mathews, Gender Roles and the People of God, ch. 13からの引用です。

ことへのこのような共同の参与だけが、私たちがそのかたちを帯びている神にふさわしいものとなりうるのです」。[99]

実のところ、男と女の完全な結合を造るという神の考えは、この章の流れの中で驚きとして現れます。それまでの創造の日々において、神は大空と水と地を分けることによって、混沌とした世界に秩序を刻み込まれます。星々でさえ区別された季節、日、年を示し、太陽は昼を治め、月は夜の見張り番となります。人間が残りの被造世界を導く役目を与えられることで、だれもが、そして何もかもが「自分の分をわきまえて」いるのです。ところが男と女の創造に至ると、神は境界線を引くのをやめ、代わりに二人を完全なパートナーとして結び合わせます。性別に基づく役割や階層をほんのわずかもほのめかすことなく。神はアダムに「あなたは地を従えよ」、エバに「あなたは子どもを育てよ」と言うこともおできになりました。そうではなく、共同の親、共同の祭司、共同の統治者として、二人が完全に協力することを強調しておられるのです。後の歴史の中で、私たち人間はごく一部の人を王や女王に任命することになりますが、すべての女性とすべての男性に対する神の元来の任命は、女王となり、王となることなのです。

神の「良き書」のこの冒頭の章は、後のすべての章と物語全体の枠組みとなります。少なくともここまでは、神から啓示された性別役割は存在しません。一方の性がもう一方に対して権威を持つという話も出てきません。男性と女性はともに神の地を治めます。それは、C・S・ルイス（C.S. Lewis）が、エドマンド、スーザン、ピーター、ルーシーがナルニアの四つの王座に座る場面で美しく描いている同盟です。

「ここまでは実に結構だ」と補完主義者は言います。「第2章と第3章、つまり二つ目の記述に入るまで待ちなさい」。ここ数十年の間に、補完主義者たちは、堕落前にアダムがエバに対して指導権を持っていたとされることを支持する、かなりの数の論拠を積み上げてきました。私はこれらの論拠を明確に述べ、一つずつ順に応答していきます。そして、そのどれ一つとして本文に明示されていないことを示します。それでも、このリストは初めて聞く人にとってあまりにも説得力があるので、もう決着がついたことだと思い込んでしまいます。私はこのリストの力を知っています。当時有名だった牧師であり神学者、メガチャーチの説教者でもあったマーク・ドリスコル（Mark Driscoll）の連続説教に触発されて、私自身、まさにこのリストの論点のいくつかを説教したことさえあるのです。「真理を、すべての真理

99. サラ・ベッシー（Sarah Bessey）が“Jesus Feminist”, ch. 5で、J・R・ダニエル・カーク（J. R. Daniel Kirk）のこの言葉を引用しています。

を、そして真理だけを教える」と標榜する聖書教師として、聖書の冒頭の章に対するこの無理のある取り組み方に巻き込まれてしまったことを、今振り返ってかなり後悔しています。

この章では、さまざまな補完主義の説教者や学者が、堕落前のアダムによるエバの指導を証明しようとして用いる、最も有力な五つの推論を挙げます。付録2では、それ以外の六つの論拠に反論します。

第一の論拠：アダムが先に造られ、次にエバ

補完主義者はこう主張します。創世記2章では、アダムが先に造られ、エバは後から造られました。これは男性が女性の指導者であることを伝えています。実際、パウロはテモテへの手紙第一2章13節でこの事実に注意を向けています。「アダムが初めに造られ、それからエバが造られたからです」。

パウロがテモテに宛てた言葉については、第7章で詳しく探ります。今のところは、パウロが「アダムがエバを管理していた」とは言っていないことに注目してください。それはパウロの意味についての一つの解釈にすぎません。テモテへの手紙第一2章を注意深く読むことに基づいて、私は第7章でさらに二つの解釈を示します。パウロがテモテへの手紙第一2章で何を意味していたにせよ、創世記2章はまず、それ自体の光に照らして読まれるべきです。仮にパウロが女性の従属を支持するために創世記2章を用いたと想定しても（私はそうではなかったと確信しています）、それは必ずしも創世記2章そのものがそれを教えていることを意味しません。ダグラス・ムー（Douglas Moo）は、新約聖書の著者たちは時に旧約聖書の箇所を、決定的な解釈や証明としてではなく、その場に応じた議論として、あるいは表現の手段として用い、自分が主張している点を裏づけている、と説明しています。[100]

神は両方の性を同時に創造することもおできになりましたが、そうはなさいませんでした。なぜでしょうか？　一つの答えが有力です。アダムが先に、次にエバが形造られたのは、神がアダム（とその息子たち）に、神の最後の創造であるエバ（とその娘たち）がいなければ、自分がどれほど絶望的に孤独で、不完全で、不十分であるかを示したいと思われたからです。創世記1章では、海と種、星と海の生き物、鳥と獣が生み出された後に、神の創造の冠が来ます。「人……男と女」です。これと同じ、高まっていく期待の感覚が次の章にも現れることに注目してください。神の創造的な天才の最後の行為は、あらゆる植物と動物と、そしてただ一人の

100. D.A. Carson (ed) Hermeneutics, Authority and Canon, p. 188

男がすでにそろったエデンに、すばらしく美しい女性を贈るのです。創世記2章で高まっていく創造のクレッシェンドと並行して、アダムが自分の相手を求める思いはますます深まっていきます。動物たちのどれも（彼はそのすべてを見て回るのです！）彼の魂の伴侶とはなりません。しかし、神の最大の贈り物、すでに生きている素材から造られた唯一の被造物に出会ったとき、彼は愛の歌をほとばしらせます。その始まりはクライマックスの言葉です。「これこそ、ついに……！」（Zo͡thappa’am … !）

したがって、創世記2章を素直に読むなら、それは男性の権威から女性の服従へと進むのではなく、人間の不完全さから深い結合とパートナーシップへと進んでいきます。それでも補完主義者たちは、この箇所にそれ以上のものを読み込もうと決意しているように見えます。たとえば、ジェームズ・ハーリー（James Hurley）を取り上げてみましょう。彼は1981年に、最初の読者たちはアダムが先であることを彼の権威として理解しただろうという議論を考え出しました。古代の長子相続の考え方があったからだというのです。それは、家族の長男が兄弟たちの受け取る財産の二倍を相続し、家族の指導権を担うというものでした。[101]しかし、アダムは「生まれた」のではありませんし、エバは彼の妹ではありませんでした。そして聖書のどこにも、長子相続が創造の秩序や夫婦の関係に当てはめられている箇所はありません。

イスラエルを取り巻く、きわめて家父長的な文化には、それぞれ独自の創造物語がありました。たとえばメソポタミアのアトラ・ハシース（Atrahasis）の創造物語では、ティアマト（Tiamat）がマルドゥク（Marduk）より先に描かれ、存在していますが、それでもその文化では家父長制が擁護されていました。[102]明らかに、さまざまな創造物語を読んだ古代の読者たちにとって、男と女のどちらが先に来たかということは、階層についての彼らの前提と何の関係もなかったのです。そのうえ、創世記の残りの部分は、神が古代文化にあった長子相続を意図的に覆し、代わりに後に生まれた者たちを指導の権威で祝福されることを示しています（エサウに対するヤコブ、兄弟たちに対するヨセフ）。

101. Man and Woman in Biblical Perspective, Zondervan, p. 207
102. リチャード・ヘス（Richard Hess）が“Discovering Biblical Equality”, ch. 4で論じているとおりです。

第二の論拠：女は「男から」、「男のために」造られた

パウロもコリント人への手紙第一11章8–9節でそのように言っています。コリント人への手紙第一11章については第6章で深く探りますが、今のところは、パウロが8–9節を11–12節で限定していることを覚えておきましょう。「とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。女が男から出たように、同様に、男も女によって生まれるからです。」

コリント人への手紙第一11章でパウロは、男女の相補性を保ちながらも、女性が男性に従属することを主張してはいません。むしろ、女性と男性が互いに払うべき相互の敬意を強調しているのです。それは当然のことです。エバがアダム「から」出たということは、男性を、敬意に値する女性の源として描いています。エバがアダムの「ために」造られたということは、女性が、敬意に値する男性の完成であることを意味しています。男性の読者にとっても女性の読者にとっても、教訓は同じです。神はそれぞれの性を、もう一方を大切にし、互いに依存し合うように造られたのです。

エバは、ひとりでは不十分だったアダムの「ために」造られました。だからといって、アダムがエバに対して権威を持つということにはなりません。それは、私が息子の「ために」家庭教師を雇ったとしても、その家庭教師が息子の部下になるわけではないのと同じです。[103]

アダム「から」エバを造られた創造主こそが、エバに対する唯一の権威を持っておられます。エバが造られたことは、子どもが生まれることとは違いました。子どもは、ある意味で私たちに「属し」、はじめは私たちの権威のもとにあるという意味で、私たちの体から出てくると言えるかもしれません。エバの誕生は違います。彼女が最初に接したのは、自分の造り主でした。彼女は自分の相手を知る前に神を知っていたのです。男は彼女の創造に参加することも、助言することもありません。彼女が形造られている間、彼は眠っています。彼女は完全に造り上げられた姿で、彼のもとに連れて来られるのです。

女性が男性の体の一部から造られたからといって男性を彼女の権威者とみなすなら、アダムは土を自分の主人と呼ばなければならないことになります。彼はちりか

103. このたとえについては、友人のアンドリュー・バートレットに感謝します。彼はマイク・ウィンガー（Mike Winger）への批評の中でこのたとえを用いています。

ら造られたのですから。また、男も女も、創造主の直接的で、人格的で、目的を持った行為によるのだとすれば、創世記2章が彼女が土からではなく彼から造られた理由について何を語っているのかを問うことができるでしょう。この章の前のほうで、神はアダムだけでなく、獣や鳥も土から造られます。もし神がエバを同じ方法で創造されていたら、何が彼女をとりわけアダムに結びつけたでしょうか？　彼女が彼から造られたということこそ、アダムが、彼女は自分の骨からの骨、自分の肉からの肉だと宣言したときに、エバについて心を打たれたことなのです。

脇といえば、「あばら骨」と訳す翻訳者たちは、ほぼ間違いなく誤っています。ヘブル語のtselaのほかのほとんどすべての用例は、何かの「側面」、たいていはその半分を指しています。[104]彼女は彼の脇から造られたのです。1157年、パリの大司教になる直前に、古代の家父長制に異を唱えたきわめて珍しい人物であるペトルス・ロンバルドゥス（Peter Lombard）は、この節について正しくこう注解しました。「エバは、アダムの部下となるために足から取られたのでも、主人となるために頭から取られたのでもなく、伴侶となるために脇から取られたのである」。[105]

第三の論拠：「これを女と名づけよう」

グルーデムの議論はこうです。アダムがエバに出会って「これを女と名づけよう。男から取られたのだから」と言うとき、彼は彼女に名を与えているのであり、それが重要なのだ、とグルーデムは言います。なぜなら、神が被造物に名をつけることによって被造世界を治めておられるのと同じように、アダムは動物に名をつけることによって動物に対する指導権を示し、こうして女に名をつけることによって女に対する権威を示しているからだ、というのです。

そう急がないでください。確かに、「呼ぶ」または「名づける」という同じ語（kara）が、創世記1章で神が物事に名をつけること（「昼」「夜」「天」「地」「海」）にも、アダムが獣や鳥に名をつけること（創世2:19–20）にも用いられています。しかし、ある物や種を分類するという行為は、自動的に権威の表現となるわけではありません。名をつける者がその対象に対して権威を持っていることがすで

104. www.bit.ly/3mH7w4E を参照してください。
105. Peter Lombard, The Sentences

に確立されている場合は別ですが。[106]たとえば、わずか13章後に[107]、女奴隷のハガルが、神について何かを発見したときに、神に名をつけています。彼女が神に対して権威を持っていないことは確かです。したがって、アダムが女を「女」と呼んだことは、必ずしも階層の証拠ではないのです。

それが証明しているのは、むしろ、アダムが彼女の独自の範疇――自分と同じような存在――を見分けているということです。古代の言語では、名前は、名づけられる物や人や種を描写するものでした。創世記2章の男（ish）が彼女を「女」（ishsha）と呼んでいることは、彼が権威を行使している可能性をとりわけ低くしています。二つの名詞の類似性に注目してください。アダムは、動物たちと違って、彼女が自分と同じような存在であり、ふさわしい伴侶であることを認めているのです。強調されているのは、彼女の服従ではなく、彼女の類似性です。「あなたは私と同じような者で、あなたが私を完全にしてくれる」と言うことは、「私があなたを管理する」と言うこととはまったく違います。この箇所で、男女の間の指揮命令系統に気づくことが意図されているとは考えにくいでしょう。とりわけ、アダムが歓喜しているまさにその時点ではそうです。動物たちの長いサーカスの行列を見終えた後で、彼はついにその人を見つけたのです。

そのうえ、そもそも「女」という語を固有名詞と見なす翻訳者はほとんどいません。むしろそれは、古代の読者がみな知っていた普通名詞であり、女性という性を表す単純な呼称です。アダムが妻をエバと「名づけた」（別の語：vaiyokra）のは、創世記3章20節になってからです。この命名が堕落の後に起こっているということは、そこから堕落前の関係における階層とされるものについて、何も結論づけられないということです。

第四の論拠：「あなたはどこにいるのか」

二人が禁じられた実を食べた後、彼らは園の中に身を隠します。そのとき神は男に呼びかけて言われます。「あなたはどこにいるのか。」（創世3:9）しかし、なぜ神は

106.「神が何かに名を与えるとき、神は主権を持つ支配者としての立場でそうされるが、qārāʾはそれ自体で優位性を示唆するものではない。したがって、人が動物に名をつけることによって動物に対する主権を行使していると言うのは、こじつけである。それを明確にするには、第1章の『従えよ』や『支配せよ』に相当するものが必要だろう。……名を与える者として行動することで、人は識別する力を示しているのである」。（Victor Hamilton, New International Commentary on the Old Testament）

107. 彼女は、自分に語りかけた主の名を「あなたは私を見てくださる神」と呼んだ。（創世16:13）

男にだけ近づき、女には近づかれないのでしょうか？　補完主義者たちは、神が罪に気づいておられて、アダムに責任を問うておられるのだと推論します。結局のところ、その議論によれば、神はアダムだけに責任を任せておられたのだから、というわけです。

しかし、そのやりとりはまったくそのようには進みません。神は「何ということをしたのか！」とは言わず、「あなたはどこにいるのか」と言われます。創世記の第2章と第3章では、著者は神を擬人的に描いています。神は園を歩まれます。ご自分の手でアダムを造られます。そしてここでは、なぜ二人が見つからないのかを本当に知りたいと思っておられるのです。もちろん、神学的には、神が超越しておられ、すべてを知っておられると主張することができます。しかしこの記述では、私たちと真実な関係を持つことのできる神の力が強調されており、そのためには、神が本当に知ろうとして問いかけることができなければなりません。実際、アダムの答えを受けて、神はさらに二つの問いを続けられます。「あなたが裸であることを、だれがあなたに告げたのか。あなたは、食べてはならない、とわたしが命じた木から食べたのか。」（11節）神の事実確認は続き、エバにも問いかけられます（13節）。

それでも問いは残ります。なぜ神はまずアダムに、しかもアダムだけに語られるのでしょうか？　その答えは、語り手が園の物語全体を通して見事に用いている文学的技法を理解することにあるのかもしれません。神は、アダム、エバ、サタンと、一度に一人ずつしか話されないのです。創世記3章のこうしたやりとりにはすべて、決まった順序があります。蛇が女をだまし、女が男を誤らせます。今度は神が男に語りかけ、男は女を責めます。次に神は女に語りかけ、女は蛇を責めます。最後に、神は蛇、それから女、それから男に対して結果を言い渡されます。順序は、蛇、女、男。男、女、蛇。そして蛇、女、男です。もし神が先に女に語られたり、男と女の両方に語られたりしていたら、この文学的技法は損なわれていたことでしょう。

神がアダムに、次にエバに問いかけられたという事実は、責任をなすりつけ合うドミノ反応が展開する余地も生み出しています。それによって、二人に悔いる心がないこと、また罪が夫婦の関係に及ぼす破壊的な影響が明らかになるのです。

最後に、神が語りかける相手の順序は、神が権威の系統を認めておられることを示している、というどんな議論も、神が三者と交わされる二度のやりとりを並べてみると崩れ去ります。神はまず男に事情を問い、男は女を指さします。次に女に問

い、女はサタンを責めます。その後、神は三者それぞれに結果を言い渡されますが、今度は順序を逆にして、アダムに最後に語られるのです。神がアダムに最初に（あるいは最後に）語られることは、いわゆる階層について何かを意味すると論じる人々は、神がアダムに最後に（あるいは最初に）語られるときには、それがそのような意味を何も持たないことを説明しなければなりません。

第五の論拠：Ezer Kenegdo

「神である主は言われた。『人がひとりでいるのは良くない。わたしは彼にふさわしい助け手を造ろう。』」[108]この節は、女性が神の良い元来の設計の一部として男性の指導のもとに置かれるよう意図されていると論じるために、多くの人が用いる主要な論拠です。前にも述べたように、ジョン・パイパーが初版を起草したダンバーズ声明は、男性と女性の役割について十の「教理的」言明を掲げており、そのうち四つもの言明の証拠聖句として、このただ一つの節を用いています。ジョン・パイパーはこの節についての自分の理解をこう説明しています。「神は、女性が、園での生活において忠実でふさわしい補佐役という意味で、男性の『助け手』であることを教えておられる」。[109]同様に、ジョージ・ナイトはこう言います。「ある人間が別の人間の助け手となるように創造されたのであれば、そのような助けを受ける者が、自分の助け手である者に対してある種の権威を持つと断言することは……ただ適切なことである」。[110]

しかし、ナイトとパイパーがこう結論づけるのは誤りです。もちろん、助け手は目下の者であることもありえます。しかし、対等な者であることも、目上の者であることさえありうるのです。母親の「助け」がなかったら子どもたちはどうなるでしょうか？　家庭教師の「助け」がなかったら生徒たちはどうなるでしょうか？　けれども、とりわけ興味深いのは、この語が旧約聖書において従属を表すことは一度もないということです。実際、「助け手」と訳されている語（ヘブル語：ezer）は、聖書の中では、主として神がご自分の民を助けることについて用いられています。創世記2章以外の旧約聖書におけるezerの19回の用例のうち、16回は、イスラ

108. 創世記2章18節
109. John Piper and Wayne Grudem (eds), Recovering Biblical Manhood and Womanhood, p. 79
110. George Knight, The New Testament Teaching on the Role Relationship of Men and Women, p. 43

エルとの関係において「助け手」である神について用いられ[111]、3回は、援軍のような軍事的支援を表しています。それがなければ戦いに敗れてしまうような支援です。19の用例のうち18において、助けを受ける側は助ける側の指導者ではありません。[112]これらの用例のうち8つでは、「助け手」は「救い主」「守り手」「救出者」です。残りの用例では、助けの性質は力の提供であり、しばしば軍事的な性格を帯びています。ですから、だれかをezerするとは、自分の力や介入を差し出すことによって、その人に欠けているものを補うことなのです。

このため、英語の「helper」（助け手）という語は、ezerという語の本当の意味を伝えるにはまったく不十分です。今日、「helper」という考えは、たいてい、資格の劣る下位の者を連想させます。たとえば、電気技師である彼女に適切なドライバーを手渡す見習いのような存在です。彼女はおそらく自分ひとりでもできるでしょうが、小さな作業を手伝ってくれる人がいるのはありがたいことです。とんでもありません！Ezerは「力強い助け手」、あるいはもっとよいのは「パートナー」と訳されるべきです。REB、NAB、NRSV、CEVなど、多くの翻訳がそうしているように。

では、エバはどのようにアダムを助けるのでしょうか？　補完主義者の中には、この節を用いて、彼女は彼の子どもたちの母となり、また家庭を切り盛りすることによって彼を助けたのだと言う人もいます。しかし、それは創世記2章で彼女がアダムを助ける主要な方法とはほど遠いものです。そこでは最も重要な意味がこう示されています。「人がひとりでいるのは良くない。わたしは彼にふさわしい助け手を造ろう」。彼女は、彼を孤独から救い出すことによって彼を助けるのです。彼女は彼の伴侶です。さらに、もう少し広く考えてみると、彼女は、創世記1章からすでにわかっていることを、彼とともに行うパートナーであることが示唆されています。神のかたちを担う二人はともに、神を世界に映し出し、地球を人で満たし、エ

111. 出エジプト記18章4節、申命記33章7、26、29節、詩篇20篇2節、33篇20節、70篇5節、89篇19節、115篇9、10、11節、121篇1、2節、124篇8節、146篇5節、ホセア書13章9節を参照してください。
112. 唯一の例外は、おそらくエゼキエル書12章14節でしょう。そこでは、カルデアの王が、戦いにおいて自分を助ける者をまわりに一人も持たないことが語られています。それでも、その箇所で強調されているのは、それらの助け手に対する王の権威ではなく、彼らがいなければ王がまったく途方に暮れてしまうということです。

デン化するよう任命されたのです。[113]エバはまた、アダムに与えられた園の世話をするという務めにおいても、彼のパートナーとなるのです。

要するに、彼女は彼に仕えるために造られたのではなく、彼とともに仕えるために造られたのです。もし疑いがあるなら、「ふさわしい」と訳されている語（ヘブル語：kenegdo）を考えてみてください。彼女は単に彼のezerであるだけでなく、彼のezer kenegdoなのです。この語は何を意味するのでしょうか？　実は、英語の「suitable」（ふさわしい）は、「helper」がezerの訳として不十分であるのと同じくらい、kenegdoの訳として不十分なのです。Kenegdoは、彼に向かい合う、彼のようなという意味の複合句です。キャシー・ケラーはこう言います。「男性と女性は、ぴったり合う二つのパズルのピースのようなものです。まったく同じでもなく、でたらめに違うのでもなく、合わせれば完全な全体を作り出せるように区別されているからです」。[114]

彼女は彼にとってなくてはならないパートナーであり、味方です。男性に欠けているものを、女性は持っており、補います。彼女は、独立して自足している男にとっての単なる付け足しや、あってもなくてもよい補佐役ではありません。彼女は彼の伴侶であり、補い手であり、対となる者であり、協力者なのです。

彼が戦いの中にあるなら、彼女は彼とともに戦う戦友です。彼が世界をエデン化するなら、彼女は彼の協力者です。彼が子どもを育てるなら、彼女は彼とともに子を育てる親です。[115]最初の男と女のこの関係は、相互の支え合い、相互の感謝、相手を補うために自分の強みを分かち合うこと、そして最も親しい友の中に自分と同じものと異なるものとを認めることによって特徴づけられています。神は、息子であり、兄弟であり、夫であり、友である私たちがひとりでいるのは良くないと知っておられたので、娘、姉妹、妻、女性の友人や同労者を贈ってくださることによって、最高の味方を与えてくださいました。もはや神の働きを――家庭においても、

113. 一部の学者は、ezerという語が、彼女が男性たちに与える究極の助けを予期させるものだと指摘しています。次の章で、エバの「子孫」が、すべての男性を含む人類を救うことが告げられるのです。興味深い言葉遊びとして、創世記3章15節の「子孫」を表すヘブル語は、ezerと似た響きを持っています。この意味で、彼女は彼の救い手です。彼女が世の救い主を産むことになるからです。
114. Tim and Kathy Keller, The Meaning of Marriage, ch. 6.
115. 実際、だれかのezer kenegdoであるということは、その人もまたあなたにとって同じ存在であることを含意しています。あなたが助けるべき相手もまた、あなたに向かい合うあなたのような者であり、あなたとともにエデン化する者、ともに神のかたちを担う者、ともに子を育てる親、ともに戦う戦友なのです。あなたがその人にとってそうであるのとまったく同じように。そして彼は、彼女が自分の完成のために必要としている、自分の持つどんな強みでも差し出すのです。

教会においても、世界においても――ひとりで担うことはありません。私のような男性は今や、喜んで、謙遜に、感謝をもって、パートナーや戦友たちと並んで立つことができるのです。これこそが創世記2章18節の意味です。

これがどのように補完主義を揺るがすか、おわかりでしょうか？　ダンバーズ声明の「教理的」言明のうち四つは、（私が信じるように）繰り返し用いる証拠聖句である創世記2章18節の誤った解釈の上に築かれているのだとすれば、ぐらついてしまいます。もしかすると、創世記2章18節は補完主義にとって「ふさわしくない助け手」なのかもしれません！　下手な釈義のジョークはさておき、創世記の堕落前の世界に女性に対する男性の指導のしるしを探すことが、なぜ無駄骨に終わりつつあるのか、おわかりいただけることを願っています。

読み込みの実例

解釈においては、読み込み（eisegesis）を避けなければなりません。人間の著者も神である著者も込めていない意味を、箇所に注入してはならないのです。むしろ私たちは、良い釈義（exegesis）を行い、その正しい意味を見分けるべきです。

十代のころに初めて創世記を読んだとき、私は創世記3章16節に至るまで、エバに対するアダムの権威について何も気づきませんでした。しかし、この章で取り上げてきた五つの推論（そして付録2の六つ）のいくつかを聞いてからは、アダムが主導権を握っていたことが私にはますます明白に思えてきました。けれども、ウォルター・ブルッゲマン（Walter Brueggemann）はGenesis: A Bible Commentary for Teachers and Preachersの中で、「このような釈義は本文を裏切っており、私たちの……前提がいかに私たちの釈義を支配しているかを示す良い例である」と述べています。

推論が持つ、人を誤らせかねない力を示すために、私が、堕落前のエバはアダムより上の者であり主人であったと、次のような論拠に基づいて教えられてきたと想像してみてください。1）創世記1章では、最後に創造されたものが支配します。したがって、創世記2章で最後に創造されたエバも支配します。2）エバは「助け手」と呼ばれています。これは主として、弱い者を救いに来られる神について用いられる語です。3）アダムはちりから、エバは肉から造られました。4）父方居住の文化では、女性は両親のもとを離れて夫の家族に接ぎ木されましたが、創世記2章24節は、男が自分の家族を離れて妻と結ばれると言っています。5）サタンは、羊を散

らすには羊飼いを打たなければならないことを知っています。そして実際にそうします。6）エバを倒すには超人的な力が必要ですが、アダムを倒すには人間からの少しの圧力で足ります。7）神はまずエバに、次にアダムに判決を言い渡されます。指導者である彼女が最も重い責任を負っているからです。8）エバに対する罪の結果は、彼女がもはや支配しなくなることです。今度は彼が彼女を支配するのです。

もしこれが長い間教会の教えであったなら、おそらく教派全体がそれを信じていたことでしょう。論拠を積み重ね、それを何度も何度も繰り返すと、それが正当なものであるかのように見えてきます。しかし、補完主義の論拠のリストも、この八項目のリストも、同じ誤りの例なのです。すなわち読み込みです。結ぶべきでない点と点を結ぶと、ゆがんだ絵が浮かび上がります。

「創造の秩序」は被造世界のすべてに当てはまる

補完主義者が、教会と家庭において女性が男性を指導したり、男性とともに指導したりすることを禁じる根拠として「創造の秩序」を用いるなら、それは社会全体にも当てはまることになります。神学的に言えば、創造はあらゆる領域に及びます。アダムとエバは最初の家族であり最初の教会であっただけでなく、人間の最初の共同体であり、社会そのものの種でもありました。コリント人への手紙第一11章とテモテへの手紙第一2章についての研究の大半は、パウロが堕落前のアダムとエバを、一般的な男女関係の原型として用いていると結論づけています。

私はジョン・パイパーの見解には同意しませんが、彼が一貫していることは評価します。彼の考えでは、創造は、教会の構造においても社会の構造においても女性を制限します。彼は、別の神学者の言葉を肯定的に引用しています。「創世記2章は……男女の関係が本質的に逆転不可能なものであることを私に確信させる。……男性の秘書を持つ〔ような〕女性の上司〔は〕……双方の人間性に負担をかけるだろう……これは……創造の一部であり、何ものも変えることのできない所与の事実である」。[116]

“How Should Women Lead?”という記事[117]で、パイパーは、女性は男性を「非人格的に」しか指導してはならないと論じています。女性は距離を置いて男性に影響

116. John Piper, Recovering Biblical Manhood and Womanhood, p. 37
117. www.bit.ly/3LPBXQV

を及ぼしてもよい。たとえば、男性が行き交う道路や建物を設計する都市計画家や建築家としてならよいが、訓練教官としてはいけない、というのです。女性は、「驚くべき自制と服従の姿勢」をもって「ダビデを説得してナバルを殺すのを思いとどまらせた」アビガイルのように、男性を「非指示的に」指導してもよいとされます。（同様に、女性は男性に面と向かって教理を教えてはならず、自分が書いた本を通してのみ教えてよいとされます。その場合、「彼女は私を見ておらず、……女性として私を権威をもって指示しているわけではない」からです。[118]）

同じように、ケビン・デヤング（Kevin De Young）は、創造の設計が社会における男性の指導という理想を支持していると論じています。[119]もし創世記2–3章についての補完主義の読み方が正しいなら、私たちは、自分の娘たちが男性を直接的かつ人格的に指導する立場に昇っていこうとする志を、あえて褒めることはできません。教会においてだけでなく、職場においても、政府においてもです。デヤングは、「会社の組織図」のどの階層に身を置くことになるかわからない自分の娘たちに、神の計画は「男性が導き、女性が助けること」だと受け入れるよう助言してさえいます。彼女たちは「女性らしさ」を受け入れ、自分たちが「謙遜に助ける」間、男性が「愛をもって導く」ようにする必要がある、というのです。[120]

この解釈は、私たちの娘たちの職業の選択肢に、なんと重い制限を課すことでしょう！　ほっとしたことに、私はパイパーとデヤングが創世記2章を読み違えていると確信しています。たとえ女性が職業において花開くためだけであっても、私は補完主義の友人たちに、少なくとも、創世記2章には性別による階層など存在しないのかもしれないと考えてみてほしいと強く願います。創世記3章に目を向けると、ついにそう結論づけることができるようになります。

118. ジョン・パイパーは、「女性が書いた聖書注解書を使いますか？」という質問に答えて、こう言っています。「本と書くことという現象が間に入ることで、著者である女性は読者の視界から外れ、ある意味で、彼女の女性としての人格という次元が取り除かれるのです」。
119. ケビン・デヤングの記事“Death to the Patriarchy?”に対する私の批評はこちらです：www.bit.ly/3LQLN4W
120. デヤングは“Men and Women in the Church”, ch. 9で、自分の子どもたちに何を教えているかを明かしています。「男性が導き、女性が助けること。それこそ、男性と女性が意識して見いだし、進んで受け入れるべきものです。会社の組織図ではあらゆる階層に男性と女性が配置されているかもしれない職場においてさえ、キリスト者が男性らしさと女性らしさを適切な仕方で受け入れる道はまだあると私は信じています。……愛をもって導く男性は、女性が謙遜に助けることをずっと容易にします」。これは、一つの発言が別の発言によって打ち消されている、矛盾したメッセージです。1）女性は社会の中で男性を指導する立場に就くことがありえます。2）しかし女性は実際には、男性が導くよう励ますべきです。（さらに彼はデボラの物語をひどく読み違え、彼女が自分の指導権をバラクに譲ろうとしていたと示唆しています。この誤った解釈には第10章で反論します。）

家父長制の起源

もし家父長制が神の意図された設計の一部でなかったのなら、なぜ歴史上のほとんどすべての文化がそれを実践してきたのでしょうか？　創世記3章は神学的な答えを示しています。

アダムとエバのあごからまだ果汁がしたたっているうちに、神は蛇と女と男に語りかけられます。神は彼らの行為の結果について警告し、それに備えさせます。女に対して、神はこう言われます。「あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる。」[121]ここで何が起こっているのでしょうか？

補完主義者たちは、堕落のために、堕落前の夫による妻への慈しみ深い支配が、今や暴政へと変わるのだと言います。この見方では、ここでの「支配する」という語（ヘブル語：mashal）は抑圧的な支配を意味します。彼は神にかなった指導を与える代わりに、彼女を押さえつけるようになる。かつて良かったもの（彼女に対する彼の愛ある指導）が、残酷で搾取的なものに変わってしまった、というのです。

しかし、神が本当に言っておられるのはそういうことでしょうか？　はっきりと伝えられているのは、アダムが堕落の結果として、今やエバに対する指導権を握るようになる（そして、そこから推し広げれば、男性が女性に対する指導権を握るようになる）ということです。創世記1章26–28節は、男性が女性と並んで治めるという神の理想を明らかにしていました。それなのに、堕落した被造世界では男が女の上に立って治めるとは、なんと暗いことでしょうか。

ヘブル語のmashalは、一部の補完主義者が論じるように「抑圧する」という意味ではありません。むしろ、統治する、支配する、治める、主となる、導くという意味です。旧約聖書での81回の用例において、それは単に指導や支配を意味しています。最初の用例では、太陽が昼と夜を「治め」、最後の用例では、祭司である王が神の民を「治めます」。[122]旧約聖書におけるこの語のすべての用例を分析している二つの主要な聖書ヘブル語辞典はどちらも、この語について否定的な意味を一つも挙げていません。「厳しい」といった限定語と結びついていない限り、その中心的な意味概念には抑圧や暴政は含まれていないのです。世界がおかしくなってしまったしるしの一つは、男性が、ただ女性が女性であるという理由で、女性に対する支

121. 創世記3章16節
122. ご自分で確かめてください：www.bit.ly/3nVjfvA

配権を握るようになることだ、と神は言っておられます。虐待的な男性の支配は慈しみ深い男性の支配よりも悪いものですが、どちらも神の理想ではありません。男女の関係が、堕落の結果として不平等になり、力に基づくものになってしまったという事実だけでも、それ自体で十分に恐ろしいことなのです。

それに続く二つの節では、アダムが直面しなければならない結果は、彼がもともと取られたまさにその大地が、今後は、いばらに刺されて流れる彼の血と額の汗という代価を払ってはじめて食物を生み出すようになる、ということです。並べてみると、エバとアダムの結果は並行しています。アダムは今や自分の源（大地）に服することになり、エバは今や自分の源（アダム）に服することになるのです。これこそが家父長制の本当の起源です。男性が女性に対する支配権を握る、あらゆる堕落した社会で展開される、悲惨な初期設定なのです。

エバの「恋い慕う思い」とは何か

エバがアダムを「恋い慕う」（ヘブル語：teshuqah）とはどういう意味でしょうか？　聖書学者たちは主に三つの選択肢を提案しています。一つずつ探ってみましょう。

自然な思慕。この解釈は、自分の夫に対するエバの思慕あるいは献身を自然なもの、さらには神が定められたものと見なします。16–19節の文脈は、それが自然な思慕であることを示唆しています。ただし、挫かれた思慕です。女は子どもを世に生み出します。それは良いことですが、堕落の後には恐ろしい苦しみが伴います。同じように、男は以前と同じく大地から食物を得ますが、今やそのいばらが彼を妨げます。それどころか、大地はやがて死において彼を飲み込むのです。これらはいずれも、神から与えられた営みが脇道にそらされることを予告しています。そうすると、同じ線に沿って、パートナーへの彼女の思慕は自然なものですが、残念なことに、彼女を支配しようとする彼の決意によって阻まれるのです。

過度の思慕。この解釈は前の解釈に修正を加え、神から与えられた夫への女の思慕あるいは献身が、堕落の後に偶像崇拝的なものになると考えます。心から愛する人に救い出されるのを待つディズニーのお姫さまのように、だからこそ女性はしばしば男性と社会的にがんじがらめに結びついてしまうのだ、とこの解釈は示唆します。神の受け入れと御腕ではなく、男性の受け入れと腕の中に、自分の第一のアイデンティティを見いだしてしまうのです。このことは彼女を要求の多い者にする

か、あるいはカルヴァンが示唆したように卑屈にします。背骨を抜かれたように、夫のあらゆる望みに身を明け渡してしまうのです。

反逆的な思慕。この解釈によれば、彼女は彼を支配したいと願い、彼も同じように応じます。そして男女の戦いが始まるのです。この解釈をとる、補完主義者ではない人々は、「かつて一つとして治めていた二人が、〔今や〕互いを支配しようとする」と言います。[123]ただし、勝つのは男性です。補完主義者たちはこれを、神が定めたアダムのそれまでの支配に対するエバの反逆として読みます。その支配は今や暴政的なものとなるのです。グルーデムはこう言います。「ゆがみとは、エバが今や夫の権威に反逆するようになるということであった。彼女には、アダムに逆らい、アダムの指導に抵抗しようとする内なる衝動がある。彼女の衝動と願望と意志は、夫に対抗するものとなっている」。グルーデムがその翻訳委員会の一員であることを考えれば、ESVがこれを「あなたの願いは夫に逆らうものとなる」と訳しているのも驚くには当たりません。

どの解釈が正しいのでしょうか？　私は第一と第二の間で揺れ動いてきましたが、第三の解釈、とりわけその補完主義版には、深刻な疑いを抱いています。その理由は六つあります。おおよそ重みの軽いものから重いものへと順に並べてみます。

第一に、この解釈がもたらす含意は、目立たないながらも有害です。それは、アダムがエバを支配するのは、彼女が彼にけんかを売り続けるからだ、と示唆します。この解釈によれば、彼の支配が厳しいものであっても、それは理解できることになります。反抗的な部下にほかにどう対処できるだろうか、というわけです。

第二に、前の節では、双方向の支配争いが描かれており、神はそれをはっきりと示しておられます。「わたしは、〔蛇〕と女の間に敵意を置く。」もし創世記3章16節で、それと並行する双方向の「男女の戦い」が描かれているのなら、なぜ神は「女と男の間にも敵意がある」と言われないのでしょうか？　この箇所では、支配は一方向にしか流れていないように見えます。

第三に、「支配したいという願い」は目新しい訳です。「支配したいという願い」を採用した最近の少数の翻訳（NLTなど）は、What is Woman's Desire? と題された1975年の論文に従っています。[124]その論文は、創世記3章16節の「恋い慕う」と同じまれな語が創世記4章7節でも用いられていることに注目しています。そこでカインは、罪が戸口で待ち伏せしていて彼を恋い慕うが、彼はそれを治めなければなら

123. Victor Hamilton, New International Commentary on the Old Testament.
124. www.bit.ly/3mHetTi を参照してください。

ないと告げられます。論文は、この語は両方の場合に「支配したいという願い」を意味するに違いないと結論づけています。しかし、二つの箇所の文脈はかなり異なっています。[125]たとえば、前者では、エバは自分の罪の結果として別の者が自分を支配すると警告されています。後者では、カインは罪を防ぐために、治めるよう命じられています。ある箇所の文脈を用いて語に意味を読み込み、それからその意味を、文脈の異なる別の箇所に持ち込むのは危ういことです。[126]

第四に、ESVが選んだ「願い……逆らう」は、奇妙で、おそらく誤り[127]であるだけでなく、意味を逆転させてしまっています。逆らう思いは、男から女に向かって存在しているのです。産みの苦しみが、子どもを世に生み出すことを彼女にとって困難にするのと同じように、彼女の主人として自分を押し出す彼の役割は、自然なものであれ偶像崇拝的なものであれ、彼に対する彼女の思慕あるいは献身に逆らうものとなります。後者の場合の苦しみは、産みの苦しみからではなく、彼が押しつける支配から生じるのです。

第五に、ありえないことではありませんが、この語が創世記の著者にとってある意味を持ち、雅歌の著者にとってはまったく別の意味を持っているとは考えにくいことです。創世記4章7節と雅歌7章10節――「私は私の愛する方のもの。あの方は私を恋い慕う〔teshuqah〕」――におけるteshuqahの中心的な意味を調和させようとすると、それはおそらく、強い自然な思慕か、ひたむきな献身のどちらかを指しており、支配したいという願いではない、という結論になります（雅歌が力に基づく形の性や愛を讃えていると考えるのでない限り）。また、創世記3章16節と雅歌7章10節の文脈は異なっていますが、どちらも女と男の関係について語っています。

第六に、過去と現在のほとんどすべての解釈者と翻訳者は、teshuqahという語を「向かうこと」か「恋い慕うこと」のどちらかの意味に取っています。[128]ウォルター・カイザーは、イタリアの修道士パニーノ（Pagnino）が1528年にこれを「恋い慕う」という意味に訳す以前は、知られている十二の古代訳がすべて「向かう」

125. www.bit.ly/2YguUMU を参照してください。
126. それでも、ウェイン・グルーデムはこのことを知っています。別の箇所について、彼は、「ある場合に用いられた語の文脈を、別の場合のその語の用法に持ち込むこと」は「解釈における根本的な誤り」だと書いています。（Evangelical Feminism, 5.10）
127. この場合、「for」という語を「contrary」という語に置き換えることは、ヘブル語の前置詞elを誤訳することになります。メアリー・コンボイ（Mary Convoy）とマット・リンチ（Matt Lynch）がこの誤りを的確に批判しています。www.bit.ly/3T8fjGz と www.bit.ly/3MNDPdz を参照してください。
128. マーグ・モウチコ（Marg Mowczko）の二つの記事を参照してください：www.bit.ly/3ghuPAZ と www.bit.ly/3yW4kI3

という意味を採っていたと指摘しています。[129]現在の翻訳ではパニーノの影響が優勢ですが、聖書ヘブル語の第一人者であるアンドリュー・マッキントッシュ（Andrew Macintosh）は、それが「献身している」（ひたむきに注意を向けるという意味で）を意味すると論じています。[130]これによって、創世記4章7節の不吉な隠喩が完成します。罪は、身をかがめた捕食者のように「標的に狙いを定めて」おり、今や警告を受けたカインは、自分を襲おうとしているものを制しなければならないのです。これは雅歌にも当てはまります。「あの方はひたすら私に心を傾けている」。創世記3章16節については、この意味は第二の解釈に信憑性を与えます。「あなたは〔神から〕離れて、夫のほうへ向かう」。[131]このように読めば、これらの箇所のどれも支配を含意してはいません。

これこそ、男女関係における罪の力の本当の悲劇ではないでしょうか？　第二の解釈――私が選ぶもの――によれば、二人の最初の出会いの美しさが恐ろしく逆転してしまったのです。男はかつて、自分が探し求めていた対等なパートナーを神の贈り物として見いだしたことを喜び祝いましたが、今や女は、神の代わりとして頼る男の中に主人を見いだして苦しむことになるのです。男は、ともに神のかたちを担う者とともに治め（創世記1章）、対等な相手と協力する（創世記2章）代わりに、堕落した男として、自分を完成させてくれる者として彼を切に慕う女を支配するようになるのです（創世記3:16）。罪によって損なわれ、女も男も、神がもともと意図しておられた親密なパートナーシップの一部を失うことになるのです。

創世記3章16節について、最後にもう一つの問いがあります。これはのろいでしょうか、規定でしょうか、それとも描写でしょうか？　のろいではありません。蛇と大地は人類の罪のためにのろわれますが、男と女はのろわれていません。また規定でもありません。神は、男性に女性を抑圧するよう命じておられるのでも、女性に出産の苦しみを持つよう命じておられるのでもありません。むしろ、これは描写なのです。園において人類と神との関係が崩れた結果、これが人間関係の中でよく見られるようになる一つの特定のゆがみなのです。

129. Hard Sayings of the Bible, p. 98.
130. “The Meaning of Hebrew תשוקה,” Journal of Semitic Studies LXI/2 (2016), p. 365-87.
131. 20世紀への転換期に中国で働いた女性宣教師キャサリン・ブッシュネルが、この解釈をとっていました。彼女は、この語を「恋い慕う」ではなく「向かうこと」と訳すほうを好みました。彼女の訳では、この節は「あなたは夫のほうへと向きを変えつつあり、彼はあなたを支配するであろう」となります。堕落の前には、アダムもエバも神の権威に従っていました。堕落の後、罪のために、女性たちは今やまず夫のほうへと向かうようになったのです。（出典：Kristen Du Mez, A New Gospel for Women, p. 121）

男女の関係の破綻がどれほど恐ろしいものであっても、それには抵抗することができますし、抵抗しなければなりません。私たちは、出産をより安全で痛みの少ないものにしようと努めるのとまったく同じように、また土地を耕すときに肥料を施し、雑草を取り除くのと同じように、自分たちの関係から支配、押しつぶすような劣等感、有害な優越感、偶像崇拝を取り除くために、できることをすべきです。

男と女

最終的に、男女の関係を回復するには、エバの「子孫」が必要になります。それについては第5章で扱います。それまでの間、神の理想を忘れないようにしましょう。性別による階層との戦いにおいて、私たちには目指すべき、心を奮い立たせる模範があります。アダムとエバの壮麗な最初の出会いです。リチャード・デビッドソン（Richard Davidson）は、旧約聖書における性別とセクシュアリティについての記念碑的な研究の中で、こう述べています。

物語の初めにおける男の創造と、物語の終わりにおける女の創造は、完全に釣り合っている。語り手は、男の創造の描写にも女の創造の描写にも、（ヘブル語で）まったく同じ数の語を用いている。創世記2章の流れは、上位から下位へ、あるいは指導から服従へと向かうのではなく、不完全から完全へと向かっている。女は、物語の頂点、その完成として、またアダムと完全に対等な者として創造されているのである。[132]

創世記2章のどこにも、男が彼女に対する権威を与えられたとも、彼女を導くよう命じられたとも、彼女が彼に聞き従うよう命じられたとも書かれていません。明らかなのは、創世記2章の終わりまでに、男には、自分を孤独から解放し、自分がそれ以前に受けていたのと同じ召命において自分と協力してくれるパートナーがいる、ということです。

創世記2章の終わりにある神学的な結びの言葉を考えてみてください。もしこの章についての補完主義の読み方が正しいなら、そこにはむしろ「それゆえ、男は……その妻を治める」と書かれているはずでしょう。ところが、結びの言葉は、あらゆるキリスト教の結婚式で引用されるものです。「それゆえ、男は……その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」「結ばれ」と「一体」という言葉は、この章が

132. Richard Davidson, Flame of Yahweh, ch. 2.

教えているのは支配や指揮ではなく、相互性と完全さであることを裏づけています。

パウロはこの洞察を裏づけているように思われます。コリント人への手紙第一6章で創世記2章24節に言及した後、そのわずか数節後のコリント人への手紙第一7章で、彼はこう明言しています。「妻は自分のからだについて権威を持っておらず、それを夫にゆだねています。……夫も自分のからだについて権威を持っておらず、それを妻にゆだねています。」パウロの創世記2章の読み方によれば、二人の配偶者は一体なので、どちらもその一つの体に対して同じように近づくことができ、同じ権威を持っているのです。[133]

したがって、創世記2章は、男であることに指導が本来備わっており、女であることに服従が本来備わっている、とは教えていません。そうではなく、創世記2章が肯定しているのは、男性と女性の間の一致、相互性、平等であって、階層ではないのです。

女性が男性に従属することについての最初の言及は、創世記3章16節に現れます。そこでは、罪の結果として、男が女を「支配する」と言われています。もし神が、男性が女性を導くことを計画しておられたのなら、神は、権威についてのほかの二つの言及――堕落前の人類が被造世界に対して持つ慈しみ深い権威と、堕落した男性が女性に対して自分を押し出して振るう権威――に与えておられる明確さの、少なくとも半分の明確さで、それをこれらの本文に書き込まれたのではないでしょうか？　権威についてほかに何も語られていないことから明らかなのは、神の理想によれば、神だけが人間に対する権威を持っておられるということです。そして男性と女性には、互いに仕え合い、搾取し合わないための、また互いにパートナーとして残りの被造世界に仕えるための、神から与えられた共同の権威があるのです。

見えなくなり、そして見えるようになる

聖書の本文に存在しないものを見るようになってしまったとき、私たちはそれを見なくなるために神の助けを必要とします。「女性は劣っているから従属している」という教会の歴史的な教えがあったため、古代の注解者の大半は、教会と社会における女性の指導を拒むことを裏づけるために、堕落前のこれらの記述に女性の劣等性を読み込みました。しかし、恵まれた立場にある今の私たちには、以前の世代が、単に自分たちの家父長的で女性蔑視的な文化の目を通して本文を読んでいたの

133. 私と直接やりとりする中で、コリント人への手紙第一6章16節と7章4節のこのつながりに気づかせてくれたアンドリュー・バートレットに感謝します。

だということがわかります。彼らは、周囲に広がっていた文化に立ち向かうどころか、それに屈してしまったのです。

それでも神の恵みによって、教父クリュソストモス[134]だけでなく、プロテスタントの創始者であるルターもまた、創世記2–3章を十分に明確に見ていました。女性についてのルターの全般的な低い見方にもかかわらず、時がたつにつれて、彼は創世記2–3章にないものを「見なくなり」、そこにあるものを十分に味わうことができるようになりました。まだ独身で若かった1523年、彼は創世記を連続して講解説教し、エバは夫に従うために造られたという長く支持されてきた見方を、疑うことなく受け入れていました。彼は、アダムがエバに名をつけたことを、彼女が彼に依存していることのしるしと解釈しました。彼は彼女のことを、夫の知性の陰に隠れた「弱い小さな女」と書き、アダムの堕落を、サタンの異端に影響されやすい彼女のせいにしました。

しかし、ずっと年を取り、結婚してから、彼は同じ箇所をもう一度説教しました。今度は、彼はそれを違ったふうに見ていました。ある歴史家は、彼のメッセージをこうまとめています。「エバは英雄的な女性、優れた哲学者となり、家庭で対等な役割を果たし、夫との対等なパートナーシップのうちに被造世界を治める者となっていた。堕落前にエバがアダムと対等であったさまざまな点を強調したルターの考察は、それまでのどの神学者の考察をも超えていた」。[135]

神の恵みによって、女性蔑視の文化にどっぷりと首までつかっていたルターが創世記2章にかいま見ることのできたものを、私もまた見ることを許されました。私の神学的な旅路の多くにおいて、聖書理解が深まったのは、そこにまったく存在しないものを自分が聖書に読み込んでいたことを認めたときでした。

私は、ついに創世記2章の実際の教えが見えた夜のことを、ありありと思い出すことができます。私は、堕落前の園に男性の指導が存在したとすっかり確信していましたが、（初めて）少なくとも、そうではないかもしれない理由に耳を傾けるくらいには心が開かれていました。この問題についての私たちの教会の研究報告書の一部を書き始めていた私は、賛成と反対の論拠を並べた表を作ろうとしました。その

134. たとえばクリュソストモスは、創世記2章について次のように述べています。「エバは造られるとすぐに従属させられたのではなかった。また、神が彼女を男のもとに連れて来られたときも、彼女が神からそのようなことを聞いたのでもなく、男が彼女にそのような言葉を語ったのでもない。彼は確かに、彼女が自分の骨からの骨、自分の肉からの肉であると言ったのである」。（1 Corinthians, Homily 26）

135. Mickey Mattox, Defender of the Most Holy Matriarchs: Martin Luther's Interpretation of the Women of Genesis, p. 252-53（デビッドソンがFlame of Yahweh, ch.2, fn. 23で引用しています。）

後に起こることへの心の準備はまったくできていませんでした。一つひとつの論拠を考えていくうちに、ある認識がしだいに形を取り始め、私は声に出して叫びました。「なんてことだ。ここにはない。エバはあらゆる点でアダムと対等なんだ！」[136]そのとき、妻が私のそばを通りかかり、私の突然の叫び声に少し当惑していました。私は、自分が今体験していること、そして聖書の中に今まさに見えた（そして見えなくなった）ものを妻に説明したいと思いましたが、言葉が口から出る前に、涙が頬を伝って流れ落ちました。私の目の前に立っていたのは、数えきれないほど見てきた人でありながら、まるで初めて見るかのような人だったからです。「あなたは私のezer kenegdoだ。私の力強い助け手で、完全な伴侶だ。あなたは私の骨からの骨、私の肉からの肉だ」と、私は妻に言いました。「私が弱いところで、あなたは強い」。神の理想についての誤解という梁が心の目から取り除かれた今、私は、神が妻をご覧になるように、妻をかいま見たのです。

私はここで、クリュソストモスやルター、そして今や私が不当に受け入れてきた、創世記1–2章についての突拍子もない解釈を掲げて、危ない橋を渡っているのでしょうか？　まったくそうではありません。旧約聖書における性別とセクシュアリティについて、神学的に保守的な学者が著したおそらく最も権威ある本の中で、リチャード・デビッドソンは、私がこの章で示してきたのとまさに同じ見解をとっており、同じ結論に達している創世記2章についての五十もの主要な学術研究を引用しています。[137]実際、「今日ではほとんどの注解者が、創世記1–2章が堕落前に女性を従属させているという考えを退けている」のです。[138]たとえば、The Book of Genesis: New International Commentary On The Old Testamentは、創世記3章16節に至るまでの二人の関係を「共に対等な者たちの統治……」と描写し、二人は「一つとして治める」と述べています。同様に、Genesis: NIV Application Commentaryは、「創世記2章は……性別役割を確立することも明確に述べることもしていない。新約聖書の本文を考慮に入れたとき、この問題全体についてどのような結論が導かれるにせよ、この本文が関心を持っているのは人間の役割であって、性別役割ではない。男と女はともに仕えるのである」と判断しています。

136. 創世記1–3章のような文書が、これほど徹底して家父長的な世界で書かれていながら、家父長制から自由であるということに、私はただただ圧倒されました。たとえば、ほぼ同じ時代のアトラ・ハシースの起源物語と比べてみてください。そこでは、男神マルドゥクが女神ティアマトを引き裂くことによって創造が起こり、彼女の体の各部分が私たちの物理的な宇宙となるのです。
137. 彼が著書“Flame of Yahweh”を書いて以来、その数はさらに増えています。補完主義の聖書学校の外では、それは大多数の旧約聖書学者の一致した見解となっています。
138. ケビン・ジャイルズがWhat the Bible Actually Teaches on Women, ch. 2でこう述べています。

世界で最大の教会であるローマ・カトリック教会でさえ、今では両性の「本質的」かつ「根本的」な平等を教えており、女性の男性への従属を全面的に堕落に帰しています。教皇ヨハネ・パウロ二世は、創世記3章16節で語られている「この悪しき遺産を克服すること」は「すべてのキリスト者の務めである」と言っています。[139] 家父長制は真理のお守りではありません。むしろそれは、悪い者が初めて私たちの間に這い入ってきたときに、人類の首に滑り込んだものなのです。しかし、神がほめたたえられますように。神は堕落の直後に、エバの子孫[140]がいつの日か来て神の民のくびきを外し、関係を破壊し、多くの人を縛り、互いを見る私たちの見方をゆがめている抑圧の縄目を取り除き、解体してくださることを約束しておられるのです。

139. John Paul II, Mulieris Dignitatem, p. 36–41
140. 創世記3章15節を参照してください。



5
贖われた男女の関係

「イエスは何の騒ぎ立ても宣伝もなしに堕落ののろいを終わらせ、女性に、部分的に失われていた気高さを再び与え、ご自分の新しい御国の共同体のために、男女の平等という本来の創造の祝福を取り戻されました。」ジョン・ストット（John Stott）[141]

私はケープタウンに住んでいます。アフリカの南端にある大きな港町です。さて、こんな状況を想像してみてください。船は町の港を出た瞬間に進路を決めなければならず、その後は二度と針路を変えることが許されません。そうであれば、船は最初に定めた方向が最終的に導く場所に、それがどこであれ到着することになります。ほんの数度の違いが、リオデジャネイロに着くかマイアミに着くかの違いになりうるのです。

前章では、創世記2章と3章について、補完主義の読み方と相互主義の読み方を比べました。そしてわかったのは、補完主義者は男女の間の権威と服従の関係が初めから神の良い創造の一部だったと主張し、相互主義者はこの種の階層は堕落の後に初めて現れたと論じている、ということでした。皆さんもきっとお気づきのとおり、これらはまったく異なる出発点です。どちらの側に立つかによって、聖書の大きな物語（メタストーリー）全体の見え方も、そして実際、最終的にたどり着く結論も、大きく左右されます。男女の関係の最初の方向を誤れば、リオに着くどころか、南極に着いてしまうでしょう（もちろん、たとえですが）！　これこそ、補完主義の（私の見るところ）実に悲劇的な点です。神が嘆いておられることを、教会の大部分が理想としているのです。

男女の関係についての神の良いご計画が、補完主義へ向かう南ではなく、相互主義へ向かう北を目指すものだと、どうして確信できるのでしょうか？　ありがたいこ

141. John Stott, Issues Facing Christians Today, ch. 13.

とに、聖書の物語の中には、特に贖いがその全貌を現すところで、この最初の方向を裏づけるものがほかにも数多くあります。

聖書から神学を引き出すとき、鍵となるのは、ある主題を扱う聖句がいくつあるかということよりも、聖書の中で主な重みを支えている部分を見極めることです。たとえば、聖書の冒頭の三つの章がどれほど決定的で、神学的に豊かであるかは、すでに見てきました。同じように、新約聖書から包括的な性の神学を引き出すにあたっても、絶大な影響力を持つ主要な箇所がほかにいくつかあります。

私の考えでは、そうした箇所には次のものが含まれます。イエスの女性への接し方、ペンテコステの日に聖霊が女性にも注がれたこと、ガラテヤ人への手紙3章28節に示された、贖われた人類についてのパウロのビジョン、そして新しい創造における女性の位置です。

女性の友

第11章では、福音書における女性の働きを検討します。今はとりあえず、イエスが女性にどのように接したかを具体的に見てみましょう。イエスの地上での働きの最も驚くべき側面の一つは、性別による階層をひっくり返し、性差別を覆した、そのやり方です。実際、イエスが女性に与えた根本的な尊厳は、古代世界の宗教指導者として前例のないものでした。私には、イエスのこの点を発見して信仰に入った友人がいます。急進的なフェミニストだった彼女は、歴史における家父長制を研究していて、それぞれの宗教の創始者がどのように男性支配を推し進めてきたのかに興味を持っていました。ところが福音書の中で、イエスこそ歴史上初めての、広く知られた女性の解放者だと知って、彼女はあっけにとられました。「この人はいったい誰なのだろう」と彼女は思いました。そして今、彼女は教会で私の隣に立ち、イエスを深く愛し、イエスに向かって歌っています。

イエスの女性への接し方を、1世紀のラビ・エリエゼル（Eliezer）と比べてみてください。彼はこう警告しました。「トーラーの言葉は、女に託すくらいなら、むしろ焼かれるべきだ。自分の娘にトーラーを教える者は、娘にみだらさを教える者と同じである。」[142]現代に生きる私たちは、イエスは単に女性に親切だったのだと考えるかもしれません。しかし、イエスはそれをはるかに超えていました。革命的だったのです。創世記の最初の数章の誤った読み方と、それに続いて当時知られてい

142. The Mishnah, Sotah 3:4, 19a; 21b

た世界の隅々までを覆った家父長制のために、律法学者やパリサイ人は、世の悪の責任をおおむね女性に負わせ、夫や父や兄弟たちが自由に参加していた社会的・宗教的生活の多くから、女性を厳しく隔離していました。ベン・シラ（Ben Sirach）もエリエゼルの軽蔑を共有していました。「女たちと一緒に座ってはならない。衣服から虫が出るように、女からは女の悪意が出るからだ。男の悪意のほうが、女の親切よりもましである。女は恥と非難をもたらす。」[143]

しかし福音書では、女性たちはイエスの最も親しい友人や従う者たちの中にいます。少なくとも一度の伝道旅行では、十二弟子とともに、ヨハンナ、スザンナ、マグダラのマリアがイエスに同行しています。マグダラのマリアは、イエスによって苦しみに満ちた生活から解放された女性でした。福音書の中で14回以上も言及されている彼女は、よみがえられたばかりのイエスに最初に出会った人物です。復活の日にイエスが彼女に会われたとき、彼女は、よみがえった主の口から出た最初の言葉を聞きます。「女の方……」。初め彼女はそれがイエスだと確信できません。けれども、イエスが彼女の名前を、イエスにしかできない呼び方で呼ばれると、彼女は、死が終わりではないこと、そして自分がイエスの最も親しい友の一人に違いないことを悟るのです。

ナザレのイエスは、女性に尊厳を与えることにおいて先駆者でした。福音書でイエスは、かつて預言者エリヤがしたように、やもめの一人息子を死者の中からよみがえらせます。息子を失った彼女の打ちのめされた思いと、その後に彼女が社会の中で置かれることになる弱い立場の両方を、イエスは心に留めておられたのです。[144]別の機会には、12年もの間、慢性的な出血に苦しんできた女性に出会われます。彼女を汚れているとみなすきよめの律法に反して、彼女はひそかにイエスの衣の房に触れます。イエスは、これによって自分が「汚れた」者になるという考えを意に介さず、むしろ、イエスに手を伸ばし、イエスから癒やしの力を引き出そうとした勇気ある信仰をほめられます。そして、あの最も恐ろしい金曜日、自分の母の心が息子の処刑によって刺し貫かれているまさにその時に、イエスは最も親しい友に、母の世話を頼まれるのです。

女性に言及することさえ避けたラビたちとは対照的に、イエスは説教に女性の登場人物をたくさん登場させます。人々をあきれさせたことに、イエスは私たちの救いを喜ぶ神の喜びを、なくした銀貨を見つけたやもめの喜びにたとえています。[145]

143. シラ書（集会の書）42章12–14節。シラ書は別の箇所で、娘はまったくの損失であり、絶えず恥をもたらしかねない存在だと述べています。
144. ルカの福音書7章11–15節
145. ルカの福音書15章3–10節

またほかの箇所では、私たちが祈りにおいて必要とする大胆さとは、正義を求めてやまないやもめの大胆さだと強調しておられます。[146]

イエスはまた、ご自分のメッセージへのふさわしい応答の模範となった特定の女性たちに光を当てます。赦された遊女の愛に満ちた行いを用いて、パリサイ人のもてなしのない態度を恥じ入らせます。[147]貧しいやもめの気前のよさを指摘し[148]、いらだつ弟子たちの反応にもかかわらず、子どもたちを祝福してもらおうと連れて来た母親たちを受け入れます。

イエスは、女性を男性の気まぐれに対して無防備なままにしていた、誰も疑わなかった規範や律法にさえ異議を唱えます。厳格な宗教グループがイエスを罠にかけようとします。「何か理由があれば、妻を離縁することは律法にかなっているでしょうか。」イエスはこの男性に偏った律法に対して、結婚についての神の本来の意図を引用して答えます。「男は妻と結ばれ、ふたりは一体となるのです。」彼らは、それならなぜモーセは、男が妻に離縁状を渡して去らせるように命じたのかと尋ねます。イエスの答えは衝撃的です。「モーセは、あなたがたの心が頑ななので、妻を離縁することをあなたがたに許したのです。しかし、はじめの時からそうだったのではありません。」[149]妻が男の所有物とみなされ、夕食を台無しにしたとか、十分に美しくないというだけで男が妻を離縁でき、しかも離縁された元妻たちが社会でひどい境遇に置かれていた状況の中で、イエスは男たちに、自分の妻を、イエスが見ているように見るよう迫ります。つまり、生まれながらの、切り離すことのできない、かけがえのない価値を持つ人として見るように、です。堕落の前にエバがアダムにとってそうであったもの——大切にされる相手であり、対等な伴侶——に、彼らの妻も彼らにとってなるべきなのです。これらすべてにおいて、イエスは、彼らが生きている堕落した文化によって結婚の定義が変えられることを許さず、男たちに、自分のezer kenegdosをただ捨て去る特権を与えることもありません。

女性も人間です

女性は本質的に男性とは「別のもの」ではありません。女性は男性と完全に同じ人間性を共有しています。女性に必要なのは特別扱いではなく、人間としての扱いで

146. ルカの福音書18章1–8節
147. ルカの福音書7章36–50節
148. マルコの福音書12章41–44節
149. マタイの福音書19章1–8節

す。イエスは、女性と関わるときに大げさな騒ぎを一切しないことで、このことの模範を示されました。福音書では、女性はただそこにいます。名前が記されることもあれば、背景にいることもあります。受け取ることもあれば、与えることもあります。イエスは女性を男性と対等に扱います。当時としては驚くべきことに、福音書の中でイエスが男性に男として、あるいは女性に女として語りかけている箇所は一つもありません。また、性別役割について、あるいは性別にふさわしい領域にとどまることについて、イエスは何一つ教えていません。カナダの作家サラ・ベッシーはこう言います。

福音書の記録全体を通して、イエスが女性を男性と何ら違った扱いをしなかったことを私は見ました。そして、私はそれが好きでした。私たち女性は、言葉にできないほど大切にされる、高級な陶磁器のようなか弱い存在ではありませんでした。理解したり貢献したり働いたりする能力について、特別な免除も、繊細な気遣いも与えられませんでした。女性は、聖霊による罪の自覚を受けるには甘すぎたり弱すぎたりするわけでもなく、また、人を操り、嫉妬や不安や欺きに陥りやすいせいで闇の王国を押し返すことができない、というわけでもありませんでした。イエスは恩着せがましい態度をとらず、見下すこともありませんでした。[150]

ベッシーの言葉は、オックスフォードの女性学者ドロシー・セイヤーズ（Dorothy Sayers）の思いのいくつかと響き合っています。

女性たちが飼い葉おけのもとに最初に来て、十字架のもとに最後まで残っていたのも、驚くには当たらないのかもしれません。彼女たちは、この方のような男性を知りませんでした。このような人はほかに一人もいなかったのです。彼女たちに小言を言わず、お世辞を言ったり、なだめすかしたり、見下したりすることのなかった預言者であり教師……彼女たちの質問や議論を真剣に受け止め、彼女たちの領分を決めつけず、女らしくあれとせき立てることも、女であることをあざけることもなかった人。私心がなく、守らなければならない不安な男の威厳も持たず、彼女たちをありのままに受け入れ、まったく自意識にとらわれることのなかった人でした。[151]

福音書の著者たちは、社会と働きにおける女性の存在を当たり前のこととして描くだけでなく、女性をできるかぎり肯定的な光の中で描いています。ヨハネの福音書を例にとりましょう。その各章でイエスと女性たちとの関わりを概観すると、一人の女性（マルタ）がイエスに失望していることがわかります。しかしイエスの彼女

150. Sarah Bessey, Jesus Feminist, ch. 1.
151. Dorothy Sayers, Are Women Human? Essays on the Role of Women in Society, p. 68.

への接し方は実に優しく、第11章で見るように、イエスはその後の彼女の悲嘆に最高の栄誉をもって応えられます。彼らがどっぷり浸かっていた、女性を叩き、女性に責任を負わせる社会とは違って、イエスの働きかけに抵抗したり、信じなかったり、イエスを見捨てたり裏切ったりする女性は一人も描かれていません。これを、ヨハネがイエスの男性の弟子たちの偽善、虚栄、移り気、鈍さ、意図的な不信仰、そして徹底した悪をどう描いているかと比べてみてください。[152]

あるいはルカの福音書を例にとりましょう。ルカによるイエスの伝記には、男性と女性が対になっている箇所が27あります。それは、御使いがまず男性のザカリヤに、次にマリアに現れる場面に始まり、イエスの死と復活を目撃し、それに関わる男性と女性の存在に至るまで続きます。ルカがこの傑作の構成にどれほど心を砕いているかを考えると、彼の要点を見落とすのは残念なことです。その要点とは、イエスの到来とともに、女性の完全な尊厳が到来するということです。この点は、特に三人の女性に対するイエスの接し方を見るとき、最もよく受け取れるかもしれません。

井戸の女。女性に神学を教えることが不必要であるばかりか不道徳だと見られていた世界で、ヨハネの福音書4章を見ると、イエスがサマリアのある井戸で、人々に嫌われていた一人の女性と出会うように、わざわざ旅程を組まれたことがわかります。ラビは自分の家族の女性とさえ人前で話さなかったのですから、見知らぬ女性ならなおさらです。そのため彼女は、イエスが公然と助けを求め、自分と関わろうとすることに当惑します。これはすぐに、この女性の男性遍歴と、彼女が神を必要としていることについての、個人的で神学的な話し合いへと発展します。多くの男たちに虐げられてきた者として、彼女の話からは、彼女がそれまで男性からこのように扱われたことが一度もなかったことがわかります。イエスと個人との間で記録されている中で最も長いこの会話の中で、イエスは彼女の神学的な問いに真剣に向き合います。イエスが彼女に、夫を呼んで来るようにと言うとき、妻は夫に従うべきで、夫を導くべきではないという当時の見方を、イエスがさりげなく無視しているらしいことに気づきます。この会話の結果、彼女はヨハネの福音書の中で、イエスがメシアであることを発見する最初の人となり、イエスの最初の大規模な伝道者となるのです。

姦淫の場で捕らえられた女。男たちの一団が、夫ではない男と寝ているところを捕らえられた女を、イエスの足もとに突き出します。モーセの律法は姦淫した男も罪

152. ヨハネの福音書12章4–5節、13章2節、27–40節、37–38節、9章24–35節、そして16章18節、31–32節を参照してください。

に定めていましたが、男はこの話には出てきません。おそらく見逃されたのでしょう。群衆は、彼女の恥と明らかな罪を利用してイエスを罠にかけようとします。そこに彼女は横たわり、顔を土につけ、さらし者にされ、辱められ、最初の石が打ちつけられるのを待っています。しかしイエスは、彼女の周りに守りの円を描きます。[153]沈黙が訪れ、緊張が頂点に達します。そしてイエスは口を開きます。けれども、ほかのすべての声とは違い、イエスの声には怒りと憎しみがみなぎってはいません。罪を犯したことのない者が最初に石を投げなさい、というイエスの挑発は、女ではなく男たちの眉間をまともに打ちます。一人、また一人と、握りしめたこぶしから重い石が手放されます。女は身を起こします。するとイエスがそこで待っておられます。人を造り変える、前代未聞の恵みで、優しく彼女を包みながら。

ベタニアのマリア。中東では、男性と女性は社交の場をともにしませんでした。エルサレムのヨセ・ベン・ヨハナン（Jose ben Johanan）は、「女と多く話す者は自分に災いを招き、ついには地獄を受け継ぐ」と教えていました。[154]ところがイエスは、マリアが「足もとに座る」ことを許して、従う者たちに衝撃を与えます。これは、ある人の弟子になることを表す専門用語でした。それを許した史上初めてのラビとして、イエスはここでも性別の規範に背いています。家事をするのは女性の役割であり、客として招かれたラビと語り合い、その教えを受けるのは男性の役割でした。さらに、ラビの弟子になるということは、やがてラビになる可能性のある訓練の道を歩むことでもありました。それでも、マリアにこの名誉ある場所を許したことでイエスが非難されると、イエスは、自分の足もとにいる彼女の居場所を単に大目に見ているだけではないことを示されます。イエスはそれを励ましているのです。イエスは、鍋を磨いていたマルタをたしなめさえします。「あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは多くはありません――いや、一つだけです。マリアはより良いほうを選びました。」[155]

福音書の中で、私たちはもう一度ベタニアのマリアに出会います。イエスが捕らえられるわずか六日前、十字架の影が頭上に垂れこめる中、イエスは夕食に招かれています。そこへ、かつてイエスの足もとに座っていた彼女が、高価な香油の入った石膏（アラバスター）の壺を持って入って来ます。彼女は静かに部屋を回ってイエスの後ろに立ち、壺を割って、その値のつけられない中身をイエスの頭と足に注ぎます。

153. この一文は、卓越した書き手であるサラ・ベッシーに負っています。感謝します。
154. Perkei Avot 1:5
155. ルカの福音書10章42節

男性の客たちは、その行為も、今や部屋に満ちている美しい香りも、ありがたいとは思いません。それどころか、マリアのささげ物を不合理な無駄遣いだと非難します。イエスは言われます。「彼女をそのままにさせておきなさい！　なぜ困らせるのですか。わたしのために美しいことをしてくれたのです！　埋葬に備えて、前もってわたしのからだに香油を注いでくれました。……世界中どこでも福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも語られます。」[156]マルコの福音書で、これ以上の栄誉を受ける人は一人もいません。しかもイエスは、食卓の男たちの憤りを無視し、自分自身の評判を危険にさらしてまで、その栄誉を与えるのです。そして、今これらの節を読んでいる私たち一人ひとりにとって、何と聖なる瞬間があることでしょう。私たちがイエスの約束の成就となるのです――イエスが栄誉を与えたまさにその女性を認め、その人に栄誉を与えることによって。

女性と宣教の御霊

ペンテコステの日、ペテロは、当惑する群衆に、120人の男女に聖霊が注がれたことの意味を説明します。ペテロは、これが何世紀も前に告げられたヨエルの預言の成就だと主張します。「神は言われる。終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘たちは預言し、青年たちは幻を見、老人たちは夢を見る。その日わたしは、わたしのしもべたちにも、男にも女にも、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。」[157]

ヘブル語聖書全体の中で、奴隷や異邦人や女性に聖霊が注がれたという記録はありません。注がれたのは、自由人のユダヤ人男性にだけです。より具体的に言えば、この種の祝福を受けたのは王と預言者だけでした。ところがヨエルの預言は、おそらくユダヤ人の預言者がした予告の中で最も途方もないものですが、聖霊がユダヤ人の王や預言者だけでなく「すべての人」に与えられる時が来ると宣言しています。そこには異邦人も、身分の低い「しもべ」つまり奴隷も、さらには「娘たち」や「女」も含まれます。

その後、使徒の働きは、エルサレムのあの屋上の部屋から神の御霊が野火のように外へと広がっていく様子を記録しています。御霊は約束していたとおりのことをなさり、女性にも、奴隷にも、異邦人にも満ちあふれ、力を与えられます。生まれ育った環境からくるユダヤ人の自民族中心主義にとらわれていたペテロでさえ、後に

156. マルコの福音書14章1–9節
157. 使徒の働き2章17–18節、ヨエル書2章28–29節

コルネリウスの家で、異邦人に聖霊が注がれるのを見て衝撃を受けます。そのときになって初めて、彼はついに、異邦人も神の民に含まれうると信じることができたのです。[158]聖書を初めから終わりまで読むとき、かつて男性にだけ与えられていたものが、ペンテコステの日に女性にも与えられるのを目の当たりにして、私たちもペテロがコルネリウスの家で経験したのと同じような畏れを感じるはずです！

けれども、これこそまさに、イエスが物事を導こうとしていた方向でした。たとえば、地上の生涯におけるイエスの女性たちとの根本的な関わりは、十字架上の死によって完成されました。その瞬間は、神殿の幕が真っ二つに裂けた瞬間でもあり[159]、かつて至聖所に住まわれた神の聖なる臨在が通りへとあふれ出たのです。イエスの死の当時、ユダヤの神殿の敷地は同心円状の区域から成っていて、最も内側から外側へと、ユダヤ人男性だけが内庭に、異邦人は異邦人の庭に、そしてその後に、女性は婦人の庭に入ることが許されていました。その象徴的な意味は十分に明らかです。それぞれの庭は、さまざまな種類の人々が神の臨在にどこまで近づけるかを表していたのです。神殿の本体に入ることが許されたのはヘブル人の男性だけであり、至聖所の内に入ることが許されたのは、年に一度、ただ一人のユダヤ人男性だけでした。

ですから、その驚きを感じてください。イエスのわき腹から血が流れ出たとき、神の御霊は至聖所からあふれ出ました。堤を破り、隔ての幕を真っ二つに引き裂き、すべての人を事の中心そのものへと招き入れる可能性を開いたのです！神の民の構造の中に、もはや「男性専用」や「ユダヤ人専用」の領域は一切存在しないのです。

御霊の賜物は、人が完全に救われ、神の民に加えられることの一面として与えられるだけでなく、神の宣教に完全に参加するためにも与えられます。ヨエルはその預言の中で、ペテロはその説教の中で、どちらも御霊を、世界に向けて発せられる招きと結びつけています。「主の名を呼び求める者はみな救われる。」[160]ヨエルとペテロが言いたいのは、メシアが来られるとき、自由人も奴隷も、老人も若者も、富む者も貧しい者も、ユダヤ人も異邦人も、そして男も女も、等しく救われ、等しく御霊の力によって宣教へと遣わされるということです。キリストにあって、私たちはみな、男性も女性も、王、預言者、祭司、使者、宣教師となるのです。

158. 使徒の働き10章44–48節
159. マタイの福音書27章5節
160. 使徒の働き2章21節、ヨエル書2章32節

ヨエルの預言は、最初の教会が始まるとともに実を結び始めます。使徒の働き1章では、御霊が与えられる前のことがこう記されています。「彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。そのころ、ペテロが信者たち（約百二十人の人々が一つになって集まっていた）の中に立って言った。『兄弟姉妹たち……』」[161]なぜ男性だけでなく女性たちも備えをしていたのでしょうか？　ごく単純なことです。彼女たちもまた、よみがえられたイエスから任命を受けていたのです。使徒の働き1章は、ルカの福音書24章のすぐ後に続いています。そこでは、天に昇られる数日前に、イエスが弟子たち――使徒たち「とその仲間たち」[162]を含む――と食事をし、すべての国の人々に対するイエスの証人となるように、ただし、いと高き所から力を受けてからそうするように命じておられます。「その仲間たち」とは誰でしょうか？　そこには多くの女性が含まれています。10節では「彼女たち」は女性たちであり、この「彼女たち」が、33節、50–53節、そして使徒の働き1章14節で「彼ら」になっていくのです。「彼ら」（多くの女性を含む）が御霊を受けたとき、何が起こるでしょうか？彼らは「みな」、見ている人々の前で「神の大きなみわざを語り」[163]始めます――男性だけでなく、女性も神の宣教の最前線に立っていたのです。[164]

教会に与えられた最高の祝福が御霊であり、教会の最も重要な働きが、失われ死にかけている世界にイエスを宣べ伝えることであるなら、初代教会の女性たちが――旧約聖書の傾向とはまったく逆に――男性とともに、力と宣教に完全に参加していたことに注目しなければなりません。この決定的な点を見落とさないようにしましょう。聖書の物語の地平線にそびえているのはユダヤ人、男性、そして主人たちですが、ヨエルの預言とペテロによるその引用は、神のご計画の中で、異邦人、奴隷、そして女性にも等しい場所が与えられていることを示しています。これと非常によく似たことを語る、小さいけれども重みを支えるもう一つの箇所があります。

161. 使徒の働き1章15–16節
162. ルカの福音書24章33節
163. 使徒の働き2章11節
164. 同じように使徒の働き4章でも、同じエルサレム教会の中で、女性たちが再び福音宣教の最先端にいるのが見られます。ペテロとヨハネは牢から釈放されると、仲間たちのところへ行き、彼らを祈りの時へと導きます。「彼らが祈り終えると、集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語り続けた。」（使徒4:31）祈り、宣べ伝えた「彼ら」とは誰でしょうか？ 使徒の働き1章と2章で言及されている女性たちが除外されていたと考える理由はありません。このことは、男性と女性が神の良さを宣べ伝えた結果を見るとき、明らかになります。「そして、主を信じる者たちはますます増え、男も女も大勢になった。」（使徒5:14）

ユダヤ人も異邦人もなく

パウロはイエスに出会う前、すべてのユダヤ人と同じように、おそらく、自分を異邦人や奴隷や女に造らなかったことを神に感謝する朝の祈りをささげていたことでしょう。女性たちもいる会堂でこの祈りがささげられるとき、女性たちはそれに応えて、「あなたのみこころにしたがって私を造ってくださった」ことを神に感謝しました。そうすることで女性たちは、神の目に自分たちが劣っていることを認め、古代ユダヤ人の生活の中で自分たちの特権がより少ないことを受け入れていたのです。

旧約聖書における契約のしるしである割礼は、ユダヤ人男性にとって耐えるのがとても痛いものだったと思うかもしれません。しかし実際には、それは彼らが身に帯びていた地位の象徴であり、彼らを最高の宗教的階層に属する者として印づけるものでした。その階層からは、異邦人も女性も締め出されていました。では、新約聖書の契約のしるしがもたらした平等の感動を想像してみてください。もはや男性の割礼（その性質上、締め出すものでした）ではなく、バプテスマこそがすべての信者の儀式となり、ユダヤ人にも異邦人にも、男性にも女性にも授けられるのです。

多くの学者によれば、ガラテヤ人への手紙3章28節の次の言葉は、回心前のパウロの朝の祈りを見事に打ち消すもので、バプテスマの際に口で唱えられる定式として用いられていました。「ユダヤ人も異邦人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」[165] その鍵となる言葉は「キリスト・イエスにあって」です。ナザレのイエスは、ユダヤ人が神の民の中で最も高い地位にあると信じていた者――自由人のユダヤ人男性――にあたりますが、イエスの名によってバプテスマを受けるすべての人は、イエスにあって、その同じ尊い地位を受け継ぐのです。この節は、すべての人間を同じ低さに引き下げるのではありません。むしろ、贖われた人類を同じ高さに引き上げるのです。この節が聖書の中で最も社会的な爆発力を持つ聖句と呼ばれ、パウロによる人類のマグナ・カルタと呼ばれてきたのも不思議ではありません。ガラテヤ人への手紙3章28節を手紙全体の文脈の中で読むと、パウロの言いたいことは、神の家族は二つではなく一つだということだとわかります。神がアブラハムに約束され

165. すぐ前の文脈がこの結びつきを明らかにしています。「キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです」（ガラテヤ3:27）。新しい信者たちは、バプテスマの水に入るとき、キリストにある新しいアイデンティティと一致を言い表したのです。

た家族は、イエスを信じるすべての人から成っています。アブラハムの息子たちも娘たちも、彼の遺伝子を受け継いだ人々、つまり信じるユダヤ人も、彼の信仰に倣った人々、つまり信じる異邦人も、です。パウロがこれを書いたのは、ユダヤ人と異邦人の間の問題のある関係に対処するためでした。ユダヤ人は長い間、自分たちは異邦人より優れていると思い込んでいました。そして、今では同じ救い主を共有しているにもかかわらず、なお自分たちこそ神のお気に入りだと思い込んでいました。異邦人が神の前で自分たちと本当に対等な者として立ちたいなら、まず割礼を受けなければならない、と多くのユダヤ人キリスト者は考えていました。パウロはそれをまったく受けつけません。割礼を受けた者と受けていない者の区別など関係ないと宣言します。ユダヤ人も異邦人も、アブラハムの内輪の仲間に完全に加わることができるのです。「ユダヤ人も異邦人もなく」とパウロは言います。パウロによれば、「外の世界」に存在する民族的・社会的な格差が何であれ、それは「ここ教会の中」では取るに足りないのです。

ガラテヤ人への手紙の焦点は、ユダヤ人が異邦人を劣った者と見ていたことにありますが、パウロはついでに、同じ原理が「自由人と奴隷」、「男と女」という階層にも当てはまると述べています。パウロの要点は、福音が、民族、社会的地位、性別に根ざした価値と特権の階層的な仕組みを廃止する、ということです。

奴隷も自由人もなく

ガラテヤ人への手紙でパウロは、文化の大地震とも言えるものを引き起こす急進的な神学を語っています。もっとも、それは初めは小さな前触れの揺れとしてしか感じられませんでした。同じように、ピレモンへの手紙でも、パウロは一人のキリスト者の主人に、戻ってくる自分の奴隷への接し方をどう改めるべきかを指導しています。パウロは、コロサイの家の教会のこのリーダーに、逃亡した奴隷オネシモを迎え入れるよう勧めます。逃亡後、オネシモは信仰に入っていました。そこでパウロは今、この手紙とともに、彼を「主人」のもとへ送り返します。ただし、二人の関係のこれまでのあり方は崩されることになる、という了解のもとにです。パウロはピレモンに、オネシモをこう受け入れるよう迫ります。「もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、愛する兄弟として。彼は私にとって非常に愛しい者ですが、あなたにとっては、人としても主にある兄弟としても、なおさらそうです。」[166]ガラテヤ人への手紙とピレモンへの手紙を並べてみると、パウロがユダヤ人と異邦人

166. ピレモンへの手紙16節

の間の緊張と、自由人と奴隷の間の緊張を、同じ方法で扱っていることに気づきます。社会的な違いを否定することなく、福音の持つ一つにし、対等にする力を当てはめることによって、階層をできるかぎり解消しようとしているのです。[167]

これらすべての例において、パウロは、信者たちが互いをどう見、どう扱うかという点で、社会の階層を根本から覆しています。ガラテヤの教会ではユダヤ人とギリシア人の関係を、コロサイの教会では主人と奴隷の関係を、です。パウロは彼らの社会的な違いを消し去ってはいないかもしれません。[168]しかし、キリストの十字架と御霊の賜物は、長い間受け入れられ、尊ばれてきた差別、敵意、排除、そして階層的な規範を解消し始めているのです。

パウロはどの手紙においても、福音が共同体の日々の生活に実際にどのような違いをもたらすかに、特に関心を寄せています。教会は、ただ福音を信じるためにあるのではありません。教会は、その共同体の中で、また共同体を通して、人々が互いに関わり合い、並んで働くための最善のあり方を実際に形にしていくために存在しています。教会は、すべての人が対等な立場で参加するよう意図されている、世界でただ一つの場所なのです。

この点をまったく見落として、多くの補完主義の学者たちは、ガラテヤ人への手紙3章28節を、神の前での人の立場についての一般的な発言としてしか読まず、パウロがこの決定的な神学の実際的・共同体的な現れにこそ特に関心を寄せているという事実を否定しています。けれどもパウロの考えでは、神の前での私たちの立場は、私たちの具体的な人間関係と、教会がとる形を形づくるものです。キリストの福音は、神との新しい関わり方だけでなく、互いとの新しい関わり方をも開きます。パウロが育った、ユダヤ的で非常に階層的な世界は、キリストにあって覆されました。キリストにあるこの新しい存在は、共同体の新しい経験へとつながるはずだ、とガラテヤ人への手紙3章28節は言っているのです。

167. 同じように、コリントの教会における富む者と貧しい者の緊張を扱う中で、パウロはコリント人への手紙第一11章17–34節で、その共同体の富む人々が貧しい人々を扱っていた罪深いやり方に立ち向かいます。主の晩餐の食卓で、貧しい人々を飢えたままにして、自分たちは腹いっぱい食べて酔っていることを叱責します。パウロは彼らに尋ねます。「神の教会を軽んじて、何も持たない人たちに恥ずかしい思いをさせるのですか。」富む者と貧しい者がキリストの一つのからだとして結び合わされている福音においては、より良い道は、「兄弟姉妹たち、食べるために集まるときは、互いに待ち合わせる」ことです。

168. このためパウロは、牧会的・宣教的なレベルでは、ユダヤ人と異邦人に福音を伝えるときにも、ユダヤ人が守っていたモーセの律法の問題について彼らを牧会するときにも、依然として異なるアプローチを選んでいます。（コリント人への手紙第一9章17–23節、ローマ人への手紙14–15章を参照。）ユダヤ人と異邦人は、「同じ目的地」に到着したかもしれませんが、「まったく異なる道筋を通ってやって来たのであり、まったく異なる文化的記憶と想像力を保っている」のです。（N・T・ライト――出典：www.bit.ly/3q7vQid）

これは性別にとって何を意味するのでしょうか？

男と女もなく

「ユダヤ人と異邦人」、「生まれながらの自由人と奴隷」の間の一致と平等を挙げた後、パウロは三つ目の組を加えます。「男と女」です。これは、私たちがバプテスマを受けると性別のない、性のない存在になる、とパウロが言っているという意味ではありません。そうではなく、なくならなければならないのは、張りつめた力関係なのです。「外の世界」では男と女の間の階層と現状がはっきりしているかもしれませんが、「ここ教会の中」では新しい秩序が姿を現し始めています。

教会におけるリーダーシップについてはどうでしょうか？　これは後でもっと詳しく取り上げる主題ですが、今は、新約聖書学者F・F・ブルースによる次の鋭い観察に注目してください。

キリストにある男と女の地位をパウロが対等にしていることには、ユダヤ人と異邦人、あるいは奴隷と自由人の地位を対等にしていることと比べて、より多くの制限が含まれているわけではありません。日常生活において、キリストにある存在が教会の交わりの中で公然と表されるのだとすれば、異邦人がユダヤ人と同じように自由に、あるいは奴隷が市民と同じように自由に、教会で霊的な指導を行うことができるのなら、女性が男性と同じように自由にそうしてはならない理由があるでしょうか？[169]

私たちの中には、ブルースの指摘を受け入れるのに苦労する人もいるかもしれません。しかし私の考えでは、それはパウロが述べている観察と一致しています。つまり、性別や社会的地位や民族を根拠に特権や権力や序列を守ろうとするあらゆる試みを退けるということです。ブルースは、非常に多くの聖書学者に見られる矛盾を浮き彫りにしようとしています。彼らは、パウロの神学が民族的な（ユダヤ人と異邦人の）関係や社会経済的な（奴隷と自由人の）関係に対して持つ意味については喜んで論じるのに、それを男女の関係には当てはめようとしないのです。しかし、パウロの簡潔な神学的発言の中では、この三つは並行しています。

少なくとも言えるのは、パウロはガラテヤ人への手紙の中で、異邦人について論じているようには、これが女性と奴隷にとって何を意味するのかを詳しく展開してはいないものの、ある人々に特権を与え、ほかの人々を不当に罰する障壁を、明らか

169. F.F. Bruce. The Epistle to the Galatians

に取り壊しているということです。パウロは、女性も奴隷も異邦人も、文化的な階層から自由にされ、キリストのからだの中で一致と平等を経験することを思い描いています。そこでは区別は完全には取り除かれないとしても、大幅に縮められるべきなのです。これは実に急進的な考えです。

しかし、これはすべてどこへ向かっているのでしょうか？　初代教会における女性の奉仕の役割については第12章で探りますが、今は物語の終わりへと一気に飛んでみましょう。

天におけるように

今のところ私たちは、創世記3章16節の暗い予告が成就しつつある時代、男性がたやすく女性を支配する時代に生きています。しかし家父長制は、最後にはイエスのParousia（来臨）によって飲み込まれます。ガラテヤ人への手紙の終わりで――この手紙の中でパウロは、福音がどのように神の民の中の分裂と階層を廃止するかを示そうとしてきました――パウロはこう言います。「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことではありません。大事なのは新しい創造です。」[170]新しい創造とは、人類と宇宙を造り直すという神の約束を指しています。神が将来この世界を造り直されるとき、分裂と階層はもはや存在しません。けれども、すでに今、この未来は、キリストの働きと御霊の臨在によって教会の中にもたらされています。御霊はすべての人にリーダーシップと教えの賜物を与え、男性と女性が再び並んで治めるようにしてくださるのです（ルカ22:30）。[171]

しかし、補完主義の学者の中には、将来の世界においてさえ、治めるのは女性ではなく男性だと主張する人々もいます。確かにイエスは、男性の使徒たちに将来の十二の座を約束し、いつの日か彼らの犠牲に大きな栄誉をもって報いると言われました。[172]しかし、それらの約束が語られている箇所を読むと、イエスは同じような

170. ガラテヤ人への手紙6章15節
171. 来たるべき御国についてのヨエルの預言によれば、御霊が大洪水のように注がれ、あらゆる国の大勢の人々がメシアである主の名を呼び求めるようになるとき、男性も女性も、その中心的な参加者となります。
172. マタイの福音書19章28節とルカの福音書22章30節

約束を、十二人だけでなくご自分に従うすべての人に広げておられます。[173]ヨハネの黙示的な幻に出てくる24人の長老について言えば、黙示的な象徴をあまりに推し進めすぎてはなりません。たとえ24人がイスラエルの12人の息子と12人の使徒から成っているとしても、彼らが表しているのは神の民全体です。そのうえ、最高の栄誉が永遠に24人の自由人のユダヤ人男性のために取っておかれていると主張することの問題は、それが女性だけでなく、奴隷や異邦人にも関わってくるということです。彼らは永遠に最下層にとどまるのでしょうか？　決してそうではありません。そのような結論になるのは、聖書の象徴的な言葉を文字どおりに読むという、あまりにもありふれた解釈上の誤りを犯した場合だけでしょう。

イエスの教えにおいて明らかなのは、堕落した世界で最も低い段にいる人々が、贖われた世界では最も高い地位を与えられるということです。タラントのたとえで、イエスは、この地上での忠実さを、天での報いと天における権威に結びつけています。4世紀のキリスト教の殉教者ブランディナ（Blandina）は、「か細く弱々しい、さげすまれた女奴隷」でしたが、死に至るまでの忠実さによって、自分が「天の選ばれた者たちの中に置かれ、神の輝く宮殿の栄光のただ中に座らされ、堕落した世界では計り知れないほど彼女より上位にあった人々よりも前に置かれる」かもしれないと信じていました。そう信じたのは正しかったのです。[174]

新しい天と新しい地において、男性も女性も対等な共同相続人になると、どうしてわかるのでしょうか？　旧約聖書には、神が特別な油注ぎのために選び分けた三つの「指導的」な務めがありました。預言者、祭司、王です。新約聖書はこの三つの役割を取り上げ、それらを――発展した形ではありますが――永遠へと投影しています。

女性は預言者であり、これからも預言者です。ペンテコステの日に女性たちが男性とともに預言していたことは、すでに見ました。私たちが知っている形の預言は終わりを迎えますが、神の民は永遠に神のことばを告げ続けると考えられます。同じように、女性は王であり祭司であり、これからもそうです。ペテロは、手紙を書き

173. マタイの福音書19章で、イエスは、ご自分のための犠牲に報いて十二人が十二の座に着くという明らかに比喩的な約束をした直後に、ご自分のために犠牲を払う「だれでも」この世と来るべき世で報いを受け、地上で後にいる多くの者が天で先になる、と語っておられます。同じように、ルカの福音書22章では、弟子たちがイスラエルを裁く十二の座に着くことに言及する（これもまた非常に象徴的です）直前に、イエスは、ご自分の御国ではすべての人に仕える者が最も偉大な者になると言っておられます。これは十二人だけでなく、潜在的には誰にでも当てはまる言葉です。どちらの場合も、十二の座は象徴的であり、天では使徒たちよりもさらに高い栄誉を受ける人々がいるかもしれない、という考えが前提になっています。
174. Tom Holland, Dominion: The Making of the Western Mind, ch. 4

送っている教会の女性たちも含めて、彼らが「選ばれた種族、王である祭司」だと語っています。[175]ヨハネもまた女性を含めて、これらの役割が永遠に続くことを神に賛美しています。「あなたは彼らを、私たちの神のために王国とし、祭司とされました。彼らは地を治めるのです。」[176]

想像力を時の最も遠い地平線にまで伸ばしてみてください。そうすれば、新しい天と新しい地でガラテヤ人への手紙3章28節が完全に成就するのを見るとき、これまで人類の歴史を支配してきた性別による階層が、最後に姿を消してしまうことに気づくでしょう。男女の間のあらゆる競争、一方による他方のあらゆる貶めは、ついに、互いを心から認め合い、互いに協力し合うことへと道を譲るのです。

このことに驚くべきではありません。新しい創造とは、最初の創造の回復であり、その完全な開花なのです。神の最初の設計は、アダムとエバの両方が神のことばの管理者であり、両方が王と女王として地を治め、両方が祭司として園という神殿で仕えることでした。永遠にわたって、贖われた男性と女性は、最初の創造が最終的に実現される中で、共同の預言者、共同の統治者、共同の祭司として、肩を並べて働くのです。もしそれが、イエスの教会にとってすべてが向かっている行き先であるなら、どうして今、それに満たないもので満足することがあるでしょうか？

大きなことは小さな聖句の中で起こる

聖書に名前の出てくる何千人もの人々のうち、圧倒的多数は自由人のユダヤ人男性です。実際、聖書全体で名前が出てくる女性は200人しかいません。聖書の物語、そして人類の物語において、女性にとってこれほどすばらしい始まりがあった後、最初の両親の堕落が私たちを悲惨な方向へと向かわせます。聖書の主要な登場人物のほとんどは、奴隷ではなく自由人、異邦人ではなくユダヤ人、そして女性ではなく男性です。これをどう考えればよいのでしょうか？　それでは、聖書の統計だけから見て、神は自由人のユダヤ人男性のほうを好まれると結論づけるべきなのでしょうか？

決してそうではありません。私たちが主にユダヤ人についての物語を見いだすのは、彼らが、メシアの到来を待ち望み、メシアを迎え、メシアを世界と分かち合うために、神によって特別に召された民だったからです。同じように、自由人の男性

175. ペテロの手紙第一2章9節
176. ヨハネの黙示録5章10節

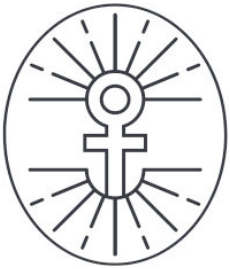
があらゆるところに登場するのは、地中海世界の古代の社会状況が、奴隷と女性を事実上目に見えない存在にし、公の領域から締め出していたからです。そして聖書の物語の多くが展開するのは、まさにその公の領域なのです。

ですから、聖書に明らかに見られる統計上の偏りは、神がご自分の御国における特別な扱いや務めのために男性を優先的に選ばれた結果ではなく、むしろ、堕落した男性支配の世界（神が創世記3章で予告されたとおりの世界）の結果なのです。神はその世界に、ご自分の啓示と贖いの目的をもって、あわれみ深く忍耐強く譲歩してくださったのです。

さらに、旧約聖書だけでなく新約聖書においても、ユダヤ人がこれほど強調されていることを見ても、非常に大きな神学的意味を持つ決定的な聖書の言葉――たとえば、アブラハムの子孫が「世界の国々を祝福する」という約束や、「キリストにあってはユダヤ人も異邦人もない」という教会についての宣言――を考慮に入れるなら、ユダヤ人が神のご計画の中でより高い位置にあると結論づけることはできません。こうした言葉は数少なく、まばらにしか出てきませんが、聖書解釈においても、教会で受け入れられている信仰と実践においても、決め手となる要素の役割を果たしています。

聖書の物語は、自由人のユダヤ人男性に占められてはいても、自由人のユダヤ人男性だけについての物語ではありません。神学的に言えば、大きなことは小さな聖句の中で起こるのです。すべての聖句が同じ重みを持っているわけではありません。宝石は地上のあちこちに散らばっているかもしれませんが、膨大な量が見つかる場所もあります。聖書はすべて神の霊感によるものですが、重要な教理が特定の場所に膨大な量で集まっていることに気づきます。神の心の中で、教会の中で、そして世界の未来と歴史の完成において、女性の占める位置を明らかにすることに関して言えば、最も声高く語る聖書の部分は、次のようなものになる傾向があります。聖書の物語のまさに始まりとまさに終わり、そしてその間にある、イエスの女性への接し方、ヨエル書2章の成就として性別を問わない御霊が注がれたこと、そしてガラテヤ人への手紙3章28節に示されたパウロの急進的なビジョンです。それは霊的な平等のビジョンであり、その平等は、ゆっくりと、しかし確実に、教会の中で社会的・機能的な平等として現れ始めます。このことは、特にローマ人への手紙16章（第12章で詳しく見ます）と、ローマ人への手紙12章（第13章で探ります）において明らかです。

こうした座標が定まれば、女性をどう評価するかにおいて、南ではなく北へ向かうことがずっと容易になります。また、表面的に読むと女性の劣等性や従属をほのめかしているように見える、向かい風となる三つの聖書箇所を理解することも、ずっと容易になります。次に、この激しく議論されている箇所に目を向けましょう。



第二部

制限され（ない）女性たち



6
コリントの女性たち

「とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。」コリント人への手紙第一11章11節

ここで一つ助言をさせてください。難しい聖書箇所を理解するための技術的な作業がどうしても苦手なら、この章と次の章は飛ばして、最後に戻って来てください。私の妻は私の最初の原稿の最初の読者でしたが、「この本のどの章も読むのが楽しい」と言ってくれました。ただし、この章と次の章は例外で、「とても骨の折れる作業」だというのです。読者のために、この二つの章がこれほど複雑でなければよかったのにと思います。しかし、補完主義は「聖書的」な議論が非常に巧妙に張りめぐらされた網なので、人々や教会がそこから自由になるのを見たいなら、この網を一本ずつほどいていかなければならないのです。

簡単に概要を述べると、この章と次の章で示す主要な点は、率直に言えば、補完主義者はパウロの手紙の三つの箇所（コリント人への手紙第一11章3–16節、コリント人への手紙第一14章33–35節、テモテへの手紙第一2章11–15節）を誤って読んできたということです。彼らは、パウロがすべての教会ですべての時代に女性の従属を教えていると結論づけます。しかしこれらの箇所でパウロは、特定の歴史的状況や、文化特有の感覚に取り組んでいるのです。これらの聖句には、今日の私たちの助けとなる性についての神学のかけらが詰まってはいますが、どれ一つとして、普遍化された性別による階層を支持してはいません。

この章では最初の二つの箇所を扱い、次の章で三つ目を扱います。そのつど、補完主義の解釈を理解し、批判することを試み、それからより良い解釈へと進んでいきます。ペテロは、パウロの手紙について「その中には難しくて、理解しにくいところがあります」と言っています。[177]この三つの箇所は、そのリストの筆頭に来る

177. ペテロの手紙第二3章16節

に違いありません。（飛び込む前にもう一つ。この章と次の章に詰め込みすぎないように、非常に重要な内容の多くを巻末の注に収めました。ですから、どうぞそちらも掘り下げてみてください。）

コリント人への手紙第一11章3–16節

最初の箇所は頭のかぶり物に関するものです。さあ、この箇所については、どうぞ「考える帽子」をかぶってお読みください。私はこれまでの人生で何度も、そのたびに何日もかけて、この箇所に何とか筋道をつけようと頭をひねってきました。そして少しばかりの洞察を得て離れましたが、始めたときよりも多くの疑問も抱えることになりました。この箇所について私がたどり着いたところまで、皆さんにお伝えしましょう。

この箇所にざっと目を通してください（章を読み進めるにつれて、何度か戻って参照する必要があるかもしれません）。そして読んでいるうちに頭がくらくらし始めても、驚かないでください。

3 しかし、あなたがたに次のことを知ってほしいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。4 男はだれでも、頭をおおって祈ったり預言したりするなら、自分の頭を辱めることになります。5 しかし女はだれでも、頭をおおわずに祈ったり預言したりするなら、自分の頭を辱めることになります。それは頭を剃っているのと同じことなのです。6 女が頭をおおわないのなら、髪も切ってしまいなさい。しかし、髪を切ったり頭を剃ったりすることが女として恥ずかしいことなら、頭をおおいなさい。

7 男は神のかたちであり、神の栄光なので、頭をおおうべきではありません。一方、女は男の栄光です。8 男が女から出たのではなく、女が男から出たのであり、9 また男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたからです。10 こういうわけで、女は御使いたちのゆえに、自分の頭に対して権威を持つべきです。11 とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。12 女が男から出たように、男も女から生まれるからです。しかし、すべてのものは神から出ています。

13 あなたがた自身で判断しなさい。女が頭をおおわずに神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。14 自然そのものが、あなたがたにこう教えていないでしょう

か。男が長い髪をしていたら、それは彼にとって恥ずかしいことであり、15 女が長い髪をしていたら、それは彼女にとって栄光なのです。長い髪はおおいとして女に与えられているからです。16 だれかがこのことについて論争したがっても、私たちにはほかにそのような習慣はありませんし、神の諸教会にもありません。

私の最も物議を醸す主張から先に言わせてください。もしこの箇所についての補完主義の解釈が正しいなら――一部の補完主義者はこれを否定しますが――それは次のことを意味します。第一に、すべての成人女性は、一人の男性、たいていは父親か夫の権威の下で生きるように意図されている、ということ。第二に、女性は教会で、そして社会でも、男性を導く最上位のリーダーになるようには意図されておらず、おそらく、男性を導く下位のリーダーになるようにも意図されていない、ということ。そして第三に、すべての女性は、おおむねすべての男性に従うように意図されている、ということです。姉妹が兄弟に対しても、女性の同僚が男性の同僚に対してもです。私は補完主義者だったころでさえ、こうは主張しませんでした。しかし、もっと詳しく調べてみると、これが実際には、この箇所の一貫した補完主義の解釈の帰結であることに気づいたのです。ですから、もしそれこそ神がこの箇所で語っておられることであるなら、私たちはそれを確かに知る必要があります。しかし、もしそれが神の語っておられることでないなら、私たちはそのことも確かに知りたいはずです。では、本題に入りましょう。

頭のかぶり物について教えている聖書中唯一の箇所で、パウロが懸念しているのは、公の礼拝の間に髪を垂らしたり、ベールを着けなかったりする女性たち[178]、そして髪を長く伸ばす男性たちのことです。現代の西洋文化では、どちらも問題にはならないでしょう。しかしその文化では、それはパウロが賢明ではないと考えるメッセージを発していました。そこでパウロは、手紙の中でかなり長い部分をこの問題に割いています。手紙のほかの箇所でもしているように、パウロは行いを改めるよう単に命じるのではなく、いくつもの理由を積み重ねています。ところが、解釈という飛行機を滑走路から離陸させようとしたちょうどその時、私たちは、最も

178. パウロが言っているのが、1）頭巾やベールでおおわれた頭なのか、それとも2）長い髪やほどいた髪なのかについての学問的な議論は、うんざりするほど込み入っています。アンソニー・ティセルトン（Anthony Thiselton）によるコリント人への手紙第一の権威ある注解書は、両方の側の論拠を概観し、僅差で、それが頭のかぶり物、ベール、あるいは頭巾であるという側に立っています。私もそれに従います。

優れた学者たちの意見をも分ける、いくつものスピードバンプにぶつかります。[179]まず、パウロがどんな状況に対処しているのかから始めましょう。

その状況と、それがパウロを憂慮させた理由

どうやら、教会の集まりでベールを着けずに、自分の髪を皆の目にさらしている女性たちがいて、また髪を長く伸ばしている男性たちもいたようです。そこでパウロは、教会の礼拝の集まりで祈りや預言に加わるとき、女性はベールで頭をおおい、男性は髪を短くしておくよう求めます。パウロは命令を出すまでには至っていません。文化的な感覚を含む多くの論拠に基づいて訴えているのです。

なぜ女性たちはベールを外し、なぜ男性たちは髪を長く伸ばしたのでしょうか？反抗していたのかもしれません。しかし、より可能性が高いのは、パウロが説いた男女のキリスト教的平等（ガラテヤ人への手紙3章28節にあるような）が、男性と女性の間に何の違いもないことを意味すると思い込み、そのために自分たちの文化の性別にまつわる礼儀作法を無視した、ということです。女性たちにとってもう一つ考えられる動機は、男性のように振る舞うことで、社会における自分たちの二次的な地位を乗り越えたいという願いです。女性たちがベールを外していたことについては、それを推し進めていたのは男性たちだったのでしょうか、それとも女性たちだったのでしょうか？　ほとんどの注解者は、女性たちが自分から進んでベールを外していたと言います。最近、シンシア・ウェストフォールは、このあとすぐ取り上げる10節に基づいて、実は女性たちは男性たちからそうするよう圧力を受けていたのだと論じています。どちらの見方をとるにせよ、パウロはこの箇所で罪深い態度に取り組んでいるのではありません。当時の文化的な感覚を守るための論拠を示しているだけです。彼らがそうした動機が何であったにせよ、パウロは、女性が

179. ウィリアム・ウィットは、Icons of Christ, ch. 8 の中で、学者たちが異なる答えを出している問いを列挙しています。パウロが語っているのは、何らかの頭のかぶり物や頭の装身具（ショール、頭巾、チュニック、ベール）なのか、それとも髪型（長い髪、あるいはほどいた髪）なのか？「頭」を表すギリシア語（kephalē）は何を意味するのか？ パウロはどうして、神がキリストのかしら、キリストが男のかしら、男が女のかしら、というまったく異なる組み合わせの間に並行関係を引くことができるのか？「男」と「女」は男性と女性一般を指すのか、それとも特に夫と妻を指すのか？ 男は神の栄光であるのに、女は男の栄光である、とはどういう意味か？ 女が自分の頭に対して「権威」を持つべきだとパウロが書くとき、それは何を意味するのか？ 御使いへの言及の意味は何か？ 男は長い髪をしているべきではないと「自然が教えている」というパウロの言葉を、どう考えればよいのか？ パウロが「私たちにはそのような習慣はない」と述べるとき、どの習慣のことを言っているのか？

ベールを外すことも、男性が髪を長く伸ばすことも、良い考えだとは思っていません。パウロにはいくつかの懸念があります。

第一の懸念は、創世記1章と2章の記述に基づくもので、神は男性と女性を等しい価値のある者として造られたけれども、互いに同一の者としては造られなかった、ということです。「神は人を男と女に造られた」のですから、パウロは、両者を一つの形のない単一体にしてしまうのは賢明ではないと考えます。

第二の懸念は、彼らの文化では、女性が家の外で長い髪をほどいて垂らしていると、それは低い身分と、性的に近づいてよい存在であることを伝えた、ということです。シンシア・ウェストフォールは、ギリシア・ローマ世界では、女奴隷や娼婦はベールを着けることが禁じられていたという事実を記録しています。[180]既婚女性は、尊敬される既婚者としての身分、慎み、貞潔のしるしとして頭をおおいました。頭のかぶり物は、彼女たちの尊ばれた身分を物語っていたのです。[181]ですからパウロの考えでは、教会の集まりですべての女性が頭をおおうとき、それは、独身であれ既婚であれ、奴隷であれ自由人であれ、すべての女性が、キリストにあって、また教会において尊ばれていること、教会の外では尊ばれていなかった女性たちでさえそうであることを、見事に伝えていたのです。コリントの教会が主に社会で低い身分の女性たち――「知恵ある者が多くはなく、力ある者が多くはなく、身分の高い者も多くはありません」[182]――から成っていたことを心に留めると、頭のかぶり物に対するパウロのこだわりが、実はキリストにあるすべての女性についての、文化に逆らう高い見方を与えるものだったことがよくわかります。

第三の懸念は、前の懸念と関係していますが、その文化では、女性が人前で髪をおおわずにさらすことは恥ずべき行為だったということです。実際パウロは、4–6節で「辱める」という言葉を二度、「恥ずかしい」という言葉を一度使っています。どちらも「恥」と訳すことができます。恥と名誉の文化においては、おおわれていない頭は女性に注目を集め、その女性の自尊心を、共同体が彼女に払う敬意を、そして――見ている人々の目には――礼拝されている神への敬意をも損なうことになりました。

最後の懸念は、以上のことすべてが教会の「秩序」を損なうということです。この教えの部分は、コリント人への手紙の中のより大きな区分に収まっています。その区分は、無秩序になってしまった教会に秩序を与えることに特に充てられており

180. Cynthia Westfall, Paul and Gender, 25.
181. Cynthia Westfall, Paul and Gender, 27.
182. コリント人への手紙第一1章26節

[183]、「すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい」という言葉で締めくくられています。[184]自由と自己表現に傾いていたように見えるコリントの教会に直面して、パウロは、彼らが特定の事柄（頭のかぶり物、主の晩餐、霊の賜物を含む）をどのように行っているかを考え直す手助けをしようとしています。それは、すべての信者が建て上げられ、すべての訪問者が好ましい形で迎え入れられ、そして何よりも、キリストがあがめられるためです。

時代を超えた真理

今日、頭のかぶり物を求める教会はほとんどありません。学者たちは、パウロの助言はもはや存在しない文化に当てはまるものだったという点で一致しています。それでは、この箇所の中に、あらゆる場所のすべての教会にとっての時代を超えた真理として受け取れるものは、何かあるのでしょうか？

これに答えるにあたって、まず認めなければならないのは、パウロがこの箇所で、高度に発展した性の神学を私たちに提供することに主な関心を持っているわけではない、ということです。むしろパウロは、文化に特有の慣習に取り組むことに集中しています。それでも、性の神学のヒントが輝き出ているところがあります。今日でもしっかりと受け止めることのできる真理の言明を、手短に挙げてみましょう。

女性も男性も、神に向かって（「祈る」ことで）、また互いに向かって（「預言する」ことで）、声に出す奉仕に参加すべきです。この箇所でパウロは、これが教会の習慣であることを喜んでいます。その一方で、そうするときの女性と男性の不適切な身なりについて警告しているのです。今日、どの教会であれ、なりうる最善の姿になるためには、女性と男性の両方による積極的で対等な、声に出す貢献が必要です。

男性と女性は、キリストにあって対等ですが、それでも創造において異なっています。神は二つの性を造られました。男と女です。両者は同じではありません。互いを補い合うように意図されているのです。神のかたちを完全に表すには、両方が必要です。

女性には、可能なかぎり最も高い地位が与えられるべきです。社会が女性について低い見方やゆがんだ見方をしているなら、教会こそ、女性がより広い社会の中で過

183. コリント人への手紙第一11–14章
184. コリント人への手紙第一14章40節

去や現在にどんな地位にあったかにかかわらず、最高の尊厳が差し出される場所であるべきです。

私たちは、自分の行動を通して発信しているメッセージに注意を払うべきです。どの文化、どの世代においても、ある種の振る舞いは、それを避けたりそれに加わったりする正当な理由が自分たちにあったとしても、ほかの人々に間違ったメッセージを送り、教会の証しの助けにならないことがあるのです。

補完主義者の見方

補完主義者はこの箇所をどう見ているのでしょうか？　彼らの全員がこの箇所を自分たちの教理の根拠として用いているわけではありません。Village Churchの補完主義の神学者たちは、性についての聖句を概観する一環としてこの箇所（と次の箇所）を研究していますが、その際、男性の権威についてのいかなる教えも支持しない仕方でそうしています。[185]それは正しいことです。コリント人への手紙第一の注解書で最も高く評価されているものは、コリント人への手紙第一11章に男性の権威を見ていないのです。[186]

しかし多くの補完主義者は、この箇所が、女性は神の設計によって男性の権威の下にあると教えていると論じます。私はたった今この箇所の意味を単純化しようとしましたが、改めて言っておきたいのは、この箇所は非常に複雑で、現代の解釈者たちを悩ませ続けているということです。その複雑さは、解釈者が「挿入者」になる――つまり、箇所の中に追加の意味を読み込む――ことによって、いっそう増しています。補完主義の学者たちが次のように主張するとき、まさにそれをしているのだと私は考えています。「コリント人への手紙第一11章2–16節の不変の原則は、男性の権威に対する女性の服従である。それは、女性が男性の霊的な指導と権威の下で、教会において祈りと預言に参加してよいと教えている。」[187]彼らはこれを、次

185. www.bit.ly/3CFKgJO。33–37ページを参照してください。
186. www.bestcommentaries.com は、ゴードン・フィー（NICNT）、アンソニー・ティセルトン（NIGTC）、デイヴィッド・ガーランド（David Garland）（BECNT）によるコリント人への手紙第一の注解書を最良のものと評価しており、それぞれ5.0点満点中4.91点、4.88点、4.88点をつけています。「11章3節の比喩は、しばしば権威の構造を打ち立てるものと理解されている。しかし、この箇所の中にそれを示唆するものは何もない」（フィー）。「グルーデムには失礼ながら、それは『従属』や『～に対する権威』の関係を表しているようには思われない。」（ティセルトン）「パウロは、女性を従属的な役割に置く性別の階層を打ち立てようとしているのではない。」（ガーランド）
187. Köstenberger and Köstenberger, God's Design for Man and Woman, p. 160.

の四つの主張のいくつか、あるいはすべてに基づかせています。1）かしら（頭）という言葉は上に立つかしら、つまり権威を意味する。2）パウロは、堕落前のアダムとエバの結婚に階層を見ていた。3）女性はどういうわけか、男性よりも神のかたちである度合いが低い。4）コリントの女性たちは、男性の権威のしるしを頭に着けることになっていた。これからこれらの主張の一つひとつに答えていきますが、最も時間をかけるのは最初の主張です。

「かしら」は権威を意味するのか？

「かしら」は「上に立つかしら」を意味するのでしょうか？　現代英語では、「head」（頭）は比喩的に、上司、つまり取り仕切る立場にある人を意味するのに使われます。しかし、パウロの手紙を受け取ったギリシア語を母語とする人々は、「かしら」という比喩をそのように理解したのでしょうか？　ほとんどの補完主義者は、そうだと言います。神はすべての女性が男性のかしらに従うことを望んでおられる、と彼らは言います。したがって、妻は夫に従わなければならず、女性は教会で指導することができない、というのです。

3節は、補完主義の解釈にとって要となる節です。では、パウロは次の言葉で何を言おうとしているのでしょうか？　「すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」

多くの補完主義者は、「かしら」（kephalē）を「上に立つかしら」（「〜に対する権威」という意味で）と読み、男性が（「かしら」として）女性に対して権威を行使すべきであり、それは神が（「かしら」として）キリストに対して権威を行使し、キリストが（「かしら」として）男性に対して権威を行使するのと同じだ、と理解します。このように読むと、パウロは、父なる神のキリストに対する権威を、男性の女性に対する権威と同一視しているように見えます。このたとえを三位一体の神の内なるいのちの描写に結びつけることで、彼らは、性別による階層は単に文化的なものでも堕落の結果でもなく、普遍的なものに違いないと結論づけるのです。

しかし、これからお見せするように、後に続く節の文脈によって判断するなら、この場合の「かしら」は権威を意味するのではなく、尊ばれる いのちの源――人がそこから自分のいのちやアイデンティティを得ている人といった意味です。実際、パウロの時代には、kephalēが権威を意味するという考えは、まったくなかったと

は言わないまでも、非常にまれだったでしょう。この点を論じた「付録3：kephalēの意味」をぜひ読んでください。

補完主義の学者たちは、よくエペソ人への手紙5章（「夫は妻のかしらである」）を相互参照します。これは、パウロが男女の関係についてkephalēという言葉を使っている、ほかに唯一の箇所です。そして彼らは、エペソ人への手紙5章でかしらが権威を意味するのだから、コリント人への手紙第一11章でも権威を意味するに違いない、と論じます。[188]しかし第8章で詳しく見るように、そこでもおそらく権威を意味してはいません。[189]kephalēをいのちの源の意味にとるのは語彙研究における最近の新説だ、という補完主義側の非難とは反対に、ギリシア語を話した教父たち――アレクサンドリアのキュリロス（Cyril of Alexandria）、モプスエスティアのテオドロス（Theodore of Mopsuestia）、アタナシオス（Athanasius）、エウセビオス（Eusebius）――はみな、ここでのkephalēを源の意味にとっていました。[190]ですから、非常に多くの学者が、パウロはコリント人への手紙第一11章3節で権威ではなく源を意味していたと結論づけているのも不思議ではありません。[191]

それでも、可能性は低いにせよ、パウロがここで権威を意味していたということも考えられなくはありません。どうすれば確かに知ることができるのでしょうか？

188. たとえばシュライナーはこう言います。「パウロはエペソ人への手紙5章22–24節で夫と妻について語るとき、権威を表すのに『kephalē』を用いているので、コリント人への手紙第一11章3節でもおそらく同じ考えを念頭に置いている。」（出典：www.bit.ly/31rylBA）
189. 私が読んだ補完主義の議論で、エペソ人への手紙5章の「かしら」が「権威」を意味すると主張するものの多くは、コリント人への手紙第一11章3節でそれが何を意味するかという自分たちの解釈に基づいてそう主張しています。鶏が先か卵が先かの典型的な例で、一つの弱い解釈がもう一つの解釈を支えるのに使われ、どちらが先だったのかわからなくなってしまっています。意味を一方から他方へ持ち込むことに慎重であるべき理由の一つは、パウロが「かしら」という言葉をまったく違う仕方で使っていることです。コリント人への手紙第一11章では、アダムをエバのかしらとして語っていますが、エバはアダムのからだとしては描かれていません。一方エペソ人への手紙5章では、夫を妻のかしらとして語っており、妻は夫のからだなのです。
190. Payne, Man and Woman, One in Christ, ch. 7. たとえば、アレクサンドリアのキュリロス（紀元444年没）はこう書いています。「ルカは〔3:38、『アダムは神から』〕……人間の源、すなわち創造主なる神を説明している。それゆえ私たちは、『すべての男のかしら（kephalē）はキリストである』と言う。人は彼を通して造られ、存在へと至らせられたからである……『そして女のかしら（kephalē）は男である』。彼女は彼の肉から取られ、それゆえ実際に彼を自分の源として持っているからである。同様に、『キリストのかしら（kephalē）は神である』。彼は本性によって神から出ているからである。ことばは父なる神から生まれたのである。」
191. Payne, Man and Woman, One in Christ, ch. 7, fn. 7 は、コリント人への手紙第一11章3節でkephalēが「源」を意味すると論じる40の学術的著作を挙げています。この本は2009年に出版されました。今ではそのリストははるかに長くなっています。

それぞれの場合にパウロの意味を見極める方法は、文脈です。[192]4–16節を注意深く見ていきますが、その前に、コリント人への手紙第一11章3節にある、並行する三つの「かしら」の言明を理解しましょう。

三つのかしらの物語

パウロは「すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です」と書いています。この三行を正しく理解する鍵は、パウロがそれらを述べている順序にあります。一見すると、パウロは最後の行を最初に置いて、「神はキリストのかしら、キリストは男のかしら、男は女のかしら」となるようにすべきだったと思うかもしれません。しかし、パウロはそうしていません。それでは、なぜこの順序なのでしょうか？　答えは、パウロが時系列に沿っているということです。

「すべての男のkephalēはキリストである」の意味は、私たちの議論にとって決定的ではありませんが、これは、キリストをすべての創造の手段とするパウロの神学を踏まえているようです。この意味で、創世記2章において神はキリストを通してアダムを造り、派生的な意味で、その後のすべての男性を造られたのです。

次の句、「女のkephalēは男である」は、エデンの園でその次に起こったことを指しています。神はアダムのわきからエバを造られました。パウロがアダムとエバのことを言っているとわかるのは、パウロが「女たち」（women）ではなく単数形の「女」（woman）を、「男たち」（men）ではなく「男」（man）を使っており、そのうえ8節と12節aで、エバ（パウロは「女」と呼んでいます）がアダム（「男」）から出たことに改めて触れているからです。3節がアダムをエバの源として語っているという解釈を裏づけるように、パウロは最後に、別の意味では、アダムの息子たちの一人ひとりがエバの娘たちの一人――その母親――から出たこと（12節b）、そしてさらに別の意味では、すべての人がその創造者から出たこと（12節c）に触れています。

最後の句、「キリストのkephalēは神である」は、おそらくキリストの受肉を指しています。地上での働きにおいて、キリストは「見えない神のかたち」であり、見

192. たとえば、アラン・ジョンソンは、kephalēという言葉について、あらゆる立場からの主要な17の研究をメタ研究し、こう結論づけています。「比喩としてのkephalēは、異なる文脈では異なる意味を持ちうるという点で、合意が広がりつつあるようだ。」（出典：www.bit.ly/3GJ9Vnc）

守る世界に対して、ご自分の源である御父を表しておられました。[193]

なぜパウロは、キリストがすべての女のkephalēでもあるとは言わないのか、と問う人がいるかもしれません。その答えは、もう一つの問いの中にあります。そもそもパウロは、なぜこれらの奇妙で、一見ばらばらな神学的言明をまとめ上げたのでしょうか？　4–5節は、いくつかの説得力のある答えを与えてくれます。パウロは創造的な教え方を用いて、女性と男性がそれぞれの物理的な頭をどう扱うかを、それぞれの比喩的なかしらをどう扱うかに結びつけているのです。言い換えれば、パウロは3節で、だれにでも比喩的なかしらがあるという前提を立てています。それは4–5節で、男性と女性が礼拝の中で自分の物理的な頭に対してすることが、3節で述べた比喩的なkephalēに反映される、と論じるためです。「すべての男」（4節）にとって、それは「キリスト」（3節）であり、「すべての女」（5節）にとって、それは「男」（3節）です。

現代人の耳には奇妙に聞こえるかもしれませんが、パウロはkephalēという言葉の文字どおりの用法と比喩的な用法の間を行き来しています。エバはアダムを自分のkephalēとして敬いました。ですから、エバの娘たちはそれぞれ、自分の物理的な頭を敬うことによって（頭のかぶり物を着けることで示されます）アダムの息子たちを敬うべきなのです。同じように、アダムはキリストを自分のkephalēとして敬いました。ですから、アダムの息子たちはそれぞれ、自分の物理的な頭を敬うことによって（髪を短くしておくことで示されます）キリストを敬うべきなのです。

193. コロサイ人への手紙1章15節とヘブル人への手紙1章3節。この三行目を理解するには、3節の三つの行がおおよそ並行するたとえであることを理解しなければなりません。それらは厳密に等価なものではありません。創世記2章で、神は文字どおりアダムを造られました。アダムは神「から出た」と言うことができます。エバもアダム「から出た」のですが、アダムが神から出たのと同じ仕方ではありません。最後に、御子は御父「から出た」（あるいは「から出ている」）のです。パウロがコリント人への手紙の前の部分で言っているとおりです。「キリストは、私たちにとって神からの知恵……贖いとなられました」（Ⅰコリント1:30）。しかしこれは、御子が御父によって造られたことを指しているのではまったくありません。むしろ、御子が御父からいのちとアイデンティティを得ているあり方を指していると考えられます。イエスはこう宣言されました。「父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです」（ヨハネ5:26 NIV）。パウロの最後の行が、御子の単に受肉における関係だけでなく、御父との永遠の関係を指しているのかもしれないと考える学者たちは、正しいのかもしれません。しかしどちらにとるにせよ、父と子の関係に当てはめられたkephalēは権威を表してはいません。たとえで言えば、永遠においても受肉においても、御父は御子のkephalēです――太陽が日の光のkephalēであるのと同じように。日の光のない太陽はかつてなかったし、太陽のない日の光もかつてありませんでした。キリスト（日の光）は機能的には神（太陽）と区別されるかもしれませんが、それは、キリストが永遠に御父に従属しているという意味ではありません。

3節の三つの言明は力強いものですが、4–5節は明らかに洗練された神学ではありません。これは、独創的な思想家である天才パウロが、自分の議論を強めるために結びつけを行っているところなのです。パウロは、性について発展した神学を彼らに（そして私たちに）教えようとしているというよりは、女性は礼拝で頭をおおうべきだという自分の議論に裏づけを加えようとしているのです。

さて、3節に続く節をよく考えると、パウロが3節で「権威」を意味しているはずがないことに気づくでしょう。なぜそうわかるかと言えば、全体を通して、それらをまとめる考えは、指導者に従うことではなく、自分の源を敬うことだからです。たとえば、「男は女のkephalēである」（3節）と言ったのに続いて、パウロは8節で「女が男から出た」と言うことで、同じ点を言い換えているように思われます。これは、エバの権威ではなく、エバの源としてのアダムに言及しているのです。[194] また、創造者としてのキリストについて語ること（「すべての男のkephalēはキリストである」）から移って、パウロは12節で、「すべてのもの〔あるいは、すべての人〕は神から出ています」と言うとき、創造者としての神について語っています。ここでもパウロは、神に、権威としてではなく、ご自分が造られる者たちの源として焦点を当てています。[195] このことは、3節でキリストが「すべての男」のkephalēであると言われていることを理解する助けにもなります。すべての男性がキリストを自分の権威としているわけではありませんが、すべての男性がキリストを自分の創造者であり源としているのです。

さらにこのことを裏づけるのは、「神はキリストのkephalēである」という言い回しが、正統的な信仰においては、御父がキリストの上に立つ権威であるという意味には受け取られてこなかったという事実です。第3章で示したように、男女関係における永続的な階層という自分たちの考えを支えるために、三位一体の永遠の関係

194. シンシア・ウェストフォールは Paul and Gender（ch. 1）でこう言っています。「この箇所における創造の記事への言及、特に11章8節におけるそれは、パウロが11章3節の神学的言明を再び取り上げ、説明し、展開するために用いられている。近い文脈では、女が男から出たこと、女が男のために造られたことを述べる言明は、11章3節で男と女のいのちの起源が視野にあることを示唆している。」

195. コリント人への手紙第一8章6節とコリント人への手紙第一11章12節を比べると、このことが確かめられます。「唯一の神、父なる神がおられ、すべてのものはこの神から出ました……また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、すべてのものはこの主を通して存在するようになりました。」（Ⅰコリント8:6）「女が男から出たように……しかし、すべてのものは神から出ています。」（Ⅰコリント11:12）前者では、神が究極の創造者であり、イエスは神がすべてのものを造られる際の仲介者です。後者では、神が究極の創造者であり、アダムは神がエバを造られる際の仲介者です。この意味で、神も、神がその方を通して創造する者も、kephaleと呼ぶことができます。どちらも源として働きますが、その種類は異なります。神は究極の源であり、イエスやアダムは媒介的な源です。どちらの種類の源も、敬意を受けるにふさわしいのです。

の中に階層なるものを繰り返し後付けしようとしてきたのは、補完主義の神学者たちでした。御子と御父の関係を正統的に描くとき、それは御子が地上におられた間についてさえ、御父が御子に対して「権威」を主張する姿を描いているのではありません。それよりも、御子が自らを与える愛のうちに、御父のみこころ――実はそれは御子ご自身のみこころでもあります――に従われる姿を語っているのです。[196]

キャシー・ケラーは、「〔結婚における〕かしら性と従うことという考えに初めて出会ったときは、知的にも道徳的にもトラウマとなる体験でした」と認めています。しかし、「賜物豊かな教師たちが〔彼女を〕導いて、神格の第二位格がご自身を〔従わせ〕、しもべの役割を引き受けられたことを〔見るように〕してくれた」とき、彼女は、自分の結婚において「イエスの役割」を担えるのだと受け入れるようになりました。彼女はこの結びつきについて聖書的な裏づけを示しています。「コリント人への手紙第一11章3節でパウロは……御父と御子の関係が夫と妻の関係の型であると述べています」。そしてその関係の中で、「男性と女性は……愛ある権威と愛ある服従とを映し出し、反映するよう招かれています」というのです。[197]残念なことに、ケラー夫妻のベストセラーとなった結婚の本は、その多くの部分がすばらしいものであるにもかかわらず、コリント人への手紙第一11章3節の誤った解釈だけでなく、誤った適用をも広める一因となってしまいました。その結果、妻たちは、夫に従うことを通して御子の御父への服従を映し出すという特別な務めが自分たちに課せられているのだと考えるようになっています。

私たちの「割り当てられた役割」を三位一体に根ざすものとする聖句は一つもありません。コリント人への手紙第一11章3節も、決してそうではありません。このことは、パウロが二つの並行する句だけでなく、三つ目の句も記している点に最もよく表れています。男が女のかしらであることを、神がキリストのかしらであることになぞらえたがる補完主義者たちは、最初の句、すなわち「キリストは男のかしらである」という句を忘れているようです。神とキリストの関係と、男と女の関係との間に、何らかの類似点を無理に絞り出すことはできるかもしれません（補完主義者が差し出すのは「本質においては平等だが、機能においては従属している」とい

196. 教父ヨハネス・クリュソストモスは、この箇所について、三位一体についての従属説的な見方を次のように述べて論駁しました。「御父は御子を、ご自分の命令の下にある奴隷としてではなく、自由な者として、自ら進んで聞き従う者として生まれさせたのです。〔御子は〕奴隷ではありません。ご自分を生んだ方と同じ栄誉を持っておられるのです。」伝統的に理解されてきた三位一体は、権威の関係ではなく、互いの愛の関係を強調します。初期の東方の神学者たちは、御父を「神性の源泉」として語ります。御父は永遠に御子を生み、御霊は御父から発出します。西方の神学者たちは、御父が生むロゴス（Logos）という言い方と、御父と御子の双方から発出する互いの愛としての聖霊という言い方を好みます。

197. Tim and Kathy Keller, The Meaning of Marriage, ch. 6.

う定式です)。しかし、もしそれがパウロの教えようとしていたことであれば、パウロはキリストと男についての最初の句を書き加えはしなかったでしょう。キリストと対等な男など一人もいないからです。

エバのかしらについてのこの論点には、もう一つ問いが残っています。5節でパウロは、自分の身体的な頭を辱める女は、比喩的なかしらをも辱めると言います。その比喩的なかしらとは、3節によれば「男」です。そこで問題は、パウロがどの男、あるいはどの男たちのことを言っているのか、ということです。ケステンバーガーのような補完主義者たちは、それは男性の霊的指導のことを指していると答える傾向があります。多くの補完主義の牧師はこれをさらに強めて、すべての女性は男性のかしら——夫であれ、父親であれ、男性の牧師チームであれ——の下にいなければならないと言います。

しかし、より健全な答えへの手がかりは、その直前の節にあります。「すべての男」は「自分のかしら」を敬うべきです（4節)。この言い回しは私たちを3節へと連れ戻します。そこでは、答えがすでに与えられています。「キリスト」がすべての男のかしらなのです。同じように、「すべての女」は自分のかしらを敬うべきです（5節)。これもまた私たちを3節へと差し戻し、そこで言及されている「男」とはアダムであることがわかります。アダムは予型的にすべての男を指しています。言い換えれば、パウロが特定の男を指しているとは考えにくく、むしろアダムのすべての息子たちを指しているのです。

こうした名誉についての話は、もはや恥と名誉の文化に生きていない私たちの多くには、あまり響かないかもしれません。しかし、パウロの手紙の読者たちには完全に理解できたはずです。この箇所でパウロは、kephalēの概念と名誉の概念とを結び合わせています。言い換えれば、3節でのパウロのkephalēの用法は、この箇所全体を貫いている「源」と「名誉」という二つの概念を一つにまとめているように思われます。

では、先に立てた決定的な問いに答えましょう。3節は何を意味しているのでしょうか？　それは、キリストは（創造者として）男の、敬われるにふさわしい源であり、男（アダム）は女（エバ）の、敬われるにふさわしい源であり、神は（受肉において）キリストの、敬われるにふさわしい源である、ということです。[198]

198. より詳しく答えるなら、3節は次のような意味かもしれません。創世記2章で、アダム（とすべての男）は自分のアイデンティティや存在をキリストから得ました。ですからキリストは、アダムの敬いを受けるにふさわしい方です。その後、同じ創世記2章で、エバ（とすべての女）は自分のアイデンティティや存在をアダムから得ました。ですからアダム（とすべての男）は、彼女の敬いを受けるにふさわしいのです。最後に、受肉において（あるいはもしかすると永遠におい

私の結論はこうです。3節は、キリストの従属についても女性の従属についても、何一つ語っていません。

パウロは園に階層を見ているのか？

第4章で私は、創世記1–3章を注意深く学ぶなら、性別による階層は神の創造における良い設計によってではなく、堕落のゆえに生じたことがわかると論じました。この見方とは対照的に、補完主義者たちは次の節を用いて、パウロは堕落以前に階層を見ていたのだと論じます。「男が女から出たのではなく、女が男から出たのであり、また男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたからです」（8–9節）。これらの節について、シュライナーは「パウロは明らかに、創世記2章を、男性と女性の役割の区別を示すものとして解釈していた」と言います――ここで彼が言う役割とは、権威と服従の役割のことです。[199]

しかし、これがまったく「明らか」ではない理由がおわかりになるでしょうか？パウロが3節で女性の従属について語っていると前提したときにだけ、パウロが堕落以前に階層を見ていたという結論になるのです。しかしこれらの節でパウロは、創世記2章について3節ですでに述べたこと――「〔エバ〕のkephaleは〔アダム〕である」――を敷衍しているにすぎません。パウロは最も重要な二つの点を挙げています。第一に、エバはアダムから造られました。文字どおり、彼のわきから創造されたのです。だからこそコリントの女性たちは、園にさかのぼれば自分たちの源である、教会の男性たちを敬うべきなのです。[200]第二に、エバはアダムのために、彼の助け手でありパートナーである者、彼のezer kenegdoとして、彼を補い、

て）、キリストは自分のアイデンティティや存在を御父から得る（得た）のであり、ですから御父は、キリストの敬いを受けるにふさわしい方です。次のように問うこともできるでしょう。もし人物Aが人物Bのkephaleであるなら、人物Bは人物Aにとって何なのでしょうか？ そうですね、もし人物Bが自分の存在やアイデンティティを人物Aから得ているのなら、それを別の言い方で表せば、人物Bは人物Aのかたちである、ということになります。パウロがすぐ後で「男は神のかたちであり、神の栄光です。一方、女は男の栄光です」（Ⅰコリント11:7）と言っていることは、パウロがこのことを含意していたことを示しているのかもしれません。言い換えれば、3節から導かれるきれいな神学的帰結は、男はキリストのかたちと似姿に造られ、エバはアダムのかたちと似姿に造られ、キリストは神のかたちと似姿である、と言うことです。繰り返しますが、このどれ一つとして、女性の従属もキリストの従属も含意してはいません。

199. トム・シュライナーが“Recovering Biblical Manhood and Womanhood”, p. 133で述べている言葉です。

200. 「男が女から出たのではなく」（8節）――創世記2章から、アダムもまたエバを敬うべきだと論じることはできます。しかしパウロは、エバがアダムの源であったとは言えないことを指摘しています。

彼と並んで立つために造られました。だからこそコリントの女性たちは、園を思い起こしつつ、自分たちがパートナーとなるように造られた相手である男性たちを、辱めてはならないのです。（とはいえ、コリントの男性たちもまた、女性たちを辱めてはなりません。女性なしには、彼らは不完全なのですから。）

要するに、創世記もパウロも、両性の区別と、互いに敬い合う相互依存の必要性の両方を際立たせています。しかし、シュライナーがこの箇所に見いだしたと主張する階層的な「役割」については、どちらも何も語っていないのです。

女性も等しく神のかたちを帯びる者なのか？

では、「男は……神のかたちであり、神の栄光です。一方、女は男の栄光です」（7節）はどうでしょうか？　公平を期して言えば、この節を自分たちの議論の補強に用いる補完主義者はほとんどいません。グルーデムがこの節を女性の従属を論じるために用いないのは、額面どおりに読むと、両性は異なっているだけでなく「平等」でもあるという、私たちが共有している確信に反するように見えるからです。実際、この節は教会の歴史の大半において、女性は本来的に男性より劣っているという、誰も異議を唱えなかった教えを擁護するための証拠聖句として用いられてきました。

パウロは、女性が男性ほどには神のかたちに造られていないと言っているのでしょうか？　違います。[201]教会がその歴史の非常に長い間そうしてきたように、エバは神のかたちの一部分だけをアダムから受け継いでいると言うことは、創世記1章と矛盾します。創世記1章は、神のかたちが両性に等しく備わっていることを認めているからです。創世記1章をよく知っているパウロがしているように見えるのは、神／キリストはアダムの敬われる源であり、アダムはエバの敬われる源であるという議論を続けることです。エバは自分の存在とアイデンティティを、神からだけでなく、アダムからも得ています。礼拝の中で頭のベールをかぶることによって、女性たちは男性たちを敬うのです。

201. ルーシー・ペピアット（Lucy Peppiatt）（“Women and Worship at Corinth”において）やほかの聖書学者たちは、パウロは確かにそのように書いてはいるが、実際にはここで、コリント人への手紙第一のほかの箇所でもしているように、教会内の偽教師たちのことばを引用しているのだ、という説を唱えています。この章を手ごろな長さに収めるため、私はその説を説明せず、代わりに、私がより説得力があると考えるシンシア・ウェストフォールの解釈に依拠することにしました。

パウロはまた、名誉の流れる向きが逆になることをほのめかしているのかもしれません。アダムは神の栄光であり、かたち（つまり栄光あるかたち）です。同じように、エバはアダムの栄光あるかたちです。このことは、アダムが初めてエバのうちに映し出された自分自身を見たときに発した喜びのことばとよく呼応しています。「ついに！　これこそ私の骨からの骨、私の肉からの肉。」女性が自分たちの源であるアダムを敬うべきなら、男性は女性のうちにある自分自身のかたちを敬うべきなのです。

パウロのことばを、（アダムからエバへと）価値が減っていくことを描いたものとして読むのではなく、栄光が高まっていくクレッシェンドとして読むべきなのかもしれません。アダムは神のかたちと栄光であるにすぎませんが、エバは神とアダムの両方のかたちと栄光なのです。創世記1章と2章も、そのように読めるのではないでしょうか？　どちらの章でも、神の創造の冠は最後に来ます。1章では、それは人間です。2章では、それは女性です。アダムはちりから造られましたが、エバは肉から造られました。[202]女性がこれほど価値を低められてきた世界の中にあって、ここでの創世記とパウロのことばは、これ以上ないほど文化に逆らうものなのです。

女性は権威の「しるし」を着けるべきなのか？

さて、この箇所で私が最も好きな節に移りましょう。「こういうわけで、女は御使いたちのゆえに、自分の頭に対して権威を持つべきです」（10節）。1881年のRVの目新しい訳に倣って、ESVはこの節を「それゆえ、妻は御使いたちのゆえに、頭に権威のしるしを着けるべきです」と訳しています。ESVは、先に引用したNIVのような動的等価の訳ではなく、逐語訳であると称していますから、二つのうちESVの訳のほうがより逐語的だろうと思われるでしょう。しかし、それは間違いです。ギリシア語原文には、どんな種類のしるしも象徴も出てきません。

なぜESVはそのようなことをしたのでしょうか？　女性のかぶり物が、男性の、あるいはもしかすると夫の、彼女に対する「権威」（ギリシア語exousia）のしるしであると論じることは、補完主義者にとって都合がよいのです。しかし、パウロはそのようなことを一度も言っていません。聖書学者たちはこの節のさまざまな面につ

202. ここでのパウロの議論を注意深くたどるなら、エバがアダムより劣っていると言うよりも、むしろアダムがエバより劣っていると言いたくなるはずです。もちろん、女性蔑視に満ちた歴史の大半において教会が犯した誤りの裏返しを避けるために、私たちはそうは言いません。

いて議論していますが、私たちが問うべき決定的な点は、パウロがここで語っている「権威」を持っているのは誰か、ということです。もし女性が単に「権威のしるし」を持っているだけなら、一般に男性たちか、あるいは特定の男性たちが、彼女に対する権威を持っていることになります。しかしギリシア語は、女性自身が自分の頭「に対して権威を持っている」と述べています。同じ言い回しは、イエスが弟子たちにサタン「に対する権威」（exousian … epi）を授けられた箇所にも出てきます。新約聖書におけるexousiaという語のほかの102回の用法すべて――コリント人への手紙第一での9回の用法も含めて――において、それは自分自身が持つ権威を指しています。[203]パウロの要点は、もし神が創造においてエバとその娘たちに何らかの権威をお与えになったのなら、それを彼女から取り上げることは、どんな男性にも（聖書の翻訳者にも）許されていない、ということです。しかしこれは、ESVの訳が示唆していることとまさに正反対なのです。ここに、コリント人への手紙第一11章の補完主義の読み方の最大の弱点があります。何らかの権威に実際に言及している唯一の箇所は、女性の権威について語っているのです。確かに、彼女の権威はかぶり物と何らかの関係があります。しかし強調されているように見えるのは、そもそもそれを着けるかどうかを、強いられることなく決める彼女の特権です。なぜパウロは、頭のベールを着ける彼女の権利についてのこの点を付け加えたのでしょうか？　学者たちにも確かなことはわかりません。ただ、シンシア・ウェストフォールは、コリントの女性たちにベールを外すよう圧力をかけていたのは、女性たち自身ではなく一部の男性たちだったと論じています。確かなことは言えませんが、もしそうであれば、パウロは、彼女たちを気まずい立場に追い込もうとしているそうした男性たちに逆らうよう、女性たちを励ましていることになります。

パウロは、女性が自ら持つこの権威について、二つの理由を挙げています。一つ目は、10節冒頭のことば（「こういうわけで」）によって示されているもので、私たちを8節と9節へと差し戻します。そこでは、創造の頂点である彼女が、アダムのパートナーとして彼と並び立つ者であり、だからこそ彼に恥をかかせるべきではないのです。創造の頂点であり、アダムと対等な者であるなら、きっと自分の足で立つことができるはずではないか、とパウロは論じます。二つ目は「御使いたちのゆえに」です。これはどういう意味でしょうか？　学者たちは多くの提案をしています。私にとって最も説得力があるのは二つです。それは、創造の場にいた御使いたち（エバがその栄光のすべてをまとって現れたときに、そこにいた御使いたち）への言及であるか、あるいは――おそらくこちらのほうがより妥当ですが――同じ手

203. Philip Payne, Man and Woman, One in Christ, ch. 10.

紙の中で御使いについてパウロが先に述べたことと関係しているか、のどちらかです。その箇所でパウロは、聖徒たちはいつの日か御使いたちをさばくようになると言っています。[204]その場合、女性が自分の装いを自分で決めることは完全に理にかなっています。エバとその娘たちは王族であり、男性たちと並んで、いつの日か全宇宙を治めるようになるのですから。

この神から与えられた権威こそ、4–5節がついでのように述べているとおり、男性だけでなく女性もまた、祈りと預言によって貢献することができた理由にほかなりません。

とはいえ、主にあっては

ここまでこの箇所でパウロは、男性を（3–6節）、そしてまた女性を（7節、10節）高めているかのように解釈されうること、実際にそう解釈されてきたことを述べてきました。しかし最後に、パウロは、福音においても教会においても、両性は平等であり、互いに等しく依存し合っていることを、きわめて明確にします。「とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません」（11節）。3節でパウロは、アダムがエバの生物学的な源であること（したがって、すべての女性はすべての男性を敬うべきであること）を述べました。しかし今やパウロは、すべての男性が自分の生物学的な起源を母親のうちに見いだすことも強調しています。「女が男から出たように、男も女から生まれるからです」（12節）。したがって、すべての男性はすべての女性を敬うべきなのです。創世記2章でエバがどのように生じたかについての観察と、この世界ですべての男性がどのように生まれてくるかについての観察とを混ぜ合わせることで、パウロは、名誉は双方向に流れるべきものであることを明らかにしています。そのため、創造の秩序に基づいて性別による階層を唱える余地は、いっそう少なくなります。相互性、平等、一致――しかも両性を区別しながら――これこそ、神が初めから思い描いておられたもののようです。

一部の学者は、パウロがこの箇所で扱っているのは夫と妻だけであって、男女関係一般ではないと論じます。その可能性はありますが、きわめて低いものです。「男」と「女」を表すギリシア語は、箇所が夫婦について語っているのであれば、「夫」と「妻」とも訳すことができます。しかし、大半の学者は、箇所全体を読むなら、

204. コリント人への手紙第一6章1–2節

パウロはすべての男性とすべての女性の関わり方について語っているのであり、それは夫婦を含みつつ、夫婦を超えて広がるものだと論じています。[205]

とはいえ、もし少数派の学者たちが正しく、パウロが夫婦だけに語っているのだとすれば、5節の女性の比喩的なかしらとは、おそらく彼女のpaterfamilias（家長）、すなわちギリシア・ローマの文化において彼女を「管理する」立場にあった男性を指している、と結論できます。その場合、パウロは彼女にその男性を敬うようにと言っているのであって、彼女がその男性に従属することを支持しているわけではありません。それどころか、この箇所全体は両性を対等にする方向へと進んでいます。印象的なことに、パウロが夫をkephalēとして語るもう一つの箇所（エペソ人への手紙5章）でも、パウロは夫と妻の関係を、互いに従うことという包括的な概念の中に位置づけています。同じように、ここコリント人への手紙第一11章でも、パウロは互いに依存し合うことについての教えで締めくくっています。

この箇所がすべての男性とすべての女性の関係について述べているのか、それとも（その可能性はより低いですが）夫と妻の関係だけについて述べているのかにかかわらず、「パウロが女性にかぶり物を着けてほしいと願っているのは、彼女たちが男性のかしら性に従っていることを示すためである」という補完主義者の主張は、自信をもって退けることができると私は考えます。[206]私たちの多くにとって、これはすばらしい知らせです！　もし神が、すべての女性がすべての男性に従うことを望んでおられたと想像してみてください。創造に議論の根拠を置いているパウロは、まさにそれを含意していることになってしまいます。そうなれば、結婚においても、家族関係においても、友人の輪においても、職場の関係においても、社会においても、教会においても、女性は男性に従わなければならないことになります。この箇所を、男性に従う気質を持つよう教えるものだと誤解してきた歴代の女性たちに、この誤った教えがどれほど人を不自由にする影響を与えてきたかを思うと、私は身震いします。悲しいことに、これは今なお、パイパーがRecovering Biblical Manhood and Womanhoodの冒頭の章で教えていることなのです。「成熟した女性は……ふさわしい男性とのあらゆる関係において、何らかの形で男性の強さと指導

205. そうでなければ、未婚の女性ややもめたちが、まさに自分たちに尊厳を与えているかぶり物を今や外すことになると想定しなければなりません。しかし最も強力な論拠は、パウロが12節で「すべての男は女から生まれる」と言っていることです。これを「すべての夫は自分の妻から生まれる」と読んだのでは、意味をなしません。ティセルトンは“1 Corinthians (NIGTC)”の中で、「圧倒的多数の著者たちは、問題は、より限定された家族の範囲内の関係だけではなく、性別間の関係全体に関わるものであると説得力をもって論じている」と述べています。
206. シュライナーが“Recovering Biblical Manhood and Womanhood”, p. 132, 135で述べている言葉です。

力を肯定するでしょう。」[207]ありがたいことに、イエスと、この箇所のまっとうな学びとが、この誤った解釈によって女性が傷つけられることに決定的な終止符を打ってくれます。

補完主義者たちがこの箇所を権威と服従の観点から読むために持ち出すあらゆる論拠を見れば見るほど、なぜそのそれぞれが退けられなければならないのかがわかってきます。それらはどれも、実際には女性を貶めたり従属させたりするのではなく、すばらしく高めている箇所を、嘆かわしくゆがめるものなのです。

では次に、一見すると補完主義の結論を支持しているように見えるパウロの三つの箇所のうち、二つ目を探ってみましょう。

コリント人への手紙第一14章33–35節

コリント人への手紙第一11章で見たばかりのように、パウロは女性に大きな尊厳を与えています。パウロは女性が祈りと預言に参加することを称賛しているだけでなく、かぶり物についての彼のことばも、すべての女性がふさわしく敬われるのを見たいという願いに根ざしています。ところが同じ手紙の後のほうに、少なくとも一読したところでは、前の箇所と矛盾しているように見えるもう一つの箇所があります。

33 神は混乱の神ではなく、平和の神だからです――主の民のすべての集会においてそうであるように。34 女の人は教会では黙っていなければなりません。彼女たちは語ることを許されておらず、律法も言っているように、従わなければなりません。35 もし何かを尋ねたいなら、家で自分の夫に尋ねるべきです。教会で語ることは、女の人にとって恥ずべきことだからです。

学者たちはこの箇所について果てしなく議論しているので、さまざまな学者たちが提唱してきた五つの主な見解を紹介します。（実際には六つの見解がありますが、そのうちの一つは別の見解から発展したものであることを示しますので、それは下位の見解として扱います。）また私は、自分なりに論拠を比較検討した結果に基づき、あえてそれらを、私が最も弱いと考えるものから最も強いと考えるものへと順に並べることにします。

207. ジョン・パイパーが“Recovering Biblical Manhood and Womanhood”, p. 21で述べている言葉です。

見解1：女性は礼拝集会で黙っていなければならない

学者たちは、パウロが11章では教会の集会で女性が語ることを許していながら、14章ではその同じ行為を禁じているように見えることを、どう理解すればよいのか苦慮してきました。女性の劣等性と従属がまだ一般に疑われていなかった1960年代までは、オリゲネスのような教父にまでさかのぼる学者たちから、注解者チャールズ・ライリーに至るまで、パウロは一般原則として女性が黙っていることを意図していたと信じていました。少なくともライリーは、1958年に、女性が語ってよい例外があるかもしれないと付け加えてはいます。

しかし、聖書の他の部分こそが常に特定の聖句の最良の解釈者であるのなら、この歴史的な見解は退けられなければなりません。パウロは11章でも、14章の大部分でも、女性が教会で語ることを肯定しています。したがって、これらの節にあるパウロの指示を、すべての教会ですべての女性が黙っていなければならないという意味に受け取ることはできません。

この見解の無理は、1960年代以降に女性の平等が発見されたことでいっそう際立ち、この箇所を理解しようとするさらに多くの試みを生み出しました。

見解2：女性は預言を吟味してはならない

この見解は、パウロが女性を黙らせていることを、その数節前にある彼の指示と結びつけます。「預言する者も二人か三人が語り、ほかの者たちは語られたことを注意深く吟味しなさい」（29節）。この見解によれば、パウロは女性を部分的に黙らせているにすぎません。男性の預言者も女性の預言者も語ってよいけれども、女性は預言のメッセージを吟味してはならない、とこの見解は結論づけます。[208]

夫への言及（35節）に基づいて、この見解は、古代世界の女性が自分の夫や他の男性たちの預言を公の場で評価することは文化的に気まずいことであり、したがってパウロがほのめかしている「秩序」に反することだっただろう、と示唆します。

208. パウロが預言を「吟味する」と言って正確に何を意味していたのかは、はっきりしません。それは預言の出どころを霊的に見分けることを指すのでしょうか？ それとも、内容を教理的に批評することでしょうか？ あるいは、いくつもの預言を組み合わせて神が何を語っておられるのかを考えることでしょうか？ それとも、語られていることをどのように適用するかを決めることでしょうか？

この見解にはいくつかの弱点があります。第一に、29節で言及されている「ほかの者たち」とは、ある人の預言を聞いているその場の全員を指しています。この人々が吟味を行うのであり、その中にはほかの女性たちも含まれています。第二に、29節は34節と35節からいくらか離れています。その間の節は、話題を預言の吟味から、預言者が自分の順番を待つことによって自らを制することへと移しています（30–32節）。29節の言い回しは34–35節で何一つ繰り返されておらず、預言の評価についての言い回しと、女性が黙っているようにというパウロの指示との間には、何のつながりもありません。また、女性が家で学び、質問するようにというパウロの勧めも、預言の吟味とは関係がありません。最後に、預言の吟味には霊を見分ける賜物が必要であり、神はその賜物を男性にも女性にも与えておられます（12:10）。

この見解はこれほどありそうにないものですが、多くの補完主義の学者たちは今もこれを推し進め、さらに発展させています。

見解2A：女性は男性長老の役割を奪ってはならない

私はこの見解を2aと名づけました。前の見解から最近になって派生したものだからです。これはまた、グルーデム、カーソン、ケラー夫妻が支持している、補完主義の主流の見解でもあります。この見解は、女性を黙らせはしないものの、女性を普遍的に従属させる道を見いだしています。パウロは女性による預言の吟味を禁じているという点では見解2に同意し、そのうえで次のような理由を付け加えます。預言を吟味できるのは教会の長老たちだけであり、だからこそパウロは女性がそれをすることを望まないのだ、と。

私の考えでは、これは元の見解よりもさらに弱いものです。二重の飛躍をしているからです。30–32節を飛び越えて29節へと跳ぶだけでなく、手紙全体のどこにも示されていない理由へと飛躍しているのです。グルーデムが示す論拠は、女性は預言すること、つまり自発的に与えられた啓示を分かち合うことはできるが、預言を評価するには教理的な権威が必要であり、それは男性だけがなれる長老の領分だ、というものです。この見解はさらにもう一度、テモテへの手紙第一2章12節にまで一気に飛躍します。そこには、女性は男性に教えることを許されていない、とあります。この節を前の節と相互参照することで、女性が「律法も言っているように、従

わなければならない」という言及は、創世記2章の性別役割が教えているように男性の長老たちに従うことを意味する、と受け取られるのです。

見解2で述べた弱点はすべてここにも当てはまりますが、この見解はいくつかの理由から、さらに多くの批判を受けてきました。パウロはこの手紙全体のどこでも、長老に言及していません。補完主義の無理な曲芸をよほど施さない限り、コリント人への手紙第一の中には、男性の権威を含意するもの、あるいは教えることが男性だけの働きであることをほのめかすものは、何一つありません。

現代のカリスマ派の教会では、預言を吟味することが長老だけに許されている場合があるかもしれません。しかし、コリント人への手紙第一14章でパウロは、預言のことばを語ることも吟味することも、教会全体の成熟に委ねています。実のところ、この手紙の中で、従うべき何らかの指導者への言及としてありうる唯一のものは、「ステファナの家の人たち」全体に向けられたものであり、コリントの人々はこの人々に「従う」べきなのです。実際、この家は、すべての家と同じように何人かの女性を含んでいたはずです。ですから、長老だけが預言の評価を許されているという主張よりも、コリントの男性たちがステファナの家の女性たちに従うよう懇願されていたという主張のほうが、より強い根拠を持つかもしれないのです！[209]

コリント人への手紙第一14章からテモテへの手紙第一2章12節への相互参照について言えば、後者の節はずっと後に書かれたものであり、したがってこの手紙の読者は誰一人としてそれを知りませんでした。当時、それはまだ存在していなかったのです。そのうえ、補完主義者たちはテモテへの手紙第一2章12節を誤って解釈しています（そのことは次の章で示します）。そうである以上、どんな相互参照も、この箇所の解釈に光ではなく、さらなる闇をもたらすだけなのです。

「従う」という語について言えば、それには人を表す目的語がないことに注意してください。これを、女性は男性の長老たちに従うべきだという意味だと想定することは、テキストにないものを読み込むことです。むしろ、より大きな文脈に目を向け、従う対象は、11–14章におけるパウロのすべての指示を導いている「秩序」の原則なのだと考えるほうがよいでしょう。また、たとえ「律法」が創世記2章を指しているとしても（創世記2章は女性の服従を教えていないので、その可能性は低いのですが）、創世記2章にある唯一の律法は、その実を食べてはならないという掟

209. もっとも、コリント人への手紙第一16章15–16節でパウロは、ステファナの家の人たちを長老として語っているのではなく、神の民自身から謙遜な奉仕を受けるにふさわしい、模範的な奉仕者（diakonia）であり同労者（sunergeo）として語っているだけなのかもしれません。

です。ここでもまた、ほかの箇所の誤った解釈が、この箇所の読み方をゆがめるために用いられているのです。

見解2と見解2aのおそらく最も明白な欠陥は、35節が預言することにも預言の吟味にも言及していないことです。むしろ35節は、女性が学びたいという願いから質問することを禁じています。これはまったく別の話題です。[210]

見解3：パウロは「女性は語ってはならない」と言う人々に反論している

多くの学者は、コリントにはパウロに反対する律法主義的なグループがあり、パウロは34–35節で実はそのグループのことばを引用し、36–38節でそれに反論しているのだと論じます。そうすることでパウロは、この教会が自分たちの文化的な制約を女性たちに押しつけていたやり方に異議を唱えているのです。言い換えれば、パウロがこの律法主義的なグループのことばを挿入している箇所として、34–35節の前後に引用符があるものと想像すべきだ、ということです。

この見解に説得力を与えているのは、パウロがこの手紙のほかの箇所でも、自分の見解に反対する人々のことばを実際に引用し、それを正しているという事実です。たとえば、コリント人への手紙第一6章でパウロはこう書いています。「『すべてのことが私には許されている』とあなたがたは言いますが、すべてが益になるわけではありません。『すべてのことが私には許されている』と言っても、私はどんなことにも支配されはしません。」[211]

この見解によれば、パウロの訂正は、これらの律法主義者たちのことばを引用した直後に続いています。このことを念頭に置くと、36節は次のようにも訳せるでしょう。「何ですって！　神のことばはあなたがたから出たのですか？　あるいは、あなたがただけに届いたのですか？」この反論の問いに続いて、パウロは、男性だけでなく誰もが、秩序正しく行われる限り、異言で祈ったり預言したりすること（それゆえ「語る」こと）ができることを明らかにしています（37–40節）。

210. この見解に対するより徹底した批判については、J. Greenbury, “1 Corinthians 14:34-35: Evaluation of Prophecy Revisited,” Journal of the Evangelical Theological Society 51 (2008): 721–31を参照してください。
211. コリント人への手紙第一6章12節。コリント人への手紙第一6章13節と7章1節も参照してください。

34–35節が、ローマ帝国における女性の一般的な扱われ方とよく似て聞こえることも、この見解の信憑性を高めています。たとえば、1世紀のローマの歴史家リウィウス（Livy）は、キケロ（Cicero）の演説を記録しています。「つい先ほど、女たちの一団の真ん中を通り抜けたとき、私は赤面した……人前を走り回り、通りをふさぎ、ほかの女の夫たちに話しかけているのだ！　同じことを家で自分の夫に尋ねることはできなかったのか？　人前でほかの女の夫たちと一緒にいるほうが、家で自分の夫と一緒にいるよりも魅力的だとでもいうのか？」[212]

この見解は可能性としてはありえますが、その主な弱点は、この手紙の中でこうした律法主義者や偽教師のことばを引用しているほかの箇所は、どれもこれほど長くないということです。

見解4：パウロはこれを書いていない

多くの本文学者は、女性に沈黙を求めるこれらの節は、パウロのもとの手紙にはなかったと論じます。[213]むしろ、初期の読者か写字生――おそらく女性を従属させる見方を持っていた人――が、それを欄外に書き込んだのです。後の写字生たちが、それを手紙の本文そのものに入れてしまいました。

最古の写本を研究する学者たちは、これまで何度も写本間の相違を特定してきました。それによって、さまざまなテキストの真正性に疑問を抱き、それらを挿入（interpolation）と呼んできたのです。こうしたことを聞いたことがなければ、不安を覚えるかもしれません。今私たちが手にしている聖書を信頼できるのだろうか、と思うかもしれません。しかし、何世紀にもわたる本文批評家たちの働きのおかげで、私たちは聖書本文の99.9%について、もとのことばを持っていることを99.9%の確かさで知ることができます。とはいえ、この箇所は、その0.1%の不確かさの中に入るのかもしれません。

これを支持する三つの証拠を考えてみましょう。第一に、この箇所が手紙の中で本来どこに属しているのか、確かなことは誰にもわかりません。実際、34–35節が章の中の現在の位置に現れるのは、東方系の写本だけです。最古の西方系の写本では、これと同じ節が40節の後に置かれています。考えてみてください。4世紀にヒ

212. M. Lefkowitz and M. Fant, Women’s Life in Greece and Rome, p. 171からの引用です。
213. “The First Epistle to the Corinthians”のゴードン・フィー、“First Corinthians, Interpretation”のリチャード・ヘイズ（Richard Hays）、“Man and Woman: One in Christ”のフィリップ・ペインといった学者たちは、みなこの見解をとっています。

エロニムス（Jerome）がそれを変えるまで、ラテン語を話す教会は、現在の33節から36節へと飛んでいたのです。この見解によれば、ある初期の写字生が現在の34–35節を欄外に書いた後、その写本を書き写していた後代の二人の写字生が、それをパウロのことばの中に入れました――一人はある場所に、もう一人は別の場所に。

第二に、こう考えれば矛盾が説明できます。女性たちが男性たちと一緒に喜んで祈り、預言しているかぶり物についての箇所で述べたことに、なぜパウロはあからさまに矛盾するのでしょうか？　なぜパウロは、この章の前のほうに出てくるのと同じ「黙る」という語を使いながら、突然それにまったく違う意味を負わせるのでしょうか？　28節と30節では、沈黙は一時的なもので、誰かが賜物を用いることを妨げるものではありません。ところが34節では、沈黙は強調的で永続的なものに見えます。すでに述べたように、パウロは「みな」や「あなたがたはそれぞれ」と言っており[214]、そうすることで女性が声を上げることを招いています。また、この章の思考の流れは、34–35節がないほうがずっとすっきり流れるように思われます。もっとも、それらの節は40節の後に置いても、収まりがよくなるわけではありませんが。

第三に、「律法も言っているように」という言い回しの使い方は、あまりパウロらしくありません。女性の沈黙や服従を命じている旧約の律法は一つもありません。また、パウロは特定の聖書箇所に言及するときには、ふつう「と書いてある」という表現を使います。パウロが律法に言及するために「律法が言っているように」を用いている二つの箇所では、別の動詞（legō）を使い、その律法を引用しています。

こうした、またほかの重みのある論拠があるにもかかわらず[215]、すべての学者がこの見解を受け入れているわけではありません。「語る」と「黙る」という語は14章で実際に使われていますし（たとえ違う意味で使われているとしても）、これらの節は、その位置が不確かであるとしても、私たちが持っている初期の写本のすべ

214. 23–24節、36節、31節を参照してください。
215. たとえば、パウロはほかのどこでも、キリスト者の礼拝の規則を定めるために律法を引き合いに出してはいません。キリスト者の礼拝は、私たちが律法の下ではなく御霊のうちにあることの表れだからです。また、この手紙のほかの命令はすべて、コリントの教会に向けられています。ところが34節は「教会の中の女性たち」に命令を向けており、それは「聖徒たちのすべての教会」のすぐ後に続いているので、すべての教会の女性たちを指しているのかもしれません。この命令は明らかに場違いです。さらに、さまざまな初期の写本の中で、何の明白な理由もなく二つのまったく異なる場所に現れる長い箇所は、ほかに一つもありません。これらすべてが、この箇所が後代の挿入であるという説に信憑性を与えています。

てに現れています。神が霊感を与えられたかもしれないものを脇へ放り出すという罪を、誰が犯したいと思うでしょうか？　私はこの見解をとりたい気持ちに傾いていますが、それでもなお、この箇所に見られる難点には別の解決があるのではないか、と問わなければなりません。

見解5：集まりを乱す学び手が秩序を損なっている

この見解は、パウロがコリントの教会だけに見られる、きわめて特有の問題を扱っているのであり、したがって、すべての教会にとって何らかの永続的な教訓はあるにしても、すべての教会への命令ではない、と考えます。[216]

この見解の鍵は、11–14章が礼拝における正しい秩序に焦点を当てているということです。11章3–16節で、パウロはふさわしい装いに焦点を当てています。11章17–34節では、主の晩餐をめぐる誤った慣行を正しています。14章11–32節では、カリスマ的な賜物の秩序を欠いた用い方を扱っています。具体的には、パウロは間違ったときに語っている三つのグループの人々を正しています。解き明かす人がいないのに公に異言を語る人（28節）、預言のことばを持っていながら自分の順番を待とうとしない人（30–32節）、そして最後に、間違ったときに、あるいは間違ったやり方で話す女性たち（34–35節）です。三つの場合のすべてにおいて、パウロの関心は、語られることばの内容というよりも、それが語られる秩序を欠いたやり方にあります。

礼拝集会に集まったコリントの女性たちのどのような振る舞いをパウロが正していたのか、正確にはわかりません。それでも古代の文化についての知識に基づいて、女性たちが秩序を乱すような仕方で「教会でおしゃべりをしていた」のだと推測することはできます。より広い文化の中では、女性はほとんど誰も教育を受けておらず、学びは読むことによってではなく口頭で行われ、女性はふだん宗教的な集まりに参加することを許されていませんでした。そうした中で、すでに自分の順番で預言を分かち合ったかもしれないこれらのキリスト者の女性たちは、今度は順番を無視して話していたのです。耳を傾ける代わりに、彼女たちは興奮して、周りの人々に、何が語られているのか、それはどういう意味なのかと尋ねていたのでしょう。

216. 一部の翻訳は「主の民のすべての集会においてそうであるように」ということばを、女性を黙らせるこの指示の冒頭に付けています。しかしこの見解は、それが秩序の優先性についての前の文の終わりに属するほうがふさわしいと考えます。英語の29の翻訳は、この点でほぼ真っ二つに分かれています。参照：www.bit.ly/3mGpFPT

そこでパウロは彼女たちに、集まりを乱すのをやめ、その会話は家で夫とするためにとっておくように言うのです。パウロは「もし何かを尋ねたいなら、家で自分の夫に尋ねるべきです」と言っています――彼女たちの夫は、ほとんどの場合おそらく彼女たちよりも教育を受けていたので、彼女たちの多くの質問に答えることができたかもしれません。

言い換えれば、この沈黙の指示は、女性に固有の「創造の秩序」や、男女の権威と服従の教理の上に築かれているのではありません。そうでなければ混乱して秩序を失ってしまう教会の集会に、秩序を取り戻すためにあるのです。この見解によれば、補完主義の議論とは反対に、パウロの関心は、女性が教えていることではなく、集まりの秩序にとって役に立たない仕方で学んでいることにあります。[217]ユージン・ピーターソン（Eugene Peterson）のThe Messageは、その意訳でこの意味をとらえています。「妻たちは礼拝を乱してはなりません。耳を傾けるべきときに話したり、家で夫に尋ねたほうがふさわしい質問をしたりしてはなりません。」

パウロにとって、教会の秩序を保つことには、その土地の文化的な感覚を考慮に入れることが含まれます。女性がかぶり物を着けないことが「恥ずかしいこと」（11:6）であったのと同じように、その文化においては、人々が、とりわけ女性が、学びの場を乱すことは「恥ずべきこと」（14:35）だったのかもしれません。

ここでパウロを性差別的だと非難したくなる人がいるなら、思い起こしましょう。パウロは福音の価値観を守る教会を開拓しようとしていたのであり、同時に、何人かでも救うために「すべての人に、すべてのものとなる」ことを目指していたのです。[218]パウロは、教会が届こうとしていた文化を理想化していたのではありません。むしろ伝道的な意図から、鍵となる価値観を損なうことなく、その社会の礼儀作法に合わせて譲歩しようとしていたのです。そしてもちろん、学びが決定的に重要な場では、集まりを乱す学び手には、皆の益のために何らかの指針が必要であることを、パウロは知っていました。

興味深いことに、この文化的な感覚への配慮を現代の西洋の文脈に当てはめるなら、女性が男性と同じように貢献し、学ぶようにするのが賢明でしょう。実際、そ

217. ヨハネス・クリュソストモスは、3世紀後に、パウロのこの見解を共有していました。「当時、女たちはこうした教えによって黙っていました。しかし今では、彼女たちの間にはひどい騒がしさ、大きな喧騒とおしゃべりがありがちで、しかもこの場所〔大聖堂〕ほどそれがひどいところはありません……こうしてすべてが混乱し、彼女たちは、静かにしていなければ有益なことを学ぶことはできないということを理解していないようです。私たちの話〔説教〕がおしゃべりに逆らって声を張り上げ、誰も語られることに注意を払わないなら、それが彼女たちに何の益をもたらすでしょうか？」（Homily IX, Nicene and Post-Nicene Fathersからの引用。）
218. コリント人への手紙第一9章23節

うしないことこそ「恥ずべきこと」なのです。

この見解が正しいのでしょうか？　そうかもしれないと私は思います。[219]しかし、絶対の確信を持つことはできません。そのことが、最後の一つの考察へとつながります。

不明瞭な箇所

教会は、聖書についての自分たちの解釈を問い続け、ますます高いレベルの明確さと確信へと進んでいかなければなりません。しかしそれと同時に、この箇所が今なお答えよりも多くの問いを投げかけていることを認めることが大切です。より有力な見解でさえ、暫定的なものです。ですから、謙遜さが求められます。

もし私たちが、神のことばに背くことを恐れて、最も保守的な解釈（見解1）を選ぶなら、女性を完全に黙らせることには、女性が歌わないことも含まれるはずです。歌うことは、パウロによって一種の語ることとして挙げられているからです。[220]保守的であると主張しながら、女性が預言を吟味したり説教したりすることだけをやめさせるのは、私にはまったく恣意的で一貫性を欠いているように見えます。そして一貫性と言えば、もし保守的なアプローチをとるのなら、本当に一貫して、次の教会の集会のためにかぶり物を用意しておくよう、すべての女性に指示しようではありませんか！　尊敬すべき学者たちがこの箇所の研究でこれほど多くの異なる結論に至っている以上、私たちが皆きっと同意できる一つのことは、この箇所が不明瞭な箇所だということです。したがって――どのようなよい解釈の方法に照らしても――この箇所は、教理的な結論や、あらゆる場所のあらゆる教会の実践における普遍的な命令の土台となるべきではありません。

コリント人への手紙第一11章もコリント人への手紙第一14章も、女性が教会や社会で指導すること、夫のパートナーとして夫と並び立つこと、あるいは男性に向けて説教をすることの可能性を排除していません。これらの同じ節が、補完主義者たちによって自分たちの立場を擁護するものとして示されてきたにもかかわらず、そうなのです。そうなると、調べるべき決定的に重要な箇所が、あと一つ残っています。

219. もっとも、見解4のほうを好む人々とともに、私も認めなければなりません。女性の沈黙を求める呼びかけは、何の限定もなく三度も述べられており、集まりにおける女性のあらゆる発言に対する絶対的な（単に状況に特有なものではない）禁止を意味している可能性があります。
220. コロサイ人への手紙3章16–17節を参照してください。



7

テモテへの手紙第一2章11–15節

「女性が奉仕の働きに携わることへの反対は、しばしば事実上ただ一つのパウロのテキスト――テモテへの手紙第一2章11–12節――に基づいて展開されています。この難しいテキストとその文脈が何を意味しているにせよ、それは同じ問題に関わるほかのすべての聖書テキストとの釣り合いの中に置かれなければなりません。私の判断では、そうすることで、テモテへの手紙第一のこのテキストが限られた状況に向けて語っていることが明らかになります。」デイヴィッド・ショーラー（David Scholer）[221]

『ハリー・ポッターと謎のプリンス』の終わり近くで、ダンブルドアは敵に囲まれています。彼はスネイプ先生に懇願します。「セブルス……頼む！」私たちの胸を引き裂くように、スネイプはダンブルドアを殺します。そして私たちは、スネイプは初めからずっとヴォルデモートの裏切り者の手先だったのだと結論づけます。

しかし、ちょっと待ってください。最終巻になって初めて、私たちは（ハリーと一緒に）、すべてが見かけどおりではなかったことを知ります。ハリーがスネイプの記憶（魔法の「憂いの篩」に注がれたもの）を明らかにしていくと、スネイプは若いころハリーの母親を愛しており、好感の持てない人物ではあったかもしれませんが、初めからずっとダンブルドアとハリーに献身していたことがわかるのです。

実はダンブルドアは、自分が取り返しのつかない呪いによって死にかけていることを知っていたので、前もってセブルスに、自分の命を奪うよう強く頼んでいたのです。そうすることでヴォルデモートからのスネイプの信頼を確かなものにし、今度はその信頼をハリーのために役立てることができるようにするためでした。

221. https://www.fuller.edu/womeninministry/

物語の筋を知った今、「セブルス……頼む！」ということばは、まったく違う意味を帯びます。それは、かつて私たちが思っていたように、命を助けてほしいとスネイプに必死に懇願するダンブルドアのことばではなく、むしろ自分を殺してほしいという懇願なのです。この瞬間は悪の勝利であるどころか、実際には闇に対する究極の勝利へとつながっていくのです。

私がこのたとえ[222]を紹介するのは、文脈から切り離されるとまったく誤解されかねない、あちこちの一行や一節を正しく理解しようとする前に、物語の筋に深く浸っておくことがいかに大切かを示すためです。

補完主義の学者たちは、非常に長い物語の中の小さな三つの行（私たちが今取り組んでいる三つの聖書箇所）を取り出し、文脈から引きはがしてしまうという誤りを犯しています。聖書の権威に献身している（それはよいことです）彼らは、聖書全体がその解釈を支持していないにもかかわらず、ある箇所のある解釈にしがみつこうとします。神の回復の計画という主要な筋書きに反して、彼らは家父長制を理想化し、永続させようとしています。しかし、より大きな物語の中では、その物語の作者は家父長制を取り除こうと計画しておられるのです。

実際、階層的な秩序がなぜ神のみこころなのかを立証するために、テモテへの手紙第一2章8–15節で弟子に宛てたパウロのことばほど、頻繁に、また強調して引き合いに出される箇所はほかにありません。ほかのすべての聖書的論拠が失敗したとき、これが補完主義者の最後のよりどころとなる箇所です。補完主義の学者の中には、これを、女性と、女性が教会の指導者として按手を受けることとの間に立ちはだかる唯一の信頼に足る箇所だと見なす人さえいます。[223]

先に進む前に、ひと言注意しておきます：この章の残りの部分は、本書の中で最も専門的で、最も長いものです。これほどの解釈上の複雑さに付き合いきれないと思われるなら、遠慮なく次の章へ飛んでいただいてかまいません。ただし、補完主義の主要な防波堤となっているテキストであるテモテへの手紙第一2章11–15節は、実は補完主義を支持していないことを私が示す、ということは知っておいてください。

これがその箇所です。いくらかの文脈を与えてくれる前後の節も一緒に示します。

222. このたとえは、レベッカ・マクラフリン（Rebecca McLaughlin）の“Confronting Christianity”（第8章）によるものです。
223. 「女性の按手に反対する正当な論拠はただ一つしかありません……テモテへの手紙第一2章12節にある禁止です」と、スーザン・フォー（Susan Foh）は“Women in Ministry: Four Views” (1989), ch. 2で述べています。

8 そういうわけで、私は、男たちが怒ったり言い争ったりすることなく、どこででも、きよい手を上げて祈ることを望みます。9 同じように女たちも、慎みと品位をもって、つつましい身なりをし、凝った髪型や金や真珠や高価な衣服によってではなく、10 神を敬うと公言している女たちにふさわしく、良い行いによって自分を飾るよう望みます。

11 女は、静かに、よく従う心をもって学ぶべきです。12 私は、女が教えたり、男の上に権威を握ったりすることを許しません。女は静かにしていなければなりません。13 アダムが初めに造られ、それからエバが造られたからです。14 そして、だまされたのはアダムではなく、女がだまされて罪人となったのです。15 しかし女は、子を産むことによって救われます――もし慎みをもって、信仰と愛と聖さにとどまり続けるなら。

3:1 これは信頼できることばです。監督の職に就きたいと願う人は、立派な働きを求めているのです。

補完主義者の見方

補完主義の神学を支える主要な節は、次のものです。「私は、女が教えたり、男に対して権威を〔行使〕したりすることを許しません……アダムが初めに造られ、それからエバが造られたからです。」補完主義者たちは、これらの節が本質的に次のような意味だと解釈しています。

使徒として私は、すべての教会において、あらゆる状況で、女性は男性に教えたり、男性に対して牧会的な権威を行使したりしてはならないと定めます。男性に教えたり、男性に対して権威を行使したりすることがふさわしいのは、男性だけだからです。その理由は、アダムがエバより先に造られ、それゆえ正当にエバを導くからです。この「創造の秩序」は、将来のすべての敬虔な共同体に当てはまります――男性の霊的権威こそ、神が望まれる規範なのです。

言い換えれば、女性が教会で男性に教えたり、男性の上に権威を持ったりするなら、彼女は永続的で普遍的な使徒の指示と「創造の秩序」の両方に背いていることになります。

補完主義者たちが三つの問題で意見を異にしていることに、注意しておくことが大切です。この階層的な原則が家庭と教会にだけ当てはまるのか、それとも社会にも

当てはまるのか。「教えたり権威を行使したり」が二つの活動（教えることと指導すること）を指しているのか、それとも一つの活動（指導者のような仕方で教えること）を指しているのか。そして、女性が排除されるのは教会の最高指導職からだけなのか、それとも男性が従う側になる教会のあらゆるレベルの指導職からなのか、という三つです。この三点すべてについて、補完主義の重鎮たちの大半は、ケステンバーガーやシュライナーのように、より厳格な解釈をとっています。たとえばケステンバーガーはこう書いています。「パウロは簡単に『私は女性が長老になることを許さない』と言うこともできたはずだ。しかしそうではなく、『私は女性が男性に教えたり権威を行使したりすることを許さない』と言った。これは、女性が担うべきでないのはこうした機能そのものであって、単にそうした教えや権威の行使が行われる職務だけではない、ということを示している。」[224]

「教える」（ギリシア語didaskein）とは何を意味するのでしょうか？　シュライナーは、それは「権威ある資料の伝達」だと言います。したがって、パウロの関心は、女性が男性に誤りを教えるということだけでなく、女性がそもそも男性に教えるということにある、というのです。女性が男性に真理を教えることさえ、不適切だというわけです。教会の女性は、ほかの女性や子どもたちには教えてもよいけれども[225]、成人男性には教えてはならない、と。一つの節、使徒の働き18章26節は、女性が男性に教えることについての例外を認めるように解釈されています。正式な教会の集会の外で、一対一であれば、女性が男性に教えることは許されるかもしれない、というのです。

補完主義の議論によれば、テモテへの手紙第一2章12節における権威の行使（ギリシア語authentein）は、権威の否定的な用い方を指すのではなく、教会の男性牧師たちによって行使されるような、肯定的な種類の権威を指しています。

パウロは、自分の使徒としての指示の論拠を示しています。「アダムが……からです」。接続詞「から」（英語for、ギリシア語gar）は理由を表すのだ、と補完主義の学者たちは言います。パウロの理由は、「アダムが初めに造られ、それからエバが造られた」ことです。「初めに」と「それから」ということばは、序列を含意しています。補完主義者たちによれば、このことは、パウロが創世記2章を、堕落以前のアダムのエバに対する権威についての教えとして読んでいたことを証明している、というのです。

224. 出典：www.bit.ly/3mG7n13
225. その例として、テトスへの手紙2章3–4節、テモテへの手紙第二1章5節、3章15節を参照してください。

パウロは続けます。「そして、だまされたのはアダムではなく、女がだまされて罪人となったのです」（14節）。補完主義者たちはこれを、創造の秩序を逆転させようとするサタンのたくらみにエバが協力したことを指していると解釈する傾向があります（アダムが責任者であったにもかかわらず、サタンはエバに話しかけることでアダムの権威を迂回し、エバもまたアダムの権威を迂回して、アダムに相談することなく誘惑に対処した、というわけです）。

補完主義者たちは、今私たちが手にしているような章の区切りは、パウロのもとの手紙には存在しないことを、正しく思い起こさせてくれます。実際、思考の流れは続いています。パウロはすぐに、誰が教会の監督になることができるかという話題に移ります（3:1）。補完主義者たちは、パウロがこう含意していると想像します。「女性は男性に教えたり、男性に対して権威を行使したりしてはならないと述べたので、あなたは、では誰がそれをするのかと思っているに違いない。答えは……男性の監督である。」

これが1970年代以降に少しずつ考案された、ほぼまったく新しい解釈であるという事実はさておき[226]、（上で概説した）補完主義の解釈について私が抱いているいくつかの懸念を示させてください。

深く傷ついた教会

この手紙は私たちに宛てて書かれたのではなく、私たちのために書かれたものです。もちろん、それは霊感された聖書であり、したがってすべての教会にとっての時代を超えた真理を含んでいます。しかし、そうした真理は、この手紙が扱っていた独自の状況に基づいて、注意深く掘り出されなければなりません。この特定の歴

226. テモテへの手紙第一2章11–14節についての相互主義者の解釈は、新奇であるという理由で、補完主義者たちからいつも異議を唱えられています。しかし、この非難は両刃の剣です。20世紀後半に至るまで、教会史の大半の聖書教師たちは、女性についての聖書テキストを、自分たちの文化の家父長制や女性蔑視というレンズを通して自動的に読んでいたので、このような箇所を誤解したのも無理はありません。要するに、彼らはこの箇所を、女性の質的な劣等性に基づいて、社会のあらゆる領域で女性を普遍的に従属させるものとして読んでいたのです。女性にはそれができないから、男性が教え、指導すべきだというのです。ですから、補完主義者たちが自分たちの見解こそ歴史的なものだと主張するとき、彼らは自分たちの解釈がいかに新奇なものであるかについての無知を露呈しているのです。この箇所を一句ずつたどりながら、補完主義の見解と（通常の）歴史的見解との違いを示しましょう。「私は、女が教えることを許しません」。補完主義者たちはこれを、パウロが聖書を教えることや、キリスト者の男性に教えることだけを禁じているのだと見ます。しかし歴史的には、これは通常、あらゆる種類の教えのことだと理解されていました。社会の中の女性は、男性を含め、誰にも教えてはならないというのです。「男の上に権威を握ることも」。補完主義者たちはたいてい、これは男性の長老だけにふさわしい牧会的な指導のことを指していると言います。しかし歴史的には、これは、教会の中だけでなく社会のあらゆる場で男性だけが指導すべきであって、女性はその男性たちから権威を「簒奪する」（あるいは力ずくで奪い取る）ことを禁じられているのだと理解されていました。「女が……男に教えること」。補完主義者たちは、この箇所についての自分たちの理解を、プリスキラがアポロを正当に教えたこととぎこちなく調和させようとして、これを、女性は一人の男性に非公式に教えることはできるが、男性たちを集団で、あるいは正式に教えることはできない、という意味に解釈します。しかし歴史的には、これは、女性が男性の集団に教えることも、個々の男性に教えることも禁じるものとして理解されていました。「アダムが初めに造られ、それからエバが造られたからです」。補完主義者たちはこれを、教会とキリスト者の結婚における男性の霊的指導にだけ当てはまる、アダムのエバに対する権威のことだと見ます。しかし歴史的には、これは、女性が統治に向いていないことによって、教会を含む社会のあらゆる面で男性が女性を治めるという、創造に基づく普遍的な規則として理解されていました。「そして、だまされたのはアダムではなく、女がだまされて罪人となったのです」。補完主義者たちは、これはアダムのエバに対する権威をサタンが逆転させたこと、そして彼女がその逆転に屈したことを指していると言います。しかし歴史的には、これは、女性のほうが知的にも道徳的にも欺きや誘惑に陥りやすいことだと理解されていました。補完主義の解釈と歴史的な解釈の違いをさらに学ぶには、次を参照してください：www.bit.ly/3Q4TWo4、www.bit.ly/3xlOXIj。問うべき問いはこうです。女性の質的な劣等性のゆえに、彼女は社会のどこにおいても誰かに教えることも男性を指導することもできないとする歴史的な解釈を受け入れないのであれば、より最近の解釈（補完主義か相互主義か）のどちらがより正しいのでしょうか？ 本書は、この問いに対する私の答えです。

史的状況を考慮せず、単にこのことばが私たちに語りかけていると思い込むなら、私たちはその意味と適用を誤解しやすくなります。では、パウロは2章11–15節でどのような状況を扱っていたのでしょうか？

私たちは、この箇所を、それに先立つすべての節に照らして読みさえすればよいのです。最初のあいさつの後、パウロはテモテにこう命じて、手紙の本題に入ります。「エペソにとどまり、ある人たちが、もはや違った教えを説かないように、また作り話と果てしない系図に心を奪われないように命じなさい」（1:3–4）。こうした「ある人たち」は、その後も手紙全体を通して視野にとどまっています。パウロは、「ある人たちは」「きよい心と健全な良心と偽りのない信仰」から「外れて」、「むなしい議論に迷い込んで」しまったと書いています（1:5–6）。「ヒメナイとアレクサンドロ」のような人々は、「信仰の破船にあいました」。これらの人々はあまりにも深く道を外れてしまったので、パウロは、彼らが「神を冒瀆してはならないことを学ぶように」、彼らを「サタンに引き渡しました」（1:19–20）。

偽教師についてのこの描写にすぐ続いて、パウロは「そこで、私は……勧めます」（2:1）と言います――「そこで」とは「それゆえ」という意味です――そして、教会として祈りのうちに使命感を取り戻すこと（2:1–7）、男性が怒りや言い争いを控えること（2:8）、女性がこれ見よがしで誘惑的な装いを避けること（2:9–10）、そして女（単数）がよく従う心をもって学び（2:11）、男に教えたり男の上に権威を握ったりしないこと（2:12）について、指示を与えています。

パウロの手紙を解釈するにあたっては、私たちが電話の会話の片側だけを聞いているのだということを忘れてはなりません。そこではパウロは、私たちではなく別の誰かに語っているのです。ときには、手紙そのものの中にある証拠を用いて、テモテへの手紙第一2章の指示の一つひとつが、どのように教会を回復させ、偽教師たちの影響に対処するのかを推測しなければなりません。そうしてみると、たとえば、偽りの教えによって引き裂かれた教会は使命感を失いかねないので、祈りのうちにそれを取り戻すようにという指示の意味がわかってきます。異端と分裂のために、男性たちは、ほかの男性たちや、だまされた女性たち、敬意を欠いた女性たちに対して、怒りをもって反応するようになっていたのかもしれません。だからこそパウロは、男性が「怒ったり言い争ったりすることなく」祈りの中できよい手を上げるようにと指示しているのです。同じように、異端は何らかの形で、とりわけ一部の裕福な女性たちの間に、特に男性に対する、これ見よがしで高慢で、教えを受けつけない独立的な態度と振る舞いを助長していたのかもしれません。だからこ

そ、女性たちに、よく従う心をもって神のことばから学び、男性たちともっと敬意をもって接するようにという指示があるのです。私が言いたいのは、パウロは、私たちよりも彼のほうがよく知っている特定の困難な状況に対処するための指示を与えているのであり、その状況が何であったのかについては、手紙の中にいくらかの証拠がある、ということです。そうでなければ、なぜ男性だけが祈るよう励まされているのでしょうか？　また、そうでなければ、なぜ女性だけが学ぶように言われているのでしょうか？

ここまでで、テモテへの手紙第一1章から、一部の男性たちがひどい振る舞いをしていることは明らかです。しかし、2章9–15節以外で、女性たちが道を外れていることにどれほど確信が持てるでしょうか？　テモテへの手紙第一5章がその答えを与えてくれます。一部の女性たちは、「官能的な欲望」のゆえに「キリストへの献身」を捨ててしまいました（11節）。彼女たちの多くは「怠けて家々を遊び歩き」、「くだらない話をし、言ってはならないことを言うおせっかい」になっています（13節）。彼女たちは敵に「そしる機会」を与えています（14節）。「実際、すでに道を外れてサタンの後について行った人たちもいます」（15節）――これは異端に屈することを指しています。[227]手紙の結びのパウロのことばは、偽りの教えこそが根本的な問題であることを示しています。「俗悪な無駄話や、偽って知識と呼ばれているものによる反論を避けなさい。ある人たちはこの知識を公言して、信仰から外れてしまいました」（6:20–21）。偽りの教えがどのようにして一部の女性たちのひどい振る舞いにつながったのか、正確にはわかりません。しかし、そこには明確なつながりがあります。それが最もはっきり表れているのは、パウロがこれらのエペソの女性たちを、彼女自身もサタンによって「だまされた」エバになぞらえているところです。[228]

そうであれば、テモテへの手紙第一2章11–15節についての補完主義の学者たちの大半において驚かされるのは、偽りの教えの影響が、パウロの手紙全体の――この箇所も含めて――差し迫った関心事であることを認める人がいかに少ないか、ということです。たとえばキャシー・ケラーは、「私がこれらのことを書き送るのは、たとえ私が遅くなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかをあなたが知っておくためです」というパウロのことばを引用し、「この手紙全体は……教会開拓のマニュアル、つまり神の家の原則に従って……どのように教会を立ち上げるかの

227. パウロがテモテに宛てた二通の手紙では、サタンへの言及はたいてい、偽りの教えと、それが勧める堕落した生き方に関係しています。テモテへの手紙第一1章20節、2章14節、4章1節、テモテへの手紙第二2章23–25節を参照してください。
228. テモテへの手紙第一2章14節。

手引きとして見ることができます」と結論づけています。[229]シュライナーでさえ指摘しているように、これは正しくありません。[230]彼女はまた、「たとえ私が遅くなった場合でも」という一節を見落としているようです。この一節は、手紙の主要な部分の一つひとつにある他のしるしとともに、偽教師たちに荒らされた教会を回復させようとするパウロの切迫した努力を明らかにしています。ケステンバーガーとグルーデムは、パウロが異端とその影響に対抗するためにこの手紙を書いていることを認めながらも、奇妙なことに、この箇所をその優先課題からの脱線として扱っています。[231]まるでパウロが、主要な重荷とそれまでの思考の流れから一息ついて、偽りの教えのただ中で男性たちに真理を教えようとしてきた一部の女性たちに、今向き合っているかのようにです。しかし、前後の箇所だけでなく、12節そのものの中にも、一部の女性たちが罪を犯していた状況をパウロが正しているしるしがあるのです。

私は今のところ許していません

パウロのことばepitrepoを探ってみましょう。英語では、正されている振る舞いを述べるのに、四語の句で訳されています。「『I do not permit』〔epitrepo〕（私は許しません）――女が教えることも、権威を握ることも……」

まず注目すべきは、この語が現在形であることです。そのため、パウロがこの禁止をこの状況のために出しているという説が、十分にありうるものとなります。それでもグルーデムは、「ギリシア語の力」から言って、これは「すべての時代のすべ

229. キャシー・ケラー、“Jesus, Gender and Justice.” テモテへの手紙第一3章15節。
230. J・N・D・ケリー（J.N.D. Kelly）の1963年の注解やドナルド・ガスリーの1957年の注解など、テモテへの手紙第一についてのかなり古い注解書はこのアプローチをとっていました。しかし、私が読んだ現代の注解書は、テモテへの手紙第一の三分の一が偽教師／偽りの教えに直接取り組んでいるだけでなく、手紙の残りの三分の二もそれによって色づけられていることを認めています。だからこそトム・シュライナーはこう認めています。「テモテへの手紙第一を教会秩序のマニュアルとして描くことは……手紙の目的に正確には合わない……パウロは、偽教師たちにだまされ、欺かれている女性たちに焦点を当てている（参照：Ⅰテモテ2:14、Ⅱテモテ3:6–9）」（出典：www.bit.ly/3BN3tYQ）。それにもかかわらず、テモテへの手紙第一2章が偽りの教えを扱っているという事実に対するよくある反論は、パウロが男性たちに「どこででも」（NIV）あるいは「あらゆる場所で」（ESV）（8節）一定の仕方で祈ってほしいと願っている、というものです。しかしテモテへの手紙第一1章の文脈を考えれば、これはおそらく、エペソの信者たちが祈るために集まるあらゆる場所、最も明らかには、教会の集会の場となっていた数多くのエペソの家々を指しているのでしょう。
231. ケステンバーガー、“Women in The Church,” p. 152-155、およびグルーデム、Evangelical Feminism and the Biblical Truth, p. 280-284。アンドリュー・バートレットの“Men and Women in Christ”（p. 390）に負っています。

てのキリスト者に当てはまる命令」の一つであると言い張ります。[232]この主張は言い過ぎです。同じ補完主義の学者であるダグラス・ムーはこう言っています。「動詞の現在時制に関する限り、そこから結論できるのは、パウロがこれを書いた時点でこれらの禁止を強く求めていたということだけである。」[233]この承認だけでも、パウロが普遍的な命令を発しているという主張をことごとく弱めるのに十分です。「I do not permit」という英語のことばが、時代を超えた普遍的な命令が下されているという印象を与えることを踏まえて、ムー自身、よりよい訳は「I am not permitting……」（私は今のところ許していません……）であると提案しています。[234]

加えて、聖書のほかの箇所におけるこの語の用法を調べると、これがおそらく状況に特有の禁止であることが確かめられます。旧約聖書のギリシア語訳におけるepitrepōのすべての用法において、また新約聖書でこの語が用いられているほかの17箇所の圧倒的多数において、それは特定の状況のために下された決定を指しています。[235]ムーも、「この動詞が聖書の中で、普遍的に適用される命令について用いられることは多くないと認めなければならない」と譲っています。[236]もしパウロが、あらゆる場所のすべての教会のための普遍的な理想を述べるつもりだったのなら、なぜ単に「女性は決して教えてはならない」と書かなかったのでしょうか？たとえば、パウロは決して「私はあなたがたが淫らな行いをすることを今のところ許していません」とは書かないでしょう。そうではなく、もっと率直にこう言うはずです。「淫らな行いをしてはなりません！」では、なぜパウロはここで、これほど直観に反する、柔らかな言い回しを使っているのでしょうか？

つまり、パウロがこの禁止をepitrepōという語で切り出しているという事実は、パウロが地域的な状況に向けて語っているのかもしれないと考える理由を与えてくれ

232. Wayne Grudem, Evangelical Feminism and the Biblical Truth, p. 301
233. ダグラス・ムーが“Recovering Biblical Manhood and Womanhood,” ch. 9で述べている言葉です。
234.「この語のギリシア語での用法により忠実な英訳は『I am not permitting』（私は今のところ許していません）であり、それは、教会の伝統の重みを持たない、エペソでの問題に対応した、その事例に特有の新しい命令であることを示している。」Moo, 202
235. Philip Payne, Man and Woman, One in Christ, p. 201-202を参照してください。また、次も参照してください：https://biblehub.com/greek/strongs_2010.htm。例外は二つだけで、コリント人への手紙第一14章34節の「彼女たちは……許されていません」と、マルコの福音書10章4節の「モーセは……許しました」です。前者については第6章で扱い、これらのことばはおそらく挿入であったか、あるいは実際には、パウロがコリントの教会のきわめて特定の状況に対して助言を与えていたのだと結論しました。後者の場合、マルコの福音書10章5–12節のイエスの答えは、イエスがモーセの定めを、永続的な理想からの一時的な逸脱と見ておられたことを示しています。
236. 出典：https://bit.ly/3mExipX（p. 199）

るのです。

Authentein

補完主義の解釈の核心は、パウロが女性に、（一部の）男性だけに許されるべきこと、すなわち教えることと、他者に対して牧会的な権威を行使することをしてはならないと言っている、というものです。言い換えれば、ここで語られている教えることと権威を行使することは、ふさわしい人がそれを行う限り、神が定められた活動だということです。しかし、パウロが女性に禁じているのが、男性にもしてほしくないことであると示せるなら、この読み方は内側から崩れてしまいます。別の言い方をすれば、これらの活動のどちらか一方、あるいは両方が罪深いものであると示されるなら、補完主義の読み方は誤っているということです。

そこで議論の焦点となるのは、「authenteinする」という動詞です。この議論は、英語のさまざまな翻訳に表れています。「権威を行使する」（to exercise authority、ESV）は正当なことですが、「権威を握る」（to assume authority、NIV）は否定的な行為である可能性があります。たとえば、教師が教室で生徒たちを導くなら、彼女は「権威を行使して」いるのです。一方、生徒が授業を乗っ取ろうとするなら、その生徒は不当に「権威を握って」いるのです。ほかの翻訳には、「支配する」（to have dominion、ASV）、「統制する」（to control、CEB）、「威張り散らす」（to domineer、NEB）、「主人顔をする」（to lord it over、TLB）などがあります。

この語を訳すのをいっそう難しくしている問題の一つは、authenteinが聖書全体で一度しか使われていない語だということです。[237]そのため、パウロがこの語をほかにどう使ったのか、あるいはほかのどの聖書記者がどう使ったのかを見ることはできません。パウロが紀元62年にここで用いる前後の数世紀に、古代ギリシア語文献の著者たちによって使われてはいましたが、それでもきわめてまれな語でした。実際、パウロの宣教の前後それぞれ100年の間に、現存する古代文献の中にこの語の用例は五つしかありません。それでは、その語のニュアンスが肯定的なものか否定的なものかを、どうして見いだせるでしょうか？

補完主義者たちは、自分たちの肯定的な訳について二つの理由を挙げます。第一に、彼らの主張によれば、didaskein（教える）という語は肯定的なものであり、

237. 専門用語では、hapax legomenonと呼ばれるものです。

したがってauthenteinにも肯定的な意味が必要になる、というのです。ケステンバーガーは、古代ギリシア語文献で二つの不定詞が並んで現れる例に基づいて、didaskeinとauthenteinという二つの動詞は、両方とも肯定的であるか、両方とも否定的であるかのどちらかだと論じています。補完主義者たちは、didaskeinは常に肯定的な語だと主張します。たとえばシュライナーは、テモテとテトスに宛てたパウロの牧会書簡では、didaskeinは常に「〔集まった公の礼拝〕における権威ある伝承の伝達を意味し、非公式な分かち合いを意味するのではない」と主張しています。[238]唯一の例外は、それが偽りの教えであることを示すために別の否定的な語が用いられている場合だ、と彼らは言います。それゆえ彼らは、テモテへの手紙第一2章12節では、authenteinの肯定的な意味が、didaskeinと結びついていることから推論される、と結論づけます。

第二に、ヘンリー・ボールドウィン（Henry Baldwin）のような補完主義の言語学者は、古代文献ではこの語はごく一般的に肯定的な意味で使われていると論じ、アル・ウォルターズ（Al Wolters）は、否定的に使われることはほとんどなかったと論じています。

この語の意味がテモテへの手紙第一2章12節の解釈においてこれほど決定的であることがわかってきた以上、私たちは、その意味について学者の間で合意に至ることは決してないかもしれないと受け入れなければなりません。ここ数十年にわたるこの古代の語の学問的研究を追っていると、世界的な学者たちが互いの主張を論駁し続けていることに気づきます。それでも、この語をめぐる最近の学術的な著作を何日もかけて読み返してきた結果、私は、この語は古代文献の中で、あるときは肯定的に、あるときは否定的に使われていると結論します。とはいえ、この節で「権威を行使する」と訳すのはおそらく正しくなく、この語をより否定的なニュアンスで訳すほうが正確であることには、八つの理由があります：

第一に、「教える」（didaskein）は、この箇所では否定的な種類の教えである可能性が十分にあり、肯定的な教えも正式な教えも指していないのかもしれません。シュライナーは、テモテとテトスへのパウロの手紙では、それは常に肯定的な行為であり、具体的かつ正式に毎週の礼拝集会で行われるものだと、聖書の証拠を超えて論じています。牧会書簡の中で、この語は集まった礼拝における権威ある教理的な

238. Women in the Church, 3rd Edition, p. 175

教えに必ずしも限定されてはおらず、ときには罪深い種類のdidaskeinと見なされています。[239]

いずれにせよ、didaskeinについては（正式で肯定的な教えという）固定的な意味を主張し、authenteinについては文脈によって決まる意味を主張するのは、一貫性を欠いています。実際、最も基本的な解釈の原則は、両方の語の意味を文脈に明らかにさせることです。[240]たとえば、教会のある人々がdidaskeinを禁じられている場合、それはその教師たち、あるいはその教えの中に深刻な問題があることを指していると考えてよいでしょう。[241]禁じられた教えの形にはほかにも例がありますが[242]、牧会書簡の中でdidaskeinが禁じられているもう一つの箇所を考えてみてく

239. 「教える」という語は、箇所によって違う使い方をされています。シュライナーには、didaskeinという語が牧会書簡の中で常に、礼拝における霊的指導者による正式な教理的説教として読まれるべきだとか、常に必ず健全な内容の教えを指しているとか主張する、実質的な論拠がありません。didaskeinは牧会書簡のほかの箇所ではシュライナーの言う意味であるかもしれませんが、ときには別の意味をとります。シュライナーに反して、それはときに、集まった礼拝の外での非公式な分かち合いを指します。パウロは、テモテへの手紙第一2章12節でdidaskeinを用いることによって、他の人々が何を信じ、どのように生きるかを形づくるように語ること、といったことを意味しているのかもしれません。それには、より正式な説教だけでなく、非公式な分かち合いも含まれるでしょう。補完主義の基準によれば女性は男性に教えてはならないのに、毎週の礼拝には常に男性がいるのだとしたら、女性はいつ、どこでほかの女性たちを教えることになっているのでしょうか（テトス2:3–5）？また、「反対する人たち」を教え、指導することは、礼拝の中でしかできないのでしょうか（Ⅱテモテ2:24–25）？集まった礼拝の中で、ただ一人の人（「女」）がただ一人の別の人（「男」）に教えようとしている、などとどうして言えるでしょうか（Ⅰテモテ2:12）？もし集まった礼拝での教えだけが念頭にあるのなら、教えを受けた人がほかの人々に教え、その人々がまたほかの人々に教える、という教えの流れはどのようにして生まれるのでしょうか（Ⅱテモテ2:2）？そして、家々をことごとく揺るがしていた教えについてはどうでしょうか（テトス1:10–11）？また、シュライナーに反して、それは罪深い種類の教えを指すこともあります。たとえばパウロは、権威ある使徒的伝承ではなく異端的な内容を分かち合っている人々の、ことばによる行為を表すのに、まさにdidaskeinという語を用いています（テトス1:11）。

240. didaskeinそれ自体は、否定的でも肯定的でもありません。それぞれの場合の意味は、文脈によって決まります。たとえば、人は傲慢な仕方や強制的な仕方で教えることもあれば、誤りを教えることもあります。結論として、補完主義の学者たちのように、それが本来肯定的なものであり、したがって対になる語authenteinを規定するはずだと想定するのではなく、対になるあらゆる語と、より大きな文脈とにその意味を決めさせるほうが理にかなっています。didaskeinは「偽りの教えが念頭にあることを示す限定的な語がない限り、常に肯定的である」と言う補完主義の学者たちは、人為的な解釈規則を作り出しています。そうではなく、文脈が常に意味を決めるのです。

241. 否定的な文脈で用いられている例として、マタイの福音書5章19節a、テトスへの手紙1章11節、ヨハネの黙示録2章14節、20節を参照してください。

242. とりわけ、イエスや使徒たちによって行為が禁じられている文脈では、「教える」という語と対になる否定的な動詞が、罪深い種類の教えが念頭にあると考える手がかりになるかもしれません。たとえば、ヨハネの黙示録2章20節でイエスは、ティアティラの教会が、教会の中のイゼベルのような女に、ご自分のしもべたちを「教え」（didaskein）「惑わす」（kai plana）ことを許していることを責めておられます。ティアティラの人々が女による罪深い教えを容認したのだとしても、パウロはエペソの教会で同じことはしません――「私は今のところ許していませ

ださい。それはテモテへの手紙第一2章12節とよく似た並行箇所となっています。パウロはテトスに、「割礼を受けている人々」と呼ぶグループについて語っています。パウロは彼らを「無益な話をし、人を惑わす者たち」と描き、彼らの「口を封じなければなりません。彼らは、教えてはならないことを教えて、家々をことごとく破壊しているからです」と言っています。[243]パウロの評価によれば、これらの教師たちにも、その教えにも、何か間違ったものがありました。だからこそ、彼ら自身も、彼らの語り方も止められなければならなかったのです。同じように、テモテへの手紙第一2章の箇所の学びを進めていくと、教会の中の女性たちのあるグループには、明らかに何か敬虔でないもの、とりわけ男性に対する態度と行動があったことがわかってくるでしょう。そのために、何を信じどう生きるべきかについて男性たちに語っていた彼女たちの語り方を、パウロが正すことが正当化されたのです。[244]

第二に、authenteinという語が古代において常に肯定的な行為として用いられていたという学問的な合意はありません。テモテへの手紙第一2章12節の意味をめぐる補完主義の代表的な書物Women in the Churchの第一版と第二版で、ボールドウィンはこの語の意味についての章の執筆を任されました。そして、文脈によってこの語は「統治する、君臨する、あるいは統制する、支配する、あるいは独立して行動する、あるいは扇動する」を意味しうる、と結論づけました。[245]テモテへの手紙第一2章12節については、「統制する、あるいは支配するという意味は……十分にありうる」とし、「〜の上に権威を握る」も「適切でありうる」と付け加えています。興味深いことに、彼の章は第三版では削除され、ウォルターズの研究に差し替えられました。ウォルターズは、authenteinが否定的な意味をもつことはほとんどないと主張しています[246]——補完主義者の好みをはるかに強く支持する結論です。それでもシュライナーは、この語がときに否定的な意味で使われうることを認

ん……」。しかし、観察すべき決定的に重要な点は、どちらの場所でも禁じられるべきなのは、女性による罪深い種類の教えだけだということです。是正という文脈と、対になる動詞「惑わす」は、イエスがティアティラの女に禁じておられるのが良い教えではなく、欺きに満ちた異端的な種類の教えであることを示しています。同じように、是正という文脈と、対になる動詞authentein（「威張り散らす」を意味するかもしれません）は、パウロがエペソの女性たちに禁じていたのが良い教えではなく、相手を辱める攻撃的な種類の教えであったことを示しています。

243. テトスへの手紙1章10–11節。

244. 実際、テトスによって黙らされるべき人々についてパウロが懸念していた三つの事柄（反抗、役に立たない内容、欺き）は、すべて、テモテへの手紙第一2章12–14節で正されている女性たちについての彼の懸念と関係しているかもしれないことを示すことができます。

245. Grudem, Evangelical Feminism, Appendix 7

246. Albert Wolters, “A Semantic Study of Αὐθέντης and its Derivatives,” Journal for Biblical Manhood and Womanhood 1.11 (Spring 2006): pp. 44-65, 45.

めています。[247]プトレマイオス（Ptolemy）は著書Tetrabiblos（紀元127–148年）で、ある惑星が別の惑星を制することを言うのにこの語を使っています――ここには否定できない否定的なニュアンスがあります。私が読んだほとんどの学者は、ボールドウィンやグルーデムも含めて、ここを「支配する」と訳しています。[248]

確かに、コンスタンティヌス以後の時代（4世紀以降）の教会は、しばしばauthenteinという語を肯定的な意味で使うようになりました。しかし、それほど何世紀も後のauthenteinの意味は、この議論にとって必ずしも関係があるとは言えません。[249]実際、ボールドウィンとウォルターズの研究には（kephalēについてのグルーデムの語義研究と同じく）一つの問題があります。調べられた用例のほとんどすべてが新約聖書の時代から何世紀も後のものなので、テモテへの手紙第一が書かれた当時のこの語の意味を判断するには、あまり役に立たないのです。[250]

フィリップ・ペインは、この語の歴史的な発展について調べた結果をこうまとめています。「テモテへの手紙第一2章12節に合い、しかもパウロの時代より前に書かれたことが確認されているauthenteinの唯一の意味は、『権威を握る』です。『支配する』はパウロの時代の少し後に意味として現れ、『権威を行使する』はずっと後に

247. Two Views on Women in Ministryの中で、シュライナーは「特定の文脈では、この語が否定的なニュアンスをもつことは確かにありえます」と述べています。

248. ウォルターズはただ一人、プトレマイオスにおけるこの語を「支配権を得る」あるいは「権威を握る」と訳しています。それでも、そう訳すことで彼は、ボールドウィンとグルーデムが「支配する」と訳すときに認めている否定的なニュアンスを、自分も認めているのです。しかしウォルターズは、プトレマイオスの動詞がアオリスト時制であること、したがってそれが今になって初めて相手を圧倒する作用を担うということを、過大に評価しています。しかし、意味を本当に決めるのは文の文脈です。ウォルターズが示しているように、authenteinは、土星が人間の魂を「完全に……支配する」こと、そして他の惑星に人間を肉体を愛する者と「させる」ことと並行して使われています。アオリスト時制は、「権威を握る」のように「起動相」（つまり、ある行為の始まり）を捉えるかもしれませんが、だからといって、主語が先に支配下に置いたものを支配し続けるという、現在時制で示される継続的な行為が、中立的な、あるいは肯定的な行為になるわけではありません。また、この語の古代の用例がこれほど少なく、しかもウォルターズがauthenteinの名詞形の意味を進んでこの語の研究に取り入れていることを考えると、これは、この語にずっと近い同族語、しかもパウロの用法と時期的に近いところで使われた語のニュアンスを、恣意的に否定しているように思われます。私の知るかぎり、どの立場の学者であれ、authenteinのさまざまな古代の用例を解釈する際に、アオリスト時制と現在時制の間にこのような意味の距離をつくり出そうとする人は他にいません。

249. 特に、教会が誕生して最初の数世紀のうちに、アリストテレス的な女性蔑視の影響を受けて、テモテへの手紙第一2章12–14節を、エバの劣等性を根拠に、あらゆる領域で女性が男性を指導することを全面的に禁じるものとして読むようになったことを考えると、そう言えます。ですから、教会の多くの人が、authenteinは指導の肯定的な行使を意味すると思い込むようになった可能性は高いでしょう――このことは、4世紀の教会文書の中で、神が主としてauthenteinすると言われている二つの箇所にも光を当てます。

250. ウォルターズはこの問題について率直です。「『権威を行使する』という意味は、主としてこの動詞の後代の用法に基づいています。……紀元前後の時期のauthentesの用例がもっと多くないのは残念です。」

なって初めて確認できる意味です。」[251]ペインによれば、この意味の最初の確かな例は、4世紀、コンスタンティヌス以後の時代に現れます。それでも、この語の否定的な用法も続いていました――教父クリュソストモスは、夫が妻にauthenteinすることを禁じたのです。[252]

語の意味は時とともに変わるので、時代的に最も近い用例を探さなければなりません。ですから、パウロの時代より前に確認されている二つの用例は、私たちの研究にとって最も重要です。それらがパウロの時代の理解を最もよく捉えているからです。現存する最初の用例は、紀元前27年のapologia（弁明書）にあります。[253]これは訳しにくいことで知られていますが、トリュフォン（Tryphon）という男が兄弟アスクレピアデス（Asklepiades）に宛てた手紙で、自分がアンティロコス（Antilochus）にauthenteinしたいきさつを説明しているようです。アンティロコスはアスクレピアデスの配下か奴隷だったようです。トリュフォンとアンティロコスは渡し船に乗っていました。アンティロコスが船頭に運賃を払うのを拒んだので、トリュフォンは彼にauthenteinして払わせました。言い換えれば、無理やり払わせたのです。[254]現代人の耳には礼儀にかなったふるまいに聞こえるかもしれません。しかし、あの文化では、他人の配下に命令することは許されないことでした。今日、他人の子どもに命令するのが許されないのとよく似ています――だからこそトリュフォンは釈明の手紙を書く必要があったのです。ここでauthenteinがどうしても意味しえないのは「権威を行使する」です。この手紙は、明らかに自分の権利ではないことをなぜあえて行ったのかを説明しようとするものだからです。で

251. Philip Payne, Man and Woman, One in Christ, ch. 20
252. John Chrysostom, Hom. Col. P. 27–31.
253. パピルスBGU 1208。www.bit.ly/3BKHl0Q を参照してください。二つ目の用例については触れません。テモテへの手紙第一2章12節のものとはまったく異なる意味をもっているように見えるからです。文法学者アリストニコス（Aristonicus）は、ある著作の中でホメロスの『イリアス』の一節に注釈を加え、その演説の「authentein」（つまり「作者」あるいは「発案者」）について語っています。
254. アンティロコスはもともとトリュフォンの正当な権威のもとにあったと主張する学者たちに対しては、こう答えたいと思います。もしそうなら、恥と名誉の文化の中で、トリュフォンがなぜ、どのようにして、手紙の多くを自分の行動の弁護に費やしたのかを理解するのは困難です――彼自身の行動は、自分の召使いや奴隷を制御できていなかったという弱さと不名誉を露呈することになり、また船頭への侮辱について彼自身が責任を負うことになったはずだからです。

すから、古代においてこの語は「権威を行使する」ことを伝えるために「常に肯定的に用いられた」という主張は、誤解を招くものです。[255]

第三に、authenteinは、その構成要素を考えると否定的な行為と取ることができます。語の形態素は意味を決める最善の方法ではありませんが、ここでのように合意がほとんどない場合には、それでも検討する価値があります。[256]この場合、authenteinという語の前半（「aut」）は自己を意味し、聖書の語では主に、自分に向けられた行為や自分を中心とする行為を指すのに使われています。[257]たとえauthenteinが、キリスト者でない支配者による力の肯定的な行使を表すことを示せたとしても、次のように考えるほうがはるかに説得力があります。パウロは、自分のことを、他人の上に主人顔をせず、キリストのためにすべての人のしもべとなった者として語ることを好みました。[258]そのパウロがギリシア語に入ってきたばかりのこの語を選んだのは、高慢（神ではなく自分に向かう）や身勝手さ（他人ではなく自分を中心とする）の色合いを帯びた、罪深い種類の権威的なふるまいを表すためだったのでしょう。

たとえ、この語は主人となることを意味するというウォルターズの主張を受け入れたとしても、それが肯定的な行為か否定的な行為かは、そのつど誰が主人なのかによって決まります。神や古代の王や古代の奴隷所有者が自分の民を「支配する」（master）のであれば、それはかまわないかもしれません。しかし、イエスに従う者は誰であれ、たとえ牧師であっても、イエスに従う他の誰かの主人や支配者になろうとすることは、原則として禁じられています。

第四に、この章全体が是正を目的としています。言語学者の説明によれば、ある語がときに肯定的に、ときに否定的に使われうるなら、何が含意されているかは文脈が決めます。テモテへの手紙第一1章がはっきり示しているように、偽教師たちに

255. シュライナーはTwo Views of Ministry（p. 108）で、「H・スコット・ボールドウィンとアル・ウォルターズの最近の研究は、この語が権威の肯定的な使用を表すことを示しています」と述べています。補完主義の学者たちが自分たちの語義研究をどのように誤って解釈しているかについては、ジェイミン・ヒューブナーの研究を読んでください。「少なくとも、これらすべてが示しているのは、（他の研究とともに）補完主義者によるauthenteo͞の研究が何を示してきたのかについて、補完主義者たちが明らかに混乱しているということです。」www.bit.ly/3EKqWM8（p.17）を参照してください。
256. D・A・カーソンはExegetical Fallaciesでこう述べています。「語源は『意味を見分けるにはいくぶん不器用な道具』ではありますが、それでも『特にhapax legomena（一度しか出てこない語）の意味を理解しようとする場合には』有用です。」（p. 33）
257. たとえば、authadēs＝「自己満足した」、authairetos＝「自発的に」、autarkeia＝「自足」、autarkēs＝「自足した」、autokatakritos＝「自ら罪に定められた」、autocheir＝「自分の手で」、aucheo͞＝「私は誇る」などです。出典：www.bit.ly/3EKqWM8（p.18）
258. コリント人への手紙第二4章5節を参照してください。

荒らされた教会を立て直すことが文脈なのですから、パウロは2章でも間違ったふるまいを正し続けていると考えるのが自然でしょう。

それに先立つ命令で、パウロは、きよくない手をもち（8節）、怒り、言い争い、祈らないエペソの男性たちの具体的で罪深い行為を正しています。また、手の込んだ髪型と高価な衣服で着飾り、慎みも良い行いも欠いていて、騒ぎを起こすのをやめ、もう一度教えを受ける立場に身を置いて従う必要がある、慎みのないエペソの女性たちを正しています（9–11節）。パウロがこれらの命令でそれぞれ一方の性だけに語りかけていることは、彼がこの特定の状況での彼らに特有の失敗を取り上げている証拠です。この意味で、男性が女性にauthenteinすることは、男性がこれ見よがしに着飾ることや、女性が祈らず、怒り、言い争うことと同じく、受け入れられないことなのです。

また、11節にある直前の命令が、12節でパウロが禁じていることの正反対であることを思い出すなら、authenteinを否定的なニュアンスで理解するのがよく合います。パウロは、エペソのこれらの女性たちが、かつてイエスの足もとに座ったベタニアのマリアのように、静かに（ギリシア語はhesychiaで、ここでは穏やかにという意味です）、よく従う心をもって学ぶ（11節）ことを望んでおり、自己主張的に、あるいは高圧的に教えることは望んでいません（12節a）。[259]そのように教えれば、まさに「静けさ」（ここでもhesychia）とは正反対のものが生じるだけだからです（12節b）。[260]

第五に、12節は禁止です。12節の言い回しそのものが否定的な意味を示唆しています。「女」の代わりに人物Aを、「男」の代わりに人物Bを置き、didaskeinを文字xに、authenteinを文字yに置き換えると、こうなります。「私は、人物Aがxすることも、人物BにyすることもAllowしません。」[261]これを読むだけで、xとyはおそらく否定的な行為だろうと結論づけるでしょう。このように、文脈が意味を生み出すので

259. 接続詞「de」は、ほとんどの訳では訳出されていませんが、二つの文をつなぎ、11節と12節の思考の流れを結びつけています。これは「しかし」よりも「そして」を意味している可能性が高いでしょう——特に、まさに同じ節の中で、パウロは「しかし」と言いたいときに「alla」を使っているからです。
260. テモテへの手紙第一の中にあるもっと前の並行する言い回しを考えると、これが自然な読み方です。「12節のパウロの思考の進み方（教えることではなく、男を圧倒することでもなく、静かにしていることである）は、1:3–4で同じ教えというテーマについて述べたときの思考の進み方（違ったことを教えることではなく、論議を引き起こす作り話や果てしない系図に心を奪われることでもなく、むしろ信仰による神の務めの管理）と大差ないことに注目してください。最初の二つは否定的に、最後のものは肯定的に見られています。」（Andrew Bartlett, Men and Women in Christ, p. 340）
261. この洞察についてジェイミン・ヒューブナーに感謝します。

す――ある語が他の箇所では肯定的に使われうるとしても、この文脈ではおそらく否定的なのです。[262]不思議なことに、ウォルターズの研究は、古代文献に現れるこの語の初期の用例すべての中で、禁止の文脈で使われているのはパウロの手紙だけであることを考慮していません。

そのうえ、ウォルターズの訳によれば、パウロは女性が「男の主人となる」ことを禁じていることになります――しかしこれは、奴隷に主人を敬うよう命じる、後のパウロの命令と合いません[263]（奴隷の多くは男性で、主人の多くは女性だったことがわかっています）。家庭には男性の奴隷がいた可能性が高いことを考えると、パウロは一部の女性に、男たちの主人（oikodespotein）であるよう指示しているのです。[264]

第六に、この語の古代の用例を探す範囲を広げて名詞形も含めると（authenteinは名詞authentasの動詞形です）、その否定的な連想は否定できなくなります。名詞の古代の用例には、最も強い種類の否定的な意味があふれています――この語の最も古い用法は殺人を指しているのです。ウォルターズは、この意味をもつ名詞の古代の用例を40も記録していますが、同時に、パウロの時代までにはこの意味がほとんど薄れていたことも示しています。この意味は他の意味、とりわけ「主人」によって影が薄くなっていました。それでも、この考えはパウロの時代まで、そしておそらくは彼が読んでいた文書にまで続いています。『ソロモンの知恵』[265]は、自分の子どもを「殺す」（authentas）親たちを神が滅ぼすことを語っているのです。[266]名詞の以前の「殺人」という意味はほとんど薄れていましたが、意味が変化していくなかで否定的なニュアンスが残ったということは、確実ではないにしても十分ありうることです[267]――結局のところ、「他人の命を奪うこと」と「他人の人生

262. 別の言い方をすれば、もしパウロが肯定的なふるまいを称賛していて、教えることがその称賛されている事柄の一つであったなら、ここで問題になっている教えが否定的な形の教えである可能性はなかったでしょう。しかし、パウロは否定的なふるまいを正しているので、これが否定的な形の教えである可能性が開かれるのです。
263. テモテへの手紙第一6章2節
264. テモテへの手紙第一5章14節で、彼は新しく結婚した女性たちに「家庭を治める」ように言っています――ここで「治める」と訳されている語は、文字どおりには「家の専制君主（despot）」です。
265. おそらく紀元の変わり目の二、三十年前に書かれ、ヘブル語聖書のギリシア語訳の一部となっている文書で、パウロはこの文献をよく知っていた可能性が十分にあります（これについての議論は www.bit.ly/3EKKrE4 を参照してください）。
266. 『ソロモンの知恵』12章6節。『ソロモンの知恵』のこの語は「殺人者」ではなく「親族殺し」だけを意味するというウォルターズの議論は、どちらでもよいことだと私は思います――いずれにせよ、極めて否定的な行為が含意されているからです。
267. ボールドウィンは、たいていの言語では語の名詞形が動詞形として使われるときに全体の意味が変わることがある、と言って動詞形をその名詞から切り離そうとしていますが、これは誤り

を思いのままにすること」の間には、少なくとも概念上の重なりがあるのです。[268]

第七に、もしパウロが権威の肯定的な行使を念頭に置いていたのなら、それをそのまま表す広く知られたギリシア語を使うことができたのではないでしょうか――たとえば、10節前で権威ある人々に使った語（hyperochē）のように。Louw and Nida's Lexicon for the New Testamentは「権威を行使する」を意味する語を12、「治める」「統治する」を意味する語を47挙げていますが、パウロはそのどれも使いませんでした。コリント人への手紙第一7章で、一方の性が他方に対してもちうる正当な権威に触れる際、彼はexousiaという語を選びました。これは彼が手紙の中で28回使っている語です。[269]もし彼が、補完主義の学者たちが言い張るように、特に牧会的な指導について語っていたのなら、なぜこの手紙の後の部分で牧会的な指導に使った語（proestōtes）（5:17）や、教会を牧することを表す語（poimainō）、[270]あるいはヘブル人への手紙の著者が教会の指導者に使った語（hegoumenōn）を使わなかったのでしょうか？[271]

代わりにパウロがこれほどまれな語、しかも非常に独特なニュアンスをもつ語を選んだことからすると、[272]彼はエペソの教会の女性たちに共通していた特定の罪深いふるまいを正確に突き止め、それを正そうとした可能性が高いと言えます。

です。たいていの言語学者は、何らかの対応するニュアンスが残りうると考えています。たとえば、英語の動詞「adulterate」（混ぜ物をして質を落とす）は名詞「adultery」（姦淫）とは意味が異なりますが、否定的なニュアンスは両方の語に共通しています。

268. ウォルターズは、「殺人者」を意味する「authentēs」という語と、「主人」を意味する同じ語とは、語源が異なるかもしれないと述べています。しかし、そうではないかもしれません。彼が言えるのはせいぜい、「学者たちは、両者の語源が異なると繰り返し示唆してきた」ということだけです――しかし、他の学者たちは別のことを示唆しています。重なり合う考えは、自分のもつ力を使って他者に対して自分を押し通すことにあるようです。

269. exousiaと、パウロのauthenteinの用法との重要な違いは、おそらく次の点にあるのでしょう。前者は、実際にもっている権威の行使です。たとえば、自分の夫と性的な関係をもつ妻のexousia（コリント人への手紙第一7章4節）がそうです。一方、後者は（トリュフォンの手紙に見られるように）正当にはもっていない権威を主張することを表しうるのです。たとえば、他人の夫と性的な関係をもつ女性がそうです。

270. ヨハネの福音書21章16節、使徒の働き20章28節、ペテロの手紙第一5章2節を参照してください。

271. ヘブル人への手紙13章7節、17節、24節を参照してください。

272. この語が「独特なニュアンス」をもつということで私が何を言いたいのかを理解するには、英語の動詞「to teach」（教える）を「to pontificate」（尊大に説教を垂れる）や「to harangue」（長々とまくし立てる）と比べてみてください。あるいは「to lead」（導く）を「to drive」（駆り立てる）や「to compel」（強いる）と比べてみてください。どちらの場合も、後者の動詞は「to teach」や「to lead」と同じ中心的な考えをもっていますが、さらに色合いを加えています。私が示そうとしてきたのは、「authentein」は、たとえ誰かを「導く」という構成要素的な考えを含んでいるとしても、さらに色合いを帯びた語だということです――それは「殺人」を表す以前の語から派生しており、「aut」（自己）という形態素をもっています。

第八に、補完主義を前提とする学者たちの結論には、他の学者たちが真剣に異議を唱えています。聖書学者が使う少なくとも7つの標準的な参考文献のうち、ほとんどは明らかに否定的な訳（たとえば「威張り散らす」「指図する」）を挙げており、より肯定的な訳を挙げるものでさえ、キリスト教的な観点から見れば否定的な響きをもっています（たとえば「独立した、自己本位の権威」）。たとえば、Analytical Lexicon of the Greek NTはこの語を次のように定義しています。「自分自身の権威で行動する者について。それゆえ、支配権をもつ、威張り散らす、主人顔をする。」Nida and Louwは「統制する、抑えつける、威張り散らす」と定義し、「怒鳴って命令する」「首長のようにふるまう」「どやしつける」のような意味だとしています。同様にBDAG[273]は、「独立した権威の姿勢をとる、命令を下す、指図する」と訳しています。

ですから、シンシア・ウェストフォールが自らこの語の研究を終え、[274]ウォルターズが使っているのと同じデータベース[275]を用いて次のことを見いだしたのも、驚くには当たりません。「authenteinが人格的な行為者と人格的な〔受け手〕とともに使われる場合、行為者が神的な、あるいは究極的な権威をもつのでない限り、否定的な評価が与えられています。」[276]補完主義の学者たちはこの語が牧会的な権威を行使するという意味だと言い張りますが、ウェストフォールは、データベース中のこの語のすべての用例のうち、牧師や教会の役職者が個人や集団を善意をもって牧会的に世話することを指すものは一つもないことを示しています。[277]彼女は研究をこう締めくくっています。

「authentein」という語は、女性を教会の……指導から排除するために使われる主要な根拠なので、その意味の選択は決定的に重要です。……それを単に「権威をもつこと」と〔受け取り〕、そのうえで、しもべとしての指導や牧会的な世話を表しているかのように解釈するのは、極めて誤解を招くことです。この議論を慎重に進めるために、健全な辞書学と言語学の方法論に基づいてこの語の理解を具体化することこそ、教会の務めであるべきです。……教会は責任を問われる年齢に達しました。authenteinという語に基づいて女性を教会の指導的立場から排除してきたことについて、責任（あるいは法的責任）を引き受けるときです。

273. これは、The Bauer, Danker, Arndt, and Gingrich Greek-English Lexicon of the New Testamentの略です。
274. www.bit.ly/2prxkqm
275. Thesaurus Linguae Graecaeのデータベースには、1,200年にわたるこの語の用例が300以上収められています。
276. Westfall, Paul and Gender, ch. 9
277. Westfall, Paul and Gender, ch. 9

私が最も憂慮するのは、指導的な補完主義者たちがウェストフォールの言語学的研究を評する役目を任されると、ウォルターズの研究のほうが優れていると主張するだけで、彼女の広範な研究の結果を素通りしてしまうことです。[278]対照的に、ジェイミン・ヒューブナーは、authenteinについての自身の研究とあわせて彼女の研究を敬意をもって検討し、テモテへの手紙第一2章12節で使われているこの語の否定的な色合いは「ほぼ確実」だと結論づけています。[279]

この語の意味について、ウェストフォールはこう述べています。「ギリシア語の文献全体において、この動詞はさまざまな行為を指します。〔そこでは〕これらの行為の対象となる人々は害を受け、意志に反して強いられ（強制され）、あるいは少なくとも自分の利益を踏みにじられています。これらの行為には主体の意志を押しつけることが含まれ、その幅は不名誉から致命的な暴力にまで及ぶからです。」

彼女の結論は、次の事実とも一致します。ヒエロニムスは4世紀のラテン語ウルガタ訳で、テモテへの手紙第一2章12節のauthenteinをdominariと訳しました――これは別の箇所で彼が使ったのと同じ語群です。その箇所でパウロは、正当な霊的権威をもっているにもかかわらず、自分が決して用いない唯一の種類の指導は、自分が導く人々の主人となることだと言っているのです。[280]

この語の意味が権威を握る（ペインの訳）であれ、主人となる（ウォルターズの訳）であれ、自分を押しつけて相手を踏みにじる（ウェストフォールの訳）であ

278. トム・シュライナーによるウェストフォールの本の批評は、authenteinについての研究に関して彼女が述べている主張に十分に取り組んでおらず、ただ「彼女は『authentein』という語について、ウォルターズと同じだけの注意深い釈義をしていないように思われます」と主張するだけです。実際には、彼女はウォルターズの研究に対して、敬意を払いつつも非常にしっかりとした批判を行っています。シュライナーと同様に、www.cbmw.org はケーシー・ハウ（Casey Haugh）にウェストフォールの本の書評を依頼しました。彼は彼女の釈義的研究をウォルターズと比べて、「ウェストフォールは、authenteinについての自分の理解に同等の注意を払っていません」と述べています。少なくともウォルターズは違う調子です。「私はウェストフォールの分析の多くに同意しませんが、彼女が理論言語学の問題を議論に持ち込んだことを称賛し、私よりも言語学に詳しい人々に彼女の議論がどのように受け止められるかを楽しみにしています。」
279. www.bit.ly/340JLIS
280. コリント人への手紙第二1章24節。英語：「lord it over」、ラテン語ウルガタ：「dominamur」。ヒエロニムスはウルガタの別の箇所で、神とイエスの専制的な支配についてdominariという語を使っていますが、それが牧会的な指導にはふさわしくない語であることを意識していたようです。実際、彼は同じ語を使って、他の人々を「支配する」（あるいは「主人顔をする」）ことのないようにという、キリスト者の指導者に対するイエスとペテロの警告を訳しています――マルコの福音書10章42–43節、ペテロの手紙第一5章3節を参照してください。ヒエロニムスの理解にこうした専制的な力の含みがはっきり見られる以上、彼がテモテへの手紙第一2章12節でこの語を、単に敬虔な牧会的権威を指すために使っているとは、とても考えられません。確かにヒエロニムスは私信の一つで、司教の支配（dominari）を王の支配と対比していますが、この比較は、4世紀後半のローマで、教会的な力と政治的な力が司教の役割の中に入り込むようになっていたことを示しています。

れ、キリスト者の女性もキリスト者の男性もそうすべきではありません――ですから、テモテへの手紙第一2章12節の補完主義の読み方は成り立たないのです。

パウロがauthenteinで正確に何を意味していたのかは、神だけがご存じです。しかし、否定的なニュアンスを支持するこれらの論拠の重みを考えると、補完主義の読み方と、そこでよく使われる訳（「権威を行使する」〔exercise authority〕）はおそらく正しくない、と私は結論づけます。改訂版NIVの訳（「権威を握る」〔assume authority〕）[281]と、少なくともこの点では古い英訳（「権威を奪う」〔usurp authority〕）[282]のほうが望ましいでしょう。もっとも、「統制する」（to control、CEB）、「威張り散らす」（to domineer、NEB）、あるいは「主人顔をする」（to lord it over、TLB）のほうが、より正確かもしれないと私は思っています。

生活のあらゆる領域

パウロがこの禁止を教会の集会に限定しているという考えの最大の弱点はおそらく、補完主義者が皆言うように、パウロが議論の根拠を「創造の秩序」に置いていることでしょう。パウロが教会における女性の指導の禁止を「創造の秩序」に基づかせていると言いながら、「創造の秩序」があらゆる関係と領域に対してもつ意味を否定することはできません。この箇所を、（創造の秩序を論拠として）教会で女性が男性を指導することを禁じていると解釈しながら、教会の外で――政治、ビジネス、公務の場で――男性を指導する女性に神の不承認の影を落とさずに済ませる解釈の仕方は、まったく存在しないのです。

一部の補完主義者は、「創造の秩序」についての自分たちの信念が娘たちの職業上の可能性に及ぼす制約――仕事は創造の一側面なので、娘たちは男性を指導してはならないことになります――を、どのように回避しているのでしょうか？　彼らは、この箇所は教会の領域、特に正式な教会の集会にだけ当てはまる、と論じます。「私は、男たちがどこででも祈ることを望みます」を、「私は、男たちがすべての教会の集会で祈ることを望みます」という意味に読むのです。彼らは、テモテへ

281. このように訳すことで、NIVは、それが正当な権威を主張することを肯定的に指すのか、それとも権威が不当に奪い取られる否定的なものを指すのかを、読者が判断できるようにしています。私がこの訳を支持するのは、否定的な意味を前提としてのことです。
282. たとえば次を参照してください。Geneva（1560年版）：“I permit not a woman to … vsurpe authoritie ouer the man.” Bishop（1589年）：“I suffer not a woman to … vsurpe auctoritie ouer ye man.” KJV（1611年）：“I suffer not a woman to … usurp authority over the man.”

の手紙第一2章1節がこの節と同様に祈りについて語っていることを指摘します。11節は、教えられるみことばのもとで女性が学ぶことを語っています。同様に、次の章は教会の指導者について（3:1–12）、またこの手紙が神の家でどのようにふるまうべきかを人々に教えていること（3:15）について語っています。これらすべてによって、女性が教えたり指導したりすることの禁止の適用は、男性がいる教会の毎週の公の集会に限られる、と彼らは言うのです。

これに対して、私はまず、祈り会は教会の毎週の礼拝集会に限られていなかった、と答えます。使徒の働きには、閉ざされた戸の奥の屋上の部屋で、浜辺で、牢獄の中で祈り会が行われた様子が詳しく記されています。確かに、パウロが2章で語っていることには教会の集会も含まれますが、集まっているときも散らされているときも、教会の日々の生活全体が視野に入っています。きよい手、怒りや言い争いから自由であること、身なり、[283]良い行い、学ぶこと、出産、そして信仰、愛、聖さについて語っているのですから、パウロは生活全体を視野に入れているのです。補完主義者が言うように、パウロが女性に男性を指導したり教えたりすることを禁じているのなら、それはあらゆる場所と場面に当てはまります。

二つ目の応答として、マイケル・バードに問題の核心を突いてもらいましょう。

指摘しておく価値があると思うのは、補完主義者自身が自分たちの見解の完全な帰結に条件をつけたり、それを和らげたりしているということです。そしてここにこそ、彼らの立場の弱さがあります。たとえば、一部の補完主義者は、女性が本やラジオやウェブサイトを通して間接的に男性を教えることは認めても、直接男性を教えることは許しません。女性は男性に読まれるヘブル人への手紙の注解書を書くことはできても、ヘブル人への手紙について男性に説教したり教えたりすることはできません。女性は大統領、首相、CEO、将軍、警察官にはなれても、牧師として仕えることはできません。女性は男性にフランス語やピアノを教えることはできても、聖書や神学を教えることはできません。女性は信仰をもたない男性には聖書と教理を教えることができても、キリスト者の男性には教えることができません。

ここで私が問題だと思うのは、一部の補完主義者が、女性が男性の上に権威ある立場に就くことは本質的に間違っていると示すために創世記と創造の秩序に訴えながら、その制限を教会生活や日曜の礼拝にしか適用しないことです。しかしそれは、日曜日や教会の講堂でしないかぎり、姦淫を犯してもかまわないと言うようなもの

283. コリント人への手紙第一11章を学んだので、パウロが教会の集会で女性がかぶり物をつけることを好んだことはわかっています。しかし、ここで髪型について語っていることから、彼が日常生活における女性の身なりについても語っていることがわかります。

です。あるいは、相手が信仰をもたない人なら姦淫を犯してもかまわないと言うようなものです。女性が男性に対して権威をもつことが神の創造の秩序に対するそれほど明白な違反であるなら、それはビジネスであれ、行政であれ、政治であれ、公務であれ、教会であれ、生活のあらゆる領域に当てはまるはずです。神はあらゆる制度の上に主権をもっておられ、生活のすべては神の前で、神のもとで営まれるのですから。[284]

補完主義の読み方を堅持しながら、男性に対する女性の指導をはっきりと、あらゆる場所で禁じる気がないのなら、教会で指導するキリスト者の女性だけを取り締まっているという自分たちの一貫性のなさを告白する必要がある、と私は提案します。よりよい解決は、これらの節の読み方を見直すことだと私は考えます。

アダムが初めに造られ、それからエバが造られたからです

テモテへの手紙第一2章12節に次いで、補完主義者が「創造の秩序」の主要な証拠聖句として挙げるのは、それに続く節です。「アダムが初めに造られ、それからエバが造られたからです。」彼らによれば、これは、パウロが堕落以前のアダムとエバの関係に男性の権威を読み取っていた証拠です。これは水も漏らさぬ論証でしょうか？

まず、接続詞「から」（英語for、ギリシア語gar）から見ていきましょう。補完主義の学者たちは、これはここではなぜならを意味すると言います。つまり、アダムが先に造られた「から」パウロは女性の指導を禁じる、というのです。しかし、garという語はいつも「なぜなら」を意味するわけではありません。この語が実際に意味するのは、直前の言明を説明したり支えたりする内容がこれから示される、ということです。[285]パウロは特に、自分の著作の中であらゆる種類の補強材料を示します。ここでそうしているように見えるとおり、例示となる事例もその一つです。このことを念頭に置くと、次のように読むことができます。「私は、女が男の上に権威を握ることを今のところ許していません。何しろ、アダムが初めに造られ……」（garに英語のindeedを当てる訳者もいます――これは何しろ、あるいは

284. Mike Bird, Bourgeois Babes, Bossy Wives and Bobby Haircuts: A Case for Gender Equality

285. 「Pastoral Epistles, 131–35におけるマウンス（Mounce）のgarの議論を見てください。そこで彼はパウロのgarの用法を簡単に概観し、こう結論づけています。テモテへの手紙第一2章13節でgarが理由を導入しているという証拠は圧倒的です。その最も頻繁な用法は『原因や理由を表すこと』だからです（131）。しかし、どの場合でも論理的な関係は文脈から推論しなければならず、garそのものが『原因や理由を表す』わけではありません。その最小限の意味的な寄与は補強材料を示すことであり、それには原因だけでなく、例、予型、引用、その他の形の補強も含まれえます。……特定のテキストの解釈は『最も頻繁な用法』によって決めることはできません。」（Cynthia Westfall, Paul and Gender, ch. 4）

実のところという意味です。）私の議論にとって決定的なことではありませんが、[286]ここでのgarはおそらく、パウロの禁止を原因にではなく、歴史上の先例に結びつけているのでしょう。[287]

パウロは手紙の中で、自分の主張を支えるために、特に旧約聖書の物語や比喩を例示として用います。彼はハガルとサラの物語を使って、古い契約と新しい契約の衝突を説明しています。それは、ユダヤ人の割礼を受けていないことを嘲られていた、ユダヤ人でないガラテヤの信者たちが実際に経験していたことでした。[288]別の箇所では、紅海を渡ったこと、マナ、雲、岩、そして荒野で妥協したイスラエル人に下った災いの比喩を、コリントの教会が直面している危険の実例として用いています。イエスによって救われ、養われていながら、道徳的な失敗と偶像礼拝によって報いを失ってしまうという危険です。[289]後には、サタンがエバを誘惑したという比喩を、同じ教会がイエスへの純粋で真実な献身から離れてしまう危険の先例として用いています。[290]これらの例のすべてで、パウロは旧約聖書の事例を、自分がいま語りかけている状況のたとえとして使っているのです。

同じように、エペソの女性たち、そして他の教会で同じようにふるまうすべての女性に対する禁止をはっきり述べたうえで、パウロはそれをたとえによって支えています。彼が引いている並行関係は、エペソの教会の状況と、創世記2–3章のアダムとエバの物語との間にあります。では、パウロが浮き彫りにしようとしているのは、アダムとエバの物語の正確にはどの点なのでしょうか？

多くの補完主義者は、「初めに」（ギリシア語：protos）という語は地位が先であることを意味すると考えています。しかし、パウロがここで、地位の含みをまったくもたない、順序として先のことを言っているとしたらどうでしょうか？　同じ語は、イエスの空の墓に「先に」着いたヨハネについて、また神が「先に」私たちを愛してくださり、その後で私たちが応答として神を愛するという事実について使わ

286. たとえgarがここで「なぜなら」を意味するとしても、これから私が示す13–14節の二つの解釈は、どちらもやはり意味が通ります。たとえば、エデンの原型的な物語によれば、女性は男性を敬い（13節）、男性から独立しないこと（14節）が意図されているということは、一部のエペソの女性たちが男性を敬わないふるまいをしていたことをパウロが禁じる（12節）ための神学的な根拠となります。
287. たとえgarがここで「なぜなら」を意味するとしても、これから私が示す13–14節の二つの解釈は、どちらもやはり意味が通ります。たとえば、エデンの原型的な物語によれば、女性は男性を敬い（13節）、男性から独立しないこと（14節）が意図されているということは、一部のエペソの女性たちが男性を敬わないふるまいをしていたことをパウロが禁じる（12節）ための神学的な根拠となります。
288. ガラテヤ人への手紙4章22–24節
289. コリント人への手紙第一9章24節–10章14節
290. コリント人への手紙第二11章3–4節

れています。[291]実際、同じ語の一つの形が前後の文脈で二回、つまり10節前と10節後に、順序として先であることを指して使われています。「そこで、私は何よりもまず勧めます。すべての人のために……祈り……をささげなさい」、そして「まず審査を受けさせ、それから執事として仕えさせなさい」です。[292]

ジャン・カルヴァンでさえ、階層的な解釈の論理を疑問視しています。「女性は二番目に造られたから従属しているという議論は、あまり強いものには思えません。バプテスマのヨハネはキリストより先に来ましたが……キリストよりはるかに劣っていたからです。」[293]（同様に、創世記1章では人間は最後に造られましたが、それより前に来たすべてのものを治めるとされています。）天才パウロが、そのような議論をするでしょうか？

パウロがアダムのエバに対する上位の地位を示唆していないのなら、なぜ彼は順序だけに言及するのでしょうか？　説得力のある答えの一つは、パウロが13節で、14節で言おうとしていることの準備をしている、というものです（そして、パウロは節番号を使っていなかったことを思い出してください。ですから、13節を14節から切り離そうとする私たちの傾向そのものが、そもそも見当違いなのです）。パウロがここで述べている以上に簡潔な創世記2章の要約を、私は思い描くことができません。「アダムが初めに造られ（創世記2章4–20節が言うとおり）、それからエバが造られた（創世記2章21–25節が言うとおり）。」ですから、パウロは13節で、アダムとエバが造られたことの何らかの側面を思い起こさせているのかもしれません。それは14節と合わせて読むべきものです。

アダムではなく、エバがだまされた

多くの補完主義の学者たちの著作を読んできて、私は次のことに気づきました。彼らは「創造の秩序」を支持する議論の重みを13節にかけますが（これを彼らはアダムがエバより上の地位にあることだと誤読している、と私は考えます）、14節については確信がもてないと認めるのが普通なのです。

彼らはこの節を、二つのうちどちらかの仕方で解釈します。第一は、エバは（その娘たちも）アダムよりも（その息子たちよりも）だまされやすく、したがって女性は霊的な指導者や教師にふさわしくない、というものです。第二は、1977年にジ

291. ヨハネの福音書20章8節、ヨハネの手紙第一4章18節
292. テモテへの手紙第一1章2節、3章10節
293. John Calvin, The Epistles of Timothy, Titus and Philemon。カルヴァンは、同じ箇所でエバを「一種の付属物」「劣った助け」と呼びながらも、それでもこの解釈を受け入れています。

ョージ・ナイトが初めて唱えたもので、[294]エバはエバに対するアダムの正当な権威を飛び越えることでサタンに協力した、というものです。

女性は男性よりだまされやすいのでしょうか？　二千年近く、1960年代に至るまで、これは知的能力の欠如も含めて、女性の劣等性を示す教会の証拠聖句でした。しかし、女性解放運動はその文化的な前提をくつがえしました――そして、考えるキリスト者のほとんど全員も、それを捨てました。だからこそ、女性の劣等性という考えを女性の平等という考えに正しく置き換えた補完主義の学者たちは、ほとんど誰もこの解釈を採らないのです。[295]それでも、勇敢な人たちがこれにしがみつこうとするのを止めることはできません。「パウロはエバの中に、女性一般を代表する何かを見ています」とグルーデムは言い、別の学者の言葉を賛同して引用しています。「一般に、女性はより関係志向で養育的であり、男性はより合理的な分析と客観性に向いています。女性を教える職に任命することが禁じられているのは、女性が譲れない教理上の一線を引く可能性がより低く、そのために欺きと偽りの教えがより簡単に教会に入り込むからです。」[296]

しかし、この引用は本質的に、女性は実際に知的に劣っていると結論づけています。また、多くの女性が多くの男性よりも分析的で合理的であり、多くの男性が多くの女性よりも欺かれやすいという事実を否定しています。最も問題なのは、聖書が、女性が他の女性や子どもたちを教えることをはっきりとたたえていることを忘れている点です。女性がよりだまされやすいから教えられないのなら、誰にも教えるべきではありません。特に子どもには！

ですから、この歴史的な見解がほとんどの補完主義の学者に捨てられたのは正しいことです。[297]では次に、シュライナーが明確に述べている、ナイトの新しい見解を評価してみましょう。

294. George Knight, The New Testament Teaching on the Role Relationship of Men and Women
295. Women in the Church（ch. 6）でシュライナーは、「この解釈は退けられるべきです。女性が存在論的にも知的にも劣っていることを含意するからです」と述べています。
296. Wayne Grudem, Evangelical Feminism, ch. 2
297. 補完主義者はこのことの意味を考えていません。テモテへの手紙第一2章の補完主義の読み方を最も包括的に擁護しているWomen In The Churchの第一版で、ダニエル・ドリアーニは、この箇所の解釈の歴史についての付録を書いています。彼は、1960年代まで、教会は女性に対する禁止が女性の本質的な劣等性に基づいていると考えていたことを示しています。ですから、相互主義者だけでなく補完主義者も、ドリアーニが「再解釈」と呼ぶものをこの箇所について提示していることに注意してください。どちらの側も、自分たちの見解こそ歴史的な見解だと主張することはできません。気がかりなことに、第二版ではドリアーニの付録が削除されています。これは、譲りすぎたことを暗に認めたもののように見えます。そして誤解を招くことに、第5章では補完主義の見解が「歴史的な見解」と呼ばれています。

パウロは、アダムではなくエバに近づいて欺いた蛇に焦点を当てています。〔そうすることで蛇は〕男性の指導という型をくつがえし、誘惑の間エバとだけやりとりしました。エバは率先して蛇に応答し、アダムは彼女にそうさせました。ですから、創世記3章への言及は、神が定めた型が損なわれるときに何が起こるかを私たちに思い起こさせるのです。[298]

この見解の問題は、創世記の記述にもパウロの議論にも、エバがだまされたことの本質が、彼女が序列を外れて「神が定めた型」を損なったことと何らかの形でつながっていたことを示唆するものが何もない、という点です。むしろ、どちらの箇所も、エバが神の善さを信頼せず、そのために神の命令に背いたことを強調しています。補完主義者は、どちらの箇所にも、そこにないものを読み込んでいます。創世記3章で、サタンの誘惑の本質は、エバに対するアダムの権威をくつがえすことではなく、エバに対する神の権威をくつがえすことでした。そしてエバとアダムはどちらも同じ罪のために罰せられます。その罪は、「アダムの権威から踏み出したこと」や「エバに対する指導を放棄したこと」だとは一度も述べられておらず、「実を食べたこと」なのです。確かにアダムは「〔自分の〕妻の言うことに耳を傾けた」のですが、罪は彼女の言うことに耳を傾けたこと（これはすべての夫がすべきことです）ではなく、実を食べようという彼女の罪深い提案を受け入れたことでした。同様に、蛇がのろわれたのは、創造の秩序をくつがえしたからではなく、エバをだましたからです（13–14節）。エバが欺きに屈した結果、彼女は「罪人」になりました――文字どおりには「違反者」です。これは夫と妻の役割の逆転を指すのではなく、禁じられた木から食べてはならないと神が夫婦に与えた命令を指しています。創世記3章にある唯一の役割の逆転は、神の王座によじ登り、自分たちが自分たちの神になろうとした彼らの試みなのです。

14節についての補完主義の二つの解釈が深刻な疑問にさらされている以上、パウロが「〔そして、〕だまされたのはアダムではなく、女がだまされて罪人となったのです」という言葉で、ほかに何を意味しているのかを問わなければなりません。これはおそらく、パウロの手紙には「理解しにくいところ」がある、とペテロが言うときに念頭に置いている節の一つでしょう。シンシア・ウェストフォールが言うとおりです。「パウロは堕落について短い物語を述べるだけで、自分の神学や、その物語が禁止とどう関係するのかについて、それ以上説明していません。」[299]最初の読者たちは、パウロが何について語っているのかを正確に知っていたかもしれませ

298. Tom Schreiner. Women in the Church, ch. 6
299. Cynthia Westfall, Paul and Gender, ch. 4

ん。しかし、何世紀も後に同じ手紙を手に取る私たちは、パウロが読者について知っていたことのすべてを知らされているわけではないので、重要な情報のいくつかを見落としているかもしれません。それでも私は、二つの可能な意味を示したいと思います。どちらも、パウロが多くのエペソの女性たちを、その罪深いふるまいを母エバのふるまいになぞらえることによって叱っている、という考えに基づいています。それは、エバがアダムの後に造られた、その造られ方から理解されるものです。

第一の可能な意味は、パウロが13節で、エバが存在する前に神がアダムに指示を与えた、その与え方をほのめかしているのかもしれない、というものです。エバはこの指示を、神から直接ではなく、アダムを通して受けたのでしょうか？　もしそうなら、それがサタンが彼女を狙った理由なのでしょうか？　そうだとすれば、エバはだまされたがアダムはだまされなかった、と言われている理由が説明できます。このように読むと、エバの罪は、彼女の比較的浅い確信が攻撃された結果であり、だから欺きでした。一方、アダムの罪は目をしっかり開いたまま犯されたものであり、だから欺きではなく反逆でした。[300]その場合、パウロは、エペソの女性たちが福音とその敬虔への招きをしっかりと把握し直す必要があることを強調しているのかもしれません。「ヒメナイとアレクサンドロ」のような男たち（彼らはサタンの手先でした）が以前に偽りの教えを持ち込んだのですが、エペソの女性たちの多く（彼女たちはエバのようでした）がそれに最も深くはまってしまいました。そのため、彼女たちは他の人を教えられる状態にはなく（12節）、むしろ、よく従う心をもって静かに神のみことばを新たに学ぶ必要があったのです（11節）。これに対して、教会に残っていた男性たちはしっかりと立っていたので、この命令を必要としなかったのです。

もう一つの可能性は、「アダムが初めに造られ、それからエバが」を、創世記2章について思い巡らすようにという招きとして受け取ることです。パウロは別の箇所で、「エバはアダムから造られ、エバはアダムのために造られた」と言っています。[301]これによって彼が意味しているのは、エバの存在と目的が、パートナーとしてのアダムの存在と目的と密接に結びついているということです。パウロは、女性は男性を必要としないというエペソの作り話を正しているのかもしれません。もし

300. 実際、パウロがエバの欺きをこのように、つまり創造の秩序への訴えとしてではなく、避けるべき種類の欺きの例として用いるのは、彼にとって普通のことです。彼はある教会にこう言っています。「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないかと、私は心配しています。」（コリント人への手紙第二11章3節）
301. コリント人への手紙第一11章8–9節

そうなら、エバの過ちは、彼女がパートナーであるアダムを顧みることも頼ることもなく誘惑に向き合ったことによって、いっそう悪化したのです。この洞察によって、近くにいたアダムはだまされていなかったのに、なぜエバはだまされたのかが理解できます。この見方によれば、パウロは、自分の兄弟たちを独立した、あるいは無礼な仕方で「教えた」エペソの女性たちに立ち向かっています。彼女たちは、エバの娘たちに、アダムの息子たちを敬い、彼らと緊密に協力するよう原型的に思い起こさせるはずの起源の物語を忘れていたのです。

どちらの意味が正しいのでしょうか？　私は二つ目のほうを好みますが、確信はもてません。しかし、どちらの意味にも評価すべき点があります。エペソの罪深い女性たち、パウロの禁止（12節）、そして補強材料（13–14節）の間に、13節と14節の考えが一つにまとまるような仕方で、つながりの糸を引いているのです。[302]

エペソの女性たちの具体的な罪

これらのエペソの女性たちの多くは、これほどの禁止を受けるに値する何をしたのでしょうか？　その答えは、禁じられている内容に見いだされます。「私は今のところ、女が男に教えたりauthenteinしたりすることを許していません。」

この時点で問うべき決定的な問いは、パウロが二つの別々の行為（教えることとauthenteinすること）を禁じているのか、それとも二つの側面をもつ一つの行為（authentein的な仕方で教えること）を禁じているのか、ということです。ケステンバーガーは別々の行為だと論じていますが、クレイグ・ブロンバーグ（Craig Blomberg）やキャシー・ケラーをはじめ、多くの補完主義者は、二つの動詞を結ぶ「または」（ギリシア語：oude）という語が、実際には二つの動詞を、二つの統合された側面をもつ一つの行為に結び合わせていると論じています。

フィリップ・ペインのoudeという語の研究は、ケステンバーガーの議論に反論し、まさにそうであると論じています。[303] 興味深いことに、パイパーは、authenteinの意味を誤解していたものの、すでに1989年にこのアプローチを取っ

302. これらの意味のどちらも、13節を一つの理由、14節を二つ目の理由として扱うのではありません。むしろ両者を一つにして、手紙そのものが証言しているとおりのエペソの教会の状況に具体的に結びつく仕方でアダムとエバの物語を語り直すことによって、12節を支える一つのまとまった例示を示しているのです。
303. www.bit.ly/332TPjf を参照してください。また、ジェイミン・ヒューブナーの論文も参照してください。そこで彼はこの問題にさらに細かな区別を加え、二つの側面をもつ一つの行為という考えを支持しています：www.bit.ly/3EKqWM8

て、こう述べていました。「『教える』という語は……おそらく、何らかの形で権威に関係する種類の教えを意味しています。教えることと権威を行使することは一体なのです。」[304]このように読むと、「教える」という語は、hit and run（ひき逃げ）の「hit」（ひく）が単独では立たないのと同じように、単独で立っているのではありません。それぞれの語の意味とニュアンスは、相方の語があることによって変わります。それは、loud and clear（はっきりと明瞭に）の「loud」が、loud and proud（堂々と誇らしげに）の「loud」とは違うニュアンスをもつのとほぼ同じです。

結局のところ、この章全体を通して、パウロは語や句を対にして一つの概念にする傾向があります。パウロは、「王たちと高い地位にあるすべての人」、「平安で落ち着いた」、「敬虔で品位を保ち」、「宣教者、使徒」、「私は真実を言っていて、偽ってはいません」、「怒ったり言い争ったり」、「慎みと品位をもって」、「静かに……よく従う心をもって」と語っています。私はペイン、ブロンバーグ、ケラーの主張を受け入れます。パウロは、12節の場合のように二つの動詞を一緒に使うとき、しばしば（二つのことではなく）一つのことを意味しているのです。[305]ですからパウロは、偽りの教えの影響のために、女性たちが誤って「男性を教えることと、男性にauthenteinすることとを組み合わせている」、あるいは「authentein的な仕方で男性を教えている」状況に対処しているのです。

では、エペソの女性たちの罪とは何なのでしょうか？　教会に押し寄せた偽りの教えが、どういうわけか、多くの女性に男性をひどく扱わせるようになっていたのです。彼女たちは、男性に対してezer kenegdosであるどころか、誘惑的に、あるいはこれ見よがしに着飾り（9節）、騒ぎを起こして教えを受けつけず（11節、12節c）、男性を（彼らに耳を傾けたり、彼らから学んだりしようとする代わりに）、彼らを支配下に置くような仕方で教えています（12節b）。こうしたすべてにおいて、彼女たちは男性を軽んじ、さらなる欺きに自分をさらしています（13–14節）。パウロの解決は、これらの女性が、イエスのすべての良い弟子たちと同じように、よく従う学び手としてのへりくだった姿勢に立ち返ることです（11節）。彼女たち

304. www.bit.ly/3GOjAce を参照してください。シュライナーも同じ結論に達しています。「テモテへの手紙第一2章11–15節が禁じているのは、権威をもって教えることだけです。」
305. パウロが二つの側面をもつ一つの行為を念頭に置いていると、まだ確信がもてないなら、11節と12節の終わりで言い表されているとおり、「教えることあるいはauthentein」が何の反対なのかに注目してください。それは、よく従う心をもって静かに学ぶ女性たちです（11節）――これは本質的に、多くの言葉を使って一つの考えを表しているのです。実際、12節の終わりはもう一度この考えを繰り返していますが、今度はそれをたった一つの言葉にまで煮詰めています。「静かにしていなさい。」

は、これほど力ずくで男性に指図するのをやめ、むしろ教会の調和を守るべきです（12節）。創世記2章のとおり、神が女性のために初めから意図していた、男性との聖なる相互依存を再確認することによって（13節）、また、創世記3章のとおり、特にサタンが欺こうとするときに、アダムから自分を切り離したエバの過ちを避けることによって（14節）、そうするのです。

要するに、私は、問題は女性たちが男性とどのように関わり、男性をどのように教えていたかにあった、という見解を取ってきました。しかし、Men and Women in Christのアンドリュー・バートレットのような他の学者たちは、それに加えて、問題はエペソの女性たちが何を教えていたかにもあった、と論じています。[306]バートレットは、これらの女性たちは偽りの教えの影響を受けていただけでなく、それを広める者になっていた、と論じます。そうであれば、エペソの女性たちは、1）誰かに教えること、そして2）男性を支配することをやめる必要がありました。これは十分ありうることです。パウロは先に二人の男性の偽教師を教会から除きまし

306. 補完主義の学者たちは皆、テモテへの手紙第一2章でパウロが取り上げている問題は、女性が男性を教えていたことだと論じますが、補完主義でない学者たちはこの見解を退けます。しかしその後、彼らは三つのアプローチに分かれます。問題は女性が男性に何を教えていたかなのか、女性が男性をどのように教えていたかなのか、あるいはその両方の組み合わせなのか、です。この章で私は二番目のアプローチを取っています。つまり、偽りの教えの影響を受けてはいたものの、必ずしもそれを広める者ではなかった女性たちが、強制的で、高慢な、あるいは無礼な仕方で男性を扱い、教えていたことが問題だった、というものです。しかし、この段落で簡単に述べているように、一番目や三番目のアプローチもありえます。アンドリュー・バートレットは、Men and Women in Christの11–13章と付録3–6で、私が読んだ中で最も強力で最も完全な論証をしています。パウロは二つの別々の、しかし重なり合う行為を禁じているのかもしれないというケステンバーガーの分析を受け入れて、バートレットはそれを「私は、女がだれかに教えることも、男にauthenteinすることも許しません」と読みます（付録4）。そして彼は、テモテへの手紙第一の証拠から、男性の偽教師たちは教会を去っていたものの、それでもなお「快楽に生きる裕福な若いやもめたちの何人かが、家々を回って、魔術や占星術にかかわる偽りの無益な作り話を広めながら、富を見せびらかし、慎みのない服装をし、それぞれ自分の性的欲求を満たしてくれる男を探していた」と論じています。（p. 259）「手紙全体を通して、パウロは偽教師たちに性別に中立な言い方で言及しています。1:3と5:13から、テモテが次に対処すべき偽教師として、パウロが何人かの女性を念頭に置いていたと推論できます。」（p. 261）「テモテは彼女たちを正し、改められた生活を証明するまでは、彼女たちの誰も長老や執事の地位に就かないようにしなければなりません。」（p. 263）この見方によれば、エバは、エペソの女性たちと同じように、「サタン〔つまり偽教師たちを通して〕にだまされて禁じられた知識を受け入れ、男を偽って教え、圧倒し、悲惨な結果を招いた」のです。（p. 285）バートレットのアプローチは私のものとは異なりますが、私たちは二人とも同じところに行き着きます。「テモテへの手紙第一2章は、女性が教会で教えることや、女性が教会で権威を行使することを全面的に禁じることを正当化しません。」（p. 286）もしパウロが、私が考えるように二つの相互に結びついた行為（「authentein的な仕方で教えること」）ではなく、二つの別々の行為（「教えること」と「男にauthenteinすること」）を指していることが証明できるなら（私はできないと思いますが）、バートレットのアプローチのほうが私のものより好ましいでしょう。彼の見解は、私自身の見解の多くを取り入れながら、この状況にある女性たちが（回復されるまで）なぜ教えること全般を禁じられたのかも説明しているからです。

たが（1:20）、これらの女性たちは残っています。パウロの手紙の主眼が偽りの教えに対処することにあり（1:3）、エペソの偽教師たちが特に女性を標的にしていたことは、わかっています。[307]教会の多くの女性たちは今や「家々を遊び歩き」、「うわさ話やおせっかいをして、話してはいけないことまで話して」いました（5:13）（これは、牧会書簡の別の箇所で、パウロが「教えてはならないことを教え」ていた人々を黙らせようとしていることと並行しています）。[308]これらの女性たちは偽りの教えのほうへ向かっていたのです（5:15）[309]――ですから、パウロは、彼女たちが教理と敬虔において回復されるまで、こうした間違った考えを広めることもやめさせているのです。

どちらに取るにしても、パウロがエペソの女性たちを正したことは、現代の私たちの感覚には厳しく思えるかもしれません。しかし、何がかかっていたのかを理解すれば、この介入を行った彼の知恵をよりよく評価できます。この罪深いふるまいは、その背後にある異端的な考えも含めて、当時の周囲の社会の目に教会をつまずきとして映らせたことでしょう。その社会では、女性は慣習上、人前で男性に恥をかかせるのではなく、男性を敬うことが期待されていたのです。この手紙の別の箇所でパウロは、キリスト者の女性たちの日常生活での不品行が、「非難される」ようなふるまいによって教会の評判を傷つけ、サタンに「そしる機会」を与えるのではないかと心配しています。[310]ある集団をしばらく静かにさせ、私たちの教師であるイエスの足もとにもう一度へりくだって座るよう求める正当な理由がかつてあったとすれば、まさにこのときでした。

一部の女性しかこのようなことをしていなかったのなら、なぜパウロは、すべての女性がauthenteinの仕方で男性を教えてはならないと言うのでしょうか？　その理由は、テモテへの手紙第一2章の前の部分で、パウロがすべての男性に言い争わずに祈るよう、またすべての女性にこれ見よがしに着飾らないよう命じているのと同じです。言い争っていたのは一部の男性だけで、華美に着飾っていたのも一部の女性だけだったことは疑いありませんが。

最も重要なことに、パウロは、敬虔な牧師や教師になろうとする女性たちに反対することは何も言っていません。次の部分が長老と執事についてであることを根拠に

307. テモテへの手紙第二3章6–8節を参照してください。
308. テトスへの手紙1章11節
309. さらに、テモテへの手紙第一を他の二つの牧会書簡とまとめて見ると、このことはいっそう明らかになります。テモテへの手紙第二3章6–7節は偽教師たちに惑わされている女性たちに言及しており、テトスへの手紙1章10–11節は「口を封じなければならない」「無益な話をする者、人を惑わす者」に言及しています。
310. テモテへの手紙第一5章7節、14節

これに異論を唱える補完主義の学者たちは、行き過ぎています。パウロが「次のことばは真実です。『もしだれかが監督の職に就きたいと思うなら、それは立派な働きを求めることである。』ですから監督は……」と言うとき、彼は新しい部分を始めているのです。パウロの手紙の多くには、必ずしも互いに関係しない別々の部分があります。テモテへの手紙第一には、そのような部分が六つあり、偽りの教えによって傷ついた教会を立て直そうとするパウロの試みによって緩やかにまとめられてはいますが、それぞれ異なる内容を扱っています。ですから、2章には奉仕の役割について語っているところはまったくなく、キリスト者の営み（祈ること、身なりを整えること、学ぶことなど）をよりよく行うべき仕方（言い争わずに、ふさわしく、よく従う心をもって、など）について語っているだけです。そのうえ、補完主義者が主張するように、なぜパウロは、女性の中にある指導したいという願いをことごとく打ち砕いておきながら、そのわずか数節後に、「だれか」（パウロはここで一般的な、したがって性別を含む語を使っています）による「監督の職に就きたい」という願いを肯定するのでしょうか？[311]実際、パウロは2章10節でエペソの女性たちに良い「行い」（ergon）を求めたばかりです――そして今3章1節で、監督であることはそのような立派な「働き」（ergon）の一つだと言っているのです。

夫と妻

ほとんどの学者は、パウロは教会で女性一般が男性一般を誤って扱っている仕方を取り上げていると結論づけますが、（マルティン・ルターのように）これを、パウロが妻たちが夫を誤って扱っていた仕方に対処しているものとして読む人々もいます。「女」と「男」は「妻」と「夫」とも訳せるので、CEBは12節を「私は、妻が夫に教えたり、夫を支配したりすることを許しません」と訳しています。これらの翻訳者たちは、パウロが男性（8節）と女性（9節）を表す複数形の語から、11–12節ではそれぞれ単数形に切り替えていることに気づいています。特定の人々（夫婦）と特定の関係（結婚）を示しているのでなければ、なぜ複数形から単数形に変えるのか、と彼らは問います。私自身はまだ決めかねていますが、この箇所のこうした読み方に反対する議論は、それを論駁してはいないと思います。[312]

311. 新約聖書はtisという語を男性にも女性にも使っています。これは「だれでも」「だれか」「ある人」を意味します。たとえば、ルカの福音書10章38節では、「マルタ」という「女性」について形容詞的に使われています。
312. さまざまな補完主義者が、三つの理由を挙げてこの読み方に反対しています。第一に、もしパウロが夫と妻のことを言っていたのなら、それらの語の前に「彼女たちの」という語を入れたはずだ、と言う人々がいます。しかし、パウロは結婚についての主要な教えのどれにおいても、

この箇所が男女関係一般ではなく、結婚を指している可能性があると考える理由は四つあります。第一に、「男」を表す総称的な単数形は意味をなしません。補完主義者が言うように、パウロが、教会には男性たち（複数）がいるので一人の女性（単数）が教えるのをやめさせようとしていたのなら、なぜ「男性たち」ではなく「一人の男」と言うのでしょうか？ 「私は今のところ、女（単数）が……男たち（複数）に教えることを許していません」と言うほうが自然でしょう――パウロが、男性が一人しかいないエペソの教会の集まりを私たちに想像させたいのでなければ、ですが、それはありそうにありません。

第二に、パウロは禁止の根拠を、聖書の原型的な夫婦であるアダムとエバに置いています（13–14節）。そして続けて出産についても語っています（15節）。これも本質的に家庭的なことであり、したがって結婚という文脈を指している可能性が高いのです。

第三に、パウロがギリシア語のanerとguneを一緒に使う箇所のほとんどすべてで、彼は夫と妻を意味しています。普通、性別をもつ人間同士を比べたいとき（補完主義者はパウロがここでそれを言っていると言います）には、彼は別のギリシア語を使います。たとえば、ガラテヤ人への手紙3章28節（「男と女もありません」）では、arsenとthelyという語を使っています。これは、イエスが性別をもつ人間の創造について語ったときにも使った語です（マタイの福音書19章4節を参照。「創造者ははじめの時から『男と女に彼らを創造された』」）。

第四に、「一人の女」が「一人の男」に教えるという言い方は、性別の異なる二人の私的なやりとりを示唆しています。礼儀作法が重んじられていた古代の文化では、そうしたことはたいてい家庭の中でしか起こりませんでした。

「妻」や「夫」の前に属格の所有代名詞をめったに使っていません（コロサイ人への手紙3章18–19節、エペソ人への手紙5章22–25節、コリント人への手紙第一7章2–4節、11節、14節、33節を参照）。第二に、パウロが男性を集団として（8節）、次に女性を集団として（9–10節）扱い、それから突然、既婚女性と既婚の妻たちにだけ語りかけるのは奇妙だ、と言う人々がいます。実際には、偽りの教えの影響を受けていたに違いない結婚について、パウロが手紙のどこかで語るのはごく自然なことでしょう――ここはそのための場所として、どこにも劣らずふさわしいのです。第三に、パウロはこの手紙で複数形と単数形を無作為に切り替えているので、それをあまり重視すべきではない、と言う人々がいます。たとえば、パウロは単数形の総称的な監督（3:2）や、報酬を受けるにふさわしい働き手（5:18）について語っています。また、長老たちについて複数形で語った後（5:17）、箇所が進むにつれて単数形に移っています（5:19）。しかし、パウロは書簡の他の部分で、総称的な単数形を無作為に使うことは決してありません。そこには常に目的があります。3:2で単数形の長老を使っているのは、テモテが長老に求めるべき人物像について今から語るからです。単数形の「働き手」（5:18）が使われているのは、彼が用いている引用が単数形だからです。複数形の長老たち（5:17）から単数形（5:19）への移行について言えば、5:17は彼らの集団としての指導について語っており、5:19は個々の長老に対して持ち込まれる訴えを指しています。

もしパウロが結婚を指しているのなら、それは、偽りの教えの影響を受けたエペソの妻たちが、支配的で力ずくの仕方で夫を非公式に教える習慣に陥っていたことを、彼が心配しているという意味かもしれません。また彼女たちは、エバのように、夫とのへりくだったパートナーシップから自ら独立して離れていったので、さらなる欺きに危険なほど陥りやすくなっていたのです。このように解釈すると、パウロは賢明にもこれを食い止め、これらの妻たちに、へりくだった、教えを受けやすい弟子として神のみことばのもとに戻り、パートナーとして夫と並んで歩むよう促しているのです。

興味深いことに、明確に補完主義を掲げるActs 29 Movement（使徒の働き29章運動）の指導的な教会は、女性を教えることと指導から除外することを正当化するために長い聖書的分析を書きましたが、その根拠として見いだした議論はただ一つでした。テモテへの手紙第一2章12節の補完主義の読み方です。しかしその文書の中で彼らは、パウロは結婚だけを指しているのかもしれないと（まったく正しく）認めています。[313]しかし考えてみてください。もしパウロが特に結婚を指しているのなら、女性一般を男性一般に対する指導と説教から除外するための彼らのただ一つの議論は、崩れてしまうのです。

不明瞭な箇所対明瞭な箇所

私は、パウロがテモテへの手紙第一2章11–14節で、一部の女性が罪を犯していたエペソの特定の状況に対処しているのだと確信しています。ですから、12節は、ある特定の教会にもauthenteinの仕方で男性を教えている女性がいるのでない限り、あらゆる場所のすべての教会に対する普遍的な命令として読むべきではありません。

しかし、ここで重要な補足をしておきます。いずれにせよ、この箇所はあまりにも不明瞭なので、教理や教会の実践の土台とするにはふさわしくないのです。

解釈学の原則の一つは、不明瞭な聖書箇所は、より明瞭な箇所に照らして解釈しなければならない、というものです。[314]周辺的な箇所、つまり、それが言っているよ

313. 次の文献の脚注160を参照してください。“The Role of Women in the Village Church’: www.bit.ly/3CFKgJO
314. たとえば、2世紀の教父テルトゥリアヌスは、「不確かな言明は確かな言明によって、不明瞭な言明は明瞭で平易な言明によって決定されるべきです」と書いています。（引用元：Gregg Allison, Historical Theology, p. 122）

うに見えることがたいてい一度しか言及されていない箇所――たとえば、「御使いたちのため」にかぶり物をつけることについての指示、[315]「死者のためにバプテスマを受ける」こと、[316]キリストが「捕らわれている霊たち」に宣べ伝えたこと、[317]あるいは「女は子を産むことによって救われる」こと[318]――に、明瞭で中心的な箇所と同じほどの重みを与えてはなりません。教会は、こうしたより不明瞭な箇所について独断的になったり、それらの上に大きな教理や実践を築いたりするのではなく、聖書の権威には確信をもってしっかりと立ちながらも、それらの箇所の解釈はよりへりくだって、ゆるやかに保つべきです。

不明瞭な聖書箇所は、決定的な教理の正当な根拠にはなりません。明瞭な教えのほうが優先されるべきです。ありがたいことに、聖書の本文の大部分は明瞭であり、不明瞭なのは一部だけです。[319]では、ある箇所を不明瞭なものにしているのは何でしょうか？　そうした箇所には、意味のはっきりしない語が異常に多く含まれていたり、ほかの箇所が言っていることと正反対のことを言っているように見えたり、具体的な状況に当てはめるのが特に難しかったり、同じことを言っている聖書箇所がほかに見当たらなかったり、その箇所が扱っている古代の状況がよくわからなかったりする傾向があります。そのため、そうした箇所からは実に多様な解釈が生まれ、主要な学者たちの間でも激しく議論されることになります。[320]さて、過去100年の教会の歴史の中で、これほど議論された箇所を私は知りませんし、これより不明瞭な本文も知りません。これらすべての点において、テモテへの手紙第一2章12–15節は非常に不明瞭な本文なのです。

この箇所の鍵となる動詞authenteinはぼんやりとした語で、新約聖書には一度しか出てこず、パウロの生きていた時代の聖書以外の文献にもごくまれにしか見られません。ウォルターズは、この語が否定的な意味を持たない「可能性が非常に高い」と（あまりにも）確信しています。しかし彼は、パウロの時代に最も近いこの語の古代の用例八つを調べたうえで、「これらのギリシア語資料においてこの語の用例がまれで不明瞭であることが、学者の間で合意が得られない大きな要因となってきました」と述べ、さらに「この八つのうち、大半は何らかの点で議論の余地があり

315. コリント人への手紙第一11章10節
316. コリント人への手紙第一15章29節
317. ペテロの手紙第一3章19節
318. テモテへの手紙第一2章15節
319. ペテロが、パウロの手紙には「理解しにくいところ」があると認めていたことを思い出しましょう（II ペテロ3:16）。ペテロが使ったこの語は、古代世界では神託についても使われていました。神託は、複数の解釈が可能なことで悪名高いものでした。
320. たとえば、ヘブル人への手紙6章4–6節には少なくとも18通りの解釈の筋があり、テモテへの手紙第一2章12節には12通りあります。

ます。本文が疑わしいか、文脈がはっきりしないか、年代に異論があるかのいずれかです」と認めているのです。実際ウォルターズは、この八つのうち五つを、「権威を握る」「〜より熟練している」「創始者である」「独断で行動する」「殺人を犯す」という意味に訳してさえいます。意味がこれほどばらばらである理由を、彼はこう説明します。「authenteinは4世紀より前には、大部分が地下の（つまり口頭の）存在でした。言語の中で、文学以下の層に属していたからです」。[321]だからこそ、テモテへの手紙第一2章12節におけるこの語の本当の意味をめぐって議論が続き、おびただしいインクが費やされてきたのです。[322]（しかも問題はauthenteinだけではありません。シュライナーは「12節のすべての語が学者たちの間で議論されています」と言っています。[323]）ジェイミン・ヒューブナーは博士論文のために、この語の古代の用例に関する最新の研究を注意深く評価し、補完主義の学者たちを正しく批判しています。

「私たちには、『authentein』が1世紀に、あるいはテモテへの手紙第一2章12節で正確に何を意味していたのかはわかりません」と言うのは一つのことです。しかし、「私たちには、この語が1世紀に、あるいはテモテへの手紙第一2章12節で正確に何を意味していたのかはわかりません。だから、パウロがこの語を選んだことには特別な理由はなく、この語には何のニュアンスもなく、したがって一般的な権威の行使を意味しているのだと仮定することにします」と言い、そのうえで世界中の教会の半分を牧師になることから締め出すのは、まったく別のことです。これは健全な推論ではありません。[324]

authenteinを「権威を行使する」と取ると、この節を実際の場面で一貫して適用することも、不可能とまでは言わなくても、特に難しくなります。たとえば、女性宣教師が立ち上がって、信仰を持っていない男性たちに福音を教えることは許されるのでしょうか？　この箇所は、その「男」が回心しているかどうかについて何も語っていません。女性が男性に教えてはならないのなら、母親や女性のユースリーダーは、男の子が何歳になったら教えてはならなくなるのでしょうか？　女性は神学校で、あるいは男女混合の聖書研究会やキリスト教のカンファレンスで、男性に教えてもよいのでしょうか？　男性は、女性が書いた、教理に触れる本や聖書注解書

321. Al Wolters in “Women In The Church”, ch. 2.
322. 古代の聖書以外の文献におけるauthenteinという語についての学術的研究は、今なお語彙上・解釈上の問題を生み出し続けています。www.bit.ly/3EHxZ8a を参照してください。
323. 別の箇所では彼は、「テモテへの手紙第一2章12節はパウロの明瞭な教えであり、女性の役割を理解するための指針とならなければなりません」と言って、この発言と矛盾したうえに誇張もしています。それがまったく明瞭ではないことを、私たちは皆認めなければなりません。
324. www.bit.ly/3BNaSY8 p.245 を参照してください。

を読んでもよいのでしょうか？　女性は、パラチャーチ団体や、男性を部下に持つミニストリーを率いてもよいのでしょうか？　教会の中で、女性はどのレベルの指導的立場にまで就くことができるのでしょうか？　（ケステンバーガーが補完主義者たちに、禁じられているのは単に牧会することではなく、女性が指導することだと念を押している以上[325]、最上位の指導的立場を女性に認めない一方で、スモールグループのリーダーやボランティアチームのリーダーのような、男性に対する下位の指導的立場は認めるというのは一貫性がありません。）しかも、テモテへの手紙第一2章12節の補完主義の解釈によって棚上げにされるのは、賜物のある女性たちだけではありません。この節を補完主義的に読むと、それは、権威を伴わない非公式の教えと、どうやら牧師だけにふさわしいとされる公式で権威ある教えとを区別するための、唯一の「聖書的」根拠になってしまうのです。補完主義の教会で、牧師ではない賜物ある男性説教者のうち、この解釈上の二分法のせいで説教を許されなかった人がどれほどいるでしょうか？　もし一つの節についてのこの解釈が本当に「私たちを自由にする真理」の一部なのだとしたら、新約聖書のほかのどの教えが、キリストのからだの中にこれほど多くの不確かさ、不安、憶測、詭弁、痛み、そして分裂を生み出しているでしょうか？

これは、そう言っているように見えるただ一つの箇所です。女性は男性に教えるべきではないと述べている聖書本文は、ほかに一つもありません。もし神が、すべての教会が永遠に男性の説教者と牧師だけを持つことを望んでおられたのなら、同じことを言う二つ目の節をきっと与えてくださったのではないでしょうか？　さらに、パウロが取り組んでいる状況について私たちの知識が限られているために、この本文の解釈はいっそう難しくなっています。これらの節を理解しようとする試みはすべて、エペソで一部またはすべての女性が男性たち／自分の夫に対して具体的にどのように罪を犯していたのか、そして彼女たちの不品行が、アダムとエバの物語の奇妙に切り詰められた語り直しとどう関係していたのかについて、推測によって細部を補わなければなりません。[326]

最後に、authenteinを「権威を行使する」と訳すと、この箇所は、女性が実際に男性を指導し、また／あるいは教え、しかもそれが神に認められているように見える

325.「問題を『女性の長老／監督はいない』ということだけに還元するのは、過度に最小限主義的かもしれません。……テモテへの手紙第一2章12節は、女性が特定の職に就くことを表面的に禁止しているだけのものより、もっと根本的な現実に根拠づけられています」。出典：www.bit.ly/3wsFsFr

326. 補完主義者のダグラス・ムーは、この点について率直です。「これらの節（13–14節）は創造と堕落についての主張を示していますが、それが11–12節の命令をどのように支持しているのかは明らかではありません」（1 Timothy 2:11–15: Meaning and Significance. P. 68）

数多くの聖書の実例と衝突することになります。第10–12章で見ていくように、補完主義の解釈は、男性を教えたり治めたりした聖書の女性たちと合いません。[327] 一つの聖書本文を――それについて学術書を書くことさえしながら――同じ主題について聖書がほかに何を言っているかに導かれることなく解釈しようとし、そのうえで「神のことばは明らかに……と言っている」と宣言するのは、聖書を扱う方法として、まともでも、健全でも、確かでもありません。パウロがテモテに語っているように「みことばをまっすぐに説き明かす」のであれば、同じ主題について、より明瞭な箇所が、より不明瞭な箇所の理解を導くべきなのです。

子を産むことによって救われる

これが不明瞭な箇所であることを最もはっきり示しているのは、おそらく、この箇所が14–15節で次のように締めくくられていることでしょう。「〔エバは〕だまされて、罪人となりました。しかし女は、慎みをもって信仰と愛と聖さにとどまるなら、子を産むことによって救われます」。グルーデムはこの節を、男性が教えることと指導することという公の役割を続ける一方で、女性を家庭での子育ての役割に引き戻すためのパウロのやり方だと解釈しています。[328]12節がおそらく教えることと指導することという公の役割について語っていない、という事実は別にしても、この解釈の主な弱点は、「子を産むこと」（一時的な生物学的機能）と「子育て」（長く続く社会的役割）が同じではないという点にあります。

では、15節は何を意味しているのでしょうか？　多くの学者が示唆するところによれば、鍵となるのは、創世記3章に記されたエバの罪が、ただちに苦しんで「子を産む」という結果につながっていることを思い起こすことです。パウロはそのつながりを取り上げつつ、女性たちの徳を高めるような仕方でそれを言い表そうとしています。学者たちの見解は、三つの可能な解釈に分かれます。一つ目の可能性は、エバの子孫がいつの日かサタンの頭を踏み砕くという創世記3章の神の約束を、パウロがほのめかしているというものです。言い換えれば、女性たちは、エバの娘である母マリアの出産によって救われ、聖い生活へと導く救いを受けるということです。

327. 聖書の中で最も印象的な例は、ある男性に特に教理を教えたプリスキラです（付録4の「女性が教えた例」を参照）。しかも彼女は牧会的な権威をもってそうしました（その証拠については第12章を参照）。私たちは、御霊の霊感のもとにある聖書の統一性を信じているのですから、補完主義の学者たちのように、テモテへの手紙第一2章12節は、プリスキラがしたことを女性がするのを禁じていると論じることは、彼らのテモテへの手紙第一2章12節の解釈の誤りを露呈させるものです。
328. 公平を期して言えば、クレイグ・ブロンバーグのようなほかの補完主義者たちは、彼に同意していません。

二つ目の可能性は、しばしば霊的な救いを指すギリシア語の語根sōzōが、身体的な守りを指すこともあるというものです。[329]言い換えれば、神はエペソの教会のこれらの女性たちに、出産という危険な出来事の中で共にいるという特別な約束をしておられるのです。[330]

三つ目の可能性は、偽りの教えが結婚の否定につながっていたことに、パウロが反論しているというものです。[331]おそらくエペソの教会の、考え違いをした既婚女性たちは、コリントの教会の超霊的な女性たちのように[332]、夫婦としての協力関係から身を引き始めただけでなく、夫との性的な関係もやめてしまっていたのでしょう。そこでパウロは、（性と）子を産むことが聖さと聖化の一つの側面であることを改めて述べているのです。[333]

このうちのどれかかもしれませんし、まったく別のものかもしれません。しかし要点は、聖書の中で最もわかりにくい節の一つである15節が、それが締めくくっている先行する節がいかに不明瞭であるかを裏づける働きをしているということです。このことは、11–15節が、どの基準から見ても、どんな種類の教理の根拠にもふさわしくないことを、いっそう強調しています。ましてや、「創造の秩序」という考えに基づいて、世界の半分がもう半分を教えたり指導したりすることを禁じかねない教理の根拠になど、なり得ません。

誰も耳を傾けなければ、歴史は繰り返します。聖書解釈の歴史において、単一の箇所に基づいて教理を立てることは、教会が繰り返し陥ってきた誘惑でした。3世紀初めにアリウス（Arius）は、箴言8章22節の「主は、ご自分のわざの最初として

329. 使徒の働き27章20節とテモテへの手紙第二4章18節で使われているとおりです。聖書のほかの箇所は、女性が霊的に救われるのは、子孫を生み出すといった生物学的機能によってではなく、イエスへの信仰によってであると言っているので、この語のこの理解は、霊的な救いについての聖書の教えとよりよく合致します。
330. 古代世界では、出産は女性の死と障害の最大の原因でした。エペソの女神アルテミスは、生まれて間もなく、自分の母親の出産を助けたとされていました。そのためエペソの女性たちは、出産を無事に乗り越えられるよう、ふつうアルテミスに祈っていました。このことは、この読み方に重みを加えます。聖い生活とともに、彼女たちは神に祈るべきだとパウロは言っているのです。
331. テモテへの手紙第一4章3節で彼が述べているとおりです。
332. ゴードン・フィーは、コリント人への手紙第一についての代表的な注解書の中で、これがパウロにコリント人への手紙第一7章を書かせた背景の状況だと言っています。その章でパウロは、夫と妻が定期的に性的な関係を持つよう勧めています。この手紙の後のほうでパウロは、「若いやもめは結婚し、子を産み」、家庭を治め、敵にそしる機会を与えないよう勧めています（Ⅰテモテ5:14）。
333. 補完主義者のクレイグ・ブロンバーグは“Two Views on Women in Ministry”でこの読み方を提示しています。「15節は翻訳するのが非常に難しい節ですが、おそらく、異端とその反結婚的な立場に対抗するものとして理解するのが最善でしょう」（第2章）

〔知恵を〕生み出された」に基づいて、神の御子は神の最初の被造物だと主張しました。1500年代初め、カトリック教会は、ヤコブの手紙2章24節の「人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではありません」を盾にして、ルターの恵みのみによる救いの教理を退けました。そして1900年代後半、補完主義者たちは、テモテへの手紙第一2章12節を固守して、女性は男性を指導したり教えたりしてはならないと主張しました。いずれの場合も、誤りは、単一の不明瞭な箇所の誤った解釈が、その主題について他の箇所にあるより明瞭な教えを覆すために用いられていることにあります。聖書の構成はあまりにも大きく複雑なので、教会の主要な教理のほとんどすべてについて、正統的な教えと矛盾することを言っているように見える節がいくつかあるものです。進むべき道は、聖書の非常に多くの部分にある明瞭な教えによって、比較的少数の、より不明瞭な箇所についての私たちの解釈に枠をはめることです。

実際、より明瞭な箇所の光をこの不明瞭な箇所に通すことの知恵は、「女性は男性に教えてもよいのか？」という問いに答えるときに特にはっきりします。この問いには付録4で答えています。



8

妻たちよ、従いなさい

「夫婦は、一方が他方の上に立つ階層的な関係に置かれているのでもなければ、それぞれが自分の好きなことをする自律した単位として切り離されているのでもありません。むしろ結婚の関係は互いに従い合う関係なのです。」リチャード・ヘイズ[334]

「娘たちには、いつか夫に従うように教えておかなければなりませんね」。最近、ある母親が私の妻にこう言っているのを耳にして、私の頭は本当にフル回転し始めました。私は本当に、いつか夫に従う方法をアイヴィーに教えるべきなのでしょうか？　自分の結婚における指導と服従というテーマは、それだけでも十分に個人的なものですが、結婚について子どもたちにどんな教えを伝えるべきかを考えざるを得なくなると、その教えを正しく理解しなければという思いがいっそう強くなります。

一点補完主義

この章と次の章のために調べ、書いている中で、私はようやく、そして完全に、神がすべての結婚に対して理想としておられるのは、たとえごく穏やかなものであっても夫と妻の間の権威と服従を含むものだ、という考えを捨てました。それ以前の私は、エペソ人への手紙5章の読み方に基づいて、夫が妻を自己犠牲的に導くことは、キリストがご自分の教会を自己犠牲的に導いておられることの何かを示すためのものだ、という考えを長い間持っていました。

一点補完主義は、妻は夫に対して何らかの一方的な服従を実践すべきだとしながらも、女性が教会と社会において男性を指導することは認める立場です。[335]これ

334. Richard Hays, First Corinthians, p. 116

は、結婚においても教会においても女性の服従を求める二点補完主義とは異なります。興味深いことに、世界中の多くの聖書学者や教会が一点補完主義を支持しています。[336]

二点補完主義者の多くがこの本を読んで、教会の指導的立場から女性を締め出すことはやめようと納得しても、結婚においては何らかの権威と服従をなお保持するかもしれない、と私は思っています。私自身も数年間この立場をとっていたので、この立場のことはよく理解できます。

興味深いことに、エペソ人への手紙5章の研究を続けるうちに一点補完主義さえ捨てることになっても、私の結婚はそれほど大きくは変わりませんでした。これから説明するように、私は結婚においてさえ、すでに多かれ少なかれ相互主義者だったことに気づいたのです。というのも、20年近い結婚生活から何かを学んだとすれば、それは、対等な者同士の結婚のほうが、リーダーとフォロワーの結婚よりもはるかに望ましいということだからです。私やほかの人々がこれまで何度も説教してきた、「キリスト教的」結婚についての見事に言い表された決まり文句がどれほど多くあっても、そうなのです。たとえば、「彼は犠牲を払い、彼女は従う。彼は導き、彼女はついて行く。彼は率先し、彼女は肯定する」といったものです。[337]

335. 結婚において権威と服従が存在するとしても、それは、妻が別の領域で自分の夫に対してさえ権威を持つことができない、という意味ではありません。たとえば、ラピドテの妻デボラは、彼女が生きていた家父長制の文化の中で、家庭では夫の指示を受けていたかもしれません（受けていなかったかもしれません）。それでも彼女は、夫でさえ彼女の指示を受けなければならない国の指導者として活躍しました。確かに複雑ですが、矛盾してはいません。結婚における女性の服従を、彼女が教会と社会で男性を指導することを妨げる根拠として用いている聖書箇所は、一つもないからです。

336. ほんの一例として、私は一点補完主義の見解を、西ヨーロッパのN・T・ライト、東ヨーロッパのハイク・ホヴハニシャン（Hayk HovHannisyan）、そして一時期のオーストラリアのマイケル・バードに見いだしました。アメリカの平等主義と補完主義の「戦争」にどっぷり浸かっている人々には、この可能性が理解できないかもしれません。N・T・ライトはこう説明しています。「問題の一部は、特にアメリカ合衆国において、文化があまりにも二極化してしまい、一つのチェックボックスに印をつけると、ページの同じ側にある十数個のほかのボックスにも印をつけなければならないと多くの人が思い込んでしまうことにあります。そのページ自体がきわめて恣意的で、文化に縛られたものであることに気づかないのです」。私たちは、何かを十分な回数言われると、それを信じてしまいがちです。もし私が夜空の二つの星を指して、「あの二つの星はつながっていて、『ポインターズ（指極星）』という星座なんだよ」と言えば、聞いた人は、それらの星を結ぶ見えないひもを思い描き始めます。そして空を見上げるたびに、その「一緒であること」に目が行くようになります。実際には、それらは何百万光年も離れた別々の星です。私たちの銀河の中のある一つの視点から見たときにだけ、すぐ近くにあるように見えるのです。夫のかしら性と長老職も同じです。それらは別々の個々の星です。神の御心の中で必ずしも結びついているわけではなく、聖書の中で結びついていないことは確かです。

337. ベス・アリソン・バーは“The Making of Biblical Womanhood”（第6章）で“Happily Ever After”を引用しています。

イエスは、夫が妻を導くことについて一言も語っておられませんが[338]、パウロは多くのことを語っているように見えます。特にエペソ人への手紙5章で、これがこの章の焦点です。その箇所を挙げます。

21 キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。

22 妻たちよ、主に従うように、自分の夫に従いなさい。23 キリストが教会のかしら（頭）であり、ご自身がそのからだの救い主であるように、夫は妻のかしらだからです。24 教会がキリストに従うように、妻たちもすべてのことにおいて夫に従うべきです。

25 夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のためにご自身を差し出されたのと同じように、自分の妻を愛しなさい。26 それはキリストが、みことばを通して水で洗うことによって教会をきよめ、聖なるものとするため、27 そして、しみもしわも、ほかのどんな傷もない、聖く非難されるところのない輝く教会として、ご自分の前に立たせるためでした。28 同じように、夫たちも自分の妻を自分のからだのように愛すべきです。妻を愛する人は自分自身を愛しているのです。29 結局のところ、自分のからだを憎んだ人などいません。むしろ、だれもが自分のからだを養い、いたわります。キリストが教会に対してそうなさるのと同じです――30 私たちはキリストのからだの部分なのです。31 「それゆえ、男は父と母を離れ、妻と結ばれ、二人は一体となる。」32 これは深い奥義です。しかし私は、キリストと教会について語っているのです。33 いずれにせよ、あなたがたもそれぞれ、自分自身を愛するように自分の妻を愛しなさい。そして妻は自分の夫を敬わなければなりません。

この章のために調べる中で、私はC・S・ルイスが書いたことが本当だと知りました。「多くの人は……、パイプをくわえ、鉛筆を手にして、手ごわい神学の一節を苦労して読み進めているときに、心がひとりでに歌い出すのを経験します」。この場合、エペソ人への手紙5章は神学がぎっしり詰まった手ごわい箇所であり、私が何年もかみしめてきた箇所です。私がこの箇所とこれほど格闘してきたのには、三つの理由があります。

338. それなのに、主要な補完主義の学者たちは、イエスが語っておられると誤って主張しているのです！ たとえばアンドレアス・ケステンバーガーは“God, Marriage, Family”（p. 250）でこう書いています。「イエスは、創世記1章27節と2章24節の両方を引用して（マタイ19:4–6および並行箇所）、創造主なる神の結婚についての本来の計画を肯定されました。これによって私たちの主は、夫をかしらとし、妻を夫に従い夫を支える伴侶とする、結婚についての神の本来の設計を、力強く、断固として確認されたのです」。

一つ目は、私にとって地上での最も大切な関係が妻との関係だということです。私は神のことばに聞き従い、神の知恵を自分の結婚に当てはめたいと願っています。そしてこの箇所は結婚についての主要な聖書本文の一つなので、よく理解しておくに越したことはありません。

二つ目は、この箇所を「夫が導き、妻がついて行く」と読む読み方が、私自身の経験や文化的な感覚にそぐわないということです。説明させてください。私の妻は、私と同じくらい教養があり有能な女性で、多くの面では私以上です。家計の管理は私より上手で、今は私より多く稼いでいます。子どもたちの感情面や実際面での必要を読み取るのも私より上手で、人々の集団を率いる生まれつきのリーダーとしても私より優れています。また神は、私に語られるのと同じくらい、私たちの家族と働きについて彼女に語っておられるようです。私が彼女に対して指導権を主張することは、恣意的であるだけでなく、私たちの関係と彼女の有能さを踏みにじることのように思えます。正直に言えば、彼女に私の指導を差し出すよりも、私と対等な者として彼女と協力するほうが、はるかに良いと思えるのです。

私がこの箇所と格闘してきた三つ目の理由は、優れた聖書注解者たちが、この箇所が何を言っているかについて異なる結論に達し、牧師たちも、自分の信じていることを実際の結婚にどう当てはめるかについて異なる結論に達しているということです。最初に読んだときには言葉は単純に見えるかもしれませんが、よく考えてみると、エペソ人への手紙5章は答えよりも多くの問いを生み出します。最初の数節だけを考えてみてください。なぜパウロは、互いに従い合うことについての直前の節で、結婚の関係を枠づけているのでしょうか？ 「かしら」とは何を意味するのでしょうか？ 「従う」とは何を意味するのでしょうか？ 「従う」は、21節（「互いに従い合いなさい」）、22節（妻たちは夫に従う）、24節（教会はキリストに従う）で同じことを意味しているのでしょうか？ そして実際問題として、妻たちが「すべてのことにおいて」夫に従うとは、どういう意味なのでしょうか？

私はこれらの問いに、四つの異なる解釈、つまり「見解」を示すことで取り組みたいと思います。エペソ人への手紙5章のこの箇所の四分の三は夫に向けて語られているので、それぞれの見解を、キリスト者の夫に何が求められているかによって定義することにします。これらの見解は、夫を、決定者（見解1）、（行き詰まった時の）決定票（見解2）、対等な相手に仕える者（見解3）、贖われたpaterfamilias（家長）（見解4）と見るものです。

見解1：（普段からの）決定者としての夫

これはウェイン・グルーデムの見解です。彼は、パウロがエペソ人への手紙5章21節で「互いに従い合いなさい」と言うとき、それはすべての信者がすべての信者に従うという意味ではなく、すべての信者が、自分の上に正当な権威を持つ人々にだけ従うという意味にすぎない、と主張します。言い換えれば、服従は妻から夫へと流れるのであって、その逆では決してないということです。

彼は、「夫は妻のかしらである」の「かしら」は〜の上に立つ権威を意味すると言います。パウロは男性たちに妻の指導を引き受けるよう強く求め、妻たちにはこの指導を受け入れるよう求めている、というのです。イエスが教会のためにご自分のいのちを捨てられたように夫が妻のためにいのちを捨てることについて語られているのは、パウロが夫に、単に妻を愛するだけでなく、愛をもって妻を導くよう促しているという意味だ、とされます。そしてパウロが最後に創世記2章24節を引用するとき、パウロは妻に対する夫のこの権威を、堕落前の、エバに対するアダムの権威の記述に根拠づけているのだ、と彼は論じます。

これらすべてが実際に何を意味するのかについて、グルーデムは自分の結婚でそれをどう実践しているかを語っています。

大きな決定であれ小さな決定であれ、また私たちが合意に達したかどうかにかかわらず、すべての決定において、決定を下す責任はやはり私にあります。（ここで言っているのは私たち二人に関わる決定のことであり、それぞれが自分の責任範囲について個人的に下す決定のことではありません。）夫と妻が合意に達することができない10年に一度くらいの時にしか男性のかしら性は意味を持たない、と言う人たちに私は同意しません。男性のかしら性は、夫婦が結婚生活の毎日、下すすべての決定において意味を持つと私は考えています。本当の男性のかしら性があるなら、決定のプロセスの中心は妻ではなく夫だという、静かで、さりげない承認があるのです。そして、多くの話し合いがしばしば行われ、互いへの大きな敬意と配慮があるべきだとしても、最終的には、決定を下す責任は夫にあるのです。[339]

ジョン・パイパーは、父親が普段からの決定者であった両親の結婚を懐かしく思い出しながら、この見解に通じるものを語っています。

339. Wayne Grudem, Evangelical Feminism, ch. 1

父が家に帰ってくると、父は明らかに一家の長でした。食卓では父が祈りを導きました。父は家族を集めてデボーションをしました。父は私たちを日曜学校と礼拝に連れて行きました。父が車を運転しました。家族がどこに座るかを父が導きました。昼食にハワード・ジョンソンズに行くことを決めたのも父でした。父が私たちをテーブルへと導きました。父がウェイトレスを呼びました。父が勘定を払いました。家族の決まりを破ったり、母に失礼な態度をとったりしたら、相手にしなければならないのは父だと私たちは知っていました。こうした時が、母にとって最も幸せな時でした。ああ、父が家にいることを母はどんなに喜んだことでしょう。母は父の指導を愛していました。後になって、聖書がこれを「服従」と呼んでいることを私は知りました。[340]

結婚についての人気のあるキリスト教書のほとんどが、この見解を支持しています。ある本はこう言います。「夫は……家庭における重要な決定に責任を負います。……応答的で受容的な妻は、喜んで……夫の愛と慈しみと保護と養いと引き換えに、自分の自由を明け渡します」。[341]別の本も同じ考えを繰り返しています。「男性は家の外では多くの上司を持つかもしれませんが、家の中では、優しく権威を示し、自分にふさわしい敬意を受ける機会があるのです」。[342]

さて、ほかの見解の検討に進む前に、これだけは言わせてください。1980年代までは、ほとんどすべての聖書学者とキリスト者が、この箇所をまったく同じように読んでいました。ですから、これは軽く扱うことのできない見解なのです。

しかし、正直に言わせてください。そのやり方は、私の結婚の死を意味するでしょう！　また牧師として、私はこの見解を勧めたことが一度もありません。グルーデムとパイパーの人生経験が私とは違うのは間違いありませんが、二人の両方に関わる決定のすべて、あるいは大半を一方の人が下すような親密な関係が健やかに育つとは、私には想像できません。この見解が自分たちの結婚でうまくいっていると支持する夫婦は、生い立ちや文化のゆえに昔ながらの「伝統的な結婚」を好む人たちか、生まれつきのリーダーである夫と、生まれつきついて行くタイプの妻から成る夫婦かのどちらかだ、と結論せざるを得ません。しかし、すべての夫婦関係がそのようにできているわけではなく、ジュリーと私の関係は確かにそうではありません。ここ数十年の間に、牧師や神学者たちがこの見解の修正を提案し始めたこと

340. John Piper, Recovering Biblical Manhood and Womanhood, ch. 1
341. Ed and Gaye Wheat, Intended for Pleasure, fourth edition, p. 30–31
342. Kevin Leman, Sheet Music, p. 54.

を、私はうれしく思っています。ある人々はそれを「穏健な補完主義」と呼び、私は「決定票としての夫」と呼んでいます。

見解2：（まれな）決定票としての夫

ティモシー・ケラーとキャシー・ケラーは、ベストセラーとなった著書The Meaning of Marriageの中で、補完主義の結婚についてより穏健な見解を示しています。二人は、グルーデムの見解に反して、パウロが結婚における性別役割を21節の互いに従い合うことの表れとして枠づけている、という事実について一章をまるごと書いています。そして互いに従い合うことを、へりくだって相手に仕え、相手を喜ばせることを選ぶことだと定義しています。

ピリピ人への手紙2章2–3節でパウロは、キリスト者は「へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい」と率直に言っています。……私たちは、他の人の利益を自分の利益よりも重要なものと考え、そう数えるべきです。別の箇所でパウロは、私たちは「自分を喜ばせる」べきではなく、むしろ「隣人の益となるように、その人の成長のために、隣人を喜ばせるべきです。キリストもご自分を喜ばせることはなさらなかったのです」と言っています（ローマ15:1–3）。パウロは、キリスト者に互いの「douloi」――文字どおりには奴隷――となるようにとまで言っています（ガラテヤ5:13）。……夫であれ妻であれ、私たちは自分のためではなく、相手のために生きるべきです。そしてそれこそが、結婚において夫であること、妻であることの、最も難しく、しかも何よりも重要な務めなのです。[343]

この見解によれば、互いに従い合うことは双方向に流れます。22–24節でパウロは妻たちに夫に従うよう告げ、25–29節では夫たちに、どのように妻に従うのか（それは自己犠牲的な愛という形をとります）を告げているのです。

互いに従い合うことはさておき、ケラー夫妻はそれでも夫が指導者であると主張します。二人はそのために、妻と互いに従い合う夫という言葉づかいから、「仕えるリーダーという役割に」従う夫という言葉づかいへと移っていきます。[344]（これは「従う」という言葉の疑わしい使い方だと指摘しておかなければなりません。というのも、ここでのこの言葉は、互いに従い合うという考えの中での使い方とは別の

343. Tim and Kathy Keller, The Meaning of Marriage, ch 2
344. Tim and Kathy Keller, The Meaning of Marriage, ch 6

ことを意味しているからです。役割に従うことは、人に従うこととはまったく同じではありません。）

ありがたいことに、ケラー夫妻は、過去何世紀にもわたって妻の服従として理解されてきたものよりも、はるかに穏健な種類の指導を示しています。「双方が合意できないにもかかわらず何らかの決定を下さなければならない場合には、〔夫が〕決定票を投じ、（それによって）その決定についてより大きな責任を負う権利を持っています」。[345]別の箇所でティモシー・ケラーは、これを、夫が「最終決定権」を示して妻の意見を「覆す」権利と呼んでいます。[346]言い換えれば、意見の不一致がある場合にだけ、日常の意思決定においてではなく、夫が決定を下すべきだということです。

長年の穏健な補完主義者として、私も、同じ陣営の多くの教師たちも、この教えを適用して、たとえばこんなことを言ってきました。「ごくまれに、何かを選ばなければならないのに二人の意見が合わないことがあります。そのときは、妻が夫にその件について決定を下すよう頼むべきです」。たとえば、南カリフォルニアで影響力のある補完主義の牧師である私の友人アラン・フロウ（Alan Frow）は、自分の結婚におけるほとんどすべての決定は協力して行っていると言います。「私は結婚して25年になります」と彼は言います。「その間に妻が私に『私たちは意見が合わないわ。あなたがリーダーなんだから、行って神様に尋ねてきて』と言ったのは、たった5回だけです」。[347]

私自身の結婚では、私が「決定票の権威」を使う必要もなく何年も過ぎていきました。私たちはいつも何とか合意に達していたからです。しかし、考えてみてください。これは、私たちの実際の生活において、ジュリーに対する私の「指導」と、私に「従う」という彼女の必要が、実際上は存在しなかったということなのです。

決定票モデルへの疑い

私自身が長年そうであったように、多くの穏健な補完主義者にとって、自分の立場を神学的に改めるという骨の折れる作業は、わざわざする価値がほとんどないように感じられます。一年のほとんどどの日をとっても、彼らの結婚のあり方は相互主義の結婚とまったく同じだからです。実際、穏健な形であっても権威と服従が本当

345. Tim and Kathy Keller, The Meaning of Marriage, Appendix
346. Timothy Keller, The Timothy Keller Sermon Archive, 2012–2013
347. こちらで聴けます：www.bit.ly/2ZPRZGH

にすべての結婚に対する神の理想なのかと疑問を抱くようになっていなければ、私はケラー夫妻の見解に実際よりも長くとどまっていたかもしれません（そして、今もそうしている人々に共感しています）。実のところ、私には五つの深刻な疑問があります。

第一に、妻が夫の権威に従うことを理想化するなら、教会と社会における彼女の不可欠な貢献をそれだけ軽視しやすくなります。穏健な補完主義者たちは、妻が従うのは夫にだけであり、すべての男性にではないと強調しますが、それにもかかわらず補完主義者たちは、この点を使って、妻が家庭で導かれるべきなら教会では指導すべきではない、と論じています。[348]たとえばフロウは、人間の家族における結婚の役割はキリストと教会の関係の「神秘的な鏡」[349]だと正しく言っています。そして彼は、社会において女性が指導することは肯定し続けながらも、「神の家族においても、何らかの神秘的な映し出しがあるべきです」と結論づけています。

しかし、このように飛躍してもよいのでしょうか？　エペソ人への手紙5章でパウロは、夫と妻の結合は、キリストと教会の結合を指し示す「奥義」だと言っています。それなのに、なぜ補完主義者たちは、この「奥義」を共同体全体に一般的に重ね合わせてもよいと考えるのでしょうか？　そうすると、男性の長老たちが何らかの形で夫としてのイエスを表し（そしてこの議論によれば、男性でなければならないことになり）、教会の残りの人々は花嫁を表すことになります（しかもここでは、女性と男性を含むことによって、奇妙なことにたとえから外れています）。そのうえ、長老が教会の夫を表すという考えは、危険で非聖書的なものです。教会においてその役割を担っておられるのは、断固として、ただイエスだけなのですから。結婚と教会のたとえにとどまるなら、教会の指導者たちがせいぜい近づけるのは、ヨハネの福音書3章29節のバプテスマのヨハネのように、イエスの花婿の友人になることです。

第二に、補完主義の結婚観によれば、なぜパウロは、堕落がもたらしたまさにその階層的な関係を理想化したことになるのか、私は不思議に思うようになりました。

348. ジョン・パイパーはこの議論を次のように述べています。「教会において男性と女性が互いに関わり合うとき、夫が家庭で導くあり方になぞらえて、男性が導くべきです（エペソ5:22–33）」。興味深いことに、私の住む大陸で最大級の教会の一つは、女性が説教し教会を指導することを認めていますが、妻の服従を強調しているために奇妙な文化が生まれています。これらの女性説教者や女性牧師は結婚しようとしないのです。結婚したとたんに、教会員たちが彼女たちの指導をあまり真剣に受け止めなくなる傾向があるからです。
349. こちらで聴けます：www.bit.ly/2ZPRZGH

神はその結果を、約束としてではなく、厳しい予告として告げられたのです。「彼はあなたを支配することになる」。[350]

第三に、キリスト者の結婚の中に驚くほど頻繁に存在することが証明されている、パートナーへの虐待の多さに、私は今も戦慄しています。エレイン・ストーキー（Elaine Storkey）のような社会学者は、女性の服従が神によって定められた規範として教えられるとき、それはまったく助けにならないと論じています。夫たちは、自分たちの「慈しみ深い」権威についての教えを聞いていても、神が定めた男性の権威という考えそのものによって、ときに、「男性の特権と資格についての、あからさまな、あるいは潜在意識的な信念、つまり、パートナーには当てはまらない自由や地位や意見への権利が男性にはあると思い込む信念」を抱くよう促されてしまうのです。[351]最も聖化された種類の夫でない限り、パートナーを本当に対等な者として見ないことによって、たとえほんのわずかであっても、相手を自分より劣った者として扱う傾向が強いままになります。[352]

私が住んでいるアフリカでは、ジェンダーに基づく暴力の多さは本当に恐ろしいものです。キリスト者の夫が、不服従を理由に妻を殴ったという話を私は聞いたことがあります（さらには、ある牧師が、夫に服従しなかったという理由で自分の会衆の中の妻を殴ったという話さえあります）。また、ある研究[353]は、女性の服従の教理によって、虐待されている妻が虐待的な結婚の中で耐え続ける可能性が高まること、そして彼女たちが助けを求める教会も、虐待者から逃れるよう助言しない可能性が高まることを示しています。もしこれが神の理想とする教えなら、なぜそれがキリスト者の耳に届くと、あまりにもしばしば害をもたらすのか、と私は不思議に思いました。

第四に、私は、より強硬な形よりも穏健な補完主義のほうがずっと好ましいと思うものの、それがまったく新しく生み出されたものであることを認めざるを得ませんでした。穏健な補完主義の結婚を生み出す解釈が、わずか半世紀ほどの歴史しかないのなら、それは相互主義の結婚を生み出す解釈よりもさらに新しいことになりま

350. 創世記3章16節
351. Elaine Storkey, Scars across humanity: Understanding and Overcoming Violence Against Women, p. 210
352. 考えは教会の外にも広がります。だからこそ私たちは、キリスト教の考えがより広い文化にどのような波及効果をもたらすのかも問う必要があります。教会が、夫への女性の服従が神の理想であると教えるとき、それはジェンダーに基づく暴力の起こりやすさを食い止めるために何の役にも立ちません。しかし教会が、結婚に対する神の理想は相互主義的なものだと強調するとき、それは家庭内暴力を切り崩す確かな助けになるのです。
353. www.ab.co/3bHZF05 と www.bit.ly/3GNbrVt を参照してください。

す。私は、ケラー流のこの新しい穏健な補完主義に感謝していますが、グルーデムやラッセル・ムーアのような補完主義の学者たちに同意せざるを得ません。彼らは、このより穏健なアプローチは、実際には補完主義の結婚よりも相互主義の結婚に近いと示唆しているのです。本文を素直に読むと、私が普段から決定を下し、妻が普段から従うことが求められるのだとしたら、私たちは結局、一度も「聖書的な」結婚をしてこなかったことになります。私たちがしてきたのはむしろ、「対等な結婚のパートナーシップの中で互いに従い合うことを肯定する」結婚であり、そこでは決定が「交渉による合意のプロセスを通して」下されます。これは、ムーアが「フェミニスト的な」結婚、決して「聖書的な」結婚でも補完主義の結婚でもないものとして定義しているものです。[354]もしグルーデム（そして歴史的な見解）が正しいのなら、神は、私が自分の実践を変えて妻に代わってもっと多くの決定を下し始めることを望んでおられるのか、さもなければ私が自分の神学を変える必要があるのか、どちらかです。自分が信じていることと調子を合わせずに生き続けるのは、ただの一貫性のなさにすぎません。

第五に、私の見るところ、「なぜ妻は従うべきなのか？」という問いに対する満足のいく答えがありません。見解1は今の私たちの多くには耳障りかもしれませんが、何世紀もの間、それは完全に筋の通ったものでした。文化も教会の教理も、女性は男性より劣っており、したがって女性自身のために導かれる必要があると信じていたのです。しかし1960年代以降、そうした考えは文化において、そして教会においても捨てられました。夫よりも知的で決断力のある女性を、私たちは皆たくさん知っています。ですから、女性が決定を下すことにおいて劣っているということはあり得ません。では、なぜなのでしょうか？

ケラー夫妻は勇敢にも答えを示しています。「その問いへの答えは、もう一つの問いです。『なぜキリストは、御父に権威を明け渡す者となられたのか』」。二人の要点は、夫の権威に対する妻の服従は、御父に対するキリストの関係を映し出すためのものだということです。しかし、第3章と第6章で説明したように、これは三位一体の関係を誤って描いており、さらに、御子が御父に権威を明け渡すことを、妻が夫に権威を明け渡すことと比べている箇所は聖書のどこにもない、という事実を見落としています。

ジョン・パイパーは別の答えを示しています。キリスト者の妻が夫に従うことは、見ている世界に対して、教会がキリストに従うことを表している、というのです。説教としてはきれいに聞こえますが、よく見てください。これは、夫が妻の生涯の

354. www.bit.ly/3nVy1CK

毎日を導く見解1でしか成り立ちません。見解2は、キリストによる教会の指導を描くものとしてはお粗末です。イエスが私たちの主であるなら、私たちが身を委ねるのは主の日々の導きであって、何か穏健な協力的意思決定ではありません。そこでは、ときたま意見が合わないときにだけ、イエスに切り札を出してもらうというのですから。

ケラーやパイパーのような神学者たちは、心もとない神学的理由を示そうとしますが、しばしばより実際的な方向を向いている多くの牧師たちは、夫の権威を正当化するためにこう言います。頭が二つあるものは怪物だ、だから最終的な責任を誰が負うのかを知っておくことが大切だ、と。しかし、これこそ私が受け入れることのできない理由づけです。その理由を説明させてください。

「でも、最終的な責任は誰が負うのですか？」

二人の結合において、最終的な責任は本当に一人だけが負わなければならず、さもなければ結婚がおかしくなってしまうのでしょうか？　スポーツチームにキャプテンが、軍隊に将軍が、会社にCEOが必要なのはわかります。しかし、「一体」として結ばれた二人、創世記2章24節が言うように、理想的には「裸」である、つまり意図して互いに対して無防備である二人には、リーダーが必要だというよりも、対等なパートナーとして互いに愛し合い、仕え合うことに二人ともが全力を注ぐことが必要であるように思えます。

結婚についてのキリスト教の一般書の中で最も影響力のあるLove and Respectは、この主張を次のように述べています。「二人の対等な者をかしらに据えて結婚を始めることは、失敗に向けて結婚を始めることです。それが、今日あちこちで人々が離婚している大きな理由の一つです」。[355]しかし、この突飛な主張の証拠はどこにあるのだろうか、と私は思いました。この問題についてさらに研究が読めることを願っていますが、教会に通う既婚および離婚歴のあるキリスト者女性21,000人を対象にした最近の研究は、正反対の結論に達しています。「配偶者の一方が決定を下す夫婦は、たとえその決定についてまず配偶者と話し合い、意見を求めてい

355. Eggerichs, Love & Respect, p. 221. 彼は、いかなる研究にも言及せず、外部による検証もないまま、この主張をしています。

るとしても、決定権を分かち合っている夫婦に比べて、離婚する可能性が7.4倍高いのです」。[356]

多くのキリスト者は、（神学的にそう信じていると言うかどうかは別として）このことを直感的に知っています。調査を受けた数千人のうち、約40%が夫には決定票の権威があると信じ、約60%が妻は夫に従うことによって夫を愛すべきだと信じていました。それにもかかわらず、「実際に男性が最終決定権を持つ形で行動している夫婦は、わずか17.3%にすぎません。それに対して、78.9%の結婚は決定票なしで機能しています。つまり、夫婦が一緒に決定を下すか、意見が合わなければ決定を見送るかしているのです」。

ここには、私のような牧師たちが認めたがらなかった二つの難問があります。第一に、私たちが導いている人々の中で、信念と行動が食い違っています。キリスト者の大多数は、夫が決定者あるいは決定票であると信じていますが、ほとんどの人はそれを実践していないのです！　第二に、「多くのキリスト者夫婦が、夫には決定権があると信じていますが、その信念は、実践に移されるまでは夫婦に害を及ぼしませんでした」。私のような牧師は、神の民が自分の信じていることを実践し始めるよう強く求めるべきなのでしょうか？　それとも、私たちがこれまで信じるように教えてきたことを問い直すべきなのでしょうか？　牧師として、自分が導いている夫婦たちにとって本当に最善のものを望むのなら、私はいくつかの厳しいデータに向き合わなければなりません。

女性が自分の意見を聞いてもらえていると感じられず、むしろ自分の意見は夫の意見ほど重要ではないと感じるとき、その結婚が離婚に終わる可能性は26倍高くなります。……たとえ夫が妻に相談するとしても、夫が決定権を持つ結婚では、定義上、夫の意見のほうが妻の意見よりも重みを持ちます。そして、女性が自分の意見を夫の意見と同じ重みで扱われていないと感じるとき、結婚は崩れ〔やすくなり〕ます。[357]

逆に、結婚における相互性には明らかな利点があります。「夫婦が一緒に決定を下す場合、妻が自分たちの結婚を、最も幸せな20%の結婚の中に位置づける可能性は、最も幸せでない20%の中に位置づける可能性の4倍以上であり、性生活におい

356. Sheila Gregoire, The Great Sex Rescue, ch. 2. ゴットマン研究所（The Gottman Institute）による世俗の研究もこれと一致しています。ジョン・ゴットマン（John Gottman）は“The Seven Principles for Making Marriage Work”の中で、「統計的に言えば、男性がパートナーと力を分かち合う気がない場合、その結婚が自滅する確率は81%です」と書いています。
357. Sheila Gregoire, The Great Sex Rescue, ch. 2.

て頻繁にオーガズムに達する可能性も67%高くなります」。[358]これらの統計は、最もうまくいっている結婚（と性生活）は、物事を一緒に解決していこうと決め、意見が合わないときには、合意に達するために必要な時間と配慮をその問題に注ぐ結婚であることを裏づけています。

たとえば10人の指導チームでは、リーダーが時に決定票として行動する必要があるかもしれないことは理解できます。しかし、組織の意思決定の力学を結婚に持ち込むことには注意しましょう。結婚はわずか二人であり、機能的であるよりもはるかに関係的なものであって、魂のレベルでの結合を誓い合ったものなのです。

それに、夫婦が合意を見いだす時間もないまま、重要な決定をどうしても下さなければならない状況に陥ることが、どれほどあるでしょうか？　たいていは決めるための時間がありますし、その決定が影響を与える分野について最も強い確信や専門知識を持っている方に、夫婦が判断を委ねることもできます。それでも夫婦の意見が合わないなら、それは二人ともが自分の見解について強い思いを持っているということです。まさに最も意見が分かれているその瞬間に夫が立場をかさに着るのは、私には最悪の結果に思えます！　夫婦がこの件について、合意に至るまで話し合う方法はないのでしょうか？　その明確さが得られるまでは、話し合いを延ばし、その間、夫と妻の二人が祈りの中で最善の結果を求め、ほかの人々に助言を求め、互いの言うことに本当に、本当に耳を傾けようとするほうがよいのです。[359]

私の経験から、私は次の結論に至りました。妻が私に反対するほど何かについて強く感じているまさにその時点で私の権威を行使することは、関係を壊す行為のように思えます。妻が切り札を出すよう求めたことが5回あったと振り返るアラン・フロウとは違い、私には、ジュリーのためらいを押し切る形で大きな決定を下した記

358. Sheila Gregoire, The Great Sex Rescue, ch. 2.

359. あるポッドキャストのインタビューで、アラン・フロウは決定票モデルを擁護して、牧師として平等主義の夫婦のカウンセリングをすると、「誰が決定を下すのかわからないために、多くの緊張がある」ことに気づくと言っています。こちらで聴けます：www.bit.ly/2ZPRZGH――しかし、それは広く当てはまることなのでしょうか？ 私自身の結婚の経験と、私がカウンセリングしてきたすべての夫婦が何らかの目安になるとすれば、妻と夫の意見が合わないときには夫の権威が下されると妻が予想している場合、それは実際には、妻が経験する結婚生活に計り知れないほどの緊張を加えることになります。多くのキリスト者カウンセラーは、対立を抱えるキリスト者の結婚の緊張に対処するのに最も役立つのは、夫に決定票の権威を導入することではなく、むしろそれがないことだと強調しています。そうではなく、夫婦は、相手に本当に耳を傾け、相手を愛し、相手に仕えるために自分の思惑を手放すことを学ぶ必要があるのです。夫の決定票の権威に従おうと努め、必死に努めながらも、それでもそれによって傷ついている女性たちの話を、私は十分すぎるほど聞いてきました。役割を逆転させて、ある決定について強い思いを持っている妻――夫も同じくらい強い思いを持っていて、最終的に決めるのは夫です――の立場に自分を置いてみると、決定票の見解は、夫にイエスの言葉を無視させることになりかねない、と私は気づきます。「人からして〔ほしくない〕と思うことを、人にも〔しては〕なりません」。

憶が一つしかありません。しかもそのときでさえ、彼女は単に私の権威を受け入れたというよりも、私の確信を信頼してくれたのです。今考えてみると、彼女の考えに反して最終決定を下そうとしたものの、彼女が勇気をもって私に押し返してきた、という記憶のほうがずっと多くあります。ありがたいことに、そのたびに私は耳を傾け、私たちは最終決定を先延ばしにしました。振り返ってみると、彼女の正当な懸念にもかかわらず、もし私が立場をかさに着ようとしていたら、彼女の信頼を損なっていただろうと思います。

つまり、私は見解2について深刻な疑問を抱くようになったのです！　年を重ねるほど、そして牧師として、また友人として多くの夫婦と歩みを共にするほど、こうした懸念を見て見ぬふりをすることは難しくなります。ジュリーと私が神の前で結婚生活をどのように営むか、そして子どもたちが自分の配偶者をどう扱い、配偶者に自分をどう扱わせるように育てるかは、非常に重要なテーマなので、決定票の見解の弱点にさえ向き合い、エペソ人への手紙5章のほかの解釈の可能性にも心を開いておくほうがよい、と私は結論しました。そうしたとき、私は、エペソ人への手紙5章のような難しい箇所を表面的に読むだけでなく、より深く掘り下げ、その箇所が何を言っているかだけでなく、なぜそれを言っているのか、そしてもともと誰に向けてそれを言っていたのかを問う喜びを、再発見したのです。

見解3：対等な相手に仕える者としての夫

この第三の見解をきちんと調べる前、私はそれを、エペソ人への手紙5章の明瞭な教えを回避しようとする試みであることは明らかだと思い込んでいました。この見解は、箇所をめぐって解釈上の「バク転」をしようとする試みだと示唆するフロウに、私は同意していたことでしょう。ですから、ようやくこの見解にきちんと頭を使って向き合ったとき、それが実に説得力のあるものだとわかって、私は驚きました。それは聖書解釈の曲芸などではなく、健全な解釈に伴う、どうしても必要な地道な努力をした結果だったのです。聖書学者フィリップ・ペインは、エペソ人への手紙5章について幾つかの観察をしており、それによれば、パウロが実際には、表面的な読み方が示唆するような指導と服従ではなく、平等と相互性を結婚の基盤として推し進めている可能性が十分にあるのです。

第一に、パウロはキリスト者の結婚を、互いに従い合うことという母体の中に位置づけています。ペインによれば、パウロが「従う」（自分を他者の下に置くことを

意味します）という語を、「互いに」（ギリシア語allelous）という相互的な表現と結びつけたことは、パウロの教えの中でも、社会的に最も革命的で、言語的に最も創造的なものの一つです。新約聖書では多くの場合、「従う」（ギリシア語hypotasso）という語は他者の権威に服することを意味します。しかしパウロは、それを「互いに」と結びつけることによって、この服従を相互的なものとし、その意味を、誰かの権威を受け入れることから、自分をその人に仕える者として置くことへと移しているのです。これは、パウロがすでにエペソのキリスト者たちに語っていたことと完全に合致します。彼らは「愛をもって互いに耐え忍び」（4:25）、「互いに親切で、優しい心の人とな」り、「互いに赦し合う」（4:32）べき人々なのです。パウロが挙げる理由は、私たちが「キリストを恐れて」（5:21）互いに従い合うということです。これは章の始まりを指し示しています。そこでは、キリストがご自分を私たちに仕える者として差し出されたことが示されています。「キリストも私たちを愛して、私たちのためにご自分を、神へのささげ物、またいけにえとして献げてくださいました。それは芳ばしい香りのものでした」（5:2）。

見解1をとる強硬な補完主義者たちは、これに反論します。ウェイン・グルーデムとケビン・デヤングはともに、「互いに」という表現は「ある人々が他の人々に」という意味にもなり得ると論じることで、夫が妻に従うという相互的な含意を否定しようとしています。たとえばグルーデムは、「人々が互いに殺し合うようになる」（黙示録6:4）でのこの語の使い方に言及し、それは「ある人々が他の人々を殺す」という意味だと言います。しかし、もし黙示録の著者が、ある人々が他の人々を殺し、自分たちは殺されない、ということだけを思い描いていたのなら、そもそもこの表現を使わなかったでしょう。デヤングは、「互いに」という表現を使っている別の本文[360]を挙げ、それらは相互的ではないと主張します。しかし詳しく調べると、それらは間違いなく相互的です。エペソ人への手紙の残りの部分における「互いに」のすべての用例も、新約聖書全体におけるそれも同様です。「互いに」従うことを一方向にだけ（従属する者から権威を持つ者へと）流そうとするグルーデムとデヤングの試みは失敗しています。ジョージ・ナイトやトム・シュライナーのよ

360. マタイの福音書24章10節、ルカの福音書12章1節、コリント人への手紙第一7章5節、11章33節

うな、補完主義の先駆的な神学者たちでさえ、この点では彼らに同意していません。[361]

第二に、パウロは、自分が言っているのがどのような種類の妻の服従なのかを明らかにしています。先ほど述べたように、服従には二種類あります。一つは、市民が政府に対してするように、従属する者が権威に対して示す権威に服する服従です。[362]もう一つは仕える服従です。すでに見たように、パウロが互いに従い合うことについて語るときに意味しているのはこちらです。[363]前者は一方向のもので、要求することができます。後者は相互的なものになり得るもので、常に自発的なものです。

パウロが妻たちに夫に従うようにと言うとき、彼はどちらの種類のことを言っているのでしょうか？　この問いに答えられるかどうかは、私たちが読んでいる現代の翻訳に左右されます。どの聖書を開いてみても、21節の終わりに句点があり、そこからまったく新しい段落が始まっているのがわかるでしょう。訳によっては、21節と22節の間に「Wives and husbands」（妻と夫、ESV）のような見出しを挿入しているものさえあります。しかし、この段落の区切りや挿入された見出しは、非常に重要なことを見えにくくしています。ギリシア語では、21節と22節の間に句点はないのです。

実際――これには驚かされましたが――、私たちが持っている最古のギリシア語写本には、22節に「従う」という語さえありません。それがないのは、22節が21節

361. 補完主義者が反論するもう一つの方法は、こう言うことです。もし（エペソ人への手紙5章21節の）互いに従い合うことが三つの組（夫と妻、親と子、主人と奴隷）すべてを枠づけるものであるなら、パウロが結婚における指導と服従という考えを覆しているはずがないことは明らかだ。二番目と三番目の組は本質的に階層的なのだから、と。エペソ人への手紙5章21節についての私自身の理解は、それは三つの組すべてを枠づける節ではなく、パウロの手紙の新しい区分への移行の節にすぎず、パウロはそれを特に結婚の関係に当てはめている、というものです。これは、シュライナーやナイトのような補完主義者たちのアプローチよりもずっと優れています。彼らは、互いに従い合うことが夫と妻の双方に当てはまるという考えを受け入れながら、奇妙なことに、それを「妻は従う妻としての自分の役割に従い、夫は自己犠牲的な指導者としての自分の役割に従う」と言い換えています。しかしパウロは明らかに、役割に従うようにではなく、互いに従うようにと彼らに語っているのです。
362. ローマ人への手紙13章1節
363. 「hupotassoは誰かほかの人の下に位置づけられるという考えを含んでいるので、権威への服従にも、対等な者同士の個人的な関係における服従にも適しています。前者の場合には、階層の中に客観的な序列があります。たとえば、信者は国家の権威の下にあり、したがってその権威に服従して振る舞わなければなりません。後者の場合、序列は主観的なものです。信者は、あたかも階層の中にいるかのように自分を他の人々の下に位置づけるべきです。つまり、他の人々を自分より重要な者として扱うべきなのです。これこそがキリスト者の謙遜の本質だからです（ローマ12:10、ピリピ2:3）」（Andrew Bartlett, Men and Women in Christ, p.36）

から動詞を借りているからです。[364]ギリシア語は文字どおりにはこう言っています。「キリストを恐れて互いに従い合いつつ、妻たちは〔欠けている語に注目〕自分の夫に……」。言い換えれば、パウロがここで妻たちに夫に従うようにと言うとき、彼は、すべての信者が互いに示すべき服従とまったく同じ種類の服従を指しているのです。パウロはここで、妻たちに夫に対して特別に従属するよう言っているのではありません。むしろ彼は第二の種類の服従を指しており、そこでは妻たちが、へりくだって夫に仕え、夫を喜ばせることを選ぶのです。パウロは同じ文の中で、最後にもう一度「従う」という語を使い、今度は教会がキリストに従うことを指しています。21節と22節での「従う」という語の使い方に照らせば、これは次のように読むべきです。「教会がすべてのことにおいてキリストにへりくだって仕え、キリストを喜ばせるように、妻もすべてのことにおいて夫にへりくだって仕え、夫を喜ばせるべきです」（24節）。[365]

第三に、この場合の「かしら」（頭、ギリシア語kephalē）は、権威ではなくいのちの源を意味している可能性が非常に高いのです。現代英語では、比喩として使われる「head」（頭）は権威を意味します。CEOは会社の「head」であり、指揮官は小隊の「head」です。さらに、文字どおりの体の文字どおりの頭を思い浮かべるとき、私たち現代人は、脳を収めている頭がそれゆえ体の司令塔であると思い込みます。頭は神経系を通して体に命令を送るのだ、と。

私たちが問わなければならないのは、パウロがkephalēという語を選んだときに何を意味していたのか、そして最初の読者たちがそれをどう理解したのかということです。補完主義の学者たちは、パウロはかしらであるキリストを、かしらである夫と比べているのだから、夫の権威が含意されているに違いない、と論じます。しかしこれは、パウロがこの語を比喩として使うとき、おそらくそれはまったく彼の意味するところではない、という事実を見落としています。確かにパウロは、イエス・キリストが教会と被造世界に対して権威を持っておられることを理解していました。しかし、イエスをからだのkephalēとして語ることを選ぶとき、彼はたいてい、権威に関係してはいるけれども権威とまったく同じではない何かを強調してい

364. シンシア・ウェストフォールは“Paul and Gender”（第1章）でこう書いています。「エペソ人への手紙5章18–23節はギリシア語では一つの文を形成しており、22節の妻たちへの指示は、22節で動詞『従う』が省略（脱落）されているために、文法的に21節の互いに従い合うことに依存しています」。
365. パウロは、それに続く節で親子関係と奴隷と主人の関係について別の語――「聞き従う」――を選ぶことによって、自分の手紙の中で「従う」のこの意味を守っているように思われます。

ます。必読の「付録3：kephalēの意味」で私は、グルーデムの主張に反して、パウロの時代にこの語が一般に権威を意味してはいなかったことを説明しています。

では、パウロがここエペソ人への手紙5章で意図している意味は何でしょうか？最も重要な手がかりは、彼がこの語を結婚のたとえの一部として使っていることです。しかもそのたとえは、まったく新しい文学的発明であり、そこでは夫は妻のかしらであり、妻は夫のからだなのです。「かしら」を表すギリシア語が男女の関係に関連して使われているのは二回だけ（ここと、コリント人への手紙第一11章3節）で、学者たちはそれぞれの場合の語の意味について見解が分かれています（ただし第6章で私は、コリント人への手紙第一ではそれが敬われるべきいのちの源を意味すると論じています）。かしらとからだという比喩の中でこの語が使われているのは、エペソ人への手紙5章だけです。では、パウロは、「妻のかしら、そして妻は彼のからだ」で何を意味しているのかについて、何か手がかりを与えてくれているでしょうか？

はい、与えてくれています！　23節の実際のギリシア語の文構造は、残念ながらほとんどの翻訳では見えにくくなっていますが、「夫、妻のかしら、……キリスト、教会のかしら、彼自身、からだの救い主」です。ギリシア語では、パウロが「かしら」で何を意味しているのかがわかります。この三つの並行する句は、パウロが「かしら」を「救い主」と同義的に使っていることを際立たせています。もしパウロが夫の権威を強調したかったのなら、そのことを言うための多くのギリシア語の一つを使うことができたはずです。kyrios（主）、exousia（権威）、proestōtes（管理する）などです。そうせずに彼は、かしらとからだの比喩を選び、それを、キリストがご自分のからだの救い主として（この場合は主としてではなく）ご自身を与えられたことになぞらえています。確かに神学的に言えば、キリストは救い主（奉仕と配慮において私たちに与えてくださるもの）であり、同時に主（私たちに当然要求なさるもの）でもあります。しかしパウロはこのたとえの中に、からだの救い主としてのキリストという意味だけを詰め込んでいるのです。ここでかしらとしての夫が夫の配慮と奉仕を意味していることに少しでも疑いがあるなら、配慮と奉仕という考えはそれに続く節でも保たれています。ただしそれは、パウロがキリストとその花嫁である教会との結婚という、さらにもう一つの比喩を織り込んでいるために、少し見えにくくなっています。

キリストは彼女〔ご自分の花嫁／からだ〕のためにご自身を差し出されました。それは、彼女〔ご自分の花嫁／からだ〕を聖なるものとするためであり、みことばを

通して水で洗うことによって彼女〔ご自分の花嫁／からだ〕をきよめ、しみもしわも、ほかのどんな傷もない、聖く非難されるところのない輝く教会として、彼女〔ご自分の花嫁／からだ〕をご自分の前に立たせるためでした。同じように、夫たちも自分の妻を自分のからだのように愛すべきです。妻を愛する人は自分自身を愛しているのです。結局のところ、自分のからだを憎んだ人などいません。むしろ、だれもが自分のからだを養い、いたわります。キリストが教会に対してそうなさるのと同じです。

おわかりでしょうか？　この箇所全体を通して、パウロが強調しているのは権威ではなく、奉仕と配慮です。夫を妻のかしらとして語るとき、彼は、夫が妻に対して自分の権威を主張すべきだとほのめかしているのではありません。そうではなく、私たちの誰もが自分のからだに仕えるように、夫は妻に仕えるべきだと言っているのです。

21–30節で、この三層の比喩（かしらとからだ、夫と妻、キリストと教会）を解き明かしたあと、パウロはさらにもう一つの層を加えます。それは、堕落前のアダムとエバの結合です。これは彼が描いている絵を複雑にしますが、それでもすばらしい要点を示しています。「『それゆえ、男は父と母を離れ、妻と結ばれ、二人は一体となる。』これは深い奥義です。しかし私は、キリストと教会について語っているのです」（31節）。夫がかしらであり、妻がからだの残りの部分であるというパウロのたとえによって、パウロは私たちを、アダムとエバの間の史上初の結婚へと連れ戻すことができます。二人が初めて比喩的な「一体」の結びつきを味わったときです。第4章ですでに見たように、アダムとエバの結合は権威と服従に関するものではなく、喜びに満ちた親密さとパートナーシップに関するものでした。このように、エペソ人への手紙5章でパウロは、かしらとからだの比喩を用いて、指揮命令系統ではなく愛のきずなを強調しているのです。

エペソ人への手紙5章を、夫に妻を（導くのではなく）仕えるよう求める神の呼びかけとして読むことに基づいて、最後にもう一つの洞察を示させてください。この箇所には、夫が妻を導くようにという指示は一つもありません――ここにないだけでなく、聖書全体のどこにもないのです！　さあ、もう一度読んでみてください。これは解釈の流れを一変させるものです。

これらすべてによって、私たちは、エペソ人への手紙5章には、従属する妻に対する夫の権威について何一つないのかもしれない、という力強い結論に至ります。む

しろパウロが鮮やかな比喩を通して強調しているのは、夫と妻は愛をもって一つに結ばれ、互いに仕え、互いを喜ばせるべきだということです。

これは、パウロが夫と妻に、互いを同じように扱うよう言っているということでしょうか？

そうでもあり、そうでもありません。そうだというのは、両者とも「互いに従い合う」よう求められているからです。また、ここで妻を「愛する」よう言われているのは夫だけですが、両者とも互いに愛し合うべきです。パウロは別の箇所で、妻たちに「夫を愛し」なさいと特に言っています。[366]しかし、そうではないというのは、パウロが、ギリシア・ローマ世界の諸教会のとても多くの結婚の中で目にしてきたパターンを念頭に置いていたのかもしれないからです。たとえば、夫はkephalē、つまりいのちの源として描写されているのであって、そうなるよう命じられているのではないことに注目してください。パウロはおそらく、古代世界では妻たちはたいてい年が若く、教育も少なく、子育てに縛られており、そのため夫の経済的・身体的な世話に完全に頼っていた、という事実に向き合っているのです。夫に頼っている妻をkephalēと描写しても、まったく意味をなさなかったでしょう。

また、パウロの時代の夫たちが、私が今日知っている多くの夫たちと少しでも似ていたなら、彼らは（平均すると）妻たちよりも、配偶者のために自己犠牲的にいのちを捨てようとしない傾向があったでしょう。[367]そのためパウロは、妻たちには夫に従う（つまり、へりくだって夫に仕え、夫を喜ばせる）よう告げるだけで十分だと考え、それから夫に対しては三倍もの言葉を費やし、キリストのように犠牲を払うよう迫りながら、夫の自己中心性を少しずつ削り取っていくのです。この指摘は確かに私に当てはまります。私自身の結婚において、自己犠牲的に、へりくだって配偶者に仕え、配偶者を喜ばせるために、聖書から最も多く突っつかれ、御霊の継続的な変革の働きを最も必要としてきたのは、ジュリーではなく私なのです。私の友人アンドリュー・バートレットが次のように結論しているのは正しいと思います。「パウロは夫に、自己犠牲においてまず先に立つよう求めています。これは、夫に対する妻の、キリスト者としての利己的でない愛の義務と種類において異なるものではありませんが、夫が愛する責任をいっそう強めるものなのです」。[368]

366. テトスへの手紙2章4節
367. 夫が妻よりも自己中心的になりがちなことについては、神経学的な説明さえあります。www.on.today.com/3CKRlsD を参照してください。
368. Men and Women in Christ, p. 64

33節でパウロは、男性たちには特に妻を「愛する」（導くのではなく）よう、妻たちには特に夫を「敬う」（従属するのではなく）よう懇願しています。なぜ彼は、妻たちには夫を敬うよう、夫たちには妻を愛するよう告げるのでしょうか？　当時も今も、ほとんどの妻は敬われたいと思い、ほとんどの夫は愛されたいと思うでしょうが、パウロはおそらく、当時のとても多くの男性と女性に特有の心理について、何かを知っていたのでしょう。

見解3――対等な相手に仕える者としての夫――を説明しているだけでも、私はその力強さを感じます。正直に言えば、これが正しい解釈であってほしいと願っています。それは私にとって非常に心を奮い立たせ、また挑戦を与えるものだからです。夫を日々の決定者とするグルーデムの捉え方は悪い知らせであり、夫を決定票とするケラー夫妻の捉え方はそれよりは良いけれども、なお問題があり一貫性に欠けると思う一方で、この見解は良い知らせであり、しかも十分に実行可能だと私は思うのです。

それでも、もしパウロがこの箇所で、たとえ夫たちに愛による犠牲を求めることでそれを相殺していたとしても、エペソの妻たちが夫に何らかの権威を認めるべきだとほのめかすつもりだったとしたらどうでしょうか？　結局のところ、結婚を神の結婚――そこには神／イエスと私たちとの間に明確な身分の違いがあります――になぞらえることは、少なくとも夫婦関係における階層を思い起こさせるかもしれません。そこで、この箇所を正しく理解しようと決意して、私はさらにそれをかみしめました。聖書解釈の最も重要な原則のすべてをこの作業に当てはめただろうかと考え――そして、当てはめていなかったことに気づいたのです。

見解4：贖われたPATERFAMILIAS（家長）としての夫

前にも述べたように、聖書を理解し適用しようとするときに私たちが犯す最もよくある間違いの一つは、聖書のさまざまな部分が私たちに直接宛てて書かれたものだと思い込むことです。しかし、そうではありません。それらは私たちのために書かれたのかもしれませんが、私たちに宛てて書かれたのではありません。最初の読者たちの状況と、彼らがその言葉をどう理解したかを理解して初めて、まったく異なる状況や文化に生きる私たちは、その本文から自分たちにとっての意味を引き出す作業を始めることができます。ありがたいことに、多くの、あるいは大部分の箇所では、私たちの現代の状況は最初の読者たちの状況とかなり似ているので、これは

簡単な作業になります。しかし、彼らの状況が私たちの状況と非常に、非常に異なっている場合はどうでしょうか？

今日のキリスト者は、さまざまな違い（たとえば言語、文化、状況）という「川」によって、聖書の聴衆から隔てられています。この川のせいで、私たちは、彼らの文脈における意味から私たちの文脈における意味へと、まっすぐに移ることができません。私たちは確かに同じ偉大な物語の一部ですが、物語の中での私たちの位置は、霊的な先祖たちの位置としばしば異なります。川の幅が広く、渡るには長い橋が必要なこともあります。また、簡単に渡れる細い小川であることもあります。原則化の橋をそこに架けようとする前に、その川の幅がどれほどなのかを知る必要があるのです。[369]

この解釈の鍵をエペソ人への手紙5章の研究に当てはめたとき、私は自分の間違いに気づきました。そして、この箇所について私が読んできたほとんどすべての人の間違いにも気づいたのです。私たちは、エペソ人への手紙5章は簡単に渡れる細い小川だと思い込んでいますが、実際には、渡るのに長い橋を必要とする広い川なのです。

説明させてください。私たちは、エペソの教会にいた夫婦たちが、多かれ少なかれ現代の夫婦のようだったと想像します。パウロは私たちを、私たちの現代の結婚を「見て」いて、それでこの手紙を私たちに宛てて書いているのだと想像します。しかし、そうではありません。彼が語りかけている結婚は、1世紀のギリシア・ローマ世界の結婚であり、私たちの結婚とは大きく異なっています。その世界では、家庭は共働きの両親と二人の子ども、そして犬と猫から成るものではありませんでした。家庭はたいてい一人の男性、つまりpaterfamilias（家長）を中心に成り立っており、彼が妻と子ども、そして時には奴隷たちを支配していました。アリストテレスの教えのゆえに、家庭は階層的に秩序づけられていました。その文化では、これが家庭のあり方として最善のものだったのです。（成人男性がいない場合にだけ、家の支配者は女性でした。）私は「支配者」という語を意図的に使っています。アリストテレスは「家の支配は君主制です」と言っています。[370]夫であり父である者が王だったのです。

前の段落で子どもと奴隷に触れたので、私がそうだったように、皆さんも何かに気づき始めたかもしれません。エペソ人への手紙5章22–33節の夫と妻の関係は、パウロが取り上げる三組の関係の最初のものです。続く二組はすぐ後に出てきます。

369. Duvall and Hays, Grasping God's word, ch. 13.
370. Aristotle, Politics, 1255b.

親と子（6:1–4）、主人と奴隷（6:5–9）です。以前の私が見落としていたのは、パウロは、男性、女性、子ども、奴隷という階層から成る、これらの階層化された古代の家庭に福音を当てはめているということでした。夫たちは、妻には認められていない権利、特権、自由を持っており[371]、権力を握り、収入の大部分をもたらしていました。たいていの場合、女性は財産を所有することも事業を営むこともできず、男性が代理として行動しなければ、法的あるいは金銭的な取引を行うこともできませんでした。

地中海社会では、結婚時の男性の平均年齢は30歳でしたが、女性は結婚時に18歳かそれ以下でした。男性が結婚するとき、彼はすでに社会での生き方を知っている世慣れた大人でした。社会的にも経済的にも一人前に振る舞える人物だったのです。女性が結婚するとき、彼女はまだ、自分の家の玄関のノックに応じることさえ許されたことのない少女でした。典型的な女性は、子を産む年齢の間、およそ2年か30か月ごとに子どもを産みました。彼女はいつも「裸足で身重のまま」家にいました。前の子が乳離れするとすぐに、次の子を産んだのです。[372]

ほとんどの女性は、家事以外の教育を受けていませんでした。彼女たちは完全に男性に依存しており、生涯にわたって男性――父、場合によっては後見人、そして夫――の下に置かれていました。従属は、子ども、奴隷、そして妻にとっての規範だったのです。この文脈と文化においては、paterfamiliasは支配権を握っているべき者であって、誰かに、ましてや自分の従属者たちにへりくだって仕えるべき者ではありませんでした。むしろ従属者たちのほうがpaterfamiliasに仕えるべきだったのです。これがアリストテレスの考えでした。「男性は本性上、女性よりも命令するのに適しています……その不平等は永続的です。……男性の勇気は命令することに、女性の勇気は聞き従うことに表れます」。[373]

さて、次のことに注目してください。パウロは、カエサルがローマ帝国の主であるという統治構造を作り出しているのではないのと同様に、年長の男性がほかの全員を支配する家庭の構造を作り出しているのでもありません。彼はただそれに語りかけ、既存の社会構造の中で、必ずしもそれを覆そうとすることによってではなく、それを贖う道を見いだすことによって働こうとしているのです。今日の良い宣教師

371. 私はまた、次のことも前提としています。「ギリシアの環境でもローマの環境でも、奴隷は法的に結婚することができませんでした。したがって、エペソ人への手紙5章における妻と夫の振る舞いについてのパウロの言葉は、主として自由人、特に奴隷のいる家庭を取り仕切っていた社会階層に向けられています」（Andrew Bartlett, Men and Women in Christ, p. 66）
372. David Scholer, Journal of the Evangelical Theological Society 30, December 1987, p. 416. www.bit.ly/3bDKpl9
373. Aristotle, Politics, 1259a.

なら誰でも新しい文化に入っていくときにするように、パウロは、必ずしもそれを理想として是認したわけではなくても、できる範囲で譲歩しました。

福音が古代の家庭と出会う

もしあなたがその文脈の中にいる使徒パウロだったとしたら、自分の教会のこれらの階層的な家庭をどのように牧会したでしょうか？　パウロがエペソの家庭をその文脈の中で牧会している三つの方法を見てみましょう。

第一に、彼は家庭のすべての関係を福音の中に浸します。パウロは妻と夫に、「キリストを恐れて」互いに接するよう導き、すべての指示に、キリストに関係する言葉で洗礼を施しています。「主に従うように」「キリストが……であるように」「キリストに」「キリストが……のと同じように」「私は、キリスト……について語っているのです」。彼は同じやり方を続けて、親と子、主人と奴隷にも、互いの関わり方を新たに思い描かせています。二語に一語は「キリスト」か「主」であるかのようです。パウロは巧みに、すべての人――妻と夫、子と親、奴隷と主人――が、相手との関わり方を、キリストとの関係の現れとして見られるように助けようとしているのです。

第二に、パウロは特に、paterfamiliasによく見られた、自分本位で支配的な振る舞いを切り崩しています。家庭の中の役割を規定していた古代の家庭訓では、paterfamiliasは支配するよう命じられ、ほかの全員は従属するよう命じられていました。そうした家庭訓の焦点の大部分は、きちんと振る舞う必要のある従属者たちに当てられていました。しかしパウロの改良された「家庭訓」は、それまで一度もなされたことのないことをしています。それぞれの関係の組において、彼は夫／親／主人（三つすべてに同じ男性が含まれています！）に、彼ら自身がきちんと振る舞うよう告げることに最も多くの注意を向けているのです。paterfamiliasがその文化のゆえにすでに支配していることを前提として、パウロは彼に、今や妻のためにいのちを捨て、子どもたちを怒らせず、奴隷たちを脅さないようにと告げます。これは当時、まったく画期的な挑戦だったでしょう。夫に妻の生殺与奪の権を与えていた文化の中で、パウロは夫たちに、妻が豊かに生きられるように、自分の力を捨て、必要なら死ぬことさえするようにと告げているのです。

第三に、パウロは福音を用いて、paterfamiliasに対する妻、子ども、奴隷の従属を和らげ、作り変えています。彼らに従属しないようになれと勧めることなく、パウ

ロは、彼らの状況において福音がもたらし得る種類の従属を提案しています。すでに見たように、妻にとってそれは、夫の権威にしぶしぶ従属するだけでなく、キリストにへりくだって仕え、キリストを喜ばせるのと同じように、へりくだって夫に仕え、夫を喜ばせるということを意味します。

パウロの教えは驚くべき効果を上げました。

paterfamiliasに繰り返し強く迫り、それから家父長制社会の中で最も力のない人々——妻、子ども、奴隷——にこれほど優しく語りかけることによって、パウロは初代教会が力のない人々を大勢引きつけるのを助けました。異教の批評家ケルソス（Celsus）は2世紀に教会を嘲って、「キリスト教は女と子どもと奴隷のための宗教です」と言いました。[374]

家庭の関係のあり方に対するパウロの独自の解釈は、その文化では前代未聞のものでした。これらすべてにおいて、彼は古代の階層を消し去ってはいません。しかし、それを何らかの神的な理想として支持しようともしていません。むしろ彼はそれを、構造全体が福音の中で洗礼を受けるだけでなく、やがて福音の中で溶けてなくなるような仕方で覆しているのです。私たちの時代にそうなったように。

しかし当時、古代世界の異教徒がキリスト者の家庭をのぞき込んだとしても、パウロがローマ法を覆そうとしているとか、上下関係のない平等主義の家庭を実現しようとしているとか考えることは、まずなかったでしょう。彼らが贖われたpaterfamiliasの中に目にしたのは、彼が自分の導く人々を優しく世話し、彼らのために犠牲を払う珍しいあり方であり、彼の妻、子ども、奴隷たちの喜びだったのです。

ですから、パウロが混じり気のない平等主義を教えていると示唆する見解3に対して、この見解はこう主張します。パウロが夫をかしらと呼ぶとき、彼は、夫が文化的な規範として妻に対する権威を持っていることを暗に示しているのかもしれない。そして、夫と妻の関係をキリストと教会の関係になぞらえるとき、一方が他方を「取り仕切っている」という事実を取り上げているのかもしれない、と。しかし、パウロはpaterfamiliasが取り仕切っていることを前提にしてはいても、それを、夫があらゆる時代、あらゆる文化において妻に対して持つべき何らかの「役割」や地位として定めているのでは決してありません。男性が女性に対して持つ文

374. ケルソスは2世紀に生きた異教の批評家です。この引用は、ロス・シェパード・クレーマー（Ross Shepherd Kraemer）の“Her Share of the Blessings”（p. 128）からのものです。

化的な力を理想化するどころか、パウロはそれを福音によって贖おうとしているのです。

ジョン・パイパーの議論への反論

一部の補完主義者は、次のように反論します。パウロが夫の権威を認め、しかもそれをキリストと教会との関係に結びつけていることを受け入れるなら、パウロは実際に、夫が導き妻が従うという関係を理想化し、永遠のものにしているのではないか、というのです。パイパーは、贖われていながらも階層的なキリスト者の結婚が、世界に福音を示すのだと言います（そして、それを言うために一冊の本を書いています）。彼はこう言います。「夫に従い、夫に頼る妻を、夫が愛をもって導くことは、キリストと教会の姿です。もし夫が導く立場を失うなら、それはもはやキリストと教会の姿ではありません。」[375]

彼の議論には三重の欠陥があります。第一に、パウロは家庭内の奴隷制についても似たことを言っています。奴隷たちに、自分の主人であるキリストに聞き従うのと同じように、主人に聞き従いなさいと命じているのです。パイパーの論理に従えば、神は、私たちの主であるイエスに私たちが隷従することの「美しさ」を世界に示すために、主人と奴隷の関係を造られたことになります。とんでもありません！どちらの場合も、パウロは、現実ではあっても必ずしも理想ではない状況に福音を当てはめているのです。

第二に、福音を映し出すのは結婚の階層性ではなく、そのような結婚が贖われることです。この箇所でパウロが強調しているのは階層ではありません。強調されているのは、夫が妻に仕えることです。その妻もまた互いに従い合う中で夫に従い、夫は彼女と親密な関係を楽しむのです。このことは、階層的な結婚よりも相互主義の結婚においてこそ、いっそう明らかに表れうるのではないでしょうか？　見解3で指摘したとおり、パウロはkephalēという語の用い方に限定を加えています。イエスを教会の主としてではなく、教会の救い主また支え手として強調しているのです。

第三に、神が結婚を通して見守る世界に示したいと願っておられるのが、教会に対するイエスの主権であると仮定するなら、どんな階層的な結婚も、決して十分に階

375. John Piper, Momentary Marriage, 第6–8章を参照してください。

層的ではありえません。イエスはご自分の教会の主ですが、夫は決して妻の主ではありません。

パイパーの議論の弱点はさておき、キリスト者の結婚は福音の何かを映し出すためのものだという点で、私は彼に同意します。キリスト者の結婚が本当によくできることは、まさにキリスト者の共同体ができることと同じです。イエスが私たちを愛してくださったように互いを犠牲的に愛することによって、私たちがイエスの弟子であることを世界に示すことができるのです。相互主義の結婚も、階層的な結婚と同じように、いや、それ以上によくこれを行うことができます。キリスト者の結婚がよくできるもう一つのことは、私たちがキリストと結ばれている、永続的で親密な結合を映し出すことです。かしらとからだのたとえ――パウロがその後「一体」と呼ぶもの――は、深く、契約で結ばれた愛のきずなと、生き生きとした有機的なつながりを示しています。これに対して、指導者が自分に従う者と縁を切るところを想像しても、それほど心は乱れません。しかし、かしらがからだから切り離されるところを想像すると、まったく心がかき乱されます。

エペソ人への手紙5章で私たちが誤るところ

グルーデムは800ページに及ぶ本の中で、結婚における妻の従属を果敢に論じていますが、1世紀の結婚と私たちの結婚との間にある大きな隔たりを認めている箇所は、どこにもありません。[376]同様に、ケラー夫妻も、エペソ人への手紙5章についての詳細な研究の中で、このことにまったく注意を払っておらず、古代の結婚の状況を探ってもいません。ただの一度もです。これは誤りです。彼らは、実際には広い川を、狭い川として扱っているのです。

パウロは古代の家庭の構造を永遠のものにしようとしているのではありません。むしろ、私たちの状況とは大きく異なる独特な文化的状況に、福音を当てはめているのです。パウロが語りかけていたのは、私の世界ではありませんでした。私の世界では、成人女性の大半が男性と同じように教育を受け、自分の出産を自分で決めることができ、経済的に自立しており、社会的に男性が自分の上に立つ必要もありません。こうしたことのすべてが、異なる種類の結婚を生み出します。

376. グルーデムがpaterfamiliasという語を引用しているのは、第7章の脚注102の一度だけです。そこでは別の著者が、家の年長の構成員の重要性を論じています。

次の問いはこうです。彼らの状況と私たちの状況との間に非常に広い川があることがわかった今、私たちはどのようにして「原則化の橋を架ける」のでしょうか？言い換えれば、もはや階層的ではなく平等主義的になった現代社会の結婚に対して、パウロは何と言ったでしょうか？　私は次のように提案します。

パウロは私たちに、結婚の中心にキリストを置き続けなさいと言うでしょう。互いを「見る」見方、互いとの関わり方、協力の仕方、互いを敬う仕方は、何よりも優先されるキリストとの関係によって形づくられるべきです。私たちは互いに従い合い、自分の独立性と自己中心性を捨て、堕落の前にエデンの園で示されたような、親密な一体の関係を求めるべきです。もし、男性は平均すると女性より独立的で、そのため自分中心になりやすく、女性は平均すると男性より相互依存的で、そのため他者に心を向けやすいと仮定できるなら、ぜひとも私のような夫たちは、とりわけ教会に対するキリストの犠牲的な愛について思いめぐらすべきです。その愛によって、キリストの花嫁は輝くばかりに栄えるのです。

しかし、古代の文脈と私たちの文脈との隔たりを理解した今、私にはどうしても想像できません。パウロが平均的な現代の結婚――夫と妻の年齢が近く、同じように教育を受け、おそらく二人とも働きながら子育てをしようとしている結婚――のところにやって来て、その夫婦にこう言う姿をです。「よくパートナーとして協力していますね。その調子で続けてください！　ただ、夫が指導者となり、妻は夫に従属すべきだということは、強く求めておきたいのです。」パウロは、結婚についての創造の理想が、アダムとエバの最初の結婚のように、一体であり完全なパートナーシップであると教えているのに、どうしてそんなことができるでしょうか？

これは私の個人的な意見にすぎないのではありません。広く受け入れられている見解であり、実はキリスト教の多数派の見解です。教皇ヨハネ・パウロ二世は、すべてのカトリック信者を拘束する回勅Mulieris Dignitatemの中で、妻に対する夫の権威は「古い」ものの反映であり、それは「当時の慣習と宗教的伝統に深く根ざした」考え方を物語っている、と述べています。「新しい」もの、「福音による革新」とは、「従うことが一方的ではなく相互的である」ということなのです。[377]世界で最も教理的に融通のきかない教派の一つが、自らの教理にこのような改善を加えることができるのなら、残りの私たちもそれに注目すべきです。

もちろん、今でも男性が支配している文化が世界にはあります。そうした文化にとっては、パウロの教えはぴったり当てはまるかもしれません。家父長制の社会で

377. John Paul II, Mulieris Dignitatem, p. 88.

は、夫たちはたいてい、女性よりはるかに大きな社会的、知的、政治的、経済的な力を持っています。それならば、夫はその力を、自分を犠牲にして妻の益のために用いるべきです。キリストがご自分のまさる力を教会のために用いておられるようにです。しかし、家父長制の文化の中で何千人もの夫たちが十分に長い間、本当にこのように生きるなら、やがて女性や妻たちは自分自身の社会的・知的な力を高め、夫の対等なパートナーとなる備えがいっそう整っていくでしょう。私の探究がたどり着いたのは、まさにそこです。見解4――贖われたpaterfamilias（家長）としての夫――を、結婚が階層的である文化に適用するなら、その文化は最終的に変えられ、見解3のような結婚へと力づけられていくでしょう。長い間キリスト教が浸透してきた国々では、すでにそうなってきたようにです。

とはいえ、旧約聖書と新約聖書の両方で、私たちがふだん研究のために選ぶ結婚についての聖書箇所の幅を広げてさえいれば、神が相互主義の結婚を好まれることは、初めからずっと十分に明らかだったはずです。

夫に道を示す妻たち

旧約聖書に出てくるすべての結婚は家父長制の環境の中で営まれていることを心に留めるなら、妻は夫に従属するものだというのが文化的な前提だったと考えて間違いありません。ですから驚くべきことに、「アダムがエバを支配する」という神の予告を別にすれば、妻たちに夫に従うよう命じる戒めは、ただの一つもありません。モーセの律法にも、預言者たちの口にもないのです。

実際、旧約聖書の夫婦の力関係をのぞかせる小さなスナップ写真をいくつか見てみると、妻が夫に道を示している例に何度も何度も出会います！　私自身の人生の多くの岐路で、私は神に知恵を求めて祈り、神が何を語られるかと、天に向かって耳を澄ませてきました。そして何度も、神がかつてアブラハムに語られたまさにその言葉を、私に語られるのを聞いてきました。「〔あなたの妻が〕あなたに言うことはみな、聞き入れなさい。」[378]なんとすばらしい助言でしょう。私にはよくわかります。妻はとても多くの場合、夫より先に神の声を聞くのです。

サムソンの母に起こったのも、まさにそのことではないでしょうか？　男性が人の妻に直接近づくのはふさわしくないとされた文化の中で、御使いが男の姿をとって、不妊の女性に、御霊に油注がれた子が生まれると告げます。その後、妻は夫を

378. 創世記21章12節

呼びに行きます。「女は急いで走って行き、夫に告げた。『ご覧ください。先日私のところに来られたあの方が、ここにおられます。』」次の言葉に注意してください。「〔彼は〕立ち上がって、妻の後について行き」。見知らぬ者が家父長制の規範を破ったことを、あまり快く思わなかったのかもしれません。彼は「あなたが私の妻に話された方ですか」と尋ねます。[379]実際、この物語は、さらにずっと重大な誕生を指し示す道標となっています。千年以上後、御使いはまずマリアに近づいて同じことを告げ、[380]夫には後になってから知らせるのです。[381]どちらの場面でも、ある事柄について最初に神の声を聞くのは妻であり、夫は後になってやっと追いつきます（妻の速さに、です）。もし何らかの「創造の秩序」があるとしても（そんなものはありませんが）、神はそれにまったく気づいておられないようです。

さらに、預言者エリシャを自分の家に迎えようと率先して動いた、シュネムの女がいます。彼女は夫にこう言います。「いつも私たちのところに立ち寄られるあの方は、神の聖なる方だと私は知っています。屋上に小さな部屋を作って、あの方のために寝台と机と椅子と燭台を置きましょう。そうすれば、あの方が私たちのところに来られるときはいつでも、そこにお泊まりいただけます。」[382]ここでもまた、夫はすぐに妻の言うとおりにします。この件について、妻の霊的な識別力を本能的に信頼しているのです。

ここで手短に一つ指摘しておきましょう。「夫は妻のkephaleである」という言葉を「夫は家庭の霊的な指導者であるべきだ」という意味にとる適用は、たいへん人気があります。しかし残念ながら、その考えは聖書によって定められたものではないとお伝えしなければなりません。男性が（妻ではなく）祈りを始めるべきだとか、家族の礼拝を呼びかけるべきだとか、夫婦や家族がどの教会に行くかを選ぶべきだとかいったことについて、かつて取ったメモは捨てる必要があるかもしれません。夫や父親が家族の霊的な健やかさのために取りうる大切な主導性を少しも損なうことなく、それでもなお、より良い考え方は、夫も妻も二人ともできる限りのことをするということです。チームとしても一人ひとりとしても、神を求め、教会を選んでそこに根を下ろし、家族のほかの人たちの霊的な成長を追い求めるのです。夫が家族のほかの者たちの牧師となるべきだと言う教えに対して、私は、夫と妻が家族の牧会的な指導チームとなるべきだとお勧めします。

379. 士師記13章10–11節
380. ルカの福音書1章26–38節
381. マタイの福音書1章18–21節
382. 列王記第二4章8–10節

家父長制の規範に逆らっているように見える（男性中心の文化という現実の中をうまく渡り歩いてはいますが）もう一人の妻が、アビガイルです。彼女の夫ナバルは非常に裕福で、「頑迷で、行状が悪かった」のです。[383]逃亡中で飢えていたダビデとその兵たちが食べ物を求めると、ナバルは冷たくあざ笑い、その願いを退けます。ひどく侮辱されたと感じて怒ったダビデは、ナバルとその所有地にいるすべての男たちを殺そうと計画します。とてもキリストに似た反応とは言えません。

アビガイルは夫に聞き従わず、ダビデの殺意についての知らせを夫に伝えないことによって、流血を食い止めます。彼女はろばに食べ物を積んでダビデのもとへ出て行き、ダビデの傷ついた自尊心に巧みに合わせてこう言います。「わが君、どうか、あのよこしまな者ナバルのことなど気にかけないでください。あの人はその名のとおりの者です。その名は愚か者という意味なのです。」[384]夫がどれほどひどい人間であるかをはっきり言う一方で、彼女はダビデの中にある最善のものに呼びかけ、あわれみを乞います。ダビデは武器を収めることにします。

アビガイルが家に帰り、自分がナバルの決定を覆したこと、そしてダビデがナバルの命を助けたことを告げると、ナバルの心は凍りつき、十日後に彼は死にます。ダビデが彼女を三人目の妻として迎えるために人を遣わすと、彼女はひれ伏してこう言います。「私はあなたのはしためです。あなたにお仕えし、わが君の家来たちの足を洗う用意ができております。」

とんでもない話ですが、注目してください。この物語のどこにも、彼女がナバルとダビデの両方を「わが君」と呼んだことを、神が是認しているしるしはありません。二人の男はたじろぎもせずにその呼び名を受け入れますが、ここにいるのが、家父長制に順応することによってそれを生き延びるすべを身につけた女性であることは明らかです。時にはそれは、自分の「男性の権威」に聞き従わないことさえ意味します。そしてこの箇所は、そのことを称賛しているのです。むしろ私たちがここに見るのは、もっと公正な別の文化の中でなら、おそらく指導者として大いに活躍したであろう女性の例です。ダビデを彼女に引きつけたのは、その美しさだけではありません。戦略的な能力と、人の心をつかむ外交の手腕によって、無用な流血をすばやく回避したことも、ダビデを引きつけたのです。

要するに、旧約聖書の物語は、夫が妻に対して権威を持つことを、神が好まれる規範として支持してはいないということです。

383. サムエル記第一25章3節
384. サムエル記第一25章25節

コリント人への手紙第一7章に見る相互主義の結婚

雅歌は、ある夫婦の愛情に満ちた、ロマンチックで性的な結びつきの内側の力学を探っている、聖書の中で最も長い部分です。そこには、男性が権威を持ち女性が従うというしるしは、まったくありません。ロマンスと性において、二人とも求め、二人とも身をゆだねます。二人とも与え、二人とも受け取ります。この詩の書は、堕落する前のアダムとエバが対等な者として裸で互いを喜んでいた姿を思い起こさせるだけではありません。新約聖書にも、これと並ぶものがあるのです。

コリント人への手紙第一7章は、群を抜いて結婚についてパウロが語った最も長い箇所です。それにもかかわらず、キリスト者の結婚における性、奉仕、別居についての指導の中で、パウロは、キリスト者の結婚が対等な者同士の相互的で愛に満ちたパートナーシップ以外の何かであることを、ほんのわずかでもほのめかしてはいません。実際、これは聖書の中で、結婚における権威の問題をはっきり扱っている唯一の章であり、ちなみにその権威は妻と夫の両方に与えられているのです。

神が私たちの結婚に思い描いておられる、相互的な愛と相互の権威を強調している聖句[385]を、いくつか抜き出してみましょう。

男はそれぞれ自分の妻と、女はそれぞれ自分の夫と、性的な関係を持ちなさい（2節）。

夫は妻に対して夫婦としての務めを果たしなさい。同じように、妻も夫に対してその務めを果たしなさい（3節）。

妻は自分のからだに対する権威を持たず、それを夫にゆだねます。同じように、夫も自分のからだに対する権威を持たず、それを妻にゆだねます（4節）。

互いに相手を拒んではいけません。ただし、合意の上でしばらくの間そうするというのであれば、話は別です（5節）。

妻は夫と別れてはいけません。……また、夫は妻を離縁してはいけません（10–11節）。

ある兄弟に信者でない妻がいて、その妻が彼と一緒に暮らすことを望んでいるなら、彼は妻を離縁してはいけません。また、ある女の人に信者でない夫がいて、そ

385. NRSVから訳しています。

の夫が彼女と一緒に暮らすことを望んでいるなら、彼女は夫を離縁してはいけません（12–13節）。

信者でない夫は妻によって聖なるものとされており、信者でない妻も信者である夫によって聖なるものとされているのです（14節）。

信者でないほうが離れて行くなら、離れて行かせなさい。そのような場合には、兄弟も姉妹も縛られることはありません（15節）。

妻よ、あなたが夫を救えるかどうか、どうしてわかるのですか。また、夫よ、あなたが妻を救えるかどうか、どうしてわかるのですか（16節）。

しかし、たとえ〔男の〕あなたが結婚しても、罪を犯すわけではありません。また、未婚の女性が結婚しても、罪を犯すわけではありません（28節）。

結婚していない男は主のことに心を配ります。……結婚していない女や未婚の女性も、主のことに心を配ります（32節、34節b）。

結婚した男は世のことに心を配ります。……結婚した女も世のことに心を配ります（33–34節a）。

では、コリント人への手紙第一7章から、結婚についての神のご計画について何を学ぶでしょうか？ 「パウロの答えは……1世紀の聞き手には並外れたものに聞こえたに違いありません」と、リチャード・ヘイズは言います。「夫婦は、一方が他方の上に立つ階層的な関係に置かれているのでもなければ、それぞれが自分の好きなことをする自律した単位として切り離されているのでもありません。むしろ結婚の関係は互いに従い合う関係であり、それぞれのパートナーが相手に〔属している〕のです。」[386]

私が初めて人々に配偶者の選び方を教えたとき、私は、神に選んでいただこうと勧めました。ところがある日、コリント人への手紙第一7章を読んでいて、ふと気づきました。この主題について新約聖書にあるただ一つの明確な教えを、たった今読んだのだと。「彼女は自分の望む人と結婚する自由がありますが、その人は主に属する者でなければなりません」（39節）。教訓は何でしょうか？ 私たちが選ぶのです。しかも賢く選ぶのです。さて、今コリント人への手紙第一7章を読み返していて、私はまた似たような「なるほど」という瞬間を経験しました。夫婦が重要な決定（たとえば、いつ性的な関係を持つか、いつ一緒に神を求めるか）をどのように下すべきかについて語っている、新約聖書全体でただ一つの節は、「互いに相手

386. Richard Hays, First Corinthians, p. 116.

を拒んではいけません。ただし、合意の上で……」（5節）なのです。教訓は何でしょうか？　夫婦が対等なパートナーとして共に決めるよう心を配るなら、夫が命令したり、行き詰まりで決定票を投じたりする必要はありません。

結論を述べます。コリント人への手紙第一7章は、夫が妻に対して持つ権威についてはっきり語っている唯一の章です。しかし、見てください。この章は、妻が夫に対して持つ権威についても語っているのです。この章は結婚において、男女の平等と、互いに従うことと、意思決定の基盤としての相互の合意とを推し進めています。

聖霊によって書かれた聖書の統一性を考えれば、コリント人への手紙第一7章は、エペソ人への手紙5章の解釈を導くことができ、また導くべきです。ですから奇妙なのは、主要な補完主義の著者たちの大半が、コリント人への手紙第一7章について、自分たちの解釈との実際の衝突を避けるような仕方で簡単に触れるだけか、[387]あるいは――こちらのほうが多いのですが――単にそれを無視しているということです。[388]

では、どの見解を選ぶのか？

387. たとえば、グルーデムの主著“Evangelical Feminism and Biblical Truth”は、平等主義者の議論を論駁するために書かれました。その議論の一つが、コリント人への手紙第一7章は対等な結婚を教えているというものです。ところが、800ページのうちわずか1ページを占めるにすぎない非常に短い節（6.7）で、彼はただ、コリント人への手紙第一7章は夫の権威ある指導を規制しているにすぎないと主張するだけです。しかし、この章はエペソ人への手紙5章の階層的な解釈の適用を規制するだけでなく、エペソ人への手紙5章の解釈そのものを導くべきだという主張に対しては、何一つ反論を示していません。コリント人への手紙第一7章のように、夫と妻の両方が互いに対して等しい権威を持っていることをあいまいさなく述べている箇所――これはすべての解釈者が同意している事実です――は、一部の解釈者だけが夫に一方的な権威を与えていると主張する箇所（エペソ人への手紙5章）の解釈において、一定の重みを持つべきです。

388. たとえば、アンドリュー・バートレットが“Men and Women in Christ”（p.18-19）で指摘しているように、フィリップ・ペインの2009年の著書“Man and Woman: One in Christ”に対して、トム・シュライナーは詳細な概要と反論の試みを書いています。ペインはコリント人への手紙第一7章に一章を割いているのに、奇妙なことに、シュライナーはその章にまったく触れていません。同様に、クレア・スミス（Claire Smith）は2012年に“God’s Good Design: What the Bible Really Says about Men and Women”を書きました。彼女の目的は、結婚の最良のモデルを「決定すべき」「鍵となる聖書箇所」を扱うことです。この本はドン・カーソンらから熱烈に推薦されており、その多くがこの本の包括性を称賛しています。ところが不可解なことに、結婚を扱った彼女の五つの章のどれも、コリント人への手紙第一7章を取り上げていません。私は、これらの著者に何らかの不誠実があると言っているのではありません。そこにあるのは大きな盲点と、「確証バイアス」の証拠だけです。確証バイアスとは、人々が知らず知らずのうちに、ある主題について聖書が語っていることをすべて見いだすためではなく、自分が前から持っている見解を支持するものを見つけるためだけに、聖書に向かうことです。

エペソ人への手紙5章をどう解釈すべきかについてのこの章を締めくくるにあたり、四つの見解のうちどれが私たちの結婚と教会において優勢となるべきかを問いたいと思います。

私は、見解1（決定者としての夫）を退け、それを正体どおりに呼ぶことを提案します。すなわち、抑圧的な神学です。

見解2――（行き詰まった時の）決定票としての夫――は、長年にわたって、ジュリーと私の結婚にとって中間の停留所の役割を果たしてくれました。そのことに私は感謝しています。しかし、それに伴う問題を分析し、見解3と見解4のほうが釈義的にすぐれていることを踏まえ、結婚について聖書をもっと幅広く読むなら、私たちはおそらくこの見解も捨てるべきでしょう。

では、残る二つの見解のうち、どちらを選ぶのでしょうか？

もしかすると、選ぶ必要はないのかもしれません。

見解3（対等な相手に仕える者としての夫）は相互主義の結婚を肯定しています。一方、見解4――贖われたpaterfamilias（家長）としての夫――は、そのような結婚に矛盾することを何も言っていません（ただし、今なお強い家父長制の文化の中にある結婚や教会に対しては、指針を与えてくれます）。

言い換えれば、見解4は、この箇所を最初の読者たちが理解したとおりに私たちが理解するのに、最も役立つかもしれません。しかし、とりわけより平等主義の文化の中に生きている私たちにとって、エペソ人への手紙5章を適用する正しい方法は、見解3なのです。

ですから、結婚した夫婦に対する神の知恵とはこうです。夫婦は、エデンのロマンスに示されたような「一体」の結びつきを認めるべきです。また、互いに完全に身をゆだね合い、仕え合うことによって、そして――決定を下す際には――互いへの配慮と合意によって、この一致を強めるべきです。この道を歩むとき、二つのたとえが私たちを励ましてくれるでしょう。ご自分の教会に対するキリストの犠牲的な愛と、一人ひとりが自分のからだに対して抱く気づかいです。

本当の男女の平等を神が望んでおられることについて、なお残る疑いをどうすればよいでしょうか？　結婚において（そして教会と社会において）家父長制の前提を捨てるべき、おそらく最も重要な理由を、次に取り上げます。



9
人に歩み寄られる神

「〔私たち夫は〕、かつては周囲の文化によって与えられていたものの、今ではほとんど持たなくなった妻に対する権威に、なおしがみつこうとするのでしょうか。それとも〔私たちは〕、権力も、権力を持っているふりも喜んで手放し、〔自分の〕妻を対等な者として扱い、……いっそう親密な夫婦関係を刈り取るのでしょうか。」ピーター・デイヴィッズ（Peter Davids）[389]

ゲイツ財団（Gates Foundation）は最近、大規模な国際調査に資金を提供しました。その調査によって、メディア報道において女性の扱いが著しく少ないことが明らかになりました。「たとえば、2019年に英国で分析されたオンラインのニュース記事のうち、女性が発言者として引用されていたのはわずか29%でした。インドでは、わずか14%でした。」[390]社会における女性の地位の向上ではすばらしい進歩がありましたが、それでもなお私たちは、男性を見て、その声を聞くのに比べて、女性を「見て」、その声を「聞く」ことには、はるかに消極的なのです。

まして、家父長制がまったく問われることのなかった過去の数千年間には、社会の状況が、女性が公的な役割に進み出る力をどれほど損なっていたことでしょうか？考古学者イアン・モリス（Ian Morris）は、古代アテネでは女性が存在していたという証拠すらほとんどない理由を説明しています。「女性と奴隷は目に見えないままです」。その理由は、アテネの「隅々まで行き渡った男性市民の文化」にあり、そこでは男性が「女性を屈服させていただけでなく、女性が暮らす空間をも支配していた」のです。そのため女性は、当時の文化の中でも、今日の考古学的な発見においても、実質的に目に見えない存在になっています。[391]

389. “Discovering Biblical Equality”, p. 238からの引用です。
390. 出典：www.gates.ly/3bMqqQZ
391. 出典：Sandra Joshel and Sheila Murnaghan, Women and Slaves in Greco-Roman Culture, p. 217–20. Barr, “The Making of Biblical Womanhood” (p. 226)に引用されています。

生まれたばかりの教会が広がっていった、より広いギリシア・ローマ世界でも、女性にとって状況はあまり良くありませんでした。まれな例外はいくつかありましたが、[392]名誉ある女性は公的な指導的役割を目指しませんでした。女性の名誉は、家庭での家事と子育ての役割の中にありました。ギリシアの劇では、最もよく登場する女性の登場人物は、たいてい奴隷の少女や遊女でした。これらの劇は「屋外」の物語を語っていたからです。立派な都市の女性や未婚の若い娘たちは、家にとどまり、人目につかないようにしていることが期待されていました。ですから、そもそも「指導者タイプ」の女性がほとんど見つからなかったのも、驚くには当たりません。結局のところ、人が指導の賜物を持っていることを証明するには、ある程度の教育を受け、公の生活の中で役割を果たすことを許されなければならないのです。女性が隠されていたため、神から与えられた教える賜物や指導の賜物を持つ女性のうち、それらの賜物が公の場で認められ、育てられ、生かされる機会を得た人はごくわずかでした。[393]

結局のところ、新約聖書の中で男性指導者の妻たちがこれほどまれにしか言及されないのはなぜでしょうか？　キリスト者の夫婦が平等やパートナーシップや共有された地位を享受するという現代的な強調は、キリスト教会の初期の時代にはほとんど存在しませんでした。その時代には――教会の中においてさえ――家事と子育ての役割は妻に割り当てられていたのです。

同様に、聖書の中で、男性に比べて女性の登場人物がこれほど少ないのはなぜかと問うこともできます。今日、聖書の神的霊感を否定する批評家の中には、これはこの書物が単に家父長制文化の産物にすぎないことの証拠だと論じる人たちがいます。補完主義者の中には、これは男性だけが果たすべき、神の国における独特で目立つ役割を、神が強調しておられる方法なのだと言う人たちもいます。しかし、聖書の神的な権威と、聖書が扱っている多くの歴史的状況の両方を理解するためのより良い方法は、こう言うことです。神は、特定の状況にある人々に譲歩して、ご自身の啓示を彼らに合わせられたのであって、必ずしもその状況そのものを理想化されたわけではない。この決定的に重要な解釈の原則を見落とすと、私たちは、聖書の時代にさまざまな場所で女性が男性に従属していたという観察から、女性は神の

392. Susan Hylen, Women in the World of the New Testamentを参照してください。
393. 社会の状況が、どのような人が指導者になれるかをいかに制限するかを理解するために、裕福な地域にある、主に高等教育を受けた人々から成る現代の教会を思い浮かべてみてください。次に、教育を受けていないブルーカラーの労働者がその教会で表に立つ指導者として仕えることが、どれほどありそうにないかを考えてみてください。理由は単純で、その特定の人々にとって、その人の「ついて行きたいと思わせる力」（したがって指導力）が疑問視されるからです。聖書の中に奴隷が長老になった例が一つもないのも、このためです。

普遍的なご計画の一部として、あらゆる場所、あらゆる時代において男性に従うべきだという考えへと、単純に飛躍してしまいます。

神の譲歩を理解する

歴史の終わりに、神はついに理想の社会を治められます。しかし堕落以来、神は、かつてそうされたように壊れた社会をすべて裁きの洪水で押し流すのではなく、壊れた社会の中で贖いのわざをなすことを選んでこられました。今のところ、神の贖いは次のように降り注いでいます。「聖霊の生ける水は〔既存の〕社会の地形の上に注がれ、出会う起伏に合わせて、蛇行する川のようにご自身を形づくられます。しかしそうしながらも、抗いがたい水の流れのように地形を造り変え、ついには曲がった道をまっすぐにされるのです。」[394]

新約聖書の著者たちが周囲の文化の家父長制に会釈しているように見える一握りの箇所は、実は神の譲歩の例です。神は手元にあるもので働かれ、使徒たちもその模範に従います。彼らは、まだ岩や雑草だらけの土に、神の国の種を植えるのです。今のところ、私たちは二つの時代が重なり合う中に生きています。神の国は、堕落した社会制度が行き渡った堕落した世界のただ中に、すでに来ています。いつの日か神の国はそれらの制度を完全に覆い隠しますが、今のところは、それらの中に根を下ろし、そこから何か新しいものを花開かせているのです。

補完主義者のジョン・マッカーサー（John MacArthur）は、聖書を書いたのが男性だけであることは、神が男性だけに神のことばを教えてほしいと願っておられる証拠だと論じます。彼は明らかに、プリスキラが（アキラをかたわらに）ヘブル人への手紙を書いた可能性を論じる学者たちを無視しています。しかし何よりも、彼は、古代世界では文字を書く訓練を受けた女性はほとんどいなかったことに気づいていません。聖書の書物を書いたのが男性だけだった（あるいは、プリスキラが筆をとったとすれば、ほとんどが男性だった）という事実は、神が現実にあるもので働かれることの証しです。それと同時に神は、すべての男性と女性が読み書きできるようになる、最終的なshalom（平和）をもたらすと約束しておられるのです。

394. John Stackhouse, Finally Feminist, p. 39

妻が従うことについて、さらに

女性にとっての古代の社会状況は、今よりはるかに悪いものでした（私たちにはまだ進むべき道がありますが）。権力と公的な役割は女性ではなく男性に与えられ、人々は女性ではなく男性の言うことやすることに注意を払い、女性は小さな家庭の領域に閉じ込められ、そのために奴隷や子どもと同じように目に見えない存在とされていたのです。

自分のために立ち上がる女性は、必ずその代償を払わされました。たとえばエステル記1章で、クセルクセス王は王国のエリートの男性たちのために宴会を開き、同じ時に妻のワシュティも、女性たちのための宴に友人たちを招いています。祝宴の半ばで、「ぶどう酒で心が陽気になった」クセルクセスは、美しい妻に、自分の宴を離れて「その美しさを民と首長たちに見せる」よう命じます。彼女は「容姿が美しかった」からです。ワシュティが来ることを拒むと、妻の不従順によって公の場で恥をかかされた王は激怒し、賢者たちに助言を求めます。彼らは、ワシュティを王妃の地位から退け、二度と夫の前に出られないようにすることに決めます。彼らがそうする理由は、国中のほかの妻たちが、夫の命令に従わないという彼女の例にならう可能性を、ことごとく摘み取るためです。目的は、「身分の低い者から高い者に至るまで、すべての女たちが自分の夫を敬うようになる」ことでした。

この物語は、ほとんどすべての古代文化において――この場合はイスラエルではなくペルシアですが――男性が公的な役割で指導し、女性は夫に従属すべきだという前提があったことを示しています。こうして聖書そのものが、家父長制は堕落の産物であって、イスラエルの神が特別に創造されたものではないことを示しているのです。

使徒たちも、ローマ帝国の各地で福音を宣べ伝え、教会を開拓する中で、同じように男性が支配する世界に身を置いていました。エペソ人への手紙5章についてはすでに検討しましたが、その箇所以外でも、1世紀の教会のキリスト者の妻たちに対する使徒たちの勧めは一致しています。パウロはコロサイの人々に「妻たちよ、夫に従いなさい……」と書き、[395]テトスには「……若い女性たちに……夫に従うように……教えなさい」と書いています。[396]ペテロも同じことを言っています。「妻

395. コロサイ人への手紙3章18節
396. テトスへの手紙2章5節

たちよ……自分の夫に従いなさい……」[397]聖書を権威あるものとして受け止めていると言う人なら誰にとっても、これは一読したところ、完全に決定的なものに思えます。私たちは、すべての結婚に対する神の理想は妻が夫に従うことだと思い込むかもしれません。しかし、この章の残りの部分で私はその結論に異議を唱え、この誤った思い込みが、これらの聖書箇所の表面的で誤った読み方を必要とすることを示します。

コロサイ人への手紙のパウロの言葉、「妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。夫たちよ。妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはいけません」を、どう扱えばよいのでしょうか？　私は、これらの節の解釈から、エペソ人への手紙5章で到達した結論と異なる結論を引き出すべきではないと提案します。学者たちの一致した見解では、コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙は同じ時期に書かれており、両方の手紙で重複する重要な内容については「切り貼り」のような手法さえ見られます。導入部分の節は、両方の箇所でほとんど同じです。どちらも次の語句を同じ順序で用いています。「互いに」「詩」「賛美」「霊の歌」「心から感謝して」「……の名によって」「主」「イエス」「キリスト」「父なる神」。違いは、わずか二節のコロサイ人への手紙の箇所が、十三節に及ぶエペソ人への手紙の長い箇所を切り詰めた形になっていることです。エペソ人への手紙5章は、コロサイ人への手紙の最小限の内容を敷衍しており、そのようにしてそれに光を当てているのです。

では、テトスへの手紙2章3–5節とペテロの手紙第一3章1節の、残る二つの箇所はどうでしょうか？　これらの箇所でパウロとペテロが、人類の歴史全体を通じてすべての妻に夫に従うよう普遍的な命令を与えているということを疑う、十分な理由

397. ペテロの手紙第一3章1節

があります。[398]それは、アリストテレスの家庭訓に従って暮らす1世紀の地中海世界の人々への牧会的な助言であり、それゆえ、創造の設計によってではなく、理解できる評判への配慮によって動機づけられているのです。説明させてください。

398. 本書が長くなりすぎないよう、ペテロの手紙第一3章1–7節を詳しく解き明かすことはしないことにしました。しかし、この課題については、アンドリュー・バートレットの著書“Men and Women in Christ”の第6章をお勧めします。その章の題は“Submission and Honour: 1 Peter”です。バートレットは、私の見るところ説得力をもって、ペテロが本質的に、エペソ人への手紙5章のパウロと同じ道をたどり、互いに従うことについての教えによって、文化の階層的な秩序を内側から覆していることを示しています。パウロと同様に、ペテロも3章1–6節で、文化的に期待されていた妻の従う役割を覆すことも、普遍的に是認することもせず、福音による新しい動機によってそれを修正しています。キリスト者でない夫への恐れではなく、神への望みと、夫をキリストに勝ち取ろうとする試みです。またパウロと同様に、ペテロも、文化的に期待されていたキリスト者の夫の権威ある役割を理想化することも非難することもせず、3章7節で三つの点でそれを強く修正しています。1）夫は妻に対して、前に述べられたのと「同じように」ふるまうべきです（これは、多くの補完主義の学者たちが見落としているように思われる決定的な語句です）。前に述べられたのは、信者が神と王に対して（2:13）、奴隷が主人に対して（2:18–25）、キリストがご自分を処刑する者たちに対して（2:21）、そして妻が夫に対して――創世記18章でサラがアブラハムに対してそうしたことも含めて――（3:1–6）ふるまう仕方です。つまり、謙遜に従う仕方でということです。2）夫は、妻が自分たちほど強くないことに配慮する仕方で、妻と共に暮らすべきです。3）夫は妻を敬うべきです。妻は（ギリシア・ローマ文化とは反対に）従属的な立場にあるのではありません。救いを共に受け継ぐ対等な相続人だからです。ここでの「敬う」は、すべての信者がカエサルに対して示すべき従う姿勢を描写するために、手紙の前のほうで使われているのと同じ語です。2章13節（権威に「従う」）と2章17節（「王を敬う」）を比べてください。言い換えれば、ペテロは、まさにその言葉を使ってはいないものの、夫たちに、妻に対して従うこと（つまり、謙遜で、相手を敬う奉仕）でお返しするよう告げているのです。このように理解すると、ペテロはエペソ人への手紙5章のパウロと同様に、結婚における従うことの意味を、単に他者の権威に応じることから、謙遜に仕えて相手を喜ばせることへの献身へと修正しているように思われます。権威に応じることは一方向にしか流れません。しかしエペソ人への手紙5章とペテロの手紙第一3章が示しているように、またどのようなより広い社会構造の中に置かれていようとも、キリスト者の結婚は両方向に流れる謙遜な奉仕を表すべきなのです。また、ペテロが妻の従う理由として、夫が神の設計によって妻に対して一方的な権威を持っているという事実を挙げていないことにも注目してください。もしペテロがそう信じていたなら、ここはそれに触れる絶好の場所だったでしょう。しかし彼はそうしていません。実際、聖書のどこにも、夫に妻に対して一方的な権威を行使するよう指示している聖句はないのです。

家庭訓

「妻たちよ、従いなさい」という節を文脈から抜き出すとき、私たちはそれらを証拠聖句（proof-texts）として使ってしまう危険を冒しています。文学的な文脈、つまりこれらの節や同様の節が見いだされる、より大きな箇所を見てみましょう：

	妻と夫/ 女性と男性	子どもと親	奴隷と主人
エペソ人への手紙	5:21–33	6:1–4	6:5–9
コロサイ人への手紙	3:18–19	3:20–21	3:22–4:1
ペテロの手紙第一	3:1–7	言及なし	2:18–25
テトスへの手紙	2:1–8	言及なし	2:9–10
テモテへの手紙第一	5:1–16	言及なし	6:1–3

文学的な文脈を分析すると、何に気づくでしょうか？　第一に、妻が従うことが言及されるときは毎回、それが「家庭訓（household code）」と呼ばれるものの一部になっていることです。そこでは、夫、妻、子ども、奴隷から成る家庭内の関係が扱われています。アリストテレスの以前の教えに従い、ローマ法によって、家庭は年長の男性の支配のもとで階層化されることになっていました。成人男性がいない場合には、年長の女性がその役割を担いました。古代の家庭訓は、家の長、次に妻、次に子どもと奴隷という、上から下への順序で述べられる階層に従っていました。言い換えれば、パウロとペテロは、キリスト教の歴史のこれから先ずっと、すべての夫婦に適用されるべき、何の文脈にも縛られない知恵をまくし立てているのではありません。彼らが語りかけているのは、非常に特定の文脈、すなわちローマ社会によって秩序づけられた、平均的な古代の家庭における福音の実践なのです。

第二に、これらの箇所のどれにおいても、夫が指導するよう命じられてはいません。妻はただ従うように言われているだけです。使徒たちは、男性の指導がすでに行われていることを前提としています。彼らが命令の中で試みているのは、男性の指導を和らげ、妻の低い地位に尊厳を与えることです。ペテロとパウロは女性たちに、夫の指導を単に我慢するのではなく、福音によって力を与えられた自発的なものとして、従うことを受け入れるよう指導しているのです。

第三に、すべての箇所において――そしてこれがこの章の議論において最も重要なことですが――妻が夫に従うようにという指示は、奴隷が主人に従うようにという

指示と並行しています。そのうち二つの箇所では、この並行関係が、子どもが親に聞き従うことにも当てはめられていますが、主人と奴隷とのつながりは毎回示されています。

奴隷制と家父長制の並行関係については後ほどまた取り上げますが、今私が指摘したいのは、パウロとペテロが奴隷制も、結婚における女性の従属も理想化してはいないということです。むしろ彼らは、すべての良い霊的指導者がそうすべきように、自分たちが関わっている教会が時に理想からほど遠い状況の中で最善を尽くすよう助けているのです。神も創世記16章で、これに似たことをなさっています。奴隷のハガルが、自分を虐待する女主人サラのもとから逃げ出したときです。ハガルを救い出し、安心させた後、神は「あなたの女主人のもとに帰り、彼女に従いなさい」と言われます。[399]私たちのうち誰が、神の彼女への指示を、彼女にとっての神の最高最善の表れだったと結論づけるでしょうか？　いいえ、彼女に対する神の親としての助言は、理想からほど遠い状況の中で彼女が最善を尽くせるよう助けるものです。どうやら、サラに従うほうが、荒野に逃げ込むよりも、彼女と子どもにとって良かったようです。

今日でも、自分が置かれた理想的でない状況の中で最善を尽くすほうがよい場合があります。たとえば、結婚したばかりの私の父は、南アフリカ軍での2年間の兵役に徴集されました。生まれたばかりの子どもと若い妻が家にいたので、父はこれが理想からほど遠いことを知っていましたが、どうすることもできませんでした。父にできたのは、悪い状況の中で最善を尽くすことだけでした。そうするか、刑務所に行くかのどちらかだったのです。時に牧師は、民主主義は聖書には出てこず、したがって必ずしも人間社会に対する神の永遠の理想ではないとしても、民主的な選挙で投票するよう会衆に勧めることがあるかもしれません。民主主義に反対して説教すれば、無用な反発を招くでしょう。同じことが、1世紀におけるアリストテレスの家庭訓についても言えます。[400]

評判への配慮

理想的でない状況の中で最善を尽くせるよう助けること以外に、ペテロとパウロは、なぜ妻や奴隷に、夫や主人に自発的に従うよう勧めているのでしょうか？　し

399. 創世記16章9節
400. それに、当時のアリストテレスの家庭訓や君主制の政治と同じように、民主主義はおそらく、社会がこれまでに見いだした最善の統治制度です。

かも夫や主人のほうも、妻や奴隷に優しく、敬意をもって接するよう指示されているのです。ほとんどの箇所に、説得力のある答えが見つかります。パウロとペテロは、生まれたばかりの教会の信頼性と伝道上の魅力を、見守る世界の目から守ることに心を配っているのです。しかもその世界では、たまたま、女性と奴隷がpaterfamiliasに聞き従うことがローマ法だったのです。

そのことを示す証拠が、聖書箇所の中にあります：

- ペテロは奴隷と妻に語る直前に、皇帝に従うよう勧め、こう付け加えています。「というのは、善を行うことによって、愚かな人々の無知な口を封じることは、神のみこころだからです。」[401]
- 妻たちに、ペテロはこう言います。「自分の夫に従いなさい。それは、たとえ夫の中にみことばを信じない人がいても、妻の無言のふるまいによって勝ち取られるためです。」[402]
- クレタの妻たちに、パウロはこう言います。「夫に従いなさい。それは、神のことばが悪く言われることのないためです。」[403]
- クレタの奴隷たちに、パウロはこう言います。「〔自分の〕主人に従いなさい。それは、あらゆる点で、〔あなたがたが〕私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。」[404]
- エペソの奴隷たちに、パウロはこう言います。「くびきの下にある奴隷はみな、自分の主人をあらゆる点で尊敬に値する人と考えなさい。それは、神の御名と私たちの教えが悪く言われないためです。」[405]
- テモテを通してエペソの教会に与えたすべての指示について、パウロはこう書いています。「これらの指示を人々に与えなさい。それは、彼らが非難されることのないためです。……〔また〕反対者に、そしる機会を与えないようにしなさい。」[406]

ここで何が起こっているのでしょうか？　とりわけペテロの手紙第一、そしてテトスへの手紙とテモテへの手紙第一も、苦難の中にある、しばしば迫害を受けていた小さな教会に宛てて書かれた手紙です。サタンの戦略は、これらの教会に否定的な注目を集めることです。エペソ人への手紙は「内輪」の文書で、部外者を気にする

401. ペテロの手紙第一2章15節
402. ペテロの手紙第一3章1–2節
403. テトスへの手紙2章5節
404. テトスへの手紙2章10節
405. テモテへの手紙第一6章1節
406. テモテへの手紙第一5章7節、14節

ことなく、全体がキリスト者に宛てられています（だから評判への配慮には触れていません）。それに対して、これら三つの手紙の動機は、教会が部外者との関わりの中でどのように見られるかという、その状況に特有の懸念に対処することにあります。シンシア・ウェストフォールはこう述べています：

それは名誉の文化であり、そこでは性別役割が重要な役割を果たしていました。もし女性が夫を支配することによって夫の「主人のようにふるまう」なら、それはローマ帝国の階層全体とパトロン制度に対する破壊的な挑戦と見なされました。そのような慣習への違反は深刻に受け止められ、教会の評判を破壊しかねませんでした。女性のふるまいは、初代教会やほかの分派的な宗教運動に対する論争的な攻撃の格好の材料だったのです。[407]

奴隷や妻が法律によってpaterfamiliasに従うよう強いられていた世界で、これらの妻や奴隷は、それ以上のことをするよう、つまり自発的に自分の生涯を夫や主人にゆだねるよう召されていました。ありがたいことに、paterfamiliasがキリスト者であれば、使徒たちは同じように彼にも、家の者たちを心から大切にするようにという独自の指示を与えていました。

要するに、ペテロとパウロが妻たちに夫に従うよう告げたとき、彼らは、ある種のキリスト教的理想として、すべての結婚にわたる性別による階層を絶対化していたのではありません。むしろ彼らは、理想的でない状況に譲歩していたのです。ペテロは手紙の冒頭で、未来の完成された社会に生きる信者たちにではなく、「諸州に散らされている寄留者たち」に宛てて書いています。私たちは外国人であり、神の国の本当の市民権を生きながらも、周りになじむために最善を尽くしているのです。古代の家庭の規範を理解すると、これらの箇所は、教会が文化的規範に表立って反逆することなく、それを内側から覆すよう導かれているものとして理解されるべきです。ペテロとパウロが不完全な制度の中を慎重に進んでいるのは、ローマの役人たちがキリスト者を投獄する口実を探していた中で、どのような挑戦も、これらの小さな教会に監視と迫害をもたらすことになったからです。興味深いことに、ペテロの手紙第一、テトスへの手紙、テモテへの手紙第一が書かれたとき、その著者であるペテロとパウロがローマの秩序を乱したとして処刑されるまで、ほんの数年しか残されていませんでした。

「奴隷たちよ、従いなさい……同じように、妻たちよ、従いなさい」

407. 出典：www.bit.ly/3EL7OgM

テトスは、妻たちが夫に従うように導くよう告げられ（2章3節）、そのすぐ後で、奴隷が主人に従うべきことも告げられます（2章9節）。

ペテロはパウロの順序を逆にしています。まず奴隷と主人の関係について語り、次に妻と夫の関係について語ります。ペテロの手紙第一2章18節で、奴隷たちは、善良で優しい主人だけでなく、不当な主人にも、心からの敬意をもって従うように言われています。そして3章1節では、妻たちも同じように夫に従うべきだと書かれています。ペテロの言葉づかいは、これらの指示の結びつきを強めています。「奴隷たちよ……従いなさい……妻たちよ、同じように、従いなさい……」。

さて、この章の主要な論点です。補完主義者は妻が従うことについての指示を時代を超えた普遍的なものと解釈しますが、奴隷制をすでに過去のものとした私たち現代人は、奴隷が従うことについてのそれと並行する指示が、結局のところ状況に応じたものだったことを理解しています！

誰も耳を傾けないとき歴史は繰り返すので、この洞察をある程度深く掘り下げてみたいと思います。

奴隷制廃止に対するキリスト者の抵抗

神の正義の感覚に突き動かされたキリスト者の奴隷制廃止論者たちは、1833年にまずイギリスで制度としての奴隷制に打ち勝ち、その後、時がたつにつれて、奴隷解放はほかの国々にも広がっていきました。ウィリアム・ウィルバーフォース（William Wilberforce）、ジョン・ウェスレー、ジョン・ニュートン（John Newton）、チャールズ・フィニー（Charles Finney）、グリムケ姉妹（the Grimké sisters）、ハリエット・ストウ（Harriet Stowe）、オラウダ・イクイアーノ（Olaudah Equiano）、フレデリック・ダグラス（Frederick Douglass）といった人々が、ついに奴隷制という制度を、輝かしく、またきしみを立てながら停止させたのです。現代のキリスト者は皆、社会変革のこうした英雄たちについて語るのが大好きです。

あまり知られていないこと、そしておそらく今ではキリスト者にとって恥ずべきことになっているために私たちがわざと忘れていることは、アメリカ合衆国で奴隷制廃止に最も強く反対したのが南部のキリスト者たちだったということです。実際、

今ではアメリカ最大の教派である南部バプテスト（Southern Baptists）は、まさにこの問題をめぐって、1845年に北部バプテストから分裂しさえしたのです。

18世紀まで、ほとんどのキリスト者は奴隷制が聖書的だと信じていました。そしてそれによって彼らが意味していたのは、神によって是認されているということでした。ロバート・ダブニー（Robert Dabney）やJ・H・ソーンウェル（J.H. Thornwell）のようなアメリカの聖書学者たちは、奴隷を所有し続けることを支持する、強力な聖書的弁護論を組み立てました。当時最も偉大な改革派神学者であったチャールズ・ホッジ（Charles Hodge）は、The Biblical Case for Slaveryという論文を書き、その中で次のように論じました：[408]

- 神が奴隷制を確立された。ノアの息子ハムを奴隷となるようにのろわれたことによって、[409]神ご自身が奴隷制を制定されました。
- 神は奴隷制を是認された。アブラハムも、ダビデも、ヨブも奴隷を所有していました。
- モーセの律法は奴隷制を支持していた。たとえば十戒の第四戒と第十戒では、神の民が奴隷を所有していることが前提とされています。またモーセの律法は、困窮したユダヤ人や戦争で打ち負かされた者たちを奴隷にすることを認めていました。[410]
- イエスは奴隷制に反対することを一度も語られなかった。イエスが非難されなかったことは、容認されたに違いありません。
- 使徒たちは奴隷に主人に従うよう命じた。彼らは奴隷制を非難することなく、規制しました。
- 使徒たちは、福音の積極的な側面を描くために奴隷制を用いた——「キリストの奴隷」である私たちは、自分を所有する主人に全面的に聞き従うべきです。

何人かの神学者がこうした多数派の神学者たちの考えを変えようとしましたが、失敗しました。たとえば、1845年に4日間にわたって行われた討論で、奴隷制廃止論者のジョナサン・ブランチャード（Jonathan Blanchard）は、「聖書の広範な原則」と「聖書の全体的な射程」を概観しました。彼にとって、「聖書の原則は正義と義である」ことは明らかでした。彼は、人はほとんど何でも支持するために聖句を引用することができ、その結果、聖書の包括的な真理に反する解釈に行き着いてしまう、と論じました。

408. この節については、ケビン・ジャイルズの“What the Bible Actually Teaches on Women”第8章に負っています。
409. 創世記9章20–27節
410. レビ記25章39–41節、25章44–46節

悲しいことに、南部の聖書を信じるキリスト者たちは、神が奴隷制を是認しておられると固く確信していたので、奴隷制を維持する権利を守るために、50万人以上の命を奪った南北戦争で武器を取ることさえいとわなかったのです！　南北戦争はアメリカ南部の人種差別に終止符を打ちはしませんでしたが、かつて奴隷を所有していたキリスト者たちを十分に辱め、最終的には彼らが奴隷制は間違っていたと認めるようにさせました。正義の感覚に推し進められた止めようのない文化の変化によって、彼らは聖書に立ち返り、そこで、ゆっくりと、しかし確実に、自分たちのやり方の誤りに気づいたのです。今では、事実上すべての聖書学者が、かつての「聖書的」議論がどれほど多かったとしても、正しく理解された聖書は奴隷制を支持しておらず、この慣行は罪深いものだと信じています。

奴隷制と家父長制の比較

では、奴隷制が家父長制――男性が指導すべきだという、文明の歴史と同じほど長く続いてきた前提――とどのように並行しているかを見極めましょう。補完主義の聖書解釈の方法をとるなら、同じような一連の議論がいかに簡単に生み出せるかを見てみましょう：[411]

- 神が男性の権威を確立された。堕落の前の園で、神はアダムをエバの指導者とされました。
- 神は男性の権威を是認された。神の民を導いたのは女族長ではなく族長でした。イスラエルの歴史を支配しているのは、女王ではなく王です。
- モーセの律法は男性の権威を支持していた。第十戒は、隣人の妻も、ろばも、ほかのどんな所有物も欲しがってはならないと言っています。祭司は女性ではなく男性でなければなりません。
- イエスは夫の権威に反対することを一度も語られなかった。イエスが非難されなかったことは、容認されたに違いありません。
- 使徒たちは妻に夫に従うよう命じた。彼らは家父長制を非難することなく、規制しました。
- 使徒たちは、福音の積極的な側面を描くために夫の権威を用いた。そこでは夫が主人であるキリストを描き出し、妻はキリストに従うように夫に従うべきだとされました。

411. この節については、ケビン・ジャイルズの“What the Bible Actually Teaches on Women”第8章に負っています。

聖書から奴隷制と家父長制を擁護しようとする議論の間にある、驚くべき、そして身の引き締まるような並行関係が見えるでしょうか？　世界最大の教会でさえ、今では「妻たちよ、従いなさい」という聖句と「奴隷たちよ、従いなさい」という聖句の並行関係を認めています。1988年、教皇ヨハネ・パウロ二世は、エペソ人への手紙6章のパウロの言葉を奴隷制の正当化に用いることは、エペソ人への手紙5章を結婚における女性の従属の正当化に用いることと何ら変わらないと、明快に論じました。[412]

リンゴとオレンジ？

補完主義の神学者たちは、この類似性にどう応答するのでしょうか？　ジョージ・ナイトは、「妻たちよ、従いなさい」という聖句と「奴隷たちよ、従いなさい」という聖句はまったく異なる、「リンゴとオレンジ」のように比べようのない別物だと言います。どうしてそう言えるのでしょうか？　指導的な補完主義の神学者サム・ストームズ（Sam Storms）が書いた記事[413]から抜粋してみます。彼は、妻が従うことを支持しつつも奴隷制を非難できると彼が考える理由を、六つ挙げています。彼の言葉を一つずつ、斜体とかぎかっこで示しながら引用し、それぞれに応答していきます：

第一に、*「聖書は、望ましくない関係を永続的な理想として容認することなく、規制することがあると知られています（マタイ19:8、Ⅰコリント6:1–8参照）。奴隷と主人が互いにどう関わるべきかについてのパウロの勧めは、その制度が良いものであることを前提としていません。」*

ですから、ストームズは、神が社会構造に進んで譲歩されることを理解しているのです。結構なことです！　ところが、それこそまさに、ギリシア・ローマ世界で文化的に義務づけられていた、妻が*paterfamilias*に従うことについて言うべき議論なのです。聖書はそれを容認することなく規制しているのです。

第二に、*「奴隷制という制度は創造に根ざしたものではなく、堕落から生じたゆがみです。一方、結婚と男性のかしら性は、堕落に先立つ本来の創造の秩序の一部です。」*

412. Pope John Paul II, Mulieris Dignitatem, p. 24. Barr, p. 110に引用されています。
413. 出典：www.bit.ly/2ZXK1LY

ここでストームズは、創世記2章と3章について誤った解釈をとり、そのうえで、創世記3章16節が創造ではなく堕落の直接の結果だと述べているものを、理想化しています。

第三に、「奴隷制の解消のための種は、いくつかの機会に蒔かれています。ピレモンへの手紙16節、エペソ人への手紙6章9節を見てください。しかし新約聖書のどこにも、夫と妻の関係について同じことが思い描かれていたことを示唆するものはありません。」

これは事実ではありません。ガラテヤ人への手紙3章28節、コリント人への手紙第一7章、そしてエペソ人への手紙5章の正しい読み方、特に互いに従うことについてのその教えは、まさに、結婚における男性優位の「解消のための種」なのです。

第四に、「もし奴隷制からの議論が、妻が夫に従うことを無効にするために使われるなら、それは子どもが親に従うことも無効にしてしまうのではないでしょうか。夫と妻、親と子、奴隷と主人の関係が、エペソ人への手紙5–6章でパウロによってすべて扱われていることに注目してください。」

ストームズは間違った言葉を使っています。子どもは「聞き従う（obey）」べきであり、妻と奴隷は「従う（submit）」べきなのです。このことは、妻と奴隷を独特な仕方で結びつけています。ストームズはまた、当時の文化における親と子が、親子についての節を、今日の西洋の私たちと同じように読んだと思い込んでいるようです。けれども、私たちのうち誰が、子どもは成人してからもずっと親に聞き従うべきだと主張するでしょうか？　1世紀の読者の耳には、エペソ人への手紙6章は、パウロが成人した子どもにさえ、親を単に敬うだけでなく親に聞き従うよう命じていると理解されたことでしょう。[414]

しかし、たとえ親子関係が当時も今と同じだったとしても（そうではありませんでしたが）、結婚における性別による階層は、子育てにおける世代による階層とはまったく異なります。幼い子どもたちは人生や知恵についてほとんど知らないので、依存し聞き従うことが彼らにとって最善である立場に置かれています。だからこそ、平等主義の文化においてさえ、それは守られているのです。教育を受けた二人の大人の結婚では、同じことは当てはまりません。子育ての目標は、子どもたちを

414.「子どもと親の関係は、重要な点で私たちの現代文化とは異なっていました。現代世界では、成人後のある時点で、成長した子どもは親から自立し、もはや親の権威の下にはないと考えられています。古代世界ではそうではありませんでした。古代世界では、成人した子どもは、成人してからも長い間、親の権威の下にとどまることが期待されていたのです。」（Howard Marshal, “Discovering Biblical Equality”, p. 188.）

依存と聞き従いの段階から先へと進ませ、最終的に自分自身の家庭の指導者として立たせることです。そうなれば、彼らは私たちと対等な者になります（パウロがエペソ人への手紙5章31節でほのめかしているように）。ですから、親が子どもを指導することを、生きている限りずっと永続させようとするのは間違いでしょう。それなら、なぜ配偶者に対してそうすることが正しいと、それほど確信できるのでしょうか？

第五に、「奴隷たちへのパウロの指示の中では、奴隷制に関して、永続的な道徳的命令や道徳的絶対が用いられていません。」

ここでストームズは第一の点を繰り返しています。しかし、ペテロの手紙第一2–3章の言葉を見てください。「奴隷たちよ、主人に従いなさい……妻たちよ、同じように、自分の夫に従いなさい。」いったい何を根拠に、彼は、前者は永続的な道徳的命令ではないのに後者はそうだと確信しているのでしょうか？　彼の立場には一貫性がありません。

第六に、「パウロは、奴隷が自由を得る可能性をはっきりと思い描き、是認しています（Ⅰコリント7:21）。妻と、妻が夫に従うことに関しては、パウロはこれに匹敵することを何も言っていません。」

それは、奴隷制とは違って、結婚は神の設計によって一体の関係だからです。[415]奴隷制からの自由が望ましかったのは、それが神の定められた労働という制度の贖いだからです。同様に、家父長制からの自由は、神の定められた結婚という制度の贖いです。パウロがエペソ人への手紙5章を書いた目的は、アリストテレスの家庭訓に対する革命のメッセージを送ることなく、あの文化の中で可能な限り対等な結婚を実現することでした。

要するに、そしてジョージ・ナイトとサム・ストームズの主張に反して、奴隷制と家父長制はまさにきわめてよく似ているのです。それらは決してリンゴとオレンジなどではなく、同じ堕落した木に実った腐った実なのです。奴隷制は、夫が妻を指導するという前提と、原理的によく似ています。その表れ方が慈悲深いものであれ

415. ジェーン・フッカー（Jane Hooker）はもう一つの議論を加えており、私もそれをストームズのリストに加えておきます。「聖書における奴隷制の慣行と、より最近のアメリカの奴隷制の慣行との間には、重大な違いがあります。」（出典：www.bit.ly/3GNFnk9）彼女が言おうとしているのは、ここ数世紀に奴隷制を終わらせようとした社会運動は理解できるが、1世紀の奴隷制はそれほどひどくはなかった、ということのようです。しかし1世紀にも、奴隷たちはひどい扱いを受けていました。また、この議論は要点を外しています。どちらの場合も、奴隷制とは経済的な目的のために人を所有することでした。奴隷制の廃止は、奴隷へのひどい扱いと闘っただけでなく、慈悲深い形で行われる奴隷制とも闘ったのです。

残忍なものであれ、どちらの慣行も堕落した世界の結果です。今日すべてのキリスト者がしているように「慈悲深い」奴隷制さえ糾弾しながら、「慈悲深い」家父長制の砦であり続けるのは、筋が通りません。

実際、福音が社会に及ぼす長期的な効果の一つが奴隷制を覆すことであるなら、同じ一つの石で落とされるもう一羽の鳥は家父長制です。だからこそ、クラリス・マーティン（Clarice Martin）は、アフリカ系アメリカ人の間での聖書解釈についての注目すべき論文の中で、核心を突く問いを投げかけています。「黒人男性の説教者や神学者たちは、奴隷について説教し神学するときには解放された解釈学を用いながら、女性に関しては字義どおりの解釈学を用いるということが、どうしてできるのでしょうか？」[416]

以前の不正義から学ぶ教訓

奴隷制と家父長制の類似性を否定することによって、補完主義の学者たちは、アメリカ南部のキリスト者の奴隷制廃止反対派の過ちを繰り返し、彼らの神学的な見識を信頼する教会を、イエスの教会にとっての二度目の恥辱へと引きずり込んでいます。それはまた、教会が自らの民の一部を軽んじることを、さらに引き延ばすことでもあります。

このすべてをいっそう悲劇的にしているのは、世界で最も影響力のある男性のかしら性の擁護者たちが、アメリカの教会の四つに一つが属する信者の集団である南部バプテスト（Southern Baptists）だということです。彼らは、指導的な学者たちやメディアを通して、自分たちの考えを世界に発信し続けています。悲しいことに、ゲオルク・ヘーゲル（Georg Hegel）が警告したように、「私たちが歴史から学ぶ唯一のことは、私たちが歴史から何も学ばないということです」というのが本当のようです。

では、今日の教会は、キリスト者の奴隷制廃止反対派の失敗を通して、具体的に何を学ぶべきでしょうか？　第一に、聖書全体から聖句を集めた詳細な「学問的」著作によって確信を持ちながら――実際、教派全体や聖書学の学派全体がそうなのですが――それでも間違っていることがありうるということです。

第二に、文化が良い方向へ向かうことがありえ、それが実は、何千年にもわたってその文化に根づいてきたキリスト教の原則の結果であることがありうるということ

416. Cain Felder (ed), Stony the Road we Trod, p. 226. Barr, 第6章に引用されています。

です。たとえば、ガラテヤ人への手紙3章28節にあるパウロの人類のマグナ・カルタは、平等と社会的階層の終わりという考えを、歴史上初めてこれほど力強く言い表したものです。社会が奴隷制と男性優位を覆したことは、実際どれほどこの箇所に負っているでしょうか？　教会は、社会における福音の影響に反発するのではなく、それを自分のものとして主張し、祝うべきであって、攻撃すべきではありません。

第三に、社会における発見や進歩が、長く保たれてきた聖書解釈に異議を突きつけることがありうるということです。ほとんどの人が、世界は平らだとか、地球が宇宙の中心だとか考えていたころ、教会にはそれを支持する聖句がありました。科学的発見がこれに異議を唱えたとき、それは私たちに、聖書を新しい仕方で読み、初めからそこにあったものを見る機会を与えてくれました。産業革命と、のちに女性解放運動となるものの最初の波が西洋を席巻したとき、女性たちは史上初めて、男性に匹敵する知性と能力を示す機会を与えられました。これを脅威と見なすのではなく、実はこれは、私たちが聖書そのものに立ち返り、「私たちはずっと何を見落としてきたのか？」と問う機会なのです。

第四に、よくある解釈上の誤りは避けなければなりません。聖書のどの部分を解釈するにも、聖書全体が必要です。それ自体が誤解されている証拠聖句をつなぎ合わせるのは、あまりにも簡単です。聖書の書物は、たとえ私たちのために書かれたものであっても、私たちに宛てて書かれたものではないことを忘れてはなりません。私たちは、時代を超えたメッセージを見極めてそれを自分たちの時代と文脈に当てはめる前に、その聖書箇所が宛てられた歴史的文脈にどっぷりと浸らなければなりません。

第五に、自己利益と集団思考が、聖書をある特定の仕方で読むよう強い偏りを生むことがあります。（この主題についてさらに詳しくは、付録6を参照してください。）一般的な原則として、人間は（キリスト者でさえ）自分の地位や特権を脅かすものには何であれ抵抗します。1800年代の神学論争において、奴隷を所有する神学者たちが最も大きな声を上げることを許されるべきだったでしょうか？　補完主義の教会や働きや大学で、牧師、指導者、教授としての仕事と評判を失うことになる人々が、今日この問題について最も支配的な声であることを許されるべきでしょうか？

第六に、聖書を解釈するには教会全体が必要です。自分とは違う見方をする教会の一部を無視したり、さげすんだりするのは決して賢明ではありません。聖書を心から愛している人々を「文化への降伏者」や「リベラル」と呼ぶことは、神の声に耳

をふさぐことの一つの形かもしれません。あなたが聖書を「低く見ている」として退ける人々のほうが、聖書のある部分について、あなたよりはるかによく理解しているかもしれないのです。

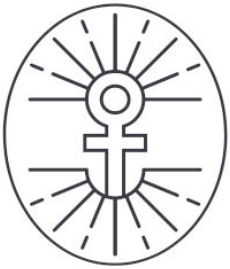
最後に、より広い文化が堕落した文化的慣行を捨てつつあるときに、なおそれに固執することは、社会における教会の信頼性にとって特に害になります。家父長制の砦であり続けることは、私の見るところ、奴隷制を擁護するために聖書を使い続けることと同じくらい、教会にとって自滅的です。文化と教会が奴隷制は容認できるということでおおむね一致していた何世紀もの間は、教会がその最も慈悲深い形を推奨していたにしても、それに同調することは教会の評判にそれほど大きな損害を与えませんでした。しかし想像してみてください。もし西洋の現代のキリスト者の家庭が、聖書的な根拠に基づいてその慣行に同意した二人の奴隷を置くことによって「神に聞き従う」ことを選んだとしたら、それはどう受け止められるでしょうか？

同様に、ジャン＝ジャック・ルソーが言い表した文化的信念――「〔男は〕強く能動的であるべきで、〔女は〕弱く受動的であるべきです。一方は力と意志の両方を持たなければなりません。他方は少し抵抗するだけで十分です」[417]――に教会が同意していた間は、家父長制に同調することは、教会の評判にとってそれほど有害ではありませんでした。しかし今や、私たちの社会は、受賞歴のあるテレビシリーズ『侍女の物語』（The Handmaid’s Tale）全体を、女性の従属の「恐ろしさ」の上に築いています。ですから、もし私たちが娘たちに夫の一方的な権威に従うよう教え、教える賜物や指導の賜物を持つ女性たちが教えたり指導したりすることを禁じるなら、教会である私たちは、奴隷を抱えたこの架空の現代家庭とあまり違わないように見えてしまいます。[418]

より親密な結婚を刈り取ることに加えて、もし信者たちが女性を対等に扱うことを家庭の外、教会と社会にまで広げるなら、私たちは文化の中で、福音に対するより大きな信頼をも刈り取ることになるでしょう。私たちの同胞市民が忘れてしまって

417. Jean Jacques Rousseau, Emile or On Education (1762). Barr, 第6章に引用されています。
418. ジョン・スタックハウスは“Finally Feminist”（p. 56）で、さらに鋭く述べています。「社会が家父長制的であったとき――新約聖書の文脈においてそうであったように、また今日の現代社会を除く世界のあらゆる場所でそうであったように――教会はそれに同調することによってスキャンダルを避けました。しかし今や、現代社会は少なくとも公式には平等主義的です。そこでスキャンダルとなっているのは、教会が社会に同調していないこと、すなわち、恣意的な性別の線引きなしに、女性と男性が賜物と召しに従って仕えることのできる前例のない自由を、教会が喜んでいないことなのです。このスキャンダルは、ほかの人々への伝道と、すでに回心した人々の……引き留めと成長の両方を妨げています。……この社会において教会が家父長制を続けることは、〔多くの人々〕の道に宗教的なつまずきの石を置くことになるのです。」

いても、私たちが思い出させることができるのは、私たちの文化が今日女性の地位を高めていることは、歴史的に見て、尊厳を与える私たち自身の福音がゆっくりと染み込んでいった影響と、神の愛に満ちた公正なご性質についての知識に根ざしているということです。結局のところ、もう長い長い間、神は補完主義のどんな制限のことも、まるでご存じないかのように平然と、女性たちをその賜物において大きく羽ばたかせ、男性たちを力強く導き教えるためにさえ、彼女たちを用いてこられたのです。



第三部

女性の奉仕



10
旧約聖書の力ある女性たち

「主のみこころは、デボラを神の民の指導者として用いることでした……それは、女性も男性とまったく同じように指導の務めを果たせることを示すためでした。」ナイジェイ・グプタ（Nijay Gupta）[419]

神が堕落の後に「アダムはエバを支配する」と言われると、人類は園から荒野へと転がるように飛び出していきます。そして――神の暗い予告のとおり――どこを見ても、実権を握っているのは男性だけです。どうやら一夫多妻と有害な男らしさは、家父長制と同じ土壌で育つようです。人類の物語が始まってわずか数ページで、カインはアベルと張り合い、一番になれないくらいなら殺すほうを選ぶのですから。その後まもなく、レメクは妻を一人ではなく二人めとり、自分にけがを負わせただけの男を殺したと豪語します。

旧約聖書の残りのページをめくってみても、公の世界を支配しているのは相変わらず男性です。箴言31章の妻の夫は、昼間は「土地の長老たちとともに座に着き」[420]、家に帰ってからもおそらく家の主として采配を振るっています。古代ヘブル社会は拡大家族を中心としていて、そこでは一人の男性が、子孫、親族、奴隷、そして妻――あるいは妻たち（創世記の妻同士の争いの物語が示すとおりです）――を率いていたからです。[421]

家長の名はやがて息子たちの中に生き続けますが、母親の名は嫁いだその日に葬られてしまいます。娘たちは地位が低く、ただ夫の家に吸収されていきます。女性の第一の役割は「実り豊か」であること、つまり子を産むことであり、逆に子孫を残

419. www.bit.ly/3BFrpwV
420. 箴言31章23節
421. たとえば、アブラハム、ヤコブ、カレブ、ダビデ、ソロモン、ギデオンは、みな複数の妻を持っています。

せないことは何よりも惨めな失敗とされました。[422]さらに、律法と慣習は、女性を息苦しく締めつけるシュリンク包装のような役目を果たしていました。成人した女性でさえ未成年と見なされ、男性の後見人の下で暮らしました。しかもその間ずっと、夫には、気まぐれ一つで、妻が神に立てた誓願も、自分が妻に立てた誓いも、どちらも無効にする力があったのです。[423]

けれども物語が進むにつれて、神はかなり頻繁に家父長制の規範を素通りし、メシア以前のご自分の民の中で、一人の女性を戦略的に重要な地位や指導的な立場へと引き上げられます。この章で見ていくとおり、堕落した社会が女性にどんな「役割」を定めていたとしても、神ご自身はそれに倣う義理をまったく感じておられなかったようです。そのような女性たちの何人かに会ってみましょう。彼女たちはezer kenegdosとして、つまり男性を導き、救い出し、教え、必要とあらば男性に抵抗する強い女性として仕えた、と言えるでしょう。

圧政に抵抗したシフラとプア

古代世界では、親が息子によって自分たちの将来を確保しようとして、生まれたばかりの娘を殺すことがよくありました。そうした世界で、エジプトのファラオは、自分の奴隷である民の息子たちを殺すよう助産婦たちに命じます。「ヘブル人の女の出産を助けるとき、産み台の上を見て、もし男の子なら殺せ。女の子なら生かしておけ。」[424]彼の狙いは、ヘブル人の将来を弱めることです。成長したユダヤ人の娘たちと結婚する男性がいなければ、娘たちは結局エジプト人の男性と結婚し、エジプトの文化に同化していくでしょう。少なくとも、それが彼の計画でした。ところが、二人のユダヤ人の助産婦シフラとプアが、自分の命の危険を冒して、地上で最も力のある男の一人に逆らいます。こうして二人は、悪しき体制に対する抵抗として知られる最も初期の例の一つとなります。その過程で二人は赤ん坊のモーセの命を救い、そのモーセが80年後に神の民を解放することになるのです。

神は、この二人のezer kenegdosに、つまり強い助け手として、男性の守り手、男性のパートナーとして、また抑圧する男性に抵抗する者として力を尽くした二人に、何をなさるでしょうか？　聖書はこう伝えます。「神はこの助産婦たちに良く

422. 出エジプト記23章25–26節、サムエル記第一1章1節〜2章10節、ヨブ記24章21節、詩篇113篇9節を参照してください。
423. 民数記30章3–16節、申命記24章1–4節
424. 出エジプト記1章16節

してくださった。それで、民は増え、非常に強くなった。助産婦たちは神を恐れたので、神は彼女たちの家を栄えさせられた。」[425]

指導者であり告知者であるミリアム

赤ん坊のモーセが生まれて間もなく、彼の姉ミリアムが、助産婦たちから彼のezer kenegdoとしてのバトンを受け取ります。彼女はモーセを籠に入れてナイル川に押し出すことによって、彼の命を救うのです。弟の無事を願う彼女の祈りに神は答えてくださいます。ファラオの娘——彼女自身も一種のezer kenegdoです——がモーセを見つけて宮殿に引き取り、そうすることで彼をエジプトの王位継承の列に加えたのです。

数十年後、神はモーセを選んで、イスラエルの民を自由へと導かせます。けれども神は彼を、いわば小さな指導チームの中に置かれます。それが分かるのは、神がアロンとミリアムをも、モーセと並ぶイスラエルの解放者・指導者として召しておられるからです。ずっと後の預言者ミカを通して、神は出エジプトを振り返ってこう語られます。「わたしはあなたをエジプトの地から連れ上り、奴隷の家からあなたを贖い出した。わたしはあなたを導くためにモーセを遣わし、アロンとミリアムも遣わした。」[426]

ミリアムは預言的な指導力を発揮します。モーセと同じように、彼女も「女預言者」と呼ばれています。[427]海の中の道が閉じたあと、紅海の向こう岸で、彼女はイスラエルの女たちを率いて、賛美の歌と踊りをささげます。[428]その歌詞が聖書として記録されている彼女の勝利の説教の歌は、千年以上後の教会の福音のひな型です。ミリアムの歌詞も私たちの福音も、自分たちの力ではとうてい打ち負かせない敵から私たちを救い出し、捕らわれの身から約束の地へと連れて行ってくださる神の、そのいつくしみと王としての支配を告げ知らせています。ミリアムの宣言はまた、後にイエスの王としての救いの福音を告げ知らせることになるすべての女性たちを指し示しています。それが分かるのは、何世紀も後に、ある詩篇の作者が、ミリアムとその仲間たちを、後のすべての礼拝の指導者や伝道者を指し示す初期の道

425. 出エジプト記1章20–21節
426. ミカ書6章4節。「あなたがたに先立って」と訳されることのある言い回しは、文字どおりには「あなたの前に」という意味で、「あなたを導くために」という意味合いです。
427. 出エジプト記15章20節
428. 出エジプト記15章20–21節

しるべとして扱っているからです。「主はみことばを与えてくださる。良い知らせを告げる女たちは大きな群れ。」[429]

一つ注意しておきたいことがあります。神の民の舵取りをし、説教壇に立つ女性がもっと増える日を待ち望む私たちは、男性の指導者たちが繰り返し陥ってきたありふれた誘惑を、女性ならたやすく乗り越えられるだろうなどと素朴に考えないようにしましょう。私がそう言うのは、影響力の絶頂にあったミリアムが、競争心にとらわれてしまうからです。モーセを不当に批判した彼女は、宿営の外で7日間ツァラアトに苦しみます。その間、彼女が導くよう召されていた民も、彼女が癒やされるのを待たなければならず、苦しむことになりました。[430]この道徳的なつまずきにもかかわらず、神のあわれみは彼女に及び、後に彼女が世を去ったとき、神の民は彼女を懐かしく偲びます。[431]

預言者フルダ

ユダヤ教のミシュナは、ヘブル語聖書の預言の歴史をこうまとめています。「48人の預言者と7人の女預言者がイスラエルで預言した。」[432]ミリアムもデボラも（デボラについてはまもなく見ていきます）、公の指導的な役割と結びついた預言の働きをしていました。またイザヤは女預言者と結婚しています。[433]では、預言者フルダに会ってみましょう。

イスラエルの王たちの時代、若い王ヨシヤは、自分の民の霊的な活力を優先し、自分の王国の霊的な健全さを損ないかねないものを取り除くことによって、多くの先王たちよりも霊的に優れていることを示します。王が自分の預言者の一人を呼んで「主のみこころを求める」のは、慣例となっていました。そこで、ヨシヤが大祭司やほかの指導者たちに、自分に代わって神のみこころを尋ねるように命じると、彼らは、最も助けになると思う預言者のもとへ向かいます。

429. 詩篇68篇11節
430. 民数記12章1–15節。はっきりさせておきますが、ミリアムが男性の権威を迂回したことによって罪を犯したとは、本文のどこにも書かれていません。彼女とアロンが道を踏み外したのは、モーセの立場に疑いを差しはさんだからです。
431. ミカが彼女の指導を振り返っていることのほかにも、トーラーの書記たちは彼女の死を記録し、彼女を系図に含めています。（民数記20章1節、26章59節、歴代誌第一6章3節）
432. 6 Meg. 14a Bar. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women (p. 75) に引用されています。
433. イザヤ書8章3節。女性の偽預言者たちもいました。念のために言えば、彼女たちの罪は、男性の権威の線を踏み越えたことではなく、神が実際に語っておられたことに反することを語った点にありました。（エゼキエル書13章17–24節）

興味深いことに、彼らはヨシヤ王と同時代の人であるエレミヤやゼパニヤのところには行かず、ほかでもないフルダを訪ねます。彼女の働きのどんな実績が評価されていたのかは分かりませんが、天とのホットラインを持つ人として知られていたのだろうと推測できます。彼女は神殿の身分の低い「装束を管理する者」の妻ですから、彼女の預言者としての評判を支えていたのが、名の知れた男性との結婚であったはずはありません。

彼女はヨシヤのために神のみこころを求め、それから言葉を濁さずに神の代弁をします。民の偶像礼拝を糾弾し、差し迫った破滅を告げ、ヨシヤの心をほめて、彼はその災いを見ずに済むと語るのです。彼女の言葉はあまりに鋭かったので、ヨシヤは「下の者から上の者まで」すべての人を呼び集め、神のことばを読み聞かせ、偽りの神々の祭壇を打ち壊し、神の民を、おそらくイスラエルの歴史で最大のリバイバルへと導きます。[434]ついでに言えば、この物語には、フルダが男性の預言者と違う振る舞いをしたとか、違う扱いを受けたとかいうことをうかがわせるものは何一つありません。

神のご計画に仕えた女王と王妃たち

私はこれまで、多くの補完主義の学者たちが、イスラエルの政治的指導者（つまり王）のほとんどが男性だったという事実を強調し、それは一般原則としての男性の権威を神が認めておられる証拠だと論じるのを読んできました。けれども、それは、家父長制の世界では王が男性であることが当然の前提だったという事実を見落としています。女王が単独の統治者として立つのは、ごく例外的な場合に限られ、たいていは夫が亡くなり、しかも息子がいないときでした。王制については、イスラエルは古代の近隣諸国の規範に従っていました。思い出してください。そもそもイスラエルが最初の王を与えられる前に――それは、彼らを抑圧へと導くことになると神が知っておられた考えでした――彼らが祈った言葉は、まさにこういう嘆願でした。「私たちの上には王がいなければなりません。……ほかのすべての国々のように。」[435]

ですから、統治したのはほとんどが男性の君主でした。けれども、女性も何人かいました。イスラエルの歴史の中には、たたえられている力ある女王や王妃が何人かいます。王妃エステルはユダヤ人の王妃の中で最も有名です。もっとも彼女がその

434. 列王記第二22章11節～23章25節
435. サムエル記第一8章19–20節

地位に就いていたのは、イスラエルの国ではなくペルシア帝国においてでした。彼女は王と内々に事柄を話し合うことがあったとはいえ、公の職務を担っていたことに疑いの余地はありません。そしてそれは――物語を読めば分かるとおり――神が彼女に与えておられるものです。神が「この時のために」[436]自分をその地位に就かせられたのだという預言的な気づきに促されて、彼女は、自分の民に対するジェノサイドの法令を巧みに阻止します。彼女はまず勇気をもってハマンの邪悪な動機を暴き、次いで彼の家を、彼女の民の敵7万5千人とともに滅ぼすことによって、それを成し遂げるのです。

この政治的勝利を祝うために、彼女は、自分とおじのモルデカイが「全権をもって」書いた法令を発布します。それはクセルクセスの王国の127州にいるすべてのユダヤ人に送られました。この法令は、彼らの運命の逆転を記念する2日間の祝いを毎年行うよう命じるもので、「彼らの子孫」のためのものでもありました。[437]

こうしたすべてにおいて、エステルはペルシアという国でも、また神の民イスラエルの上でも、指導力を発揮しています。そうすることで彼女は、社会において指導力を発揮するよう召されている女性たちにとっても、神の民の実際的・霊的な指導を担うかもしれない女性たちにとっても、励ましとなる模範となっています。

イスラエルの歴史と交わる女王は、彼女だけではありません。アフリカのシェバの女王[438]は、ソロモンの上にある神から与えられた偉大さを認めてたたえたことで、つまり預言的な先取りとしてイエスご自身の王権をも認めてたたえたことで、イエスから称賛されています。[439]同じように、バビロンのカルデアの王妃は、ダニエルの上にある預言の霊的な賜物を思い起こし、しばらく人目につかないところにいた彼を、再び公の場へと引き戻すために神に用いられます。[440]イスラエル自身の女王であるイゼベルとアタルヤは邪悪でしたが、それはイスラエルの王たちのほとんどについても同じでした。けれども注目してください。女王や王妃についてのどの記述でも、指導の職に就く女性について否定的なことは一言も語られていません。語られているのは、その職の悪用についてだけです。

奇妙なことに、補完主義の学者たちはときに、これらの女王や王妃は単独の統治者として治めたのではなく、王である夫と並んで治めたにすぎない、と反論します。けれども、古代近東では、単独で統治する女王はきわめてまれでした。500年の期

436. エステル記4章14節
437. エステル記9章29–32節
438. 列王記第一10章1–13節、歴代誌第二9章1–12節
439. マルコの福音書12章32節
440. ダニエル書5章10–12節

間（サウルの治世からゼデキヤの治世まで）に、どの帝国にもたった一人でもそういう女王が現れることは、とても考えにくいのです。とはいえ、アタルヤは夫の死後、夫のいない君主となっていますし、イエスが来られる前の世紀、ハスモン朝の時代には、サロメ・アレクサンドラ（Salome Alexandra）が夫の死後、イスラエルの単独の君主として9年間統治しています。

神が定められたこれらの女性たち――体制に抵抗した者、指導者、告知者、預言者、政治的指導者――に並んで、とりわけ一人の女性指導者が、神の民の中のすべての後の女性指導者たちのために、燃え立つような道を切り開いています。

士師デボラ

「そのころ、ラピドテの妻で女預言者のデボラが、イスラエルを導いていた。彼女はエフライムの山地のラマとベテルの間にある、デボラのなつめ椰子の木の下に座を構え、イスラエルの子らは、さばきを求めて彼女のところに上って来た。」[441]ミリアムは神の民の指導チームの一員として（モーセを中心的な指導者として）働いていたのかもしれませんが、デボラは一時期、神の民の最高指導者として、すなわちその士師の一人として仕えました。

士師とはどういう人たちだったのでしょうか？　ヨシュアの死からサウルがイスラエルの最初の王として即位するまでの何世紀もの間、イスラエルの民は、主を礼拝する諸部族のゆるやかな連合として暮らしていました。その時代には、一つのサイクルが繰り返されていました。神の民はまず、深刻な道徳的妥協と偽りの神々の礼拝に陥ります。すると近隣の部族が軍事的に彼らを征服し、抑圧します。神の民は悔い改めて神に叫び求めます。そして神は士師を起こされ、その士師が「イスラエルを敵の手から救う」[442]のです。これらの士師は終身の王ではありませんでしたが、それでも、自分の地域で神の民を「治め」たり「統治し」たりしたと言われています。[443]

デボラが士師記のほかの5人の主要な士師たちと違うのは、彼女だけが預言者でもあり、また神の民の間の多くの争いごとに司法上の指導を与えた、という点です。

441. 士師記4章4–5節
442. 士師記2章16、18節、4章10、14、24節、5章1–31節
443. ダニエル・ブロック（Daniel Block）は、士師記とルツ記の注解書の中でこう書いています。「ルツ記1章1節は、士師たちが『治めた』（ESV）、あるいは『統治した』（NIV）時代について語っている。『ヘブル語のshaphat「さばく」は、「統治する、管理する、指導力を発揮する」という意味である。』」（p. 23）

ほかの士師たちはただ軍事的な勝利を専門にしていたように見えますが、デボラは民を導きます。また、彼女は「神による一本釣り」（神がギデオンを召されたことを思い浮かべてください）によって立てられたのではないようです。むしろ、彼女が最初にどう召されたのかについては何も述べられていないので、神から与えられた指導、預言、知恵の並外れた賜物が、彼女のために頂点まで道を開いていったのだと推測するほかありません。実のところ、彼女に最もよく似ているのはサムエルです。サムエルも彼女と同じように、預言者であり、士師であり、軍事上の助言者でした。

彼女はその地における最高の司法権威でした。デボラが純粋に私的な仕方で行動したことをうかがわせるものは、本文には何もありません。公の争いの調停者として、彼女は、先立つモーセと同じように、公の領域で公の役割を果たしました。士師としてのモーセの働き[444]を受け継いで、彼女はイスラエルの最高法廷のただ一人の構成員として正義を執行します。そしてモーセと同じように[445]、国中から人々が争いの決着を求めて彼女のもとにやって来る中で、国の裁判官の役割を担うのです。

士師記のほかの主要な士師たちと同じように、デボラは神の民を軍事的な勝利へと導きます。サウルを任命し、自分は出陣せずに彼を戦いに進ませたサムエルのように[446]、デボラもまた、自分では実際に戦いに出て行かないつもりでした。その代わりに彼女は、抑圧者たちを打ち破るためにイスラエルの軍勢を集めるようバラクに命じます。[447]そして彼女は、この軍事遠征の計画を戦略的に指示します。軍勢の規模、陣取るべき有利な地点、攻撃の正確な時機までも、です。

彼女が標的とする敵はヤビンです。ヤビンはイスラエル全体を抑圧していたのではなく、北の部族だけを抑圧していました。彼女は南に住んでいましたが、ヤビンの勢力基盤についてよく知っていたので、自身も北の出身であるバラクに、ヤビンを打ち破る任務を託します。バラクは彼女の戦略的な才覚に深く敬服していたので、戦いの最前線で自分のそばにいてほしいと彼女に懇願します。彼は彼女自身に武器を取ってほしいと頼んだのではありません。展開していく戦いを見渡せる場所から自分に助言してほしいと頼んだだけです。戦いを前にして、バラクは軍の司令官であり、彼女は最高司令官として機能しています。彼女は預言によって彼に勝利を保

444. 申命記17章8–13節
445. 出エジプト記18章13節
446. サムエル記第一10章1節
447. 士師記4章6節

証し、「行きなさい」と命令を下します。そして彼は行きます。[448]すばらしいことに、神は彼らに勝利を与え、それは40年の平和につながります。[449]

戦いに勝った直後、デボラはバラクを二重唱の相手として、自分の作った歌を神の民全体に教えます。一、二世紀前に、追い詰められたご自分の民を救い出された神をたたえたミリアム[450]と同じように、二人は、神がどのように自分たちに勝利をもたらしてくださったかを歌います。その歌は神をたたえていますが、同時に、バラクと並んでこの勝利における神の代理人の一人として、デボラにも栄誉を与えています。二人はこう歌います。「イスラエルで〔指導者たち〕が先頭に立ち、民が進んで身をささげるとき、〔すべての人は〕主をほめたたえよ。」[451]ここで言われている指導者たちとは、どうやら自分たち自身のことです。歌はさらにこう続きます。「イスラエルの村人たちは戦おうとしなかった。彼らはしり込みしていた。私デボラが立ち上がるまで、私がイスラエルの母として立ち上がるまで。」[452]国中の人々が声を合わせて歌うのに耳を傾けるとき、私たちは今日でも、よく導いてきた指導者たちを、女性も含めて、尊ぶよう励まされます。

ラピドテと結婚していたデボラは、神と国への奉仕だけに専念できる独身女性ではありません。それでも、聖書の記す順序に注目しましょう。彼女はまず預言者であり、それから妻なのです。夫に従属するのが普通だったかもしれない家父長制の文化の中にあっても、彼女自身も、物語に登場するほかのだれも、彼女が男性の上に権威を行使することにまったく何のためらいも抱いていません。

彼女の歌の中で、彼女は「イスラエルの母」と呼ばれています。けれども、彼女の母性的な性質は、彼女の公の指導を割り引くものではありません。むしろ、それに独特の味わいを加えています。多くの戦時の指導者に典型的な栄光への渇望とは違って、デボラは軍事的な栄光を他の人に手渡したいと願っています。とはいえ、彼女の母性についてのこの点さえも、強調しすぎるべきではありません。自分の民のための軍事的勝利を追い求める中で、女性に期待されるかもしれないあわれみの心は、彼女の歌には表れていないからです。彼女は歌の中で、家に帰って来ない戦死した敵兵の、悲嘆に暮れる母親たちをあざけっています。[453]

448. 士師記4章14節
449. 士師記5章31節
450. 出エジプト記15章
451. 士師記5章1–2節。NIVが「指導者たち」（leaders）ではなく「君主たち」（princes）という語を用いていることは、デボラ自身を除外してしまいます。けれども彼女は、5章8節にある彼女自身の歌の中で、救済者として描かれています。私は、ESVとNLTが「指導者たち」としていることのほうが、この語の意味をよりよくとらえていると思います。
452. 士師記5章8節

何でも高い水準でこなせる人でありながら、彼女は重要な任務を他の人に任せます。彼女はバラクに、単独で戦いに進軍するという務めを差し出します。おそらく、男性のほうが体力に勝るので、戦うのは男の仕事だと考えたのでしょう。神から勝利を保証されていた彼女は、自分抜きでそれを成し遂げる栄誉をバラクに与えたいと思っています。ところがバラクは、戦いでは彼女にそばにいてほしいと望みます。そこで彼女は、そうなれば彼は、ふつうは男性のものである戦いの栄光の一部を「一人の女」と分け合うことになると彼に告げます。これは、彼女自身と、ヤビンの将軍を殺すことになるもう一人の女性ヤエルの両方を指す預言的な言葉です。[454]

なんと驚くべき物語でしょう。男性を高める文化の中で、ここに、将軍も庶民も等しく喜んで耳を傾ける、神の代弁者である一人の女性がいるのです。

補完主義の学者たちは、どうやら、デボラが神から与えられた男性に対する正当な権威を何とかして切り崩そうと決めているようで、よく三つの論拠を持ち出します。彼女の指導は公的なものではなく私的なものだったと主張し[455]、神がデボラを選ばれたのは国の男たちが消極的だったので、彼らに恥をかかせようとされたか

453. 士師記5章28–30節。実際、デボラの心に残る歌の中で、息子を失った一人の母親は、さらに、自分の娘たちもまもなく捕虜として連れ去られるかもしれないことを知るのです。
454. 士師記4章21節。バラクやデボラと同じように、ヤエルもまた、士師記5章24–26節のデボラの歌の中でたたえられています。
455. 彼らは、彼女が自分の家にやって来る少人数の人々に対して司法上の調停者として振る舞っていること、そして彼女がバラクに個人的に命令していることを指摘します。けれどもこれは、たとえ個人を相手にしていても彼女の役割は公的なものであること、そして彼女が下す命令によって1万人の男たちが武器を取ることを見落としています。彼女はまた、はるかに大きな共同体を導いて祝いの歌を歌わせ、その歌の中で人々はみな、神が定められた彼女の指導について歌っています。これらの学者たちがこの論拠を持ち出す理由は、デボラが男性を導いたことを、テモテへの手紙第一2章12節についての自分たちの誤った解釈――彼らによれば、女性は公の場で男性を導いてはならないという解釈――と調和させようとしているからです。こうした区別は、こじつけで恣意的なものに思えます。

らだと主張し[456]、さらにデボラはバラクを真の指導者と認めていたと主張するのです。[457]これらの論拠のどれ一つとして、本当には成り立ちません。この箇所が示しているのは、一人の女性が、神の選びによって、宗教的な領域でも市民的な領域でも、男性を含む神の民を導いているということです。そうすることで彼女は、その一方または両方の領域で導くよう召されているかもしれない今日の敬虔で賜物のある女性たちのために、道を切り開いています。

ある学者たちは、彼女の市民的な役割しか認めません。グルーデムは、彼女の最高司令官としての役割を認めず、彼女の司法上の働きを今日のカウンセラーや民事裁判官の働きになぞらえています。ほかの学者たちは、彼女の霊的な指導についてしか語りません。ピューリタンの注解者マシュー・ヘンリー（Matthew Henry）は、彼女の社会的な役割を否定してこう言います。「彼女は、自分に与えられた市民的権威による君主としてではなく、女預言者として、また彼らに対する神の口としてさばき、悪弊を正し、苦情を処理したのであり、とりわけ神の礼拝に関わる事柄においてそうであった。」[458]グルーデムもヘンリーも、彼女がイスラエルの民の

456. けれども、この物語には、男たちが預言者、司法の権威、軍事戦略家という役割を拒んでいることを示すものは何もありません。バラクが抵抗しているのは、これらの役割のどれに対してでもありません。彼がただ一つ気後れしているのは、デボラ抜きで戦いへの進軍を率いることであり、そのために彼は、戦いの栄光をデボラとヤエルと分け合わなければならないという、文化的な意味での罰を受けるのです。神による指導者の選びについて何か分かっていることがあるとすれば、それは、神がありそうもない人を選ぶのを好まれるということです。たとえば、最初の士師オテニエルは士師の典型ですが、その後に神が選ばれる三人の士師はそれぞれ、意外性を好まれる神の好みを示しています。エフデは「左利き」です。それはつまり、ふつう右利きの戦士と戦うように訓練された平均的な戦闘員の不意を突くことができる、ということです。ギデオンは臆病で、身分の低い氏族の出です。そしてもちろん、デボラは女性であり、軍事的な勝利を収めるとはだれもまず予想しない人物です。その後の時代の神の民である私たちはみな、神による意外な指導者の選びを受け入れる心構えを持つべきです。左利きの指導者や、恵まれない境遇から出た臆病な指導者を拒まないのと同じように、女性の指導者を拒むべきではありません。
457. グルーデムは“Evangelical Feminism”（第4章）で、彼女がバラクに軍勢を集めるよう告げたことによって「男性の指導の正しさ」を認めている、としてこの主張を論じています。さらに彼は、一緒に戦いに来てほしいと言い張ったバラクを彼女がたしなめたことも、同じことを証明していると付け加えます。けれども、これはすべて推論にすぎません。軍隊を率いて肉体的な戦いに臨むことは男性のほうが向いていると彼女が正しく理解していた、という説明のほうがはるかによく当てはまります。彼女は女性であり、それゆえ、力が決め手となる軍事作戦には向いていなかったのです。彼女には、自ら体を張って戦いを率いたいという願いはありませんし、肉体的な戦いは男たちの栄誉だと考えています。もちろんバラクも指導していますが、その指導さえも彼女から委ねられたものです。彼女が好んだ戦略は（サムエルのように）、軍の司令官に戦争を戦うよう指示する最高司令官であることでした。それでも彼女は、監督する立場による指導者であり続けています。彼女は自分の指導を手放したのではありません。神から与えられた自分の指導を実行するよう、一人の男性に指示したのです。たとえ彼女がバラクを真の指導者と認めていたことを示せたとしても（実際には示せませんが）、その地における最高の司法権威を持つという彼女の役割は、私たちがバラクに出会う前から明らかなのです。
458. 出典：www.bit.ly/3bIr6am

上に、宗教的な指導と社会的な指導（政治的、司法的、軍事的な領域を含む）の両方において立っていることを見落としています。

この物語は力強い先例です。十分にはっきりしているのは、神も古代のヘブル人も、女性の指導を本質的に忌まわしいものとは見ていなかったということです。ここにいるのは、共同体全体を、その最も強い男たちをも含めて、有能に導く一人の女性です。

デボラの働きを現代の奉仕の現場にとって特に意味深いものにしているのは、神による士師（救済者）の選びが、今日神が用いられるかもしれない指導者の種類を示す、旧約聖書の中でも最良の例の一つだという点です。なぜなら、どの場合にも神は、文化に縛られた制度に制限されていないからです。たとえば、族長たちの場合の男子長子相続、祭司制度のための詳細なモーセの律法、あるいは古代近東に共通する地政学的な制度である男性の王制といったものです。それとは対照的に、各士師の任命は、御霊によって与えられた召しと賜物に基づいていて、古代社会で最も人気のある選択や最もありそうな選択に基づいてはいません。すばらしいことに、士師記の6人の主要な救済者の中で、デボラはおそらく最も多くを成し遂げた人です。彼女はその地における最上位の政治的・軍事的指導者であるだけでなく、預言者でもあり、最高の司法上の指導者でもあるのです。

このことを認める補完主義の学者たちも、それでもなお、彼女は「例外があることこそ規則のある証拠」と言われるような例外であって、神の民を導くべきなのは男性だという規則を裏づけている、と主張します。けれども、本文には、私たちをそういう方向に向かわせるものはまったくありません。そうです、彼女は規則を裏づける例外ではありません。むしろ、彼女の並外れた指導は、そのような規則など存在しないこと、少なくとも神のお考えの中には存在しないことを証明しています。彼女は、多くの補完主義の学者たちが神のお考えの中に存在すると主張する、男性による統治的権威のいわゆる「パターン」を打ち破っています。家父長制の世界の中で、神がこれほど重要な指導の務めのために一人の女性を選ばれたことは、まったく注目すべきことです。それは「novum」（物語や本文の中に現れる、新しく思いがけない事柄）として働き、士師記の最初の読者たちに（そして私たちにも）、神について、性別について、指導について、私たちが抱いている前提そのものを問い直させるのです。士師記の古代の読者にとっては、男性が導いているという記述を読むことは文化的に予想どおりのことであり、意外な細部こそが「メッセージ」そのものでした。デボラについてのこの記述の中に彼らが見て取ったものを私たち

が見落とし、そのうえ誤って、霊的な指導を男性という性別と同じ箱に入れてしまうなら、私たちは結局、神を箱の中に閉じ込めようとしているにすぎないのです。

人に歩み寄られる神

フルダ、ミリアム、エステル、デボラは別にしても、疑問は残ります。なぜ神は、旧約聖書の中で主に男性を指導者として選ばれるのでしょうか？

補完主義の学者たちはよく、旧約聖書に出てくる男性の長老、男性の氏族の長、男性の族長、男性の王などを列挙し、まるで神が、男性だけが導くべきだという、あらゆる時代に通じる規範を定めておられるかのように扱います。けれども、この結論は、神の贖いのプロセスについての決定的に重要なことを見落としています。イスラエルは、これらの役割のどれ一つとして、特別に自分で考え出したわけではありません。古代近東のすべての国々に、男性の長老、男性の氏族の長、男性の族長、男性の王がいたのです。神がイスラエルにそれに倣うことを許されたからといって、それを何らかの普遍的な理想として認めておられたのだと考えてはなりません。聖書の長さと、それが扱う膨大な時間の幅は、堕落した世界に対する神の贖いがゆっくりと起こることを示しています。神が贖われた共同体に、またその共同体を通して、信じない世界の中へとご自身を現していかれるとき、私たちは、神がしばしば理想的でない文化の現実に、ときにはまったくひどい文化の現実にさえ譲歩されることに気づきます。しかもその間ずっと、神はその中に、やがてそれを贖うことになる種を蒔いておられるのです。

古代近東は、今日の中東と同じくらい強い家父長制の文化でした。だからこそ、旧約聖書に出てくる氏族や部族の指導者はいつも男性であり、女性が部族や氏族を率いたという記述は一つもありません。旧約聖書における神の民は、アブラハム、イサク、ヤコブの家族です。モーセは、家族や部族の長たちに権威を分け与えようとしたとき、「長老」と呼ばれる70人の年長の男性を選びます。「長老」と言えば、男性の長老たちが町の門に座っていたことも思い出されます。けれども、よく見てください。これは周りの世界でごく標準的な指導の仕組みだったのです。たとえば、エジプトにさえ「長老たち」がいました。[459]

けれども、家父長制という既存の文化的慣行の中へ、またその内側で神が啓示し、行動されたことは、その慣行を普遍的に認めることではありません。それはちょうど、たとえば、ヤコブの息子たちである十二人の族長を一夫多妻という文化的慣行を通して生み出されたことが、一夫多妻を普遍的に認めることではないのと同じで

459. 創世記50章7節

す。一夫多妻が間違っていることを私たちは知っています。それなのに神は、イスラエルの十二部族の祖が、同じ父を持ちながら母は一人ではない男たちであるほどまでに、それに譲歩されました。奴隷制についても同じです。それは第9章で見たとおりです。一夫多妻、奴隷制、家父長制が当たり前だった民の中で神が働かれたことは、神がこれらの慣行のどれかを理想化したり認めたりしておられるという意味ではありません。神がご自身と、全世界に及ぶ贖いのご計画とを、段階的に現していかれる長いプロセスの中で、神はどうやら、最終的には終わらせると約束しておられる事柄をも、しばらく忍ぶことをいとわれないようです。

それでも、たとえ神が旧約聖書の中でいつも男性だけを指導者として選ばれたとしても（実際にはそうではありませんでしたが）、その一般的な文化のパターンがイエスの教会に移されるべきだと考えてはなりません。理由はこうです。イエスが来られる前の神の民は文字どおりの一つの国でしたが、イエスが来られた後、とりわけ最初の教会がエルサレムで迫害を受けた後、新しい形をとりました。今や明らかにされた神のご計画は、教会が一つの国として存在するのではなく、世界中の国々の中に存在する有機的な共同体として存在する、というものです。もはや地政学的な民ではない今日の神の民には、王、氏族の長、大祭司、国の預言者といった古代の指導の役割は必要ありません。新約聖書はたいてい、古い契約の下での信仰と新しい契約の下での信仰との間の非連続性を強調しています。この事実を無視することによって、補完主義者たちは、神が望まれる規範としての男性の指導を支持する、旧約聖書からのもう一つの論拠を持ち出すのです。

男性の祭司

旧約聖書の三つの大きな職務は、預言者、祭司、王です。女預言者がいたことも、神に用いられた力ある女王や王妃がいたことも私たちは知っていますが、紛れもなく男性だけに、例外なくまったく限られていた職務が一つあります。それが祭司の職です。

補完主義の学者の中には、この点を大げさに取り上げる人たちがいます。「旧約聖書において、祭司を除くすべての指導の役割に例外があることを認めるなら、そこには確かに一つのパターンがある。神は女性にあらゆる種類の指導の道を開いておられるが、一つだけは例外だということである。この意味で、旧約聖書では祭司が、新約聖書では長老がその例外なのである。」[460]

460. Craig Blomberg, “Two Views of Women in Ministry”

ごく最近、別の学者たちが、さらに二つの論拠を加えてこの議論を補強しました。どちらも旧約聖書の祭司と、とりわけ教会の長老とを結びつけるものです。第一に、彼らは、指導的な祭司であるアロンとレビが民にモーセの律法を教えるよう命じられていること[461]を指摘します。これは、「教える能力がある」[462]ことが求められる長老にいくらか対応している、というのです。第二に、彼らは、祭司たちが聖所とその備品の守り手であったことを強調します。これは、教会の霊的・道徳的な守り手であるべき今日の長老の働きに対応している、というのです。

こうした論拠に、どう答えればよいのでしょうか？

祭司が男性だったからといって、神が家父長制を認めておられたと結論づけてはなりません。とりわけ、聖書がそうは言っていないからです。なぜ男性だけが祭司だったのかについては、おそらく私たちには知りえない、特別な理由があったのかもしれません。女性が聖所の運営から外されていた理由としては、もっともらしいものが三つあります。（もしどれか一つだけに賭けなければならないとしたら、私は一つ目に賭けます。）

第一に、モーセの律法は、月経中の女性を儀式的に汚れているとみなし、それゆえ毎月の四分の一の期間は神殿に足を踏み入れることさえ許しませんでした。今の私たちはこれを鼻で笑うかもしれませんが、古代のイスラエル人の宗教的な想像の中では、これは大きな意味を持っていました。モーセはこう命じました。「女に血の流出があって、その身の血が流れ出る場合、彼女は七日間、月のさわりのうちにある。だれでも彼女に触れる者は夕方まで汚れる。……彼女が座っていたどんな物にでも触れる者はみな、自分の衣服を洗い、水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。」[463]こうしたことのために、儀式的な務めを担う祭司として女性が働くのは不向きだったでしょう。女性たちの変動する月経周期に合わせて当番表を組むのでもない限りは。それはもちろん、およそ現実離れした考えです。[464]

第二に、女性の祭司がいれば、礼拝に売春を組み合わせていた異教の宗教の女祭司たちを連想させるおそれがあったのかもしれません。[465]第三に、祭司は体力が強

461. レビ記10章11節、マラキ書2章7節
462. テモテへの手紙第一3章2節
463. レビ記15章19、22節
464. ありがたいことに、イエスはこうした清めの規定に終止符を打つために来られました。ヤイロの娘をよみがえらせる奇跡と、長血をわずらう女を癒やす奇跡が続けて起こった場面を考えてみてください。モーセの律法によれば、イエスはこの二人に触れたことによって汚れた者となりました。けれども、どちらの場合にも、イエスは汚れたものをきよいものとされるのです。
465. 申命記23章17節はこれを禁じています。神は繰り返し、イスラエルが周りの国々の不道徳な慣習に従っているように見えることを禁じられました。

くなければなりませんでした。神殿に不法に入ってくる者がいれば、彼らは体を張ってそれを防ぎ、必要なら処刑しなければなりませんでした。[466]一日中、動物を切り分けて運び回っていました。そして聖所が存在した最初の300年から400年の間、祭司たちは、聖所全体とそのすべての備品を何度も解体して荷造りし、場所から場所へと運ばなければなりませんでした。この意味で、神殿の祭司職から女性を除外することは、イスラエルの軍隊から女性を除外することと同じくらい、自然な制限でした。

けれども、祭司が男性であったことを先例として用いようとすることについては、さらに根本的なことを言わなければなりません。祭司は男性でなければならないと定めたのは、モーセの儀式律法でした。イエスご自身が指摘されたように[467]、モーセの律法は理想的な社会を定めたものではなく、むしろ不完全な社会の中で与えられた譲歩でした。ですから、祭司が男性だけだったという事実は（しかも一つの部族の者だけだったことにも注意すべきです）、今日の教会における指導について私たちが抱いている問いにとって、何の重みも持ちません。それは、別の文化と別の契約のための規則でした。新しい契約に生きる信仰者として、私たちはモーセの律法の下にはいません。祭司になることは、その人の賜物や敬虔さとは何の関係もなく、ただレビ族の男子として生まれたこと、そして運よく身体に欠陥がないことだけにかかっていました。ですから、彼らの職務は霊的な指導の先駆けではないのです。

要するに、旧約聖書の祭司と新約聖書の牧師との間にあると主張されているつながりは、きわめて希薄だということです。財産を体を張って守ることは、民を霊的・道徳的に守ることとはまったく違います。[468]前者は男性に備わっている体力に関わることであり、後者は男性に限られない霊的な成熟と教理の深さに関わることで

466. 民数記18章7節
467. マタイの福音書19章8節
468. 最近、ある補完主義の神学者が、アダムが園を守ったことをこの議論に加えて、これを強化しようとしました。彼らは、男性であるアダムが園という神殿の祭司であり守り手となるはずだったこと、男性の祭司たちが物理的な神殿を守るはずだったこと、それゆえ男性の長老が教会という神殿を守るべきだということを指摘します。神学的には、園という神殿、物理的な神殿、教会という神殿の間にはつながりがありますが（どれも神が住まわれる場所です）、主張されているこのパターンは三つの点で破綻しています。第一に、神は、園という神殿の世話においてアダムと協力する強い助け手として、エバをアダムに与えておられます（創世記2章18節）。ですから、アダムが男性であることは関係がありません。第二に、新約聖書によれば、アダムは教会の牧師たちの先駆けではなく、最後のアダムであるイエスの先駆けであり（コリント人への手紙第一15章45節）、また、男性も女性も含めて、神の家で祭司として仕えるべきキリストにあるすべての人の先駆けです（ペテロの手紙第一2章5節）。第三に、アダムは自分が守る園の上に立っていて、その一部ではありません。神殿の祭司たちも同じです。これに対して牧師たちは、教会という神殿の上に立つのではなく、その一部なのです。

す。そして確かに、旧約聖書の中で祭司たちは、今日の牧師たちと同じように、神のことばを教えました。けれども、預言者、君主、親たち――いずれも女性を含む役割です――もまた、それを教える責任を負っていたのです。[469]

何よりも大切なことに、ペテロとヘブル人への手紙の著者によれば、祭司たちは牧師の先駆けなどではまったくなく、ご自身を完全ないけにえとしてささげる完全な祭司であるイエスの先駆けであり[470]、また、男性も女性も含めたすべての信仰者の先駆けなのです。信仰者たちは「イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげる、聖なる祭司」[471]だからです。新約聖書は、牧師を祭司と直接結びつけているところがどこにもありません。実際、宗教改革の偉大な発見の一つは、旧約聖書の祭司が教会の聖職者にはまったく対応せず、すべての信仰者に対応しているということでした。私たちは宗教改革の礎石の一つを崩そうとしているのでしょうか？

この章の要点に戻りましょう。古代近東では男性の支配が当たり前だったにもかかわらず、男性を導き、男性のezer kenegdosとして、つまり強いパートナーとして行動した女性たちのこれらの輝かしい実例は、神の働きにおいて女性が男性と並んで完全なパートナーとして立つ日を、前もって垣間見せる閃光です。男性と女性、息子と娘が御霊の満ちあふれる力の中で働くというヨエルの預言[472]は、女性たちが将来、指導と説教の外套をまとって、さらに大きく立ち上がることへのこの期待を、見事に言い表しています。これは驚くに当たりません。旧約聖書には、神が社会と教会の中で、力ある指導と教えの務めのために女性を選ばれる可能性を損なうものは何もありません。むしろ、古代の家父長制の過去において神に選ばれた女性たちの多くの実例は、神が将来指導者を選ばれるときにも、人を分け隔てなさらない方であり続けることを予期させるはずです。そしてそれには、その人の染色体がXXかXYかということも含まれるのです。[473]

やがて、のろいは完全に覆されます。もはやアダムがエバを支配するのではなく、二人は互いに並んで治めるようになります。そしてそれこそが、旧約聖書の教えに忠実であろうとするなら、そのまさに最初の章ではっきりと言い表されている神の理想なのです。

469. それに、レビとアロンが（祭司職全体ではなく）教えることについて言及されているからといって、すべての祭司が教師だったという意味にはなりません。
470. ヘブル人への手紙8〜10章
471. ペテロの手紙第一2章5節
472. ヨエル書2章28–29節
473. あるいは、インターセックスの人々に見られることが科学によって証明されるかもしれない、ほかのどのような変異であっても同じです。



11
福音書の力ある女性たち

「どの福音書も、イエスの復活のメッセージ――初代教会において福音の中心にあったメッセージ――を最初に告げ知らせたのが、イエスの女性の弟子たちであったことを示している。」デイヴィッド・ショーラー[474]

ありがたいことに、補完主義の学者たちは、イエスが女性を高められたことを認めています。結局のところ、イエスの働きのこの部分は、女性は男性と等しい価値と尊さをもって造られているという補完主義の教義を支えるものだからです。けれども、これらの学者たちはそこから、福音書の中のイエスが女性の価値を明らかにされただけでなく、女性の奉仕の働きを解き放たれたその様子を、見過ごしたり小さく扱ったりしがちです。これは誤りです。キリスト教とは、本質的に、女性や奉仕の働きも含めたすべてのものを、イエスが見ておられるように見ることを学ぶことなのです。

イエスの働きのうち、どの補完主義者もこぞって指摘したがる部分は、イエスが男性の使徒だけを選ばれたという事実です。かなりの頻度で、福音書の中の女性の奉仕についてのイエスの見方に関して、彼らが気づくのはそれだけのように思えます。彼らは、イエスは女性が奉仕することを望んでおられるが、導くことは望んでおられないと結論づけます。この章の終わりで私は、イエスの十二人を、ご自分の教会における将来のすべての指導のための何らかのひな型として扱うことの誤りを示すつもりです。けれども、この章の大部分では、イエスが男性だけの奉仕の務めという考えを認めておられたという考えそのものが誤りであることを証明していきます。福音書は主としてイエスの働きについて書かれたものですが、それにもかかわらず、福音書の記者たちが、イエスが女性たちを奉仕へと解き放たれたことにどれほど多くの紙面を割いているかは、実に注目すべきことです。イエスは女性たち

474. www.fuller.edu/womeninministry/

を神の働きの最前線、中心に置かれました。しかも、性別にふさわしいとされるどんな「領域」に彼女たちをとどめておくことにも、まったく何の配慮もせずにです。この章では、イエスがご自分の御国の強力な担い手として用いられた女性たちの何人かを見ていきます。最も重要な人から始めましょう。

歴史上、イエスという名を最初に聞いたのはだれでしょうか？　イエスが世を救うために来られる神の御子であり、最も小さい者が最も偉大な者となる御国を始められる方だと聞いて、それを信じたのは、だれが最初だったでしょうか？　新約の時代に入って、神が送られるメッセージを最初に受け取り、神の御霊が力をもって臨むのを最初に経験したのはだれでしょうか？　イエスと、イエスの逆さまの恵みの御国についての説教を（いや、実際には歌ですが）最初にしたのはだれでしょうか？　そして、神の御子への信仰のゆえに苦しみを受けた、具体的には迫害を受けた、最初の人はだれでしょうか？　もう一つヒントを出しましょう。その人はまた、イエスが来てその内に住まわれた最初の人でもあります。

もちろん、私が言っているのは、私たちの主の母マリアのことです。

母マリア

危険な占領下の地に住む身分の低い十代の少女でありながら、マリアは歌の中で、自分がどれほど祝福されているかを告げます。神が「権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられ」[475]たからです。彼女が（男性や文化の規範ではなく）神に信頼し、神に聞き従うとき、神は、どんな男性もどんな文化も決して彼女から奪うことのできない価値を、彼女に授けられます。

アウグスティヌスは、マリアが神の御子を産んだことの神学的な意義について、こう考察しています。「主イエス・キリストは、救いに定められた男も女も含めた人間を解放するために来られたとき、男性の本性を恥とされなかった。ご自分がそれを身に負われたからである。また女性の本性をも恥とされなかった。女から生まれられたからである。」[476]ルーシー・ペピアットは、このアウグスティヌスの言葉についてこう述べています。「神が地上に来ることを選ばれたとき、神は女性の胎の隠れたところを選ばれた。神が肉体をとることを選ばれたとき、神はこの肉体を一人の女性から受けることを選ばれた。……一人の男性を通して神はご自身を私たち

475. ルカの福音書1章52節
476. Thomas Oden, Classic Christianity: A Systematic Theology, p. 266 に引用されています。

に現し、一人の女性を通して神は人類とのつながりを結ばれるのである。」[477]

イエスが大人になってからずっと後になっても、マリアはイエスへの奉仕において、またイエスのために苦しむことをいとわない姿勢において、活動を続けています。「ぶどう酒がなくなったことを告げるために、あるいは宗教指導者たちの気分を害し続けたら面倒なことになると知らせるために、イエスに詰め寄る人がほかにいるだろうか？　あの恐ろしい最初の聖金曜日に、兵士がわが子の脇腹を刺し通すのを目撃しながら、自分の魂を刺し貫かれる人がほかにいるだろうか――それは、イエスがまだ布にしっかりとくるまれた赤ん坊にすぎなかったときに、彼女に告げられた預言の成就だった。」[478]

イエスに次いで、神の御国のために最も多くのことをしたのはだれでしょうか？私の答えは、アブラハムでも、モーセでも、ダビデでも、パウロでもありません。文句なしに、マリアです。メシアを自分の胎に宿し、彼が自分の二本の足で立てるようになるまで生かしておくこと以上に偉大な奉仕が、人類の歴史にあったとは思えません。

息子だけではありません。彼女もまた手ごわい人です。私たちは彼女の低さや弱さのことを考えがちですが、彼女がいかに侮れない力の持ち主であるかを忘れています。イエスが彼女の世話を託された、息子代わりのヨハネは、彼女を、子を産む間に悪魔的な赤い竜との戦いを生き延びる者として、預言的に描いているのです。[479]

女預言者アンナ

「また、アンナという女預言者がいた。〔彼女は〕宮を離れず、断食と祈りをもって夜も昼も神に仕えていた。ちょうどそのとき、彼女もマリアとヨセフとその幼子のそばに近寄って来て、神に感謝をささげた。」[480]

アンナは、新約の時代に入って最初に預言者と呼ばれた人です。実際、この聖なる瞬間に先立つ丸五百年の間、預言者が神のことばを告げたという記録は、聖書のどこにもありません。わずか七年の結婚生活で夫を失った彼女は、残りの生涯を神殿で過ごします。年月が過ぎていくにつれて、亡くなった伴侶を慕う痛みは、世の救い主を慕い求める思いへと変わっていきます。ある日、マリアとヨセフが幼子をさ

477. Lucy Peppiatt, Rediscovering Scripture's Vision for Women, ch. 2.
478. Lucy Peppiatt, Rediscovering Scripture's Vision for Women, ch. 2.
479. ヨハネの黙示録12章1–6節
480. ルカの福音書2章36–37節

さげるために神殿にやって来ると、彼女はその子を見る目を与えられます。本当の意味で、その子を見る目です。待つ日々はついに終わりました。彼女の失望はすべて消え去り、彼女はたちまち賛美をほとばしらせ、「エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語る」[481]ことによって、自分の務めを果たします。

神殿の境内で、宗教的な公の場で信仰者の男性に教える権限は与えられていないという補完主義の教えなどにはすばらしいほど無頓着に、彼女は信仰ある女性たちと男性たちに、聖書の預言的な約束を思い起こさせます。彼女は彼らに、救いの王となるこの幼子についての良い知らせを告げるのです。しかもそのすべてを、彼女を「覆う」夫も、そばに立つ夫もなしに行っているのです。

井戸端の女

聖書を読む人のだれかに、大勢の群衆に向かってイエスがメシアであると宣言し、伝道において大きな成果を上げた最初のキリスト者はだれかと尋ねれば、おそらく、ペンテコステの日のペテロだと答えるでしょう。けれども、何年も前に彼に先んじた人がいたのです。

第5章で私は、イエスがサマリアの女と一対一で神学的な対話をなさったことについて述べました。それは、記録に残っているものの中で最も長い対話です。ここで強調したいのは、彼女がイエスはメシアであると信じるようになっただけではない、ということです。彼女はまた、ある種の公のリバイバルの先頭に立った最初の伝道者にもなるのです。

これは驚くべき人生の転換です。イエスが水を求めることによって彼女にご自身を紹介されるとき、彼女はただの渇いた魂の一人にすぎません。また彼女は、自分の町の身分の階段の最下段にいます。普通、女性たちは朝早く、ほかの女性たちと一緒に井戸に来るものでした。ところが彼女は――たった一人で、しかも一日のいちばん暑い時刻に――そこにいます。それは、ほかの女性たちの目に彼女が烙印を押された存在であったしるしです。あまりに多くの男性との関係を持っては離れることを繰り返していたために、おそらく彼女は女性たちから悪く言われていたのでしょう。

481. ルカの福音書2章38節

ところがイエスは、彼女と語り合われます。彼女と神学的な対話をなさいます。その過程で、彼女は少しずつイエスの自己啓示を経験していき、同時に彼女自身もイエスに自分をさらけ出していきます。イエスが「わたしがメシアです」と言われて会話が頂点に達すると、彼女は生ける水を一口ごくりと飲んできよめられ、古い水がめを置いて町へ駆け戻り、自分がたった今受け取ったのと同じ水を、ほかの人々にも差し出します。聖書はこう伝えます。「女は、自分の水がめを置いたまま町へ行き、人々に言った。『来て、見てください。私がしたことを、すべて私に話した人がいます。もしかすると、この方がメシアなのでしょうか？』そこで、人々は町を出て、イエスのほうにやって来た。」[482]

その結果、「その女の証言によって……多くの人がイエスを信じた」のです。自分たちでイエスに会ったあと、彼らはその女にこう言いました。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方が本当に世の救い主だと分かったのです。」[483]彼女は、「わたしがメシアです」という言葉を聞いた歴史上最初の人であるだけではありません。アンナに次いで、この発見を、聞こうとする人ならだれにでも、男であれ女であれ、広く告げ知らせた最初の人なのです。イエスが彼女を選び、彼女に栄誉を与えられたということは、社会からのけ者にされていた彼女のアイデンティティが、イエスの告知者という高い地位へと変えられたことを意味します。

彼女の伝道の働きを小さく扱う学者たち――「彼女はただ自分の証しを語っただけだ」――は、事実を見落としています。彼女は出かけて行って人々を見つけ、言葉を用いて人々をイエスへと向かわせ、イエスがメシアであると告げ知らせました。その結果、人々はイエスを信じるようになったのです。イエスは、弟子たちに伝道について短く教える中で、まさに今起こっている彼女の実例を用いてさえおられます。群衆を刈り入れを待つ畑にたとえた後、イエスは彼女を指してこう言われます。「すでに、刈る者は……永遠のいのちに至る実を集めています。」[484]イエスの説教は、その伝道者が新しい友人たちを引き連れてイエスのいる丘を登って来るところで終わります。弟子たちは先に、「イエスが女の人と話しておられるのを見て驚いた」[485]（27節）かもしれません。けれども、彼女の伝道の働きが、その当時の彼ら自身のどの働きをも上回る仕方で、ただちに始まったのを見たとき、彼らはどれほどもっと驚いたことでしょう。

482. ヨハネの福音書4章28–30節
483. ヨハネの福音書4章39–42節
484. ヨハネの福音書4章36節
485. ヨハネの福音書4章27節

証人マルタ

「マルタ」という名前を聞くと、私たちの多くは、彼女があるときに間違いを犯したことを思い出します。イエスに教えていただく機会を逃し、イエスの弟子であることよりも、家事でイエスを手伝う者であることを選んだために、イエスにたしなめられた場面です。彼女の誤りは、イエスが注文してもいない肉体の食事を用意したことでした。その間ずっと、イエスは彼女の妹に霊の食事をふるまっておられたのです。

けれども、彼女が別の機会には見事に正しく理解し、今聖書を持っているすべての人を教えるために神に用いられていることを思い出す人は、ほとんどいません。ヨハネの福音書は、イエスについてのほかの記録以上に、イエスと人々との一対一のやりとりを描いています。しかもそれぞれの人が、イエスについての決定的に重要な何かに気づくように描いているのです。そしてその啓示は、読者である私たちにも開かれます。たとえば、井戸端の女がイエスをメシアだと発見したことは、ヨハネの福音書を通して、今では一世紀の彼女の町の人々をはるかに超えた人々と場所に宣べ伝えられています。けれども、ヨハネが自分の書いたものの中で取り上げているイエスの女性の証人は、彼女だけではありません。マルタもまた、イエスについての決定的に重要なことを証ししているのです。

彼女の話に入る前に、一つ手短に触れておきます。聖書を読む人のほとんどは、福音書の中のこうした証しの言葉が重要であることを知っています。最も有名なのは、イエスが弟子たちに「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」と尋ね、ペテロが「あなたはキリスト（メシア）です」と答える場面です。[486]実際、ペテロのこの言葉は、マルコの福音書の前半（イエスがだれであるかについて）と後半（私たちのために十字架で死ぬというイエスの決意について）をつなぐ蝶番の役割を果たしています。さらに要点を言えば、ペテロの告白は、その上に教会が建てられるべき啓示の岩なのです。

ほとんどの人が気づいていないのは、マルコがペテロの証しの言葉を用いているのと同じ仕方で、ヨハネがマルタのイエスへの証しの言葉を用いているということです。ヨハネの福音書11章で私たちは、イエスが到着されると、亡くなったばかりの兄弟のためにマルタが泣いているのを見いだされたことを読みます。イエスは彼女

486. マルコの福音書8章29節

にこう言われます（福音書の中でこのような言葉があるのはここだけです）。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。……あなたは、このことを信じますか。」

「はい、主よ」と彼女は答えます（そしてここに彼女の告白が来ます）。「私は、あなたが世に来られる神の子キリスト（メシア）であると信じております。」[487]ヨハネは彼女の言葉を後の世のために書き記しました。そしてまさにそのようにして、彼女がイエスの中に見て取り、イエスについて語ったことは、ヨハネの福音書を読む何百万もの人々が自分の人生と永遠の行き先をその上に築くことのできる岩盤となったのです。

イエスの側近にいた女性たち

福音書は、イエスの側近の弟子たちとして23人の名前を挙げています。十二人、ヨセフ・ユスト、ラザロ、ニコデモ、そしてアリマタヤのヨセフです。ほとんどの人が気づいていないのは、名前の挙げられている残りの7人の弟子が、みな女性だということです。イエスの母マリア、マグダラのマリア、「もう一人の」マリア、ベタニアのマリア、ヨハンナ、スザンナ、そしてサロメです。たとえば、次の箇所を見てください。

イエスは神の国を説き、その福音を宣べ伝えながら、町や村を巡っておられた。十二人もお供をした。また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。[488]

この箇所は、イエスにはただ十二人だけではない、もっと広い側近の輪があり、その多くが女性だったことを示しています。イエスの解放をもたらす御手に触れられたこれらのガリラヤの女性たちは、ときおりイエスと十二人に加わって、エルサレムへと下る過酷な旅を共にしました。

イエスはこれらの女性たちを、ご自分の弟子として、宣教の旅の仲間として、また自分の財産で宣教の費用をまかなう後援者として選ばれました。古代の文化では、

487. ヨハネの福音書11章25–27節
488. ルカの福音書8章1–3節

後援を受けることは、自分を依存と負い目の立場に置くことでした。ですから、これらの女性たちはイエスから非常に重んじられていたはずです。

ルカの福音書10章で、私たちは、「主は、ほかに七十二人を任命し、ご自分が行くつもりのすべての町や場所に、先に二人ずつ遣わされた」と読みます。イエスがただ声の届く範囲にいた人々を集めたのではなく、この宣教チームを特別に選び、それから準備させられたことに注目してください。ことによると、イエスの側近にいた女性たちの多く、あるいは全員が、ユダヤ人の故郷全土にわたる宣教の大攻勢にイエスが送り出された36組の中にいたのかもしれません。[489]そうであれば、これらの女性たちは――イエスの指示に聞き従って――受け入れる家々や村々に神の国の到来を告げ知らせ、イエスの招きと支配を拒む者たちを勇敢に糾弾し、悪霊を追い出すことによってイエスの王としての力を示したことでしょう。

それでも、ある学者たちは、「ほかに」（ギリシア語heterous）という語が男性形であることを前提に、この72人の先遣隊はすべて男性だったと論じます。けれども、これは、男性中心の言語を用いる古代の書き手たちが、男女混合の集団を表すのにごく普通に語の男性形を使っていた、ということを誤解しています。（たとえば、同じ語は、癒やしのためにイエスの足もとに置かれた「足の不自由な人たち、目の見えない人たち、手足の曲がった人たち、口のきけない人たち、そのほか多くの人〔heterous〕」[490]すべてについても使われています。そして、この癒やし主の患者たちの多くが女性だったことは疑いありません。）

後に、イエスの側近にいたこれらの女性たちの多くは、主要な証人となります。あの悲劇の金曜日に十字架のもとを最後に離れた弟子たちとなり、また、イースターの日曜日にイエスの墓に最初に到着した弟子たちとなるのです。これらの女性たちのうちの一人は、ほかのだれよりも重んじられています。

マグダラのマリア

もうお分かりかもしれませんが、キリスト教の福音の中心には、イエスが歴史の事実として十字架につけられ、葬られ、死者の中からよみがえられたという主張があ

489. イエスが、福音書に名前の挙げられている弟子たちのほとんど、あるいは全員を含まない、別の72人の最も献身的な弟子たちを見つけられたとは考えにくいことです。それでも私がこれらの女性たちが含まれていたことについてもっと断定的でないのは、宣教への取り組みにおいてしばしば戦略的であられたイエスにとって、家父長制の強いイスラエルは、男性による公の働きのほうを受け入れやすかったかもしれないからです。
490. マタイの福音書15章30節

ります。もしこれらの歴史上の出来事を疑うなら、キリスト教そのものを疑うことになります。

ありがたいことに、イエスは、歴史上のこれらの重大な出来事――ご自分の死と埋葬と復活――のそれぞれが、多くの人々によって目撃されるように取り計らわれました。けれども驚かれるかもしれないのは、イエスがこれらの証人として、主に女性たちを選ばれたということです。実際、この三つの出来事のすべてを目撃したのは、マグダラのマリアとその仲間たちだけでした。男性の弟子たちが逃げ去ってからも長くそこにとどまり、十字架のもとに最後まで残っていたのは彼女たちでした。[491]彼女たちの中には、イエスを葬る手伝いをした人さえいます。[492]そして日曜日の明け方、彼女たちは墓にいました。聖書はこう伝えます。「御使いは女たちに言った。『あなたがたは、恐れることはありません。十字架につけられたイエスを捜しているのは分かっています。ここにはおられません。……よみがえられたのです。急いで行って弟子たちに伝えなさい。「イエスは死人の中からよみがえられました」と。』」[493]これが何を意味するのか考えてみてください。イエスの体が墓に納められるのを見、しかも三日後にその墓が空になっているのを見つけた男性の使徒は、一人もいなかったのです。そうではなく、神は、これらの出来事のすべてを目撃し、自分たちが見たことを伝えるという務めを、マリアとその仲間たちに託されました。実際、あの最初のイースターの日曜日の大半の時間、これらの女性たちは地球上で復活のメッセージを担うただ一つの存在でした。考えてみてください――宇宙で最も偉大な物語が展開していくこの決定的な段階で、キリスト教信仰の正当性のすべてが、このわずかな女性たちの手に委ねられていたのです。神はなんと女性たちを信頼しておられることでしょう。

これらの女性たちの中で、イエスはマグダラのマリアに、よみがえられた主としてのご自身との最初の実際の出会いを与えられました。「彼女は、園の管理人だと思って言った。『あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります。』」イエスが彼女の名を呼ばれると、彼女は振り向いて、アラム語で「ラボニ」（「先生」という意味）と叫びます。それからマリアは、驚くべき知らせを携えて弟子たちのところへ行きます。「私は主を見ました。」[494]

私たちはこう問わなければなりません。女性の証言は信用度が低く、即座に退けられることさえあることを知っておられたのに、なぜイエスは女性たちを選ばれたの

491. マタイの福音書27章55–56節、マルコの福音書15章40–41節
492. マタイの福音書27章57–61節、マルコの福音書15章42–47節、ルカの福音書23章50–56節
493. マタイの福音書28章5–6節
494. ヨハネの福音書20章15–18節

でしょうか？[495]また、男性の弟子たちでさえおそらく彼女たちを信じないだろうと知っておられたのに、なぜそうなさったのでしょうか？　ちなみに、実際にそうなりました。ルカは、「彼らには、この話はたわごとのように思えたので、彼らは女たちを信じなかった」[496]と記しています。もちろん、その日の後になって男たちが自分でイエスに出会ったとき、彼らは女性たちのメッセージを疑ったことがどれほど愚かだったかを悟ります。イエスが後に、姉妹たちに耳を傾けなかった彼らの失敗を厳しく突きつけておられること[497]は、教会が世界に送り出されたまさにその時に、イエスが私たち男性に教えようとしておられる教訓を、疑う余地のないものにしています。あなたの姉妹たちの口にある神のことばを受け入れることを学びなさい、という教訓です。イエスがこの決定的に重要な洞察を歴史上最も重要な日に織り込まれたこと、そして福音書の記者たちがそれを記録していることは、これが、後に続くキリストに従う者の共同体である私たちが決して忘れてはならない最優先の教訓であることを意味しています。

このテーマに関して、よみがえられた主の口から最初に出た言葉は何だったでしょうか？

それは、「女の方……」です。

これを見逃さないでください。ヨハネの福音書は、イエスが「週の初めの日」によみがえられたと語っています。これは新しい創造を指しています。イエスは、園での深い眠りから目覚め、すぐにエバを見いだし、彼女を喜んで「女」と呼び、後に「エバ……生きるものすべての母」と呼んだアダムの物語を再現しておられるのです。ですから、マグダラのマリアは、この既視感（déjà vu）の瞬間において、新しい創造の時代に生きるすべての女性を代表しています。その女性たちは、告知者として祝福されるべき者であり、イエスは生きておられると告げるその相手のだれにでも、いのちをもたらすのです。

エバは、最初の創造の園で、サタンの奴隷化するメッセージをアダムに運んだとき、失敗したのかもしれません。けれども、空の墓と新しい創造の園では、のろいが覆されます。エバの娘が今や、神の解放のメッセージをアダムの息子たちに運ぶのです。そしてまさにそのようにして、まったく新しい世界が、この古く壊れた世界のただ中に突入してきます。それは、女性たちが神の宣教の最前線で男性と肩を

495. たとえば、ユダヤ教のラビの律法では、百人の女性の証言も一人の男性の証言に及ばない、とされていました。
496. ルカの福音書24章11節
497. マルコの福音書16章14節

並べて立つという、栄光に満ちた可能性をもたらします。よみがえられたイエスは、復活の現実という新しい時代において、女性たちに最初の決定的に重要な奉仕の務めを与えられるだけではありません。新しい次元の平等と、奉仕の働きにおいて影響を及ぼす新たな可能性とをもって、彼女たちを重んじておられるのです。「女性が奉仕者の役割へと高められていることは、突入しつつある御国のしるしであり、古い秩序が終わり、新しい関係のあり方が始まったことを示している。」[498]

マリアはまた、一種の使徒的な役割も果たしています。使徒の働きの最初のいくつかの章では、「復活の証人」としての務めが、使徒を指す呼び方の一つになりました。[499]使徒とは、よみがえられたイエスに出会い、良い知らせを他の人々に伝えるためにイエスから遣わされた人々でした。だからこそ教父たちは、マグダラのマリアを親しみを込めて「使徒たちへの使徒」と呼んだのです。N・T・ライトもこれに同意しています。「使徒が〔遣わされた〕復活の証人であるなら、男たちのだれよりも先にその称号にふさわしかった女性たちがいたのである。」[500]はっきりさせておきますが、彼女は厳密に言えば十二人の一員ではありません。けれども、少なくともその時点では、イエスの復活の証人である「遣わされた者たち」（これが使徒という語の意味です）の、より広い輪の一員であったように思われます。

私たちはこう結論づけます。イエスが来られたことによって新しい創造の夜が明けたその日から、神の願いが、男性だけでなく女性もイエスについての真理を宣べ伝えることにあるのは明らかです。信じていない人たちにだけ、あるいは私的な場でだけ、あるいは女性たちにだけではなく、（補完主義の教えに反して）聞く耳を持つすべての人に、です。女性たちにも男性たちにも、信じていない人たちにも信仰者たちにも、私的な場でも公の場でも。

なぜ使徒は男性だけだったのか？

補完主義の学者たちが、現代の教会の上級指導チームから女性を除外するために持ち出すもう一つの理屈は、イエスが神の働きにおける女性の役割を重んじられながらも、十二使徒の選びにおいては女性を除外された、というものです。公平を期して言えば、すべての補完主義者がこの点をそれほど重視しているわけではありません。「単にイエスが十二人の男性をご自分の使徒として選ばれたからといって、イ

498. Grant Osborne, Women in Jesus' Ministry, pp. 289-90.
499. 使徒の働き1章22節、2章32節
500. www.bit.ly/3k5tah6

エスが教会において男性だけの長老職を好まれたに違いない、と論じるつもりはない」[501]と、パイパーとグルーデムは書いています。それでも、多くの人がこれを実質的な論拠として用いています。私が読んだ限り、この主張をする人たちは多かれ少なかれ同じ基本的な推論を用いています。敬意を払いつつ、その要点だけに絞ってみましょう。

イエスが、後にエルサレム教会を導くことになる使徒として男性だけを選ばれた理由として考えられるのは二つです。一つ目は、イエスが家父長制の文化の社会的慣習を守っておられた、というものです。もう一つは、イエスが将来の教会に向けて、神の民の指導は男性だけが担うという原則を模範として示しておられた、というものです。イエスが社会的慣習を覆すことに何のためらいもなかったことを私たちは知っています（女性と二人きりで話されたことや、安息日に人々に仕えられたことを考えてみてください）。したがって、理由は二つ目でなければなりません。それゆえ、イエスの実践に倣い、教会の牧会指導チームには男性だけが就くべきです。

最初に読むと、この理屈は説得力があるように見えます。けれども、よく分析してみると、粉々に崩れ去ってしまうのです。

まず、補完主義の学者たちはなぜ使徒が男性であったことだけに焦点を当てるのか、と問うことができます。イエスが使徒たちのために示されたパターンが、各地域教会が選ぶ牧師や長老の種類のパターンを決めるべきだと、本当に言えるのでしょうか？　イエスは十二人を選ばれました。すべての教会に十二人がいるべきでしょうか？　イエスは異邦人ではなくユダヤ人を選ばれました。すべての教会がそれに倣うべきでしょうか？　イエスは奴隷ではなく自由人を選ばれました。私たちは貧しい人々に指導の役割を拒むべきでしょうか？　彼らは若者でした。教会はこれをどうすべきでしょうか？　ここで私たちは壁にぶつかるからです。「長老」という語は年長者を意味するのです。これらの問いが提起している問題は、もし私たちが、イエスが十二人のユダヤ人男性を選ばれたことを、その後に牧師や長老を選ぶすべての場合の文字どおりのひな型とみなすなら、イエスは性別による偏りだけでなく、民族による偏り（異邦人ではなくユダヤ人）や階級による偏り（奴隷ではなく自由人）も持っておられたと結論づけなければならない、ということです。それよりもありそうなのは、イエスが十二人を選ばれたことが、贖いの歴史における特定の目的と特定の時のためであった、ということです。

501. Recovering Biblical Manhood and Womanhood, p. 62

補完主義の論拠の最大の弱点は、イエスが男性を選ばれた理由が二つだけではない、という点にあります。実際には、女性を十二人から除外する非常にはっきりした象徴的な理由があり、また、おそらくいくつかの戦略的な理由もあるのです。

まず象徴的な理由を考えてみましょう。イエスは、来るべきメシアについての旧約聖書のイメージと約束を成就するために、象徴的な行動を巧みに用いられました。たとえば、イエスは山に登ってご自分に従う者たちを教え、群衆にパンを食べさせられます。そうすることでイエスは、山の上で律法を受け、神の民を導いて天からのパンを受けさせた、まことのモーセとしてご自身を示しておられます。イエスがろばに乗って都に入られるとき、イエスは、ひそやかに来て高ぶった敵を滅ぼす、へりくだったメシアについてのゼカリヤの預言を成就しておられます。イエスが神殿で台をひっくり返されるとき、イエスは、神がイスラエルの礼拝の腐敗をきよめようとしておられることを、絵のような形で伝えておられます。そして、イエスの死の時と場所も、豊かな象徴に満ちています。イエスはどの日にどこで十字架につけられてもおかしくありませんでした。けれどもイエスは過越の祭りの間に、しかも、神がかつてご自分の民を圧政と奴隷状態から救い出されたことを記念して何千匹もの子羊がいけにえとしてささげられている、まさにその都で死なれるのです。

さて、私の言いたいことはこうです。イエスが十二人のユダヤ人男性を選ばれたことは、おそらくイエスのあらゆる象徴的行動の中で最も印象的なものです。私たち現代人には分からなくても、ヘブル語聖書に通じた人々ならすぐに気づいたはずの行動です。十二人の自由なユダヤ人男性を選ぶことによって、イエスは当時のユダヤ人たちに、ご自分が、分裂し堕落した神の民を、ご自分の指導の下で再構成しておられることを示しておられます。イエスご自身のはっきりとした説明によれば[502]、彼らは新しいイスラエル、つまりイスラエルの十二部族を象徴しており、具体的には、そこから国民全体が出たヤコブの十二人の息子たちを象徴しています。また、イエスが最後の食事の席で、十二人の役割をイスラエルをさばく者として宣言しておられること[503]も偶然ではありません。それは、これ以上ないほど象徴に満ちた出来事でした。

要するに、イエスがイスラエルに悟らせたかったのは、十二人のユダヤ人男性の弟子からなるご自分の小さなチームが、メシア的段階にある神の民の先駆けであるということでした。イエスが男性の使徒を選ばれたことは、使徒が十二人であるこ

502. マタイの福音書19章28節とルカの福音書22章30節で。
503. ルカの福音書22章14–30節

と、そして彼らがユダヤ人であり自由人であるという選択に対応しています。[504]イエスは、後にどこかに生まれる地域教会を導くことになるどんな指導チームについても、何一つ語っておられません。実際、イエスが地域教会に言及された唯一の箇所で、イエスは、少数の指導者たちだけではなく、共同体全体に委ねられた霊的な権威を強調しておられるのです。[505]

後の時代の視点から見ると、私たちはイエスがご自分のチームをもう少し混ぜ合わせてくださったらよかったのにと思うかもしれません。けれども、その象徴的な意味は、異邦人（後に世界の他の地域で福音が届けられることになる私たちのほとんどがそうです）のためというよりは、イエスの本来の宣教の場、つまり、ヘブル語聖書によって世界観が徹底的に形づくられていたユダヤ人のためのものだったことを、受け入れなければなりません。私たちは、イエスが六人の男性と六人の女性、あるいは六人のユダヤ人と六人の異邦人、あるいは六人の年長者と六人の若者、あるいは六人の奴隷と六人の自由人を召されることを好んだかもしれません。けれども、そうしていたら、その象徴は、それが向けられていた当の人々にはまったく伝わらなかったでしょう。

イエスが、将来の指導者を育てることだけでなく象徴性にも心を配っておられたことを示す最大の手がかりは、おそらく、十二人のほとんどがわずか数年後には目立った働きの表舞台から姿を消していくという事実でしょう。確かに、ペテロ、ヨハネ、ヤコブは使徒の働きの中で目立った指導者であり続けますが、残りの使徒たちは二度と名前で言及されることがありません。象徴が優先されていたことのもう一つの証拠は、使徒の働き1章で、ペテロがユダの後任を見つけることにあれほど熱心であることです。それは、12人でできる仕事を11人ではできないと思ったからではありません。そうではなく、十二人の男たちがエルサレムの前に立って、人々を

504. マイケル・バードは“Evangelical Theology”の中で、イエスがその宣教で最初に対象とされた人々、つまりイスラエルにいるユダヤ人の意味についてこう説明しています。「12という数は、イスラエルの12部族を象徴していた。しかし、イスラエルのだれもが、ユダヤ人の部族連合がとうの昔に消え去っていたことを知っていた。北の10部族は8世紀にアッシリア人によって捕囚として連れ去られ、残りの2部族は6世紀にバビロンへ行き、ユダヤに帰還したのはわずかな残りの者だけだった。大きな希望の一つは、救いの時代の夜明けが来るとき、それが、新たにされたユダヤ人の王国の中で12部族が再び一つに結び合わされることを伴う、というものだった（たとえばイザヤ書34章10節、43章5節、56章8節）。12人の弟子を選ぶことによって……イエスは事実上、イスラエルの回復が今や自分と自分の12人の従う者たちを中心に始まった、と言っていたのである。彼らは新しいイスラエルの先駆けだった。だからこそイエスは、新たにされた国を治める12人の弟子を選び（マタイの福音書19章28節／ルカの福音書22章30節）、自分の働きをもっぱらイスラエルに集中させ（マタイの福音書10章5–6節、15章24節）、まもなく多くの人が東からも西からも来て、この重大な出来事に加わるのだと宣言したのである（マタイの福音書8章10–12節／ルカの福音書13章28–30節）。」
505. マタイの福音書18章17節

彼らのメシアのもとへと呼び集めることが重要だと知っていたからです。だからこそ、教会が都に向けて行った最初の説教で、ペテロが福音を宣べ伝えたとき、「ペテロは十一人とともに立ち上がり」[506]と記されているのです。もし「ペテロは十人とともに立ち上がり」だったなら、イエスにとってあれほど大切だった象徴的なメッセージは失われていたでしょう。

最初、ペテロと十一人はエルサレム教会の指導チームとして機能していますが、彼らはまた、自分たちの働きが、新しい教会の牧師として仕えることよりも、新しいイスラエルの先駆けとしてユダヤ人に福音を宣べ伝えることにあると理解しています。だからこそ、仕事の量が増えて牧会上の課題への対処も含まれるようになったとき、彼らは、教会が七人の指導者を選び、協力して教会を導くことを許すのです。[507]牧会的な指導の実務的な側面から自分たちを解放しようとするこの姿勢は、しばらくすると、使徒ではなく長老たちがエルサレム教会を導くようになるという事実によって裏づけられています。使徒の働きが、十二人をこれら後の長老たちとは別の集団としてはっきり区別していることに注目してください。[508]そうであれば、十二人が長老たちからこれほど区別されているのに、なぜ補完主義の学者たちは、使徒が男性であったことを長老が男性であるべきことの論拠として用いるのか、と首をかしげたくなります。[509]

福音がイスラエルの外へ広がり始めると、神は十二人を超えた、より広い使徒の輪を起こされます。そこにはパウロ、バルナバ、シラスが含まれます。このより大きな集団は、もはや十二人に本来備わっていた象徴的なメッセージを担ってはいません。ですから、その中に一人の女性ユニアが含まれていても驚くには当たりません。[510]（彼女については次の章でさらに述べます。）

象徴性はさておき、イエスがご自分の十二人のチームに男性だけを選ばれたことには、戦略的な理由もあったかもしれません。イエスはときに社会的慣習を破ることをいといませんでしたが、だからといって、でたらめにそうされたわけではありません。イエスはしばしば、ご自分の取り組みにおいて戦略的でした。たとえば、カエサルのものはカエサルに返すこと[511]、ご自分の働きの初期の段階では、ご自分

506. 使徒の働き2章14節
507. 使徒の働き6章1–6節
508. 使徒の働き11章30節、15章2節を参照してください。
509. 実際、イエスは将来の教会の長老たちについては何一つ語っておられません。イエスが語られた長老、しかもたびたび語られた長老は、やがてイエスを十字架につけることになるエルサレムの邪悪な長老たちだけです。
510. ローマ人への手紙16章7節
511. マルコの福音書12章17節

がメシアであることが公に認められるのを控えめにされたこと、そして教会がその使命を果たしていく上での、段階的な地理的拡大を計画されたこと[512]においてです。イエスご自身は鳩のように素直であられたかもしれませんが、ご自分が説いたことを実践して、「蛇のように賢く」もあられました。つまり、うぶではなく、実際的な考え方をし、戦略的であられたのです。

イエスの宣教の優先順位はまずイスラエルに届くことでしたから[513]、使徒として異邦人よりもユダヤ人を選ぶほうがおそらく戦略的でした。そして実際、イエスはそうされました。ユダヤ人男性だけを選ばれたことは、イスラエルに届くという当面の優先事項によりよく合っています。また、家父長制の強いイスラエルは、男性による公の働きのほうを受け入れやすかったのです。家父長制の強い世界にあって、女性がこの運動の上級の公的指導者となっていたら、新しい運動とそのメッセージの信頼性に無用の疑いを招くことになったでしょう。（復活の日に、イエスの弟子たちが一人の女性の証言にどれほど抵抗したかを考えてみてください。イエスに従っていない人々なら、どれほどもっと拒んだことでしょう。）このため、使徒の働きでは、復活の主要な公の証人は男性の使徒たちなのです。

確かなことは言えませんが、イエスが男性を選ばれたことには、ほかにも実際的な理由があったのかもしれません。イエスは弟子たちを召し、弟子たちはイエスを「ラビ」と呼びました。こうしてイエスは、ラビが弟子を育てるというユダヤ教の制度を意図的に用いておられたのです。そしてこの制度は、たまたま男性だけの営みでした。また、初期の使徒職には、宣教のために家族を離れることと、殉教する

512. 使徒の働き1章8節
513. マタイの福音書10章5–6節、15章24節を参照してください。

可能性の高さが伴っていました。おそらくイエスは、それを母親たちに求めたくなかったのでしょう。[514]

さらに言えば、イエスの実践からせいぜい推論できるにすぎないことを、絶対的なものとして扱うべきではありません。イエスは、ご自分が建てようとしておられた教会で後に指導する人々の性別について、何ひとつ語っておられません。それどころか、教会の指導についてのイエスの明確な教えは、今日まで諸教会で牧会的指導の優先順位を支える土台となってきましたが、その焦点は、仕える者となることを指導の基盤とし、また強調点とすることにありました。[515]イエスはまた、福音を宣べ伝えること、そして「(イエスが) 命じておいたすべてのことを守る」弟子をつくることを、明らかに優先されました。[516]しかし、よく見てください。これらの奉仕の働きはどちらも、男性に限られてはいません。最初の十二人に限られていないのと同じです。

イエスによる十二人の選びに、さまざまな考えや推論を読み込むことは、イエスが女性たちを力強く奉仕へと解き放たれたあり方と相容れません。それはまた、本文の一貫性を欠いた読み方に基づいています（その読み方は、十二人に本来備わっていたほかのすべての特徴を無視して、性別だけを取り上げているのです)。イエスは徹底して女性の味方であり、奉仕者としての女性の味方でした。それは、歴史上イエス以前に現れたどの公的な人物よりも、はるかにそうでした。イエスは、姉妹たちの翼を切り取っていた家父長制を組織的に打ち壊し、宣教が彼女たちをそこへ導くなら、男性だけのものとされていた役割に入っていく扉を開かれました。ですから、補完主義者たちが、イエスがはっきりと述べることも、ほのめかすこともな

514. たとえばルカの福音書14章26節では、妻と子どもを捨てることには触れていても、夫を捨てることには触れていません。またイエスは、使徒職がおそらく殉教につながることを知っておられました（教会の伝承によれば、十二使徒のうち十一人が殉教しました)。女性たちも時折、いくつかの宣教の旅でイエスに同行しましたが（ルカ8:1–3)、イエスはおそらく、当時の文化で子育てを主に担っていた母親たちに、子どもを永久に残して自分とともに旅するよう求めるのは酷すぎると考えられたのでしょう。イエスは、やがて使徒たちの何人かがイスラエルをはるかに越えて旅することを知っておられました。古代世界では、女性があちこちを旅することははるかにまれでした。女性はより大きな危険にさらされ、また家庭での家事と子育ての責任にはるかに強く縛られていました。ですから、新約聖書の復活後の部分で、確かに旅をしたとわかっている、名前の挙がった女性が四人しかいないのは驚くに当たりません。働きの後期のペテロの妻（子どもたちはもう成長していたのでしょうか)、間違いなく護衛を雇う余裕のあった裕福な後援者フィベ、そしてどちらも夫とともに旅をしたユニアとプリスキラ（子どもについては何も触れられていません）です。興味深いことに、クリュソストモスはマタイの福音書23章14節についての第73説教（Homily 73）で、プリスキラを含め、「男性的な勇気をもって」旅に出たごく少数の女性たちに言及しています。当時の宣教旅行は、軍隊で戦うことと同じように、男性の持つ身体的な強さにより適していました。
515. マルコの福音書10章42–45節
516. マタイの福音書28章19節

さらなかった理由――女性を十二人から外された理由――を沈黙から推論するのは誤りです。この種の除外を広げて、あらゆる時代にわたって女性を指導から締め出すことは、イエスの実践とはなはだしく矛盾します。イエスはしばしば家父長的な規範に逆らい、性別にふさわしい領域などには少しも気を留めずに、女性たちを奉仕へと解き放たれたからです。

女性が最初に

イエスが十二人の男性を選ばれたという事実は、それだけを取り出せば、女性の指導を支持する根拠にはなりません。けれども、イエスが十二人のユダヤ人男性を選ばれた理由を知り、さらにイエスが、一世紀のイスラエルにあった性別による制限など顧みずに女性たちを奉仕へと解き放たれたことを知るなら、この事実は女性の指導に反対する論拠にもならないのです。

女性をいつも最後に置く世界の中で、イエスはしばしば女性を最初に置かれました。イエスの受肉について最初に聞き、福音を宣べ伝えたのは女性でした。[517]サマリア人として最初に回心し、人々の前で伝道したのも女性でした。[518]異邦人として最初に回心したのも、[519]イエスが「よみがえりであり、いのち」であるという啓示を最初に受けたのも、[520]イエスの使命における十字架の中心性を最初に悟ったのも、[521]そしてイエスの復活を最初に目撃したのも、女性でした。[522]補完主義の学者たちは、「アダムが最初に造られ、それからエバが造られた」ことを大いに強調し、最初であることと正当な指導者であることを誤って同一視します。それならば、これらすべての「最初」を彼らはどう考えるのでしょうか？

それにもかかわらず、教会は何世紀にもわたり、ユダ族の獅子の兄弟たちを獅子として扱う一方で、その姉妹たちを飼いならして子猫にしてしまいました。支配を担うのにふさわしいのは男性だけだと考えられてきた、長く悲しい伝統があります。それでも、私たちの世界と教会には、奉仕の権威を行使するキリスト者の男性と女性の両方が必要なのです。

女性を抑圧する世界の中で、イエスの女性への接し方と女性の受け入れ方は驚くほど進歩的でした。ですから、女性の指導と教えの賜物が男性のそれと同等のものと

517. ルカの福音書1章32–35節
518. ヨハネの福音書4章7–42節
519. マタイの福音書15章21–28節
520. ヨハネの福音書11章23–27節
521. マタイの福音書26章7–11節
522. ヨハネの福音書20章16節

してようやく喜ばれ、解き放たれつつある世界史のこの時代に、イエスが私たちを今になって後戻りさせようとしておられるとは、私にはとても考えられません。

そのうえ、イエスが女性のアイデンティティと奉仕を高められたことは、現代社会で女性の地位が高まり、女性が解放されてきたことの主要な根本原因のひとつです。キリスト者は、これを自分たちの福音が社会にもたらした長期的な成果として誇るべきであり、補完主義者がどれほど多くの欠陥ある議論を持ち出そうとも、それに抵抗すべきではない、と私は考えます。実際、これらの議論の目を通して女性を見ることは、イエスが女性をご覧になったように女性を見ることに失敗することなのです。

ついでに言えば、それは、最初期の教会の多くの人々が女性を見ていたように女性を見ることにも失敗しています。



12
初代教会の力ある女性たち

「今日の信者たちは、女性の按手や、女性が男性を教えることなどをめぐって意見が分かれています。しかし〔ローマ人への手紙16章〕は、そのような異論がパウロを当惑させたであろうことを示唆しています……〔パウロは〕女性が教師や指導者、良い知らせを告げ広める者や宣教師となることに、何の問題も感じていません。新約聖書の時代に、女性たちは後に『職務』と呼ばれることになる奉仕を担っていたでしょうか。あらゆる証拠が示す答えは『はい』です。」ウィリアム・ウィット[523]

プロクルステスの寝台

プロクルステス（Procrustes）の話を聞いたことがありますか？　ギリシア神話によれば、彼は疲れた旅人たちをもてなし、自分の家の寝台で眠らせました。そして旅人たちが眠っている間に、その手足を引き伸ばしたり、足を切り落としたりして、体が寝台にぴったり合うようにしたのです。ここから、議論の分野でプロクルステスの寝台と呼ばれる表現が生まれました。ある事柄について一つの見解をとり、実際にはその見解を否定している他の情報源に、その見解を無理やり当てはめることを言います。それは、その情報源にもともとない考えを読み込むこと――引き伸ばしたり、一部を切り落としたりすること――によって行われます。[524]

旧約聖書、福音書、そして新約聖書の他の部分に記された、奉仕する女性たちについての聖書の記述に対する補完主義者の反論を研究してきて、私が驚かされたの

523. William Witt, Icons of Christ, p. 99
524. これは一般に「特別弁護の誤謬」（the fallacy of special pleading）と呼ばれるものです。先に持っていた信念が対立するデータによって正当に揺さぶられていることを認める代わりに、そのデータを「説明して片づけ」ようとするのです。

は、補完主義の学者たちが、ミリアム、フルダ、デボラ、マグダラのマリア、フィベ、プリスキラ、ユニアといった女性たちの役割と貢献を、たゆまず小さく見せようとしていることでした。もちろん、そうするのには理由があります。私の考えでは、彼らのテモテへの手紙第一2章12節の読み方は、奉仕するすべての女性にとってのプロクルステスの寝台なのです。彼らはこの箇所を誤読して、「私は、キリスト者の女性がキリスト者の男性に権威をもって教えたり、牧会的な権威をふるったりすることを許しません」という意味にしています。そして、それを用いて今日の女性の奉仕を制限するだけでなく、聖書に登場するすべての女性の奉仕をも制限し、その枠組みを変えてしまうのです。補完主義者たちにとって、どうしても受け入れられないものが一つあります。それは、聖書の時代の信仰ある女性が、まさに彼らの解釈が「女性にはできない」とすることを行っている姿――神に用いられて、男性を霊的に導いたり教えたりしている姿です。補完主義者は、聖書の証拠をきちんと調べる前から、すでに決めてしまっています。デボラが神の民の公的な指導者であったはずはない、あるいは（この章で見るように）プリスキラが夫とともに諸教会を牧会し、教えたはずはない、あるいはユニアが道を切り開いた女性の使徒で、しかも際立った使徒であったはずはない、と。

これらの、また他の聖書の女性たちを自分で研究する中で、私が彼女たちを本当に「見る」ことができたのは、問題は彼女たちの奉仕の大きさではなく、補完主義のテモテへの手紙第一2章12節解釈という寝台の、恣意的な大きさにあるのだと気づいたときでした。この解釈のために、補完主義の学者たちは、私たちに与えられている聖書のデータを「説明して片づける」ための、ありとあらゆる推論をするのです。たとえば、ケビン・デヤングがプリスキラの奉仕をどうまとめているか、聞いてください。「彼女は学識があり、賢く、影響力があったかもしれません。しかし、彼女が男性に対して教える権威を行使したことを示すものは何もありません。」[525]

テモテへの手紙第一2章が何を言っているにせよ、私たちはそれを聖書全体に照らして解釈しなければなりません。それはつまり、「聖書正典が描く贖いの弧、イエスの奉仕の軌跡、そしてパウロ自身から受け取る初代教会の生活の姿」を真剣に受け止めることです。[526]

私がこの本を書いた動機の一つは、今日と明日の諸教会にいる姉妹たちの、正当な指導と教えの賜物を擁護したいということでした。けれども、補完主義の学者たち

525. 出典：www.bit.ly/3nXd763
526. エイミー・エティクソン（Amy Etikson）の言葉です。出典：www.bit.ly/2ZQo0Pj (p. 61)

が聖書の女性たちの指導と教えの賜物を削り取っていくやり方を研究するうちに、私は聖書の中の姉妹たちをも擁護せずにはいられなくなったのです。

プリスキラは男性を教えるとき、自分が夫の覆いの下にいるよう気をつけていたのでしょうか？　あるいはそれは、正式なキリスト者の集まりの外で、私的に行われていたのでしょうか？　あるいは彼女は教理的な権威をもって語ることはせず、代わりに、いちばんよくわかっている教会の男性牧師たちのところへ彼を行かせたのでしょうか？　私たちはそう信じるべきなのでしょうか？　デボラは、自分の指導が私的なものにとどまるように、あるいは神が本当に選ばれた指導者であるバラクの下に収まるように、指導したのでしょうか？　私たちはそう信じるべきなのでしょうか？　いいえ。プリスキラやデボラ、その他の女性たちの奉仕を描く箇所を素直に読むなら、わかることはこうです。彼女たちは、いわゆる補完主義の神のご意向から罪深くも外れていたのか、あるいは、こちらのほうがはるかにありそうなことですが、これらの聖書の女性たちは、女性が男性を霊的に教えたり導いたりしてはならないという神の規則など、まったく知らなかったのです。

女性牧師はいなかったのか？

使徒の働きを通読すれば、福音がエルサレム、次にサマリア、そしてヨーロッパの町々――ピリピ、テサロニケ、ベレア、アテネ、コリント――へと一つずつ広がっていく、そのどの段階でも、女性が鍵となる回心者として繰り返し言及されていることに、きっと気づくでしょう。[527]けれども、ルカはこれらの初期の教会の物語を語り直すにあたって、まず十二使徒の指導者ペテロの働きに（使徒の働き1–12章で）、次に、より広い使徒の輪の中で最も実りの多かったパウロに（使徒の働き13–28章で）焦点を当て、たとえばステパノ、ピリポ、バルナバなどには副次的な注意を払うにとどめています。そのため、聖書をざっと読むだけの読者の多くは、ほかの人々――その中には多くの女性も含まれます――が果たした力強い奉仕の役割に気づかない傾向があります。

補完主義の学者たちも、こうした女性たちの貢献の大部分には少なくとも気づいています。その代わりに彼らが注目するのは、これらの女性の誰一人として、教会の長老や牧師だとはっきり名指しされていないことです。こうした女性たちが福音の前進や教会の成長のためにどれほど多くのことをしたとしても、彼女たちは教会で

527. 使徒の働き5章14節、8章12節、16章13–15節、17章4、12、34節および18章2節

上位の牧会的権威や教える権威を行使しなかった、と彼らは言います。彼ら自身の言葉で言えば――ここにあるのはシュライナーのプロクルステス的な発言です――「教会における女性の奉仕は注目に値する重要なものでした。しかし、それが男性の指導に取って代わることは決してありませんでした。むしろそれは、男性の指導を支えるものとして機能したのです。」[528]

この章では、初代教会で女性たちが果たした力強い貢献のいくつかを概観することによって、この主張に応えます。また、新約聖書には女性の教会指導者が一人も名指しされていないという補完主義の主張、そして神の国への貢献の最も高いレベルで、ほかの男性たちと肩を並べた女性は一人もいなかったという主張にも、真っ向から異議を唱えます。

しかしまず、「長老」と「牧師」という用語について、簡単に明確にしておきましょう。今日、教会がどのような政治形態をとっているかによって、私たちは牧師や長老についての聖句を異なって読みがちです。「牧師」と「長老」の役割を分けている教派もありますが、この章では、新約聖書は「長老」「牧師」「監督」という用語を互換的に用いて、同じ人の異なる働きを指している、という理解に立ちます。[529]

旧約聖書も新約聖書も、羊の世話をする羊飼いの比喩を霊的指導者の役割に当てはめています。聖書には女性の羊飼いがいたにもかかわらず、[530]なぜか補完主義者たちは、聖書には女性の牧者（牧師）はいないと確信しがちです。十年間、私は私たちの教会の新会員に、なぜ私たちが女性牧師を任職しないのかを、このように説明していました。「新約聖書には女性牧師も長老もいません。そして私たちは、教会のあり方において聖書を越えたくはないのです。」私の記憶が正しければ、私はこれを著名なある神学者から得ました。その人はさらに強い言い方をしていました。「新約聖書のどこにも、女性の長老への言及はありません。これは沈黙からの議論だと指摘して、異議を唱えたいかもしれません。そのとおりです。しかしそれは、耳をつんざくような沈黙なのです。」[531]

調べを進めるうちに、私は初代教会で名前の挙げられている男性の長老や牧師が誰なのか、興味を持つようになりました。少なくとも十人は見つかるだろうと思っていました。ところが驚いたことに、名前の挙がっている長老はたった一人しかいな

528. “Recovering Biblical Manhood and Womanhood”, p. 216.
529. 使徒の働き20章17、28節、ペテロの手紙第一4章1–2節、テトスへの手紙1章5–7節を参照してください。
530. 創世記29章9節、雅歌1章5–8節
531. サム・ストームズ。出典：www.bit.ly/3CL3GNt

かったのです。使徒ペテロが「長老である仲間たち」に呼びかけています。[532]これによってペテロは、自分が主として使徒であったにもかかわらず、働きの後期には長老を兼任していたかもしれないことをほのめかしているようです。ただし、ペテロは職務ではなく年齢のことを言っていただけかもしれない、と示唆する聖書学者もいます。

すぐに明らかになるのは、新約聖書は、ペテロ以外には牧師や長老の名前を一つも挙げておらず、そのペテロでさえ長老ではないかもしれないということです！　それでも私たちは、新約聖書に出てくる多くの、あるいはおそらく大部分の教会が、やがてそうした人々のチームによって導かれるようになったことを知っています。[533]可能性のあるペテロを除いて、なぜ誰一人として長老と名指しされていないのかは謎です。明らかに、この種の情報は、新約聖書のさまざまな著者たちの視野と目的の外にあったのです。それでも私たちは考えずにはいられません。新約聖書の初代教会で名前の挙がっている多くの人々のうち、牧師や長老であった可能性が高いのは誰でしょうか？　ありがたいことに、それが誰であり得たかについては、いくつかの証拠があります。

長老だった可能性のある人を見分ける基準

初代教会に女性の長老がいなかったと断言できる補完主義の学者は、いないと思います。せいぜい言えるのは、いた可能性は低いということです。しかし私はこれから、その見方とは逆に、女性の長老がいた可能性は極めて高いと論じます。

使徒の働きのルカも、手紙の中のパウロも、長老や牧師の名前を挙げてはいませんが、それらの長老が誰であったかについての強力な手がかりを与えています。新約聖書で名前の挙がっている人物が、教会の上級指導チームで仕える牧師であったかもしれないことを示す主な指標が五つある、と私は提案します。

第一に、逮捕された人々は、おそらく表立った指導者、教師、あるいは牧師でした。教会史のある時期に迫害が起こり、ある教会の誰かが逮捕されたとすれば、そ

532. ペテロの手紙第一5章1–2節。イエスは「私たちのたましいの牧者であり監督者」と呼ばれていますが（Ⅰペテロ2:25）、これは教会全体に対するイエスの唯一無二の指導を指しています。ヨハネは個人に宛てて書く際に自らを「長老」と呼んでいますが（Ⅱヨハネ1:1）、これはむしろ、経験を積んだ使徒としての年齢と知恵を指している可能性が高いでしょう。
533. 使徒の働き14章23節、テサロニケ人への手紙第一5章12節、テモテへの手紙第一5章17節を参照してください。

れはおそらく、その人が疑いをかけられた共同体の首謀者か、公の代弁者と見なされたからだ、と考えるのは正しいでしょう。

第二に、最初の回心者、つまりすでに使徒から教えを受けていた会員たちは、その後の回心者の世話と弟子訓練のために、使徒たちがまず選ぶ人々となる傾向がありました。使徒の働き、パウロのコリント人への手紙、そして教父クレメンスの著作には、これが一般的な慣行であったという証拠があります。

第三に、教会を迎え入れていた家の長は、おそらくその教会の指導者でした。独自の専用施設を持つ現代の教会とは違い、初代教会の多くは通常より大きな家を拠点としていて、その世帯全体と、集会のためにやって来るほかの人々から成っていました。パウロはテモテへの手紙第一3章で、こうした家の長たちの中から長老を選ぶのがよいと考えています。ですから、多くの家の教会の指導者が、実際に教会の指導者であったと考えてよいでしょう。

第四に、教会を開拓し、そこに回心者を集め、彼らを確立し、教えた人々は、おそらく教会の指導者でした。これは、正直に言って、難しい話ではありません。ピリポのような伝道者や、パウロのような使徒が教会を立ち上げ、それから別の地へ移って、ほかの指導者たちに教会を託す場合もありました。しかし時には、人々が教会を始め、その後も引き続きその教会の人々を導き、教えることもありました。

第五に、パウロのローマ人への手紙16章のリストに挙げられた人々の多くは、おそらくローマの教会の指導者でした。パウロは手紙の終わりに、27人ほどの名前を挙げています。これは新約聖書の中で最も長い名前のリストです。パウロはその多くに、自分自身と、異邦人への宣教という最前線の働きで最も密接に協力した人々に用いるのと同じ言葉を当てています。こうして呼ばれた人々の何人かがローマの教会の指導チームにいた、というのは大いにあり得ることです。

これら五つの基準が初代教会における指導の有効な指標であると認められるなら、手紙と使徒の働きを見直すとき、次のことがわかります。長老や牧師であった可能性が最も高い、名前の挙がっている男性一人ひとりに対して、資格や働きの点でそうした男性と一つひとつ対応する、名前の挙がった女性が一人以上見つかるのです。お見せしましょう。

迫害の標的

どんな集団を迫害する場合でも、ほぼ例外なくとられる方法は、その指導者たちを狙い撃ちにして、脅したり逮捕したりすることです。使徒の働きでペテロとヨハネが、次にパウロとシラスが、逮捕と投獄のために狙い撃ちにされるのはそのためです。それは理にかなっています。彼らはみな、当時仕えていた教会の主要な指導者、教師、伝道者だったからです。

それならば、なんと興味深いことでしょう。エルサレムで教会指導者ステパノが処刑された後、サウロは近隣の町々でキリスト者への迫害を続けようとします。聖書はこう語ります。「サウロは教会を荒らし……男も女も引きずり出して、牢に入れた。」[534]実際、これは後に彼の証しの一部となりました。彼は自分自身が裁判にかけられたとき、迫害して「男も女も捕らえた」ことを振り返っています。[535]パウロの考えでは、彼が迫害した生まれたばかりの諸教会の多くの女性たちは（単なる料理や掃除、子育てではなく）重要な働きを担っていたので、彼女たちを捕らえなければこの運動を止めることはできない、と結論したのです。N・T・ライトはこう述べています。「これは、女性たちもまた指導者、共同体の中で影響力のある人物と見なされていた場合にのみ、意味をなします。」[536]これは、これらの女性の誰かが教会の上級指導チームの一員であったという確証にはなりません。しかしそれでも、注目度の高い伝道、教え、あるいは指導の役割を担っていた女性でなければ、標的にされる理由はなかったはずです。

教会の「初穂」となった女性たち

パウロと使徒たちは、生まれたばかりの教会の最初の回心者や最初の会員を、指導者として選ぶのが常でした。成熟した教会には「信者になったばかりの人でない」指導者を選ぶ余裕がありましたが、生まれたばかりの教会にも、何らかの指導は必要だったのです。

534. 使徒の働き8章1、3節
535. 使徒の働き22章4節
536. www.bit.ly/3BEnYqo を参照してください。

ローマのクレメンス（Clement of Rome）は紀元95年に、使徒たちが自分たちの「初穂」を教会の指導者として選ぶ習慣を持っていたと記録しています。[537]このことは使徒の働き14章23節で確かめられます。そこでパウロは二度目の訪問の際、わずか数か月前の前回の旅で得た回心者たちの中から牧師を任命しています。また、多くの解釈者がステファナをコリントの長老であったと考えるのもそのためです。パウロはそこの教会に、「最初の回心者」（直訳「初穂」）であり、「聖徒たちのための奉仕」の優れた模範でもあった「このような人たちに従う」よう勧めているのです。[538]したがって長老は、必ずしもほかの人々より年長だったわけではなく、霊的に（たとえほんの少しであっても）より熟練していたのです。彼らはまた、教会を開拓した使徒が最初にまとまった教えを授けたとき、その場に居合わせていました。

それならば注目すべきなのは、教会の最初の回心者や会員が女性であったことが何度もあったという点です。たとえばリディアは、ヨーロッパにおけるパウロの最初の回心者であり、ピリピの教会の最初の会員でもありました。その教会は彼女の家で集まってもいました。[539]

家の長として教会を迎え入れた女性たち

裕福で尊敬される家の長であり、自宅に教会があったピレモンが、おそらくコロサイの教会の長老だったことを、誰が否定できるでしょうか？　何しろ私たちは、パウロが彼を主に導いたこと、[540]それもおそらくエペソでのことであったこと、[541]そしてパウロが教えによって彼を確立した後、その教会で仕えるために彼をコロサイへ送り、そこで彼を、聖徒たちを愛する「同労者」として認めたことを知っているのです。[542]

しかし、ちょっと待ってください。（一部の教父たちがそうしたように[543]）ピレモンがコロサイの長老だったと言えるのなら、ニンファはどうでしょうか？　何しろ私たちは、彼女がコロサイのもう一つの家の教会を導いていたことを知っているの

537.「使徒たちは地方や町々を巡って宣べ伝えながら、最初の回心者たちを――御霊によって吟味したうえで――将来の信者たちのための監督……に任命しました。」（1 Clement 42）
538. コリント人への手紙第一16章16–17節
539. 使徒の働き16章13–40節
540. ピレモンへの手紙3、8–9、19節
541. 使徒の働き19章9–10節
542. ピレモンへの手紙1、5、7節
543. たとえば www.bit.ly/3CN1tRo の第46段落（XLVI）を参照してください。

です。[544]使徒の働きは使徒たちによる辺境での伝道と世界宣教の働きに焦点を当てていますが、地域教会での奉仕の重要性についても十分な手がかりを与えています。それならば印象的なのは、これらの家の教会が男性だけでなく女性によっても迎え入れられ、おそらくは導かれてもいたということです。

補完主義の学者たちはよく、家の教会の指導者を、「来週は誰の家で集まろうか？」と尋ねるような現代のスモールグループのホストと誤って比べることで、この点を退けます。しかしこれは、一世紀の世帯というものの性質についての無知を露呈しています。ギリシア・ローマ時代の家の長はたいてい男性で、paterfamilias（家長）と呼ばれていました。しかし夫が亡くなり、最年長者が女性であれば、彼女がmaterfamilias（女家長）としてその家を率いました。家の長は、子ども、親族、奴隷、借家人など、その家に住む人々を当然のこととして監督しました。家の長には、良い人間関係を築く力、組織力、管理能力が必要であり、[545]また教え、しつけ、養い、物的資源を管理する能力も必要でした。ですから、少なくともいくつかの場合には、家の長であることが、その家にある教会の指導者の最有力候補となることにつながった、と推測できます。ニンファは、ただ扉を開いただけではありませんでした。何しろ家の教会は、地域での伝道と回心者の弟子訓練の拠点となっていたのであり、そのすべてに指導と訓練と資源の提供が必要だったのです。「新約聖書の時代に行われていた迎え入れは、長期的で戦略的な活動拠点を築くことであり、そこでは家の主人が、教会の目標が成功するか失敗するかの鍵を握っていました。」[546]

そうした人々が、敬虔さにおいて実績があり、福音にしっかりと根ざしていたなら、牧会的指導の理想的な候補者だったでしょう。テサロニケ人への手紙第一5章12節に挙げられている、牧師の三つの働きを考えてみてください。「労苦している人たち」（ギリシア語kopiōntas）、「あなたがたを世話している人たち」（ギリシア語proistamenous）、そして「あなたがたを諭している人たち」（ギリシア語nouthetountas）です。「労苦する」とは、実際面と霊的な面の両方で働きを支えるために必要な、肉体的な労働を指しています。[547]「世話をする」とは、共同体に方向を示し、それを管理し、その幸いに責任を負うことを意味します。[548]「諭

544. コロサイ人への手紙4章15節。ニンファは男性だったかもしれないと論じる学者たちは、「教会は『彼女の』（autēs）家で集まっていた」と記している、現存する最良のギリシア語写本を用いていません。
545. パウロがテモテへの手紙第一5章14節で、materfamiliasに「家を治める」こと、文字どおりには家の「専制君主」（despot）となることを勧めているのはそのためです。
546. ジェイミン・ヒューブナー。出典：www.bit.ly/3BNaSY8
547. テサロニケ人への手紙第一2章9節および3章5節を参照してください。

す」には、矯正のための教えが含まれます。[549]現在形が用いられていることは、これらの責任が散発的なものではなく、継続的なものだったことを示しています。しかし、よく見てください。これらはまさに、良い家の長が優れていたはずの技能と能力なのです。さらに家の主人は、その家で起こることについて、周囲の共同体に対しても責任を問われました。[550]ですから一般原則として、「家の主人は教会における指導の権威を得ていたようです。」[551]

ギリシア・ローマ世界の初期の状況と一世紀の教会の形の専門家であるブライアン・キャッパー（Brian Capper）は、ある町の教会は一つ以上の家の教会から成っていたと指摘し、次のように結論しています。

パウロの諸会衆の「細胞状の」構造から……地域の指導者が複数いた理由が見えてきます。それぞれの小グループは、キリスト教共同体のある指導者の家で集まっていました。そうした指導者の一人ひとりが長老／監督であり、それぞれの町には複数の長老／監督がいたのです。……古代世界において、家の主人が、自分が迎え入れるあらゆる集まりの最終的な管理を委ねられていたことは確かです。それが慣習であり、一般的な礼儀でした。自分の家で教会の集会を迎え入れた初期キリスト教の家の主人たちは、常に信仰において先輩であり、地域で福音を後援する人々だったので、地域レベルで会衆を率いる人物となりました。社会的地位、成熟、寛大さ、カリスマ、そして使徒による任命が合わさって、こうした地域の福音の後援者たちに権威を与えたのです。……長老にとって、教会はまったく単純に自分の世帯の延長でした。彼らは自分の家で教会を迎え入れていたからです。[552]

このことは、古代の文脈により近い、後の家父長的な読者たちが、女性が家の教会を迎え入れていたという記述にためらいを覚えた理由を説明しています。たとえば写字生たちは、ニンファの明らかな指導的役割にあまりにつまずいたので、その中には彼女の名前を男性化し、「彼」をニンファス（Nymphas）と呼ぶ者もいました。彼らにとっては、聖書の登場人物の性別を変えてしまうほうが、女性牧師を認めることよりも受け入れやすかったのです。

つまり、公の領域で女性の地位が一般に低かったにもかかわらず、人々を迎え入れられるほど大きな家を持つmaterfamiliasは、paterfamiliasと同じ技能を持ち、教

548. 同じ言葉が、ローマ人への手紙12章8節の「指導する賜物」に関わる働きにも、また自分の家をよく「治めた」勤勉な家の長すべてに期待されたことにも使われています。
549. コリント人への手紙第一4章14節を参照してください。
550. 一例として使徒の働き17章5–7節を参照してください。
551. www.bit.ly/3bHJPmo
552. www.rb.gy/cmxtqm

会の指導の働きに同じようにふさわしかったはずだ、ということです。それならば私たちの関心を引くべきなのは、新約聖書が、教会が集まっていた家々を詳しく述べる際、男性よりも女性の名前を多く挙げていることです。ニンファやリディアだけではありません。家がエルサレムの教会の拠点となっていたマルコの母マリア、[553]その家の人々が文字どおり「クロエの家の者たち」と呼ばれ、コリントの教会についての懸念を報告するためにパウロのもとへ旅して来たクロエ、[554]後ほどすぐに取り上げるプリスキラ、[555]そしておそらくは、「選ばれた婦人」と呼ばれる、名前の挙がっていない女性の家の教会指導者もいます。[556]

ある女性の教会開拓者

牧師であった可能性が高いもう一つの例は、教会を創設して導いたものの、使徒ではない人です。男性の例から始めましょう。使徒の働きの中で最も目立つ例はアキラです。彼はコリントでパウロとともに教会を始めるのを助け、自宅で教会を迎え入れ、その働きを経済的に支えました。[557]パウロのもとで18か月訓練を受けた後、彼はパウロとともに船出しました。「彼らはエペソに着き、パウロはアキラをそこに残した」のです。[558]それは、地元の会堂でユダヤ人に向けて語られた一度の伝道説教から生まれた回心者たちの世話をするためだったようです。[559]パウロが不在だった6か月から12か月の間、アキラは自宅で教会を迎え入れ、その教会は増えていく「兄弟姉妹たち」から成っていました。[560]彼は会堂に通い続け、福音に関わってくれそうな、受け入れる心のある人々を探しました。それがわかるのは、ある安息日に彼が驚くべき人物に出会ったからです。「アレクサンドリア生まれのアポロ」は「学識のある人で、聖書に通じていた。この人は主の道について教えを受け……イエスのことを正確に教えていたが、ヨハネのバプテスマしか知らな

553. 使徒の働き12章12節
554. コリント人への手紙第一1章11節
555. ローマ人への手紙16章3節
556. 補完主義者たちは「選ばれた婦人」は教会そのものを指すと主張します。しかし公平に言って、それでは「選ばれた婦人」がなぜ「彼女の子どもたち」と区別されているのか（Ⅱヨハネ1）、またヨハネがヨハネの手紙第三の宛先である個人ガイオにあいさつするのと同じやり方で、なぜ「彼女」に呼びかけているのかが説明できません。Scott McKnight, “The Elect Lady,” Patheos (blog), September 18, 2014, www.bit.ly/3CMNSd1 を参照してください。
557. 使徒の働き18章1–3節
558. 使徒の働き18章18節
559. 使徒の働き18章19–21節
560. 使徒の働き18章27節

かった。彼は会堂で大胆に語り始めた。それを聞いた……アキラは、彼を〔自分の〕家に招き……」[561]

アポロは旧約聖書を知っていて、イエスが旧約聖書で約束されたメシアであると悟るのに十分なことを聞いていたようですが、その神学にはまだ欠けがあり、アキラはそれに気づきました。アキラは彼を家に招き、「神の道をもっと正確に説明した」のです。「説明した」という言葉（ギリシア語exethento）は「教える」という言葉と同義で、ローマでのパウロの働きを描くのにも用いられています。そこでパウロは「朝から晩まで」「神の国について説明」していました。[562]アキラの優先事項は、単に回心者を集めることではなく、福音の使者を送り出すことでした。そこで彼はアポロに別の町へ行くよう勧め、そこでアキラがアポロに施した神学の訓練は大きな実を結びました。[563]

アキラはコリントの教会の、そしてさらに確実にはエペソの教会の、長老または牧師だったのではないでしょうか？　新約聖書は、誰かが「教会を開拓する」とか「教会を導く」といった用語をどこにも使っていませんが、それでもこれはまさに、アキラがしている働きなのです。

そしてここで、話は思いがけない展開を迎えます。私は前の段落で意図して彼女の名前を省きましたが、使徒の働き18章は、アキラの名前を注意深く妻プリスキラの名前と組にしています。アキラがしたことはすべて、プリスキラもしたのです。コリントで教会を迎え入れ、天幕作りとしての共同の働きでそれを支えたのは、二人ともでした。パウロとともに船出したのも二人ともでした。福音の拠点を築くためにパウロがエペソに残したのも二人ともでした。新しい回心者を自分たちの家に集めたのも二人ともでした。地元の会堂でまだ信じていない人々に手を差し伸べたのも二人ともでした。アポロを教えたのも二人ともでした。

使徒の働き18章とほかの箇所の証拠に基づけば、[564]アキラがエペソの長老または牧師だったことは、ほぼ確実だと言えます。彼は、新約聖書の中で私たちが持っている最も有力な候補者なのです！　それでも同じ本文の証拠に基づけば、彼が妻よ

561. 使徒の働き18章24–26節
562. 使徒の働き28章23節
563. 使徒の働き18章27–28節
564. ここでは使徒の働き18章を深く掘り下げませんが、私は別の場所で、エペソの教会におけるこの夫婦の教え、教会開拓、教会指導の役割について、はるかに多くの証拠を示し、またそれに反するとされる証拠にも答えています。www.terranwilliams.com に掲載した私の記事“Was Priscilla a pastor?”（www.rb.gy/ttr2do）を参照してください。その中で私は、マーク・エリス（Mark Ellis）が「プリスキラが牧師だという考えを正そう」（disabuse Priscilla as a pastor）とした試みに反論しています。

りも高い霊的地位や教会の指導的地位を得ていたと疑う理由はありません。むしろ二人は――堕落前のアダムとエバのように――召しと奉仕において対等な者、パートナーとして機能していたのです。

ローマ人への手紙16章の同労者たち

ローマ人への手紙16章で、パウロはローマの教会の27人に名前を挙げてあいさつしています。初期の教会の多くはとても小さかったので、これらの人々の何人かは、きっとその教会の指導チームの一員だったはずです。しかし、それは誰だったのでしょうか？　最良の手がかりは、パウロがリストの一部の人々にだけ当てている、「主にあって労苦している人たち」（ギリシア語polla ekopiasen en kyrio）と「同労者」（ギリシア語synergos）という呼び名です。それがわかるのは、パウロがほかの箇所で、自分のチームの最も重要な人々にこれと同じ言葉を用いているからです。パウロはテモテ、アポロ、ウルバノ、テトス、エパフロディト、マルコ、エパフラス、ルカを自分の「同労者」と呼んでいます。[565]彼らは、福音が広がるのを見るという企てにおける、パウロの主要なパートナーたちです。パウロはまた、「労苦する」という動詞を、指導にふさわしい人々を示すため、また長老職の重要な働きを示すために、しばしば用いています。[566]それはまた、パウロが自分自身の働きを描くときに好んで用いる言い方でもあります。[567]

明らかに、パウロには「牧師」（教会を拠点とする人々の場合）や「宣教師」（新しい地域へ送り出される人々の場合）といった奉仕の肩書きを使う習慣はなく、むしろ彼らを「主にあって労苦する」「同労者」として語っています。実際、パウロはコリント人への手紙の中で、教会が従うべき人々を描くのに、この二つの言葉を両方とも用いています。[568]

興味深いことに、ローマ人への手紙16章のリストには、これらの言葉や、本格的な奉仕への貢献に関わるほかの言葉で描かれている人が10人います。次に言うことは、座って聞いたほうがいいかもしれません。この10人のうち7人は女性なので

565. ローマ人への手紙16章21節、コリント人への手紙第一3章9節、ローマ人への手紙16章9節、コリント人への手紙第二8章23節、ピリピ人への手紙2章25節、コロサイ人への手紙4章11節、ピレモンへの手紙24節を参照してください。
566. テサロニケ人への手紙第一5章12節
567. コリント人への手紙第一4章12節、15章10節、ガラテヤ人への手紙4章11節、ピリピ人への手紙2章16節、コロサイ人への手紙1章29節、テモテへの手紙第一4章10節
568. コリント人への手紙第一16章16節

す！　挙げてみましょう。プリスキラは「同労者」と呼ばれ（3節）、マリア（6節）、ツルファイナ、ツルフォサ、ペルシス（12節）は「主にあって労苦した」と言われています。ほかに特筆すべきは、使徒であるユニア（7節）、そしてケンクレアの教会の執事であり（1節）[569]、パウロの後援者、パトロンでもあった（2節）フィベです。またフィベは、パウロから託されてローマへ旅をした人でもあります。それも、さあ太鼓を鳴らしてください、ローマ人への手紙そのものを携えて、です。

これらの言葉のいくつかは、ほかの教会のほかの女性たちにも当てられています。パウロは二人の女性、ユウオディアとシンティケを敬い、「福音のために〔私と〕ともに戦ってくれた」「同労者」として称賛しています。[570]「戦った」に当たるギリシア語（synēthlēsan）は、勝利を得るためにあらゆる筋肉を張りつめる運動選手や兵士のたとえを用いています。言い換えれば、パウロは、キリストの働きに対する彼女たちの献身を、自分自身の献身と同等のものとしているのです。[571]

N・T・ライトはこう言います。「私は以前、ローマ人への手紙16章はこの手紙の中で最も退屈な章だと思っていました。しかし今、その名前を調べ、それについて考えてみると、イエスとパウロ両方の教えが実際にどれほど力強く実践されていたか

569. ここでフィベを簡単に称えておきましょう。彼女は、キリスト教の歴史において記録に残る最初の「執事」です。ただし、彼女が本当に執事だったかどうかを議論する学者もいます。「diakonos」という言葉は時に「しもべ」を指し、ピリピ人への手紙1章1節に出てくる執事の職を指すとは限らないからです。しかし彼女は「ケンクレアにある教会の」diakonosです。新約聖書の中で、この言葉が特定の地域教会と明確に結びつけられているのはここだけです。もしパウロが単に「しもべ」の意味で言ったのなら、「仕える者」（diakoneo）（ローマ15:25）のような動詞形や、「奉仕」（diakonia）（Ⅰコリント16:15）という一般的な言葉を使ったでしょう。現在分詞（執事であること）は、継続的な奉仕を指しているようです。このことは、「ケンクレアにある教会の」という限定と合わせて、教会の中で認められた職務を指し示しています。N・T・ライトは、この言葉に「執事」以外の意味を持たせようとする試みは失敗すると言います。それを「しもべ」と訳しても、問題を一段階先に押しやるだけです。なぜならそれは、「フィベが教会に雇われた有給の職員だった（何をするために？）か、あるいは、ほかには知られていない『しもべ』と呼ばれる奉仕の職制があったかのどちらかを意味することになる」からです。クレイグ・キーナーはこう指摘しています。「もしこの箇所が女性を指していなかったなら、ほとんどの読者はここでその意味〔執事〕を当然のこととして受け取ったでしょう。」この言葉は一般に「みことばに仕える者」を意味します。パウロは福音の使徒としての自分自身にこの言葉を七つの箇所で当てはめ（Ⅰコリント3:5；Ⅱコリント3:6；6:4；11:23；エペソ3:7；コロサイ1:23、25）、また福音における自分のパートナーたちにも用いています（エペソ6:21；コロサイ1:7；4:7；Ⅰテサロニケ3:2；Ⅰテモテ4:6）。これらすべては、彼女が自分の教会の中で、認められた奉仕、あるいは責任ある地位を持っていたことを示しています。

570. ピリピ人への手紙4章3節

571. この二人の女性は教会で非常に目立つ存在だったので、彼女たちが互いに対立したとき、パウロは一致の大切さについて、一通の手紙全体――ピリピ人への手紙――を書く必要があったのです。

に打たれるのです。」[572]こうして呼ばれている女性たちのリストは、彼女たちと男性たちの間に、地位や奉仕の区別がなかったことを、まったく紛れもなく示しています。

パウロが奉仕の呼び名をもって敬っている、ローマの教会のこれらの女性たちの少なくとも何人かが、教会の上級指導チームにいたということは、あり得ることではないでしょうか？　いや、むしろ確からしいことではないでしょうか？　とりわけ、彼女たちの大部分がその教会を拠点としていて、移動する宣教師ではなかったことを考えればなおさらです。シンシア・ウェストフォールはこう言います。「一世紀のキリスト教において、これらの言葉は、後に按手を受けた聖職者となるものと密接に対応しています。パウロは、指導者たちを敬うときに一貫してこれらの言葉を用いているようです。」[573]

古代の地中海社会では、女性にはほとんど社会的な力が与えられていませんでした。それでも、社会状況が女性に公の発言の場や共同体の指導における意味のある役割を与えることのほとんどなかった、あの極めて男性優位の世界で、どれほど多くの女性がキリストのために重要な奉仕に踏み出し、そのことで使徒パウロに称賛されていたか、見てください。女性に敵対的な文化の中でさえ女性たちが奉仕において花開くことができたのなら、私たちの文化の社会状況がもはやそれを阻まなくなった今、女性たちはどれほど力強く神の国に貢献するために立ち上がることができるでしょうか？

しかし、話を先走ってしまいました。まとめましょう。新約聖書はその教会の牧師たちの名前を挙げていません。しかし私の主張では、新約聖書はそれが誰であり得たかについて、五つの大きな手がかりを与えています。最もひどい迫害を受けた人々、信仰において最初の者であったため他の人々を弟子として育てることができた人々、自分の世帯を教会の拠点に変えた人々、教会を開拓した人々、そして／あるいは、ローマ人への手紙16章で、奉仕の働きにおける最高の栄誉をもって呼ばれた人々です。

これはどれも反論の余地のない証明ではありませんが、それぞれの手がかりによって、そうした人物が自分の教会の指導チームにいたということは、かなり説得力のあるものになります。さて、まだ座っていてくださるとよいのですが。この五つのカテゴリーのすべてに名前が浮かび上がる女性が一人いるのです。

572. www.bit.ly/3URMrTN
573. Cynthia Westfall, Paul and Gender, ch. 8.

プリスキラ

プリスキラは迫害の主要な標的だったでしょうか？　そうです。パウロは、彼女が福音においてパウロと協力することで「自分のいのちを危険にさらした」と語っています。[574]これは、教会の奉仕における彼女の存在感が、敵対的な当局の注意を引くほど高かったという事実を指しています。

彼女は、新しい信者を弟子として育てることのできる「初穂」だったでしょうか？　そうです。彼女は夫とともに、コリントとエペソの両方の教会のまさに最初の会員であり、どちらの教会でも霊的に最も熟練した人の一人でした。さらにエペソでは、パウロの不在中に、最初の数人の回心者を世話し、弟子として育てる比類のない資格を持っていました。その回心者たちは、パウロが地元の会堂を短く訪れた間に信仰に入った人々で、後に（ほかの）エペソの牧師となったようです。[575]

彼女は家の教会の指導者だったでしょうか？　そうです。実際、彼女が少なくとも三つの異なる教会――コリント、エペソ、ローマの教会――で、自分の世帯を教会の活動拠点に変えたという聖書の証拠があります。

彼女は教会を開拓したでしょうか？　そうです。特にエペソで、彼女と夫は、現代の教会開拓者がするであろうことをすべて行いました。働きを始める助けとなるために新しい地域へ移り住み、伝道し、回心者を集め、彼らを神学的に教え、奉仕のために育て、宣教へと送り出したのです。

彼女はローマ人への手紙16章のリストで「同労者」と呼ばれているでしょうか？　これもまた、そうです。実際、ローマの教会であいさつされているすべての人々の中で、彼女の名前が最初なのです！　彼女の奉仕はあまりによく知られていたので、パウロは彼女に感謝を述べるだけでなく、「異邦人のすべての教会」からの感謝をも彼女に伝えています！[576]

結論として、私は次のことを申し上げます。プリスキラが五つのカテゴリーのすべてに見いだされるという事実は、彼女が一つ以上の教会の上級指導チームで仕えて

574. ローマ人への手紙16章3節
575. www.rb.gy/ttr2do にある私の記事“Was Priscilla a pastor?”を参照してください。その中で私は、使徒の働き18章17–19、27節および20章18節に基づいて、パウロがエペソの会堂から得た自分のまさに最初の回心者たちを、彼らがプリスキラとアキラとともにエペソの教会の牧師となるときまで、プリスキラとアキラの世話に委ねたのだと論じています。
576. ローマ人への手紙16章3節

いたことを示す、ほぼ最も強力な本文上の証拠です。これはほぼ確実だとさえ言いたいと思います。

要点をはっきりさせるために、ここで率直にその意味を述べさせてください。もし、一世紀のイエスの女性の弟子で、厳しい家父長制の状況の中で生き、働いていたにもかかわらず、ほぼ確実に牧師であった人を一人でも見つけることができるなら、二十一世紀の私たちが置かれている、強く平等主義的な状況においては、賜物と召しを受けた女性たちを、喜んで牧会指導チームへと解き放つ用意をすべきなのは当然のことです。

牧師としてのプリスキラへの反論

私が先を急ぎすぎたなら、少し戻らせてください。プリスキラが夫と同じように本当に教会の上位の指導者だったという私の結論に、あなたは何らかのためらいを感じているかもしれません。実際、プリスキラが担っていたと見られる上位の指導と教えの役割に対しては、よくある反論が四つあります。一つ目は、テモテへの手紙第一3章が監督について「妻に忠実である」と語っていることです。これについては次の章で詳しく見ますが、ほかの三つの反論は今扱わせてください。

一つ目の反論は、プリスキラは単にアキラを支えていただけだ、と言うことです。今日の補完主義の人々の間では、「ミニストリー夫婦」について語ることが一般的です。この言葉はすばらしいものですが、その本質にまで切り詰めてみると、彼らが本当に言っているのは、夫が当然の指導者であり、妻は有能な助け手だということです（これは、エバはアダムの「忠実な助手」だったというジョン・パイパーの主張に沿っています）。夫の指導の賜物が夫婦のために扉を開かなければ、妻が自分自身の指導の賜物を発揮する機会はほとんどありません。この場合で言えば、アキラが牧師であり、プリスキラは単に彼のすばらしく有能な助手にすぎなかった、ということになります。

しかし、プリスキラとアキラの場合に、この「指導者と助け手」モデルが当てはまる可能性は極めて低いのです。二人が聖書で名前を挙げられている六回のうち、四回は彼女の名前が先に来ています。現代人の耳にはたいしたことに聞こえないかもしれません。しかし古代の家父長的な文献では、自分の妻に言及することさえまれでした（たとえば、新約聖書で名前の挙がっている妻がどれほど少ないか考えてみてください）。妻の名前が先に挙げられることは、さらにまれだったのです。

これは単なる偶然だと言う人もいます。しかし、パウロとルカの両方がそれぞれの書き物で彼女の名前を先に挙げているという事実、そして六回のうち四回（一回や二回ではありません）もそうしているという事実は、これが偶然ではないことを示しています。対照的に、ローマ人への手紙16章でプリスキラとアキラに触れた数節後に、パウロは別の夫婦に言及していますが、そこでは男性の名前を先に置くという標準的なやり方に戻っています。

これは単に彼女が社会的に目立つ立場にあったことを示しているにすぎない、と言う学者もいます。たぶん彼女は高貴な生まれで、アキラは身分の低い生まれだったのかもしれない、あるいは彼女はローマ市民で、彼はそうではなかったのかもしれない、と。しかしこれは、もっと明白な意味を避けています。新約聖書の著者たちが一貫してある人の名前を先に挙げるとき、それはたいてい、その人の奉仕における際立った立場（そしてそれは、その人特有の賜物と関係しています）を証ししています。ルカやほかの福音書の著者たちが、使徒たちの名前のリストで常にペテロを最初に挙げているのはそのためです。またルカが、アンティオキアの教会での二人の協力関係に触れるときにはバルナバの名をパウロより先に挙げていながら、二人がついに宣教の旅に出て、パウロの説教と奇跡の働きが別の次元に達すると、それ以降はパウロの名を先に挙げるのもそのためです。[577]

聖書の中で名前の挙がっている夫婦を調べたところ、妻が夫より先に名前を挙げられているのは、ほかに三組しかないことがわかりました。士師デボラはラピドテより先に、[578]女預言者フルダはシャルムより先に、[579]そしてマリアはヨセフより先に挙げられています。[580]これらのどの箇所でも、先に挙げられていることは、明らかに彼女たちのより際立った奉仕を強調しています。それならば、どうしてプリスキラについても同じ結論に至らないのでしょうか？　プリスキラがアキラより目立つことになったのがどんな賜物によるのかは推測するしかありませんが、はっきり言えることが一つあります。彼女は夫の奉仕の単なる脇役ではなかった、ということです。つまり、少なくとも彼女はアキラと対等であり、その公の賜物において、彼と同じくらい（あるいは彼以上に）解き放たれていたのです。

577. 使徒の働き11章26、30節、12章25節、13章1–2節では、いつも「バルナバとサウロ／パウロ」です。しかし、二人の宣教旅行の最初の段階であるパポス島での劇的な働きの後、パウロの名前が先に挙げられるようになります。たとえば使徒の働き13章13、42、43、46、49節、14章1、3節を参照してください。ですから、ルカがアキラとプリスキラのエペソでの教会開拓を描くとき、三度にわたって彼女の名前を先に置いていることに注目すべきです。使徒の働き18章18、19、26節を参照してください。
578. 士師記4章4節
579. 列王記第二22章14節
580. マタイの福音書1章18節

二つ目の反論は、「長老」や「牧師」が男性形の言葉であることに焦点を当てるものです。ですから、プリスキラがどれほど賜物に恵まれ、敬われていたとしても、彼女にできなかったことが一つある、それは男性であること、したがって長老であることだ、というわけです。

この異論は、古代ギリシア語が、すべての古代の言語と同じように男性中心的（androcentric）であり、それゆえ男性を中心に据えていたことを誤解しています。英語でさえ、今では急速にその男性中心性を捨てつつありますが、いまだに両方の性に男性名詞を用いています。総称的な「he」（彼）は「he or she」（彼または彼女）を表すことができますし、「mankind」（人類）や「manmade」（人工の）は女性も含みます。「chairman」（議長）や「fireman」（消防士）といった言葉も同様です。

古代ギリシア語では、この男性中心性ははるかに顕著です。その理由は、人を表す名詞が男性形か女性形のどちらかであり、中性の選択肢がないからです。女性形が使われるのは、それが一人の女性だけ、あるいは女性だけの集団を指す場合に限られます。一人の男性や男性たちだけ、あるいは男女が混ざった集団を指す場合には、男性名詞の形が使われます。[581]

ペテロは五旬節に、群衆の中にいた何千人もの男性と女性に語りかけたとき、彼らを男性名詞で「兄弟たち」（adelphoi）、「男たち」（andres）と呼んでいます。同じように、使徒の働きで「弟子たち」に言及するとき、明らかに女性がいる場面でも、やはり男性形が使われています。あるいは、コリント人への手紙第一14章に描かれている教会の集会で預言していた多くの預言者に言及するときも、女性たちも預言していたことがわかっているにもかかわらず、男性形が使われています。[582]あるいは、次の箇所を考えてみてください。「パウロとシラスは……リディアの家に行き、adelphoi（直訳「兄弟たち」）に会い、彼らを励ました。」[583]その間ずっと、リディアやほかの多くの女性たちはその男女混合の集団の一員でしたが、それでもその集団は男性形の集合名詞で表されているのです。こうした男性中心的な言葉の使い方はあまりに極端だったので、指導的な職にある女性がたった一人であっても、男性名詞で表されることがありました。たとえば、すでに以前に引用したよ

581. 文脈から、著者が男性だけを指していることが明らかな場合もあれば、男女を指していることが明らかな場合もあります。また、女性が含まれているかどうか読者には確かめようがない場合もあります。
582. コリント人への手紙第一11章2節、14章29節を参照してください。
583. 使徒の働き16章40節

うに、フィベは女性ですが、ローマ人への手紙16章1節では執事（deacon）と呼ばれていて、deaconess（「執事」の女性形）とは呼ばれていません。

つまり、パウロが「それぞれの教会で……長老たちを任命した」と読むとき、[584]その中に女性たちがいたかもしれないのです。少なくとも、パウロが「長老」という言葉を使っていること自体は、彼が女性の長老を任命しなかったしるしではありません。もちろん、当時の極めて家父長的な文化では、多くの教会のチームが男性だけで構成されていた可能性は十分にあります。しかし、常にそうだったとは限りません。とりわけ、その時にプリスキラがその教会にいたなら、なおさらです。

私の言いたいことを示すために、想像上の一場面を描いてみましょう。パウロはエペソの教会に戻った後、再びそこを離れました。そしてしばらくしてエペソの近くを旅していたとき、町には入らず、教会の長老たちだけを近くの町ミレトスに呼び寄せることにしました。二年間の働きを一日かけて振り返り、彼らを牧会の働きへと新たに奮い立たせるためです。パウロはこの集まりについて、「彼らが彼の顔を見るのはこれが最後だ」と語りました。[585]集まりは、彼らがパウロを囲み、泣きながら祈って送り出すことで終わりました。しかし注目してください。教会の全員が呼び集められたのではなく、長老たちだけでした。[586]では、ミレトスへの旅に一緒に行こうとするプリスキラに、アキラが「ねえ、パウロは長老だけと言ったんだよ。君はここに残らなくちゃならない」と言う姿を想像できるでしょうか？　私にはできません。その理由をお話ししましょう。プリスキラは、夫とまったく同じように、その教会で牧師として働いていたのです。

最後の反論は、最初のエルサレム教会が男性だけによって導かれていたことを強調するものです。確かに男性の使徒たちがエルサレム教会を導き（使徒の働き1–5章）、それから指導を助けるために七人の男性を任命しました（使徒の働き6–8章）。しかし、どちらの事実も、すべての教会のための普遍的なひな型とはなりません。十二人が男性であったことの象徴的な重要性はさておき（それについては前の章で扱いました）、私たちが覚えておかなければならないのは、どの教会とも同じように、エルサレム教会もその地域の状況によって形づくられていたということです。たとえば使徒の働き6章では、使徒たちではなく教会が七人の男性を選び、ギリシア語を使うユダヤ人で弱い立場にあったやもめたちと、ヘブル語を使うユダヤ人たちとの間の大きな対立に対処させています。あのユダヤの文化では、守って

584. 使徒の働き14章23節
585. 使徒の働き20章38節
586. 使徒の働き20章17節

くれる人、代弁してくれる人を必要としていた周縁の女性たちが、その役のために（ほかの女性でも奴隷でもなく）自由人の男性を選ぶのが当然とされていたでしょう。

エルサレム教会が男性中心に見えることについては、さらに言えることがあります。イエスの復活と御霊の賜物によって解き放たれた新しい神学的現実も、生まれたばかりの一世紀の教会に染み込むまでには、どうやら何年かかかったようです。使徒の働きを初めから終わりまで読むと、実践の中にある種の進展があることに気づきます。初代教会は、受け取ったばかりの福音を適用するのに時間を要するからです。単純化しすぎるおそれはありますが、新約聖書に描かれている「初代教会」の時代は二つの段階に分かれます。最初の十年間、教会は主としてエルサレムのユダヤ教の一派でした。それから教会は、ユダヤ人という基盤を越えて小アジアとヨーロッパへ急速に広がり、そこで主として異邦人の共同体となっていきます。初代教会の中でのこの発展に伴って、ユダヤ人だけの指導から、ユダヤ人と異邦人による指導への明らかな動きが生じます。神学的に言えば、最初から「ユダヤ人も異邦人もない」にもかかわらず、それは時間のかかる過程でした。さて、教会が女性をより十全に用いるようになるまでの歩みが遅かったことについても、同じようなことが推測できます。神学的に言えば、最初から「男も女もない」にもかかわらずです。新約聖書の教会のこの二つの段階のうち、現代の教会に最もよく響き合うのはどちらでしょうか？　紀元35年のエルサレム教会から励ましを得ることはできるとしても、私たちはおそらく、紀元57年のローマの教会に導かれたほうがよいでしょう。それはもはやユダヤ教の一派ではなく（ローマ人への手紙1–15章の大きなテーマ）、もはや男性に支配されてもいない（ローマ人への手紙16章の大きなテーマ）教会です。

結論として、プリスキラが牧師であったと信じるべき十分な理由はたくさんあり、そうでないと考える確かな理由は一つもありません。しかし、私たちはプリスキラにこだわりすぎたかもしれません。ローマ人への手紙16章には、もう一人の女性が挙げられています。その奉仕の経歴は、歴史上の教会と現代の教会で女性の奉仕が小さく見られてきたことを、力強く戒めるものです。

使徒ユニア

プリスキラとアキラにあいさつした後、パウロはローマの教会にいるもう一組の夫婦を推薦しています。「私と一緒に投獄されたことのある、私の同胞のユダヤ人アンドロニコとユニアによろしく。二人は使徒たちの中で際立っていて、私よりも先にキリストにある者となりました。」[587]

私たちは時に、世界中に広がる教会の最初の数十年に起こった重要な奉仕のすべてが、使徒の働きに描かれていると思い込みます。しかしこの節は、その思い込みを打ち砕きます。ここには、使徒の働きがまったく触れていない夫婦がいます。それでも二人は、どうやら非常に重要な、道を切り開く奉仕をしたようです。しかも大きな代償を払って。二人はそのために投獄されたのです。

パウロがローマの教会に手紙を書いたとき、彼はまだその町にも、その教会にも行ったことがありませんでした。そこは、ヨーロッパの中で彼が開拓しなかった数少ない教会の一つです。誰がその教会を開拓したのかは推測するしかありませんが、多くの学者は、この夫婦が最も有力な候補だと考えています。パウロと同じユダヤ人であるユニアとアンドロニコは、パウロより先に信者となっていました。つまり二人はエルサレムの教会でイエスに従うようになったのです。二人はおそらく、復活のイエスを目撃し、ステパノが殺されたときに広い世界へと押し出された、エルサレムの信者たちの中核の一員だったのでしょう。

プリスキラとアキラの場合と同じように、パウロは二人の結婚に補完主義の「指導者と助け手のパターン」を読み込む余地を少しも与えず、むしろ二人を真のミニストリー夫婦として扱い、同じ称賛を二人に同時に与えています。二人とも使徒であり、二人とも先駆的な奉仕において際立っており、二人とも投獄されていたのです。残念なことに、階層主義の解釈者たちは長い間、次の三つの方法のいずれかで、彼女の奉仕を小さく見せようとしてきました。

587. ローマ人への手紙16章7節

第一に、ユニアは女性ではなかったと論じる人々がいます。ユニアは中世後期まで女性と認められていましたが、[588]十四世紀のローマのアエギディウス（Giles of Rome）は、ユニアが使徒と呼ばれているという理由で、男性だと見なしました。しかしこの「性転換」は、ある学者の言葉を借りれば、「男性優位主義的な想像の産物」でした。[589]Junia（ユニア）という名前は、ラテン語に由来する、ローマ帝国でよくある女性の名前でした。それに対して、古代の人名のデータベースを徹底的に調べても、男性名とされるJunias（ユニアス）の例は一つも見つかっていません。[590]二十世紀に彼女を男性と呼ぶ動きが再燃した後、ここ四十年近く、学者たちの一致した見解は、彼女が女性であったことを再び確認しています[591]（もっとも、一部の補完主義の学者たちは今もそれとは違う主張を続けていますが[592]）。

第二に、彼女は使徒ではなかったと言う人々がいます。2001年、二人の補完主義の学者が[593]ある論文を書き、それがESVの訳を正当化するのに用いられました。ESVは「ユニアは使徒たちに高く評価されていた」という訳を選び、したがって彼女は使徒の一人ではないとしたのです。しかしこれらの学者の主張（したがってこの節のESVの訳）は、ピアレビュー（専門家による相互審査）の原則に耐えられませんでした。リンダ・ベルヴィル（Linda Belleville）、エルドン・エップ（Eldon Epp）、リチャード・ボウカムといった本文研究の学者たちは、データベースを調べ、語彙と文法を分析した後、すぐにこの主張に反論しました。そして、この節を、初代教会の理解に沿って、ユニアは女性であり、かつ使徒であったという意味に取るほうがはるかに説得力があることを示したのです。[594]

588. Paul Jewett, Romans, p. 961–62 を参照してください。例外はエピファニオス（Epiphanius、315–403年）で、男性のユニアス（Junias）に言及していますが、彼はローマ人への手紙16章3節のプリスキラも男性だと考えており、それが誤りであることを私たちは知っています。ですから、彼を信頼できる証人から外しても差し支えないと思われます。Eldon Epp, Junia, p. 34 を参照してください。
589. Paul Jewett, Romans, p. 962.
590. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, p. 276
591. たとえば、M・J・ラグランジュ（M.J. Lagrange）、レオン・モリス、ジョン・ジースラー（John Ziesler）、J・A・フィッツマイヤー（J. A. Fitzmyer）、C・E・B・クランフィールド（C. E. B. Cranfield）、ジェームズ・ダン（James Dunn）といった、ローマ人への手紙の近年の注解者たちがこの見解をとっています。
592. しかし、補完主義の主だった学者のほとんど、また現在の注解者の事実上全員――アンドレアス・ケステンバーガーやダグラス・ムーなど――は、彼女が女性であったことを認めています。
593. マイケル・ブーラー（Michael Burer）とダニエル・ウォレス（Daniel Wallace）による論文 “Was Junia Really an Apostle? A Re-examination of Romans 16:7” NTS 47 (2001), p. 76–91.
594. Linda Belleville, “A Re-examination of Romans 16:7 in Light of Primary Source Materials,” NTS 51 (2005): p. 231–49; Eldon Epp, Junia: The First Woman Apostle; Richard Bauckham, Gospel Women, p. 165–85 を参照してください。

彼らの議論はあまりに説得力があったので、トム・シュライナーでさえ、ついに彼女が女性であり使徒であったことを認めました。[595]ただし同時に、彼はさらにもう一つの異論を持ち出しました。

彼女は本来の意味での使徒ではなかった、というものです。シュライナーはこう言います。「ここでの『使徒たち』という言葉は、おそらく『教会開拓者』や『宣教師』を指しており、したがってユニアとアンドロニコを十二使徒やパウロと同じレベルに置くものではありません。」[596]

しかしシュライナーは、使徒職について不十分な理解しか持っていないようです。「使徒」という言葉は遣わされた者を意味しますが、新約聖書には三種類の「使徒」がいます。第一種の使徒は、イエスがまだ地上におられたときに選ばれた十二人です。次に第二種の使徒がいます。これは、パウロ、バルナバ、ヤコブを含む、より広い使徒の輪を指しています。天におられる今、イエスが起こし、遣わされるかもしれない人々です。[597]新約聖書に出てくる使徒への言及のほとんどすべては、この二つの用法のどちらかに当てはまります。ただし、教会の歴史が始まって数十年たち、ローマ人への手紙が書かれたころには、「使徒たち」はもはや十二人ではなく、より広い集団を指すようになっていました。これが、パウロが通常この言葉を用いたやり方でした。

最後に、第三種の使徒がいます。特定の教会によって選ばれ、重要な用務——とりわけ献金を届ける使者となること——のために遣わされた人々です。新約聖書の中でこの言葉が、地域教会が誰かのところや別の教会へ、その教会を代表するという特別な任務をもって送り出す人を表すのに使われているのは、二箇所だけです。ピリピの教会は、パウロを慰め、その必要を満たすために、エパフロディトを「遣わされた者」として送ります。[598]また、いくつかの教会がそれぞれ人を選んで送り、

595. 1995年の“Recovering Biblical Manhood and Womanhood”（p221）では、ユニアが使徒であるという確実性に異議を唱えていますが、2005年の“Two Views of Women in Ministry”（ch. 1）では、学者たちの多数派の見解に同意するようになっています。同様に、フィリップ・ペインの著書“One in Christ”の書評でも、ペインに同意して「ユニアはほぼ確実に女性であり、パウロは彼女を使徒としています」と述べています（出典：www.bit.ly/3qaJctI）。そう考えているのは彼一人ではありません。同意しているほかの補完主義の第一人者には、ダグラス・ムー（ローマ人への手紙の注解書、p. 923）や、ケステンバーガー（“God’s Design for Man and Woman”、p. 153）がいます。
596. シュライナーの“Two Views of Ministry”、p. 105での言葉です。ダグラス・ムーも、ローマ人への手紙の注解書（p. 922）で同様の議論をしています。
597. 使徒の働き14章14節、コリント人への手紙第一9章5–6節、ガラテヤ人への手紙1章19節を参照してください。
598. ピリピ人への手紙2章25節

エルサレムの教会への多額の献金を運ぶのを助けさせています。[599]——NIVはここでこの言葉を「representatives」（代表者たち）と訳しています。

では、ユニアが「使徒たち」の一人だと言うとき、パウロはどれを指しているのでしょうか？　パウロがほかの箇所で「十二人」と呼んでいる第一種の使徒でないことは明らかです。[600]また、二人が特別な用務を帯びて教会を代表するだけの第三種の使者でないことも、ほぼ確実です。それがわかるのは、パウロがこの言葉を遣わされた代表者の意味で使う二つの箇所では、所有を表す語で限定しているからです。エパフロディトは「あなたがたの使徒」であり、献金を運ぶ人々は「諸教会の使徒」です。それに対して、第二種の使徒は、どこかの地域教会の単なる代表者ではありません。キリストご自身によって遣わされた人々です。パウロがこの二人を単に「使徒」と呼んでいることは、二人が用務のために教会から送られただけの人々ではないことを示しています。エパフロディトも献金を運ぶ人々も、その務めを果たすことで投獄の危険を冒すことはありませんでした。ところがユニアとその夫は投獄されていました——それはおそらく、第二種の使徒としての働きをしていたためでしょう。二人はパウロと同じように、イエス・キリストから直接任命されて、大きな犠牲を伴う、道を切り開く奉仕をしていました。それには、福音を宣べ伝えること、教会を開拓し確立すること、それらの教会の教理を定めること、そして牧師を育てて任命することが含まれます。

パウロの使徒職は、より広い使徒の輪の中でも唯一無二のものです。十二人の何人かと同じように、聖書を書いているからです。それでもパウロは、この使徒の夫婦を自分自身と同一視する言葉を使っています。二人は「同胞のユダヤ人」であり、パウロと「一緒に」投獄されていたのです。

シュライナーがユニアを単なる「教会開拓者」や「宣教師」と呼ぶことで、どうして彼女をパウロより劣る者にできるのか、私たちは不思議に思います。パウロこそ、まさにそういう人だったのですから。実際パウロは、自分の見方ではユニアは自分と対等な者だということを言葉で表しています。彼女が「使徒たちの中で際立っている〔つまり、クラスで首席である〕」と言うとき、それ以外にどんな意味があり得るでしょうか？　その使徒たちの集団には、パウロ自身も含まれていたのです。ユニアについてパウロがこれほど感銘を受けた理由の少なくとも一部は、彼女がパウロより長く使徒としての働きをしてきたらしいということでした。パウロが言うように、彼女はパウロ「よりも先にキリストにある者」となっていたのです。

599. コリント人への手紙第二8章23節
600. コリント人への手紙第一15章5節

ここにシュライナーの誤りがあります。ユニアをパウロより劣る者にしようとする彼の試みは、彼女を自分と同じような者、いや自分以上の者にさえしようとするパウロの試みに逆行しているのです。シュライナーは、教父ヨハネス・クリュソストモスがローマ人への手紙16章についての古代の注解の中で語った言葉に耳を傾けるとよいかもしれません。「使徒であることは偉大なことです。しかし使徒たちの中で際立っているとは――それがどれほどすばらしい賛辞であるか、考えてみてください。彼らはその働きと徳のある行いによって際立っていたのです。実に、使徒という称号にさえふさわしいとされたこの女性の知恵は、どれほど大きかったことでしょう。」[601]

結論です。ユニアは女性であり、使徒でした。それも第二種の使徒でした。しかし、これがどういうことか、わかるでしょうか？

現代の教派のほとんどは使徒職という奉仕を認めていませんが、新約聖書は二つの箇所で、それが存在する中で最も重要な奉仕だと言っています。実際パウロは、聖霊が世界にさらに多くの教会を確立していくあり方を描くとき、「第一」という言葉さえ使っています。パウロはこう言います。「神は教会の中で、第一に使徒たち、第二に預言者たち、第三に教師たち、それから力あるわざ、それから癒やしの賜物、助け、指導、種々の異言を備えてくださいました。」[602]

ここから一つの単純な問いが生まれます。ローマ人への手紙16章7節が、使徒であった女性、つまり世界で最も上位にあり、最も重要で、基礎となる、最も権威ある奉仕の一員であった女性の名を挙げているのなら、女性が、地域教会の指導者を含めて、それより下位のどんな奉仕のレベルで指導することに問題があるでしょうか？　その答えは、女性は教会で高い権威を行使できないという補完主義の信念とあまりにも矛盾します。だからこそ私たちは今、その学者たちがユニアの性別と使徒職に疑問を投げかけるために、なぜあれほどまでのことをするように見えるのかを理解できるのです。[603]

601. John Chrysostom, Homily 31 on Romans
602. コリント人への手紙第一12章28–29節。エペソ人への手紙4章11節も参照してください。
603. これらすべてのもう一つの意味は、プリスキラを牧師として受け入れる理由がもう一つ増えるということです。ユニアが夫とともに使徒職を担っていたのなら、プリスキラが夫アキラとともに牧会の指導職を担っていたことも、ごく普通のことだったと考えられるからです。

女預言者たち

新約聖書には、女性の使徒（ユニア）、伝道者（サマリアの女）、そして牧師であり教師（プリスキラ）がいます。このことは、エペソ人への手紙4章11節に挙げられている五つの指導職を思い起こさせます（「キリストご自身が、使徒たち、預言者たち、伝道者たち、牧師たちと教師たちを与えられました。それは、ご自分の民を整えるためです。」[604]）。そしてこのことはさらに、この章でまだ扱っていない、もう一つの重要な奉仕を指し示しています。預言者です。

ヘブル語聖書における女預言者の伝統（ミリアム、デボラ、フルダを含む）に続き、また女性や娘たちが預言するというヨエルの預言を成就して、新約聖書には名前の挙がった女預言者が何人かいます。アンナ、イエスの母マリア、そしてピリポの四人の娘たちです。[605]パウロもまた、コリントの教会で預言する、名前の挙がっていない女性たちを称賛しています。[606]ヨハネの黙示録でイエスは、ティアティラの教会にいた、女預言者であり教師であり、おそらく指導者でもあった女性を責め、悔い改めのための時さえ与えておられます。それは彼女が女性として教えたり預言したりしようとしていたからではなく、不道徳な人間で、不道徳を広めていたからでした。[607]

新約聖書では、あまり一般的でない預言者という指導職（エペソ人への手紙4章11節で言及されています）と、より一般的な預言の賜物との間に違いがあるように見えます。しかし、女性は賜物を持つことはできても職に就くことはできなかった、とほのめかすようなものは、本文の中に何一つありません。旧約聖書で明らかに預言者の職にあった女性たちを考えれば、なおさらです。さて、この洞察がどれほど重要であるかを考えてみてください。

預言者は教師でもありました。そうでなければ、なぜパウロはコリント人への手紙第一14章で、預言者が「教えの言葉」[608]をもたらすことがあると言うのでしょうか？　デレク・モーフューは、コリント人への手紙第一14章を分析して、こう結論

604. コリント人への手紙第一12章とローマ人への手紙12章は、賜物をさまざまな人々（女性を含む）に与えられる働きとして語っていますが、エペソ人への手紙4章11節は、それ自体がイエスから教会への賜物である、ある種の指導者たちについて語っています。
605. ルカの福音書2章36節、使徒の働き1章14節および2章17節、使徒の働き21章9節
606. コリント人への手紙第一11章4節
607. ヨハネの黙示録2章20–24節
608. コリント人への手紙第一14章26節

しています。「パウロにとって、預言とは、ある種の霊感を受けた教えを含む言葉です。預言者の教えは教師の教えと重なり合っており、両者を区別できるのは、それがどのように与えられるかによってか、あるいは教えている人が預言者として認められた地位にあることによってだけです。」[609]

教師と預言者の間にはっきりした境界線を引き、しかも教師を預言者より上位に置きがちな現代の教派は、自分たちの信念を新約聖書に後から当てはめようとして、教えは信頼できるので権威があるが、預言はより即興的なものかもしれないので権威がない、と言います。実際には、教師の教えも預言者の教えも、真実で御霊に導かれたものであることが期待されていますが、どちらも真実でなくなる危険があり、したがって教会によって吟味されなければなりません。[610]ペテロは偽りの教えを偽りの預言と同列にさえ扱っており、したがって教えを預言と同列に扱っています。「かつて、民の中には偽預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れます。」[611]教えと預言のこの概念上の重なりを踏まえて、「補完主義者たちが登場する以前のプロテスタントの神学者や注解者たちは、預言は〔聖書的な〕説教の一つの形であり、〔それは〕初代教会で最も重要な奉仕の一つだったと論じていました。ジャン・カルヴァンでさえ、預言を『目の前の必要に適用された聖書の解釈』と見ていました。」[612]

補完主義の学者たちが、教えは「公式の」奉仕であるのに対して預言は「非公式の」奉仕だと言うやり方を、新約聖書はまったく支持していません。[613]パウロがエペソ人への手紙4章11節で挙げている五つの指導職以外で、パウロが「公式の」奉仕と呼べるようなものを明言するのに最も近いのは、エペソ人への手紙2章20節です。そこでパウロは、諸教会は「使徒たちと預言者たち」の働きの上に建てられるべきだと言っています（牧師や教師には触れていません）。またコリント人への手紙第一12章28節では、パウロは職務を最も重要で戦略的なものから順に並べています。「神は教会の中で、第一に使徒たち、第二に預言者たち、第三に教師たちを備えてくださいました。」教えることに預言することより高い位を割り当てる聖

609. デレク・モーフューは“Equal but Different”の中で、E・E・エリス（E.E. Ellis）の“Prophecy and Hermeneutics in Early Christianty”（p. 141）を引用しています。
610. コリント人への手紙第一14章29節、ヨハネの黙示録2章20、24節
611. ペテロの手紙第二2章1節
612. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, ch. 6.
613. ケビン・ジャイルズは、ある補完主義の学者の「預言の権威ある機能は、制度化された職務にあるのではなく、神のことばそのものとしての発言にあります」という言葉を引用しています（ch. 6）。しかしこの議論は両方向に働きます。こうも言えるからです。「教師も教えも、それ自体に固有の権威はありません。権威があるのは、預言と同じように『神のことばそのものとしての発言』なのです。」

書的な根拠は、私たちにはありません。むしろ、預言者のほうが教師より上位だと論じることさえできます。教えも預言も、それがもたらすメッセージが真実で神からのものである限りにおいて、権威を持ちます。つまり、女性は預言者にはなれても、その「公式の」奉仕においてより高い権威を持つ牧師や教師にはなれない、という補完主義の議論は、現代の多くの教会の環境では筋が通っているかもしれませんが、パウロの神学とは矛盾するのです。

教会史からの議論

補完主義の学者たちが、牧師としてのプリスキラと使徒としてのユニアの両方を論駁しようとするもう一つの方法は、私たちの知る限り、教父たちは二世紀以降、女性を指導者や教師に任命しなかったと指摘することです。実際、時代が進むにつれて、彼らはそれをますます厳しく取り締まるようになりました。[614]これについては、何と言えばよいでしょうか？

第2章で、私たちは非常に多くの教父たちに見られる女性蔑視の態度をあらためて見ました。すでに見たように、彼らは悲しいことに、イエスが女性をどうご覧になるかを見失い、聖書を通して自分たちの文化を読むのではなく、家父長的な文化を通して聖書を読んでしまいました。こうして、女性を称える新約聖書のインクが乾きもしないうちに、女性蔑視が教会に染み込んだのです。女性牧師を任命するどころではありません。教会は女性の劣等性と従属をあまりに確信するようになったので、過ぎ去った何世紀もの間、女性執事を任命した教会さえほとんどなかったのです。

私たちは教会史から多くのことを学ばなければなりませんが、同時に、聖書と、あらゆる主題についての聖書の教えのより良い理解をもって、教会史を批判的に吟味しなければなりません。たとえば、最初の数世紀の教会は、三位一体とイエス・キリストに関わる教理を定めることでは大きな前進を遂げましたが、教会の指導についての新約聖書の教えからは早くもそれてしまったようです。一世紀の終わりまでに、新約聖書が強調していた複数の指導者による指導は捨てられていました。教父イグナティオス（Ignatius）は、各教会が単独司教制（monarchical

614. 教父時代に少なくとも何人かの女性が教会の長老（presbyter）に任命されていたことは、紀元370年のラオディキア教会会議のような会議で、その慣行が禁止されたことから明らかです。

episcopate）、つまりただ一人の牧師によって導かれるよう指導しました。この考えは今もなお広く実践されています。

長老派のようなグループが複数指導制という考えを取り戻したのは、宗教改革の後になってからのことでした。今日、教派全体が再びこれを受け入れていますが、これは千年以上にわたる「教会史」から外れたものであり、その逸脱は、新約聖書が初めからずっと教えていたことの再発見に基づいていた、ということに注目しましょう。同じように、教会史に広く浸透していた女性の劣等性と従属をともに退けることは、新約聖書が初めからずっと教えてきたことの再発見によって正当化されるのです。

人類の歴史は、前世紀の大部分を通して、ますます多くの女性が男性とともに社会の舵取りに加わることを認めてきましたが、皮肉なことに、複数の指導者によって導かれる多くの教会は、その反対の方向に進んできました。単独司教制の何世紀もの間、教会を導くのはただ一人の男性でした。それはつまり、少なくとも原則としては、多くの女性が第二層の奉仕において彼のそばに立つことができたということです。ところが、複数指導制を取り戻した人々が、同時に指導チームの全員が男性でなければならないと思い込んだとき、これらの教会はかつてないほど男性に支配されるようになったのです！

ますます多くの学者が聖書全体の教えを再発見しつつある時代に生きていることを、私は本当にうれしく思います。もしプリスキラが牧師であり、ユニアが使徒であり、女預言者たちがいたのなら、女性を神の国のどの働きからも締め出す正当な理由はありません。伝統を軽んじるべきではありませんが、イエスは、聖書についての新たにされた理解に基づいて伝統を新たにするよう教えておられ、また、福音の意味するところに沿って行動するのを避けるために伝統を用いることがないよう警告しておられます。[615]

「聖書的」対「聖書主義的」

ここまで述べてきたことのすべてを聞いてもなお、頑として譲らずにこう言う人々がいます。プリスキラやほかの女性が牧師であったことに百パーセントの確信がない限り、私たちは慎重を期して、今日女性牧師を任命すべきではない、と。

615. マタイの福音書15章2–6節

これについての第一の問題は、新約聖書で異邦人や奴隷が長老に任命されたという絶対的な確信も、私たちにはないことです。牧師であったかもしれないと私たちが知っている男性は、一人しかいません。自由人のユダヤ人男性ペテロです。それなら私たちは今、確実性の名のもとに、異邦人や身分の低い人々が教会で上位の指導に就くことを禁じるのでしょうか？[616]私たちは一貫していなければなりません。明確な実例を挙げられないという理由で女性の長老を置くことに不安を感じるなら、異邦人の長老についても同じように不安を感じるべきです。

しかし、より大きな問題は、これがそもそも私たちが聖書を適用すべきやり方ではまったくない、ということです！　これは聖書主義的（biblicist）なアプローチであって、聖書的（biblical）なアプローチではありません。前者は、それを支持する聖句が見つからないかぎり何も許しませんが、後者は、その実践をそのまま規定する裏づけの聖句が見つからなくても、聖書の原則に沿って行動しようとします。私の提案はこうです。御霊に導かれ、状況に応じて進められる教会の宣教に関して言えば、証拠聖句が見つからないかぎり何もしないという、恐れに満ちた聖書主義

616. なぜ私たちは、今日の教会で異邦人を任命することにこれほど抵抗がないのでしょうか？ 異邦人の長老についての証拠がないというこの議論にあまり重きを置きたくはありませんが、女性の長老に賛成または反対する議論をするときと同じ、決着のつかない場所に行き着くことを示すために、あえて取り上げてみます。初代教会のギリシア人指導者とは誰でしょうか？ ギリシア人テトスは長老ではなく、使徒の代理人でした。テモテは、ユダヤ人の母と祖母から聖書を教えられていたので、どちらかと言えばユダヤ人でした。しかし、たとえ彼が異邦人だったとしても、やはり長老ではなく使徒の代理人でした。ルカが異邦人だったかどうかは疑わしいところですが、たとえそうだったとしても、彼は旅の同行者であり著者であって、長老ではありませんでした。パウロの戦略は、どの町でもまずユダヤ人のところへ行き、その後で初めて異邦人のところへ行くことだったので、聖書をよく知っているユダヤ人の一団から長老を選んだ、というのは少なくともっともらしいことです。けれども、これを全部聞いたうえで、だから異邦人が長老になることを禁じよう、と考える人が私たちの中にいるでしょうか？ 私はそうしませんし、おそらくあなたもそうしないでしょう。それならなぜ、決定的な聖書の例を挙げられないという理由で、女性が長老として仕えることを妨げようとする人がこれほど多いのでしょうか？ もし誰かが、異邦人が長老になれる理由を弁護しようとするなら、どのようにするでしょうか？ おそらく、次の四つの議論のどれかを挙げるでしょう。1）ガラテヤ人への手紙3章28節は、キリストにあっては「ユダヤ人も異邦人もない」と言っています。しかしそれなら、この節が性別についても同じこと、つまり「男も女もない」と言っていることを覚えておかなければなりません。2）屋上でのペテロの幻と、その後のコルネリウスへの御霊の注ぎは、異邦人がユダヤ人の考えていたように汚れた者ではなく、教会の完全な会員にふさわしい者であることをペテロに示しました。しかしそれなら、五旬節に女性たちにも御霊が注がれたことが示すように、女性たちも完全な会員であったことを覚えておかなければなりません。3）テトスのようなギリシア人の使徒の代理人を指摘し、それによって、長老のようにより低い権威を持つ人々もギリシア人であり得たことを示す方法です。しかしそれなら、権威の段階でテトスより一段上にいる使徒ユニアがいることを覚えておかなければなりません。4）ローマ帝国と一世紀を越えたところには、ユダヤ人がいつでも見つかった新約聖書の町々（パレスチナの外に600万人のユダヤ人が住んでいました）とは違って、異邦人だけの文化があったであろうという事実を強調する方法です。しかしそれなら、これは、一世紀の家父長的な文化とは違って、私たちは今、平等主義の文化の中にいるという平等主義の議論と響き合っていることを覚えておかなければなりません。

的な姿勢をとるのではなく、むしろ聖書の原則に沿って自由に行動してよいという立場をとるべきです。

実際、宣教を大切にする現代の教会が今日行っている数多くのことにおいて、これはすでに私たちのいつものやり方です。私たちは楽器や音響設備を使い、専門のとりなしの祈りのチームを組織し、伝道用のトラクトを配り、指導者育成のパイプラインを作り、何人ものスタッフを雇い、聖書を印刷して配り、ウェブサイトを作り、建物を購入し、子どもやティーンを互いに、また大人から分けたりします。しかもそのどれ一つとして、新約聖書には規定されていませんし、描かれてさえいません。

女性牧師を任職する自由は、聖書の中に並行する強調点をもつ方向性です。教会には確かに女性の伝道者、女性の家の指導者、女性の教師、女性の預言者、女性執事、女性の使徒がいたのですから、それを禁じる明確な聖書の言葉がないかぎり、神が女性を起こされ、それが宣教にとって有益である状況では――今日のほとんどの平等主義の文化ではそうなのですが――女性の長老を認めることは不合理ではなく、むしろ理にかなっています。ジェイミン・ヒューブナーが言うように、「長老職や牧師職をこれら他の働きとは別の特別な範疇に追いやり、一方の性が一つの役割から自動的に、普遍的に、永久に締め出されながら、それでいて他のすべての働きは果たせる、とすること」には意味がありません。[617]このことは特に、新約聖書の時代に長老が男性だけだったと確信することができないとき、女性の長老職を明示的に禁止する言葉がないとき、そしてプリスキラが夫と同じく牧師であったことがほぼ確実と言えるときには、なおさら当てはまります。

さらに、ローマの教会が女性の指導者や教師を自分たちの間で働けるように送り出す用意があったのは、霊的な賜物を認めるという指導原理をよく理解していたからです。

617. ジェイミン・ヒューブナーの博士論文“A New Case for Female Elders”の言葉です。（出典：www.bit.ly/3BNaSY8 p.171）



13

賜物（ローマ12章）対性別（Ⅰテモテ3章）

「性別で最初のふるい分けをするなら、神が……女性たちに与えられたどんな賜物や能力も、結局は戸棚の棚にしまい込まれることになりかねません。これらの賜物を否定されることで生じうる挫折感は、その結果の一つです。しかしそれ以上に大きいのは、自分という人格の本質的な一部が軽んじられたときに経験する怒りや悲しみです。」アリス・マシューズ（Alice Mathews）[618]

社会における家父長制の代償の一つは、人口の半分の貢献を抑え込むことだけではありません。残りの半分の人々の中に、凡庸な貢献をもたらしやすくすることでもあります。その人たちは、ほかにもっとその仕事にふさわしい人がいるかもしれないのに、自分には昇進する権利があると思い込んでしまうことがあまりにも多いのです。メリンダ・ゲイツ（Melinda Gates）は、指導的立場にある女性について書いた2019年の著書の中で、男女平等の天秤の釣り合いを取ることについての自分の見方を説明し、次のように述べています。

私は、女性のほうが男性より優れているとか、世界を良くする最善の道は女性が男性より大きな力を得ることだ、と考えたことは一度もありません。男性による支配が社会に有害だと私が考えるのは、どんな支配も有害だからです。それは、社会が誤った階層によって治められ、力や機会が技能、努力、才能、業績によってではなく、性別、年齢、富、特権によって与えられることを意味します。[619]

同じようなことが、性別に基づいて指導者や教師を選ぶ教会についても言えます。もちろん、（厳格なイスラム国家のような）家父長制の強い状況で、それが外部の人々が福音を受け入れるうえでの深刻なつまずきと見なされうる場合には、教会の指導者として男性だけを選ぶことが宣教上有益なこともあるでしょう。しかし、そ

618. Alice Mathews, Gender Roles and the People of God, 第13章
619. Melinda Gates, The Moment of Lift: How Empowering Women Changes the World

のようなつまずきがもはや存在しないなら、賜物が優先されるべきであることは私には明らかに思えます。

パウロがローマ、エペソ、コリントの教会に宛てた手紙（偶然にも、プリスキラがある時期に指導を助けた教会です）にある数多くの霊的な賜物のリスト[620]を見渡してみてください。そうすれば、御霊はその人の性別や社会的地位にまったく関係なく、これらの賜物を割り当てておられることがわかるでしょう。賜物を与える御霊は、どうやら性別を問われないようです。

ローマ人への手紙16章から明らかなように、ローマの教会が女性たちを重要な貢献をする役割へとごく自然に送り出していたのは、ローマ人への手紙12章から明らかなように、役割を割り当てる土台としての賜物について確かな理解をもっていたからです。

私たちは、それぞれに与えられた恵みに従って、異なる賜物を持っています。賜物が預言であれば、信仰に応じて預言し、奉仕であれば奉仕し、教えることであれば教え、励ますことであれば励まし、分け与えることであれば惜しみなく分け与え、指導することであれば熱心に指導し、あわれみを示すことであれば喜んで示すことです。[621]

もしパウロが、ある役割は性別によって制限されると信じていたなら、ここはそう言うのに絶好の場所だったはずです。しかし、彼はそう言いません。この箇所には、パウロがこれらの賜物のどれかから女性を除外しているかもしれないことを示すものは、何一つありません。[622]手紙を最後まで読み進め、たとえばプリスキラについての言及を見いだすとき――証拠によれば、彼女は男性たちを指導し、また教えていました――私たちはその説明を手にします。プリスキラは、教えることと指導することの霊的な賜物を持っていたに違いないのです。

人を平等にする霊的な賜物

地位や民族や性別に基づいて人々を職務や働きに送り出すことは、知らず知らずのうちに人々を分断します。しかし、霊的な賜物に基づいてそうすることは、人々を

620. エペソ人への手紙4章11節、コリント人への手紙第一12章、14章、ローマ人への手紙12章6–8節を参照してください。
621. ローマ人への手紙12章6–8節
622. 男性代名詞さえ一つもありません。たとえば「if it is teaching, then let him teach」（教えることであれば、彼に教えさせなさい）のような言い方はないのです。

一つにします。前者は人間の好みに基づき、後者は神による選びに基づいています。ユダヤ人と異邦人が実際に一つとなることにパウロがどれほど力を注いだかを、彼の傑作であるエペソ人への手紙とローマ人への手紙で考えてみてください。エペソ人への手紙1–3章とローマ人への手紙1–11章で、彼は一致の神学的な土台から始め、次にエペソ人への手紙4–6章とローマ人への手紙12–15章で、その一致を実際に生きるために必要な敬虔さを詳しく述べます。しかし注目してください。ローマ人への手紙12章3–8節とエペソ人への手紙4章11–16節にある平等を現す霊的な賜物についての教えこそが、前半と後半をつなぎとめる接着剤になっているのです。パウロはこう言っているようです。御霊は、指導する賜物や教える賜物も含めて、その人の民族にかかわりなく賜物を分け与えられるので、これもまた御霊がさまざまな民族の人々を一つに結び合わせる方法の一つなのだ、と。同様に、コリント人への手紙第一は、これと同じ区分にきれいに分かれてはいないものの、男性と女性の間、また富む者と貧しい者の間の格差にパウロが神学的に取り組む議論が、御霊が主権をもって（したがってその人の社会的地位や性別にかかわりなく）賜物を分け与えられるという教えによって補強されていることがわかります。

これらすべての中で、パウロは、ユダヤ人と異邦人の間に（さらに、富む者と貧しい者、奴隷と自由人、そして男性と女性の間にも、と付け加えることができます）見られることを期待した一致について、それを促す三つの理由を挙げています。社会の壁を打ち壊す、一つにする福音を理解すること。自分とは異なる人々を愛し仕えることによって一致を築こうとする決意。そして、神がご自分の決められただれにでも与えられる賜物を認めることです。「男女の争い」とは対照的に、性別を超えて一つにする神の解決策は、私たち教会が神とともに「人を分け隔てしない」者となり、神が主権をもって賜物を与え、召しておられる人々を、指導し教えるために送り出すことです。

賜物を抑え込むことの危険

テモテへの手紙第一2章12節を、どんな女性もどんな男性をも教えたり指導したりしてはならないという普遍的な禁止だと誤って解釈することの悲劇は、それが、御霊がこうした賜物によって力を与えておられる女性たちにとって拘束衣になってしまうことです。こうした女性たちに、自分の賜物は子どもたちとほかの女性たちのためにだけ使いなさいと言うことは、彼女たちを侮辱するだけではありません。それは――そしてこれこそ私が本当に懸念していることですが――神が与えてくださ

る恵みのあらゆる通り道を切実に必要としている教会から、それを奪うことになるのです。

それなのに、補完主義のある女性創始者は、男性がその場にいるときには自分の賜物にベールをかぶせるよう、事実上女性たちに勧めています。「賢い女性は、その賜物を用いることで神のみことばに、ひいては神ご自身に不名誉をもたらす危険を冒すくらいなら、むしろ自分の賜物を示し用いる機会を手放すでしょう。」[623]同じように、ケビン・デヤングは、「女性には、教える賜物や指導する賜物を含む、極めて重要な霊的賜物があります」と認めたうえで、それでもなおこれらの賜物を男性から遠ざけてしまいます。「子どもたちやほかの女性たちを教えることは、決して女性の賜物の無駄遣いではないでしょう？」[624]しかし、ほかの信者たちの貢献を謙遜に受け取ることについてのパウロの教えは、こうした有害な考えに警告を発しています。「目が手に向かって『あなたはいらない！』と言うことはできないし、頭が足に向かって『あなたがたはいらない！』と言うこともできません。」[625]

つい先日、私は、教会の有給の働きを離れた、すばらしい賜物を持つ女性の指導者とコーヒーを飲みました。彼女は、教会での自分の貢献が教会の男性たちによって脇に追いやられ、信頼されず、場合によっては黙らされてきた痛みを話してくれました。同じように、神学者で元学部長でもある80代のアリス・マシューズも、人生の大半において自分の賜物を棚上げにされてきた苦悩を語っています。

何年も前、夫と私がヨーロッパで宣教師として仕えていたころ、ある朝、私はベッドに座ってマタイの福音書25章を読んでいました。タラントのたとえ話の終わりまで来たとき、気がつくと私は泣いていました。そして祈りました。「主よ、あなたが私に与えてくださったものを、上に立つ人たちが使わせてくれないために使っていないことを、大目に見ていただけますか？」性別が賜物に勝ってしまい、私はそれに対して何もできない無力さを感じていました。それは多くのクリスチャン女性にとって珍しい経験ではありません。[626]

補完主義の教会は、個人を傷つける危険を冒すだけではありません。その教会全体の宣教の実効性をも妨げてしまいます。私の住む町で、私は、近くのある教会が、性別にかかわりなく賜物に沿って男性と女性を送り出しながら、数千人規模へと急

623. ドロシー・パターソン（Dorothy Patterson）の言葉です。“Women in the Church” (2nd Edition), 第6章
624. 出典：www.bit.ly/3k2AA4x
625. コリント人への手紙第一12章21節
626. Alice Mathews, Gender Roles and the People of God, 第13章

速に成長していくのを目の当たりにする特権にあずかりました。男性も女性も指導します。女性も男性も説教します。

ジョン・パイパーとトム・シュライナーは、男性だけが指導し、女性がその男性たちを支えることを「美しい」と思うのかもしれません。しかし私には、男性と女性が肩を並べて指導し教える姿を見るほうが、ずっと美しく思えます。

ここしばらくの間に何度か、神の御霊が、女性の貢献が抑え込まれていることへのご自身の悲しみの一部を私に分かち合ってくださったと信じています。ある時、補完主義のある運動の指導者会議で、一人の女性が、友人たちをイエスのもとに導くことについて学んだすべてを15分間にわたって分かち合いました。私は夢中でメモを取り、彼女から多くの刺激を受けました。ところがその後、神学に詳しいある男性の友人が、彼女は神学を一切教えないという指示を守っていたにもかかわらず、私にこう言ったのです。「女性が説教壇の後ろに立つと、ぞっとするんだ。」彼の言葉に私は悲しくなりました。神が見ておられるように彼女を見ることができず、彼は彼女を通して語られる神のことばさえ聞くことができなかったのです。

ただ一つの聖書箇所の誤った解釈を教会に押しつけることは、本来なら伝道、弟子づくり、牧会、指導、教会開拓といった男女混成の働きから益を受けたはずの人々に、計り知れない霊的な危険をもたらすのではないでしょうか？　地域教会では、あらゆる賜物が、ほかのすべての人の益となりうる仕方で働く必要があります。そうして教会は、「各部分がそれぞれの働きをすることによって成長し、愛のうちに建てられていく」のです。[627]聖霊が女性たちに割り当てておられる賜物を十分に用いることを制限するのを正当化するには、テモテへの手紙第一2章12節についての自分の解釈に絶対の確信がなければなりません。しかし、第7章で提案したように、心を開いた本当に誠実な人なら、そこまで確信できるはずはありません。

賜物を制限することは、女性たちだけでなく、神ご自身にも拘束衣を着せることです。神の御霊が一人の女性を用いてあなたに仕えておられるときに、ぞっとすることについてゆがんだ神学的な正当化を見いだすことは、聖霊を悲しませます。聖霊は「思いのままに吹き」[628]、ご自分がふさわしいと思われるどんな代弁者でも任命されるのが常なのです。[629]ゴードン・フィーはこう言います。

新約聖書の証拠が示しているのは、聖霊が性別に関して包括的であり、男性と女性の両方に賜物を与え、それによって、からだ全体が解き放たれ、すべての部分が仕

627. エペソ人への手紙4章16節
628. ヨハネの福音書3章8節
629. 出エジプト記15章20節；士師記2章16節、4章4節；エステル記4章14節

え、さまざまな仕方でほかの部分に指導を与える可能性が開かれる、ということです。ですから、結局のところ私の関心は、女性の働きを推し進めるという課題ではありません。むしろ、それは御霊の課題です。教会が自らに対しても世界に対してもより効果的に仕えることができるよう、御霊を私たちの束縛や構造から解き放ってほしいという訴えなのです。[630]

神が女性たちに与えておられる、神の国を前進させる賜物を、私たちが抑え込む典型的な方法は二つあります。賜物に上限を設けてしまうこと、あるいは社会の状況によって、そもそも賜物が発見されることすら妨げられてしまうことです。

古い皮袋が新しいぶどう酒を無駄にするとき

教会の歴史において重要な女性の働きが一時的に噴き出したことはあったものの、1900年代より前の教会史で、女性が長期間にわたって教会で指導した例はごくわずかです。なぜでしょうか？　イエスは、古い皮袋が新しいぶどう酒を台無しにする危険について警告されました。そうなる道筋の一つはこうです。御霊が力強く動いて、賜物を持つあらゆる人々が前面に出てきます。ところがその後、制度化の力が、神から生まれたものに取って代わるように、過度に細かく定められた方針や手続きを据えてしまうのです。かつては賜物によって動いていたものが、職務記述書を守ることに取って代わられます。

たとえば何世紀にもわたるリバイバルを見渡すと、初期の段階に見いだされるのは新しいぶどう酒の注ぎ出しです。そこでは、女性を含むあらゆる「資格のない」人々が、御霊の力によって一気に表舞台に躍り出て、指導し、説教し、伝道し、教会を開拓し、あるいは牧会しました。前世紀初めのペンテコステ運動を思い浮かべてください。そこでは大勢の女性たちが、伝道、説教、開拓的な指導において、御霊から力強く賜物を与えられていました。ところが、ある程度時間がたつと、制度化が忍び込み、教会は、「専門職の」聖職者（ごく少数のエリートが神の働きの大半を担う）と女性の従属（時には彼女たちより賜物の少ない男性たちへの従属）という古い皮袋に逆戻りしてしまいます。マリア・ボッチャ（Maria Boccia）は、Hidden History of Women Leaders of the Churchの中で、教会史において繰り返されるこの悲しいパターンを次のようにまとめています。「指導が、聖霊の賜物を通して神が指導者をカリスマ的に選ぶことによるものであったときには、女性も含

630. 出典：Discovering Biblical Equality, 2005, p. 254.

まれていました。時がたつにつれて指導は制度化され、世俗の家父長制的な文化が教会に浸透し、女性は締め出されました。」[631]

これは2世紀にまでさかのぼります。私たちの知るかぎり、ローマ人への手紙16章に描かれている指導チームの後、教会に男女混成の指導チームがあったことは一度もありません。パウロがローマの教会に手紙を書いてから数十年のうちに、強力な家父長主義と制度主義が教会にきつく巻きついてしまいました。たとえばテルトゥリアヌスは、教会を、序列化された役職の階層をもつローマ社会の縮図として思い描き直し、その結果、牧師は支配者になりました。賜物を生き生きと用いることは失われ、その代わりに聖職者と信徒の分断が生まれました。聖職者には特別な権利が与えられ、さらに聖職者になれるのは男性だけだという前提も生まれたのです。

教会が、どの女性も指導したり説教したりしてはならないと決めるとき、その教会は贖いの潜在力の一部を流出させてしまいます。ありがたいことに、神はそれでもその教会の中で働き続けてくださいます（神には完全な教会があったためしがないのですから）。しかし、教会（あるいは教会の運動）が御霊の供給の一部を失わないためには、統治の階層に焦点を当てたり、指導や教えることを性別に基づかせたりする古い皮袋を、どうしても捨て去らなければなりません。初代教会とその後の数多くのリバイバルが何らかの手がかりになるとすれば、より良い皮袋とは、御霊がすべての人に与えておられる賜物を見いだし、生かすものです。若い人も年配の人も、富む者も貧しい者も、黒人も白人も、男性も女性もです。とはいえ、女性の賜物に上限を設けるよりもさらに深刻なことが一つあります。それは、そもそもその賜物に気づくことさえできないことです。

社会の状況が賜物の成長を妨げることがある

私は女性解放運動の成功を喜んでいます。特に、教育と職業における平等な機会を求めて働きかけてきたことについてです。大局的、歴史的な観点から見れば、世界は、あらゆる社会の分野へと解き放たれた女性たちがどれほど有能かを、まだ発見し始めたばかりです。実際、1960年代までは、女性が今では何百万人という規模で行っていることを女性にはできないと、ほぼ満場一致で考えられていたのです！神が男性と女性に与えてくださった才能、賜物、機会について、神に栄光がありますように！

631. 出典：Journal of Biblical Equality, September 1990, p. 58.

このことは私たちを立ち止まらせ、世界の歴史の中で無駄になってしまったあらゆる才能や賜物について考えさせずにはおきません。社会の状況のせいで、女性が自分の可能性を実現するための教育や機会を与えられることが、ほとんどなかったからです。これは教会の歴史にも当てはまります。日の目を見ることさえなかった使徒、預言者、教師がどれほどいたことでしょう？　神が教会に与えられた良い贈り物のうち、どれほどが開封さえされなかったことでしょう？　悲しいことに、これほど多くのものを失ってきたのは過去の教会だけではありません。性別によって制限する神学をもつ今日の教会もそうです。そうした神学は、自分たちの間にいる賜物を持つ女性たちに対して教会を盲目にするか、あるいはこれらの賜物が見いだされ育てられたとしても、それを男性のいない部屋に閉じ込めてしまうのです。

私は、自分が平等主義の文化の中で暮らしていることを神に感謝しています。そこでは社会の状況によって、娘が、神から賜物として与えられたどんな職業上の貢献でも、社会の中で果たせる可能性が高くなっています。教会での彼女の働きについても同じであることを、心から願っています。

しかし、階層主義の学者たちがよく持ち出す反論の一つに、まだ答えていないことを認めなければなりません。もし教会の指導が性別に基づくべきでないなら、なぜテモテへの手紙第一3章2節は、牧師は「自分の妻に忠実」であるべきだと言っているのか、という反論です。この問いは、その節そのものだけでなく、自分自身の解釈の方法をも注意深く見つめるよう促します。

ローマ人への手紙対テモテへの手紙第一――規範的な手紙対是正的な手紙

これが出てくる箇所は次のとおりです。

だれでも監督の職を志すなら、それは立派な務めを望んでいるのです。ですから監督は、非難されるところがなく、**自分の妻に忠実で**、節度があり、自制心があり、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒におぼれず、乱暴でなく柔和で、争いを好まず、金銭を愛さない人でなければなりません。自分の家庭をよく治め、子どもたちが自分に聞き従うようにさせなければならず、しかもそれを十分な尊敬に値する仕方で行わなければなりません。（自分の家族〔文字どおりには「家」〕を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょうか？）また、信者になったばかりの人であってはいけません。高慢にな

って、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。また、外部の人々にも評判の良い人でなければなりません。恥辱を受け、悪魔の罠に陥らないためです。[632]

この箇所は、クレタ島での使徒的な働きにあたってテトスに与えられた長老の資格のリストとかなりよく似ています。[633]両者の違いは、テモテへの手紙の箇所がその後に、執事の資格について、似てはいるもののより短いリストを付け加えている点です。[634]三つの部分すべて、すなわちテトスへの手紙の長老についての部分と、テモテへの手紙の長老と執事についての二つの部分のすべてに、資格として「自分の妻に忠実」という言い回しが含まれています。

額面どおりに受け取ると、これはローマ人への手紙12章と16章と衝突するように見えます。そこでは、男性であることや婚姻の状態ではなく、賜物と召しが唯一の基準だからです。そこで私たちは問います。「ローマ人への手紙12章と16章をテモテへの手紙第一3章に照らして解釈すべきなのか、それともその逆なのか？」

もし私が子どもに手紙を書いて、その子への愛を伝え、人生についての最善の知恵を分かち合ったとします。そして別の手紙で、ある特定の状況でのその子のまずい対処について心配を伝え、それをどう正すべきかを助言したとします。その場合、年月がたつにつれて、子どもが前者の肯定的な手紙を枠組みとして、後者の是正的な手紙を読んでくれることを私は願うでしょう。同じように、私たちはローマ人への手紙12章と16章を枠組みとして、テモテへの手紙第一3章を読むべきです。第7章で示したように、テモテへの手紙第一全体は主に是正的な調子をもっており、偽教師たちによって損なわれた教会を立て直そうとしています。その箇所には時代を超えた知恵がありますが、それらの真理は、まったく異なる状況に直面しているかもしれない今日の教会によって、注意深く掘り起こされる必要があります。

私のたとえに戻りましょう。もし娘が、まったく異なる状況の中で、私が兄に宛てて彼の人生の混乱をどう収拾するかについて書いた手紙を読んだとしたら、その手紙で私が言ったことすべてを考えなしに当てはめたりしないよう、私は願うでしょう。このたとえを当てはめると、ローマ人への手紙はむしろ、五人の子どもたち全員に、それぞれの状況にかかわりなく書く回覧の手紙のようなものです。ユダヤ人と異邦人の融合という独特の状況を扱ってはいますが、本質的に主として是正的なものではありません。むしろパウロは、自分の言うことのほとんどすべてが、どこ

632. テモテへの手紙第二3章1–7節
633. テトスへの手紙1章6–9節
634. テモテへの手紙第一3章8–12節

のどの教会にもそのまま当てはめられるような仕方で教えています。それは、彼がまだその教会を訪れたことさえなく、そのため、どの一般的な教会にでも書くような書き方をおおむねしているからです。

これに対して、テモテへの手紙第一は、テトスへの手紙と同様に、主として一人の個人に宛てられています。特定の会衆がその内容を知らされていたかもしれませんが、非常に特定の課題に取り組んでいる特定の指導者に宛てて書かれているという事実は、その内容をすべての教会に当てはめる際には特別な注意を払うべきであることを意味します。

最後に、明瞭な箇所を用いて、より不明瞭な箇所を解釈すべきだということを心に留めておかなければなりません。テモテへの手紙第一3章は、最初に読んだときにはごく単純明快に思えるかもしれません。しかし少し考えてみると、聖書のほかの多くの箇所が明らかに教えていることと矛盾するように見えることがわかります。その例はすぐ後で挙げます。聖書は聖書によって解釈され、明瞭な箇所はより不明瞭な箇所に光を当てるためにあるのですから、テモテへの手紙第一3章から普遍的に適用できる真理を引き出そうとする私たちの試みは、ローマ人への手紙12章と16章に導かれなければなりません。[635]

テモテへの手紙第一3章とテトスへの手紙1章の二つの読み方

性別と教会の指導に関して、テモテへの手紙第一3章（とテトスへの手紙1章）を解釈する方法は二つあります。第一の方法は、パウロが、エペソの（そしてクレタの）教会の長老は男性であるべきだ、したがってあらゆる場所のすべての教会でそうあるべきだと命じていると読むことです。第二の方法は、パウロが、それらのギリシア・ローマ世界の教会で最もありそうな、そしておそらく最もふさわしい長老

635. 私が言っていないことまで読み取らないでください。どの特定の箇所を解釈するにも聖書全体が必要です。それでもやはり、是正的な手紙であるテモテへの手紙第一を、規範的な手紙であるローマ人への手紙というレンズを通して読むほうが、その逆よりも良いかもしれません。

はpaterfamilias（家長）、すなわち男性の家の指導者であろうと想定しているものの、例外もありうる、と読むことです。[636]

私は、第二の読み方のほうがより良い読み方だと考えます。N・T・ライトはこう言っています。「〔確かに〕パウロは〔監督を〕男性として言及しています〔が〕……それは、ギリシア語の文法が通常、両方の性をまとめて指すからであり、また教会の初期の時代には、ほとんどの共同体の指導者がおそらく男性だったからです。私はそれが、この特定の働きと召命から女性を締め出すものだとは考えません。」[637]

ライトが「ギリシア語の文法は通常、両方の性を指す」と言うとき、彼の言うことは正しいのです。英語の翻訳とは対照的に、パウロの用いる言葉づかいは基本的に性別を包括するものです。ギリシア語原文では、「だれでも監督の職を志すなら」[638]の「だれでも」（tis）にあたるパウロの言葉は、性別を包括しています。しかしさらに核心を突くのは、テモテへの手紙第一3章のリストにもテトスへの手紙のリストにも、男性代名詞が一つもないことです。それを、テモテへの手紙第一の監督についてのリストの英語訳――「his … He … his … his … him …he … his … he … He … he … He … he …」（彼の……彼は……彼の……）――と比べてみてください。これらの代名詞は、最初の読者ならそうしなかったような仕方で、ほとんど一行ごとに男性を思い描くよう私たちを誤らせるのです。

この性別包括の可能性は、「自分の妻に忠実」（文字どおりには「一人の妻の夫」）という言い回しが、リストの中で表面的に読むと男性であることを暗示する唯一の部分だと理解すると、さらに強められます。しかし実際には、これはこの文脈で、男性であれ女性であれ、一般的な人を指して用いられている言い回しなのです。確かに、女性だけに向けて語られているなら、パウロは「一人の夫の妻」という言い方を用いるでしょう（テモテへの手紙第一5章9節でそうしているように）。けれど

636. 本書を書き終えた後、私はアンドリュー・バートレットの“Men and Women in Christ”を読み、315–327ページに第三の方法を見いだしました。パウロは意図的に一般的な、つまり性別を包括する言葉を用いており、したがって監督が男性であるとさえ想定していない、というものです。もし11節の謎めいた「女性たち」への言及がなかったなら――付録5でその意味を理解しようと試みています――私は彼の見解に乗り換えるでしょう。実際には、私は第二と第三の方法の間で決めかねています。どちらに取るにしても、この箇所は女性を牧会の役割から除外するものとして読まれるべきではありません。
637. Tom Wright, Paul for Everyone: The Pastoral Letters, p. 29
638. 同じ「だれでも」あるいは「だれか」という語（tis）は、5節にも、またテトスへの手紙1章6節にも出てきます。これは「どの男性でも」ではなく「どの人でも」という意味です。たとえば、イエスはこう言われます。「だれでも（tis）わたしについて来たいと思うなら、その人は自分の十字架を負わなければなりません。」（マタイ16:24）

もパウロは、古代の男性中心的なギリシア語の書き手がだれでもそうであったように、あるグループに両方の性が含まれるときには言い回しの男性形を用いたのですから、ここでもそうであった可能性を理解できます。イエスも似たことをしておられます。「あなたの隣人の妻」[639]を欲してはならないという、男性中心的に述べられた律法を引用されるときです。この律法は、隣人の夫を欲してはならない妻たちにも同じように当てはまります。

「自分の妻に忠実」の要点が男性であることでないなら、何が要点なのでしょうか？　この言い回しは、婚姻の面でも性の面でも、一夫一婦であることを意味します。複数の配偶者を持つ人や、配偶者に対して性的に不誠実な人を除外するものです。[640]シュライナーのような補完主義の学者たちでさえ（またほかの人々も）、この可能性を認めています。「テモテへの手紙第一3章1–7節とテトスへの手紙1章6–9節の長老の資格は、彼らが一人の女性の夫であるべきだという記述も含めて、それ自体では必ずしも女性が長老として仕えることを排除するものではありません。」[641]

しかし、（そうする実質的な理由はないかもしれませんが）パウロがこのリストで具体的に男性だけを指していたと仮定してみましょう。それでもなお、パウロはせいぜい、その文脈では長老はおそらく男性だろうと想定しているにすぎず、それを必ずしもあらゆる時代のすべての教会にとっての厳格な規則としているわけではない、と結論する十分な理由があります。

これは決して目新しい考えではありません。私は何十年もの間、牧師を選ぶ際にテモテへの手紙第一3章を適用していると主張する「長老主導」の教会に仕えてきました。しかし、私たち教会指導者のだれ一人として、パウロの、より状況に左右される資格条件を、だれが指導できるかについての厳密な法規として受け取ってはいませんでした。品性に関する資質（「柔和で、争いを好まず、金銭を愛さない」）、人間関係における指導力（「治めることができる」）、教理の知識（「教える能力があ

639. マルコの福音書10章12節
640. 「一人の妻の夫」は、その部分の総和として理解されなければならない慣用句です。同様に英語にも、「mailman」（郵便配達人）や「chairman」（議長）のように「man」を含む呼び名がありましたが、それは指し示す人が男性であることを示すのではなく、男性が既定の性であったことを示すものでした。Philip Payne, Man and Woman, One in Christ, 第24章の議論を参照してください。
641. 出典：www. bit.ly/31ls4qR p. 36。同様に、男性のみの指導を支持するダグラス・ムーも、それでもなおこう述べています。「この言い回し〔一人の女性の夫〕が明らかに女性を除外していると論じるのは行き過ぎでしょう。」（The Interpretation of 1 Timothy 2: 11-15: A Rejoinder.）クレイグ・ブロンバーグも同様です。「テモテへの手紙第一3章1–7節とテトスへの手紙1章5–9節は、それほど関係がありません。」（Two Views on Women in Ministry, 第1章）

る」）は普遍的なものだと、私たちは皆同意していました。しかし、4節と5節で述べられている、より状況的な要素はそうではありません。実際、それらを拘束力のある命令として受け取るなら、教会が任職できるのは、年長者で（「長老」という言葉は年長であることを含意します）、結婚していて、二人以上の成人した子どもがいて、その子どもたちが皆、熱心にキリストに仕え、親のあらゆる命令に聞き従っている人だけ、ということになってしまいます。まさかパウロは、年配でない人、結婚していない人、子どもが二人以上いない人、行儀の良い子どもや信仰を持つ子どもがいない人、（一般に奴隷や親族や借家人を含む）自分の家を持たない人、そしてこの議論を延長すれば、男性でない人を牧師として任職する可能性を、普遍的に禁じているわけではないでしょう？

パウロは、イエスもテモテも自分自身も――全員独身でした――教会の上級指導チームに加わることを許されるべきではないと考えていた、と本当に信じるべきでしょうか？　少し常識を働かせれば、このリストにあるのは、その時点でのエペソの教会にとって最もありそうな、あるいは最もふさわしい長老についてのパウロの推定であって、今後永遠に教会を指導できる人の種類についての普遍的な規定ではないことがわかります。

すでに述べたように、テモテへの手紙第一3章とテトスへの手紙1章の品性の特質は、長老を選ぶ助けとなる極めて重要な聖書の資料です。しかし、この品性の特質のリストでさえ、状況によって形づくられています。なぜ、このリストは内面的な資質ではなく、外面的な資質――義と見なされること――にこれほど関心を寄せているのでしょうか？　なぜ、神と人々への愛に関わる特質が一つも挙げられていないのでしょうか？　なぜ、このリストには当時のギリシア語文献にこれほど際立った並行があり、「信者になったばかりの人であってはいけない」（6節）を除けば、挙げられている資質のどれもが、ギリシア・ローマ世界の非キリスト者の公職者にも期待されるものだったのでしょうか？　なぜ、これらの特質を示せないことが「恥辱」（7節）につながるのでしょうか？[642]なぜ、パウロ自身が長老を任職したときに、自分の指示のすべてを適用しなかったのでしょうか？　たとえば、ここで彼は新しいクリスチャンを長老に任命すべきではないと言っています（6節）が、彼とバルナバは時に、新しい回心者たちの中から長老を任職したのです。[643]

642. 文化的な信頼性に対するパウロの関心は、テモテへの手紙全体を動かしている大きな原動力です。パウロは、教会の指導者たちが「外部の人々にも評判の良い人で、恥辱を受けないため」であることを望んでいます。同様に、テモテへの手紙第一2章10節、15節、3章4節、8節、11節、5章10節、6章1節は、教会の外部での評判に対する広範な関心を表しています。
643. 使徒の働き14章8–23節

どの問いに対する答えも、エペソの教会がすでに、教会の評判をずたずたにした偽教師たちや堕落した指導者たちのために恥辱を経験していた、ということのようです。このリストの背後には、教会がその指導者たちの信頼性を通して、自分たちの状況の中で教会自体の信頼性と証しを取り戻してほしいという、パウロの切実な関心があるのです。[644]その文化では、年長者たちが指導する教会のほうが、若い人々が指導する教会よりも良いメッセージを発したでしょう。さらに、男性であること、結婚していること、家の中に従う者たちがいることは、当時新しく生まれつつあったどんな団体の指導者にとっても望ましい、目に見える特質でした。しかし、こうした状況的な要素がほかの文化や状況でも常に当てはまると考えるべきではありません。実際、私たち自身の文化では、子どものいない指導者、独身の指導者、より若い指導者、女性の指導者が、教会の信頼性を損なうことはありません。私は結婚したばかりの男性として、年長らしさはほとんどないまま（まだ20代でした）、子どももいない状態で牧師になりました。そして私を任職した人々は、自分たちが聖書の教えに違反しているとは考えませんでしたし、私の霊的な指導を受け入れた教会の人々もそう考えませんでした。

テモテへの手紙第一を正しく読むことについて何かを学ぶとすれば、それは、その指示の多くがいかに状況的であるかということです。そのすべてが普遍的な法規なのではありません。たとえば、私は「やもめの名簿」をつけている教会に属したことは一度もありません。しかしテモテへの手紙第一5章3–9節は、60歳以上の（59歳以下ではない）やもめだけが（男やもめではなく）教会から金銭的な支援を受けるべきだと言っています。それなのに、多くの教会は、60歳より若い男やもめをも喜んで支援しています！　彼らに、なぜテモテへの手紙第一5章の「明らかな教え」を無視するのかと尋ねると、彼らは、エペソとは異なる自分たちの状況ではそうするのが正しいのだと、正しく答えます。同様に、今日の教会が、テモテへの手紙第一3章の「明らかな教え」にもかかわらず、なぜ賜物があり敬虔な独身男性や既婚女性を上級指導チームに加えるのかと尋ねるなら、彼らは、傷ついていたエペソの教会とは大きく異なる自分たちの状況ではそうするのが正しいのだと、正しく答えるでしょう。

644. ウィリアム・マウンスは、テモテへの手紙第一・第二とテトスへの手紙の注解書の中で、次のことを示しています。テモテへの手紙第一3章とテトスへの手紙1章のリストを合わせ、さらにこの二つの手紙からパウロの反対者たちや偽教師たち、また彼らが教会に及ぼした影響についてわかることのリストを作ると、パウロのリストのほとんどすべての記述に、反対者たちの側にちょうど正反対のものがあるのです。言い換えれば、パウロはテモテとテトスに、教会（諸教会）を荒らした反対者たちとはまったく似ていない指導者を探すよう強く促しているのです。

「彼女にできないことはあるのだろうか？」

私はしばしば、バランスのとれた人として、また経験豊かな専門職として妻が見せる驚くべき有能さに感嘆し、この問いを自分に投げかけます。しかし牧会に関して言えば、この問いは、敬虔でふさわしい賜物を持つ女性たちについてこそ問われるべきものです。

新約聖書は、長老あるいは牧師に求められる資質と働きの両方を詳しく述べています。こうした詳細を見渡して私が強く感じるのは、その一つ一つが女性にも手の届くものだということです。

まず、テモテへの手紙第一3章の品性の資格リスト（テトスへの手紙1章にも繰り返されています）から始めましょう。「一人の妻の夫」という言葉（これは「婚姻の面でも性の面でも一夫一婦」という一般的な意味で読むべきだと先に論じました）を除けば、このリストには、現代の読者が男性だけに手の届くものだと見なすようなものは何もありません。それでもなお、私たちはこう問うかもしれません。パウロはそう考えていたのだろうか、と。これに答えるために推測する必要はありません。テモテとテトスへの手紙のほかの箇所で、彼は、敬虔な女性たちがまさにこれと同じ資質を身につけていることを、はっきりと思い描いているからです。

長老職は良い働きです（3:1）。女性たちは良い働きをするべきです（5:10）。長老たちも、そして別の箇所で言及されている女性たちも、次のようでなければなりません。非難されるところがない（3:2；5:7）、節度がある（3:2；3:11）、自制心がある（3:2；2:9、15）、品位がある（3:2；2:9）、よくもてなす（3:2；5:10）、酒におぼれない（3:3；テトス2:3）、自分の家をよく治める（3:4；5:14）、外部の人々の評判が良い（3:7；5:7、10）。長老は教える能力がなければならず（3:2）、女性は良いことを教えるべきです（テトス2:3）。長老は金銭を愛してはならず（3:3）、女性は金や真珠や高価な衣服を身に着けるべきではありません（2:9）。長老は子どもたちを従わせる仕方において品位を示すべきであり（3:4）、女性もまた品位を示すべきです（3:11）。長老は新しい回心者であってはならず、高慢になってさばき

に陥ってはなりません（3:6）。女性は謙遜であり、さばきの下にあってはなりません（5:10、12）。[645]

品性の特質はさておき、牧師あるいは長老に求められる能力についてはどうでしょうか？　簡単に言えば、彼らは「群れを牧し、導き、教え、戒め、見張ることになっています。これには偽教師から守ることも含まれます。彼らはまた良い模範を示し、病人の癒やしのために祈ることになっています。預言や、霊的な賜物を授けるための按手に関わることもあります。」[646]これらの働きの中に、それを行うのに十分な賜物と訓練と経験を持つ女性の能力の範囲を超えるものが、一つでもあるでしょうか？

女性が牧師になることを明確に禁じる聖書箇所がない以上（本書でここまで、そのような箇所はないことを示してきました）、資格のリストにも働きのリストにも、パウロが「だれでも」に追い求めるよう招いているまさにその召しを女性が追い求めることを排除するものは何一つない、と考えるのが理にかなっています。パウロはこう書いています。「だれでも監督の職を志すなら、それは立派な務めを望んでいるのです」（3:1）。要するに、少なくとも私が身を置いている平等主義の文化では、品性に満ち、召され、能力のある女性たちをも教会の指導へと任職することが、正しく賢明なのです。

（パウロの「自分の妻に忠実」という言葉のほかに、補完主義者たちが男性だけの長老職を主張するために用いる、テモテへの手紙第一3章からの論拠がさらに二つあります。それらについては「付録5：テモテへの手紙第一3章からのさらに二つの論拠」で扱います。）

教えと指導の土台としての賜物

繰り返しますが、規範的な手紙であるローマ人への手紙では、パウロは教会で指導し教えることの土台として賜物を強調しています。一方、是正的な手紙であるテモ

645. アンドリュー・バートレットは“Men and Women in Christ”（p. 318–319）で、これらの点に私の注意を向けてくれました。彼はさらにこう付け加えています。「パウロはさらに三つの資格を含めています。柔和であること、乱暴でないこと（1:13と比較）、争いを好まないこと（3:3）です。これらが女性にも見いだされうることに異論はありません。」
646. 使徒の働き20章28節、テモテへの手紙第一3章5節、5章17節、ペテロの手紙第一5章2–3節、使徒の働き20章28–31節、ヤコブの手紙5章14–15節、テモテへの手紙第一4章14節。この働きのリストについて、アンドリュー・バートレットの“Men and Women in Christ”（p. 294）に感謝します。ほぼそのまま引用しました。

テへの手紙第一では、彼はエペソの教会の状況を正すことにより関心を寄せています。

しかし、だからといって、テモテへの手紙第一が、指導者や教師を選ぶ際に賜物を認めることの重要性を完全に捨てているわけではありません。手紙の終わり近くにある一つの重要な節が、そのことを示しています。「教会の事柄をよく指導している長老たちは、二倍の尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。特に、説教と教えを働きとしている人たちはそうです。」[647]この節には、賜物についての暗黙の言及が二つあることに注目してください。一つ目は指導の賜物です。パウロによれば、ある長老たちは「教会を指導すること」に特に優れています。「指導する」にあたるギリシア語（proestōtes）は、教会を指導することについて最もよく使われる言葉です。[648]それなのに――そしてこのことは私たちをはっとさせるはずですが――パウロは、ローマ人への手紙12章の性別に関係のない「指導の賜物」にも同じ言葉を使っているのです。私が言いたいのは、神がある人に監督になってほしいと望んでおられるかもしれないことを示す最も確かなしるしは、その人が神から与えられた指導の賜物を現していることだ、ということです。

二つ目は教える賜物です。手紙の前のほうで、パウロはすべての長老が「教える能力がある」べきだと言っています。しかし、「特に、説教と教えを働きとしている人たち」と書くことで、ある長老たちはおそらくほかの長老たちよりもはるかに多くそれを行うべきだということをはっきりさせています。教会生活での私の経験からも、そのとおりだと思います。説教者の中には、単純に、ほかの人よりも説教の賜物に恵まれている人がいるのです。テモテへの手紙第一によれば、牧会の指導チームは、（自分たちの間でも、ほかの人々の中でも）神から与えられた賜物を深く意識しているべきだということがわかります。パウロがテモテにこう思い起こさせているからです。「長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある賜物を軽んじてはいけません。」[649]

この章を、始めたところに着地させましょう。私たちが当てはめようとすべき「御霊の皮袋」は賜物を認めることであって、決して性別による排他性ではありません。教会は、教えることと指導することという大きな影響力を持つ働きへと訓練し送り出すために、敬虔で賜物のある人々を探し出すべきです。結局のところ、パウロ自身がそれを直接命じています。「賜物が……教えることであれば教え、……指

647. テモテへの手紙第一5章17節
648. これはテモテへの手紙第一5章12節に出てきます。そこでは、この動詞の同族語が教会の指導を表すのに使われています。
649. テモテへの手紙第一4章14節

導することであれば熱心に指導しなさい。」[650]賜物を持つ女性たちに脅威を感じるのではなく、私たちは彼女たちのゆえに神をほめたたえるべきです。初代教会における女性の働きについて博士論文を書いた新約学者ベン・ウィザリントンの次の結論には、私たちが認めたい以上の真実があるのかもしれません。「教会の問題は強い女性たちではなく、むしろ……強い女性たちに脅威を感じ、さまざまな手段で、疑わしい釈義によってさえ、彼女たちが教会で自分の賜物と恵みを用いることを禁じようとしてきた男性たちなのです。」[651]

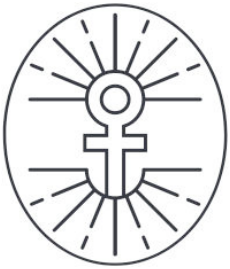
YWAM（ユース・ウィズ・ア・ミッション）のローレン・カニンガム（Loren Cunningham）は、故チョー・ヨンギ（David Yonggi Cho）がかつて彼に語ったことを伝えています。「〔韓国の〕教会はどこも小さいのです。〔なぜなら〕女性たちを抑えつけ、神が召しておられることを女性たちにさせないからです。私は彼らに、女性たちを解き放ちなさいと言いましたが、彼らはそれが問題ではないと言い張ります。彼らは私に『あなたの教会の鍵は何ですか？』と尋ねます。私はもう一度『女性たちを解き放ちなさい』と言うのですが、彼らはまったく聞こうとしないのです！」[652]

ついこの前、私はある友人と話していました。彼は妻と一緒に、50人の大人で教会を再開拓し、それが数千人規模に成長するのを見てきました。彼らはまた、南部アフリカの大きな教会のファミリーと、以前ザンビアで開拓し、増え広がっている教会のファミリーをも指導しているので、私は彼に、その重荷にどう対処しているのかと尋ねました。彼の答え方からは、結婚生活においても働きにおいても、性別にかかわりなく賜物を認めることを、神の祝福を世界に注ぐための皮袋として受け入れていることがわかります。

妻と私は一緒に指導しています。私たちにとって、それは自分たちのしていることに相乗効果をもたらします。私たちは二人ともチームとして指導し、働き、それぞれの強みに応じてさまざまな分野で互いに指導し合い、互いに従い合っています。互いの最善を引き出し、互いに支え合おうとしています。ザンビアで教会を開拓するとき、私たちには、男性の教会指導者の数よりも多くの機会があります。しばしば、女性たちが最も賜物に恵まれ、最も良い品性を持っています。教会を彼女たちに委ねると、彼女たちも、彼女たちが指導する教会も成長していくのを、何度も繰り返し見てきました。

650. ローマ人への手紙12章6–8節
651. 出典：www.bit.ly/3BJj5wh
652. Loren Cunningham, Why Not Women? A Biblical Study of Women in Missions, Ministry, and Leadership

賜物を持つ女性たちを押しのけたり軽んじたりするとき、私たちは神の恵みの実に多くを失います。私たちが奪うのは、賜物を持つ女性たち自身からだけではありません。私たちが指導する教会、私たちが仕える世界、そして男性たちからも、彼らが切実に必要としているパートナーシップを奪ってしまうのです。



第四部

女性たちを解き放つ



14

聖書的な女性らしさと男性らしさ

「養い育てる者としての女性、指導する者としての男性という、古い伝統的な考えを脇に置きなさい。スーパーウーマンとしての女性、抑圧者としての男性という新しい考えも、脇に置きなさい。あらゆるものの中で最も恐ろしいもの、すなわち白紙から始めなさい。」 **アンナ・クインドレン（Anna Quindlen）**[653]

ジョン・パイパーはこう言います。「教会には、8歳の男の子や女の子が『ママ、大きくなって、女じゃなくて男になるってどういうこと？』と言うときに、何と言うべきかという答えが必要です。……一般的な人間の美徳の話はしないでください。女ではなく男であるとはどういうことかを教えてください。」[654]しかし、私も同じことを彼に尋ねてみたいと思います。ほぼその年ごろの私の子どもたちに、彼は何と言うでしょうか？　次に述べることで彼の口に言葉を押し込むのをお許しください。とはいえ、それは彼自身の言葉なのです。

彼が書いたダンバーズ声明は、神がすべての男性を、女性を指導し、養い、守るように召している、と述べています。一方、女性はこの指導、扶養、保護に従い、それを受け入れ、特に家庭と子どもに焦点を当てるべきだとされています。もし私の子どもたちが、ふさわしく男性らしい男性、ふさわしく女性らしい女性であるとはどういうことかと尋ねたなら、パイパーは思い切ってこう答えます。

成熟した男性らしさの核心には、男性のさまざまな関係にふさわしい仕方で女性を指導し、養い、守るという、善意に基づく責任感があります。……そして……成熟した女性らしさの核心には、女性のさまざまな関係にふさわしい仕方で、ふさわしい男性からの強さと指導を肯定し、受け入れ、育むという、人を自由にする心の傾向があります。[655]

653. 1999年マウント・ホリヨーク大学（Mount Holyoke）卒業式スピーチ
654. 参照：www.vimeo.com/44525286

しかし、見てください。パイパーはここで、結婚における役割についての自分の理解を、すべての男女間の関係に投影しています。彼が正しいなら、私は8歳の娘に、四人の兄弟の「指導を受け入れる」ことを始めるよう導くべきだということになります。神は本当に、私の息子たちと娘にこのことを期待しておられるのでしょうか？　聖書が男性らしさと女性らしさについて何を教えているかという問題に、できるかぎり徹底的に取り組んでみましょう。

教理としての相補性

聖書の中で人類について述べる最初の節は、その第1章で、「男と女に彼らを創造された」と告げています。生物学的に、神は人類を性的二形をもつものとして造られました。創世記1章の前のほうでは、夜と昼、太陽と月という言葉づかいが、男性と女性の相補性のひな形を示しているのかもしれません。私たちは互いの対になる存在です。パズルの二つのピースのように、私たちは互いの欠けを埋め合います。イエスは創世記1章を引用して、性別の区別を強調されました。「創造者ははじめの時から『男と女に彼らを創造された』ということを、あなたがたは読んだことがないのですか？」[656]

聖書の第2章もまた、両性の相補性を示しています。アダムとエバを男性と女性全般の原型と見なすなら、私たちは「似ていて、かつ向かい合う」（kenegdo）存在です。私たちは対になる者として互いを完成させ、さらにパートナーとして協力し合って、互いの最善を引き出します。（これらの考えを合わせれば、私たちは「カウンターパートナー」（counterpartners）です。）

ですから、相補性は神の考えなのです！　ここまではすべて良いのです。しかし、明らかな生物学的違い以外に、男性と女性の違いはいったい何なのかを聖書の冒頭のこれらの章に問うとき、私たちは答えに窮します。確かに男性は子どもを宿し、産み、授乳することはできません。しかし、それ以外に男性ができないこと、あるいはすべきでないことは何でしょうか？　そして、女性を妊娠させること以外に、女性ができないことは何でしょうか？　聖書の冒頭の章には、明確な答えはほとんど与えられていないと私は考えます。

655. 出典：Recovering Biblical Manhood and Womanhood, 第1章。
656. マタイの福音書19章4節。興味深いことに、違いを解消してしまうのは、偽りのグノーシス主義のイエスだけです。「あなたがたが二つのものを一つにし……男性が男性でなく、女性が女性でなくなるようにするとき……そのとき、あなたがたは〔御国に〕入るであろう」（トマスの福音書22）。

何らかの「役割の特定」に最も近いものは、創世記3章で神が罰を言い渡される仕方に見られます。女性は出産において苦しみを経験することになります――これは、彼女の人生の方向性が子育てになることを神が認めておられるということでしょうか？　そして男性は畑によって苦労することになります――これは、彼が経済的な養い手になることを神が肯定しておられるということでしょうか？

そもそも、これらの罰から私たちの役割についてそれほど多くの推論を引き出してよいのでしょうか？　結局のところ、この箇所は記述しているのでしょうか、それとも規定しているのでしょうか？　創世記の最初の読者たちのことを考えると、おそらく何かが規定されているのではなく記述されているのだとわかります。それは農耕文化に向けて書かれています。そこでは男性たちが農作業のうち体力を要する側を担い、妻たちは六人目の子どもに授乳していたのです。

実際、これらの罰の中には、独身であれ既婚であれ、あらゆる文化のすべての男性と女性に、性別によって排他的な領域を規定するようなものは何もありません。むしろ創世記1章は、男性と女性がともに子育てに関わることを強調しています（「生めよ。増えよ」）。エバは子どもを産むかもしれませんが、アダムもまた子どもたちの世話をし、育てます。（創世記2章で語り手は、子どもが父親と母親の両方によって育てられることが神の計画であることを示唆しています。[657]）

そして両者とも畑を耕すことに関わっています（「地を従えよ」）。エバが来る前に、アダムがそれを耕すために園に置かれたのは事実かもしれません。しかし、エバはふさわしい助け手、パートナーとして彼に与えられたと告げられており、それは彼女が仕事の負担を分かち合うことを示唆しています。[658]こうした養い手と育て手の役割に何か問題があるというのではありません。しかし、補完主義者たちがそれをすべての男性と女性に押しつけるとき、彼らはこの箇所の明らかな教えを越えてしまっているのです。

657. 創世記2章24節を参照してください。
658. アラステア・ロバーツ（Alastair Roberts）は最近、性別の違いについて、本文からより多くを読み取ることを提案しています。創世記2章を創世記1章に照らして読むなら、創世記2章に描かれている男性の召命は、主として創造の最初の三日間の働き、すなわち名づけること、手なずけること、分けること、治めることに対応します。女性の召命は、主として満たすこと、栄光を与えること、生み出すこと、交わりを築くこと、新しい命を生み出すことに関わります。これらは創造の後半の三日間に結びついた働きです。この読み方がどれほど刺激的であっても、それは目新しいアプローチであり、想像力豊かな読み込み（eisegesis）の一例かもしれません。もしそれを受け入れるとしても（私は受け入れるべきではないと思いますが）、私はロバーツの提案を改良して、女性の召命にも「治めること」を含めるでしょう。何しろ、六日目は明確に治めることと従わせることについての日なのですから。

要するに、性的二形と相補性の考えは創世記1–3章に明らかに見られるかもしれませんが、男性と女性の役割や領域についての規定、あるいは男性らしさと女性らしさの定義は見られません。

男性らしさと女性らしさ：社会的構築物なのか？

「本物の男」あるいは「本物の女」であるとはどういうことかという問いは、現代の文化では、ジェンダーは「社会的構築物」だというポストモダンの考えが勝利を収めたという事実によって、いっそう複雑になっています。生物学的な性は別として、男性らしさや女性らしさといった考えは、遺伝よりもはるかに、その人の生い立ちや文化の結果である、と今では広く主張されています。

私たちの文化の主張の強みの一つは、男性と女性についての研究の多くのメタ分析が同じ結論を示していることです。生物学的な違いを除けば、平均的な男性と女性は驚くほど似ている、という結論です。多くの研究者は、文化の影響を考慮に入れると、その違いはごくわずかであり、一般化して当てはめる価値はないと結論しています。

この結論を、社会科学の知見をゆがめているフェミニストの思惑だとして投げ捨てたくなる前に、それが創世記1章と2章の教えとある程度一致していることを思い出しましょう。男性と女性は同じ惑星で造られ（一方が火星から、他方が金星から来たのではありません）、同じ素材で造られ（「骨」と「肉」）、同じ似姿とかたち（神の）に造られています。創世記1章で男性と女性が神と共有している「似姿」は、創世記2章における男性とその妻との間の「似ていること」に類比を見いだします。また、kenegdoという言葉は、違いよりもむしろ同じであることを強調しているのかもしれません。それで「ふさわしい」という訳があるのです。男性と女性の間には対応関係、人間としての「同じさ」があり、アダムはどれほど懸命に探しても、それを園のどの獣の中にも見いだすことができませんでした。これらすべては、男性と女性の違いを誇張しないよう私たちを助けてくれます。

ティクヴァ・フライマー＝ケンスキー（Tikva Frymer-Kensky）は旧約聖書の女性たちを研究し、強調されているのは彼女たちの女性であることではなく、人間であることだと気づきました。

聖書に記された女性たちの目標と戦略を見渡すと、驚くべき事実が浮かび上がります。聖書における女性の描かれ方には、とりたてて「女性的」なものは何もなく、その目標にも戦略にも、特に女性らしいものは何もないのです。女性たちの目標は、聖書の男性の登場人物たちや物語の著者たちが抱いていた目標と同じです。[659]

とはいえ、私の見るところ、男性と女性には平均して、わずかであるにせよ、認知的、心理的、感情的な違いがあるという考えを支持する研究は十分にあります。東洋の露店商人たちが使うのを私が耳にした言葉を借りれば、男性と女性は「same, same, but different」（同じ、同じ、でも違う）なのです。

違い

私たちの脳の違いを考えてみてください。私たちの脳は、直感的で創造的な右脳と、事実に基づき分析的な左脳との間を行き来して働くように設計されています。男性の脳では、神経の結合が平均して各半球の中で前から後ろへと走っており、それが知覚と協調した動作において男性を有利にしています。対照的に、女性の脳には二つの半球の間をつなぐ経路がはるかに多くあり、それによって女性はより自然にコミュニケーションをとり、物事を感じ取ることができます。どうやらこのために、男性はしばしば道順を把握したり単一の作業をやり遂げたりするのが得意で、女性は複数の作業を同時にこなすことや集団での問題解決に秀でているようです。また、そのために、平均して男性はより直線的に考え、女性はより包括的、双方向的、文脈的に考えるのです。[660]もしかすると、このことは、男性は平均して自分を切り離すことによって成熟しようとし、女性は他者と結びつくことによって成熟しようとする、というよく知られた見方の説明になるのかもしれません。[661]

また、脳のスキャンは、灰白質（情報が処理される場所）と白質（情報が体のほかの部分へ電気的に伝えられる場所）の量の違いを明らかにしています。白質の多い

659. Tikva Frymer-Kensky, In the Wake of the Goddesses: Women, Culture and the Biblical Transformation of Pagan Myth, 第11章
660. この主題についての二つの記事を参照してください。www.bit.ly/2ZR6n12、www.cbsn.ws/2YaJ7L6
661. Carol Gilligan, In a Different Voice. 引用元：Tim and Kathy Keller: “The Meaning of Marriage”, 第6章。

男性は身体的な協調に容易に秀で、女性は情報をより速く処理し、社会的な手がかりを見分けます。[662]

私にとって最も興味深いのは、社会科学者たちが性格のタイプに十のスペクトル（尺度）を特定していることです。それぞれが、思いやり、礼儀正しさ、想像力、勤勉さ、熱意、気分の安定、几帳面さ、自己主張、分析的な思考、冷静さを保つ能力において、人がどれほど低いか高いかを測るものです。そして彼らは、平均して、男性と女性がこれらのスペクトルの多くで異なる位置にあることを見いだしました。それを示したのが次の表です。[663]

	女性のパーセンタイル	男性のパーセンタイル
思いやりがある	61	39
礼儀正しい	59	41
想像力が豊か	56.5	44.5
熱意がある	55	45
几帳面	54.5	45.5
勤勉	50	50
自己主張が強い	48	52
分析的	45	55
気分が安定している	42.5	57.5
冷静さを保つ	40	60

この表を理解するために、無作為に選んだ100人の男性と100人の女性から、男女100組のペアを作ると想像してみてください。勤勉さに関しては、統計的な確率では、半分のペアでは女性のほうが男性より勤勉で、残りの半分では男性のほうが勤勉になります。これは、両者が同じように勤勉である傾向があることを示しています。しかし思いやりに関しては、61組で女性のほうが男性より思いやりがあり、残りの39組ではその逆になります。

勤勉さでは引き分けになっているものの、女性は平均して、思いやり、礼儀正しさ、想像力、熱意、几帳面さでわずかに高い得点を示し、男性は自己主張、分析的

662. Alice Mathews, Gender Roles and the People of God, 第13章
663. 出典：www.bit.ly/3pZn7OU

な思考、気分の安定、冷静さを保つことで高い得点を示していることに注目してください。[664]

とても興味深いことです！　しかし、それでも私たちは、これらの平均値をどう扱えばよいのかを問うべきです。確かに、それを一人一人の個人や夫婦への期待として投影すべきではありません。親として見れば、娘のほうがその兄弟より分析的で、その兄弟のほうが娘より思いやりがある、ということもあるでしょう。同じように、仕事を割り振るときに、性別に基づいて候補者を自動的に限定すべきではありません。ドロシー・セイヤーズはこう言いました。

生まれつきの機械工である女性はめったにいません。しかし、もしそういう女性が一人でもいるなら、彼女を説得して別の何かにならせようとしても無駄です。……もし〔彼女が〕一流の弁護士、医師、建築家、技術者になることができるなら、彼女にそれを試させなければなりません。〔あるべき〕原則は、まず仕事があり、そのうえでその仕事が、世の中のほかの人よりもそれを上手にこなせるすべての個人に、男性であれ女性であれ、太っていようとやせていようと、背が高かろうと低かろうと、醜かろうと美しかろうと、〔開かれる〕ということです。[665]

これは、性別役割を規定しようとする補完主義の議論の大きな問題の一つです。神が男性と女性を区別して創造されたと主張するのは正しいことです。平均すると、男性は自己主張の強さのために、より自然に指揮をとることができるかもしれません。また女性は平均すると、几帳面さと思いやりのために、家を整え小さな子どもの世話をすることに、より向いているかもしれません。しかし、賜物のゆえに外れ値となっている男性や女性にこれらの役割を押しつけることは、まったく益になりません。

実際、聖書を使って性別の固定観念を支持することなど、そもそも可能なのかどうか、私は疑っています。

664. 参照：www.bit.ly/3q6HGJh。公平を期して言えば、これらの平均値がどの程度まで生まれつきの性質の結果なのか、それとも育ちの結果なのかを、社会科学はまだ確実には立証していません。
665. Dorothy Sayers, Are Women Human? Essays on the Role of Women in Society, p. 19, 29. 引用元：William Witt, Icons of Christ, 第17章

性別の固定観念を覆す聖書の男性たち

聖書の登場人物を研究してみてください。そうすれば、男性らしさと女性らしさについての現在の文化的な前提のほとんどが、どこにも見当たらないことに気づくかもしれません。

男性であるベツァルエルとオホリアブが、「石を彫り」「木を彫る」ために神から油注がれたとき、私たちはこれが、男性が重労働をするという性別に特有の仕事を肯定していると思うかもしれません。しかし、彼らが「芸術的な意匠」を作り、「織物の衣服」を縫う賜物も与えられていたという事実を、どう扱えばよいのでしょうか？[666]あるいは、ダビデ王が戦いへと突き進んだり、巨人の頭めがけて石を投げつけたりするとき、私たちはこの仕事に男性を選ばれた神に拍手を送るかもしれません。しかし、彼が竪琴を弾き、感情豊かな詩を書いたことはどう扱えばよいのでしょうか？　あるいは、イエスが宮で台をひっくり返されるとき、私たちは好んでその男らしい勇気について語ります。しかし、めんどりがひなを翼の下に集めるように、ご自分の民を集めたいと願われたことはどう理解すればよいのでしょうか？[667]本物の男は泣かない？　いいえ、イエスは涙を流されました。本物の男は武器を振るう？　イエスはペテロに剣をしまうように言われました。本物の男は愛情を表さない？　イエスはヨハネがご自分の胸に頭をもたせかけるのを許されました。本物の男は家事をしない？　イエスは弟子たちのために料理をし、食事を用意し、彼らの足を洗われました。[668]

パウロは、止まることのない粘り強さ、尽きることのない大志、あらゆる危険を受け入れることといった「男性的」な特質の模範だと、私たちはよく考えたがります。しかし、自分の働きを動かし形づくる比喩を求めるとき、彼はしばしば女性的な比喩に飛びつきます。ある教会に、彼はこう言います。「私の子どもたち。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。」[669]また別の教会にはこう言います。「授乳している母親が自分

666. 出エジプト記31章1–10節
667. マタイの福音書21章12–17節、23章27節
668. これらの洞察を与えてくれた友人マーゴ・デイヴィス（Margo Davies）のブログに感謝します。www.bit.ly/3mLLnlK
669. ガラテヤ人への手紙4章19節

の子どもたちを大切に育てるように、8私たちもあなたがたを大切にしました。」[670]

あるいは、エペソ人への手紙5章の結婚についてのパウロの言葉をあと何回か読み、理想の夫であるイエスが花嫁のために何をしておられるかに注目してください。彼は妻を洗い、着せ、食べさせ、養い育て、その衣を洗います。その文化では、これらは家事でした。[671]パウロのキリストと夫、教会と妻のたとえにおいて、男性の読者は皆イエスの花嫁にたとえられていることを忘れないようにしましょう。「男性であること」の性質によってしばしば独立と孤立を求める男性たちは、自分の夫であるキリストの世話を無防備に受けながら、キリストとの親密さを求めることを学ぶべきです。男性の固定観念を覆すとは、まさにこのことです。

性別の固定観念を覆す聖書の女性たち

私たちはまた、「伝統的な」女性らしさを「聖書的な」女性らしさと混同しています。自分の民を守るために人を殺すのは男性だけではありません。ダビデとゴリヤテの物語を載せている子ども向け聖書はたくさん見てきましたが、ヤエルとシセラの物語を語るものは一つもありません。その物語では、女性ヤエルが、逃げる敵の将軍の頭に恐れることなく天幕の杭を打ち込み、神の民にいっそう確かな勝利をもたらします。[672]あるいは、包囲された自分の町を救った女性はどうでしょうか？彼女はある男の首をはねて城壁の外に投げさせるよう手はずを整え、それによって陣を敷いていた敵をなだめたのです。[673]

これらの女性たちは、ジェーン・オースティン（Jane Austen）の小説に登場する古典的な「女性らしい」女性たちと、なんと違うことでしょう。そうした女性たちは、「絶えず自分の気持ちを日記に書きつけ、結婚における最良の見込みを画策し、ほとんどどんな感情的な苦痛にも気を失い、きついコルセットを含む何枚もの衣服を重ね着し、働くことを期待されていない」のです。[674]彼女たちは、エリザベス・エリオット（Elisabeth Elliot）が聖書的な女性らしさを不正確に理想化した

670. テサロニケ人への手紙第一2章7–8節
671. 27節は、彼が妻の婚礼衣装を手に入れ、手入れすることにさえ言及しているのかもしれません。
672. 士師記4章。同様に、外典のユディト――その名は単に「ユダヤ人の女性」という意味です――は、知略を用いて敵の将軍ホロフェルネスの首をはねます。
673. サムエル記第二2章22節
674. この引用を最初にどこで見つけたのかわかりませんが、私の言葉ではありません。

ときに念頭に置いていた女性たちとは、まったく違います。「女性は身を委ね、助け、応答し、夫は養い、守り、主導します。聖書的な女性とは、従う女性です。」[675]

もちろん、古代の家父長制の世界では（そして今日の伝統的な文化でも）、女性は子どもの世話をし、従って男性に指導を任せ、公の領域に生活が取り込まれている男性たちのために、食事と性という慰めを提供することになっていました。しかし、聖書はそのような世界に譲歩してはいても、それを神の最高の理想として保証しているわけではありません。そのことは、これらの古典的な役割に逆らった聖書の女性たちすべてによって、いっそう確かなものになります。私たちはときに、このことを受け入れられません。たとえば、女性についての三つの箇所[676]に、翻訳の偏りが現れています。私たちの聖書は、ルツが「高潔な人格」の女性であったこと、「高潔な人格」の妻は夫の冠であること、そして箴言31章の女性はほかの女性たちが行う「高潔なこと」にまさることを告げています。しかし、ヘブル語のnayilという言葉は、これらの箇所のそれぞれで「高潔な」と訳されています。それが男性について使われているほかの95回の聖書の用例では、「勇敢な」、「戦士」、「力」と訳されているにもかかわらずです。

聖書の女性たちは勇猛でもあるのです！　もしパウロがエペソ人への手紙5章で、女性だけでなく男性にも、キリストの花嫁と自分を重ね合わせるよう（そして教会の良き夫であるイエスのように家事をするよう）呼びかけているのなら、エペソ人への手紙6章で、男性だけでなく女性にも、キリストの軍隊の戦士となり、盾と剣を取って闇を押し返すよう呼びかけていても、驚くには当たりません。

私はキリストにあって強い男性たちを大いに応援します。しかし、女性たちもまたキリストにあって強い者として、私たち男性と並んで立つこと以外の何かを望む理由は、私には見当たりません。私たちの世界で闇に支配されているもののすべてを思えば、私たちは軍隊のもう半分を解き放ち、私たち男性に加わってもらう必要があります。不正と欺きに対して報いる者として、抑圧され心に傷を負った人々を救い出そうとする自由の戦士として、そしてキリストの大義のための松明を掲げる者、擁護者としてです。私はここで、望まれる未来のことだけを語っているのではありません。キリストのための女性の戦士たちは、すでに何度となく、イエスのために大きな影響を与えてきました。救世軍の創設者ウィリアム・ブースは、自分の「最良の男たちは女たちだった」とよく言っていました。同様に、Life and Work

675. Elisabeth Elliot, Let Me Be A Woman, p. 50. 引用元：Barr, Introduction
676. ルツ記3章11節、箴言31章29節、箴言12章4節

on the Mission Fieldという本は、「働きが困難で危険であればあるほど、男性に対する女性の比率は高くなった」と記録しています。[677]

固定観念にとらわれない

聖書が女性らしさや男性らしさの定義を与えていないということは、私たちがこれらの考えにおそらく過度にこだわってきたことを物語っています。確かに、人間は男性と女性であり、私たちは自分の身体に表れた性のアイデンティティに調和して生きるべきです。しかし聖書は、女性らしさや男性らしさの本質についてほとんど何も語っていません。ティクヴァ・フライマー＝ケンスキーによる聖書の登場人物の研究は、次のことを明らかにしています。

〔聖書は〕人間の行動のどんな特性も「女性的」あるいは「男性的」として提示しておらず、『女性的』と『男性的』という両極の間で属性を分けることもしていません。男性の攻撃性――女性の受容性、男性の革新――女性の保守、男性の外に向かう突進――女性の内に抱え込むこと……といった両極の区別や、私たちが性別の区別を考えるときに慣れ親しんでいるほかのどんな両極についても、まったくほのめかしていないのです。[678]

これを書いている今、私はツイッターを開いて、あるバプテスト神学校の教授の投稿を読んでいます。先日、一部の教会では女性の講演者を招くのが一般的な母の日に備えて、彼はこう書きました。「よく聞いてください。もしあなたの教会が、たまにでも女性の説教者を立てるなら、その教会を去る必要があります。」[679]それから彼は、では女性はどんな活動をすることになっているのか、という私たちの問いを先取りしているようです。続くツイートで、洗濯をし、縫い物や編み物をし、子どもの世話をする女性たちを称賛しているからです。それらはすべて、女性が上手に行うならキリストから報いを受ける活動だと彼は言います。[680]彼のフィードを見ていると、別のツイートが目に入ります。「支配と権威は創造の秩序を憎み、聖書的な男性性と女性性を憎み、神を憎む」というものです。[681]彼の確信は誤って

677. Herbert Kane, Life and Work on the Mission Field, p. 143. 引用元：Bessey, Jesus Feminist, 第8章。
678. Frymer-Kensky, In the Wake of the Goddesses: Women, Culture and the Biblical Transformation of Pagan Myth, p. 141.
679. www.bit.ly/2ZNt9ai
680. www.bit.ly/3nQAwpC
681. www.bit.ly/2ZS465M

います。もしサタンの戦略が、軍隊の半分に残りの半分を家庭に閉じ込めさせることだったとしたらどうでしょうか？　サタンが本当に憎んでいるのは、力において一つとなり、霊的な戦いと福音の宣言において肩を並べて立つ男性と女性なのです。

ダンバーズ声明は、「男性と女性の役割の区別は神によって定められたものであり、すべての人の心に響くはずのものである」と述べています。しかし、この声明がどれほど役に立たないか考えてみてください。その著者は別の箇所で、「男性らしい」を「強さと指導」と定義し、「女性らしい」を「男性の強さと指導を肯定すること」と定義しているのですから、もしあなたが男性でありながら女性の強さと指導を肯定できるとしたら、あるいはもしあなたが指導することを望む強い女性だとしたら、これは何を意味するのでしょうか？　それは、神から出たのではない何かがあなたのうちで働いている、ということを意味するのです。

神が男性にも女性にも働いておられることの本当のしるしは、両者がともにキリストに似た者となることを追い求めることです。イエスがどのような方であるかは、秘密でも何でもありません。固定観念を覆すイエスのご性質を最もよく要約しているのは、おそらくヨハネの黙示録5章でしょう。そこでヨハネは、勝利を得た「ユダ族から出た獅子」を見るように告げられますが、顔を上げて見ると、驚いたことに「屠られた姿で立っている子羊」が見えるのです。イエスは恐れを知らない獅子であり、同時に屠られた子羊でもあります。権威の笏を手にしておられますが、十字架に釘付けにされた傷跡もその身に帯びておられます。威厳に満ちていながら、柔和です。王でありながら、しもべです。天にまで高く上げられて堂々と立っておられながら、同時にひざまずいて私たちを胸に抱き寄せてくださいます。力強いのに弱さをさらし、権威がありながら近づきやすく、自己主張をなさりながら譲ることもでき、獅子のように吼えながら涙を流し、決して砕かれることがないのに砕かれた方なのです。

自己主張が強く、ときに攻撃的にもなる男性（と女性）で、生まれつきイエスの獅子のような性質のほうに傾きがちな人々には、イエスのこの招きが向けられています。「わたしから学びなさい。わたしは心が柔和でへりくだっているからです」。[682] 優しいけれども、すぐにひるんでしまう女性（と男性）で、生まれつきイエスの子羊のような性質のほうに傾きがちな人々には、イエスのこの招きが向けられています。「天の御国は激しく攻め進んでおり、激しく攻める者たちがそれを奪い取って

682. マタイの福音書11章29節

います」。[683]はっきりさせておきますが、聖書は、男性らしさや女性らしさをもっと高めるよう努めなさいと命じたことは一度もありません。むしろ私たちは、もっとキリストに似た者となるように召されています。私たちが問うべきなのは、「私は『聖書的な』女性や男性になるという使命を果たしているだろうか？」ではありません。むしろ、「私はキリストに倣っているだろうか？」なのです。

だからこそパウロは、「私は大人の男になったとき、子どもじみたことはやめました」と書いているのであって、「女性的なことはやめました」とは書いていないのです。私たちはよく女性であることを男性であることと対比させますが、もしかすると、両方を子ども時代と対比させるべきなのかもしれません。子どもは指示を待ち、自己中心的で、怖がりで、他人に極端に依存しがちです。それとは対照的に、他者に仕え、互いに支え合い、もっと主体的に行動して責任を担うことを学んだとき、私たちは女性として、また男性として成熟したのだとわかります。

しかし、性別に特有の命令は一つでもあるのでしょうか？　私は、女性に対するものが一つ、男性に対するものが一つあると考えます。

美しさと強さを正しく用いる

まず、女性の美しさに関わる、女性への指示から始めましょう。「私は、女たちが慎み深い身なりをし、品位と節度をもって身を飾ることを願っています。手の込んだ髪型や金や真珠や高価な衣服によってではなく、神を礼拝すると公言する女たちにふさわしく、良い行いによって飾るのです」。[684]

注目してほしいのは、パウロが、美しくありたいという女性の願いを批判するのではなく、肯定していることです。実際、別の箇所でパウロは、女性の美しさが創造の頂点であることをほのめかしています。[685]しかしパウロが心配しているのは、多くの女性があまりにも簡単に、うわべだけの美しさで満足してしまうことです。箴言31章の女性がほめたたえられているのは、うつろいやすい表面的な美しさのためではなく、神への輝くような愛のためです。エペソの教会には、豪華な装身具で自分に注目を集めようとする裕福な女性たちがいたようです。パウロは、そのような女性たちはむしろ、外見によってではなく、愛から出た行いによって彼女たちを判断なさる方に心を向けるべきだと言います。またパウロは、自分の美しさを搾取的に利用する手段として、扇情的な服装をしているクリスチャン女性たちに挑戦しているのかもしれません。とはいえ私は、女性の服装によって男性の女性に対す

683. マタイの福音書11章12節
684. テモテへの手紙第一2章9–10節
685. コリント人への手紙第一11章15節

る扱い方が決まるべきだとか、女性が男性の性的な純潔に責任を感じるべきだとか言うつもりは決してありません。どの女性にも好きなように服を着る自由があります。しかし神を敬う女性たちは、何よりもまず愛を身にまとうべきです。そしてその愛は、まず自分自身に向けられるべきなのです。私たちの文化は自己表現を称賛しているとされていますが、それにもかかわらず、女性や少女たちが理想の体型という暴君にこれほど苦しめられたことはかつてありませんでした。ソーシャルメディアの影響が少なからぬ原因となって、若い世代のうつ、不安障害、摂食障害の割合は急上昇しています。[686]完璧さと、ますます多くの「いいね」を求める終わりのない探求の中で、美しさを求める私たちの自然な願いはゆがめられてしまいました。私たちの外見は、私たち自身や他者に対して、これほどの力をふるうはずのものではなかったのです。

では、このことについて男性の視点から少し述べさせてください。山上の説教でイエスは、情欲をもって女性を見ないようにと男性たちに命じておられます。女性たちに、情欲の対象にならないよう控えなさいと命じておられるのではありません。男性として私は、つつましい服装の女性でさえ情欲をもって見てしまいうることを知っています。そしてクリスチャンの男性として私は、情欲の解決策は女性を見ないようにすることではないと悟るようになりました。何しろイエスは、いつも女性たちを見ておられたのです。むしろ、純潔を保つ私の戦いにおける最善の戦略は、神が見ておられるように女性たちを本当に見ること、すなわち性的な満足の対象としてではなく、私と同じく神のかたちを担う者として見ることなのです。

次に、男性の身体的な力に関わると思われる、男性への命令について考えてみましょう。ペテロは、女性たちのいるところで男性が自分の身体的な力を正しく用いるよう、こう呼びかけています。「夫たち……妻とともに暮らすときには思いやりをもち、妻をより弱いパートナーとして、またいのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊びなさい。そうすれば、あなたがたの祈りが妨げられることはありません」。[687]女性たちはここでペテロのことばに反発を覚えるかもしれませんが、これは侮辱を意図したものではありません。ペテロは単に、普遍的な事実を述べているだけです。すなわち、成人男性はほとんどの場合、女性よりも身体的に強いということです。男性はとりわけ、自分の力を守るために用い、決して傷つけるために用いてはなりません。

686. www.bit.ly/3bIo4mc
687. ペテロの手紙第一3章7節

恐ろしいことに、家庭内暴力が容認できない犯罪行為とみなされるようになったのは、ようやく前世紀の半ばになってからでした。先に第2章で強調したように、女性が対等な存在と見られ始め、その結果として女性の従属が問い直されるようになったのは、1960年代になってからのことにすぎません。実際、私はNew York Daily Mirror紙に載った1960年代の新聞記事を見つけました。その見出しは「女に必要なら、尻をたたくべきか？」というものです。[688]投書した四人の男性の意見に基づけば、答えは満場一致で「そうだ！」です。「誰がボスなのかを教えてやれるのです」と、テディ・ガレル（Teddy Gallel）という人は書いています。「多くの女は、ここが男の世界だということを忘れがちです。そして家族のボスの座から降りた多くの男たちは、そうしなければよかったと思っているのです」。私が住んでいる国では、なんと女性の50%が生涯のうちにレイプや性的虐待の被害に遭います。その悲劇的な一つ一つの話は、男性が自分の力を、女性を守るためではなく、女性を食い物にするために使った例です。男性の身体的な力の、なんというひどい誤用でしょう！

旧約聖書の戦争や戦いで、むき出しの身体的な力が必要とされたとき、前線に送られたのは男性たちでした。[689]命が危険にさらされたとき、マリアと幼子イエスは、ヨセフが身を挺して自分たちの盾となってくれると信頼することができました。[690]実際パウロは、すべての夫が妻のために自分のいのちを捨てる覚悟をしているよう期待しています。[691]繰り返しますが、私は一般化をしたいわけではありません。沈みかけた船の上で年配の女性が、最後の救命胴衣を若い男性に譲るほうがよいと判断する場合もあるでしょう。身体的に強い妻が、障がいのある夫を身を挺して危険から守る場合もあるでしょう。また、ラハブのような女性が、罪のない男性の逃亡者たちを自分の住まいにかくまうことによって、神への信仰を表す場合もあるでしょう。[692]

非常に重要なことですが、ペテロは、多くの補完主義の学者たちがしているように、女性の身体的な弱さを感情的・霊的な弱さにまで押し広げてはいません。教会の歴史を通して、女性は誤って、男性よりも感情的、知的、道徳的、霊的に弱いとみなされてきました。しかし、ペテロが言っているのはそういうことではありませんし、ましてやそれを、女性を奉仕の役割から締め出すために用いるべきではあり

688. www.bit.ly/3EI1Tcr
689. 申命記20章7–8節、ヨシュア記1章14節
690. マタイの福音書2章13–14節
691. エペソ人への手紙5章25節以下
692. ヨシュア2章

ません。最近私は、数千の教会からなるある補完主義の運動の指導的な神学者が提示した議論を読みました。彼はまず、男性は身体的な守り手となるようにできていると正しく指摘し、次に、牧師の主要な職務の一つは群れを霊的に守ることだと正しく述べています。ところがそこから彼は、だから男性のほうが教会を導く務めにふさわしいのだと誤って結論づけているのです。[693]実際には、人生の身体的でない側面について言えば、女性も男性と同じように、男性を含む他者を守ることができます。

階層なき相補性を取り戻す

補完主義者は、男性と女性が異なって造られており、互いを必要としているという事実を肯定する点で、正しい出発点に立っています。ところが彼らはそこから聖書本文よりも先へ進み、「神が定めた」違いは結局のところ権威と服従に帰着すると主張します。彼らにとって相補性は階層的なものです。そのため、かえって相補性が失われる結果になります。なぜなら、それは教会の中に、教会の統治や講壇からの説教のような男性専用の領域を作り出し、そこでは男性の声しか聞かれなくなるからです。そうすることで彼らは、神のかたちをもっと全体的に映し出すはずの男女の相補性を、むしろ損なってしまっているのです。

この章で私は、相補性を補完主義の手から奪い返し、それを階層とではなく相互性と結び合わせようと試みてきました。神のご計画は、一般的に言って男性が女性を導くことではなく、一般的に言って男性が女性と並んで導くことです。聖書には、知的能力や指導力を特定の性別と結びつけるものは何もありません。せいぜい言えるのは、平均すると女性はある仕方で考えたり導いたりし、男性は別の仕方でそうする、ということくらいです。

男性と女性の脳の構造の違いや、この章の前のほうで示した表の10項目――女性は平均してより思いやり深く創造的で、男性は平均してより自己主張が強く分析的である――を考えるなら、私たちが互いの強みを持ち寄れば、私たちの結婚も、ミニストリーも、職場も、はるかに豊かになるのではないでしょうか？　私たちが本来あるべき姿になるためには、私たち全員が必要なのです。もし女性と男性が平均

693. 同様に、オーウェン・ストラッカンは“The Grand Design”の中で、霊的な暗闇に立ち向かうために必要な勇気と攻撃性は本来男性的な属性であり、だから男性が導くべきだと論じています。しかし、彼がこの主張のために用いている聖句――コリント人への手紙第一16章13–14節、イザヤ書19章16節、列王記第一2章2節、エゼキエル書22章30節――は、彼の主張を支持していません。確かに、身体的な戦いには身体的な力が必要です。しかし霊的な戦いには身体的な力は必要ありません。ですから女性もまた、神の働きの最前線で勇気をもって仕えることができるのです。

して異なるようにできているのなら、男女からなる指導チームは、平均して、彼らが導くどんな組織や共同体にも、はるかにバランスのとれたリーダーシップをもたらすでしょう。

この点で社会が教会より先を行っているのは本当に悲しいことですが、女性を最高レベルの指導層に加えることの利点は、多くの国ではなかなか理解が進まないとはいえ、目覚ましい成果を生んでいます。ある包括的な研究では[694]、企業の上級経営チームが男性だけで構成されている場合、良い決定を下すのは58%の確率であることが示されています。ところが、そのチームに女性が加わると、良い決定を下す可能性は73%に跳ね上がるのです！[695]

片脚をギプスで固めたまま競走しようとすれば、私たちはよろめき、跳びはねるしかありません。両脚が使えれば、はるかに大きな歩幅で、ずっと遠くまで行くことができます。男性と女性がそれぞれにささげる、独自の補い合う貢献についても同じです。神が男性と女性という、神のかたちを担う者を創造されたことを述べたあと、創世記1章の語り手は、神が「ご自分が造ったすべてのものを見られた。それは非常に良かった」と言います。少し前まで西洋では、片脚だけを使うのが理にかなっているように思われたのかもしれません（何しろ、もう一方の脚は劣ったもの、つまり非合理的で、不安定で、恐れに陥りやすいものとみなされていたのですから）。しかし今や私たちの文化はそうではないことを発見し、聖書の本来の意味と意図も回復されたのですから、私たちは両脚で走ることができますし、またそうすべきです。

ともに協力し合うことが増えるにつれて、楽しみにできることはたくさんあります。けれども、私たちが互いに異なっているという事実は、いつも順風満帆とはいかないことを意味します。多様性は、より大きな成長と生産性をもたらしますが、同時に、より大きな複雑さや誤解ももたらします。私たちの古い偏見は特に頑固です。結婚がこれほど難しいことがあるのは、少なくとも部分的にはこのためです。それでも、難しいことは間違っていることではありません。それはしばしば、私たちがキリストに似た者として成長するためにまさに必要な機会なのです。

結局のところ、聖書が定める人生の目標は、より男性らしくなることでも、より女性らしくなることでもなく、獅子であり子羊でもあられるイエスに、もっと似た者となることなのです。

694. www.bit.ly/3BKuImw
695. チームが性別、年齢、育った場所、高等教育を受けた場所の多様な人々で構成されていた場合、その数字は87%にまで上がります。



15
エバを家庭から解き放つ

「女性の伝統的な仕事を取り上げておきながら、彼女が新しい仕事を探すからといって文句を言うのは、まったく愚かなことです。すべての女性は人間です――このことはどれほど繰り返しても言いすぎることはありません――そして人間は、世の中の厄介者にならないためには、男であれ女であれ、仕事を持たなければならないのです。」ドロシー・セイヤーズ[696]

最近、ある著名な聖書教師が、南部バプテストで最も人気のある女性説教者にひとこと言うとしたら何と言うかと尋ねられたとき、彼は「家に帰れ（Go home）」と答えました。これは彼がベス・ムーアを個人的におとしめたというだけではなく、彼の補完主義の神学に忠実な助言でもありました。

1998年、南部バプテスト連盟は、何年にもわたる議論の末、女性の家庭化を、神が定めた女性の運命として正式に承認しました。「妻は……夫を敬い、家庭を切り盛りし次の世代を育てることにおいて夫の助け手として仕えるという、神から与えられた責任を持っています」。[697]補完主義者によれば、アダムは社会でも、教会でも、そして家庭でも、指導者として高く舞い上がることができます。ところがエバは、家庭の中でこそ十分に羽ばたくべきだとされます。しかもその家庭の中でさえ、彼女は家事をこなし、彼の子どもたちの世話をすることで、「家庭のかしら」であるアダムを補佐するにすぎないのです。すでに見てきたように、この種の男性優越主義は少しも新しいものではありません。5世紀に、ある教父は仲間の夫たちに、この考えを次のように説明しました。

妻にはただ一つの務めしかありません。私たちが集めたものを保ち、私たちの収入を守り、私たちの家庭の世話をすることです。……私たちの生活は、公的な領域と

696. Dorothy Sayers, Are Women Human? p. 32.
697. Barry Hankins, Uneasy in Babylon, p. 214–215. Barr, 第1章に引用されています。

私的な領域という二つの活動領域から成っています。神はこの二つを分けられたとき、家庭の管理を女性に割り当てられました。……彼女は公の議会で意見を述べることはできませんが、家庭の中では意見を述べることができるのです。[698]

この種の教理は、社会において、教会において、そして――程度はより小さいとはいえ――家庭において、女性がささげうるものの全体を縮めてしまいます。もちろん母親たち（と父親たち）は、安全な家庭の中で子どもたちを育み、心を尽くして子どもたちを愛するべきです。しかし独身の女性たちはどうでしょうか？　子どものいない女性たちは？　母親の何十年にも及ぶ人生においてさえ、子育てに追われる濃密な年月は（もし彼女がそれに専念することを選ぶとしても）永遠に続くわけではありません。家庭の役割を過度に美化することによって、補完主義は、女性が人生のほかのあらゆる段階で担いうる、ほかのあらゆる役割の重みを損なってしまうのです。

サラ・ベッシーは、自分がどのようにイエスに仕えることができるかについて広がりのある神学を教えられた教会で育ち、そのため「贖いをもたらす平和づくりと正義の追求の人生」を切望していたと語っています。ところが、女性のミニストリーが主として家にいる母親業に焦点を当てていたアメリカ南部に移り住んだとき、彼女は「イエスに従うことについての理解が日に日に小さくなっていく」のを経験しました。[699]実際、この女性の家庭化の教理は、神が一人の女性の中に見ておられるすべてを見ることができないために、多くの女性に、時がたつにつれて大きく広がりのある人生ではなく、小さく、制限された、可能性の実現されない人生を送らせてしまうのです。

母親たちをたたえて

私が言っていないことまで読み取らないでください。女性の主要な貢献は母であることに見いだされると説く教理によって女性がおとしめられてきたと指摘するからといって、私は決して母親の役割をおとしめたいわけではありません。母親は家族と健全な社会の土台です。私たちはこの役割を尊び、最も高く評価すべきです。ジュリーが私たちの5人の子どもたちのために自分の人生を注ぎ出している姿に、私はいつもへりくだらされ、感謝しています。人生におけるさまざまな役割の中で、

698. St John Chrysostom, On Marriage and Family Life
699. Sarah Bessey, Jesus Feminist, 第3章。

これこそ彼女が最も大切にしている役割であり、そのおかげで私たちの子どもたちも世界も豊かになっています。

それでも、母親たちに主として家庭と子どもたちに専念するよう呼びかけるダンバーズ声明は、聖書的な産物というよりも文化的な産物です。教会はあまりにも頻繁に、またあまりにも安易に、伝統的なもの――稼ぎ手の父親と家事を担う母親――を聖書的なものと混同してきました。伝統的な家族は、最近の文化的な発明です。父親たちが大挙して家を出て働きに行くようになったのは、産業革命以降のことにすぎません。それが特に広まったのは第二次世界大戦後の好景気の時代で、父親は組立ラインで働いて、家族の生活費のすべてをまかなうのに十分な収入を得ることができました。最も裕福な地域を除けば、そのような家族は世界経済の風景から姿を消しています。実際、私自身の国では、子どもの60%がシングルマザーによって育てられ、さらに高い割合の子どもたちが、家の外で仕事を見つけなければならない母親によって育てられています。そのような国で、敬虔な母親は理想的には家庭の役割に全面的に専念すべきだと過度に強調し期待することは、時代遅れであり、残酷でさえあります。苦労している母親たちに、これ以上の罪悪感は本当に必要ありません。そのうえ、箴言31章の母親でさえ「畑をよく調べて、それを手に入れ」、そのお金で「家族に食事を整える」のです。[700]

家にとどまるよう命じられているのか？

ケステンバーガーは、補完主義による女性の家庭化の、いわゆる「聖書的根拠」を次のように示しています。

テトスへのパウロの手紙で、女性たちは「家で働く者」となり、「夫を愛し、子どもを愛する」ように求められています。女性の人生の喜びと働きは、彼女が主として家族と家庭に自分の中心を置くときに、最もよく生きられるでしょう。同時に、補完主義は、女性が家の外で働くことを決して認めないというわけではありません。〔それでも〕夫の病気などの酌量すべき事情がない限り、家族と家庭を中心とするという女性のための神のご計画から後退する必要はありません。[701]

言い換えれば、女性は家の外で働いてもよいが、できることならそうすべきではない、ということです。テトスへの手紙1章は本当にそう教えているのでしょうか？

700. 箴言31章15–16節
701. www.bit.ly/3SHnecQ

ケステンバーガーは、この手紙が書き送られた教会のギリシア・ローマ的な背景を考慮していません。本文をその文脈（context）から切り離すことで、彼は私たちに口実（pretext）を差し出しているのです。

プラトンは、男性は「国家を治め」（それは公的な領域のことです）、女性は「家を整え、屋内のものを守り、夫に聞き従う」べきだと言いました。[702]フィロン（Philo）はさらに制限的でした。

女性はおせっかいであってはならず、家庭の事柄の外にある物事に口出しすべきではありません。むしろ人目につかない生活を求めるべきです。神殿に行かなければならないとき以外は、浮浪者のように通りでほかの男たちの目の前に姿をさらすべきではありません。そして神殿に行くときでさえ、市場が混み合っているときではなく、ほとんどの人が家に帰ったあとに行くよう気を配るべきです。[703]

パウロが教会の女性たちに「家で働く者」となるよう勧めたのは、まさにこのような世界に向けてでした。[704]ちなみに、これは聖書の中で唯一の、この種の指示です。パウロは、「まともな」女性は家にいるものと期待されていたクレタの人々の間で、教会の信用を保つことに心を配っていました。そうしなければ、とパウロはすぐに説明しますが、この生まれたばかりのキリスト者の群れについてどう判断しようかと見ている傍観者たちの目に、「神のことばが悪く言われる」ことになってしまうのです。[705]別の箇所でパウロは、家にとどまることによって、クリスチャンの女性たちが「怠けて、家々を渡り歩き」、「おせっかいで、話してはいけないことを話している」と見られることを防げると言っています。[706]この「家で忙しく働く」という指示は、普遍的な理想や命令ではありません。それは福音のための、その状況に特有の知恵なのです。[707]

補完主義者たちが、（男性ではなく）女性の生活を家庭と子育て中心にするために持ち出すもう一つの証拠聖句は、テモテへの手紙第一5章です。ここでもまた、状

702. Plato, Meno, section 71e–f
703. Philo. 出典：www.bit.ly/3kquueP
704. テトスへの手紙2章5節。NIV訳の“busy at home”（家で忙しく）という訳は、女性たちが単なる家事や子育て以上のことをすることができたという意味を取り逃がしています。ギリシア・ローマ世界の家は、経済的に生産的な仕事の大部分が行われる場所でした。
705. テトスへの手紙2章5節
706. テモテへの手紙第一5章13節
707. 確かに、上流階級のごく少数の女性たちは、パトロン、事業主、公職者として公的な役割に関わっていました。しかしこの種のふるまいは、エリート層の女性にだけ許されていました。大多数の女性は、家の外で男性のようにふるまえば非難を受けたでしょう。たとえば、最初期の教会ではこうした裕福な女性はきわめてまれだったので、そのような女性が回心したときには、ルカはそれを記録する価値があると考えました（使徒13:50、17:12、34）。

況的な文脈が見落とされています。もちろん、その章で語りかけられている無一文のやもめたち、つまり教会の慈善に頼っている人々は、自分の時間と力を子どもや孫の世話に用いるべきです。[708]また、再婚し、それゆえ自分のpaterfamilias（家長）によって養われる若いやもめたちは、今度は奴隷や子どもたちを含む自分の家庭を切り盛りすべきです。[709]さらに補完主義者たちは、女性の中には収入を得ることのできる人もいるという可能性を無視しています。パウロは、働くことのできる「だれでも」（それには女性も含まれます）、「自分の親族を養う」ことができるように、働くようにと言っているのです。[710]

まとめると、テトスへの手紙1章とテモテへの手紙第一5章は、これほど強く主張された画一的な教理の聖書的根拠としては、明らかに不十分です。どこにいるすべての女性も、主として家庭を中心に生きるよう義務づけられているわけではありません。

働く女性たち

世界の母親たちの大半は働かざるをえないだけでなく、多くは働くことを望んでいます。産業化以前の文化では、今日のアフリカの農村部の多くと同じように、女性たちは働き手となる子どもを多く産まなければならなかったため、できる仕事が限られていました。人生の大部分にわたって、これらの女性たちはたいてい妊娠しているか乳飲み子に授乳しているかで、重労働をすることも、家から遠くへ出かけることもできませんでした。家の近くでできる仕事には、衣服を作ること、また幼い者や病人や老人に食事を与え世話をすることが含まれていました。男性たちは、より力が強く、家を離れる自由もあったので、社会で公的な役割を果たすことを含め、ほかのあらゆる種類の仕事をすることができたのです。[711]

ドロシー・セイヤーズは、1971年の有名なエッセイAre Women Human? の中で、産業化以前の女性たちができた、収入を得るための仕事の種類に触れています。たとえば糸紡ぎ、染色、機織り、料理の仕出し、醸造、保存食作り、漬物作り、そして地所の管理などです。そこへ産業革命がやって来て……

708. テモテへの手紙第一5章3–4節
709. テモテへの手紙第一5章14節
710. テモテへの手紙第一5章8節
711. Carrie Miles, The Redemption of Love: Rescuing Marriage and Sexuality from the Economics of a Fallen World, p. 43-46. Witt, Icons of Christ, 第7章に引用されています。

女性の居場所は家庭だ、と言うのは大いに結構です。しかし現代文明は、こうした楽しく利益をもたらす活動をすべて家庭から取り上げてしまいました。かつては家庭で女性たちがそれらを担っていたのに、それらは大産業に引き渡され、大工場の頂点に立つ男性たちによって指揮され、組織されるようになったのです。女性の伝統的な仕事を取り上げておきながら、彼女が新しい仕事を探すからといって文句を言うのは、まったく愚かなことです。すべての女性は人間です――このことはどれほど繰り返しても言いすぎることはありません――そして人間は仕事を持たなければならないのです。……仕事とは、第一に、生きるために行うものではなく、それを行うためにこそ生きるものなのです。……物を作り、働くすべての人は、自分の職業や商売の外においてではなく、その中で神に仕えるように召されているのです。[712]

この発言の中でセイヤーズは、「家にとどまる」ということは、古代のクレタやエペソの敬虔な女性が生計を立てていなかったことを意味する、という補完主義の誤った解釈を暴いています。1世紀においては、「家」こそ女性が収入を得るために働いた場所だったのです。そこで行われたのが「糸紡ぎ、染色、機織り、料理の仕出し、醸造、保存食作り、漬物作り、そして地所の管理」でした。それでもなお、聖書の時代にさえ、家を離れた仕事に携わる女性たちもいました。デボラは士師であり軍事戦略家でした。エステルは王妃であり立法者でした。

新約聖書では、紫の染料の製造と販売で知られたトルコの町ティアティラ出身の実業家リディアに出会います。彼女はそこで染料を仕入れ、ギリシアにあるもう一つの住まいへと運びました。その住まいはおそらく、事業の拠点も兼ねていたのでしょう。パウロは夢の中で、「一人のマケドニア人の男」が自分を呼んでいるのを聞きました。ところが驚いたことに、この「男」は実はリディアという女性、しかも独身の女性だったのです。それもただの女性ではありません。彼女はヨーロッパにおけるパウロの最初の改宗者でした。福音に心を開いた彼女は、次に自分の家と事業の場所を開き、そこは今やその町の新しい教会の集会場所として、三つ目の用途も果たすようになりました。[713]すべての女性は、とりわけ独身の女性は、リディアの積極的な姿勢、職業上の成功、そしてミニストリーの実り豊かさから励ましを受けることができます（そしてまた、結婚こそが女性にとって本当に高貴な目的なのだという補完主義の信念によって押さえつけられることを、拒むことができます）。

712. Dorothy Sayers, Are Women Human? p. 32、およびDorothy Sayers, Why Work?（出典：www. bit.ly/31wL85K）
713. 使徒の働き16章11–16、40節

また使徒の働きでは、タビタ、つまりドルカスに出会います。彼女はヤッファの町で、やもめたちのために衣服を作ることができるよう、資金を集めることを得意としていました。ペテロが彼女を死からよみがえらせたとき、その奇跡を祝いに最初にやって来たのは、彼女が衣を着せてあげたこのやもめたちでした。[714]彼女の模範は、良きサマリア人に次いで、最も弱い立場の人々の必要に仕える教会を励まし、また慈善団体や救援活動や非営利団体の設立をも促してきました。

これらの聖書の女性たちはみな、自分の家の外で、その人生によって変化をもたらしました。それなのに、アメリカの福音派のクリスチャンは、統計上、女性が家の外で働くことについて「最もためらいがちな」グループであり[715]、また女性のCEOや大統領に対して最も抵抗感の強いグループでもあります。この広範な不安は、多くの補完主義者の間に浸透している考え、すなわち男性の権威の理由は、エバより先にアダムが最初に形造られたことにあるという考えのせいであることは間違いありません。もし男女の階層が本当に創造の原理であるなら、それを教会にだけ適用して社会には適用しないということはできません。だからこそ福音派の間には、人生のどの領域であれ女性に導かれることへのためらいが広く見られるのです。

けれども、すばらしいことに、パウロはこの通達を見落としていたようです！　彼はこの「創造の秩序」を明言した人物だとされているにもかかわらず、奴隷たち――その半数は男性でした――に主人に従うよう告げるとき[716]、そのことをまったく意識していないように見えます。その主人の多くは、女性のmaterfamilias（女家長）だったのです。やもめは単独の権威を持ち、妻たちは自分の奴隷たちに対して委任された権威を持っていたでしょう。同様にパウロは、「女性の男性に対する影響力が個人的で指示的なものであるとき、それは……神の創造の秩序に反することになる」というパイパーの懸念について、何も知らないようです。パウロが、materfamiliasが男性の奴隷に対して、男性の主人と同じように権威をふるうことを期待していたということは、かつてバラクがデボラにしたように、男性が女性の上司に従うことについて、パウロが何の問題も感じなかったであろうことの証拠です。

714. 使徒の働き9章32–43節
715. 2017年のバーナ（Barna）の調査によれば、福音派は女性が家の外で働くことを支持することについて「最もためらいがちな」グループです。「将来、労働人口において女性が男性より多くなる可能性を受け入れられる」と答えたのは52%にすぎませんでした（アメリカの一般の人々より20%低い数字です）。出典：www.bit.ly/3CNBtoX
716. エペソ人への手紙6章9節、コロサイ人への手紙4章1節

これらの、目立たなくとも否定しようのない障害に加えて、働く女性たちは、男女間の賃金格差（Gender Wage Gap）という屈辱と不正義にも直面しなければなりませんでした。産業革命は多くの女性を市場に送り込み、彼女たちは家の外で収入を得られるようになりましたが、同時に、男性の同僚よりも低い賃金を支払うことによって、まさにその女性たちを低く評価する風潮を強めることにもなりました。1833年、イギリスの工場監督官ジェームズ・ミッチェル（James Mitchell）は、その正当化をこう述べました。「彼女の賃金が低いので、彼女は自分の子どもたちの世話を放棄したいという誘惑に駆られません。こうして自然は、自らの意図がくじかれないように取り計らっているのです」。[717]

補完主義が多くの教会でこの不正義を永続させている一つの道は、主要なミニストリー・スタッフの雇用においてです。男性はその働きの「統治的」な性質のゆえに経済的に報われる傾向にありますが、女性は、同じくらい重い指導責任を負っていても、神学的な確信によって、その働きは権威的というよりも補助的なものだと考えられるため、しばしば低い給与しか受け取りません。

イエスもパウロも家庭の役割を称賛してはいない

興味深いことに、イエスとパウロこそ、今日の補完主義が女性の家庭化に焦点を当てていることに最も強く異議を唱える、聖書の中の二人の人物なのです。たとえば、イエスが女性の母としてのアイデンティティを覆しておられることに注目してください。当時の文化では、子ども、できれば息子を産むことが女性の第一の目的でした。不妊の胎は神の不興のしるしとみなされていました。しかしイエスはそれに同意されませんでした。あるとき、イエスが教えておられると、「群衆の中から一人の女が声を張り上げて、『あなたを産み、乳を飲ませた母は幸いです』と言った」と記されています。イエスはマリアに代わってそのほめことばを受け取る代わりに、「むしろ幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです」と答えられました。[718]イエスのこの一見無礼な態度はなぜでしょうか？　それは、女性の第一の価値の所在を、家庭と子育ての役割から、神との関係へと移したいと思われたからです。イエスによれば、人の人格の最も中心にあるのは、配偶者との関係でも子どもとの関係でもありません。イエスの弟子であることこそがそうなのです。最も大切なのは子孫を生み出すことではなく、神のことばによる新しい創造です。息子や娘を持つことではなく、神の息子や娘であること――それこそが人生の真の賞なのです。

717. Beth Allison Barr, The Making of Biblical Womanhood, p. 164
718. ルカの福音書11章27–28節

私自身、家庭を持つ男として、家族のためにどのように自分の人生を注ぎ出すかについて得られる励ましはどれもありがたく思います。しかし、イエスが、私たちの人生のあまりにも多くを血縁の家族に注ぎ込むという偶像に、繰り返し挑戦されたことは認めなければなりません。イエスご自身は愛された息子でありながら、こうも言われます。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」。[719]

同じ線に沿って、パウロは、結婚していることが、神に仕えるというさらに高い優先事項の妨げになりうると言っています。

結婚していない女や未婚の女は、主のことに心を配ります。からだにおいても霊においても主に献身しようとするのです。しかし結婚した女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、この世のことに心を配ります。私がこう言うのは、あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているのではありません。むしろあなたがたが、ふさわしい仕方で生き、ひたすら主に献身できるようにするためです。[720]

パウロの発言は絶対的なものではありません。彼は自分で「今の危機」と呼ぶものに言及しているからです。[721]しかし彼の心情を考えれば、イエスと同様に、パウロがダンバーズ声明を承認するとは、私にはきわめて考えにくく思えます。ダンバーズ声明は、その正体どおりに見られるべきです。つまり、聖書の教えを、最近発明された伝統的家族という偶像と結婚させようとする、混合主義的な試みなのです。

パウロの膨大な著作を丹念に調べても、母親をほめているのは一箇所しか見つかりません。ローマ人への手紙16章で、パウロはルフォスの母に、「〔私〕にとっても母である」人としてあいさつを送っています。私もまた、折にふれて私をその翼の下にかくまってくれた教会の母たちのことで、神をほめたたえます！　しかしここでさえ、パウロは彼女を生物学的な母としてではなく、母親のような仕方で神の民に仕える人としてほめているのです。

御霊が書いたことのない台本

どの文化も段階的に進化し発展していく中で、キリスト教に新しい課題を突きつけることはあるでしょう。しかし、職場で働く女性が増え、子育てにより直接かかわ

719. マタイの福音書10章37–38節
720. コリント人への手紙第一7章34–35節
721. コリント人への手紙第一7章26節

る父親が増えているという現代西洋社会の最近の傾向は、何か悪いものとして退けられるべきではないと私は考えます。

古代ギリシア・ローマの家庭も、1950年代の伝統的な家族も、御霊がすべての女性とすべての男性のために書いた台本ではありません。御霊は、すべての女性を主婦や子育て役へと導かれないのと同じように、すべての男性を稼ぎ手や意思決定者へと導かれるわけでもありません。男性も女性も、これらの役割のいくつか、あるいはすべてを担うことがあるでしょう。しかし、補完主義者がするように、伝統的な家族を霊的な召しと結婚させるのはやめましょう。それは女性がささげうるもの全体を押さえつけ、教会と社会において女性の貢献と声のために場所を空けようとする男性の意志と能力をも損なうだけです。

多くの女性が伝統的な役割の中で花開き、そこに自分の召しを見いだすかもしれませんが、すべての女性がそうなる、あるいはそうすべきだと決めつけるのは、誤っているだけでなく、聖書に反してもいます。ある女性たちにとって、こうした伝統的な役割は、もし神がその台本を書かれたのだと思い込むなら、「奴隷のくびき」となってしまいます。その台本とは、「女性の最高の召しは、夫と子どもたちの人生を豊かにすること〔である〕……女性は無私と従順を実践すべきであり、〔そして〕家族のために個人的な願いや夢を押し殺すべきだ」と教えるものです。[722]

妻を、子育てとミニストリーにおいても、仕事と収入においても、単なる私の支え手ではなく私のパートナーとして見ることのわくわくする点の一つは、私たちがともに歩む旅路に多くの変化の余地が生まれることです。親になってからのこれまでの年月の大半は、私が毎月の収入の大部分を稼いでいました。今では妻のほうが多く稼ぐ状況になり、そのおかげで私は本を書いたり、別の学位のために勉強したりできるようになりましたが、同時に、家と子どもに関する仕事をより多く引き受けるという特権にもあずかっています。それは本当に特権でした（もっとも、子どもたちは完全には同意しないかもしれません――母親の料理のほうが私の料理よりいつも人気があるのです）。それでも私は、何十年も固定された役割に縛られるよりも、このもっと動的なパートナーシップのほうを間違いなく選びます。

同時に、より伝統的なやり方を選ぶ夫婦に何の問題もありません。より保守的な台本を単に選ぶことで、ある種の幸せを見いだす人はたくさんいます。しかし私たちは、その取り決めを、すべての夫婦に対する神の普遍的なみこころとして理想化してはなりません。聖書全体の神学は、そのような結論を許しません。どのような一

722. Beth Allison Barr, The Making of Biblical Womanhood, 第7章。

般化が成り立つとしても、すべての母親はパンを焼くことに、すべての父親はパン代を稼ぐことに向いているという考えを退けるのに十分なだけの例外があります。しかし聖書が確かに教えているのは、夫婦が互いの幸福のために、そして他者への最大限の奉仕のために、チームとして協力することの大切さなのです。

私の知っている夫婦を思い浮かべてみると、家にいたいと切望する妻もいれば、そう考えただけでぞっとする妻もいます。子どもたちともっと一緒に過ごしたいと願う人もいれば、家の外でもっと時間を過ごせるよう祈る人もいます。喜んでキャリアの志をあきらめる人もいれば、自分の仕事の分野で前進し続けようと固く決心している人もいます。理想のモデルというものはありません。とはいえ、どのモデルを選ぶにしても、パウロは、ひとり親の場合を除いて、妻と夫の両方が家庭生活と子育てに関わるべきだとほのめかしているようです。[723]次の世代を育てることはあまりにも重要な務めなので、私たちの強みと犠牲を合わせてささげるに値するのです。

723. テモテへの手紙第一5章14節は子どもを育て家庭を切り盛りする妻たちについて述べており、一方テモテへの手紙第一3章4、12節は自分の家庭を治め子どもを育てる夫たちについて述べています。



16
教会にとっての実際的な意味

「神学的な問いは、重要ではあっても、実は女性がミニストリーにおいて指導の賜物やその他の賜物を十分に用いているかどうかを示す主要な指標ではありません。結局のところ問題になるのは、私たちがどんな文化を作り出しているかです。私たちは性別よりも賜物を見る文化でしょうか？　すべての人を機会へと招く用意があるでしょうか？　それとも、そのことについて考えたことすらないのでしょうか？」カディ・コール[724]

私自身の教会で、性別による階層という教理上の誤りに私が目覚めたきっかけの一つは、自分の中で大きくなっていく認知的不協和でした。私の知る非常に多くの女性たちに、相当な、ときには男性以上にすぐれた霊的賜物がはっきり見られたにもかかわらず、按手を受けて最高指導職に就くのは男性だけで、したがって本当の霊的権威をもって貢献することが許されるのも男性だけだったのです。

この全面的な禁止のいわゆる聖書的根拠をより深く探っていくうちに、私は、女性を締め出すことを擁護するために使われている議論の断層線が見えるようになりました。すべての聖句を注意深くふるいにかけていく中で、私はまた、私の属していた補完主義のサークルが都合よく無視してきたように思われる、多くの別の聖句や議論も発見しました。男女の権威と服従を聖書解釈の統合的な原理として読む代わりに、私ははるかに良いものを発見しました。それは、教会のミニストリーにおいて、結婚において、家庭において、そして社会においても、男女の相互性を読み取る、調和をもたらし、解放をもたらす解釈学です。

私の経験では、多くの教会が、女性を排除する自分たちの神学の中に同じ断層線を見始めています。それでもなお、実際的な影響を考えて、立場を変えることに身動

724. www.bit.ly/2ZRzaCO

きがとれなくなっているのです。純粋な聖書釈義よりも実用主義のほうが強い力となってきたことは、非常によくあります。

ですからこの章では、教会の指導職について、より性別に包括的な神学を実践していくことに関連する、神学的ではないけれども非常に現実的な実際上の懸念を取り上げて、できるかぎり実際的に考えていきましょう。

思い込みを手放す

私の経験では、ほとんどの教会は、女性の指導職についてどのような立場をとっていても、男性に届き、男性を指導者として育てることに苦労しているかもしれません。ですから、もし（より多くの）女性が導いたり説教したりするために配置されたら、教会は男性を引きつけ、とどめておく力をさらに失ってしまうのではないかと恐れる人がいるのも理解できます。

けれども、高齢化した指導チームを持つ教会が、年配の指導者を全員取り除くことなく、より若い指導者を加えようとする必要があるのと同じように、男性だけのチームは、同じように賜物のある男性を取り除くことなく、賜物のある女性を加えようとすべきです。

さらに、女性の指導者が常に「柔らかく繊細な」性格の持ち主である必要はありません。多くの女性は（イエスのように）柔和ですが、ほかの多くの女性は（イエスのように）力強く、指示的です。加えられる女性の指導者は誰でも、教会のメッセージや決定に、より感情的で協調的な面だけをもたらすだろうと決めつけるべきではありません（実際にそうなる可能性も十分にありますが）。

同時に、より多くの女性が男性と並んで導くために立ち上がるとしても、それは決して男性に身を引けという呼びかけではないことを、男性たちに教える必要があります。私とともに長老を務めるジェン・ペダーセン（Jen Pedersen）が言うように、「男性が受け身でいると、私たち女性が立ち上がるのはあまりにも簡単です。けれども神の理想は、強い男性と強い女性がともに立つことなのです」。

教会が神学を変えて、女性をより高いレベルのミニストリーに含めるようになっても、女性たちがそうした新しい機会へと立ち上がるまでには、しばらく時間がかかるかもしれません。それを単に女性たちに任せておくのではなく、私たちは、女性の指導職に関する教会の文化を変えていくための手立てを講じることができます。

この点で私たちは、性差別的な二重基準を認め、手放す必要があるかもしれません。これは教会においてだけでなく、社会のあらゆる分野において当てはまります。私は、テイラー・スウィフト（Taylor Swift）が自分の領域で同じことに異議を唱えようとしたことを思い起こします。「音楽業界には、男性と女性とで違う語彙があります。男性が何かをすれば、それは戦略的と言われます。女性が同じことをすれば、それは計算高いと言われます。男性は反応することが許されますが、女性は過剰反応することしかできないのです」。[725]

カディ・コールはDeveloping Female Leadersの中で、教会で指導的な役割を担う女性たちにインタビューしたところ、彼女たちが自分の教会で次のようなことに気づいていたと述べています。「男性の情熱は、特に感情的になりやすい指導上の問題に関しては、強く、役に立ち、前向きなものとして受け取られます。しかし女性が同じ情熱を示すと、怒っている、押しが強い、独善的、否定的だと受け取られかねません。同様に、明確な指示と期待を示す男性は良い指導者だと考えられますが、同じことをする女性はしばしば偉そうだと思われるのです」。[726]

教会の文化を改善するための第一の方法は、おそらく、今の文化が本当はどのようなものかを知ることでしょう。そのためには、賜物があり召された女性たちに、たとえば次のような踏み込んだ質問をしてみることです。この教会で女性の指導者であるとは、どのような感じですか？　もし何かあるとすれば、あなたがもっと十分に用いられるのを妨げているのは何ですか？　私たちはこうしたことすべてをどのように改善できるでしょうか？　指導する立場にある男性たちは、これらの質問の答えはもうわかっていると誤って思い込んでいるかもしれません。しかし、まさにこの初期設定の思い込みこそが問題の一部なのです。もし私たちがより良いチームを組み、より健全な教会文化を築こうとするなら、第一歩は、何も決めつけず、もっと難しい質問をすることです。[727]

私自身の経験では、戦略的な賜物を持つ女性たちが、指導者会議で驚くほど静かであることがよくありました。ジョージ・スラット（George Surrat）も同じような経験を語っています。彼の経験はあなたがたの文化には当てはまらないかもしれませんが、私自身の経験と確かに響き合うので紹介します。新しくチームに加わったメンバーの女性に、なぜそんなに静かなのかと彼が尋ねると、彼女はこう答えました。「男性たちが絶えず話をさえぎり合い、互いの声にかぶせて話すので、口をは

725. www.cbsn.ws/3wNUpSk
726. Kadi Cole, Developing Female Leaders, 第3章。
727. このユーモラスなパロディーは、男性が女性自身に語らせるのではなく、女性に代わって語ってしまうときに犯す過ちを明らかにしています。www.bit.ly/3bKamzu

さむのが難しいことがよくありました。『それに』と彼女は言いました。『私の意見が本当に必要なのかどうか、よくわからないのです』」。これに対してスラットは、この遠慮しすぎる指導者に二つの見方を伝えました。「第一に、男性ばかりの部屋では、尋ねられるのを待っていたら、おそらく決して尋ねられることはないでしょう。良くも悪くも、自分から声を上げなければなりません。そして第二に、もしあなたの意見が必要ないのなら、あなたはこのテーブルについていないはずです。教会にはあなたの意見が必要なのです」。[728]要するに、女性が男性中心の指導チームに初めて招かれるとき、本当に発言し始めるためには、個人的な励ましが必要かもしれないということです。

男性指導者が女性と並んで導けるよう指導する

スラットからさらに知恵を学びましょう。彼の妻と娘はどちらもすぐれた指導者ですが、指導者たちの話し合いの場に女性がいることを快く思わない男性たちによって引き起こされる痛みもよく知っています。そのスラットが、女性と一緒に働くことに慣れていない男性たちに、四つの助言をしています。[729]

聞くこと：女性は多くの男性よりも、ニュアンスに富んだコミュニケーションのスタイルを持っていることがよくあります。女性は、話し合いの中に文脈や感情や人間関係を含める傾向がより強いのです。このより複雑な質感を退けてしまうのは間違いです。

話をさえぎらないこと：男性はしばしば、特に会話が感情的になると、互いの話をさえぎります。これは常に失礼なことですが、多くの女性指導者にとっては、話し合いに加わることを特に難しくしてしまいます。

明確にするための質問をすること：理解するために質問するのは常に役に立ちますが、男性と女性がともに導いているときには、とりわけ役に立ちます。私たちは世界を異なる仕方で認識し、異なる道筋で結論に達します。理解できない意見を退けるのではなく、その背景を尋ねてください。

信頼すること：あなたがたの教会で指導者のテーブルに新しく加わった女性たちは、あなたがたが自分たちを信頼して導きを任せていると知る必要があります。彼女たちを、守られなければならない格下のパートナーや子どものように扱ってはい

728. George Surrat, Why Women Don’t Lead in your Church, www.bit.ly/2YgL4FR
729. www.bit.ly/2YgL4FR

けません。女性たちを知性ある大人として信頼して導きを任せ、あなたがたのことばと行動によってその信頼を強めてください。

スラットは、男性（そしておそらく女性も）が男性優越主義や女性蔑視の罪を犯すことがあると警告しています。それは容認されるべきではなく、むしろ正されるべきです。もしその人がそれを悔い改めようとしないなら、その人は指導すべきではありません。スラットはこう言います。「極端に聞こえるかもしれません。しかし、人種差別主義者を指導職にとどめておくでしょうか？〔ほかの人種の人々〕をほかの誰とも違うように扱い、その人たちのリーダーシップを損なうような指導者を容認するでしょうか？　人種を差別することが容認できないのなら、性別を差別することも容認できないのです」。

また別のときには、男性指導者たちが慣れ親しんだものを手放すのに苦労していることが問題かもしれません。私が話をした男性だけの指導チームからよく聞く反論は、女性がいると「部屋の力学が変わる」というものです。この意見は、スラットが書いているように、会話は「男性だけがいるときのほうが本音で実りがある」ということを暗に示しています。しかし真実は、多様な人々が指導チームにいるときには、会話は少し複雑になるかもしれませんが、常にはるかに豊かになり、より広い視野を生み出し、したがってより良い決定をも生み出す可能性が高くなる、ということです。

女性のミニストリーを受け入れるよう教会を導く

教会にどのような変化をもたらすにも、常にある程度のリーダーシップの知恵が必要です。私の提案では、変化を通して教会を導く最も重要な方法は、聖書から教えることです。指導チームだけが聖書的・神学的な旅をして、その結果、女性を指導や説教へと送り出し始める一方で、教会全体には同じような旅をさせないとしたら、それは間違いでしょう。本書の内容が、こうした説教や小グループでの旅のための材料となることを願っています。

聖書とイエスと御霊がともに、女性が導き教えることにどれほど価値を置いているかを教えたら、それに続いて、女性が導き女性が説教する姿に教会を触れさせ始めてください。おそらくはゆっくりと、少しずつでよいのです。女性がなしうる大きな貢献について教えるだけで、それを示さないのでは十分ではありません。多くの人にとって、百聞は一見にしかずです。女性が説教するのを聞き、女性が導くのを

見て初めて、人々はそれを聖書的な規範として受け入れ始めるのです。たとえば、1800年代の救世軍は、自分たちを女性の指導職の先駆者とみなしていました。1929年、創設者夫妻の息子であるブラムウェル・ブース（Bramwell Booth）は、まさにそのことを語っています。

西洋諸国で進んでいるのが見られる女性の全般的な解放において、救世軍の女性たちが一役買ってきたことは、ほとんど疑いがありません。過ぎ去った年月に、さげすまれた救世軍兵士たちの小さな隊の先頭に立って行進した女性たちは、女性が指揮をとる光景に、女性が公の務めにひるむことなく積極的に加わる光景に、そして神の恵みによって自分のいわゆる劣った点を克服していく光景に、世間の人々の心を慣れさせていたのです。こうして私たちは、まことに次のように言うことができます。私たちは扉を開いていたのであり、その扉を通って女性たちは、女性の唇から〔でなければ〕決してそれを受け取らなかった〔であろう〕大勢の人々に、愛といのちのメッセージを運ぶことができたのだ、と。その扉は二度と閉ざされることはありません。[730]

救世軍がしたことの一つは、女性を男性と同じ指導職に公に任命することでした。教会でも同じようにすることには、大いに意味があります。補完主義の教会の中には、例外的に、女性に男性と同等の働きを与える用意のある教会もあります。牧会の指導チームで女性の視点を求めたり、女性に説教させたりするのです。けれども、同じ働きをしている男性が持っているような、聖書的な職務や召しとしては認めていません。しかし、ある人を教会で導いたり教えたりする働きへと送り出しながら、神から与えられたその人の職務を認めないなら、意図せずにその人の貢献を小さくしてしまいます。何しろ、私たちに仕えてくれる人々から最大限の恵みを受け取るためにイエスが教えておられる方法の一つは、神がその人々に与えられた恵みと職務の両方を認めることなのです。「預言者を預言者だからということで受け入れる人は、預言者の受ける報いを受けます」。[731]私の以前の教会は、補完主義ではありましたが、女性に牧会的な役割を担わせながら、その牧会の職務を公式には認めていませんでした。女性を完全に押さえつけるよりははるかにましですが、それでもやはり、多くの女性の人生にある恵みを小さくしてしまう結果になったと、私は考えるようになりました。

私たちが開拓した教会での、私の妻のミニストリーについて、個人的な例を挙げさせてください。10年にわたる彼女の説教と指導における貢献を振り返ると、今にな

730. Bramwell Booth, Echoes and Memories, p.172
731. マタイの福音書10章41節

って気づくことがあります。もし彼女が自分を（単に牧師と結婚している者ではなく）神に任命された一人の牧師として考えていたなら、教会での貢献という点で、おそらくもっと多くのことへと立ち上がっていたでしょう。そして、彼女に従い彼女の話を聞いていた人々も同じように考えていたなら、彼女がささげるものから、おそらくさらに多くを受け取っていたことでしょう。実際には、彼女は自分の上にある神の恵みの大きな、しかし不完全な部分を引き出したのであり、彼女のミニストリーを受けた人々もまた同じでした。[732]

女性の指導者と説教者に投資し、メンターとして育てる

将来もっと高い資質を持つ女性の指導者や説教者を見たいなら、今日から彼女たちを訓練し始める必要があります。何十年にもわたって自らすぐれた指導者や説教者を育ててきた私は、彼らが生まれつきそうなのではなく、育てられてそうなるのだということを知っています。私のような既存の指導者が指導者の素質を持つ人を見いだすと、私たちはその人たちを育成のパイプラインに送り込み、その中で段階的に訓練し、配置していったものです。

けれども、補完主義者だった年月を振り返ると、才能を見いだす私の目には目隠しがされていました。私は賜物のある男性を探していて、間違いなく多くの賜物のある女性を見逃していたのです。その最終的な結果として、何年もたつと、私たちの教会は実績のある男性の指導者や説教者で満ちていましたが、それに匹敵する女性はごくわずかしかいませんでした。このことが、補完主義の教会において確証バイアスの循環を永続させます。私たちは自問します。「もし神が、賜物のある女性をより高いレベルの貢献へと送り出すことを望んでおられるのなら、なぜこんなに少ないのだろうか？」。けれども聖霊は、私たちの間にいる一人の女性に、同じような（あるいはもっとすぐれた）指導とコミュニケーションの賜物を与えておられたかもしれません。それなのに、見いだされ、訓練され、機会を与えられ、指導を受け、配置されたのは、彼女の兄弟だけだったのです。やがて彼のほうが彼女よりはるかに賜物があるように見えてきます。実際には、これは神の差別ではなく私たちの差別の結果であり、神が彼女の中に見ておられるものを私たちが見ることができなかった結果なのです。

732. この話は妻の許可を得て紹介しています。また強調しておかなければなりませんが、彼女がそれ以上を求めなかったのは、彼女の謙遜のしるしだったと私は思います。しかし正直に言えば、振り返ってみると、彼女にはもっとささげるものがあったのです。

女性ミニストリーに携わっている友人がいます。彼女が話してくれたところでは、何年もの間、女性たちが交代でほかの女性たちを導いたり、説教したりするのを見てきましたが、彼女の見るかぎり、教会の牧師たちからは何の訓練も受けていませんでした。彼女は私にこう言います。「当然ながら、こうした女性たちは中途半端な賜物で奉仕することになり、たいしたものにはなりませんでした。まさに訓練を受けていなかったからです。訓練を受けた男性の指導者たちは、訓練を受けていない女性の指導者たちが足を引きずりながら進むのを放っておいたのです」。

私はもう一人の友人を思い浮かべます。彼女はビジネスの世界で並外れた話し手です。けれども、何十年も説教したいと願ってきたにもかかわらず、牧師たちは彼女の夫を含む男性だけを「説教者訓練」に招きました。招かれなかったことに打ちのめされた彼女は、ひそかに自分で訓練できるよう、夫にその訓練を録音してくれるよう頼みました。

指導者が次のレベルに進むためにはメンタリングが必要です。カディ・コールがインタビューしたある女性指導者はこう言いました。「教会が私を指導者として育てるためにしてくれた最も大切なことは、私を成長させるような立場に置き、同時にそのすべてを通して私をメンタリングしてくれたことです。大きな成長の時期に、私が一人で放り出されることは決してありませんでした」。メンターは、メンティーにとって関係的に近づきやすい存在でなければなりません。

多くの場合、ここで物事がうまくいかなくなります。男性のメンターは、女性のメンティーと一対一で時間を過ごすことに神経質になるのです。ビリー・グラハム・ルール（The Billy Graham Rule）として知られる考え方は（初期の提唱者の一人にちなんでそう呼ばれています）、誠実なクリスチャン男性指導者は決して女性と二人きりになるべきではない、というものです。ビリーはこの規則を守っていたかもしれませんが、イエスがそのような規則を守っておられなかったことは注目に値します。[733]もちろん、実際的な知恵は今でも必要です。メンタリングのための夕食よりもメンタリングのための昼食のほうがおそらく賢明でしょうし、ミニストリーの旅には一人だけでなく二人を連れて行くほうがよいでしょうし、一人だけに投資するよりも二人を同時にメンタリングするほうが安全かもしれません。けれども、規則を守っても罪深い欲望が抑えられるわけではないことも認めましょう。不倫をしたい人は、不倫をする方法を見つけるものです！　結局のところ、私たちは、誘

733. たとえば、ヨハネの福音書4章8節は、イエスとサマリアの女が二人きりだったことを明らかにしています。イエスは（多くの補完主義の男性ならそうするように）この状況を避けるのではなく、むしろ意図的にこの機会を求められたようです。そしてこの機会をとらえて、彼女とただ表面的に関わるだけでなく、最も深いレベルでつながられたのです。

惑を減らし、また／あるいは誘惑に打ち勝つ助けとなるような品性、知恵、霊的な深さ、そして関係における適切な境界を備えた指導者を育てるべきなのです。どこかの時点で、人は、完全に避けることなく誘惑に賢く対処できる成熟を身につけなければなりません。[734]

夫婦のミニストリーを考え直す

補完主義の弱点の一つは、神に仕えるミニストリーにおける夫婦について、画一的なアプローチをとることです。主要なひな型は、場合によっては唯一のひな型は、「ペテロとその妻」モデルと私が呼ぶものです。[735]このモデルでは、夫が指導者で、妻が助け手です。夫は使徒ペテロのように、前面に立つ指導者や説教者であり、その妻は（この場合、名前すら知られていませんが）舞台裏で夫のミニストリーを喜んで支えます。これには何の問題もありません！　非常に多くの夫婦、おそらく大多数の夫婦にとって、これはすばらしくうまくいきます。問題は、これがミニストリーに携わるすべての夫婦にうまくいくわけでは決してないということです。私は、ほかに三つのモデルがありうると考えます。

「デボラとラピドテ」モデルがあります。[736]この場合、妻が前面に立つ指導者で、夫は妻の最大の支援者です。補完主義のサークルの中にさえ、広範囲に及ぶ公のミニストリーに召された女性たちが大勢います。そして、おそらく舞台裏での働きにより賜物のある夫たちが、神のための妻の働きを誇りをもって後押ししているのです。

また「プリスキラとアキラ」モデルもあります。この場合、妻と夫は一緒に働くことによって、互いの指導の賜物を合わせます。それは、この聖書の夫婦が、事業においても、家庭の切り盛りにおいても、教会の指導においても協力し合ったのとほとんど同じです。これは、私自身の結婚にあるものを最もよく表しているモデルで

734. この問題へのより包括的な応答として、カディ・コールの“Developing Female Leaders”の中の章“Create a safe environment”を強くお勧めします。彼女はまた、職場や教会におけるセクシュアル・ハラスメントや不適切な関係の問題も扱っています。
735. ペテロの妻は、ペテロを支えることだけをしていたようで、自分自身の前面に立つミニストリーは持っていませんでした。イエスのミニストリーの初期に、イエスはペテロの家でペテロの姑をいやされました（ルカ4:38–40）。ほかの使徒たちも、全員ではないにしても多くが結婚していたと考えられます。しかし彼女は、何十年もあとに、ペテロの宣教旅行でペテロと一緒にヨーロッパへ旅をしたときまで（Ⅰコリント9:5）、言及されないままです。おそらく、子どもたちがもう成長し、彼女はもっと自由に旅ができるようになっていたのでしょう。
736. 士師記4章4節を参照してください。

す。私の妻は、別の召しを追い求めるよりも、ミニストリーにおいて私とチームを組むことを好む人です。彼女は喜んで自分の指導の賜物を私の賜物に合わせてくれます。私も同じ喜びをもってそれに応えています。

「エステルとクセルクセス」[737]モデルも忘れないようにしましょう。王妃エステルは夫の指導的な取り組みのいくつかを支えたかもしれませんが、自分の指導力を別の機会や領域に集中させ、その際に夫の支援を求め、それを受けました。プリスキラとアキラのように、このようなミニストリーにおける結婚には、公の指導の賜物を持つ二人が含まれますが、ただこの場合、二人は二つの異なる組織を導くのです。

見てきたように、夫婦がミニストリーに関わる形式には多くの可能性があります。残念ながら、結婚についての階層的な見方は、結婚の最初のモデル（「ペテロとその妻モデル」）しか支持せず、異なる形に造られている何千もの夫婦の上に、疑いと懸念の影を投げかけます。それとは対照的に、相互主義のビジョンは、あらゆるモデルのために場所を空け、あらゆるモデルを喜び祝います。

ミニストリーにおける結婚のこうした多様なモデルは、性別に包括的な教会の指導チームの基盤にもなりえます。

男女混成のチーム

男女相互主義を肯定する教会では、まったく同じ指導チームは二つとありません。それぞれのチームは、その教会にいる指導の賜物の異なる組み合わせから成り立つからです。それでも、そのようなチームで仕える可能性のある、さまざまなタイプの人々を挙げることはできます。

- リディアやテモテが一人か二人いるかもしれません。これは指導の賜物を持つ独身の女性や独身の男性です。新約聖書は独身者にも既婚者にも等しい召しを

737. クセルクセスは敬虔な男性の模範ではなく、彼の結婚も対等なものではありませんでしたが、それでも彼がしたと思われることで、今日の敬虔な結婚においても再現できることがあります。それは、彼が自分自身の取り組みを追い求める一方で、自分の妻たち（最初はワシュティ、次にエステル）がそれぞれ自分の取り組みを追い求めるのを許したことです。ワシュティは女性たちのための宴会を催し、エステルは法令を書きました。このような夫婦のあり方は古代世界ではきわめてまれで、最上層のエリートにしか許されないものだったので、聖書の中ではこれが唯一の例です。女性がますます知的にも社会的にも男性と対等になってきている多くの現代文化では、結婚のパートナーが、ダイナミックなパートナーシップを保ちながら、それぞれ異なる目標やキャリアやミニストリーを追い求めることは、より実現しやすくなっています。

与えているので、結婚しているかどうかによって、誰かが指導職に就く資格を失うべきではありません。実際パウロは、独身の人々は、独特の集中力をもって教会に自分をささげることができるかもしれないと示唆しています。[738]

- プリスキラとアキラのような夫婦が一組か二組いるかもしれません。これは夫婦の両方が同じ指導の召しを持ち、二人ともチームに加わっている夫婦です。
- ペテロやクセルクセスが一人か二人いるかもしれません。これは指導の賜物を持つ既婚男性で、その妻たちは、より支える役割を好むか、あるいはほかの場所に全面的にささげられている指導の賜物を持っているため、指導チームには加われない人たちです。こうした妻たちに何時間もの会議に座っていてもらい、彼女たちに望みも余力も適性もないかもしれない要求を課すことで、彼女たちの限られたボランティアの力を使い果たしてしまうのは不公平だと私は思います。彼女たちはおそらく、望みも余力も適性も確かに持っている仕方で、教会の中や教会の外で仕えるほうに、より大きな喜びを見いだすでしょう。
- 同じように、デボラやエステルが一人か二人いるかもしれません。これは指導の賜物を持つ既婚女性で、その夫たちは、より支える役割を好むか、あるいはほかの場所に全面的にささげられている指導の賜物を持っているために、指導チームには加わっていない人たちです。

男女混成の指導チームを築く相互主義の教会は、こうしたタイプの人々を組み合わせるさまざまな方法を試すことができます。この性別に包括的な指導モデルにおいて私が見る主な課題は、ペテロの妻とデボラの夫へのケアと、彼らとのつながりです。指導が求められていないとしても、こうした配偶者たちを仲間に含め続ける一つの方法は、牧会チームの関係を深める面に彼らを加えることです。楽しむための一日や特別な夕食会、あるいは教会のための集中的な祈りの時に一緒に来てもらうことは、彼らを輪の外ではなく内側にとどめておくのに大いに役立つでしょう。

もちろん、どのような構成の指導チームにも、いくつかの強みと、いくつかの潜在的な弱みがあります。「ペテロたち」だけから成る補完主義のモデルのような、単純だけれども不毛になりかねない構造を選ぶよりも、多様性の複雑さを受け入れ、知恵の御霊に頼るほうがはるかに良いのです。御霊は、それぞれの指導チームを導いて、その特定の時期に、その特定のあり方を見いださせてくださいます。

738. コリント人への手紙第一7章32–34節

ほかの教会から学ぶ

多くの教会の指導チームが、その教理を補完主義から相互主義へと変えてきたか、あるいは変えることを検討しています。しかし、それはどのようになされるべきでしょうか？　教会を指導してきた年月の中で、私は二度、教会の神学を正式に調整することに関わってきました。私が苦労して学んだのは、神学を正しく理解することと、教会全体を同じ方向に向かわせることとは別のことだ、ということです。だからこそ、すでに移行を果たしたほかの教会から学ぶことがとても重要になるのです。私は、ロブ・ディクソン博士（Dr. Rob Dixon）とエイプリル・フィート（April Fiet）が、すでにこの改善を果たした教会への焦点を絞ったインタビューに基づいて、男女相互主義へ移行しようとしている教会のための道筋を示してくれたことに感謝しています。[739]

たとえば、テキサス州ダラスの著名な教会であるベント・ツリー・バイブル・フェローシップ（Bent Tree Bible Fellowship）から学ぶことができます。彼らは当初、男女相互主義に抵抗していましたが、神が自分たちに変化のための二つのきっかけを送ってくださったのかもしれないと見分けるようになりました。一つは、彼らの間にいた信頼される指導者でもある神学者が、より良い神学を提案したことです。もう一つは、長く大切にしてきた共同のリーダーシップという価値観が、女性を上級指導チームから排除していることと、ますます食い違うように思えてきたことでした。ベント・ツリーの男性だけの長老チームは、まる一年をかけて関連する聖句を研究し、定期的に集まって気づいたことを比べ合いました。彼らは読んだ本を参照しました。ついに集まって研究の成果を分かち合ったとき、グループは、聖書の研究においても、教会に対する御霊の導きの感覚においても、全員一致していました。すなわち、もはや女性に閉ざされた教会の職務は一つもあってはならない、ということです。

そこで彼らは、この教理上の転換について、透明性をもって、急ぐことなく会衆と向き合いました。彼らはさまざまな方法でそれを行いました。長老たちの声明、説教[740]、自分たちで作成した神学的な論文、そして何より重要なこととして、教会内の個々人から出された質問に答えたり懸念に応えたりする多くの機会を設けて、自分たちが対応できるようにしたことです。彼らは、異論を持つ教会員や不安を抱

739. www.bit.ly/3nECNFR
740. このページを下にスクロールして、この説教を聞いてください。www.bit.ly/3xbsb4h

く教会員とのこの対話を、近づきやすく、愛に満ち、忍耐強く、牧会的な仕方で進めることがどれほど重要であるかを学びました。

移行を果たした教会は、どこも同じ話をします。会衆の大多数は転換を受け入れますが、少数の人々はこの教理上の調整を受け入れることができません。これは避けられないことです。それでも私たち教会の指導者は、ともにいるすべての人が私たちとともにとどまるように祈るべきですし、彼らを助けるためにできるかぎりのことをするべきです。

この移行は旅の終わりではありません。旅の始まりなのです。教理上の変更を行ったら、神に感謝して深呼吸をする時です。それから、共同体として、また指導者として、女性と男性が本当にパートナーとして協力し合う新しい道を見分けながら、構造と文化の転換を実行し始めましょう。それはすべて、福音が私たちの教会の中で、また私たちの教会を通して、より大きく前進していくためなのです。



17
民衆対家父長制

「男性が神の権威を担っているというこの物語は恐ろしいものですし、キリスト教的でもありません。」ベス・アリソン・バー[741]

「四十年間牧師を務めてきた私の経験では、教会生活の中で女性のリーダーシップが認められると、あらゆることが良くなります。」ケビン・ジャイルズ[742]

最近のある朝、妻が私に気づかせてくれました。男性が女性をどう見るか（そして女性が自分自身をどう見るか）こそが、この本の最も大きなテーマなのだと。会話を始めたのは私でした。「補完主義の教会は、自分たちが何を失っているかに気づかないまま前進し続けています。補完主義がぴったり合う、賜物豊かな男性と、彼を全面的に支える妻とが十分にいるからです。問題は、そのことがしばしば、自らも指導者である妻たちや独身女性たちを制限したり締め出したりしてしまうことです。彼女たちには、女性・子ども・事務・カウンセリングの奉仕を超えて、差し出せるものがあふれるほどあるのに。」

妻は首を横に振りました。「いいえ、問題はそこじゃないの。少なくとも、いちばんの問題ではないわ」と彼女は説明しました。

いちばんの問題は、補完主義の神学と実践が、男性に女性をどう見るように訓練するか、そして――おそらくもっと悲しいことに――女性に自分自身をどう見るように訓練するか、という点にあります。どれほどかすかであっても、そのメッセージは、女性は何らかの意味で男性より劣っており、だから差し出せるものも少ない、というものです。そうした無意識の思考が根づいていると、男性が女性に対してどれほど好意的で「敬意を払って」いても、男性が女性と関わる仕方にも、女性が男

741. The New Yorker誌のインタビュー、2021年7月25日。出典：www.bit.ly/2YjaG4Z
742. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, 第8章

性に自分と関わらせる仕方にも、良くても父権的な温情主義、悪ければ優越意識の響きが必ず伴うことになります。

妻にはそれが分かっているはずです。キリストに従う人生のすべてを通して、彼女は補完主義の教会に自分を注ぎ出してきたのですから。驚くべきことに、彼女には、ひどく不当に扱われていると感じずにすむだけの気質と機会と自信がありました。それでも彼女は問題の核心を突いています。神学こそが問題なのです。教会の神学とは、私たちが思い込んでいるような、どこかのGoogleドライブに保管された、誰も開かない聖書論証の文書ではありません。それはずっと身近なものです。神学とは、私たちの認識であり、ビジョンであり、現実の見方なのです。ですから、女性についての神学とは、私たちが女性を見る根本的な見方なのです。

実際、私自身が補完主義の神学を捨てたことによる主な影響は、女性に対する私の認識が、かすかではあっても否定しようのない仕方で変わったことでした。端的に言えば、私は以前よりも多くのものを女性の中に見るようになったのです。ゆっくりと、しかし確実に、神はあわれみによって私の目から丸太を取り除いてくださっています。今の私は、以前のどんな時よりもはっきりと、家庭でも、教会でも、社会でも、女性たちがどれほど多くのもの――アイデア、視点、識別力、言語化する力、方向づけ――を差し出せるかに気づいています。そして彼女たちの中に多くを見れば見るほど、神がアダム（とその息子たち）に語られたことばの重みと確信を感じるのです。「〔男たちが〕ひとりでいるのは良くない。」

ガラスの天井と金色の鳥かご

神がどれほど多くの人々を私の歩む道に送り続け、彼らの胸の張り裂けるような話を私に聞かせてくださるか、驚くばかりです。私はこうした話を探しに行ったわけではありません。むしろ、話のほうが私を探しに来るようなのです！

成熟した、賜物豊かなある信仰者は、こう話してくれました。彼女は、教会で指導し説教する備えをするよう神に召されていると感じた霊的な体験を、無邪気にも教会の指導者たちに打ち明けました。ところが返ってきたのは、もし彼女が男性なら、その召命感は正当なものとして称賛されただろうが、彼女は男性ではないのだから、それはほかの方向に向け直さなければならない、という答えでした。彼女はその後その教会を離れ、別の教会を開拓して成功させています。

別の女性は、今も熱心な補完主義者ですが、何十年も夫に従おうと懸命に努めてきた結果、自分自身の声をほとんど失ってしまい、そのために結婚生活が危うい状態にあります。その結婚の中で、どうすれば自分という感覚を取り戻せるのかと、彼女は思い悩んでいます。

ある牧師の友人が話してくれたところによると、彼の妻は何十年も教会の指導を担ってきたのに、今では大きな熱意をもって職業の世界に身をささげていて、教会に仕える意欲はほとんど残っていません。彼女の説明では、外の世界では自分の賜物が尊重され、男性たちが自分を対等な仲間として扱ってくれるのだそうです。

もう一人の友人は賜物豊かな指導者で、生涯ずっと教会で働いてきましたが、ついに女性を対等な者と見る教会に加わりました。彼女が言うには、生まれて初めて、自分の戦略的なアイデアが性別のせいで無視されているのではないかと気をもむこともなく、自分の確信やビジョンの強さのために何かイゼベルのような女だと見られるのではないかと恐れることもないそうです。

数年前、教会指導者のための三日間のカンファレンスの後で、実績のある女性指導者が私に打ち明けてくれました。カンファレンスの日を重ねるごとに、自分がどんどん小さくなっていくように感じ、神の国のための志もしぼんでいったというのです。最初は私も身構えましたが、やがて彼女は、キリスト教のリーダーシップは男のものだということが、かすかな仕方でも露骨な仕方でも、どれほど彼女に伝えられたかを指摘してくれました。私はただ耳を傾けようと努め、ついに彼女のことばを聞き取りました――ことばそのものだけでなく、その下に秘められた深い失望と痛みをも。

もっと最近では、牧師たちのカンファレンスに出席し、奉仕における女性についてのワークショップに参加することにしました。そこで私は、女性たちが次々と、男性が支配する環境で神に仕えるために自分の賜物を用いようとすることの苦悩を語るのに耳を傾けました。「私は神に召されています。でも私は、その召命を何度も何度も疑い直すように仕向けられています。ところが兄弟たちは、自分の召命を疑うように促されることなど決してありません。」別の女性はダブルスタンダードを嘆きました。「指導的立場にいる男性の多くは、実際には攻撃的だという罪を犯しています。でも男性だから、誰もがそれを大目に見ます。ところが女性がただ自己主張するだけで、彼女は罪を犯しているに違いないと決めつけられるのです。」

これらに加えて、教会の男性指導者たちのところへ相談に行った女性たちの話もあります。その指導者たちは、カリスマ性も奉仕の成功もあるのに、彼女たちの懸念

を本当に聞き取ることができないようなのです。それを物語るように、自分の身近な男性――夫や父親や息子――に頼んで代わりに話してもらうほうが効果的だと気づいた女性もいます。そんなわけで、今日もある友人から、妻と娘を自分の教会に関わらせ続けるのに苦労しているというメールが届きました。賜物豊かな女性である二人は、教会で自分たちが見てもらえていると感じないと彼に言い、彼はどうしても二人を説得できないようなのです。

心に留めておいてください。勇気をもって私に話してくれた女性たちのこうした偶然の話は、どれも穏健な補完主義の環境で起こったことなのです。

私の住む町では、南東風が、ときには何週間も続けて吹き荒れます。その結果、多くの木が北西の方向に曲がったままになっています。何十年にわたる教会生活の中で、私は、教会の「神学」――ある重要な主題についての信念体系と聖書解釈の仕方――が、ほかの何よりも教会の態度や前提や実践を形づくることに気づいてきました。補完主義はそうした風の一つです。その卓越風に十分長くさらされて生きてきた女性は、曲げられてしまう可能性が高くなります。奉仕の可能性は抑えつけられ、個人としての健やかさは危険にさらされます。（いいえ、誇張ではありません。それを示す確かなデータがあるのです。[743]）

振り返ってみると、自分が女性のキリストへの奉仕を制限するようなことをしたり言ったりしたとは、思いもしませんでした――子どもたちの奉仕の将来について考えている自分に気づくまでは。神がよしとされるままに彼らを導いてくださると信頼しながらも、私は、息子たちがいつか牧師になり、ほかの人々とチームを組んで教会を教え導く醍醐味を味わってくれたらと願っている自分に気づきました。それから、兄弟たちと一緒に遊んでいる一人娘のアイヴィーに目をやり、彼女がそういう男性と結婚してくれたらと願ったのです。

その瞬間、私ははっと気づきました。これほど多くの女性が突き当たるガラスの天井は、女性を「身の程」にとどめておこうと決意した、家父長制のずる賢い設計者たちによって造られることはめったにないのだと。そうではなく、こうした天井は、ジェンダーについての私たちの神学から、ごくかすかな仕方で組み立てられているのです。賜物豊かな娘を溺愛する父親である私が、まさにここで、彼女の可能性と神の民への貢献に、目に見えないけれども突き破れない境界線を課していたの

743. 過去十五年間の調査を用いて、平均年齢47歳の女性2,234人を対象に行われたある研究は、包括的な教会と比べて、補完主義の教会に通う女性のほうが健康上の問題を抱える割合が高いことを実証しています。（Patricia Holman and Amy Burdette, “When Religion Hurts: Structural Sexism and Health in Religious Congregations,” American Sociological Review, 2021, Vol. 86 (2): 234–55.）

です。それもすべて、正しい男性と結婚することによってしか、彼女は兄弟たちと同じ程度の貢献を楽しむことはできないと信じていたからでした。

「終わらせて！」

この本の最後の数章を書いているあいだに、私は自分の町のある教会の、男女混成の指導チームに加わりました。そこで私は、そのチームの女性たちを「見る」こと、そして（同じくらい大切なこととして）「聞く」ことという霊的な訓練を実践しようと努めています。最近の指導者会議で、私は、この本の最後の部分を書くのはトラックを引っぱって坂を上るような感じだと話していました。「書き続けているのは」と私は言いました。「早く終わってほしいからなんです！」この「終わってほしい」で私が言いたかったのは、本を書くという、骨が折れ、時間を食い、感情もすり減らす作業のことでした。

するとチームの女性の一人が、「終わらせて！」と言い、その短い命令のことばを、預言的な重みをもってさらに二度繰り返しました。私は少し戸惑いましたが、やがて彼女の言わんとすることが分かりました。「キリスト者や教会が女性をこんなふうに見て扱うことを、終わらせて！」その訴えには、ほとんど天から送られたかのように感じられる真剣さがありました。この本を書き上げるための忍耐を祈り求めるたびに、聖霊は彼女のことばを繰り返し思い起こさせてくださいます。「終わらせて！　終わらせて！」この本は、その方向に向けた私のささやかなささげ物です。

では、厳密には何を終わらせる必要があるのでしょうか？

たとえ補完主義が、この問題についての聖書全体のまっとうな解釈という点で的を外しているとしても、それが本当にそれほど有害なのかと思う人もいるでしょう。補完主義の教会で、非常に多くの人々を助けているところを私たちは皆知っているではないか、と。もしかすると、私たち自身がそういう教会にいるかもしれません。そして長年補完主義の指導者だった私自身、補完主義というパン種が、すべてのパンの塊（すべての教会）に同じ程度に行き渡るわけではないことを身をもって知っています。私が指導に携わっていたような穏健な補完主義の教会は、女性を締め出す教理と女性を解き放つ教理とを、ほとんどの女性が心から尊重されていると感じられるような仕方で融合させようと最善を尽くしています。完全な教会はありませんし、神は不完全な教会さえも用いて、すばらしいことを行うことが十分におできになります。それでも私は、最も穏健な補完主義の教会においてさえ、その負の側面が現れるのを目にするほど長く、この世界に身を置いてきました。

補完主義は、性差別的な態度をあまりにも簡単に覆い隠してしまいます。性差別は、敵意に満ちたもの（そして女性嫌悪的なもの）であれ、「好意的な」もの（したがって父権的温情主義のもの）であれ、男性が女性に本当に耳を傾ける力を損ないます。レイチェル・デンホランダー（Rachael Denhollander）は、米国体操連盟の医師ラリー・ナサール（Larry Nassar）から受けた虐待を公に告発した、多くの被害者の最初の一人ですが、自分の属する南部バプテストの教派に対してこう語りました。「とても示唆的だと思うのは、女性が持つべき、静かで服従的な領域について語られた説教を、私は何百も、文字どおり何百も聞いてきたことです。でも、女性の声をどう重んじるかについての説教は、一つも聞いたことがありません。」[744]

南アフリカの白人の教会は、アパルトヘイトという偽りの教えを悔い改めて初めて、人種差別的な態度を悔い改め始めることができました。私の文化圏では、キリスト者でない多くの男性たちが罪深い男性優越主義的な態度を告白しているのに、多くのキリスト者の男性たちがただ補完主義の神学の陰に隠れているのを、私は悲しく思います。

補完主義は、脳の片側しか使わない教会をつくり出します。上級指導チームや説教チームから女性を締め出すことで、教会は自らの死角を確実なものにしてしまいます。つまり、意思決定においても、牧会的な取り組みにおいても、聖書解釈においても、男性と女性の両方への奉仕においても、脳の両側を使うことができなくなるのです。「教会の奉仕とリーダーシップにおける男性の支配のバランスを取るべき時が、とうに来ています」とアラン・ハーシュ（Alan Hirsch）は言います。「そうしなければ、私たちが今得ているのと同じ（どこか脳の片側だけの）結果を、これからも得ることになるでしょう。」[745]

これこそ補完主義の教会の大きな皮肉です。男性と女性の相補性を推し進めていると主張しながら、実際には、教会を方向づけ教える二つの主要な役割――説教と牧会的リーダーシップの役割――を男性だけに割り当て、そうすることで、女性の声と、ぜひとも必要な女性の視点から私たちを切り離してしまうのです。穏健な補完主義の教会は、少なくとも女性を指導者会議や説教壇に招くことで、これを和らげようとしています。しかし私の理解では、同時に、本当に声を上げられるだけの十分な権威を女性に与えてはいません。

744. 出典：www.bit.ly/3COpaJc
745. Alan Hirsch and Dave Ferguson, On the Verge, 第3章。

補完主義は、周縁に追いやられた、賜物と召しのある一部の女性たちに、計り知れない痛みをもたらします。私は同じ話を何度も聞き続けています。召しや賜物のある女性たちが見過ごされたり、男性を優先して無造作に脇へ押しやられたりする話です。さらに悪いことに、補完主義にはガスライティング（心理的操作）の仕組みが組み込まれています。指導したい、説教したいと願う女性を、そもそもそのような見当違いの――罪深いとまでは言わないにしても――願いを抱いたことで責めるのです。彼女がこの非難を受け入れると、今度は自分で自分を責めることになります。神が禁じておられるらしいことを望むなんて、私はどこかおかしいに違いない。賜物豊かなある女性の友人はこう話してくれました。「若い頃、私は神がご自分の民を導くよう私を召しておられるのを聞きました。でも、神のことばを聞き間違えたのだと言われて、私は神の声を識別する自分の力をまったく信じられなくなってしまったのです。」

では、この判定を拒み、今では不当な扱いを受けているという正当な思いを抱いている女性たちは、どう応じればよいのでしょうか？　痛みをただ葬り去って、仕え続けるのでしょうか？　声を上げて、嘲笑やさらなるガスライティングにさらされる危険を冒すのでしょうか？　それとも教会を離れて、別の教会を探すのでしょうか？　三つの選択肢はどれも、ひどく痛みを伴うものです。

見過ごされた女性の痛み――恐れ、怒り、苛立ち――は、鋭く感じられているかもしれません。しかし多くの場合、教会は、賜物ある人という神の贈り物が、ただ性別だけを理由に周縁に追いやられるときに自分が払っている代価に、まったく気づいていません。職業の世界でも、そして教会でも、性別のゆえに能力の劣る人が他の人より昇進させられるとき、その値札は凡庸さなのです。

補完主義は、女性のリーダーシップの可能性を押しつぶすことに加担します。この点について、リーダーシップ・コンサルタントのカディ・コールのことばを引用します。

忠実で成熟した女性たちがいて、準備ができており、リーダーシップの何らかの要素を担うべきときに――それがボランティアチームを運営することであれ、日曜学校のクラスを教えることであれ、何らかの正式なリーダーシップの役割であれ――、こうした敬虔なキリスト者の女性たちが、自分は権威を奪っているのではないかと思い悩むことに、どれほどのエネルギーと労力を費やしているかを知ったら、〔男性たちは〕驚くかもしれません。敬虔な女性たちは、たぶんどこかに、自分がその下で生きるべき線があるのだろうということに、とても敏感です。そして

問題は、もしその線がたとえば七のあたりにあるとすれば、〔男性にとっては十なのに〕、敬虔な女性のほとんどは、うっかり〔踏み越えて〕しまわないように、四くらいのところで生きるだろうということです。[746]

ここでのコールの洞察は、私にとって実に多くのことを説明してくれるものでした。私が指導していた穏健な補完主義の教会で、なぜこれほど多くの男性が指導者として当然のように大きく飛躍していくのに、ある特定の領域で指導するよう励まされた女性たちは、しばしば平凡な水準にまでしか伸びないのだろうと、私は不思議に思っていました。ガラスの天井、つまり性別に特有の制限線があると、その近くまで行く女性はほとんどいません。問題は、ガラスの天井があることだけではありません。ガラスの天井が「ねばつく床」を生み出すことこそが問題なのです。

補完主義は、女性の声を沈黙させることに加担します。アダム・ガリンスキー（Adam Galinsky）は、TEDトークHow to Speak Up for Yourself[747]の中で、声を上げる大胆さにはいくつかの前提条件が必要だと言っています。声を上げるのは正しいことだという道徳的確信、共同体の支え、そうするための力や場、そして罰を受ける恐れからの自由です。

だからこそ、教会にいる非常に多くの女性たちが、補完主義の教会の中で沈黙させられている、聞いてもらえないと感じるのです。女性の服従と沈黙の教理のために、彼女たちは声を上げることがそもそも正しいのかどうかを疑います。そのため共同体は、彼女たちが声を上げることを支えません。声を上げるための場も力も与えられません。そして実際に声を上げると、従わない態度だとか、自分の性別にふさわしい線を越えたとか、とがめられるという結果に直面するのです。

日曜日に女性が説教することを認めている数少ない補完主義の教会では、こうした女性たちは、教えるようにとは言われても、「権威をもって教える」ことはしないようにと指示されます（テモテへの手紙第一2章12節の誤った解釈に基づいています）。しかしこれは、多くの女性説教者の心を恐怖に陥れます。説教しているどの瞬間にも、確信を込めすぎてしまうかもしれない、あるいは何らかの教理的な言明にうっかり踏み込んでしまい、そのために罪を犯すかもしれないと考えるからです。

補完主義の創設メンバーの一人であるメアリー・カシアン（Mary Kassian）は、ジョン・パイパーのウェブサイトにWomen Teaching Men—How Far Is Too Far?

746. www.bit.ly/3wvNjlD
747. www.bit.ly/3k7dsSF。この講演を教えてくれたウィリアム・ウィットに感謝します。

という題の記事を書きました。[748]彼女によれば、女性たちはよく彼女に、日曜の朝や、日曜や水曜の夜に説教してよいかと尋ねるそうです。自分の証しを語ってよいか。男女混合の聖書研究会や、宗教的なカンファレンスの男女混合の聴衆に向けて話してよいか。男性のいるセミナーや神学校で教えてよいか。祈祷会を導いてよいか。個人的に男性を指導（メンタリング）してよいか。テレビやラジオで説教してよいか。記事や本を通して男性を教えてよいか。彼女はこう答えます。「霊的な教える賜物を持つ女性として、私が教会における男性のかしら性をどのように重んじるべきかという問いは、若い女性が〔恋人との関係において〕〔性的な〕純潔の原則をどのように重んじるべきかという問いと、多くの点で似ています。」

彼女は、どちらの場合も聖書にはっきりとした線が明示されているわけではないと認めています。それでも、女性が男性を教えることを、男性と性的な罪を犯すことになぞらえ、それによって、女性はその線からできるだけ遠くにとどまるべきだとほのめかすことで、広く読まれている彼女の記事は、間違いなくすでに非常に多くの女性を沈黙の床に貼りつけてしまっています。彼女たちは、カシアンの挙げるような語る機会をただ避けるか、あるいは語るとしても、間違ったことを言わないように、また正しいことであっても少しでも率直さや確信を込めて言わないように、細心の注意を払うことになるでしょう。

補完主義は、神が与えてくださった収穫の働き手の多くを縛りつけます。イエスは、収穫は多いが働き手が少ないと言われました。私たちはもっと多くの働き手を祈り求め、それから、その働き手たちを確実に働かせるべきです。伝道し弟子をつくるという教会の使命はあまりにも重要であり、地域教会と日曜の説教壇はこの使命の成就のためにあまりにも重要な手段なので、そのリーダーシップと説教の賜物の半分を軽んじてしまう危険を冒すわけにはいきません。キャロリン・カスティス・ジェームズ（Carolyn Custis James）は言います。「教会の半分が尻込みするとき――それが自ら選んだことであれ、選択の余地がないからであれ――、誰もが損をし、私たちの使命は後退を余儀なくされます。」[749]

補完主義は、私たちのただ中にいる、芽生えつつある女性指導者たちに対して私たちの目を見えなくします。二十年間指導に携わってきた教会から離れることを初めて考えたとき、私は、教会にはもっと触媒となるリーダーシップの賜物が必要だということを意識していました。何年ものあいだ、私は神の恵みによってそうした賜物を持つ者の一人とされてきたので、私に代わる、私の賜物に似た賜物がもっと与

748. www.bit.ly/3fxTcKC
749. Carolyn Custis James, Half the Church, p. 162. Bessey, 第10章に引用。

えられるよう祈っていたのです。ある時、私は最も若い会衆――何百人もの二十代の若者たち――の後ろに立ち、この群衆の中の男性たちのうち、誰が私の祈りへの答えなのだろうかと思いめぐらしていました。すると突然、聖霊が私にこう語られるのを感じました。「次の触媒となる賜物が女性だとしたらどうだろうか？」私の目は、たちまち群衆のもう半分に開かれました。その瞬間、私は、制限的な神学には、目の前にある非常に多くの賜物を見えなくするよう、あらかじめ私たちを条件づけてしまう力があることを悟ったのです。

補完主義は、女性たちの神の国の夢に上限を設けます。すべての野心が悪いわけではありません。神の栄光を現し、神のために大きな働きをしたいという、御霊から生まれた志が、私たちのある者の中には燃えています。二十代の頃、私は急成長していた教会開拓者たちの運動に加わっていました。若者だった私は、この運動の先頭に立つ年長の男性たちを畏敬の念をもって見上げていました。彼らが神のためにしていることを自分がするには、いつまでも待たなければならないだろう、と私は心の中で思っていました。ところが運動の指導者が、年齢は指導するための基準ではなく、ただその人の敬虔さと賜物だけが基準なのだと説明してくれました。状況的な要素を方程式から取り除くことで、彼は私を奮い立たせ、全力を尽くさせました。そして私はそうしたのです。

さて、若い女性たちに、彼女たちが教会と世界において神にどれほど役立つ可能性があるかを決める主な要素は、年齢でも性別でもなく、ただ敬虔さと賜物だけなのだと伝えるとき、それと似たことが起こります。たとえ最終的に説教者や牧師にならなかったとしても、神が召してくださるほかのどんな神の国の務めにおいても、彼女たちは秀でる可能性が高くなるのです。

補完主義は、穏やかな男性には特に厳しく、生まれつき自己主張の強い男性や攻撃的な男性を過度にほめそやすことがあります。補完主義の集まりの中で、私は「強い女性」を導けない「弱い男性」の問題についての会話に何度も居合わせてきました。けれども、それが本当に最大の問題なのでしょうか？　それとも、私たち自身の目に、はるかに大きな丸太があるのではないでしょうか？

生まれつきの指導者である男性もいます。補完主義の神学によれば、うまく導く男性は神のみこころを行っています。しかし、うまく導けない男性は、罪深い堕落した性質に屈しているのです。ですから、もしあなたが男性で、家庭で指導者であることが自然で心地よいと感じるなら、指導者になるのがどうも好きではなく、それが得意でもない向こうのあの男性よりも、自分のほうが良いキリスト者だと考えて

しまいやすいのです。でもこれは本当に霊性なのでしょうか――それとも単に性格なのでしょうか？[750]

逆に、補完主義は、自己主張のはっきりした女性には特に冷たく、生まれつき人に従いやすい女性を過度にほめそやすことがあります。私が気づいたのは、夫が働いているあいだ家にいることのできる恵まれた女性や、生まれつき素直な女性は、しばしば現状にまったく何の問題も感じていないということです。古代の家父長制的な前提は、自らを裏づけるものでした。子どもたちに専念し、経済的には完全に夫に頼っていた女性たちは、ごく自然に夫に従っていました。その一方で夫たちは、社会と関わる自信をますます深めていったのです。今日でも教会では、専業主婦の母親の多くが、同じ前提をすんなりと受け入れています。彼女たちにとって、妻が夫に従うことはしっくりくるのです。そして彼女たちは、敬虔な女性のあり方の模範としてほめたたえられもします。

より多いのは、働く女性、とりわけ職場で権威を与えられ、リーダーシップの賜物を持つ女性たちが、その状況の不公平さに憤りを覚え始めることです。もし彼女たちが抗議して声を上げれば、その意見の強さも、声を上げる用意があることも、たちまち従わない霊のしるしだと受け取られてしまいます。

この性差別がどれほど不公平か考えてみてください。補完主義の考え方が根づいていると、自分の見方をはっきり口にする用意のある自信に満ちた男性は、指導者候補と見なされます。ところが、はっきりものを言う自信に満ちた女性は、潜在的な脅威と見なされるのです。

補完主義は、社会の中の破壊的な性別による階層に挑む、教会の力の一部を手放してしまいます。考え方は結果をもたらします。女性に対する暴力という世界的な災厄の背後には、性別による不平等という罪があります。教会は、罪に荒らされた社会の中で地の塩、世の光となり、苦しみを生み出す不正で罪深い態度や仕組みに挑むはずのものです。ところが、女性解放運動の中にいる社会学者たちは、説得力をもって次のことを示してきました。

男性が優先され、女性が男性に従属させられている社会には、次のようなものが見られます。男の子を好むことが、何千万もの女の胎児の中絶につながっていること。女性にとっての教育、健康、収入、財産の所有、仕事における不平等。広く行

750. クリステン・ロッサー（Kristen Rosser）の“The Consequences of Complementarianism for Men.”より。www.bit.ly/3BNNCsL

き渡り、容認されている女性への暴力。〔そして〕主に売春を目的とした女性の人身売買。[751]

補完主義者で、こうした不正のどれかを公然と支持する人はいないでしょう。それでも、ジェンダーの相互性の教理――女性を男性と本当に平等な地位に引き上げる教理――のほうが、社会にとってはるかに良い贈り物です。それは、不正を永続させかねない偏見の種を与えるのではなく、社会の贖いに貢献するからです。

たとえばアフリカやアジアでは、平均的な少女の生活の質は、家父長制的な考え方のために、父親やおじや兄弟の善意あるいは悪意によって完全に左右されています。女性がほとんど主体性を持たない、性別において不平等な文化は、女性を男性のなすがままにしてしまいます。こうした文化は宗教的である傾向があり、女性の扱い方を自分たちの信仰共同体から引き出しているので、この少女たちは間接的に、教えられていることのなすがままにもされているのです。悲しいことに、50か国を分析したある調査では、男女平等の水準は宗教性と負の相関関係にあることが分かりました。[752]第一世界で適用される補完主義の教えが女性を傷つけるのは、時々にすぎません。より広い社会がその影響を打ち消すからです。しかし、こうした教えが三分の二世界にまで入り込むと――実際に入り込んでいるのですが――、その悪影響は何倍にもなります。研究によれば、宗教は「女性と少女に関する共同体の規範や願いを形づくる重要な要因です。それは女性の生活を改善するための行動の触媒となることもあれば、対立の源となり、変化の歯止めとなることもあります。」[753]ですから、女性の従属という誤った教理のために、イエスに従う者たちが、苦しんでいる何百万もの女性のために男女平等についてはっきりとした呼びかけをしないとしたら、なんと悲劇的なことでしょう。

補完主義は、教会の神学的・解釈的な力を弱めます。この本を通して示そうと努めてきたように、補完主義は悪い解釈学を当たり前のものにしてしまいます。不明瞭な聖句の上に主要な教理を築き、より明瞭な聖句の教えと矛盾するような不明瞭な聖句の解釈を許してしまいます。二次的な問題を取り上げて、それを中心的な教理にしてしまいます――そうでなければ、なぜ南部バプテストの神学校の教授たちは、毎年ダンバーズ声明に署名しなければならず、さもなければ職を失うのでしょうか？　物事を違ったふうに見る、考える聖書信仰者たちを悪者扱いし、聖書を真剣に受け止めず文化に屈していると非難します。社会との関わりにおいて、批判的

751. Giles, 549
752. 出典：www.bit.ly/3xSsK5k
753. Berkeley Center for Religion, Peace and World Affairs; Georgetown University (2008). Challenges of Change: Faith, Gender and Development, p.5

な正統主義ではなく反動主義を助長します。つい最近まで、三位一体を議論に引きずり込みさえし、性別による階層へのあらかじめの献身を支えるために、神の内における永遠の関係を考え直すことさえいとわない姿勢を示していました。

補完主義は、次の世代のために良い働きをしません。補完主義に異を唱えることが本当に努力に値するのかどうかを決めかねていたとき、私に勇気を与えてくれたのは、未来の教会への思いでした。たいていの補完主義の教会や教派の中にある現在の権力構造や同盟関係が、この分野で神学を正すことに反対する方向へ彼らを傾けてしまうのは無理もないことかもしれません。しかし、私たち自身をその構図から外し、二十年後に私たちの子どもたちが同じ教会を導いている姿を想像すると、物事ははっきりしてきます。私は、自分の子どもたちがいつか教会の指導チームに座っている姿を思い浮かべ、そして彼らが、ますます弁護しがたくなっていくこの教理を弁護しなければならないという悲しい見通しを思い浮かべます。私たちの後始末を彼らに任せるとは、なんと近視眼的なことでしょう。もしそうするなら、彼らは私たちの時代を振り返って、かなり薄弱な論拠とあいまいな実用上の懸念に基づく階層的な神学を、私たちがあれほど進んで弁護していたことを、許しがたいと思うのではないかと私は思います。

まだ続けることもできます。補完主義は、イエスのために世界を変えたいという少女の夢を小さくしてしまうことがあります。キリスト者でない人々や疑いを抱いているキリスト者に、キリスト教を捨てる理由をもう一つ与えてしまいます。独身女性に、配偶者がいないことで、教会でも社会でも自分の声や有用性や貢献が減ってしまうかのように感じさせることがあります。補完主義の教会で男性指導者と結婚している女性が、もしかすると彼女たちより賜物があり献身的でありながら独身であったり指導者と結婚していなかったりする女性たちよりも、高い水準の貢献の機会を与えられるという不公平な慣行につながります。指導し教えるよう神に本当に召されているかもしれない（そしておそらく自分の教会では送り出されている）女性たちに、イエスに従うほかの人々から励まされるのではなく裁かれるという、無用な痛みを経験させます。虐待的な男性にとっての安全な隠れ場をつくり出すことがあります。夫が家族のために、限られた、脳の片側しか使わない意思決定をする可能性を高めます。成長の限りない可能性を持つ「大人と大人」の結婚ではなく、人格的な成長を押しつぶす「親子型」の結婚を育ててしまうことがあります。働くキリスト者の母親の罪悪感とプレッシャーを何倍にもすることがあります。罪悪感というのは、働いているあいだ、自分がいるべき場所は家庭なのだと感じるからです。プレッシャーというのは、一日じゅう働いた後で、家事をこなし子どもたちの

世話を段取りすることが、夫よりも彼女の責任とされるからです。妻に主体性の一部を手放させてしまうことがあります。結局のところ、彼女の健やかな成長は、主に夫がどれだけうまく彼女を導くかにかかっているように見えるのですから。[754]

イエスは「木の良し悪しはその実によって分かります」と言われました。[755]この格言は主に人とその行いに焦点を当てたものですが、教理とその影響にも当てはめることができます。健全で真実な教理は、教会やキリスト者の中に良い経験をもたらすはずです。ところが、補完主義の苦い実を見ると、私はその正当性を二重に疑わざるをえません。しかも考えてみれば、この「キリスト教的な」家父長制に代わる、実行可能な聖書的な選択肢が、ずっと存在していたのです――世界でも屈指の聖書学者たちの非常に多くが支持している選択肢が。

極左イデオロギーか、滑りやすい坂か？

相互主義は、アイデンティティ・ポリティクスを伴う極左イデオロギーの広範な影響に迎合しているのではないか、と恐れる人も多いかもしれません。極左イデオロギーは皮肉なことに、家父長制の虐待的なかたちの以前の犠牲者たちを、新たな抑圧者の立場に置いているように見えるからです。「『男なんてクズだ』、だからむしろ女性に導かせよう！」

しかし、以前に力を奪われていた人々に有利になるよう力関係を奪い取ろうとする人々は、一見そう見えるよりも、女性嫌悪的な権力の番人たちに近いのです。かつての支配者を支配することは、悪に悪をもって報いることであり、それどころか男女関係の崩壊をいっそう悪化させることです。

それとは対照的に、男女相互主義を受け入れることは、男性も女性も、黒人も白人も、被害者も加害者も、特権を持つ者も持たない者も、相手を支配する本来的な権利を持ってはいない、という聖書的な確信に拠って立っています。一方を何らかの意味で優れた者と見るのではなく、相手の本当の価値を謙虚に認めること、そして自分自身の弱さや死角や罪を自覚することに根ざした、相互依存を求めるのです。

754. 妻のジュリーがこう説明してくれました。「補完主義の中では、夫に任せてしまい、自分から動くことを控えるのは、私にとってあまりにも簡単なことでした。私はしばしば、自分の人生と奉仕と、その両方の行く先に本当に責任を負っているという感覚から『抜け出して』いました――もちろん、あからさまにではありません。けれども、小さなことでありながら非常に大きな結果をもたらすあらゆる種類の決断において、そうしていたのです。それはただ、とてもかすかでありながら強力な意味で、そうすることができたからでした！」
755. マタイの福音書12章33節

この本で示した相互主義のための論証は、しばしば「滑りやすい坂」の議論だと非難されます。つまり、私たちの文化に押し流されて、キリスト教の根本的な正統信仰の握りが緩んでいくのだ、というのです。しかし、そうではありません。私たちの平等主義の文化がこの議論を俎上に載せたのかもしれません。けれども、その議論がどのように進められるべきか、そしてどこに着地すべきかを決めるのは、文化ではなく聖書です。この本で立証してきたように、聖書は実際に、女性の尊厳と貢献を回復させる触媒のエネルギーを与えています――女性嫌悪と家父長制が何千年にもわたって人間の文化を支配してきたことを考えれば、これは決して小さな偉業ではありません。問題は、一人ひとりの信仰者が、この教会全体の変革にどのように参加するかです。

変革の担い手になる

もしあなたが、教理のレベルで相互主義を認めている教会にいるなら、この本は、この問題についてのあなたの確信を深める助けになるかもしれません。

しかし、もしあなたが補完主義の教会にいて、この本の論証のほとんどに説得力があり正しいと思うなら、自分の教会で男女の階層から男女相互主義への転換を促すには、どうすればよいでしょうか？　その答えは、少し複雑です。

声を上げてください。イエスは「平和をつくる者は幸いです」と説かれました。本当の意味で平和をつくる者になる唯一の道が、見かけの上では平和を壊す者になることである場合もあります。声を上げるには勇気が要ります。そして高くつくかもしれません。けれども、民数記の中にひっそりと収められている物語から、励ましを得ることができるかもしれません。性別による不平等を永続させる法や規範に挑むことの霊的な重要性について、もし少しでも疑いがあるなら、ツェロフハデの娘たちが、神が味方してくださることを私たちに確信させてくれます。古代近東では、人の主要な財産は土地でした。イスラエルの相続法によれば、財産は父から息子へと受け継がれ、娘に渡ることは決してありませんでした。しかし五人の女性が勇敢に力を合わせてこの不正な制度に立ち向かいました。そして、その家父長制的な性質をなくすことはできなかったものの、例外条項をもたらすことに成功したのです。

父親が死ぬと、五人の娘たちはモーセに訴えます。「息子がいなかったからといって、なぜ私たちの父の名がその氏族の中から削られなければならないのでしょう

か。私たちにも、父の兄弟たちの間で所有地を与えてください。」モーセは親切にもこの件を神の前に持ち出し、神は（すばらしいことに）女性たちに同意されます。より公正な律法が定められます。「人が死に、その人に息子がいないときは、その相続地を娘に渡しなさい。……これは、主がモーセに命じられたとおり、イスラエルの子らにとって定められた掟となる。」[756]

今日でも、教会の規範や方針、あるいは政府の法律や企業の手続きが女性の平等な扱いを損なっているところでは、女性たちが指導者たちのもとに行ってこの不正に抗議することは正当なことです。そして指導者たちは、モーセのように、彼女たちの懸念を真剣に受け止めるべきなのです。

今日の教会という文脈で言えば、女性たちは、男性が最も重要な奉仕の働き――リーダーシップや教えること――を独占しがちだという事実に異議を唱えてよいのです。結局のところ、土地を相続するという旧約聖書の考えは、聖書の後のほうで霊的なものとされ、霊的な相続、あるいは神の民の中でのその人固有の奉仕を指すようになります。[757]最終的に私たちを相続にあずからせてくださるのは神ですが、神から与えられた自分の可能性に手を伸ばすことを妨げるような社会的・宗教的な仕組みの中にいることは十分にありえます。そしてそれは、自分の教会を貧しくし、神から遠く離れた、より多くの人々に手を差し伸べるその力を制限してしまうのです。[758]それは正しくありません。そして私たちには、好感の持てる仕方で、敬意をもって声を上げる勇気ある人々が必要なのです。

現実的になってください。カナダの神学者ジョン・スタックハウスは、この点で非常に助けになります。

イエスは私たちに、神を愛し、隣人を愛するようにと言われました。しかし私たちは、ある特定の状況において神と隣人を愛するとはどういうことなのかを、できるだけはっきりと見る必要があります。ある特定の状況のもとで、神は何が起こることを望んでおられるのか。明らかな制約がある中で、神の優先事項は何なのか。隣

756. 民数記27章4、8、11節
757. 詩篇2篇8節では、神の民すべてを含む全地が、イエス固有のゆずりの地とされています。詩篇16篇6節でダビデは、約束の地を分割し、くじを引いて各氏族と家族にそれぞれの土地を割り当てた慣習に触れています。「測り綱は私の好むところに落ちた。まことに私へのゆずりの地は麗しい。」パウロは長老たちの一団に、神は彼らに「聖なるものとされたすべての人々の中にあって、御国を受け継がせる」ことを望んでおられると語ります。（使徒20:3）私たちは一人ひとり、「信仰と忍耐によって約束のものを受け継ぐ人たちに倣う」べきなのです。（ヘブル6:12）
758. これは分裂を招くような仕方でなされるべきではありません。何かについて正しくありながら、そのやり方を間違えるということもありうるのです。この五人の娘たちは、自分たちの不満や不正義の感覚に耳を傾けてくれる人なら誰にでも分裂を招くような仕方で打ち明けるのではなく、指導者たちに直接訴えることの大切さを模範として示しています。

人がどういう人々であるかを踏まえて、私はどのような仕方で彼らを愛することができるのか、そして彼らはどのような仕方でなら私にそうさせてくれるのか。こうした現実主義は、私たちが試みることすべてに成功できるのが普通ではない世界、しばしばパン半分で満足しなければならない世界、価値の衝突にしばしば直面し、低いものを犠牲にして高いもののために働かなければならない世界において、必要な厳しい決断をする助けとなるでしょう。

私たちは、個人や特定の集団、あるいは特定の階層の人々が、ある状況の中で何を成し遂げることができるのかをよく考える必要があります。たとえば、ある教会の長老たちは、若い人々がどれほど正しくても、あまり耳を傾けようとはしないでしょう。多くの男性は女性の言うことを聞こうとしないでしょう。それは公平ではありませんし、良いことでもありませんが、それが現実なのです。そのようなキリスト者は、自分の現実的な選択肢の中で、どうすれば最もよく神をあがめ、神の国を前進させることができるかを決める必要があります。できるだけ早く、彼らは、状況の社会的な現実に関係なく、ただ自分の論証の正しさだけで話を聞いてもらえるだろうという幻想を捨てるべきです。

この点で誤解されないように言っておきますが、私は、聖霊が人の心を変えることができ、ときには驚くような仕方でそうなさることを信じていると断言します。しかし私たちは、今ここで話しているのが、通常の人間関係の一時停止――私が「社会学的な奇跡」と呼ぶもの――であることを、現実的に見る必要があるのです。[759]

以前の私の教会は、十の会衆から成り、何千人もの人々であふれていましたが、私はそこで、意思決定を共にする仲間たち、つまり十人ほどの上級指導チームの神学を、本質的なところで批判したいと願っていました。当然のことながら、私は教会の一致を脅かす存在と見なされました。もしこの人々の半分だけが考えを変えたらどうなるでしょうか？　そうなれば、教会全体が二つに割れてしまいます。では、もし二、三人だけが考えを変えたらどうでしょうか？　そうなれば、おそらく彼らは職を失い、その席を失うことになるでしょう。私は無邪気にも「社会学的な奇跡」を望んでいたのです。この人々の全員、あるいはほとんどが考えを変えるだけでなく、しかも同時に考えを変える見込みは、どれほどあったでしょうか？　結局、非常に低いことが分かりました。[760]

759. John Stackhouse, Finally Feminist, p. 99–100.
760. なぜ一部の教会は補完主義と相互主義の両方をただ受け入れないのだろうか、と疑問に思う人もいるかもしれません。しかしこの問題は、「教会を規定する信念」と呼ばれる、特定の種類の教理に当てはまります。説明させてください。教理には三つの種類があります。第一に、本質的

それでも、この問題が多くの兄弟たちに不安を与えたにもかかわらず、私はこの問題を提起したのは正しかったと信じています。そして今も希望に満ちています。それは次の点のおかげです。

長い目で見てください。スタックハウスはこう続けます。

〔相互主義を〕あまりに速く、あまりに遠くまで推し進めると、結婚や会衆に亀裂を生じさせ、破壊さえしてしまうような状況もあるかもしれません。それは、少なくとも一般的には、神のみこころではないように思われます。イデオロギーの信奉者は、自分の純粋さと熱意から個人的な満足を得るかもしれませんが、神は抽象的な原則よりも、実際の人々のことをはるかに気にかけておられるのです。[761]

本当にそのとおりです！　神が私たち一人ひとりに対してどれほど忍耐深くあられたかを考えてみてください。神は、ご自分のみこころと道へと、私たちが進めるかぎりの速さで私たちを導いてくださいますが、私たちが進める以上に速くされることはめったにありません。だからこそ、この問題を考え直すように教会をゆっくりと着実に促すことは、御霊がその教会の中でしておられるすべての本物の働きを感謝して支えることと、組み合わされるべきなのです。

自分の選択肢をよく考えてください。「ある特定の場合に奇跡を期待する強い根拠がないのなら、私たちは別の選択をすべきです――頑なな教会員仲間に対してだけでなく、求めていた奇跡を行ってくださらない神に対しても苦々しい思いを抱くようになる前に。」[762]もしあなたが自分の教会の補完主義の神学に同意できなくなったなら、声を上げる用意を、スタックハウスが「預言的なためらい」と呼ぶものと組み合わせてください。

行動する前にためらうとき、私たちは待つことの優先性を認めています。私たちは自分の有限性と罪深さを思い起こし、主導権は人間に属しているのではないことを自分に言い聞かせます。……行動のただ中で私たちは立ち止まり、繰り返しま

な教理があります。これはキリスト教の正統信仰において本当に譲れないものです。使徒信条を思い浮かべてください。イエスの神性や、十字架の救いのみわざを考えてください。次に、議論の余地のある事柄があります。飲酒や、終末預言についての考え方を思い浮かべてください。そして、教会を規定する信念があります。これは、キリスト教界全体で議論が分かれていながら、それでも教会がどのように機能すべきかを規定する教理です。たとえば教会は、御霊の超自然的な賜物を信じるかどうか、長老によって導かれる教会にするかどうか、そしてもちろん、その長老たちがどちらの性別であるべきかを決めなければなりません。教会の指導者たちは、これらの問いへの答えにおいて一致していなければなりません。それらが教会の実践を規定するからです。

761. John Stackhouse, Finally Feminist, p. 100.
762. John Stackhouse, Finally Feminist, p. 100.

す。……それは敬意のしるしとしてです――神に対する、そして私たちが地を分かち合っている被造物に対する敬意の。そしてそれは謙遜を表しています。私たちの理解と支配を超えた価値や現実があるのです。[763]

また、私たちはすべての努力を祈りで満たすべきです。そしてそうしながら、私たちの労苦が、身ごもった女性の忍耐のように、最終的にはより良い教会という実を結ぶと信頼しなければなりません。

それでもその教会にとどまるか、それともこの問題を理由に離れるかを決めなければならないとしたら、どちらが最善でしょうか？

とどまるほうが良いかもしれません。献身的なイエスの弟子は、自分の教会の物事の進め方のある一面に同意できないたびに教会を離れてよい、という自由を持っているわけではありません。現代の個人主義的な文化の中で、私たちの多くは、共同体の一体性の根底にある契約という考えを見失ってしまいました。友人は選べるかもしれませんが、家族は選べません。たいていの場合、神がこの教会家族を――欠点も含めてまるごと――私たちのために選んでくださったのだと考えるべきです。

それに、自分の教会の教理にもっと良い日が来ることを願っている人が皆ただ離れていってしまったら、その教会がいつか熟慮のうえで教理を変える望みは、どこにあるでしょうか？　その間、祈りつつ変化を待ちながら、私たちはできるかぎりイエスの謙遜と寛容に倣い、自分の教会で喜び祝えることをすべて喜び祝うという訓練を身につけることができます。

多くの結婚において、聖化の過程は、配偶者のある点がどうしても好きになれないという地点に人を導くことがよくあります。それでもその人は、その結婚にとどまるための恵みとあわれみを見いだし、その中に本当の意味と幸せを見いだします。同じ原則が私たちの教会にも当てはまるかもしれません。

それでも、ある人々にとっては、男女相互主義を支持しない教会にとどまることが耐えがたいか、賢明でない場合もあるでしょう。相互主義者たちから、教会にとどまるべきか離れるべきかと尋ねられたとき、私は二つの質問をします。一つ目は、「あなたの住む地域に、自分が通う姿を想像できるような相互主義の教会がありますか？」という質問です。小さな町の人々にとっては、そういう教会がまったくないということもあるでしょう。

763. Glenn Tinder, The Political Meaning of Christianity, p.164. Stackhouse, p. 97に引用。

もう一つの質問は、「教会においてあなたにとってとても大切なことを、重要度の高い順に十項目リストにするとしたら、男女相互主義はどこに入りますか？　上位の五項目ですか、それとも下位の五項目ですか？」というものです。決して御霊の導きとして受け取ってほしくはありませんが、私の経験則では、この価値があなたの上位五つに入るなら、その教会にとどまり続けるのは難しいかもしれません。けれども下位五つに入るなら、どの教会に通うかを決める決定的な要因になるほど重要ではないでしょう。

もし私たちがとどまることができず、自分の地域に加わるのにふさわしい教会もないなら、もう一つの選択肢は、新しい教会を始めることかもしれません――もちろん、神がそのように導かれる場合に限ります。補完主義の糸で隅々まで縫い合わされた古い皮袋に圧力をかけるよりも、新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れるほうが良い場合もあるのです。



エピローグ：イエスは女性をどう見ておられるか

イエスこそ完全な神学です。イエスは神ご自身の自己啓示です。神が女性をどう見ておられるかを知りたいなら、福音書を読んでイエスが女性をどう見ておられるかを知る以上に、遠くへ行く必要はありません。

ルカの福音書13章で、イエスは安息日に会堂で教えておられたとき、十八年間サタンによって体をかがめられていた一人の女性に出会われます。こう書かれています。「彼女は腰が曲がっていて、まったく伸ばすことができなかった。イエスは彼女を見て……」

さあ、ゆっくりと……

イエスは……

彼女を……

見られた。

ルカの福音書のもっと前の箇所では、イエスがご自分の見ているものを、一人の男性にも一人の女性の中に見させようとしておられる場面があります。「〔イエスは〕女のほうを振り向いて、〔その男〕に言われた。『この女を見ましたか。』」[764]この問いは、今日の私たち一人ひとりにも、なお響いています。

腰の曲がった女性をイエスが見つめられたことは、創世記で神がハガルを見られたことを思い起こさせます。神がハガルにされたように、イエスもここでそうされます。イエスは彼女をただ見るだけではありません。彼女を解き放たれます。彼女の偉大さを引き出されます。続いて、「イエスは彼女を呼び寄せ、『女の方、あなたは病から解放されました』と言われた」のです。[765]イエスが彼女に手を置かれると、彼女はたちまち背筋がまっすぐになり、これまでになく背が高くなって、神をあがめました！

764. ルカの福音書7章44節
765. ルカの福音書13章11–13節

その場にいた人々が彼女と共に喜んでいる姿が、目に浮かぶでしょうか？

そう早まらないでください。会堂司は、イエスが安息日に彼女を癒やしたことに激怒します。これにイエスは憤り、この男がこの女性よりも自分の家畜のことを気にかけていると言って、彼を責められます。

ここで立ち止まってください。

ここに一人の女性がいます。彼女は二十年近くものあいだ、体をゆがめられ、痛みに体を折り曲げたまま、この信仰共同体に通ってきました。共同体の人々を神が見ておられるように見ることを務めとする霊的指導者は、彼女の悲惨な状態に心を痛めている様子もありません。

彼女がまっすぐに立ったとき、初めて彼は腹を立てるのです。

それからイエスは、この女性にかつて誰にも与えられたことのない称号を授けることで、集まっている人々にさらなる衝撃を与えられます。「この女の人はアブラハムの娘です。」サラ・ベッシーはこの場面について、こう述べています。「人々はそれまで『アブラハムの息子たち』のことしか聞いたことがありませんでした――娘たちのことは決して。けれども、『アブラハムの娘』というイエスのことばが響いたとき、イエスは彼女に、息子たちと並んで立つ場所をお与えになったのです。とりわけ、そのすべてに対する自分たちの所有権と排他性の意識をむき出しにしてうなっていた息子たちと並んで。」[766]

神の世界における彼女の居場所を回復させるのは、彼女の新しい名前だけではありません。新たにされた彼女の背丈です。イエスは象徴的な行為の名手です。彼女の屈辱を、心の苦悩と体の痛みを考えてみてください。家父長制の世界では、すべての女性が何らかの仕方で腰を曲げられています。自分は時として男性より劣っている、あるいは男性の下にいるという誤った考えのもとで、苦しみもがいているのです。そして、たとえ自分を本当に男性と対等な者として見ているとしても、自分の賜物と貢献のすべてにまで手足を伸ばす自由を感じられないことが、あまりにも多いのです。

三代目のノルウェー人牧師が最近、八十歳になる祖父と交わした会話について話してくれました。「わしには心残りが一つだけある。戻ってそれを変えられるなら、何だってするのだが」と、死を目前にしたその人は涙ながらに言いました。「妻は一度も、その賜物において十分に解き放たれることがなかった。わしはそれを変え

766. Sarah Bessey, Jesus Feminist, 第1章。

ることができたはずなのだ。妻を日陰に置き続けた教会の文化に、立ち向かうことができたはずなのだ。」

創造も贖いも、男性だけに支配を与え、女性を家庭に飼いならしてしまう家父長たちの策略に立ち向かうよう、私たちを奮い立たせるはずです。創世記1章によれば、ピーターやスーザン、エドマンドやルーシーたちは、肩を並べて治めることになっています。そして贖われた女性たちは、ユダのよみがえった獅子と同じ性質を帯びています。私たちの多くは、イエスを飼いならして家庭のペットにしてしまう危険には気をつけていながら、それでも、獅子の血が流れているイエスの王なる姉妹たちを押さえつけているのです。

何世紀も前にこのアブラハムの娘のためにされたように、イエスは今日もなお、同じことをしておられます。女性が腰を曲げたままでいることを好む者たちに立ち向かい、傷んだ葦に癒やしの香油を塗り、折れ曲がった若木を、そびえ立つ義の樫の木へと変えておられます。この聖なる働きにイエスと共に加わること――すべての女性を、男性と並んで、神が彼女たちのために意図しておられるすべてのものへと、手足を伸ばし、立ち上がるよう招くこと――は、私たちの特権であり責任なのです。

付録1：神は男性なのか？

聖書の中で、神はご自身を主として男性的な仕方で啓示しておられます。もしイエスが神の最高の自己啓示であるなら、イエスの男性性は、私たちのこの感覚をいっそう際立たせます。多くのフェミニストは、まさにこの理由だけで聖書を退けます。男性の神は明らかに男性たちが作り出した家父長制の産物であり、女性に対する男性の優位と権力に都合のよい人工物だ、と彼女たちは言うのです。確かに、キリスト者の男性たちは歴史を通じて、自分たちが権力の座にとどまる権利を主張する論拠として、これを用いてきました。結局のところ、聖書は（ほかのほとんどあらゆる形の抑圧についてと同じように）この結論を支持するために利用されやすいのです。聖書を神のことばとして受け入れ、神の「男性性」の描写をも含めて受け入れながら、家父長制を理想として強調しないような道はあるのでしょうか？

もちろんあります！　ただしそれは、聖書を注意深く読む場合に限ります。

どの時代の真剣な神学者たちのほとんども、神に生殖器や、人間の男性性を示すほかの特徴があるという考えを退けてきました。ある意味で、神は男性でも女性でもありません。しかし、神がご自身を私たちに啓示することを選ばれる仕方においては、神は男性でもあり女性でもあるのです。その最も良い証拠は、聖書の最初の章です。「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」[767]男性と女性が共に、神の本質の何かを最もよく体現し表現しているということに注目してください。男性の像の担い手は神と同じであるのに、女性の像の担い手は神とは異質なものだ、というわけではありません。女性も男性も、その本質を神から得ており、何らかの仕方で神に似た姿とつながっているのです。

神の女性的なイメージ

教会の指導者や聖書の説教者のほとんどは、聖書の中では神が主として男性的な仕方で啓示されていても、神は男性でもあり女性でもあることを認めています。けれども私が属してきた教会の伝統では、私たちはあまりにもしばしば、神を常に男性として示し、決して女性としては示さないことに気づきました。

767. 創世記1章27節

その一方で、聖書は神についての数多くの女性的なイメージを与えています。マーゴ・ハウツ（Margo Houts）はThe IVP Women's Bible Commentary[768] の中で、神についての描写を例として挙げています。そこでは神は、イスラエル人を産む母、子どもたちに乳を飲ませる母、乳を飲ませている子を忘れない母、子どもたちを慰める母として、また幼い者たちを呼び、教え、抱き、癒やし、養う母として描かれています。[769]聖書の物語のさまざまな箇所で、神は、イスラエルが着る衣服を作る裁縫婦であり、出産に立ち会う助産婦であり、「その召使いがあわれみを求めて見上げる」権威ある女性であり、パン種をパンに練り込む女性であり、その力強い息づかいが神の力の象徴となっている産みの苦しみの中にある女性です。[770]イエスは、まもなくご自分を十字架につけることになる群衆に目を注がれたとき、こう叫ばれます。「エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。」[771]そうすることでイエスは、幼い者たちを翼の下で慰める雌鳥としての神という、繰り返し現れるイメージをご自分に当てはめておられるのです。[772]そのイメージは、しばしば鷲として特定されています。[773]また別の箇所では、神の激しい愛が、怒り狂った雌熊にたとえられています。「子を奪われた雌熊のように、わたしは彼らに襲いかかり、彼らを引き裂く。」[774]

私は今、子どもたちと一緒に聖書の選ばれた箇所を読み進めています。箴言8章――知恵を一人の女性として擬人化し、その女性を通して被造世界が生み出されるという章――を初めて読んだとき、私は子どもたちに、この章のどの部分がいちばん好きかと一人ずつ尋ねました。娘は、神が女性だというところが好きだと嬉しそうに言いました。私は優しく娘を正し、この箇所は実際には知恵を、神でも被造物でもない、何らかの仲介的な人物として語っているのだと説明しました。

しかし、さらによく考えてみると、パウロ自身が、そしてそれに続いて初期の教父たちや古代の神学者たちの多くが、この箇所では私たちがふだん認めている以上の

768. Margo G. Houts, "Images of God as Female," in The IVP Women's Bible Commentary, p. 356-58. Peppiatt, 第1章に引用。
769. 民数記11章12節、申命記32章18節、イザヤ書49章14–15節、66章12–13節、ホセア書11章1–4節
770. ネヘミヤ記9章21節、詩篇22篇9–10節、71篇6節、イザヤ書66章9節、詩篇123篇4節、ルカの福音書13章20–21節、イザヤ書42章14節
771. マタイの福音書23章37節
772. 詩篇17篇8節、36篇7節、57篇1節、91篇1、4節、イザヤ書31章5節
773. 申命記32章11–12節、出エジプト記19章4節、ヨブ記39章27–30節
774. ホセア書13章8節

ことが起こっていると指摘してきました。パウロは、イエスこそ「神の知恵」であり、「知恵と知識の宝がすべて隠されている」お方であると、はっきり教えています。[775]知恵の受肉そのものであるキリストは、神ご自身であり、また被造世界がそのお方を通して造られたお方でもあります。同じように、教父エイレナイオス（Irenaeus）は、この謎の女性を神の存在の一側面と解釈し、それは聖霊か、ことばとしてのイエス（ヨハネの福音書1章1–3節とヘブル人への手紙1章1–2節にあるイエスへの言及）を指していると考えました。確かなことは言えません。しかし、新約聖書の著者たちとエイレナイオスが「彼女」を御子と御霊に結びつけているという事実は、ここで女性的な仕方で描かれている神の神秘を消し去ろうとする私たちの試みに異議を突きつけるのです。

神は片言で語られる

宗教改革の神学者ジャン・カルヴァンは、聖書が神に「口、耳、目、手、足」を帰している仕方に取り組みました。彼は、これらは文字どおりに受け取るべきではないと説明しました。「乳母が幼児に対してするように、神は私たちに語るときに『片言で話される』のです。このような語り方は、神がどのようなお方であるかを明確に表すというよりも、私たちの小さな能力に譲歩して、神についての知識を伝えるものです。こうするために、神はご自分の高みからはるか下まで降りて来られなければならないのです。」[776]

神がご自身を人間的な仕方で私たちの心に示そうとされることを表す神学用語は、擬人化（anthropomorphism）と呼ばれます。これは人の形をとることという意味です。「譲歩（accommodate）」という言葉によってカルヴァンが言おうとしているのは、神が計り知れない高みから身をかがめて「片言で話され」、それによって有限な被造物である私たちが、神についてより多くのことを理解し始められるようにしてくださる、ということです。神には私たちに示したいことが山ほどありますが、私たちの言葉、思考形式、人間の経験の範囲で間に合わせなければならないのです。こうした譲歩は、多くのことを明らかにしてはいても、無限で聖なる神について知るべきことのすべてを捉えてはいません。神は、定義上、被造物の心の限界の中に閉じ込めるにはあまりにも偉大なお方だからです。確かに神は、ぶどう園の主人であり、身を守る岩であり、勇猛な戦士であり、夫であり、母であり、父で

775. コリント人への手紙第一1章30節とコロサイ人への手紙2章3節
776. John Calvin, Institutes of the Christian Religion, 1.13.1. Peppiatt, 第1章に引用。

あり、陶器師であり、羊飼いであり、建築者であり、王です。これらはどれも神について何か本当のことを語っていますが、神についてすべてを語っているわけではありません。そして私たちは、こうした比喩を行き過ぎたところまで推し進めるべきではありません。最良のたとえでさえ、神についてすべてを完全に伝えるわけではないのです。

同じように、神がご自身を男性として啓示されるとき、神は片言で話しておられるのです。文字どおりに性別を持ち、ほかの神々と性的な関係を持つことのできるヒンドゥー教の神々とは違い、ヤハウェは文字どおりの意味で男性なのではありません。神の男性性は一つのたとえです。神が用いられるどのたとえにも限界があります。たとえば、神の腕や目については語られていますが、男性性というたとえによって、神の腰から下までも想像するよう導かれることはありません。イエスは、神は霊であると教えられました。[777]ですから神は、それに伴う器官を備えた男性の体を持っておられるわけではありません。人間の比喩は、良くても、実際には言い表すことのできない神の、ある一部分を描写しようとする試みにすぎません。聖書にこれほど多く見られる神についての男性的なイメージは、教会が実際に夫を待つ処女の花嫁であるわけではないのと同じように、神が実際に性別を持ち、体を持ち、性的な存在であることを示しているわけではありません。それでも、このことは一つの問いへとつながります。

なぜ神の男性性がこれほど目立つのか？

もし神が実際には男性でないのなら、なぜ神は聖書の中で、ご自身を主として男性として啓示することを選ばれたのでしょうか？　なぜ神は、ご自身を「herself（彼女自身）」ではなく「himself（彼自身）」として私たちに啓示されるのでしょうか？

聖書を構成する書物のそれぞれは、私たちのために書かれましたが、必ずしも私たちに宛てて書かれたわけではありません。それぞれの著者――モーセ、アモス、ダビデ、ペテロ――は、特定の時代の特定の状況にいる特定の人々に宛てて書きました。彼らに宛てた神のことばを正しく理解して初めて、私たちのための神のことばを理解することができるのです。ですから、神のことばを理解するには、自分たちの文化の感覚や前提を脇に置き、彼らの文化の枠組みの中にできるかぎり入り込む

777. ヨハネの福音書4章24節

必要があります。ここから、私たちの答えの一部が出てきます。聖書のほとんどの箇所で、神は古代の家父長制の文化に男性として譲歩するのが最善だと判断されたのです。カナダの神学者ジョン・スタックハウスは、それがなぜなのかを考えるよう私たちに促します。彼はこう提案しています。

聖書の中で、神はご自身について二つの主要な点を人間に伝えようとしておられます。第一は、神が超越しておられ、全能であり、自存しておられるということです。すなわち、神はすべてのものの創造者[778]であり保持者であり、歴史の作者であり、義を支える方であり、地をさばく方であり、諸時代を完成させる方です。旧約聖書と新約聖書の文化の中にいる人々に、神はこの点をどのように伝えるのが最善だったでしょうか？　主、支配者、君主、裁き主、主人というイメージを用いることによってです。これらは、それらの文化においては一般に男性が占めていた地位のイメージでした。

神が私たちに伝えようとされた第二の、補い合う点は、神が人間を、そして被造世界の残りの部分をも、深く気にかけておられるということです。神は私たちを造り、私たちの面倒を見、私たちを訓練し、ご自身との新たにされた交わりへと私たちを引き寄せてくださいます。とりわけ、神は一つの民を選んで慈しみ、彼らと配慮の契約を結び、彼らとの間に、誠実で互いに献身し合う永遠の絆を築こうとしておられます。旧約聖書と新約聖書の文化の中にいる人々に、これをどのように伝えればよいでしょうか？　愛する者のイメージを用いることによってです。確かに親のイメージですが、それ以上に求婚者と配偶者のイメージです。主と愛する者という考えを組み合わせるには、確かにほとんどの場合、男性的なイメージが必要だったでしょう。求愛において男性が主導権を取り、（通常は花嫁の両親の同意を得て）花嫁に求愛し勝ち取らなければならなかった文化では、男性の求婚者のイメージが最も自然に機能しました。夫や父が家を治め、家族のために物質的に備え、家族を守った文化では、男性的なイメージが最も自然に機能したのです。

「片言で話す」とき、人は誤解されることがあります。譲歩は、神が負われるリスクです。神がご自身の自己啓示を私たちの思考形式や文化的な理解に合わせて譲歩されるということは、神がそれらを全面的に是認しておられるという意味ではあり

778. 男性の創造者としての神という考えについて、少し補足させてください。旧約聖書は、神が偽りの神々とは異なること、また被造世界に関わりながらも被造世界とは区別されることを強調しているので、男性の創造者という神の譲歩された啓示のほうが、女性の創造者である場合よりもよく伝わります。たとえば生殖において、母親は自分の内側から命を生み出します。そのため、この比喩では、創造者と被造物とのはっきりとした区別が失われてしまうことになるでしょう。

ません。たとえば、神がご自身を王として啓示されるからといって、君主制の政府が民主的な政府より優れているという意味にはなりません。それはただ、私たちのいるところで私たちに出会うために、神がどれほどのことまでなさるかを示しているにすぎないのです。

同じことは、神が――ここでもまた男性的なイメージを用いて――父と子としてご自身を啓示されることについても言えます。この父と子の関係は力強く豊かな比喩です。イエスがヤハウェを啓示するうえでどれほど効果的であるかを表し、旧約聖書がイスラエルと約束されたダビデの王の両方を「神の子」として描く仕方を表し、子と父が共有している親密な関係（そして、イエスの養子とされた兄弟姉妹である私たちが、父の配慮の中に迎え入れられる仕方）を表しています。しかし、これもやはり一つのたとえです。比喩のあらゆる側面が真実であるわけではありません。父は、性的な生殖によって生まれた子の文字どおりの父親ではないのです。

「あなたは男の子を産みます」[779]

これは、ガブリエルが処女マリアに語ったことばです。何千年も後になって、そのことばの成就――イエスが娘ではなく息子であること――は、神が家父長制を是認しておられるという結論に導く可能性があります。私たちの唯一の救い主であり主であるお方は、永遠に男性なのです。

使徒ヨハネは、神の最も偉大な啓示の行為を描写しようとして、「ことばは人となって」と言います。[780]神が人類に与えられた最大の贈り物は、一つの人格（Person）です。地上でのあの33年間、ナザレ出身のユダヤ人として私たちと共におられたイエスの肉体を伴う臨在は、神がご自身を啓示してこられたほかのあらゆる方法にまさっていました。イエスは、仲介を経ない、神の直接の伝達だからです。これは文字どおりの擬人化です。神は実際に目と手と口と男性の体をとられたのです。

それでは、なぜイエスは男性だったのでしょうか？[781]

おそらく、家父長制の世界においては、そのほうが、教会の主であり夫であるというイエスのアイデンティティと、養い守るイエスの力とをよりよく表したからでし

779. ルカの福音書1章31節で、ガブリエルが処女マリアに語ったことば
780. ヨハネの福音書1章14節
781. 以下に続くこの問いへの答えについて、“Rediscovering Scripture’s Vision of Women”の第1章で助けてくれたルーシー・ペピアットに感謝します。

ょう。イエスの男性性はまた、メシアを新しい人類のかしら（新しいアダム）、新しい出エジプト（新しいモーセ）、新しい王国（新しいダビデ）として示す旧約聖書の主題を、頂点へと導きます。イエスの男性性は、私たちのしもべになるというイエスの選択の衝撃を下支えしています。神の御子が入って来られた名誉と恥の文化においては、女性はすでに男性に従属させられていました。男性の救い主のほうが、その文化に内在する権力構造をよりよく打ち破ることができました。イエスは、ご自分の権威を脇に置き、自ら進んでしもべの役割をとることによって救われるのです。私たちすべてを救い、私たちすべてに仕えるために、ご自分の力を捨てるしもべの役割を。

こうした聖書のモチーフや文脈上の現実を超えて、イエスの男性性の意味を誇張すべきではありません。とはいえ、イエスを両性具有の存在として扱うべきでもありません。それでも、神の御子が私たちの一人となられたとき、御子がとられたのは男性性というよりも、むしろ人間の本性でした。神学的に、教会は常に、イエスがとられたのは男性のセクシュアリティというよりも、男性であれ女性であれ、その全体における人間の本性であったことを強調してきました。だからこそイエスは、十字架につけられ復活した地上の体において、男性も女性も救うことがおできになるのです。そしてだからこそ、男性も女性も、イエスの霊的な体である教会の一部となることができるのです。

神の御子の意味を、その身体性と地上の生涯に縮小してしまうのは間違いです。福音書をざっと上空から眺めるように読むことはできても、それでもイエスについて非常に多くのことを見落としてしまうかもしれません。イエスは、私たちが神について知っている最も重要なことかもしれません。しかし、私たちは神の御子のことを本当にどれだけ知っているでしょうか？　イエスと共に歩き、語り合った弟子たちでさえ、自分たちは目の前にいるお方の表面をなでているにすぎないことに気づくようになりました。変貌の出来事を考えてみてください。イエスが彼らの目の前で姿を変えられる前には、彼らはイエスを、奇跡を行うユダヤのユダヤ人として知っていたかもしれません。しかしその後、彼らは「私たちはキリストの威光の目撃者でした」と言い、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」と言うようになります。[782]ルーシー・ペピアットは、弟子たちの体験とそれが私たちにとって持つ意味について、こう考察しています。「イエスには目に見える以上のものがある、と言えるかもしれません。……ですから私たちは、肉となって来られたことばが肉に縮小されてしま

782. ペテロの手紙第二1章16節とヨハネの福音書1章18節

わないような仕方でイエスを表すよう、注意しなければなりません。……要するに、今のところ私たちは、自分が一部分しか知らず、鏡にぼんやり映るものを見ているにすぎないことを知っているのです。」[783]確かに地上のイエスは神の主要な自己啓示です。しかし、イエスの地上の体が神の唯一の自己啓示であるというのは、決して真実ではありません。神の御子には、イエスの男性性よりもはるかに多くのものがあります。この事実は、教会における女性のリーダーシップに対するよくある反論について、注意深く考える助けとなります。

男性の指導者のほうが、男性であるキリストをよりよく表すのか？

一部のプロテスタント教会と、ほとんどのカトリック教会は、女性を教会の上級指導職や司祭職から締め出すために、次のような論拠を挙げます。「男性は、その男性性のゆえに、教会に対してイエスをよりよく表すことができる。」

カトリック教徒がこの見解を受け入れる理由は、彼らの伝統では司祭が神と会衆との間を仲介する役割を果たすからです。とりわけ聖餐（ミサ）を司式する際に、司祭はキリストを表すのです。[784]

たとえ私が、牧師や司祭が特別な仕方でイエスを表すというこの考えに同意していたとしても（実際には同意していません。聖書的な根拠がないからです）、その論拠はやはり成り立たないでしょう。なぜ教会の指導者において描き出されなければならないのが、イエスの男性性であって、イエスのユダヤ人性（そうすると異邦人が締め出されます）や、健常な体（そうすると障がいのある人々が締め出されます）や、独身であること（そうすると既婚者が締め出されます）ではないのでしょうか？ （ちなみに、このリストの最後の項目は、たまたまカトリックにおける司祭の独身制の主要な論拠となっています。[785]）カトリックはその教理を聖書からだけでなく教父たちからも引き出していますが、この考えは教父たちの著作にさえどこにも見当たりません。[786]

783. Lucy Peppiatt, Rediscovering Scripture's Vision for Women, 第1章。
784. この教理は「in persona Christi」と呼ばれています。
785. この論拠は、“Finally Feminist”におけるジョン・スタックハウスに負っています。
786. 「叙階された奉仕職についての in persona Christi の神学の初期の例として引き合いに出されてきた箇所が一つ（キプリアヌスに）ありますが、これはほぼ間違いなく誤読です。」ラッツィンガー枢機卿（Cardinal Ratzinger）は“Responsum Ad Propositum Dubiu”の中で、この教理は「書かれた神のことばに基づいており、初めから教会の伝統の中で絶えず保たれ、適用されてきた」と主張していますが、この主張には検証可能な裏づけがありません。この教えは、中世にトマス・アクィナスによって初めて導入されたものです。（William Witt, Icons of Christ, 第10章。）

最も重要なことに、男性の指導者のほうが男性であるキリストをよりよく表すという主張は、キリストの代理人としての司祭／教会指導者と、キリストの再現、つまりキリストに身体的に似ていることとしての司祭／教会指導者とを区別できていません。指導者や説教者がイエスに身体的に似ている必要があると言う聖書的な裏づけはまったくありません。一方で、どんな人でもイエスの代弁者としてイエスの代理人となりうると言う聖書的な証拠は豊富にあるのです。[787]

787. たとえばペテロの手紙第一4章11節を見てください。そこでは「anyone」（だれでも）という、性別を問わない言葉が使われています。

付録2：堕落前のアダムとエバ（続き）

読者が、聖書の物語部分はこれこれのことを教えていると前もって決めてしまうと、実際にはそう教えていなくても、その箇所の明確な教えを超えるさまざまな推論を思い巡らすことによって、前もって出した結論を裏づけることができてしまいます。第4章では、補完主義の学者たちが創世記2–3章に読み込む、よく知られた五つの推論を取り上げて批判しました。この付録では、さらにいくつかのよく見られる議論に答えます。

「神はご自身のかたちに『MAN（人）』を造られた」

一部の補完主義者は、人類は（創世1:27で）「man（人）」と呼ばれているのだから、神は導く者として女性ではなく男性を好まれるに違いないと主張します。レイ・オートランド（Ray Ortlund）はこう論じます。「神が人類を『man』と名づけられたことは、男性のかしら性をそっとささやいています。」しかし、この議論は、証拠として挙げる聖句をその文脈の中で読んでいません。第一に、文学的な文脈を見落としています。確かに創世記1章27節は、「神は人（man、あるいはmankind）をご自身のかたちに創造された」と言っています。しかし同じ節が、「man」には男性と女性の両方が含まれることをはっきりさせているのです。[788]

第二に、男性中心的（androcentric）な文脈を見落としています。神のことばは、典型的な古代近東の文化の言語形式をとって私たちに届いています。その文化では、男性名詞が両方の性を表すためにしばしば使われました。ここ数十年で、「mankind」という語は、より包括的な「humankind」という語に置き換えられてきました。それは、私たちが新しい時代に生きているからです。言語そのものから男性中心的な傾向が刈り取られつつある時代です。これに対して、最初の読者たちは、男性中心的な言語が疑われることもなく当たり前だった文化の中に生きていました。

第三に、論理に欠陥があります。創世記1章のヘブル語ha’adam（アダムという名前や、男性を表す語と混同してはなりません）は人類（humankind）を意味する

788.「man」（あるいは「mankind」）という名が両方の性を指している創世記5章2節も参照してください。

のであって、「男類（malekind）」を意味するのではありません。もし神がha'adamを「男類」の意味で用いておられるのなら（実際はそうではありませんが）、女性は単なる付け足しか、人間に満たない何かになってしまいます。しかし今日、そう信じている補完主義者はいません。1960年代より前には、女性は劣っていると信じられていましたが、今はもうそうではありません。そうであれば、オートランドのように、これは女性の劣等性を意味するのではなく、ただ女性の従属的な立場を意味するだけだと論じるのは、奇妙で、恣意的で、一貫性に欠けることになります。

アダムは人類を代表する

まだ堕落していない園には、アダムがただ一人の人間として存在していた時期があります。ですからその時、アダムは後に続くすべての人類――「アダムにある」すべての人――を代表しています。実際、創世記2章からは、エバでさえ「アダムにあった」という洞察を引き出すことができるかもしれません。たとえば、エバのからだはアダムのからだから取られました（私たちのからだもそうです）。また、神はエバが存在する前に男に命令を与えられましたが、エバはそれを守らなかったことについて神に責任を問われました。そして、創世記3章で死を、続いて追放を宣告されたのはアダムだけでしたが、エバも恥を負って園を出て、ちりに帰りました。明らかに、「アダムにあって」エバも死んだのです。

おそらくこのために、パウロの書簡では、アダムの代表としての役割が特別な象徴的意味を帯びるのでしょう。パウロはそこで二度、アダムが自分の選択においてすべての人類を代表した役割を強調しています。「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされた」、そして「アダムにあってすべての人が死んでいるように……」[789]

では、パウロはアダムを、その失敗において人類をただ一人で代表した者と見ているのでしょうか？　そうではないかもしれません。パウロは、エバがその後の人類を共に代表したという考えを排除していないのかもしれません。[790]しかし、仮に

789. ローマ人への手紙5章9節、コリント人への手紙第一15章22節
790. おそらくパウロがエバではなくアダムを選んでいるのは、アダムがすべての人類の代表だからではなく、アダムとイエスを比較しているからであり、同じく男性であり、その種の最初の者である方を選ぶほうが理にかなっていたからでしょう。また、パウロは、アダムがアダムとエバへと「増える」前のアダムのことを言っているのかもしれません。アダムもエバも罪を犯しますが、「アダム」は「アダムとエバ」、つまり人類の一つに結ばれた親を短く言ったものなのです。

パウロがアダムを唯一の代表者としてほのめかしていると考えるとしても、それをどう理解すべきでしょうか？　だからアダムは――一部の補完主義者が主張するように――人類の、そしてエバの指導者なのでしょうか？

いいえ。アダムの代表としての役割は、エバに対する機能上の権威とされるものについて、何も語っていません。創世記にアダムの特別な役割を示すヒントがあるとすれば、それは、彼がまさに最初の人間であり、私たちすべて――男性も女性も、最初の女性エバも含めて――の原型だということです。

先頭を走る者であるということは、彼がその後のすべての人間の王である、あるいはエバの王であるということを意味しません。アダムが代表であったことから、彼が人類の（あるいはエバの）指導者であったと推論するのは、神学上のカテゴリーを誤って混同することです。代表することは、導くこととはまったく別のことです。

アダムはエバを代表するかもしれませんが、エバや私たちを治める摂政ではありません。例を挙げましょう。若いダビデがイスラエルの代表としてゴリヤテと戦った時、彼はまだイスラエルの指導者ではありませんでした。指導者はサウルでした。（ダビデが王になるのは、何十年も後のことです。）同じように、アダムは、エバの（そしてほかのすべての人の）堕落した代表者あるいは原型ではあっても、エバの（あるいはほかのだれの）統治する摂政でもありませんでした。

最も大切なことは、アダムはもはや私たちの代表者ではないということです。どちらの箇所でも、パウロは、私たちの堕落した代表者としてのアダムと、私たちの復活した先駆者としてのキリストとを対比しています。死と家父長制はアダムの堕落に端を発したのかもしれませんが、男女の関係の贖いは、イエスが死者の中からよみがえられたことにその起源をもつのです。

エバに対するアダムの権威を支持するその他の議論

アダムが堕落以前に何らかの形でエバを管理する立場にあったと信じる神学的な前提から、さらに四つの議論が生まれています。いずれも推測に基づくものです：

園で語るのはアダムだけである。アダムは、エバは自分の骨からの骨、自分の肉からの肉だと宣言し、エバは何も答えません。一部の補完主義者は、これはアダムがエバを導くことを意味すると言います。アダムが関係を始め、エバはその主導を受

け入れる、というのです。しかし、この見方は物語の流れを見えにくくしています。エバが造られる前、アダムは自分にふさわしいパートナーを探していました。ついに彼女を見つけた時、彼に言いたいことがあったのは当然です！　彼の言葉の中には、指導や権威を示すものは何もありません。あるのは、相手を認める思いと喜びだけです。それ以上のことを読み取るのは、まさにそのとおりの意味で、本文が与えている以上のことを読み込むことです。それに、創世記2章（堕落前）でアダムだけが語っていることが女に対する彼の指導を明らかにしないのは、創世記4章（堕落後）でエバだけが語っていることが男に対する彼女の指導を表さないのと同じです。

神は命令をエバではなくアダムに与えられた。補完主義者は、明言されてはいないものの、エバが来た後、神から受けた命令を妻に教える責任がアダムにあったように思われ、したがって彼が彼女の指導者だと論じます。たとえそれが本当だとしても、情報を――自分が聞いた命令であっても――伝える立場にあることは、それ自体で、伝えた相手を管理する立場に自分を置くことにはなりません。この論法でいけば、夫より先に福音を聞いた妻は夫の指導者だということになります。この議論の最大の問題は、それが事実ではないということです。ヘブル語の言い回しを注意深く読むと、創世記3章3節は、神が以前アダムに与えた命令を、今度はエバのいるところで繰り返されたことを示唆しています。エバは蛇にこう言っているからです。「神は確かに、『あなたがた〔複数〕は実を……食べてはならない。……あなたがた〔複数〕はそれに触れてもいけない。さもないと、あなたがた〔複数〕は死ぬ』と言われました。」

創世記2章24節は、結婚するために「男は父と母を離れ」ると言っている。一部の補完主義者は、これは男が権威の下から出て、新しい家族のかしらになることを意味すると言います。しかし、男が父と母を離れるというのは、なんと奇妙なことでしょう。古代の家父長制の文化では、夫の権威を認めて家を出るのは女性のほうでした。この本文は、それを逆転させているのです。はっきりしているのは、男は以前の家族において、父と母の権威の下にあったということです。

堕落の本質は性別役割の逆転であった。この議論は、補完主義の創始者ジョージ・ナイトが1977年に最初に唱えたもので、第7章の見出し「アダムではなく、エバがだまされた」のところで扱っています。ここで言っておきたいのは、園での悲劇は、エバがアダムの下に従属者として立つべきだったのに、彼の位置を奪ったことではない、ということです。正しく読めば、悲惨だったのは、エバがパートナーで

あり助け手としてアダムと並んで立つべきだったのに、彼に毒を食べさせてしまったことなのです。

明示されていることが、推論できることを制限すべきである

少し視野を広げて、この付録と第4章「楽園で結ばれたパートナーシップ」の最も大切な洞察を見てみましょう。

聖書の物語は、とりわけ誤って解釈されやすいものです。実際、創世記2章と3章においてアダムがエバを導いていたとする補完主義の議論は、すべて、わずかな記述しかない物語に読み込まれたものです。

ありがたいことに、聖書の物語の著者たちは、解釈の歯止めとなるものをしばしば書き込んでいます。創世記1–3章の場合、物語の中に織り込まれた発言があり、それが、男性と女性について物語から何を推論してよく、何を推論すべきでないかの枠組みとなっています。

男女の関係について、創世記1–3章がはっきりと教えていることを考えてみてください：

- 男は、女と並んで地を治めるように造られました（1:26–28）。
- 女は、エデン／地を治めるにあたっての男のパートナー、また対になる者として与えられました（2:18、23–25）。
- 堕落の後、男は女を支配するようになります（3:16）。

したがって、創世記の物語の中にあるとされるヒントに基づいて、創造主の理想として女性を男性に従属させる議論は、すべて捨てられるべきです。

これが何を意味するか、おわかりでしょうか？　グルーデムは、相互主義者は「男性であるというだけで……男性が指導的役割を持つのは公平ではない」と不平を言うかもしれないが、「もしこれが初めからの神による役割の割り当てに基づいているのなら、それは公平である」と言います。[791]

しかし、もし神が「初めからの」そのような権威と服従の「役割」を何も割り当てておられないなら、それは公平ではありません。特別な状況上の理由もないのに、教会が女性だからという理由で女性を指導から締め出すなら、それは、見ている世

791. Wayne Grudem, Evangelical Feminism and Biblical Truth, ch. 1.

に対して、私たちが仕えていると主張する神――「えこひいきをなさらない」神――の姿を悪く映し出すことになります。[792]

792. ローマ人への手紙2章11節

付録3：KEPHALEの意味

パウロがギリシア語kephalēを用いる時、それは何を意味しているのでしょうか？現代英語では、比喩として使われる「head」（頭）は、しばしば権威を意味します。CEOは会社のhead（長）であり、指揮官は小隊のhead（長）である、というようにです。さらに、私たち現代人は、文字どおりのからだの文字どおりの頭を思い浮かべる時、脳を収めている頭は、それゆえにからだの司令塔だと考えます。頭は神経系を通して、からだに命令を送ります。私たちが問わなければならないのは、パウロがkephalēという語を選んだ時に何を意味していたのか、そして最初の読者たちがそれをどう理解したのか、ということです。

あらゆる立場の学者たちの間で何年も続いてきた議論の応酬をたどると、グルーデムは、この語はほとんど常に「上に立つ権威」を意味すると論じ、ほかの学者たちは、その意味になることはほとんど、あるいはまったくないと論じています。私の結論はこうです。パウロの時代には、そして確かにパウロの用法においては、この語が権威を含意したのはまれな場合だけでした。[793]すべての比喩と同じように、

793. 1世紀以前と1世紀のギリシア・ローマ世界で、ギリシア語kephaleはどのように使われていたのでしょうか？ ほとんど常に、それは文字どおりの身体の頭を指していましたが、比喩的に使われることもありました。最も優れた学者たちの間でも、この語の比喩的用法については意見が分かれています。主な理由は、この比喩としての語が実に多様に使われているように見えるからです。1）1世紀に最も一般的だったのは、最も目立ち、代表的な役割を果たす人を指す用法です（人の頭がからだ全体を公に代表するのと同じように）。この意味では、「最も目立つ」という意味になります。2）それよりまれに、「権威」ある人を指しました（脳がからだを指揮するのと同じように）。3）これもまれですが、養いや存在を与える人を指しました（口がからだを養うように、あるいは、からだのない頭が死ぬように）。この意味では、「源」という意味になります。では、パウロはこの語をどう使ったのでしょうか？ 1970年代まで、ほとんどの聖書学者は、パウロは「権威」を意味していると思い込んでいました。しかしそれは、1）ラテン語、ドイツ語、英語（歴史神学が主に営まれてきた言語）では、頭を表す語が権威ある人を指すこと、そして2）教会が社会と同じく1960年代まで女性の劣等性を信じていたため、女性の従属が疑いもなく前提とされていたこと、によると考えられます。ゴードン・フィーのコリント人への手紙第一についての代表的な注解書に象徴されるように、前世紀の最後の四半世紀に、学者たちの意見は「源」という意味へと大きく移りました。しかし学者たちの意見は再び「目立つ者」という意味へと移っています。そのことは、同じく権威ある、アンソニー・ティセルトンのコリント人への手紙第一の注解書に表れています。しかし、ティセルトンは、パウロが「権威」を意味していないことをフィーと同じくらい確信しているものの、「源」より「目立つ者」を選んでいます。とはいえ、彼と共同研究者のチームがこの選択をしたのは「わずかな」差によるものだったと認めています。私はすべての議論を学んできましたが、この語が「権威」を意味しないという点でフィーやティセルトンに同意しますし、パウロの著作以外では、1世紀にこの語が「源」の意味で使われることはまれだったというティセルトンの観察にも共感します。しかし、シンシア・ウェストフォールの最近の著作“Paul and Gender”に助けられて、私は、パウロが「源」、すなわち「ある人がそこから自分の存在や供給を得る、その相手」という意味で使っているというフィーの見解に同意

この語も文脈によって異なる意味を持ちえますし、ある文脈では権威の考えが含まれているのかもしれません。それでも、それがなぜきわめてまれな意味なのかを示す議論を紹介させてください。

パウロの時代、人の身体の頭を表すギリシア語は、英語の「head」とは異なる比喩的意味を持っていました。パウロが生まれる前の数世紀、頭はからだのいのちの源と理解されることがありました。アリストテレスは、頭はからだ全体にとって泉、あるいは供給の源のようなものだと教え[794]、多くの医学著述家もこの見方を共有していました。たとえばピタゴラスは、身体の頭は男性の精液の源であり、それが脊髄を通って生殖器へ下りていくと教えました。ギリシア語を話すユダヤ人教師フィロンは、頭は天から力を引き出し、そのいのちの力をからだ全体に分け与えると主張しました。[795]ですから、古代ギリシア人が、ある人をほかの人や人々の集団の「頭」と言う時、それは必ずしもその人を権威者として指していたのではなく、むしろ、その人がいのちの源、あるいは始祖であるありさまを指していた可能性が高いのです。

人間の頭を表すヘブル語はroshで、英語と同じように、ヘブル語でも比喩的に用いられると権威を意味しました。そこで興味深いのは、パウロの時代より前に、ヘブル語聖書がギリシア語に翻訳されていたことです（これを七十人訳、またはLXXと呼びます）。シンシア・ウェストフォールは、LXXの中でroshが権威を意味することが確実に確認できる171か所を調べ、ギリシア語の翻訳者たちがkephalēという

するようになりました。パウロのこの語の比喩的用法は、明らかに斬新なものでした。とりわけ、ほかのすべての古代ギリシア語の著述家とは違って、彼はそれを独自に男性と女性の関係、そして夫と妻の関係に当てはめたからです。また、コリント人への手紙第一11章3節とエペソ人への手紙5章23節の両方で、「源」と取るのが、その後に続く箇所を最もよく説明します。コリント人への手紙第一11章3節には「目立つ者」という含みもあるかもしれません。パウロはそれに続く節で、文字どおりの頭と比喩的な頭に払うべき敬意を強調しているからです。エペソ人への手紙5章25節でパウロは、古代ギリシア・ローマの夫をkephaleと呼んでいます。確かに、これらの古代の夫たちは妻を管理する立場にありましたが、語そのものと、その語が指す人物とを混同してはなりません。詳しくは第8章の「見解4：贖われたpaterfamilias（家長）としての夫」を参照してください。

794. Aristotle, Problems 10 867a

795. 「徳ある者は人類のkephaleとなり、ほかのすべての者は、頭の力からいのちを引き出す手足のようになるであろう。」（Philo Det. Pol. Ins. 85）

語を使ったのは4回だけで、ほとんどの場合、権威をよりはっきり表す別のギリシア語を選んでいることを指摘しています。[796]

考えてみてください。ギリシア語の翻訳者たちは、ヘブル語roshを読み、それが身体の頭を指している場合にはkephalēを選びます。ところが、roshが比喩的に権威ある人を指している場合の97.7%では、代わりに別のギリシア語を選んでいるのです。[797]これは、パウロの時代の直前のギリシア人の考えでは、権威はkephalēという語のよくある比喩的意味ではなかったということです。そうでなければ、それが最も自然な語だったはずです。このことは広く知られています。現存する最も網羅的な古代ギリシア語辞典であるThe LSJ Greek–English Lexiconは、48の比喩的意味の可能性を挙げていますが、その中に権威は一つもありません。最近のCambridge Greek Lexiconもこれに倣っています。[798]

パウロがこの語を比喩的に用いているいくつかの箇所を調べると、彼が明らかにこのことを知っていることがわかります。小アジアで離散のユダヤ人（ディアスポラのユダヤ人）として育ったパウロは、ギリシア語の慣用表現と考え方に通じていたはずです。また彼は、ギリシア語を話す人々に向けて手紙を書いています。この語を比喩的に用いる唯一の聖書記者であるパウロは、ほとんどの場合、頭とからだの類比の一部としてこの語を使っており、そこではイエスが、教会が救いと御霊によって有機的に結びついているいのちの源として語られています。パウロがエペソ人への手紙4章15–16節でこれをどのように表現しているか、聞いてください。「私たちはあらゆる点において成長し、かしらであるキリストの成熟したからだとなっていきます。キリストによって、からだ全体は……成長し、愛のうちに建てられるの

796. グルーデムの最新の数え方では14か所です。しかし、ウェストフォールは私とのやり取りの中で、こう述べています。「グルーデムは、パウロが、roshが権威を意味する箇所でkephalēと訳されたLXXの箇所の影響を受けていると論じています。ヘブル語聖書でroshが『権威』を指していると思われる171例のうち、kephalēと訳され、異読のない箇所は四つしかありませんでした（Ⅱサムエル22:44、詩篇18:43〔LXX 17:44〕、エレミヤ31:7〔LXX 38:7〕、哀歌1:5）。これらの用例は、七十人訳の翻訳者たちによる不適切な訳語の選択（ヘブライズム）かもしれませんし、中には古代の王とその民や領土との共生的な関係を反映しているものもあるかもしれません。これら四つの箇所は、パウロのkephalēの用法とは、間テクスト的にも意味論的にもつながりがありません。ですから、LXXの箇所がパウロのkephalēの用法を説明するというグルーデムの議論には説得力がありません。」R・S・サーヴィン（R. S. Cervin）の論文もウェストフォールの結論を支持しています。「LXXは、kephalēが指導者や権威を含意することの証拠として過大評価されてきた。」 www.bit.ly/3GOWjqB を参照してください。

797. 七十人訳の翻訳者たちには、ヘブル語本文に近くとどまるために、字義どおりの訳を好み、ギリシア語の語をふだんの意味を超えて引き伸ばす強い傾向があったにもかかわらず、そうなのです。

798. Philip Payne, Man and Woman, One in Christ, p. 121. さらに、12世紀以降の古典世俗ギリシア語の辞書は、kephalē（「頭」）が「源」を意味することを一般に挙げていますが、「権威」を意味する新約聖書以前の用例は一つも挙げていません。

です。」次に、コロサイ人への手紙2章19節でパウロは、私たちには「かしらとのつながり」があり、「このかしらから、からだ全体は、節々と筋によって支えられ、つなぎ合わされて、神に育てられて成長して」いくと言います。言い換えれば、パウロが頭とからだの比喩を解き明かす時、かしらであるイエスは、ご自分のからだである教会に、特に成長とつながり、愛といのち、養いと力を与えておられるのです。脳の実行機能について私たちなりの理解を持つ現代人は、パウロもイエスが指導と方向づけを与えることに何か触れるだろうと思い込みます。しかし、頭についてパウロなりの理解を持つパウロは、そうしていません。

グルーデムは、頭とからだの比喩が「源」の考えを含みうることを認めながらも[799]、kephalēがめったに権威を意味しなかったという考えに反論し、軍の将軍や王が軍隊や民のkephalēであるという文献上の例を、印象的なほど数多く集めています。しかしそのために、彼は主に後代の文献に頼っています。それに、古代ギリシア人はおそらく、自分たちの指導者を自分たちのいのちの源でもあると理解していました。獣や人の頭を切り落とせば、死んでしまいます。軍隊や国も同じです。将軍や王を殺せば、民は滅びます。王や将軍が頭であるのは、その王国が彼らのもとで一つにまとまっているという意味においてです。パウロは、エペソ人への手紙1章10節で、kephalēに関連する語をこのように用いてイエスを指しているようです。そこで彼は、神のご計画は、すべてのもの（たとえばユダヤ人と異邦人）を一つに集め、一つのかしらのもとにまとめること、すなわちイエス・キリストのもとにまとめることだと言っています。もちろんイエスは権威ある主ですが、ここでパウロは、かしらの比喩を用いて、イエスの権威ではなく、ご自分の民を一つに結び合わせるいのちの源としての役割を際立たせているようです。[800]同様に、パウロはコロサイ人への手紙1章16–17節で、イエスは「万物に先立って存在し」、「万物は御子にあって成り立って」おり、「からだである教会のかしら」であり、「初め」である、と言っています。これらの描写は、イエスの支配に焦点を合わせているのではありません。イエスの統治とは異なる、イエスの働きの諸側面を描いているの

799. 「私たちが口を通して、つまりある意味で頭を通して栄養を受けるのは、生活の基本的な事実であり、この考えは古代世界にとっても明白でした。したがって、『head』（頭）が『源』を意味する比喩が生じるという考えは、ありえないことではありません」と、グルーデムは Evangelical Feminism and Biblical Truth（p.567）で書いています。
800. 神学者たちがパウロの「契約上のかしら性（federal headship）」の教えと呼ぶものにおいて、人類には二人の「かしら」がありえます。アダムか、イエスかです。最初の罪人として、アダムは私たちの指導者ではありませんが、不幸なことに私たちの源です。私たちは、罪に縛られた彼の立場と堕落した性質を受け継いでいます。ありがたいことに、イエスは贖われた人類の新しいかしらとなられます。私たちはイエスから、高められた立場とイエスに似た姿を受け継ぎます。

です。とはいえ、そのどれもが、イエスが治める能力と資格を持っておられることを支えています。それがパウロの言いたいことであり、だから彼は、「それは、すべてのことにおいて第一の者となるためです」と言うのです。パウロはここで、支える方、いのちの源、創始者としてのイエスという考えを、その至上性についての言明と並べて置いていますが、私たちはその意味を単純に混同してはなりません。教会の、そしてイエスにあって始まりイエスにあって成り立っているもののかしらとしてのイエスは、ご自分の民の、そしてイエスを通して造られイエスによって支えられているものの主としてのイエスと、まったく同じではないのです。

では、パウロがその意味を混同しているように見える二つの箇所――エペソ人への手紙1章22節とコロサイ人への手紙2章10節――についてはどうでしょうか？　これらの箇所でさえ、パウロは、権威ある方としてのイエスという考えとkephalēとしてのイエスという考えを、すぐ隣に並べて保ってはいるかもしれませんが、必ずしも両者を融合させてはいません。[801]

エペソ人への手紙1章22節には「すべてのものの上に立つkephalē」という句があります。「上に」にあたるギリシア語（hyper）は、ふつう「～の益のために」を意味します。「キリストは私たちのため（hyper）に、ご自分をささげ物として献げてくださいました」（エペソ5:2）のようにです。しかしエペソ人への手紙1章22節では、それは「～の上に」を意味しても、「～の」を意味するのではありません。それは、すべてのものの上にある王座に着いたイエスという空間的な像を導入しています。1章18節–2章6節の文脈でこの節を読む時に驚かされるのは、王座に着いているのが、かしらとしてのイエスだけではなく、イエスと教会、つまりかしらとからだだということです。パウロは、すべてのものの上に立つkephalēとしてのイエスは「教会のため」であり、「教会はキリストのからだ」であると言っています。すべてのものは「キリストの足の下に」あります――しかし私たちがその足なのです。要するに、ここでイエスがkephalēであるとは、特にイエスが私たちに対して、あるいはすべてのものに対して（もちろんイエスはそうなのですが）権威を持っておられることを意味するのではありません。むしろそれは、すべてのものの正当な主であるイエスが、その権威を私たちと分かち合っておられることを説明しているのです。結局のところ、王の頭だけでなく、王のからだ全体が統べ治めるのですから。

801. ここで私は、シンシア・ウェストフォールに助けられています。彼女は、エペソ人への手紙1章22節とコロサイ人への手紙2章10節におけるkephalēの意味についての私の質問に、私とのやり取りの中で、“The IVP Dictionary of Paul and his Letters”第2版のために書いた論考の一部を抜粋して答えてくれました。

コロサイ人への手紙2章10節は、イエスがすべての支配と権威「の」（いくつかの訳のように「上に立つ」ではなく）kephalēであることに触れています。これは、イエスが教会以外の何かのkephalēであると語る二つの箇所のうちの一つです。コリント人への手紙第一11章3節では、イエスは「すべての男」のkephalēであると言われています。これは、神がキリストを通してアダム（そして、そこから派生して彼の息子たち）を造られたことを意味します。同様に、コロサイ人への手紙2章10節で、すべての支配と権威のかしらとしてのイエスは、1章16節を受けています。そこでは、これらの同じ支配と権威がキリストを通して造られ、それゆえキリストにあって成り立っていると言われています。ですから、それらのかしらとして、イエスはあらゆる霊的な力の創造者である源なのです。だからこそパウロは、コロサイの人々は自分たちが満たされるために御使いではなくイエスに目を向けるべきだと言うのです。創造者であるキリストは、御使いという被造物にさえできないことを、私たちのためにしてくださるからです。

それぞれの箇所は、その文脈に特有の、kephalēという語の微妙な意味合いを引き出す傾向があります。たとえばアラン・ジョンソンは、kephalēという語についての、あらゆる立場からの17の主要な研究のメタ研究を行い、こう結論しています。「比喩としてのkephalēは、異なる文脈では異なる意味を持ちうる、という合意が広がりつつあるようです。」[802]ここから、他者のkephalēとしての将軍や王というグルーデムの例の問題点が見えてきます。パウロは、kephalēを人間関係に当てはめる時、それを男性と女性の関係にだけ当てはめています。王とその臣民、将軍とその軍隊、親とその子どもたち、主人とその奴隷の関係には当てはめていません。これらはまったく異なる言語使用域（レジスター）であり、それぞれの使用域が異なる意味の色合いを引き出します。実際、パウロの時代までのすべての古代の著述家の中で、この比喩を男性と女性に当てはめたことが知られているのはパウロだけです。コリント人への手紙第一11章3節では、アダムがエバのkephalēであると言われ、エペソ人への手紙5章25節では、夫が妻のkephalēであると言われています。

しかし、この二つの場合でさえ、パウロはこの語をまったく同じようには使っていません。コリント人への手紙第一11章3節では、エバがアダムのからだから造られたことに触れています。ですからアダム（とその息子たち）は、エバのうちにある自分自身のかたちを敬うべきであり、エバ（とその娘たち）は、自分の起源である

802. www.bit.ly/3GJ9Vnc を参照してください。

アダムを敬うべきです。ですからここでは、それは権威ではなく、敬われるべきいのちの源を意味しているようです。（詳しくは第6章を参照してください。）

そしてエペソ人への手紙5章25節で、パウロは、ご自分のからだのかしら、すなわちいのちの源としてのイエスと、妻のいのちの源としての夫とを並行させています。ですから夫は、「一体」である妻を、頭が自分のからだを正しく養い、世話するのとまったく同じように愛し、世話すべきです。ジョン・パイパーでさえ、（それと気づかずに）ここでのkephaleがこの意味をも含みうることを認めています。[803]ですからここでは、それは権威ではなく、深く親密に結びついた、世話と奉仕の源を意味しているようです。（詳しくは第8章を参照してください。）

803. “Recovering Biblical Manhood and Womanhood”の第1章の脚注15で、ジョン・パイパーは一貫性を欠いた瞬間に、男性が主に妻を経済的に養うべきだという聖書外の主張に、聖書的な根拠を与えようとしています。彼は、エペソ人への手紙5章25節で神が男を「かしら」と呼んでいることを引き、だから男は、イエスが教会を養うのと同じように妻を養うべきだと言います。彼はこう書いています。「かしらという像は、キリストが養う方であることを意味します……」皮肉なのは、パイパーが、間違いなく無意識のうちに、kephaleがほかの意味と並んで、結局は源あるいは供給者をも意味しうることを認めている点です。彼が代弁している補完主義は、これを断固として否定しているにもかかわらず、です。

付録4：女性は教えてもよいか？

テモテへの手紙第一2章12節の補完主義の読み方を厳格に適用すると、女性が教会で男性に教えることは許されません。残念なことに、ゴスペル・コアリション（The Gospel Coalition）はこの見解を取っています。[804]多くの教会は、女性が小グループや祈祷会で教えることを許さず、毎週の礼拝の集まりではなおさら許しません。礼拝で女性が聖書を朗読することさえ許さない教会もあります。[805]ジョン・パイパーは、牧会と神学の訓練の場で女性が男性に講義することを支持していません（ただし、女性の神学者が書くことは支持しています。そうすれば「著者である女性が読者の目に触れなくなり、ある意味で、彼女の女性としての人格という次元が取り除かれる」からだというのです[806]）。[807]

それでも、一部の穏健な補完主義の学者たちは、女性が教会で教えることを認める道を見つけようとしています。そのやり方は三つあります。第一に、礼拝の集まりの外であれば、女性が男性に教えることを認める人たちがいます。特別なクラスや講座では女性が男性に教えてもよいが、日曜日の主要な集会ではいけない、というのです。その根拠として、パウロはテモテへの手紙第一2章で特に教会の集会について語っているので、彼の禁止はその場に限られると論じます。

第二に、長老や牧師の権威の下で、彼らが定める教理の枠内であれば、女性が教えることを認める人たちがいます。たとえで言えば、指揮者とバイオリン奏者は、どちらもベートーヴェンを「解釈」します。バイオリン奏者は解釈を演奏として届けるだけで、それはほかの人の監督と指示の下で行われます。同じように、主任の牧会指導者たちが教理を定め、女性を含むほかの人たちは、その教理を伝えてもよい、というわけです。

804. 上級寄稿者のケビン・デヤングは、福音派の世界で女性の説教をめぐって起こるあらゆる異議申し立てを繰り返し名指しで取り上げ、それを正そうとしています。 www.bit.ly/3BHFz0N を参照してください。
805. www.bit.ly/3ENSkc4 を参照してください。
806. www.bit.ly/3wqsGXW を参照してください。
807. 広く発信されているパイパーの確信がどれほど人を傷つけるかを考えてください。世界的な女性教師の一人が、それが自分に与えた影響を語るのを聞いてみましょう。「私は悲しいという言葉では足りないほど悲しく、いら立ちを覚えました。そのような意見が活字になっているのを見ると、私はいつも一瞬言葉を失います。私は神学教育者であり、神学校（人生、リーダーシップ、宣教のための霊的形成を専門とする学校）の校長です。私は20年以上にわたって、教会で教え、説教する働きをしてきました。」 www.bit.ly/31xWCWF

第三に、女性が説教の中で「預言する」ことや「勧める」ことは認めても、「教える」ことは認めない人たちがいます。彼らは「教えること」を「使徒的な中心教理を打ち立てること」と定義します。今日の説教のすべてがこの意味での「教え」なのではない、と彼らは言います。パウロ自身、「勧めること」「預言すること」「教えること」を区別しています。パウロは女性が会衆の中で「預言する」ことを期待しており、女性が会衆に「勧める」ことを禁じたことは一度もありません。

女性が男性に教えることを正当化しようとするこれら三つの善意の試みを評価はするものの、それらは、テモテへの手紙第一2章12節についての自分たち自身の誤った解釈を回避しようとする、無理のある試みです。[808]だからこそ補完主義の学者たちは、それらに反論し続けているのです。[809]しかし、第7章で述べたように、ひとたびテモテへの手紙第一2章12節の補完主義の読み方を捨てるなら、このテーマにはるかに良い仕方で取り組むことができます。そうすれば、こう問うことができます。牧会書簡によれば、教えるべきでないのはだれでしょうか？　そして、女性が教えることについてのどのような明確な聖句が、テモテへの手紙第一2章12節という不明瞭な箇所をよりよく解釈する助けとなるでしょうか？

教えるべきでない人々

最初の問いについて言えば、教えるべきでない人々には三種類あります。第一に、偽教師は教えるべきではありません。パウロはテトスに言っています。「彼らの口を封じなければなりません。彼らは……教えてはならないことを教えているからです。」[810]第二に、教えを受け入れようとせず、キリストに似ていない人々は教えるべきではありません。第7章で論じたように、私たちはテモテへの手紙第一2章12

808. 最初の立場が間違っているのは、テモテへの手紙第一2章は集まっての礼拝についてだけ語っているのではなく、また新約聖書は、教会がある週に持つさまざまな種類の集会をはっきり区別していないからです。二番目の立場が誤っているのは、もし（彼らが信じるように）神が教会に女性は教えてはならないと告げておられるなら、長老がその反対を許すことはできないからです。三番目の立場は、ジョン・ディクソン（John Dickson）が、ほかの点ではすばらしい著書“Hearing Her Voice”で切り開いたものですが、その欠陥は、牧会書簡においてさえ「教える」という語が、ディクソンの言うように権威をもって〔教理を〕「打ち立てる」ことではなく、使徒的な教理を伝えることを指しているという点にあります。また実際問題として、どれほど預言的であれ勧告的であれ、使徒的な教理を伝えることなしに30分の説教をどうやってできるのか、私には想像できません。
809. デヤングはジョン・ディクソンの見解を取り上げています： www.bit.ly/3wqsXtW 同様に、シュライナーはアンドリュー・ウィルソン（Andrew Wilson）に反論しようとしています： www.bit.ly/2ZTCIoH
810. テトスへの手紙1章11節

節を、ゆがんだ教えに影響された人々の集団が、他者に対して高慢で、独立的で、自己主張の強い、あるいは威圧的な態度を取ることを禁じるものとして解釈すべきです。こうした人々に必要なのは、改めて謙虚に神のことばの下に座り、教えを受けることです。

第三に、教えを受けていない人々は教えるべきではありません。パウロはテモテにこう言います。「多くの証人たちの前で私から聞いたことを、ほかの人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねなさい。」[811]パウロは使徒的な教理をテモテに教えたうえで、それをほかの人たちに教えるよう求めています。そうすれば、その人たちがさらに多くの人に教えることができるからです。これらの教師見習いが、男たち（men）ではなく「人たち（people）」であることに注意してください。パウロは総称的なanthrōpoisを使っており、それによって男性と女性を含めているのです。[812]パウロは長老たちが教えの多くを担うことを思い描いていますが、教える務めを長老たちだけに限ることは決してしていません。[813]同様に、ヘブル人への手紙の著者は、共同体全体が、男性も女性も、良い教理と霊的な成熟に基づいて、教える務めにふさわしくなることを願っています。著者はこう言います。「あなたがたは、年数からすれば教師になっていなければならないのに、……初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。」[814]（ちなみに、このことは、エペソの

811. テモテへの手紙第二2章2節。NIVは、これらの人々を正しく「people」（人々）と訳しており、「men」（男たち）（ESV）とは訳していません。ギリシア語の「anthropos」は、形は男性形でも、女性を含めて用いられるからです。たとえば、イエスが私たちに、私たちに対して罪を犯した他者を赦すように言われる時、他者を表すのに「anthropos」を使っておられます（マタイ6:14）。
812. たとえば、この語はペテロの手紙第一3章4節で、はっきりと女性について使われています。
813. 私は、手紙は長老だけが教えるべきだと言っていると論じる補完主義の学者を何人も読んできました。これはある教派では規則かもしれませんが、聖書の規則ではありません。こうした学者たちは、自分たちの主張を支えるために、たいてい次の参照箇所を積み上げます：テモテへの手紙第一2章12節、3章2節、4章11–13節、5章17節、2章24–26節、4章1–5節、テトスへの手紙1章5–6、15節、そしてヤコブの手紙3章1節。しかし、これらの参照箇所は、長老でない人を教えることから締め出す根拠にはなりません。テモテへの手紙第二2章2節が、教えを受けた人ならだれでも教えることができる可能性を示唆しているという事実のほかにも、長い「証拠」聖句のリストを注意深く調べると、特に長老が教えることについて語っているのはそのうち三つだけ（Ⅰテモテ3:2、5:17、テトス1:5–6）であることがわかります。四つは、長老ではなく、テモテやテトスのような使徒の代理人が教えることについて語っています（Ⅱテモテ4:11–13、Ⅱテモテ2:2、4:1–5、テトス2:1–6、15）。そして、女性が使徒の代理人になることはありえないのでしょうか？ たとえば、パウロに代わってローマ人への手紙を自ら携えて行ったフィベのことを考えてください（ローマ16:1–2）。もっと端的に言えば、（夫と共に）使徒であった（使徒の代理人より一段上の）女性ユニアのことを考えてください。最後に、ヤコブの手紙3章1節（そこでは「兄弟たち」は「兄弟姉妹たち」を意味します）は、男性や長老だけでなく、潜在的にはだれにでも教師となる道を開いています。
814. ヘブル人への手紙5章14節

女性たちでさえ、将来、再び教えることができるようになるという希望を私たちに与えてくれます。）

女性が教えた例

女性が教えることについてのどのような明確な聖句が、テモテへの手紙第一2章12節という不明瞭な箇所をよりよく解釈する助けとなるでしょうか？　たくさんあります。パウロは男性にも女性にも、教える賜物を用いること[815]、礼拝のために集まった時に互いに教え、戒め合うこと[816]、そして教会の集会で教えのことばを持ってくること[817]を命じています。これらの箇所はすべて、テモテへの手紙第一2章12節でも使われているギリシア語didaskeinを用いています。たとえば、これらすべては、サマリアの女が男たちに福音を伝えたこと[818]、女性たちが紡ぎ出した、教理に富む聖書の多くの箇所[819]、そしてプリスキラとアキラが、アポロを自分たちの家に招いた後、「神の道をもっと正確に彼に説明した」という記事[820]と調和しています。

プリスキラの教える務めについて言えば、「説明した」という語（ギリシア語exethento）は「教える」という語と同義であり[821]、ローマでのパウロの働きを描くのにも使われています。そこでパウロは、「朝から晩まで」「神の国について説明して」いました。[822]ところが補完主義の学者たちは、プリスキラがアポロを教えたという素直な意味をあいまいにし、テモテへの手紙第一2章12節についての自分たちの誤った解釈というプロクルステスの寝台に合わせようとします。彼らは、この箇所が、女性が教会で男性に権威をもって教えることを禁じていると信じているのです。彼女の教えは私的で非公式なものであって、公的で公式なものではなかった、と彼らは主張します。この主張は、エペソ教会の集会がおそらく同じ家で行われていたこと、そして（ずっと後の教会の慣習を1世紀半ばに持ち込もうとしない限り）親密で非公式なものだったことを見落としています。[823]

815. ローマ人への手紙12章7節、コリント人への手紙第一12章28–30節
816. コロサイ人への手紙3章16節
817. コリント人への手紙第一14章26節
818. ヨハネの福音書4章39節
819. たとえば、士師記5章2–31節、サムエル記第一2章1–10節、25章24–31節、ルカの福音書1章25節、42–45節、46–55節を参照してください。
820. 使徒の働き18章26節
821. www.bit.ly/3q7sZpi
822. 使徒の働き28章23節

彼女のような教えは、パウロがテモテとテトスへの牧会書簡で述べている「公式の」あるいは「権威ある」教えとは何の関係もない、という議論について言えば、実際には、プリスキラは、パウロがテモテに「ほかの人にも教える力のある信頼できる人たち」[824]の中で増やしていくよう命じている、教える務めの完璧な例です。プリスキラは、単に信仰上の思いを分かち合っていただけではありません。パウロから教えを受けていた彼女は、アポロに教理を教え、彼の誤った不十分な考えを正すという、力強い種類の教えに携わっていたのです。そして、彼女の教えの実に注目してください。彼女の教える務めを受けたアポロは、後に十分に整えられて送り出され、初代教会時代の偉大な教師の一人となりました。[825]

まとめましょう。聖書全体に基づく聖書解釈に従えば、今日、女性は教会で教え、説教することを許されるべきでしょうか？　はい、もちろんです。ただし三つの条件があり、それは男性にも当てはまります。彼らは、教えを受けたうえで、今やほかの人に教える力のある、信頼できる人でなければなりません。また、教える賜物を持っていなければなりません。そして（この丁寧に掘り起こされた洞察については、テモテへの手紙第一2章12節に感謝します）、教会の特定の人々に対する高慢や罪深い敵意を表さない仕方で教えなければなりません。女性が男性に説教できるという結論をさらに強めるのは、新約聖書が教会における女預言者たちをたたえているという事実です。預言は宣言する務めであり、教える働きと重なり合い、教えることよりもさらに高い戦略的重要性を与えられていました。[826]ですから、今日、女性を説教壇から締め出すことには何の意味もありません。

823. ケビン・ジャイルズは“What the Bible Actually Teaches about Women”（ch. 6）の中で、補完主義の学者たちは「初期のキリスト者たちが少人数で家々に集まっていた」という事実を見落としがちだと指摘しています。「彼らはこれらの事実を認めないので、新約聖書の中に教会と教会指導についての自分たち自身の現代的な文化理解を読み込み、そのうえで、今日の教会生活にとって何が規範であるべきかについての自分たちの結論を支えるために、それに訴えるのです。」
824. テモテへの手紙第二2章2節
825. エペソでのプリスキラの働きと、アポロに対する彼女の教える務めについての詳しい研究は、 www.rb.gy/ttr2do を参照してください。
826. これについて詳しくは、第12章「女預言者たち」を参照してください。

付録5：テモテへの手紙第一3章からのさらに二つの論拠

第12章では、パウロがテモテへの手紙3章で監督を「自分の妻に忠実な」人と描いていることに基づく補完主義の議論を扱っています。この付録では、同じくテモテへの手紙第一3章に基づいて、補完主義者が女性を教会の指導から締め出すために持ち出す、さらに二つの論拠を扱います。

テモテへの手紙第一3章11節の「女の人たち」の謎

長老の資格を列挙した後、パウロは執事についても同じようなことをしています。「女の人たち」への言及に目を留めてください：

同じように、執事たちも品位があり、二枚舌を使わず、大酒を飲まず、不正な利益を求めない人でなければなりません。きよい良心をもって信仰の深い真理を保っている人でなければなりません。この人たちも、まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事として仕えさせなさい。

同じように、**女の人たち**も品位があり、人を中傷せず、自分を制し、すべてにおいて忠実な人でなければなりません。

執事は自分の妻に忠実で、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。執事としてよく仕えた人は、良い地位を得、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるのです。[827]

テモテへの手紙第一2章12–15節に次いで、これはこの手紙の中で二番目に議論の多い箇所です。学者たちの意見の違いは、これらの「女の人たち」がだれだったのかに関わっています。それは執事の妻たちを指すのでしょうか、それとも女性執事（deaconesses）を指すのでしょうか？　理由はともかく、パウロはそれをはっきりさせていません。この不明瞭さは翻訳者たちの仕事にも表れています。英語の28の訳のうち、18は「執事の妻たち」を選び、2は「女性執事（deaconesses）」を選び、残りの8は「女たち」のままにしています（読者が判断できるように）。個人的には、大多数の翻訳者が「妻たち」という語を使うのは正しいと思います。パウロは、数節前（2節）の「自分の妻に忠実な」という句で「妻」を意味するのにま

827. テモテへの手紙第一3章8–13節

ったく同じ語gunaikasを使っており、すぐ後に続く節（12節）でもそうしているからです。こうしたほかの用例にこれほど近く挟まれていながら、ここでだけ別の意味を持つとは考えにくいことです。

補完主義の学者たちは、執事の妻たちと取るにせよ女性執事と取るにせよ、これはパウロが女性の長老を認めなかったことを示していると論じます。執事の妻たちを指すのであれば、パウロは二つのグループ、すなわち男性の長老と、男性執事とその妻たちを思い描いていたことになる、と彼らは言います。他方、女性執事を指すのであれば、パウロは三つのグループ、すなわち男性の長老、男性執事、女性執事を思い描いていた（しかし女性の長老はいない）ことになる、と一部の補完主義の学者たちは言います。どちらの読み方でも、女性の長老の可能性は排除されます。

まず、たとえ後者の可能性を認めるとしても、問いは残ります。パウロは、すべての地域教会に三つの職務、すなわち男性の長老、男性執事、女性執事がなければならないと規定しているのでしょうか？　それとも、彼が書いている時点でエペソ教会にあったのがこれらの職務だと前提としている、あるいは知っているだけで、テモテへの手紙第一3章ではただ、これらの職務に最もふさわしい人の種類を規定しているのでしょうか？　私は、これは規定ではなく前提だと思います。それに、もしパウロが女性執事のことを言っているのなら、すぐ次の節で、執事（女性執事を含む）が「自分の妻に忠実」（12節）であるべきだと言っていることは、この慣用句が性別を問わない用法であることを裏づけるにすぎません。この用法は、たとえばテトスへの手紙1章の長老の資格にも見られます。そこでパウロは、クレタの諸教会で任命される職務として、執事ではなく長老だけを思い描いています。[828]つまり、性別を限定する代名詞や慣用句をまったく含まないテトスへの手紙1章の長老の条件は、女性の長老を任命することを認めるものなのです。

しかし多数派の見解は、パウロが言うこれらの女性は女性執事ではなく執事の妻たちだ、というものです。その場合、パウロは男性の長老と男性執事だけを思い描いているように見えます。しかしこの見解の弱点は、そうなると、テモテへの手紙第一3章のこれらのリストをすべての教会のための法的な規範と取るべきではないという、さらなる証拠が得られることです。なぜなら、この手紙とほぼ同じ時期に書かれたローマ人への手紙16章2節は、フィベという女性に触れており、パウロは彼女をケンクレアの教会の執事として推薦しているからです。[829]

828. ヨハネス・クリュソストモスはこのことを見抜いていました。テモテへの手紙第一3章についての第11説教で、彼はこう書いています。「『一人の女の夫たち』……は、女性執事についても言うのがふさわしい。」

言い換えれば、これらの女性についてのどちらの見解も、テモテへの手紙第一3章のパウロの箇所がすべての教会で女性牧師の可能性を排除しているという補完主義の信念を掘り崩すのです。

11節の「女の人たち」を理解する別の方法はあるでしょうか？　私がより説得力があると思うのは、これらの女性には、執事の妻たちや女性執事（どちらの取り方をするにせよ）だけでなく、長老の妻たちや女性の長老も含まれる、という見方です。説明させてください。マイケル・イートン（Michael Eaton）がテモテへの手紙第一の注解で説明しているように、そして古代の文書ではよくあったように、パウロは二つの似たリスト（一つは長老の、もう一つは執事の）を作っていますが、過度な繰り返しを避けるために、両方にまたがって受け取られるべき内容の一部を、二つの部分に分けて配しているのです。[830]彼の指摘は、特にこの箇所において確かなものです。たとえば、長老の部分では、1節がその働きをしたいという願いについて語り、7節が外部の人々からの良い評判の必要について語っていることに注目してください。そして執事の部分では、9節が信仰の深い真理を保つ必要について、10節がその役割に就く前に審査を受ける必要について、13節がよく仕える人への神の報いについて語っています。しかし、この五つの点はすべて、長老にも執事にも当てはまります。古代の読者は、私たち現代人よりも早くこのことに気づいたでしょう。何十年もこの箇所を使って長老や執事を訓練してきた私は、直感的にこのようにこの箇所の解き明かしを組み立ててきました。長老だけでなく執事も、このように神に仕えることを願い、外部の人々から良い評判を得るべきではないでしょうか？　そして執事だけでなく長老も、聖書を深く思い巡らし、任命される前に審査を受け、よく導いたことに対する神からの報いを期待すべきではないでしょうか？[831]

しかし、おわかりでしょう。いくつかの資格を両方のグループに当てはまるものとして読むこの読み方こそ、パウロが「執事の妻たち」や「女性執事」ではなく、た

829. フィベが執事であったことの証拠については、第12章の見出し「ローマ人への手紙16章の同労者たち」のところにある、フィベに関する脚注を参照してください。
830.「長老に当てはまることのいくつかは執事にも当てはまり、その逆も同様です。二つの主題について似たことを言いたい時、事柄を二つの段落に分け、一方の部分について一つのことを、もう一方の部分について別のことを言うのは、ヘブル的な書き方の典型です。しかしヘブル的な文体は、それを両方の部分にまたがって適用するよう私たちに求めているのです。」（Michael Eaton, Preaching Through the Bible: Timothy）
831. それでも、なぜパウロが二つのグループにまたがって多くの内容を繰り返すことをいとわないのか、と問うことはできるでしょう。その答えは、パウロが特に品性の特質についてそうしているということです。品性の特質は、特別な強調に値するのです。

だ「妻たち／女の人たち」と書いている理由を説明できる唯一のものかもしれません。パウロは、その適用を執事だけに限りたくないのです。

したがって、パウロが11節で妻たちのことを言っているのなら、彼は執事と長老の両方の妻たちに求められる品性について語っていることになります。女性執事フィベの存在を念頭に置くなら、この箇所から引き出すべき時代を超えた真理は、長老と執事の配偶者（妻だけではなく）の敬虔さが大切だということです。

そして、パウロが11節でその職務の女性版のことを言っているのなら、彼は女性執事と女性の長老の両方に求められる品性について語っていることになります。プリスキラとその夫が、かつてまさにこの教会を開拓し、導いていたという事実によって、この解釈はなおさらもっともらしくなります。

どちらに取るにせよ、この箇所についてじっくり考えれば考えるほど、これらの謎の女性たちがだれだったのかについては確信が持てなくなり、11節はあまりにも不明瞭であるか、あまりにも文脈に固有であるかのどちらかであって、正気の解釈方法であれば、いつでもどこでも女性の任職を禁じる十分な根拠にはとうていならない、という確信が強まっていきます。

長老は父親なのか？

かつてある運動の指導者だったP・J・スマイス（P. J. Smyth）は最近、男性だけが長老になるべきだという新しい議論を発表しました。これは批判に値すると私は考えます。三つの部分に分けて引用し、一つずつ評価していきます。

技術によって形づくられた現代の世界で、私たちは人を機械的に考えがちです。つまり、「長老」という言葉を、ビジネスや政治や産業における「リーダー」と同じ意味で読みがちなのです。そうした分野では、性別にかかわりなく、最も有能な人がCEOや社長やマネージャーの地位を与えられるのは理にかなっています。しかし聖書が長老の役割を描く時、私たちの現代の企業的なリーダーシップのモデルを念頭に置いているわけではありません。むしろその姿は、はるかに、父親たちによって監督され守られる家族としての教会なのです。

スマイスは、家族では常に父親が導くと論じます。教会は家族なのだから、ここでもまた性別が賜物に勝らなければならず、導く賜物を同じように持つ女性がいると

しても、男性のチームが導かなければならない、というのです。しかしスマイスの議論は、二つの誤った前提に基づいています。

第一に、父親も母親も子どもを導くべきです。新約聖書で父親が家族を導くことに触れている箇所は、どれもギリシア・ローマ世界を描写しているものです。そこでは、死んでいない限り、家長（paterfamilias）が各家庭を率いていました。しかし、だれが子どもを導くかについて、聖書が（単に描写しているだけでなく）何を規定しているかを探すなら、母親と父親が家族の指導者として協力し合っていることは明らかです。今日の多くの教会の分野で、私たちは「父親が家庭のかしらであるべきだ」と聞かされ、それをあまりにも広く実践してきたので、それが実は聖書の裏づけを欠いていることに気づかずにきました。

夫は妻のかしらかもしれません（ただし、第8章で見たように、これはおそらくいずれにせよ権威を指してはいません）。しかし、夫が家庭を導くべきなのは、ただ妻と共にです。「子どもたちよ。主にあって自分の両親に聞き従いなさい。これは正しいことなのです。『あなたの父と母を敬え。』」[832]同様に、聖書は少なくとも四か所で、「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ」という定型句によって、母と父の二人による指導を確認しています。[833]この定型句は、息子が両親によって導かれる家族を離れ、（おそらく）再び両親によって導かれる新しい家族を始める姿を示しています。[834]聖書は、母親を、父親と子どもの間の権威構造の中ほどに位置する二番手の指導者として描くのではなく、母親と父親が「一体」として協力して家庭を導くことを規定しています。私自身の経験もこの洞察を裏づけています。父親が子どもを導くことよりも良いものが一つあります。それは、父親と母親が協力して子どもを導くことです。[835]

多くの人は、夫が妻のかしらであるという考えから、夫が家族のかしらであるという考えへと誤って飛躍しますが、新約聖書の記者はだれもそうしていません。この

832. エペソ人への手紙6章1節
833. 創世記2章、マルコの福音書10章、マタイの福音書19章、エペソ人への手紙5章を参照してください。
834. 同様に箴言でも、母親と父親の両方が子どもを教え導いています。「わが子よ、父の訓戒に聞き従え。母の教えを捨ててはならない。」（箴言1:8）「あなたを生んだ父と母の言うことを聞け。あなたの母を蔑んではならない。」（箴言23:22）ほかにも実に多くの節で、母親と父親が協力して、子どもの養育、訓練、しつけ、教えにおいて指導力を発揮しています（出エジプト20:12、レビ19:3、申命6:6–9、21:18–21、27:16、エペソ6:1–4、コロサイ3:20、Ⅱテモテ1:5。ルカ2:51も参照）。
835. それに、たとえ父親が「家庭のかしら」であることが神のみこころだとしても、パウロが複数の指導者を思い描いているという事実に基づいて、何人かの父親が協力して教会の「かしら」でなければならないと言うのは、奇妙な飛躍です。

誤りが起こったことが記録に残っている最初の場所は、2世紀の、ヘルマスの第三の書です。[836]

第二に、スマイスは教会についての一つの比喩（家族としての教会）を、もう一つの比喩（からだとしての教会）を打ち消すような仕方で用いています。しかし新約聖書は、教会をどのように組み立てるべきかを支える二つの主要な比喩を私たちに与えています。スマイスは、賜物という考えそのものを企業や国家と結びつけることで、多様な機能を持つからだとしての教会を軽んじています。確かに教会は、彼が言うように、帰属に基づく家族です。しかし教会が、賜物に基づく有機的なからだ（単なる組織ではなく）であることもまた真実です。この賜物志向は、世俗の企業や組織に見られるものよりもはるかに有機的で、御霊に導かれたものですが、教会は少なくとも一つの点で現代の企業に似ています。どちらにおいても、賜物を認めることは性別とは何の関係もないのです。

テモテへの手紙では、その姿は、スマイスが次に述べることの中で示唆するような「はるかに家族としての教会」ではありません。実際、この手紙の中で教会を直接家族と同一視している節は一つしかありません。[837]むしろパウロの手紙は、主にエペソ教会をギリシア・ローマの家庭の集まりとして捉え、そこに焦点を当てています。テモテは、これらの古代の家庭のさまざまな立場の人々——老人と若者、奴隷と自由人、富む者と貧しい者、男性と女性、やもめと既婚者——に賢く仕えるよう指示されています。

スマイスは議論にさらにもう一層を加えます：

〔教会は〕父親たちによって監督され守られる家族〔であり、その父親たちの〕第一の資格は、父親としての敬虔な品性です。このことは、パウロのテモテへの第一の手紙で特にはっきりしています。人は、自分の生物学的な家族の良い父親である場合にのみ、長老として認められるべきなのです。これはいくら強調してもしすぎることのない点です。長老は父親でなければなりません。[838]

彼の議論のこの側面もまた、二つの誤った前提の上に築かれています。第一に、パウロは長老を父親としてだけ見ているのではなく、家庭の指導者として見ていま

836. Hermas, Similitudes 7.3では、男は、「あなたの家族は、家のかしらであるあなたが苦しむ以外の方法では罰せられることはない」と告げられています。
837. テモテへの手紙第一3章1節
838. アラン・フロウも同じ循環論法を用いています。「長老は父親のようなもので、長老の妻は母親のようなものです。二人は一緒に教会の親となりますが、父親が導き母親は導かない聖書的な家族と同じように、教会は長老によって導かれます。母親が父親であることを期待しないのと同じく、長老が女性であることも期待しません。」 www.bit.ly/2ZPRZGH

す。この手紙の最初の読者の古代の文脈を誤解して、スマイスは、これらの指導者の家庭が単なる「生物学的な家族」――おそらく二、三人の子ども――から成っていると想像しています。しかしテモテへの手紙第一3章でパウロは、牧師は「自分の家庭をよく治める」べきだと言っています。この箇所のギリシア語（oikos）は、「家族」ではなく「家庭（household）」と訳すほうがよいものです。そこには、奴隷や借家人、ほかの親族も含まれうるのです。しかし、牧師は子どもの父親だったのだから教会の父親になるべきだ、というスマイスの意見に同意するなら、一貫性を保って、牧師は教会の夫となり、教会の主人となり、教会の家主となるべきだとも言わなければなりません。これらの役割も、家庭を治めることに含まれているからです。[839]

第二に、これは先に第12章で述べた点ですが、materfamilias（女家長）も資格を満たすことになります！　家庭を治めるのに必要な指導力は、古代世界においてさえ、男性だけのものではありませんでした。パウロはこの手紙の後のほうで、家庭を治める既婚女性について語っています。[840]また、パウロがヨーロッパで最初に開拓した信者の共同体は、リディアが治めていた家にあったことも私たちは知っています。[841]

そしてスマイスは議論をこう締めくくります。「それは、彼らが教会の父親となることができるという意味でなければなりません。女性は父親になれないのだから、女性は長老になるべきではありません。」[842]

家庭を治めることを父親であることへと縮小したうえで、スマイスはその縮小を使って、牧会についてのまったく新しい比喩、すなわち「父親になること」を作り出します。しかし、まさにこの手紙の中でさえ、パウロは古代の家庭の階層秩序における文化的規範を破って、年下の男性であるテモテを年上の男性たちの上に立てています。それは、イエスご自身が若い男たちを使徒として選ばれた時になさったことでもあります。スマイスの前提に反して、テモテは、父親としてではなく、自分より年上の人々に対しては息子として、同年代の人々に対しては兄弟として、霊的

839. このことは、古代の家庭の状況が現代の核家族とどれほど違っていたかを理解する助けになります。確かに、その文化において「家庭を治める」ことの大きな側面には、「子どもが彼に聞き従う」ようにすることが含まれていましたが、それはまた妻をよく導くことや、奴隷や親族や借家人など、家に住んでいるかもしれないほかの人々をよく導くことも含んでいました。だからこそパウロは12節で、二つのカテゴリーをはっきり分けているのです。執事は、一方では子どもをよく治め、他方では家庭もよく治めるべきなのです。それに、パウロは執事についても同じことを言っています。それでは、執事もまた「教会の父親となる」べきなのでしょうか？
840. テモテへの手紙第一5章14節
841. 使徒の働き16章14–15節、40節
842. P.J. Smyth, Elders, ch. 12.

に導くようはっきり言われています。[843]結局のところ、牧師であることを表す聖書の主要な比喩は、親であることではなく、羊飼いであることなのです。イエスは大牧者であり、牧師たちはその下で働く「下位の牧者（under-shepherds）」です。[844]しかし、神が教会の父であるから牧師は「下位の父親（under-fathers）」であるべきだと示唆する聖句は、どこにもありません。[845]実際、イエスがその反対を基本とするよう命じておられるのですから、教会の父親としての男性長老を強調することには、特に注意すべきです。「地上で、だれかを自分たちの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただひとり、天におられる父だけです。」[846]神学的に言えば、家族としての教会という聖書の比喩は、正しく適用するなら、地上のどの牧師でもなく神を私たちのただひとりの真の父とし、私たちの指導者たちを、キリストにある（しばしば年上の）兄弟姉妹とするのです。

それに、教会を主に父親たちが導く家族と見るスマイスの見方を受け入れるとしても（敬意を込めて言いますが、私はそうすべきかどうか疑わしいと思います）、健全な家族であればどこでもそうであるように、「親たち」のチーム——男性と女性の両方の牧師——が協力して導くほうが、より理にかなっています。

843. テモテへの手紙第一5章1–2節
844. ペテロの手紙第一5章1–4節
845. 聖書が霊的指導者をほかの人々の「父」と呼ぶのは、まれな場合だけです。それは、1）使徒の後継者との関係（Ⅱテモテ1:2）、2）自分がゼロから開拓した教会との関係（Ⅰコリント4:14–15）、3）自分の使徒的な世話のもとにある教会との関係、特に使徒がすでに年老いている場合（Ⅰヨハネ2:1）においてです。
846. マタイの福音書23章9節

付録6：事実が私たちの考えを変えないかもしれない理由

「ほとんどの人は正確な情報を求めているのではなく、自分を正当化してくれる情報を求めています。成長するには、以前は役に立っていた考えを捨て去ることに心を開く必要があります。」ジェームズ・クリアー（James Clear）

私がクリスチャンになり、福音を、まさに言葉どおり「福音の真理」（gospel truth）として受け入れた時、こう思ったのを覚えています。「私が発見したことをクリスチャンでない友人たちに話したら、どうなるか見ていてごらん！　みんなも信じるだろう。」すばらしいことに、何人かは信じました。しかし驚いたことに、ほとんどは信じませんでした。

正直に言うと、性別による階層について自分の考えを変える（そしてほかの人の考えを変えようとする）最初の取り組みにおいても、私は同じような素朴さを持っていました。

私の場合、この目覚めは痛みを伴うものでした。私に見える限り、私が何十年も信じてきたものは、裸の王様の存在しない服にすぎませんでした。それならなぜ、と私は不思議に思いました。すぐれた人々が、目に見えない服を、それが単にそこにないのに、今でも見ているのはなぜなのでしょうか？　このことに私はひどく当惑しましたが、やがて、ありそうな説明に行き当たりました。認知バイアスです。

結局のところ、多くの教会が交わしている種類の神学的な会話は、あらゆる種類のバイアスが働くのに完璧な条件を備えているのです。私たちのだれ一人として――私自身も含めて――自分で思っているほど客観的ではありません。

私たちの「合理性」でさえ感情に突き動かされている

私たちは、事実だけに基づいて心を決めたのだと自分に言い聞かせるかもしれませんが、私たちの最も客観的な選択でさえ、実は感情に支えられています。この主観性を言葉にしないかもしれませんし、気づいてさえいないかもしれませんが、それでもそれは存在しているのです。

ジョナサン・ハイト（Jonathan Haidt）はThe Righteous Mindの中で、感情的な思考を「直観」と呼んでいます。彼はこう書いています。「人間における直観と合

理性のそれぞれの役割は、象とその乗り手の関係にたとえて考えるのが最もよいでしょう。直観は道徳の象であり、合理性はその乗り手です。乗り手は自分が象を操っていると誤って考えていますが、実際には象に仕えているのです。たいていは、その人の直観的な判断に事後的な正当化を与えることによってです。」[847]

言い換えれば、あらゆる理屈は感情によって動機づけられています。ある考えや情報は私たちに訴えかけます。別のものは私たちを怖がらせます。だから私たちは、必ずしも真実を信じるわけではないのです。たいていの場合、私たちは自分が信じたいものを信じます。たいていはそれと気づかずに、ある信念に前もって身をゆだね、それから「巧みな正当化」を生み出したり、それに飛びついたりするのです。スタックハウスは、この原則を特に私たちの性別についての神学に当てはめています：

はっきりさせておきましょう。だれも、このような一連の重大な問題について、単に神学的な議論だけに基づいて心を決めることはありません。私たちは、何か知的な高みに座って、自分の精密に調整された知性と完全に聖められた魂の天秤で、一つひとつの項目を冷静に量っているなどと、うぬぼれてはなりません。私たちはみな、それがどんなものであれ、性別についての特定の一連の前提に、どうしようもなく、また徹底的に入れ込んでいます。私たちはみな、自分の見解のゆえに私たちに報いたり罰したりする社会構造に絡め取られています。この巨大で、とてつもなく重要な一連の問題について決める時、私たちはどうしても利害を離れた存在ではいられないのです。ですから……自分に問いかけてみましょう。私は性別について、本当は何を信じたいのだろうか？

確証バイアス

確証バイアスとは、自分の信念に挑戦する情報を探すのではなく、今の信念を裏づける証拠を、無意識のうちに選択的に探すことです。潜在意識のレベルで、私たちは裏づけとなる証拠を膨らませ、反対の情報を避けたり、捨てたり、軽く扱ったりします。自分の立場を支持する議論を、たとえそれが弱い議論であっても心から受け入れます。実際、それが弱いかもしれないという可能性が見えなくなっているのです。強くない時でさえ、私たちはその強さを「意志の力で作り出す」のです。

847. Jonathan Haidt, The Righteous Mind, p. 32.

経済学者J・K・ガルブレイス（J. K. Galbraith）が言うとおりです。「考えを変えることと、変える必要がないことを証明することのどちらかを選ぶよう迫られると、ほとんどだれもが証明に取りかかる。」[848]

この確証バイアスこそ、私たちが不完全な情報で単純すぎる物語を作り上げがちな理由です。そして私たちは、その物語が自分の頭の中で筋が通っている限り、それを信じます。問題は、わずかな、そしておそらく互いに関係のないデータの点をつなぎ合わせて、実際にはその少数の点では支えられない大きな絵を作り上げる時に生じます。もちろん、手もとにある情報で取り組む必要はありますが、私たちは、その情報が知るべきことのすべてだと扱ってしまう過ちを犯すのです。

まさにこのために、かつて補完主義は物語として私にとって筋が通っていたのです。修正版の性別による階層の創始者ジョージ・ナイトの1977年の本の道筋に従って、私は聖書のひと握りの節を、より正確に言えば、それらの節についての推測的な推論をつなぎ合わせて、一つの物語を形づくっていました。しかし、それらのデータの点をもっと集中的に調べてみると、私の目に留まったのは、それらがいかにわずかで、互いにいかに関係がないかということでした。補完主義は、夜空の星座とよく似た働きをしています。人はきらめく夜空を見上げ、いくつもの星をつなぎ合わせ、それらの間につながりを想像し（途中で欠けている点もいくつか埋めながら）、それを乙女座とか射手座とか呼びます。星座は、補完主義と同じように、見る人の目の中に存在するのです。

いったんある仕方で点をつないでしまうと、その星座を「見なかったことにする」のはほとんど不可能です。レフ・トルストイはかつてこう書きました。「最も難しい事柄でも、最も鈍い人に説明することはできる。その人がまだそれについて何の考えも持っていなければ。しかし、最も簡単な事柄でも、最も聡明な人に明らかにすることはできない。その人が、目の前に置かれたものを、疑いの影もなくすでに知っていると固く信じ込んでいるなら。」実際、そこにないものを見ることは、特異な種類の盲目です。たとえば、創世記2章の、まだ堕落していないアダムとエバの中に指導と服従を「見て」しまうと、私たちは彼らの平等と相互性の本当の美しさが見えなくなってしまうのです。

確証バイアスがはびこる理由の一つは、私たちがそれを使ってすでに信じていることを支えるからだけではなく、自分を疑い直すことを好まないからでもあります。性格のタイプによっては、私たちの多くは、ある事柄について明確な決定に至りた

848. John Galbraith, Economics, Peace and Laughter

いという、より強い欲求（認知的閉鎖欲求）を持っています。このように生まれついていると、私たちはあいまいさも、以前の結論を疑い直すことも好みません。ある事柄について長い対話のプロセスを続けることに我慢できません。白か黒かで考えがちで、物事の一方の側だけを聞いて満足します。それが自分にとって説得力があれば、私たちは（決着をつけたいという欲求のゆえに）喜んでその側に身をゆだねるのです。

失うことへの恐れほど私たちの思考をゆがめるものはない

ハイトの言う、感情に突き動かされる象は、基本的に脅威を避け、機会を追い求めます。しかし、この二つの感情的な衝動のうち、脅威への恐れのほうが報酬の可能性よりも大きいのです。私たちは変化をそれほど恐れているのではなく、失うことを恐れているのです。ネガティビティ・バイアス（あるいは現状維持バイアス）と呼ばれる現象において、私たちの脳は、得るかもしれないものより失うかもしれないものに大きな重みを置くようにできています。

たとえば、教会や結婚において、男女の階層が男女相互主義に取って代わられると、得られるものはとても多いのです。しかし平均的な人は、得られるかもしれないものに目を向けません。代わりに、失うかもしれないものにこだわります。新しい神学的立場を探る時、彼らは第一に「これは真実だろうか？」と問うのではなく、潜在意識の中で「もしこれを信じたら、何を失うだろうか？」と問うのです。考えを変えることで長期的に非常に良い実りがあるかもしれなくても、その利益は、短期的な損失の可能性の前にかすんでしまいます。しかもその損失は、劇的な変化を避けたいというほとんどの人の生来の傾向によって、なおさら際立って見えるのです。[849]

おそらく、部族の中での自分の居場所を失うことへの恐れほど大きな、失うことへの恐れはないでしょう。スタックハウスが述べたとおりです。「私たちはみな、私たちの……性別についての見解のゆえに私たちに報いたり罰したりする社会構造に絡め取られています。」[850]たいていの場合、私たちは、自分の部族、つまり自分の主要な人間関係の輪が正しく真実だと信じていることを信じます。自分がその承認

849. 私が自分自身やほかの人の性質を理解するようになった一つの方法は、「ロジャーズのベル曲線」（Roger's Bell Curve）です。私は、論理が自分にとって健全に思える時には、革新者や初期採用者になる傾向のある16%の人々の一人ですが、ほとんどの人は、もっと長くためらい、熟考する必要があります。
850. John Stackhouse, Finally Feminist, p. 102.

を大切にしている指導者を失望させることへの恐れ、あるいは自分の仲間の輪と歩調が合わなくなることへの恐怖は、私たちの思考のすべてに浸透している強力な恐れです。このことを認めない限り、私たちは正しく考えることに少しも近づけないでしょうし、事実が私たちの考えを変えることも決してないでしょう。

あるハーバード大学の心理学者はこう言いました。「人は信念によって受け入れられたり非難されたりする。したがって、心の機能の一つは、真実である可能性が最も高い信念よりも、信念の持ち主に最も多くの味方、保護者、あるいは弟子をもたらす信念を抱くことなのかもしれない。」[851]だからこそ人は、アイデンティティの目印となる信念をとても大切にするのです。それらは、人間関係の輪に含まれるために必要とされる信念です。また、だからこそ、だれかの考えを変えようとすることは、実際には、その人に部族を変えるよう説得しようとするプロセスなのです。既存の信念を考え直し始めた最初の瞬間に、人は、信念を変えることで社会的なつながりを失うことになるかどうかを見積もります。スタックハウスは、多くの補完主義のグループで、これと同様の興味深い力学が働いていることを示唆しています：

一部のキリスト教のグループにとって、性別の問題は、宗教的権威、神学的方法、世俗への抵抗といった、さらに根本的な事柄と結びついた「境界」や「アイデンティティ」の目印となっています。そのため、性別の問題は、真剣な再検討にかけるにはほとんど不可能なほど大きなものとなっており――だから、かけられないのです。[852]

自分たちのグループの信念は正しいと前もって決めてしまっているので、彼らがすべきことは、その信念のための共同体の防衛文書に立ち戻るか、運動や教派の「主導的な学者たち」にこの新たな脅威に応答するよう頼むことだけです――そして学者たちは必ずそうします。問題は、その信念を職業として定義し擁護する「専門家」ほどグループに深く根を下ろしている人はいない、ということです。ですから、自分の考えの欠陥を認めた時に失うものが最も大きいのも彼らなのです。奇跡でも起こらない限り、これらの学者のうち考えを変えることができる人はごくわずかだろうと私は思います。その代価――自分の輪からの尊敬を失い、おそらく職も失うこと――は、あまりにも大きいのです。

教理を擁護するために立ち上がるのは、補完主義の運動の学者たちや、補完主義の教会で教理を言い表す人たちだけではありません。多くの女性たち――特に男性指

851. Steven Pinker, Language, Cognition and Human Nature
852. John Stackhouse, Finally Feminist, p. 103, fn. 35.

導者の妻たち――も、その擁護のために立ち上がります。こうした女性の中には（彼女たちの見るところの）事実だけによって説得されている人もいますが、多くの場合、もう少し潜在意識的な何かが働いているのではないかと私は思います。ケビン・ジャイルズはこう言っています：

どのような支配的イデオロギーにおいても、力を奪われた人々の一定の割合は、常に現状を支持します。たとえばヒンドゥー教のカースト制度や古典的な貴族制では、支配的な階層的社会秩序の最も強力な擁護者の中に、最下層の人々がいます。何が起こるかというと、彼らはこの秩序を内面化するのです。彼らは、自分たちの上にいる人々が自分たちを正当に支配しており、自分たちの低い地位は神から与えられたものだと信じるのです。[853]

考えてみれば、彼女たちが階層制を擁護するのには、とても理解できる理由があるのかもしれません。補完主義の妻として、彼女たちはずっと前に、夫の働き（と見解）を支えることを誓っているのです。それに異議を唱えるには、とてつもない勇気が必要でしょうし、もしかすると、自分たちの主要な共同体、つまり自分自身の結婚の調和さえ脅かすかもしれません。

兵士のように考える

アイデンティティの目印となる信念が問われると、私たちは簡単に兵士モードに戻ってしまいます。居心地の悪い一連の事実に直面すると、私たちはみな、自分が間違っているかもしれないと認めるよりも、今の立場にいっそう固執しがちです。性別の神学についてのこの議論は、あまりにも多くの人にとって非常に脅威的なので（考えを変えれば職を失うかもしれないのです）、それがすぐに撃ち落とされてしまうのは理解できることです（それでもやはり悲劇的ですが）。

実際、この対話を自分の教会に持ち込もうとした人の多くは、その結果として傷を負っています。それは、脅威となる考えを持ち込む人と、その考えそのものとを切り離すのが非常に難しいからです。最悪の時には、私たちは使者を撃つだけでなく、その人をガスライティングすることさえあるかもしれません。その人の痛みは、私たちが間違っていたからであるはずがない、と私たちは自分に言い聞かせます。むしろ、その人が私たちに悪いことをしたからに違いない、と。少なくとも私たちはそう考えるのです。

853. Kevin Giles, What the Bible Actually Teaches on Women, p. 225.

しかし、補完主義の教理がこれほど論争の的になっている以上、経験を積んだ補完主義の指導者のほとんどは今や、この問題について考えを変え、その結果として自分たちのもとを去っていった教会の人々の長いリストを抱えています。これほど多くの犠牲者がいるのに、なぜこれらの指導者たちはもっと頻繁に立ち止まって、自分たちの神学を注意深く見直さないのだろうかと不思議に思います。その答えは、またしても認知バイアスの形をとって返ってきます。それは戦争において最もはっきり見られるものです。ある戦線を守るためにすでに払った代価が大きければ大きいほど、私たちは同じ代価を払い続けようとするのです。1916年の、一年に及んだヴェルダンの戦いで、フランス軍とドイツ軍はある戦線を選び、そこで百万人近い兵士が戦死し、あるいは重傷を負いました。どちらか一方、あるいは両方が単に塹壕を放棄したほうがよかったにもかかわらず、失われた命が多くなればなるほど、彼らはさらに多くの命を失い続けることをいとわなかったのです。

さらに、グループとしての私たちが、異なる見解を持つかもしれないグループ外の人々から脅かされると、私たちはいっそう簡単に集団思考（groupthink）に屈してしまいます。これは、私たちの盲点を難攻不落のものにしてしまう集団的なバイアスです。自分たちの集団的な見解を守り、ほかの見解を早まって退ける時、私たちは悪い決定を下します。警告となる公の例は十分にあります。大量破壊兵器を持っているという、異議を唱えられることのなかった誤った思い込みに基づいてイラクに侵攻したブッシュ政権の決定や、住宅ローン・デリバティブの崩壊を助長した金融関係者の輪などです。破滅的な集団思考のこの二つの例はどちらも、「自己を肯定する下降スパイラルの中で、反証となるデータを無視した」、外部から遮断された意思決定者の集団が関わっていました。[854]

ありがたいことに、兵士モードに戻ってしまうよりもはるかに良い道があります：

門番と偵察兵

もちろん、教会を導き、門に立つ私たちは、自分の教会の教理を守る必要があります。しかし私たちは、町の城壁に近づく者をだれでも撃つ兵士となるように召されているのではありません。町の門にいる良い長老として、私たちは何も中に入れないと前もって決めるのではありません。むしろ、訪れる一人ひとりとその荷を吟味し、私たちに必要なものがあるかどうかを見るのです。私たちはエリコの城壁では

854. Daniel Goleman, Focus: The Hidden Driver of Excellence, ch. 7.

ありません。すでに信じているものを閉じ込め、信じていないものを締め出す城壁ではないのです。むしろ私たちは、ある事柄について自分が間違っている可能性に心を開くと同時に、その事柄を批判的に吟味する姿勢も示すべきです。

キリスト教神学の歴史は、絶えず変化し続ける文化との相互作用の歴史です。一方の極には、文化は常に間違っていると信じる教会があります。もう一方の極には、文化は常に正しいと思い込んでいるように見える人々がいます。私たちのほとんどはその中間のどこかにいます。つまり、少なくとも理論上は、新しい考えに心を開いているということです。ですから、兵士であるべき時もあるかもしれませんが、いつも防御モードで生きるべきではありません。ジュリア・ガレフ（Julia Galef）はTEDトークの中で、私たちは偵察兵モードで生き、考えることも学ぶべきだと論じています。「偵察兵の仕事は攻撃することでも守ることでもありません。偵察兵の仕事は理解することです。偵察兵は、そこに本当に何があるのかを、できるだけ正確に知りたいのです。そして本物の、実際の軍隊では、兵士も偵察兵もどちらも欠かせません。」[855]

私たちの心が兵士モードにある時、私たちは防衛的な感覚と部族主義に突き動かされている、とガレフは言います。それに対して、

偵察兵は好奇心旺盛です。新しい情報を知った時に喜びを感じる、あるいはパズルを解きたくてうずうずすると言う傾向が強いのです。自分の予想に反するものに出会った時に興味をそそられると感じる傾向も強く、〔また〕自分の信念を検証するのは美徳だと思うと言う傾向も強く、考えを変える人を弱いと思うと言う傾向は弱いのです。

言い換えれば、偵察することはバイアスに対抗する戦略です。その核心にあるのは、自分のこれまでの結論が間違っているかもしれない、何かを見落としているかもしれないという謙虚な確信です。これこそ、ペテロが「謙虚」な心と呼んでいるものかもしれません。[856]

パラダイム・シフト

科学、哲学、神学の歴史において、重要な突破口やパラダイム・シフトは、このような開かれた心によってもたらされてきました。何世紀にもわたって、ある分野

855. www.bit.ly/3BKjApP
856. ペテロの手紙第一3章8節

は、すべての人の前提を支配する確立したパラダイムに統べられているかもしれません。やがて、何人かの人が深刻な異常に気づき始めます。宣教学者アラン・ハーシュは、このことをうまく説明しています：

パラダイムの内部から、異常の感覚、つまり何かがおかしいという感覚が強まっていきます。あるいは少なくとも、支配的な思考様式では、パラダイムそのものが直面するすべての問題を解決することはできないという感覚です。逆説的ですが、合意から最初に離れるのは、多くの場合、支配的なパラダイムを使いこなしている人々です。たとえば科学におけるアインシュタインやハイゼンベルク、神学におけるカルヴァンやバルトです。本当の専門家こそ、物事がおかしい時にそれに気づく能力が最も高く、またその可能性も最も高い人々なのです！　こうして、クーンが「心の放浪」と呼ぶものが始まります。それは、先入観となっている前提や一連の解決策に頼ることなく、異常と取り組む新たな自由の感覚です。[857]

これはまさに、階層主義のパラダイムの中から相互主義が台頭してきた事情に当てはまります。それはまた、男女のより豊かなパートナーシップへと向かった私自身の歩みの一端をも言い表しています。補完主義を証明しようとして、それを支える数多くの議論をより深く掘り下げていった時、私は少しばかり、自分で選んだわけでもないのに、マトリックスの中でますます多くの不具合に出くわすネオ（Neo）のように感じました。補完主義者として、なぜ自分がそう信じているのかを徹底的に説明できるようになればなるほど、私はそれを信じられなくなっていったのです。

この過程の一部は、私が兵士としてではなく偵察兵として聖書を読むことを学ぶことでした。ジョン・ゴールディンゲイ（John Goldingay）は著書Models for Interpretation of Scriptureの中で、聖書を自分の既存の信念を支える防衛文書として扱うことに警告しています。「そうなっているかどうかを試す方法は、聖書で読んだことのゆえに最後に考え（いや、もっと言えば行動）を変えたのはいつだったかを問うことです。一般に、私たちはみな、聖書を〔私たちの信念に〕立ち向かわせるためではなく、それを確認するために用いており、ただ『自分自身を複製する』ためだけに用いているのです。」

何かについて自分が間違っていたと気づく時の、不安で謙虚にさせられる感覚よりも、自信と確信の感覚のほうを好むのは自然なことです。実際、自分の信念に対する自信の感覚が見当違いかもしれないという強力な証拠に触れた時でさえ、私たち

857. Alan Hirsch, On the Verge, ch. 2.

は、自分の信念はやはり正しいという感覚を振り払うのに苦労します。認知バイアスの研究者たちは、この種のバイアスを妥当性の錯覚と呼んでいます。

ハーシュは、かつてはだれもがあれほど頑強に擁護していた古いパラダイムが、どのようにほころび始めるかを説明しています。「ゆっくりと、ますます多くの人々が、支配的な物事の捉え方に何かおかしな点があることに気づいていきます。そしてついに、転換点に達するのです。」[858]

しかし、新しいパラダイムが姿を現し始めると、たいてい古いパラダイムが強い反対となって再び自己主張します。正しいというだけでは、意見がすばやく変わることは保証されません。（たとえば、ガリレオは、太陽を中心とする実在という「異端」を撤回することでしか、自分の首を救えませんでした。）ハーシュは、これは「ある人々が自分の自己意識をそのパラダイムに投資しており、そこから自分の正当性を得ているから」だと説明しています。[859]

それでも、十分な時間がたてば、新しいパラダイムはやがて古いものに取って代わります。19世紀のドイツの哲学者アルトゥル・ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer）が唱えたとおりです。「すべての真理は三つの段階を経る。第一に、嘲笑される。第二に、抵抗される。第三に、自明のこととして受け入れられる。」何十年も前に私が初めて聖書の相互主義的な解釈に触れた時、当時の私の感覚では、それは嘲笑されることと抵抗されることの境界線にまたがっていました。今見回してみると、それは抵抗されることと自明であることの間で揺れ動いています。物事の最も保守的な解釈に傾かせるような、アメリカの福音派教会の自由主義への恐れにもかかわらず、すでにアメリカの最大規模の教会全体の4分の1が、今では女性牧師や説教者を認めています。[860]転換点はすでに越えられ、細い流れはすでに洪水となりました。もう後戻りはないだろうと私は思います。

バイアスについてもう一つ、特に階層主義から相互主義へと移った私たちに当てはまることがあります。後知恵バイアスに気をつけてください。これは、いったん考えを変えると、以前の自分と同じように信じている人々への共感をすぐに失ってしまう傾向のことです。人は新しい情報に照らして信念を変えると（それはめったにない偉業です！）、古い信念の内容を思い出すのに苦労し、そのため、自分は最初からずっと正しい見方に傾いていたのだと思い込むようになります。このバイアスが働くと、自分の信念の歴史についての記憶はゆがめられます。実際、ここ何年も

858. Alan Hirsch, On the Verge, ch. 2.
859. Alan Hirsch, On the Verge, ch. 2.
860. www.bit.ly/3COXZxW

の間、多くの社会運動にあまりにもしばしば見られる裁くような態度を説明するのは、後知恵バイアスではないでしょうか？　一年足らず前には別のことを信じていたかもしれない人が、今や考えを変え、去年の自分が信じていたことを今も信じている「偏狭な人々（bigots）」を激しく非難する用意ができているのです！　だからこそ、謙虚な心によって考えを変えた後も、謙虚であり続けることがとても大切なのです。

そこで、この本を閉じるにあたって、私の牧会生活の大半においては持っていなかったけれども、できる限り聖書を探り抜いた今では持っている信念を要約し、皆さんがよく考えてくださるよう、その見解をお勧めします：

男女相互主義は、聖書に基づいて、次のような神学的立場を取ります。すなわち、男性と女性は区別されながらも平等であり、人生のあらゆる領域で互いに仕え合い、パートナーとして並んで歩むために造られた、という立場です。一人ひとりに神が与えられた権威、賜物、専門性は、性別にかかわりなく、認められ、たたえられることができ、またそうされるべきです。

心からの感謝

いちばん大きな感謝を、最も身近な家族でありチームであるジュリー、イーライ（Eli）、フィン（Fynn）、アイヴィー、チャーリー（Charlie）、サム（Sam）に。あなたたちは、頭と心と時間をあまりにも多くこの本に注ぎ込んだ夫と父親に耐えてくれました。この本がどんな良い影響をもたらすとしても、それは私たちが一緒に生み出したものです。

義理の両親、ジョイ（Joy）とキース（Keith）に、そしてNest Deliの第二の家族に感謝します。最高のコーヒーを手に、すばらしい山の眺めと親切な人々に囲まれて、そこは、この本を書くのに必要な、安心できる、広々とした空間を私に与えてくれました。

私のために祈ってくださった方々――特にシェイ・ウォルトン（Shae Walton）とエドウィナ・ハンスロー（Edwina Hanslo）――本当に、本当にありがとうございます。まったくひとりぼっちだと感じながらキーボードを打ち続けていたあの日、あなたがたからの音声メッセージが届いたことを、私は決して忘れません。「主があなたのことを私たちの心に置かれました、テラン。今取り組んでいることが何であれ、続けてください！　主はあなたがそれをしている時、共にいて、あなたを応援しておられます。」

私のために聖書のより良い読み方を切り開いてくださった数えきれない聖書学者の方々――たとえば、ルーシー・ペピアット博士、ジェイミン・ヒューブナー博士、ウィリアム・ウィット博士、アリス・マシューズ博士、デレク・モーフュー博士、カティア・アダムズ博士――に、私はいつまでも感謝します。私のつたない意見では、これほど長い間、孤独な預言者の声であり続けたことに対して、生涯功労賞に値する聖書学者が特に四人います。シンシア・ウェストフォール博士、クレイグ・キーナー博士、フィリップ・ペイン博士、ケビン・ジャイルズ博士です。真理のために立ったことで時に異端者のように扱われてきたあなたがたは、まさに教会の英雄です。いつの日か、もっと多くの人々が、あなたがたの教会への愛、知性と識別力の賜物、勇気の深さ、そしておそらく流してきたすべての涙のゆえに、神に感謝するでしょう。あなたがたの労苦は無駄ではありませんでした。

ライアン・ボタ（Ryan Botha）、この本の表紙とアイコンのために、神から与えられた類まれなデザインの才能を貸してくださって、ありがとうございます。妻のジュリー、クリスティン・ヴァン・ワイク（Christine Van Wyk）、クレイグ・マッケラー（Craig McKellar）には、その編集と校正の技術に、心から感謝しています。そして最後に、私を励まし、祈ってくれた友人たち――ポール・ヴァン・コラー、サラとスティーブ・ビノス（Sarah and Steve Binos）、デイヴィッド・チャイルド（David Child）、ジェン・ペダーセン、ギャレスとアンジェラ・マリリアー（Gareth and Angela Marillier）、ジュリアンとカティア・アダムズ、ケリーとガイ・チェネルズ（Kelly and Guy Chennells）、スーとアント・ライアン（Sue and Ant Ryan）、マイク・デイ（Mike Day）、トムとジェス・バッソン、そして私のきょうだいのマンディ（Mandy）とリチャード（Richard）――あなたがたがいなければ、私はずっと前にこのプロジェクトをあきらめていたでしょう。

主要参考文献

Barr, Beth Allison, 2021, “The Making of Biblical Womanhood: How the Subjugation of Women Became Gospel Truth.” Brazos Press

Bartlett, Andrew, 2020: “Men and Women in Christ: Fresh Light from the Biblical Texts.” Intervarsity Press.

Beck, James R. (ed), 2005: “Two Views on Women in Ministry (Counterpoints: Bible and Theology).” Zondervan

Bessey, Sarah, 2013: ”Jesus Manifesto: An Invitation to Revisit the Bible's View of Women.” Howard Books

Davidson, Richard, 2012, “Flame of Yahweh: Sexuality in the Old Testament.” Baker Academic

Frymer-Kensky, Tikva, 1992, “In the Wake of the Goddesses: Women, Culture and the Biblical Transformation of Pagan Myth.” Ballantine Books

Giles, Kevin, 2019: “What the Bible Actually Teaches on Women.” Cascade Books

Gregoire, Sheila; Lindenbach, Rebecca; Sawatsky, Joanna, 2021: “The Great Sex Rescue.” Baker Books

Grudem, Wayne, 2012: “Evangelical Feminism and Biblical Truth: An Analysis of More Than 100 Disputed Questions.” Crossway

Hübner, Jamin, 2013: “A New Case For Female Elders: An Analytical Reformed-Evangelical Approach.” PhD Thesis www.bit.ly/3BNaSY8

Hübner, Jamin, 2015: “Translating Authentein in 1 Timothy 2:12a.” www.bit.ly/3EKqWM8

Keller, Kathy, 2012: “Jesus, Justice and Gender Roles: A Case for Gender Roles in Ministry.” Zondervan

Keller, Timothy and Kathy, 2016: “The Meaning of Marriage.” Penguin Group

Knight III, George, 1977: “The New Testament Teaching on the Role Relationship of Men and Women.” Baker Books

Köstenberger, Andreas: Köstenberger, Margaret, 2014: “God's Design for Man and Woman: A Biblical-Theological Survey.” Crossway

Köstenberger, Andreas; Schreiner, Thomas, 2016: “Women in the Church: An Analysis and Application of 1 Timothy 2:9-15.” Baker Academic

Mathews, Alice, 2017: “Gender Roles and the People of God.” Zondervan

Payne, Philip, 2015: “Man and Woman, One in Christ: An Exegetical and Theological Study of Paul's Letters.” Zondervan Academic

Peppiatt, Lucy, 2019: “Rediscovering Scripture’s Vision for Women.” IVP Academic

Pierce, Ronald; Groothuis, Rebecca; Fee, Gordon (eds), 2005: “Discovering Biblical Equality: Complementarity without Hierarchy.” IVP Academic

Piper, John; Grudem, Wayne (eds), 2021: “Recovering Biblical Manhood and Womanhood: A Response to Evangelical Feminism.” Crossway

Stackhouse, John, 2005 “Finally Feminist: A Pragmatic Christian Understanding of Gender.” Baker Academic

Storkey, Elaine, 2018: “Scars Against Humanity: Understanding and Overcoming Violence against Women.” IVP Academic

Westfall, Cynthia, 2016: “Paul and Gender: Reclaiming the Apostle's Vision for Men and Women in Christ.” Baker Publishing Group

Westfall, Cynthia, 2014: “The Meaning of Authentein in 1 Timothy 2:12.” www.bit.ly/3EL7OgM

Witt, William, 2020: “Icons of Christ: A Biblical and Systematic Theology for Women’s Ordination.” Baylor University Press

Wojtyła, Karol, 2002: “Mulieris Dignitatem: On the Dignity and Vocation of Women.” Catholic Truth Society

教会のための次のステップ：おすすめの資料

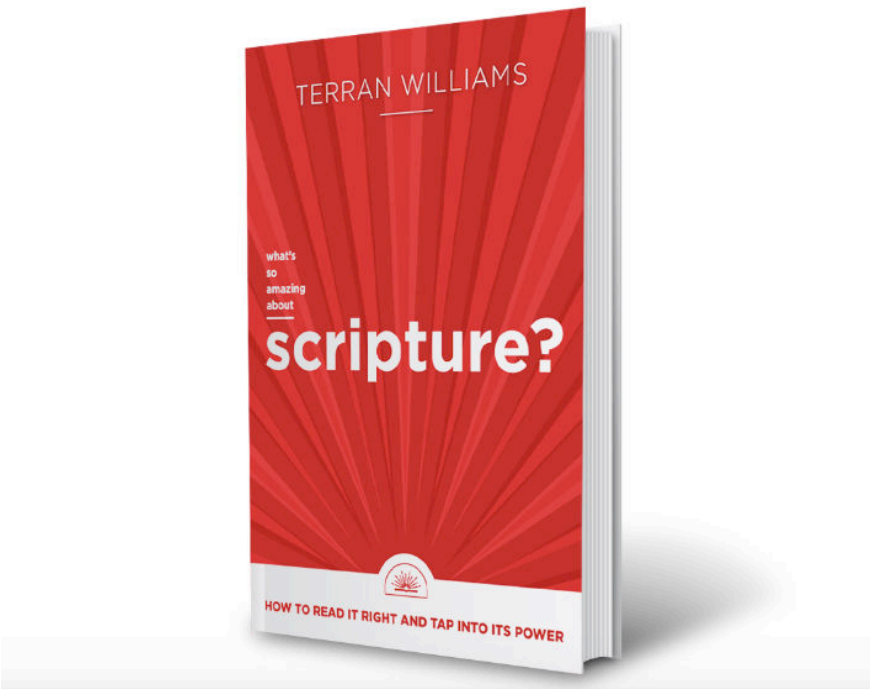
Cole, Kadi, 2019: “Developing Female Leaders: Navigate the Minefields and Release the Potential of Women in Your Church.” Thomas Nelson

Dixon, Rob, 2021: “Together in Ministry: Women and Men in Flourishing Partnerships.” IVP Academic

Williams, Terran, 2022: “How God Sees Women: End of Patriarchy, 10 Session Group Study Guide.” この本を10回のセッションでほかの人々と一緒にたどってください。無料のStudy Guide（学習ガイド）は www.bit.ly/37FBBfQ からダウンロードできます。

テラン・ウィリアムズのその他の著書

What's So Amazing About Scripture? How To Read It Right And Tap Into Its Power



テラン・ウィリアムズは、単純さの下に深さをたたえて書きます。この本はやさしく親しみやすいものですが、その背後には、最も重要な神学文献についての最新の読みがあります。彼はまた情熱をもって書きます。どの章からも、彼がとにかく自分の主題を愛していることが感じ取れます。彼は聖書を愛し、壮大な物語を愛し、その中心にいる主人公を愛しています。皆さんがこの本を読みながら、聖書への彼の情熱に「感染」することを祈ります。

――デレク・モーフュー博士、BreakthroughおよびThe Kingdom Reformationの著者、国際的なVineyard Bible Instituteの創設者

人々が聖書に取り組むのを助けようとしている牧師として、私は、聖書とは何であり、何について語っているのか、なぜ、またどのように今も私たちに語りかけるのか、どのようにして成立したのか、どのように読み、適用するのか、そしてそれを通してどのように神に近づくのかを、はっきりと示してくれる本を探し求めていました。私のような経験を積んだ聖書の読者や牧師のためだけでなく、初心者や疑いを抱く人々のためにも書かれた本です。高い要求ですが、ついに見つけました！

――グラント・クラーク（Grant Clark）、One Harbourの牧師

テラン・ウィリアムズは、聖書学者たちの複雑な著作を、生き生きと、わかりやすく総合するという天才的な仕事をしています。聖書に深く取り組むためのインスピレーションを見いだし、自分で聖書を発見する力を身につけていく中で、人生最高の旅を味わう準備をしてください。

――ミナ・コエラ、牧師、Beautiful GatesのCEO

聖書についての本の多くは、単純で魅力的でも、より複雑な聖書の力学を扱えていないか、複雑で学術的でも、普通の読者の助けにはなっていません。この稀有ですばらしい本は、その両方を成し遂げています。

――スティーブン・ポールマン（Stephen Pohlman）、The Reason For Everythingの著者。

私たちは、テランという、きわめて重要な思想家、講演者、著述家の登場を目の当たりにしていると私は信じています。彼には、神の真理を、とても魅力的で預言的なスタイルで正確に伝える驚くべき能力があります。それは、私たちの「ポスト真実」の文化に大いに必要とされているものです。

――クレイグ・ボタ（Craig Botha）、牧師の育成者

“What’s So Amazing About Scripture? How to Read it Right and Tap Into Its Power”は、AmazonのペーパーバックおよびKindle電子書籍で入手できます。

www.terranwilliams.com